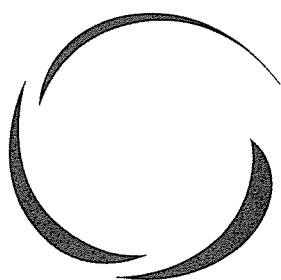

C.O.E. オーラル・政策研究プロジェクト

西田 亀久夫 (元文部省官房審議官)

オーラル・ヒストリー



GRIPS

政策研究院
政策研究大学院大学

C.O.E. オーラル・研究プロジェクト 西田亀久夫 オーラルヒストリー

目次

西田亀久夫 略歴	4	全国学生部長会議での文部省提案とアメリカ視察	86
《第1回》	5	《第4回》	97
大阪生まれの清津育ち	7	戦中から戦後へ、学生課の質の変遷	99
父のこと、母のこと	10	不況下における大卒者の就職問題	102
小学校・中学校時代	13	朝鮮奨学会に関連して	105
第三高等学校入学の頃	18	学生の実態調査の実施	108
三高剣道部マネージャー・対校戦応援団長として大活躍	21	日本育英会の窮状	113
浪人一年、東京帝国大学物理学科へ	24	琉球育英会への贈与金に関連して	118
海軍造兵中尉として佐世保・呉へ	29	学生会館の管理権問題	121
《第2回》	33	《第5回》	127
浪人生活を振り返る	35	文部省関係在職経歴表をみながら	129
海軍工廠砲煩実験部の思い出	37	庶務課長となって	134
原爆投下直後の広島を調査する	42	大学設置基準と手引き書の作成	136
終戦後の混乱期	47	日教組との付き合いと大学の管理・運営	142
高桐書院編集者から取締役業務部長へ	54	教育課程のシステム分析を通して	146
大阪第一師範教員、文部省学生課長となる	56	大学管理法の中止に関連して	149
《第3回》	65	《第6回》	155
文部省学生課長として	67	調査局審議官として	157
学生課と大学の管理	72	能力開発研究所の後始末	159
『学生運動白書』（「教育の問題としての学生運動」）について	75	アジア・アフリカ諸国に対する教育協力	162
学生との対話と大学紛争の処置	80	世界文部大臣会議に出席——文盲撲滅と義務教育	164
		国際会議に出席——義務教育を考察する	170
		四六答申の基本的構想	173
		OECDのコンフロンテーション	177
		国連大学創設のねらい	182

《第7回》	187
付属資料「期待される人間像」について	189
「明治百年」と文教政策の見直し	191
審議会と企画会議	194
各委員の選考	198
学校教育のあり方	201
教育改革を阻害する要因について	204
進学率の傾向の分析	208
《第8回》	215
「教育改革のための基本的施策」	217
社会的な条件と就学率との関連を調べる	219
学校教育の中身について	227
個性尊重教育と「先導的試行」	231
入学者選抜の基準	236
学校教育の経済的効率	240
高等教育の改革すべき課題	249
《第9回》	263
国立大学の設置形態	265
高等教育の整備充実と入試制度の改革	268
第二十六特別委員会とストレス解消	272
中高一貫教育と教員養成の問題	275
大学の管理運営に関する制度的な改革	280
長期教育計画の策定と予測計量	283
生涯教育と学校教育の役割	290
《第10回》	297
大学紛争と第二十四特別委員会	299

大学における学生の地位と役割	303
大学紛争の集結に関する大学と政府の責任	306
四六答申が提起した未解決の重要課題	309
四六答申後の人事異動	313
日本ユネスコ国内委員会事務総長として	316
国連大学の創設準備	319
《第11回》	333
海外を視察する——ケニア・アメリカ・イギリス	335
放送大学の基本構想	340
放送大学設立準備調査会と調査活動	342
放送大学の基本計画——入試・定員・カリキュラム	347
教育放送網の財源と学習システム	350
適切な教材を制作するための試案	353
放送大学設立までの遠い道のり	355
放送大学と既存の国立大学との違い	358
《第12回》	371
木更津工業高専校長在任中の主な仕事	373
高専制度の可能性に対する期待	378
JICA技術援助事業によるフィリピン派遣	381
ユネスコ・アジア地域教育計画専門会議に出席	387
東京女学館短期大学学長に就任	388
入試制度に関する個人的な研究	395
退職後の生活と来し方を振り返る	400
西田亀久夫 著作目録	414
あとがき…政策研究院大学院大学教授 伊藤 隆	416

西田亀久夫（にしだ・きくお）略歴

- 1916（大正5）年12月11日生まれ
- 1941（昭和16）年3月：東京帝国大学理学部物理学科卒業
- 1941（昭和16）年6月：海軍短期現役技術科士官として海軍造兵中尉に任官
- 1946（昭和21）年2月：東京帝国大学理学部嵯峨根研究室研究補助嘱託
- 1946（昭和21）年9月：京都市三条堺町株式会社高桐書院 編集部員
- 1949（昭和24）年10月：大阪第一師範学校教官
- 1950（昭和25）年10月：大阪学芸大学助教授
- 1952（昭和27）年3月：文部省大学学術局学生課長
- 1962（昭和37）年1月：文部省大学学術局庶務課長
- 1965（昭和40）年6月：文部省調査局審議官
- 1966（昭和41）年5月：文部省大臣官房審議官
- 1971（昭和46）年6月：文部省日本ユネスコ国内委員会事務総長
- 1974（昭和49）年10月：東京工業大学教授、文部省科学官
- 1979（昭和54）年6月：木更津工業高等専門学校長
- 1986（昭和61）年3月：国際協力事業団フィリピン工科大学技術援助リーダー
- 1987（昭和62）年4月：勲二等に叙せられる
- 1988（昭和63）年4月：東京女学館短期大学学長
- 1995（平成7）年9月：同学長を辞任

西田 亀久夫 オーラルヒストリー

第1回

日時：2002年7月15日

14:00～16:30

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊 藤 隆（政策研究大学院大学教授）

小 池 聖 一（広島大学助教授）

所 澤 潤（群馬大学助教授）

村 上 浩 昭（東京都立大学助手）

■大阪生まれの清津育ち

西田 私は「自分史」で生まれてから戦争が終わったところまで作ったのですけれども、それ以後は、まだ五〇年間未完成です。それが手元にあるので、時々必要があればこれを見ながらお答えすることになります。

伊藤 はい。もう始めさせていただいてよろしゅうございますか。先生は大正五（一九一六）年にお生まれだということですが、日本ではなくて朝鮮で生まれられたのですか。

西田 正確に言えば、大阪の真ん中で生まれたのです。私の兄は私より四つ年上で、両親の結婚後九年目に初めて朝鮮で生まれましたが、叔父に結核の人がいて、濃厚感染していました。

伊藤 お兄さんがですか。

西田 ええ、赤ん坊の兄貴が。これでは助からんから、朝鮮の端から九州大学まで行って診療を受けたら、この子は助からんから、最後の命のある限り好きなようにしてやってくれという判断なものですから、おふくろが浜寺の療養所で兄貴を抱えて自炊をしながら養生していたのです。そのときに私がおなかにいたわけです。その最中に母が産気づきまして、大阪の町の親戚のところへ赤ん坊を産んだのです。

これは聞いた話ですが、生まれたときに首にへその緒が二回巻いていて、息が詰まってほとんど仮死状態で、ベテランの産婆さんが足を持って背中をパンパンとたたいて、「おぎゃあ」といった。それで命拾いしたのです。生まれて百日目に母と一緒に朝鮮に帰りました。

伊藤 そのお兄さんはどうなったのですか。

西田 兄貴は、助からんと思ったのが、その後肺を片一方切除した

りして現在九〇歳で鳥取県で生きております。分かんぬいものですね。伊藤 その朝鮮はどこですか。

西田 咸鏡北道という日本海側の一番北のほうの清津という港が私の郷里です。ウラジオストクまで一五〇キロぐらいです。東京からいえば、ちょうど福島辺にウラジオがある。日韓併合した直後、日本内地が日露戦争の後で不景気になり、父が、まだ子どもが生まれていなかったものだから、おふくろと自分の母親を連れて朝鮮に渡った。二、三カ所転々として最後に清津に落ち着いて、そこでなんとか商売を始めようとした。親父は生まれつきの鍛冶屋の職人で、その見習修行をやってきたものだから、鉄工所を開いたわけです。私どもが知っている最後の一番大きな頃で、せいぜい四〇、五〇人の朝鮮人や中国人の職人を雇った鉄工所でした。そこで私も生まれたのです。

伊藤 何をつくっていたのですか。

西田 そんな朝鮮の北の田舎ですから、あちらの満鉄とかいろんな会社の注文を受けて、修繕もやるし、いろいろなことをやります。親父は尋常小学校四年生を出たきりですけれども、非常に好奇心の強い人で、最後は東京の丸善から本を取り寄せて内燃機関を自分でつくりました。内燃機関をつくるには、シリンドラーの鋳物をやり、旋盤かけをやり、そして仕上げをやって——、発動機を動かすシステムを全部自力でやったのです。清津というのは漁港ですから、そこへ来る漁船に積み込む昔の焼玉エンジンといったものです。初めて親父が試運転するとき一緒に船に乗って、清津の港の灯台の先まで船に旗を立てて走ったことを今でも覚えています。そこで四人の子どもを育てながら、親父は大正の初めから終戦のときまでずっと三十何年間そこで過ごしました。私はその次男坊で生まれたわけですから。

伊藤 子どもの頃は近所でどういう人たちと遊んでいたわけですか。

西田 清津という町は、その頃で人口が二万ぐらいありました。威

鏡北道の中では一番大きな町だったのですが、内地という県庁、道庁というのは隣の羅南という町でした。羅南は、第十九師団司令部がありまして、軍隊都市です。そこに道庁があって、そこに歩兵の連隊が二つ、騎兵、それから野砲があります。軍隊ばかりの町です。道庁はそちらにあるのですが、町としては清津が一番大きかったわけです。

私どもはその町で暮らしておりまして、その当時は漁港ですから、海岸に沿ったところに家が並んでいました。ちょうど北海道の津軽海峡と同じくらいの緯度になりますから、世界の三大漁場の一つだなんていわれていまして、イワシが物凄く捕れたわけです。昔、北海道ではイワシやニシンの御殿ができたでしょう。それと同じような形で、イワシがどっさり捕れて、その油をしぼって油カスをつくる。そういう漁港として栄えたわけです。

伊藤 やっているのは日本人なのです。

西田 やっているのは日本人。朝鮮人の人を使っておりましたけれども、指導者は全部日本人で、海岸側の目抜き通りは全部日本人の町で、朝鮮の人は端っこ山のほうへいって別のところへまとまっています。住み分けしているわけです。だから、買い物をしたり、仕事の上で人を雇ったり、いろいろな交流はありましたが、生活の場としては全然別でした。私はそこで一七の年まで育ったのですが、ついに朝鮮語を覚えなくて、たまにけんかするときの悪口ばかりでした。

伊藤 幼稚園なんかにはいかれたのですか。

西田 大正十年代のそんな昔に、清津というのは内地からいろんな人が出稼ぎでいっているのです、そういうところは非常にハイカラを好む風習がありまして、私どもの年配の仲間ほとんど皆一緒に幼稚園にいきました。その幼稚園で、先生にいたずらをしたり、いろ

んなことをしたのを覚えています。その幼稚園の先生に、その後四十何年後に東京でお会いしました。この間亡くなられましたけれども、その頃のいたずらの話をよく覚えておられました。

所澤 何という幼稚園ですか。

西田 名前は何でしょうか。清津の公立の幼稚園です。たった一つですからね、名前がついていたのかどうか、幼稚園だからよく知りません。

所澤 小学校に付属していた幼稚園ですか。

西田 いや、独立していました。日本内地の女学校を出た、きれいな若い女の先生が一人で切り回していました。そのときの一番の思い出は、幼稚園へいっていたずらをしているうちに、授業中に抜け休み、つまりエスケープをする。友達とそのスリルを味わうのですね。

伊藤 それは幼稚園時代の話ですか。

西田 ええ。ところが町の山の上へあがって歌を歌ったりして遊んでいるうちに、ひょいと下を見ると、山の下を母親がお魚を買って帰っていくのが見えたのです。自分が抜け休みをしたのを忘れて、「おかあさん」と呼んだら、おふくろが、「おまえ、何しているんだ」と……。うちへ帰ってから大変なことで、そんな学校を抜け休みするようなのはうちの子ではないといって裏口へ放り出されて、日が暮れて、家の中で皆が晩飯を食べているのに入れてもらえない。幾ら泣いたって、そんな子はうちの子ではないと。そのときの怖かったこと、身にしました。あれ以来、学校をエスケープすることはやめました。

所澤 冬は非常に寒かったと思うのですが、幼稚園には冬の寒いくさでもいっていたのですか。

西田 清津は雪の量はそんなにたいしたことはないのですが、やはり零下十何度Cというのはざらにありました。あの辺は歌で「極寒

零下三〇度」なんてありますけれども、そんなにはありませんでした。ただ、大雪が降ったときには、向こうのほうに校舎が見えるのに、腰まで雪が積もった中をかきわけていくと、自分が空中に浮いたような感じがしました。それぐらいのときもたまにはありましたけれども、雪の量よりは寒さのほうが。近くの川に氷が張って、スケート靴というしゃれたものはありませんから、下駄の裏に五寸釘を打ちつけてスケートをやりました。雪はあるくせに、あの当時はまだスキーというのはほとんど聞いたことがありませんでした。だから、スケートと橇です。

所澤 幼稚園のときからスケートもやるのですか。

西田 やります。釘をつけた下駄ですが、横滑りしますしね。ですけれども、日本内地にその後来てからでも、一応氷の上に立って転ばないようにしました。

伊藤 暖房は何ですか。

西田 暖房は朝鮮式のオンドルというのがありますね。家の中の床に石を引いて、ご飯を炊いた火が下を通って、煙が通るところでぬくもりが出る。朝、お袋がご飯を炊いてぬくもってくると、布団の下からぬくぬくして寝とられはせんのです。

伊藤 小学校は公立の小学校ですか。

西田 清津公立尋常高等小学校という、昔のそういう名前です。六年間行くのが尋常で、あとは二年間プラス高等科というのがありました。

伊藤 高等小学校ですね。

西田 私はその尋常科だけですけれども、六年間。

伊藤 それはまったく日本人ですか。

西田 その当時、学校制度は、小学校、中学校というのは全部日本内地と同じでした。朝鮮の人には、あれは総督府の政策ですね、日本人の学校をつくるときには、それとほとんど同時か前もって朝鮮

人の学校をつくっていました。小学校を普通学校といっていました。それから高等普通学校。朝鮮の人たちは大体そこへいく。

伊藤 それは朝鮮語でやるのですか。

西田 その教育の自身はあまり詳しくは知りませんが、総督府がやはり、日本の学校としての標準的なカリキュラムのほかに、朝鮮語による授業もやっておったようです。学校は別々でしたが、中学ぐらいになると、実際に朝鮮人で自分たちの高等普通学校にいかないで日本人の中学校に入ってくる人が、五〇人のクラスの中に多くて二、三名おりました。私たちの同級生にもそういう人もおりました。中学校は全部その隣の軍隊の羅南にあったわけです。清津にはなかったのですから、清津から二時間の汽車通学だったのです。五年間。後で聞いてみると、道庁のある羅南にあるものですから、道庁の有力者だとか朝鮮人の実業家だとか、そういう人が顔をきかせて中学校に入ってくるのです。そういう名家の子どもが入ってきていました。そういう人たちはその後中学校を出てあまり消息を知らなかったのですが、戦後になって、北のほうにいった人は分かりませんが、韓国のほうに來た人は、韓国政府の文教関係の大臣に近いクラスとか、裁判所のかなり高級な人とか、かなり有力な仕事にいた人が多かったです。だけど、教育制度としては一応別々でした。

所澤 先生が小学校に入学されたのは何年でしょうか。

西田 大正五年生まれですから、六つで入ったのですから大正十一年に入ったのでしょうか。

伊藤 六つですか。七つじゃなかったかな、自分のことも忘れちゃったなあ。

西田 ああ、大正十二年四月に清津小学校に入学しました。ちょうどこの年に、関東大震災がありました。私が小学校一年生のときです。

伊藤 関東大震災は何か印象があるのですか。

西田 さっき申しました兄貴が、朝鮮で勉強を一緒にしていたのですが、母の弟が広島におりまして、その叔父さんが非常に学問の好きな人で、朝鮮におったのではだめだから俺のところへよこせといって、朝鮮から広島県の叔父のうちに兄貴を預かってもらった。そこで広島県の県立一中に入りました。県立一中にあの当時入学するには、広島県に原籍がなければならぬのです。それで大阪の本籍地を広島へ移したのです。

■父の兄、母の兄

伊藤 大阪が本籍地なのですか。

西田 そうです。私の本籍地は、だんだんさかのぼりますと、親父のほうの系統は、親父の親父、私からは祖父ですが、そこまでは話を聞いて知っています。その先祖は尾張のほうから大阪の河内へ流れて来たらしい。大阪の今の柏原市辺りの百姓で、私の親父はこの次男坊として生まれたわけです。兄が一人、姉が二人、弟と妹が二人、五人の兄弟がいたものですから、百姓のうちで口減らしのために、明治末期まで義務教育は四年だったので、一一の年にすぐ奉公に出されました。大阪の町の中へ鍛冶屋の見習いにいき、住み込みで鍛冶屋の修行をしました。その当時の住み込みの暮らしというのは、親父の話だと、「どれくらいの俸給をもらったのか」と聞いたら、「五年間雇うのに五円だ。五円というのはたいした金だぞ」というのです。休みは年に盆と正月。たまの正月のときに何銭かもらって大阪の町へ出る。芝居を見るのが五銭かな、うなぎのまむしを食べるのが一銭五厘だと、これが最大の豪遊だったといっていました。結局、鍛冶屋の修行をして、大阪の砲兵工廠に勤めたり、それから呉の海軍工廠に勤めたりしました。その呉にいたときに、さ

る人の紹介で呉生まれの私の母と結婚したわけです。

結婚して、まだ子どもが生まれないうちに日露戦争が始まりました。親父はそのときには二五歳でしたから兵役は済んでいたのですけれども、召集が出まして、自分の母と妻の二人を残して、単身戦争へいったわけです。二五歳になってなぜ召集が来たかというところ、これは司馬遼太郎の話にありますように、日露戦争で旅順港の攻撃をやっていたわけです。乃木（希典）さんは戦争が上手ではないものだから、幾ら攻めても犠牲ばかりが多い。満州軍総司令部の総参謀長の児玉源太郎が来て、「砲台を持ってきてあれをぶち壊せ。日本の内地にある要塞砲を持って来い」と。私の親父は兵役のときに淡路島の紀淡海峡にある由良の要塞砲兵だったのです。その二八センチの大砲と一緒に引っ張っていかれた。

親父の話ですが、その大砲に付いて旅順のずっと北のほうに上陸して、そこから雨の中を大砲を引っ張っていった。東鶏冠山と二竜山という砲台が見える真正面にその大砲を据え付けるため、直径一〇メートルくらいのコンクリートの台をつくる。その上へ砲台を据える。そのときに親父が一つ大変手柄を立てたことになりました。二八センチの大砲の砲身というのは、昔、靖国神社にありましたが、それは何十トンという大きな砲身ですから、それを据え付けるのは大変な重量物の運搬になるわけです。親父は鍛冶屋の職人で、専門が製缶士というボイラーをつくる人なのです。機関車の釜など、あの鉄のボイラーの大きな重量物を扱う職人ですから、その二八センチの大砲にどう綱をかけて、どう持ち上げるかという重量物の処理は、親父が全部指揮したのです。それで吊り上げて砲身を据え、親父の担当した砲が一番最初に第一発を打ったそうです。そのときの第一発が東鶏冠山の砲台にうまく命中してドーンと火が上がったら、旅順を囲んでいる山々の日本軍が全部で、「万歳！」といって喜んだと親父がいました。感激的な場面ですね。だから親父は一

等卒のくせに金鷄勲章をもらったのです。金鷄勲章というのは、ご存じかどうか分かりませんが、兵隊でもらうのは大変なことだったわけです。はつきりしませんが、確か三〇〇円かな、年金がつくんです。

伊藤 そうです、あれは年金がつくんですよ。

西田 それがうちの親父の自慢話で、家に額がかかっています。勲記というのがありまして、これは小学生のときに覚えたのですが、今でも覚えています。難しい言葉ですが、「天佑を保有し万世一系の帝祚を踐める大日本帝国皇帝は、陸軍砲兵一等卒西田常治郎を明治勲章の功七級に叙す。即ちこの位に属する礼遇及び特権を有せしむ」と。昔のものはものものしいですね。これが親父の自慢でした。その親父とは、私が大学の学生のときに一遍満州にいらったって、旅順の東鶏冠山に登りまして、山の上から、あの辺にあったのだというのが分かりました。日本の砲台はあそこから撃ったけれども、ロシアの大砲はあそこまで届かない。日本の要塞砲というのは、その当時の最新兵器だったのです。旅順の砲台が落ちたら、港にウラジオ艦隊の船があったわけです。それを狙い撃ちして全部沈めたのです。だから金鷄勲章をもらったわけです。

伊藤 そうですか。それで工廠を辞めて、独立してやろうということですか。

西田 日露戦争の後、物凄く不景気だったそうです。それで食い詰めて。

伊藤 金鷄勲章をもらっても、ですか。

西田 ブラジルへ出稼ぎにいくような格好で朝鮮半島に渡って、転々として、最後に清津に落ち着いたという格好です。

伊藤 しかし、義務教育を四年間しかやらなかったにもかかわらず内燃機関をつくるという、非常に探究心があった方なのですね。

西田 ええ、私はその好奇心は非常に立派だと思います。その親父

が、多少学問が好きだったことがあるのでしょいか。よくお正月なんか人に来ると、お酒を飲んで親父がしゃべっていました。親父がほかの人に、「親がなんぼ稼いで金をもうけても、子どもが極道だと一晩で使っちゃう。しかし、学歴をつけておけばこれを質に置くわけにはいかんからな」と。それはまさしく昔の親の子どもに対する投資としての考え方ですね。清津で鉄工所をやっているうちに、満鉄だとかいろんな立派な会社の人と接しているうちに、時に大学を出た立派な技術者に会い、感心するわけですね。「やっぱり言っていることが違う。学問はせにゃいかんものだ」といつもいっていました。

伊藤 それで、ご兄弟ともやっぱり教育を受けさせようと。

西田 一番上の兄が真っ先に、さっき申しあげた教育熱心な叔父の刺激で、学校へいくのなら一番いい学校へいけとあって、中学を出てから第一高等学校に入ろうと、こればかりを受けたわけです。三年か四年受けて、皆落ちちゃった。兄貴は「もうおまえはいい年をしているのだから親父の商売の手伝いをしろ。弟が次に上がってきたのだから」といわれました。四つ違いの私は、生まれてから家の中が鉄工所ですから、小さなときから走り回って、工場の機械でいろいろな刃物をつくってちゃんばらの道具にしたり、そんなことばかりして遊んでいたわけです。ですから自分は鍛冶屋の子でエンジニアになるものだと思っていたので、高等工業へいくつもりだったわけです。そうしたら、兄貴は一高を何遍も落ちているし、自分がだめだったから、「おまえ、いくのなら高等工業はだめだ。高等学校へいって、大学までいかなければだめだ」と、兄貴から初めて話を聞いたわけです。

所澤 ちょっと話が戻ってしまうのですが、関東大震災の話から、今の話にいったのですけれども、関東大震災のほうはどうでしょう。

西田 関東大震災のときには兄を預かっていた叔父が広島から埼玉

県の川口というところの燃料研究所で勤めていたのです。あれはこの経営か知りませんが、兄貴はそこにおったわけです。朝鮮で東京が全滅だというから、親父は心配して日本内地にやってきました。後で聞いたのですが、東海道線が不通で、名古屋の辺から中央線に乗って、笹子のトンネルを通過してトンネルを出たときには、顔が煤煙で真っ黒になったそうです。それで川口まで兄貴の見舞いにいったら。子どもが出てきて、「お父さん、何しに来たの」といって……、がっかりしたそうです。埼玉県は無事だったのですね。それから東京市内でひどいものを見て、朝鮮に帰ってきた。親父からその話を聞きました。

あの当時に朝鮮から内地に来るといのは大変で、その後の私たちが学生時代でもやはり約二昼夜かかりました。だから子どもの頃は、母に連れられてたまに広島に母が里帰りするのについていきましたが、清津を出て二週間かかりました。というのは、私が小学校の頃はまだ今の鉄道が通じてないのです。清津から船に乗って元山というところで一泊して、それから江原道をずっと通って釜山について、それから下関について、それで広島の子品ですね。

小池 全部船ですか。

西田 船ですよ、まだ鉄道なんかありませんから。もちろん今のソウルから釜山までは日露戦争のときには整備していたのですけれども、清津の日本海側に出る鉄道などはなかった。二週間かかるというのは、客船がないので貨物船に便乗するわけです。貨物船に乗って港についたら、そこで荷揚げをしている間、何日間も暇です。そうすると、船員さんが芝居をやってくれるわけです。走り出したら今度は江原道と玄界灘というのは一番波の荒いところで大きく揺れる。今でも覚えています。おふくろが帯や紐をほどいて子どもを船の柱にくくりつけ、自分で大きく手を広げて四人の子どもを抱え、大変な悪戦苦闘ですね。港、港へ止まっていくから二週間かかっ

てしまう。子品に着いたら、広島の外で市内電車が走っているわけです。生まれて初めて電車というものを見て、これが近代文明かと本当に感激しました。

母の郷里は広島県ですが、呉の郊外の仁方というところです。母の父親は船頭でして、瀬戸内海に音戸の瀬戸というのがありますが、あの辺を渾一つで運送船を動かしていた気の荒い漁師でした。母から聞いたところでは、初めての子が女だからおじいさんはがっかりしてしまって、薪を振り上げて母を追いつけ回し、生まれて二年間ぐらい入籍してくれなかったといひます。ですから、私の母の年は正式のものより二つぐらい多いのです。これも一一の年に義務教育がおわったらすぐ奉公に出されて、子守ばかりやらされた。しかし、母のお母さん、つまりその暴れ坊主のおじいさんの連れ合いは非常にしっかりした人でした。私たちが里帰りの頃は、そのおじいさんは小学校の小使いさんをしている好々爺で、連れ合いのおばあさんというのは、教育があった人とは思いませんが、実に品のある、しかも四人の子どもをしっかりと仕付けてきた人でした。母が一番上で、その下に弟が二人おったわけです。さっき私の兄貴を預かったといった上の弟は、独学で勉強して燃料研究所の技師になっているのです。

伊藤 独学ですか。

西田 ええ。その下の二番目の男の子は、東京の物理学校へ入りまして、そこで成績がよかったのでしよう、有名な寺田寅彦さん（一八七八〜一九三五年。物理学者・随筆家）の助手になったのです。神田の水道橋辺りで夜店をはって、自分で苦学をしながら、自分で稼いでいたわけです。寺田先生にかわいがられたのですけれども、そういう内職をしているうちに腸チフスにかかって、若いときに死んでしまったのです。これは話に聞いていたのですが、私が高等学校に入った頃、『寺田寅彦全集』というのが出まして、その全集の

日記を見ていましたら、大正何年でしたか、日誌の中に、「花坂市君の死亡について、そのお父さんがお礼に来られた」と書いてありました。

伊藤 何という名前なのですか。

西田 花という一文字、これが母の実家の苗字なのです。

小池 珍しいですね。

西田 それもいわくがありまして、元々は岡本という苗字だったのです。その船乗りのおじいさんが若い時分に、あの頃は家の跡継ぎをする人間は兵役免除をもらえたのですね。それで、花という縁もゆかりもないところへ養子にあって、そんな苗字になったのです。

伊藤 それにしても花という姓も珍しいですね。聞いたことがない。

西田 珍しいですね。そのうちの系統がどこに生きて残っているのか、それは知りません。その二番目の弟は、寺田寅彦さんの助手で、暴れ坊主のおじいさんが、息子が死んだとき寺田先生のところにお礼にいったのでしょうか。「花品吉氏があいさつに来られた」と〔日誌に〕書いていますから、本当のことでしょう。また、その下の最後の妹というのが、呉の県立高女を出たときに、広島県知事の表彰をもらった。だから、母の兄弟の系統は大変よく勉強ができた。

伊藤 では、お母さんの系統も、お父さんの系統も、みんな理科系のような感じですね。

西田 ええ。親父は鍛冶屋の職人で、一番上に親父の兄貴がいたわけですが、母親とけんかして、今のオーストラリアの真珠をとるところへ……。

伊藤 木曜島か何かですね。

西田 ええ、そんなところへ出かけていった。それから、親父の上に二人姉がいたわけです。これが、あの当時の口減らしで大阪の紡績工場の女工になって、二人とも結核で死にました。ちょうどあの

頃の哀れな『女工哀史』の時代。三番目の親父だけが元気でピンピンしていたわけです。そういう格好で、大阪の河内で生まれた人間が、大阪で鍛冶屋の修行をして、呉に働きにいった結婚して、それでまた日露戦争に引っ張られて、最後に戦後不況で朝鮮に渡った。私どもが生まれた頃はなんとかその鉄工所が落ち着いて動き出したときでしたから、親父にできるだけ上の学校にがんばっていけといわれたわけです。

伊藤 いけといわれても、勉強ができませんやしょうがないですね。やはり、小学校、中学校を通じて成績がよかったわけですか。

■小学校・中学校時代

西田 ええ、まあ、あんな田舎ですからいいほうでした。小学校のときも、中学校のときも、卒業のときには何か表彰をもらいました。『言海』という辞書や、岡倉（由三郎）さん（一八六八―一九三六年。英語学者。岡倉天心の実弟）の英和辞典。

所澤 小学校のときの様子をもう少しお伺いしたいのですが。その小学校の規模はどのくらいなのでしょう。

西田 清津は二万人ぐらいの町で、そうですねえ。

所澤 一学年何クラスくらいですか。

西田 一学年はやっぱり四〇人くらいでした。

所澤 それは一クラスですか。

西田 いや、四〇人くらいが二つくらいありました。そして、小学校三年までは共学で、四年生からは男女別ですから、二クラスはあったと思います。小学校には、日本内地の師範学校を出た先生が来ておられました。小学校のときの教育で思い出すのは、群馬県から来ていた先生で、結核になられて途中で療養に帰っています。

非常にシャープな人でした。今でも覚えています。その先生が、世の中には非常に不合理なところがあると言って、小学生に向かって、「とにかく国のお金の使い方がなっとらん」とか、まあ、左翼関係の話です。「大体女の人のお化粧というのは、必要な油というものが足らんから外国から輸入するのに毎年二千万円かかっているんだ」というわけです。それから私たちは、道でお化粧をしている女の人を見ると、「二千万円、二千万円」とはやし立てたことを覚えていきます。しかし、その先生は病気で亡くなりました。

もう一つ私の「自分史」のときに思い出して書いたのですが、小学校六年生のとき、今でも立派な先生だと思いますのは、あるとき先生が授業中に、「君たちはこういう場合にどうするか。つまり、このクラスの中で、カンニングをしている者がおった。それを君らが見つけたら、それを担任の先生にいうかどうか。君はどうするか」といって、一人ひとり答えさせられた。「カンニングをすることは悪いことだから当然いすべきだ」「友達を裏切るようなことをしちゃいかん」「いや、そうじゃなくて本人に忠告してやればいい」と、いろんな答えが出るわけです。そのときに先生は、「どれが正解かといえば、これには正解がないんだ。人それぞれがその場合にどうするかということを自分で判断してやることだから」と。私は今でも思いますが、人間の中にはいろんな価値の対立があるわけです。その対立する価値の中から選択するというのは、自分の責任でやるのだ。これが人間の実践的行動の始まりなのだ。それをくぐり抜けていくことによって、価値観というものが生まれるのだということを、間接的に教育されたのだと思いました。見事な教育だと思うのです。

もう一つは、その先生が本当の卒業の間に、四〇人のクラスで、「今から、私が一年間やってきて、気付いた君たち一人ひとりの長所と欠点を、一人ずついう」といって、みんなの前で一人ずつ先生

がいわれるのです。自分のをいわれるときは顔から火が出る。けど、いわれればそのとおりだから、こたえるのですよね。「西田君は、非常に素直で先生のいうことをよく聞くけれども、君は少し調子がよすぎて、陰でどうしているかということはあるまり信用ならん」と。その先生のいわれることは非常にこたえることがあります。あの先生はどこのご出身だったか、そんなことが、六〇年、七〇年たっていまだに覚えていますから……、非常に強い印象を与えたと思います。

所澤 何というお名前の先生ですか。

西田 後のほうの先生は宮野先生といいます。

伊藤 やはり小学校のときの先生との出会いというのは、非常に後から大きく響くものだと思います。

西田 子どもの遊びというのは、学校から帰った後はかばんを放り投げて、清津の海岸端から山の手へ近所連中とバースと駆け上がって、兵隊ごっこですよね。そういうこととか、探偵ものの追いかけあいをするとか、きわめて素朴な遊びでした。

伊藤 よく遊んでいましたか。

西田 遊びましたね。

所澤 その頃、小学校の五年生くらいから大体勉強なんかを始めたのではないかと思うのですが。

西田 あの頃は中学校に入るのに受験勉強というのは……。入学試験というのはあったのだろうか。

伊藤 あったに違いないと思いますけれども。

西田 あったとは思いますが、小学校で卒業した五〇人ぐらいの同窓の中で、あの当時で中学へいったのは二割ぐらいです。

伊藤 でも、清津だけではないでしょう。いろんなところの小学校から中学に集まるわけですから。

西田 清津の小学校と羅南の小学校がありますから、そこから羅南

中学校に入ってくるわけです。

伊藤 羅南と清津以外に、そのほかにはないのですか。

西田 威鏡北道というのは四国と同じ面積があるわけです。その中に羅南中学校がたった一つ。しかし会寧とかいرونなところ小学校が。

伊藤 やっぱり小学校はあるのでしょうかね。

西田 小学校はあったはずですけども、その辺は来るとなると寄宿舎へ入らなければいけません。そう、羅南中学校の寄宿舎にやはり三〇〜四〇人おりましたから、あちこちからぼつぼつ来ていた。

伊藤 やっぱり入っていたのでしょうかね。

所澤 その辺の小学校から進学するところは、男の子の場合だと羅南の中学校ですか。それからあと商業学校とか工業学校とか、そういうものは、どうなのでしょう。

西田 まだそれは、その当時はありませんでした。中等教育は羅南中学校たった一つです。女学校は中学校よりも先につくっていました。羅南には羅南女学校がありました。清津には女学校も中学校もなかったのです。だから、私らが汽車通学でいく中学生の列車に女学生もやっぱり数名乗っていました、これにちよっかいを出したり、いたずらをしたりしたものです。その後、清津に女学校や中学校ができたのはずっと後です。ほとんど戦争直前ぐらいではないですか。清津という町はそういう格好で、一種のハイカラな気風で新しいことをどんどんやろうという形で生き生きとしておりました。

ただ、清津の町で思い出になりますのは、ちょうど私たちが中学校に入った頃でしたか……、日本内地でだんだん革新的な運動が起きて、血盟団事件、五・一五事件が、私たちの中学生の頃でした。その血盟団事件の一つの頭目みたいな人で四元（義隆）というのがおったのですが、それが清津の商工会議所の会長の子どもだったのです。五・一五事件の海軍将校が清津府の市長の息子だった。同じ清津か

ら血盟団と五・一五が出たものですから、私たちが学生の頃新潟や敦賀から船が出ていまして、夏休みにそれで帰るときに、船に乗り込む前にあの当時の特高警察に、思想関係をずいぶんやかましく調べられました。何かそういう右翼の何かがあっけいけいというわけですね。清津というのは妙な因縁で、五・一五と血盟団事件のかなり重要人物が出たところなんです。

伊藤 今の話だと、新潟辺りに船が出るわけですか。

西田 ええ。私らが高等学校へ入る頃には威鏡線という清津からずっとソウルへいく汽車が通じたのです。しかし、清津からソウルまでいくのに、汽車で大体一晩かかります。

伊藤 え、そんなにかかるのですか。

西田 あれは遠いですよ。それから釜山に出て、関釜連絡線で、そして山陽線でいくわけです。だから、あれで二昼夜くらいかかったのでしょうか。

伊藤 船で日本海を渡って新潟へというのはどうなのですか。

西田 その後、今度は日本海航路が発達しまして、清津を基点として新潟へいくのと、敦賀へいくのと、その両方がありました。私は高等学校が京都の三高ですから、京都だと敦賀が一番近いわけです。大学のときには新潟が近い。それで往復しました。

伊藤 敦賀まで船でけっこうかかるのですか。

西田 敦賀を夕方出て、一晩船の中で寝て、明くる日の朝清津に着くぐらいです。

伊藤 では、わりあい近いですね。

西田 あそこで昔、気比丸という船が戦争中機械水雷にかかって沈んで、亡くなった人がありましたね。私たちの友達の弟で京都大学にいていた男が天野貞祐さん（一八八四〜一九八〇年。元京都帝大教授・元文相）の弟子だったので、哲学の書物を下げて海に沈んだという話がありました。

伊藤 中学の時代は、当時の革新的な運動や何かの話があったのでしょうけれども、それはやっぱり新聞ですか。

西田 そういう話は、私は新聞のニュースで聞く程度で、町の雰囲気とか、中学校などは軍隊都市ですから、そういうものはとんでもない話だというだけで、一般的にはそれほど皆の思想が動揺したという、そういう雰囲気ではありませんでした。むしろ、昭和六年か七年、私が中学校に入ったばかりの頃に満州事変が始まったのです。そして、第十九師団が羅南から満州の東部へ出かけていきました。騎兵二十七連隊は、連隊長以下二十何人が向こうで囲まれて戦死しましたね。その連隊長の子どもが私の同級にありまして、むしろ戦時的な気分が非常に強かったです。

伊藤 もちろん中学では軍事教練もずいぶんあったのですか。

西田 あの当時の中学校は、カリキュラムの必須科目として配属学校というのが学校に居て軍事訓練をやったんです。しかも、羅南中学は威鏡北道の最高学府で、そこに師団があるわけですから、町全体が軍隊的な雰囲気。軍事教練は実に厳密で、一年に一遍査察があるわけですが、師団長までやってくるわけです。そうすると大尉の配属将校はきりきり舞いです。地元には中学校と青年学校がありまして、合同で羅南の平野遭遇戦などをやりました。私はよく中隊長をやられて、剣を吊って走りました。非常に軍隊的な雰囲気ですから、学校の中で成績の良い者は配属将校が目を着けてしきりに陸軍士官学校へいけと勧誘して、ずいぶんそれへいきました。しかし私たちのクラスだけはみんなつむじ曲がりで、誰一人いかなかった。

所澤 中学校のことなのですから、中学校はどのくらいの大きさの中学校でしょうか。

西田 羅南公立中学校は二クラスありました。

所澤 五年生までですか。

西田 ええ、一年から五年までで、一学年が二クラスで、やはり五

〇人程度でした。ずいぶんこじんまりした学校でした。

所澤 建物はどんな建物ですか。

西田 中学に入ったときには野砲兵第二十五連隊の兵舎の中に仮住まいして、翌年に初めて校舎が完成しました。

伊藤 新築ですか。

西田 鉄筋コンクリートの堂々たるものです。

所澤 暖房は何を使っていたのですか。

西田 暖房はスチームです。部屋の中にスチームがまわって、その点は近代的でした。けれども、そこへやってくる昼飯は、近くの中国人が今の支那饅頭を売りに来て、それを買って食べるのが昼飯でした。

伊藤 羅南中学というのは、その地域全体のとにかくエリートでしょう。

西田 そうですね。

伊藤 自分たちは選ばれた人間だという、そういう意識はあったのではないですか。

西田 あんまりそんなプライドはなかったでしょうね。それでも、二時間汽車通学をしていますと、一年生から五年生まで乗っているわけですね。だんだん五年生は生意気になって、下級生が少しだしがないから活を入れるといって、清津に帰ってから、清津海水浴場の海岸で悪いやつを呼び出して、鉄拳制裁を加えた事件がありました。それが暴力をふるったということであらう探めましてね。学校で、「五年生のそれをやったやつは集まれ」というわけです。私は知らなかった。ところが、その日のうちに停学処分になってしまったのです。私も、あれはやったやつだけが悪いのではなくて、五年生の皆の意見もよく聞いてくれというのに、いきなり抜き打ちで停学にしたものですから五年生が怒りまして、あくる日運動場に座り込んでストライキみたいになっちゃったのです。私は級長とし

て、学校側との間で走り回って、とにかく暴力はいけないのだ、しかし明日から学校へ出てほしいと、停学を一日で解除してもらいました。エリートのプライドというよりは、かなりしたい放題のことをしていたわけでしょうね。

伊藤 自分がいる場所が朝鮮半島の北のほうで、当時は朝鮮も日本ですから、日本地図を見て、自分がいるところというのはずいぶん辺境ではありますよね。だけど、そういう自分の世界のイメージというのは、その頃はどうぞございましたか。

西田 イメージというと、私どもの生きていた新天地というものの実感としては、周りに軍隊があつて、豆満江〔図們江〕という川を越えたらもう中国ですね。あの当時、私どもは、金日成がやっていた独立運動というのは要するに馬賊だ。川の向こうで馬賊が暴れまわっているのだ。国境警備ということ、非常に警察官が苦労している。その連中が暴れまわるものだから、とうとう満州のほうへ日本の軍隊がそれを抑えに出かけていった。そうしたらそこで戦死者が出たりした。そういうきわめて局部的な戦争の緊張感がいっぱいでした、それ以外に世界の動きとか何とかに対して実感的にはつきりした認識はなかったです。

所澤 いま金日成の名前が出てきましたけれども、金日成の名前を初めて聞いたのは幾つぐらいのときでしょう。

西田 私らは中学の頃に隣の鏡城という町に高等普通学校、朝鮮人のための中学校があつて、その連中と付き合いをしていた連中から、「金日成というのがおつて、これが馬賊の大將で、白頭山を根拠にして暴れているのだ」というようなことを聞いたことがあります。ですから、私らの羅南中学校の同級生は、金日成というのは本当に一人なのかどうか。一代目はとうに死んでしまつて、二代目、三代目になっているんじゃないかと、そんな話もときどき出ます。高等普通学校の仲間の中で、金日成という人を実際に見て知ってい

るなんていう者もあつたようです。

所澤 その頃のイメージで、年は幾つぐらいですか。

西田 分かりませんね。

所澤 でも、若くはないですよ。

西田 若くはないですね。私らは馬賊と呼んでいまして、「此処は朝鮮北端の二百里あまりの鴨綠江。わたれば広漠南満州」「河を渡りて襲い来る不逞の輩の不意打ちに妻も銃とり応戦す」という、ずいぶん勇ましい国境警備の歌というのがありました。そういう緊張感がありましたけれども、それが天下の情勢でどうなるのかというようなことは、まったく視野に入ってきませんでした。

伊藤 その中学でどんな学科がお好きでしたか。やはり理科系ですか。

西田 私はその頃まだ高等工業へいくつもりでしたから、理科系の勉強が好きでした。兄貴から最後に勧められて旧制の高等学校へいく野心を起こしたわけです。それまでは勉強の中では理科系のことが好きでした。私は中学校に入った頃から細工ごとが好きで、うちが鍛冶屋なものですから、道具は何でもあります。『こどもの科学』という雑誌が今でもありますが、あれが朝鮮でもありまして、これを愛読していました。あれの広告を見ると、真空管のラジオをつくるセットが書いてあつて、日本内地に注文すると一ヵ月くらいかかってくるわけです。その組み立てをやつて、初めて三球の真空管ラジオをつくったのです。それが初めて聞こえたときの放送を今でも覚えています。「前畑がんばれ」というのがありましたね、清津であれが聞こえたのです。これで、親父やおふくろも初めてラジオというものを聞いて喜びました。おふくろは、浄瑠璃が好きだからそれが聞けるようにしてくれ、親父は浪花節だと、文明の利器は非常に高く買ってくれました。工場に大きなアンテナを張って聞こえるようにしました。また親父が日本内地にいったときには、あの当時は

珍しい写真機を買ってきて、写真の現像とか焼付けも全部暗室の中にこもってやりたりして、自然に理科系のことになじんだのです。

■第三高等学校入学の頃

所澤 高等工業を最初は考えていたというお話だったのですけれども、その当時頭にあった高等工業学校はどこでしたか。

西田 おふくろの郷里が広島ですから、広島高等工業です。そこへ叔父さんも昔いたのですから、広島的高等工業学校へいくつもりだったのです。

所澤 朝鮮にある高等工業のことは全然考えなかったのですか。

西田 ありませんでした。

伊藤 さっきソウルとおっしゃいましたけれども、当時は京城といていたのでしょうか。

西田 京城ですね。

伊藤 京城の学校へいこうという感じではなかったのですか。

西田 京城にそんなに親しみを覚えませんでした。羅南の中学校におりまして、五年生のはじめの頃に一度、修学旅行で威鏡線で京城へ出ていきました。そのときに京城で電車が走っているのを見て感激しましたけれども、やっぱり遠い田舎みたいいな感じで、いくのなら日本内地だとあこがれていました。私らが中学を出る頃には京城に京城帝国大学というのがあって、その予科がありました。旧制高校へいくかわりに京城帝大の予科にいった人もありました。

伊藤 その中学からはどんな進学状態ですか。

西田 ずいぶん進学者が多いですね。中学校を出た五十何名の仲間の中で上の学校へいかなかったのはほとんどいませんでしょう。

伊藤 四終の人もいましたか。

西田 四年終了の人も、まれにあったのでしょうか。私も四年終了で一遍高等学校を受けたのですが、落っこちちゃいました。

伊藤 そのときはどこを受けたのですか。

西田 三高を。

伊藤 やはり三高ですか。

西田 五年生のときにやっと入ったのです。卒業名簿に進学した学校が書いてあるのですが、五年生の五十何人の卒業生のうちで上の学校にいなかった人はほとんどありません。やはり清津という町がそういうハイカラなところなのでしょうね。あの頃は、早稲田、慶応なんていうのは物凄く入りやすかったのです。慶応なんかへいくのはぼんくらだ、早稲田は誰でもいけるところだという印象でした。やはり国立の高等学校とか専門学校のほうが難しくて、私立の学校というのはほとんどパツとしない。日本大学はご承知のようにボン大といっていましたね。今の方が聞いたら怒りますね。

所澤 三高を選ばれた理由は何だったのですか。

西田 兄貴が一高を失敗して、「高等学校はどこがいいか」といったら、兄貴が、「一高か三高だ。これがトップクラスだ」といったらおふくろが、「関西のほうがいい。京都という町は好きだから」と、それだけのことです。京都の町は静かだから、あそこだったらあんまり悪いことはせんだろうというのですね。

三高に入ったときに、あの当時ですから、旧制高校のガチャガチャの寮に入りたいと思ったのですが、試験のときにおふくろが朝鮮からついてきまして、寮を見たらもう、本当にブタ小屋みたいなもので、こんなところに入れたら大変だというわけで震えあがった。そこで、京都の東山の町を歩いて素人下宿を探したのです。聖護院というところがありますね。あの町の中をぐるぐる歩いていましたら、角を曲がったところの軒に、「貸し間あり」と書いてあったのです。「ここへ入ってみようか」といって。そこのおばさんとおふくろが

えらく気が合いました、そこに下宿を決めたのです。三年間そこへ下宿しました。外で外食をしたら悪いことを覚えるからと、昼飯もそこまで帰って、三度の食事をしてもらったのです。うちからの仕送りもおばさんのところ——かわいいでしょ——、そこからもらっていて、毎月収支報告をして。三年間三度の食事をつくってもらうと……、第二のおふくろですね。高等学校をおわって、「今度、大学は東京だ。京都は飽きたから東京へいく」といったらおばさんが、「西田さん、あんたのお嫁さんは私が世話する」というから、「よろしくお願いします」といったら、そのおばさんが、海軍にいったときに本当に候補者を出してきた。それが今の女房なんです。家内とよくいうのですけれども……、あの聖護院の街角をこっち〔右〕に曲がらずにこっち〔左〕に曲がっていて、かまぼこ板を見なかったら、今の女房はいない。人の運命というのは面白いものですね。

所澤 少し中学校のほうに戻りたいのですけれども。中学校の頃に中国の国境を越えて大陸のほうにいくことはあったのでしょうか。

西田 修学旅行で豆満江の橋の上までいきました。橋の真ん中に仕切りがありまして、これから向こうが中国だと……、そこまで修学旅行でいったことはあります。それ以外には向こうへ渡ったことはありません。

所澤 まだ渡るのは非常に大変だったのですか。旅券とかいろいろと……。

西田 入国手続きがあったのかどうか、よく知りませんが。

小池 いや、ないでしょう。

西田 しかし、そんなに懂れていくようなところではありませんでしょう。むしろ実感としては、私はウラジオストクというソ連のほうが非常に気になっていました。清津の町の山の手にはソ連の

領事館がありまして、そこにロシア人の領事がおりました。その人が、町の中でたった一軒だけ私の親父が鉄工所をやっていましたから、その人らが来て、その人は技術屋だったので、いろいろと日本語でよく親父と話をしていた、「あの領事はしっかりした男だ」といっていました。ロシア人のほうがむしろインテリとして実感がありました。

一般論として申しあげますと、うちの工場に五〇〇六〇人職人を雇っておりました。三分の一くらいが中国人で、残りは朝鮮の人です。私が見ていて、おふくろや親父の評価としては、中国人というのは凄いです。ちゃんと仕事をして、稼いで、盆暮になったらちゃんと着物を着替えてあいさつに来る。そういう義理堅いことでは中国人というのは立派だ。朝鮮人というのは、金を貯めたらすぐ休んで、山の上に行って太鼓を叩いて皆踊りまわっている。あれは亡国の民だといっていました。今、韓国や北朝鮮と仲よくしなければならん時代ですが、私は朝鮮で長年育った人間として、先入観としてそれほど優秀な民族だという印象を持っていないわけです。偏見かもしれません。

伊藤 しかし、どうして中国人がそんなにたくさんいたのですか。

西田 北朝鮮のほうに、ずいぶん中国人の労働者がみんな入っていました。

小池 労働者としてですか。

西田 労働者です。休みの日にはちゃんと服装を着替えて、立派に暮らしていました。

伊藤 職人としてきちんと技術を身につけるわけですか。

西田 ええ、どこかへ行って修行してきたというのではなく、見習いの学習でしゅうけれども。しかし、仕事の覚え方も立派だし、非常に律儀で、中国人というのはなかなか大国民だといっていました。所澤 彼らは日本語をかなり話していたのですか。

西田 向こうの人はやはり、日本人の仕事の中に入っていくときには日本人と接近しなきゃならないということで日本語を話しました。

私らは日常的に住み分けしていましたから、ほとんど朝鮮語を覚えなかった。けんかをするときだけ、町の中で石の投げ合いをしたり、悪口をいったりして。しかし、その時点で朝鮮の人というものを私どもはそれほど尊敬しなかったのですが、ずっと後になります。終戦のときに、清津に住んでいた両親と兄弟夫婦、弟夫婦など、家族が合計八人、これが三八度線のところまで無一物で逃げ出したのです。そのときに、昔工場で雇っていた朝鮮人の職人が最後まで追いかけてきて、韓国へ脱出するところまでいろいろ面倒をみてくれたというのを兄貴から聞いたことがあります。朝鮮の人たちというのは、非常に律儀なところのある人ですね。だから悪口をいってはいけないのだと思いますけれども、そういう人もあった。しかし、平生の付き合いでは、あんまり感心するような人に出会っていないということをしていましたね。それが一般論です。

所澤 中国人はやっぱり日本語を使って生活をしていたのですか。

西田 ええ。うちの工場なんかへ来ると、親父がほとんど外国語をしゃべらないですから、仕事の上のことは全部日本語でやっていたわけです。私のうちは裏で工場をやっている、ここへ住まいがあって、表の通りのところで金物屋をやっている、その店番はおふくろがやっていたわけです。そこへいろんな金物を買にくる朝鮮人との朝鮮語の応対は、おふくろがやっていました。

伊藤 では、お母さんはできたわけですか。

西田 見よう見まねで覚えたのですね。朝鮮語でけんかしたりしていました。私らは全然覚ええない。裏の工場に徒弟制度で内地から来ていた職人がうちに住み込んでいました。子どもが四人おって、住み込みの徒弟さんが二、三人おって、おふくろはそれらの全部の家族の食べることから洗濯まで全部、それから店番、それを一人で

切り回していました。

伊藤 女中さんはいないのですか。

西田 女中はいません。女中を雇うまではいきませんでした。おくふろは働き手でした。

伊藤 先ほど高等工業云々という話がございましたけれども、高等工業を出てどういう将来を考えておられたのですか。

西田 その当時はうちの鉄工所をやるつもりだったのです。そんな大きな野心はなかったです。

村上 でも、先生は級長もやっていらっしゃるような優秀な方だから、クラスメートからすると、そんな専門学校なんて、という見方はなかったのですか。

西田 同級生でも、旧制高等学校を狙って大学までというような人はほとんどいなかったです。それよりも、今の入りやすい早稲田とか慶応に入ったり、日大にいったりということはありません。あとは専門学校へいくとか、昔の医学専門学校ですね、そういう専門学校が大勢でした。旧制高校に入るのは、大学まで道が遠いのですから。それと、確かに入学試験が難しかったですから。

所澤 そうすると、受験勉強はどのようにしてされたのですか。

西田 それは、羅南中学校で四年生の頃から、上級学校へ進学する者の受験クラスを設けて、特別の補修授業をやってくれました。学校もはりきっていましたね。羅南中学校は私が第六回の卒業生ですから、まだ新しいでしょう。私より一級か二級上で三高へ初めて一人入ったのです。私が入って、それから二、三年後に最後にまた一人。三高に入ったのはその三人だけです。僕らのクラスから旧制高校に入ったのは、岡山の第六高等学校に一人、八高に一人、そんなものです。だから、旧制高校進学というのは非常に狭い門だったのです。私らが受けたときは、政府の予算が切り詰められて、高等学校の入学定員がずいぶんしばらく減らされていて、一クラス二十何名し

かなかった。

伊藤 専門学校のほうはほかにもいたわけでしょう。

西田 ええ、工業とか、高等商業学校、高松の高商とか、東京高商とか。

伊藤 一橋もそうですしね。

西田 東京の一橋も、工業大学になった東京高等工業、そういうところに非常に希望者が多かったようです。

所澤 京城帝大の予科はどのくらいのイメージですか。

西田 旧制高校と同じ格なのですけれども、中くらいの人が受けるということ、トップクラスがいくとは思っていなかった。

小池 陸士、海兵はどうだったのですか。

西田 私らは全然、あんな配属将校なんかのいいなりになるものかと思って、誰もいきませんでした。私らの上のクラスはだいたい士官学校にいったりした者がいます。

伊藤 でもやはり、陸士、海兵は一般的には人気があったのでしょうね。

西田 あったと思います。あんまり学費がかからないでしょう。だけれど、中学時代に軍事教練を嫌というほどやらされましたからね。

所澤 先生が高等学校を受けたときの入学試験の方式なのですから、高等学校の試験は一回でしたか。年によっては二回行なっているときもあったように思うのですけれども。

西田 一回でした。一度だけです。二度選抜というのは私らの頃はありませんでした。英数国漢と、ときどき選択科目が年によって地理とか歴史とかというのがあって、普通は英数国漢ですね。

伊藤 先生は、英数国漢で受けられたわけですね。

西田 ええ。そのときの選択科目が地理でした。今でも覚えていますが、変な問題ですね。「トリンコマリーという町を記せ」と。そんなものは聞いたことがなかったのですけれども、今のスリランカ

ですね。インドの端のセイロンです。あそこにトリンコマリーという小さな港があった。それだけが全然できなかった。

伊藤 それは今いわれても分からないですね。

小池 それはひどい問題だな。

村上 中学時代で印象に残っていらっしやることというのは……。

西田 中学の先生で私が一番影響を受けたのは、羅南のあいう北鮮の田舎へ、三高を出て、東大の建築学科を出た先生が来ていました。この先生が数学の先生で、ラグビーもやる人でして、細長い顔をしていたので、ロバというあだ名をつけていたのですけれども……、私が三高に行くことについてはやはりこの先生の影響を受けたのでしようね。非常に磊落ないい人でした。あと中学校の先生というのは……、物理学校を出て数学の先生をやっていて、こんなひげをはやしていた人。この先生は、給料日になると、授業時間に皆に宿題をやらせておいて、教室の中を歩きながら自分の俸給袋を出して一所懸命お金を勘定しているんです。超然たる人でした。なかなか皆風格がありますね。

旧制の時代には、中学の頃は男子の生徒は、柔道か剣道が選択で必須でしたから、私は剣道をやりました。その流れで旧制高校へ入ってから剣道部に入りました。

■三高剣道部マネージャー・対校戦応援団長として大活躍

伊藤 三高剣道部というのはかなり強いですか。

西田 私が三高二年生のときに全国インターハイで優勝したのです。高等学校へ入ってからの話ですが、がんばったのですが、腕があがらないで一度もレギュラーの試合には出してもらえなかったのです。あがらないくせに、二年生のときに、剣道部のマネージャーという

のがありますね。剣道部の全体の会計から、すべての部員の練習のための準備から、全部を取り仕切るのがマネージャーです。それで苦労しました。後から考えると、それが一番自分の身についたような気がするのです。

四月に新学期が始まって、夏にインターハイの試合があるわけです。そうすると、五月頃からマネージャーが京都の山の手の東山の辺を歩き回って空き家を探してくるわけです。その空き家へ十何名の剣道部員がみんな合宿するわけです。合宿中、八月まで約二ヵ月間、毎日の献立を立てる。おばあさんを雇って、その人に炊事させる。皆から会費を徴収して、宿代から食べ物代まで全部経理をやるわけです。皆が着る剣道の道具が壊れると、それを修繕に出したり、道具を買ったりする。そういう道具屋とのお金の出し入れ。私が引き受けたときに剣道部にはずいぶん大きな借金があったわけです。皆の金を取り上げて、そして、先輩が合宿に訪ねてくると、「ただで飯を食わせちゃいかん」と先輩からも金を取るわけです。しかし、それで丸二年半やって剣道部の赤字を全部なくしました。二年生のときに剣道部の合宿のマネージャーをやったということで、非常に苦労しましたけど、仲間から非常に珍重された。試験のときなんか、練習をして帰ってきてからまた勉強するわけですね。試験の後で落第しそうなやつがおると、落第生になると対抗試合に出せないの、点数をあげてくれとかいって先生のところに頼みにいってね。それで、二年生のときに全国のインターハイで京都大学の剣道部の道場で最後に優勝したときは、本当にうれしくて、祝勝会の晩は、われを忘れて人事不省になって担ぎ込まれました。

所澤 旧制インターハイについてももう少しお伺いしたいのですけれども、その当時の剣道のインターハイは、毎年東大と京都で交互にやるような形だったのですか。

西田 いや、あれは京都大学が主催していたのではないですか。毎

年京都でありましたよ。

所澤 サッカーなんかは、東大と京都で交代にやっていたように思うのですが。

西田 対抗で一高戦と三高戦というのは高等学校同士の試合で、これは交互にやっていました。だけど、インターハイというのは旧制高校と専門学校を全部入れてやるわけで、私の知っている限りではずっと京都でありました。

インターハイのときマネージャーは一所懸命走り回って、結構忙しいんですよ。この次にどの学校と当たるということが分かりますと、その相手の試合を見にいった、向こうの選手の名前と癖、あいつは逆胴をやるとか、面が得意だとか、それを全部調べ上げて、こちらの選手を出す作戦をキャプテンと相談するわけです。

一番滑稽なのは、今だったらドーピングという問題になるのですけれども……、「まむしの黒焼き」というのを京都の町で売ってまして、それを粉にしたものを飲むと瞬間的に物凄く元気が出る。川端通りの荒神橋の袂にあるお店がいのだといって、そこで買い物をしてくる。試合のときに、選手の後座に座って、「今度はあいつが負けるからこの男に」と、それをオブラートで包んで飲ませるのです。本人が立会いをする数分前に飲ませると効くわけです。非常に即効性があるんです。今度は交代だと思って飲ませたら、前のやつががんばってなかなか出られない。後の男は飲んでしまって面をかぶって顔が真っ赤にしている。飲むのが遅すぎると、途中でしょぼんとしちゃうんです。これはてきめんでした。変な笑い話ですけど、その当時は真剣で、まむしの飲ませ方までマネージャーがやっていたんです。剣道部の優勝には大いに貢献している。

伊藤 専門学校や何かも含めて、全国でどれくらいあったのですか。

西田 どれくらいでしたかね。

伊藤 何十とあったわけでしょう。

西田 あったわけですね。勝ち抜きでどんどん、第何回戦でしょうか。四回か五回ぐらいやったのでしょうか。

所澤 五人一組とか、一〇人一組で試合をしていくわけですか。

西田 一組七〜八人おりますね。

伊藤 三高のときは、理科……。

西田 三高には文科と理科があって、理科の中に甲乙がある。甲は英語、乙はドイツ語が専攻です。文科だけは丙のフランス語がありました。三高は、文科は甲一、甲二と二つあって、それから乙と丙があった。理科のほうは、理一、理二、理三と、理乙です。

伊藤 理甲が三つにクラスを分けているのは何の意味なのですか。

西田 特に区別はないです。どういう区別をしたのか。

伊藤 やっぱり適当に配分したのでしょね。

西田 やったのでしょうか。

伊藤 そのときはもう、帝大にいくのだというお考えですね。

西田 あの当時は、旧制高等学校へ入るのが非常に難しくて、私らが受けたときには、三高で八人に一人でした。

伊藤 八倍ということですか。

西田 ええ。ところが、旧制高校の定員というのは大学の定員とうまく合っていて、高等学校を出た後の大学進学はあまり選り好みをしなければどこかに入れる。だから、大学入試についてはわりあい安心感があったわけですね。

伊藤 みんなゆったりできたわけですね。特別なことがない限りは……。だからマネージャーをやってもだいじょうぶ。

西田 しかし、私はひよんな関係で三年生のときに柄にもない対一高戦の応援団長をやらされて、それで非常に苦労していろいろしたものですから、大学に入るための受験勉強というものを何も準備しなかったの、大学進学のために一年間浪人しました。しかし、その応援団をやるいきさつは、後で非常にいい経験になったのです。

一高との対校戦というのは、明治以来ずっと伝統のある対校戦なのです。私の前の年の三高の応援団長というのが、もう亡くなりましたけれども、自治大臣をやった早川崇さんでした。東京で庭球の対校戦をやっているときに、何年間も三高が負け続けてきたものですから、負けるのを見るのは忍びないといって、テニスコートになだれ込んで試合をつぶしちゃったわけですね。これは完全にこっちが悪いわけですね。そうしたら一高が怒って、三高の応援団が引き上げるときにガラス瓶の割ったやつを投げつけながら殴りこんできて、血の雨を降らせた。そういう紛争がありました。結局、そのときの応援団の幹部が学校で処分を受けて、応援団長の早川は退学したのです。それでも対校戦がつぶれそうになった。

しかし、伝統のあるものをつぶしてはいかんというので、私どもがその後始末をしたわけです。私は、高等学校の二年までは夏休みに朝鮮に帰っていましたから、対校戦なんか見に行ったことはないのです。しかし三高が恥をかって対校戦をつぶしてはいけないと、各クラスの総代というのが集まって総代会をやりました。私はその総代会の議長をやらされたので、三高を代表して一高と交渉しました。そのときに、三高は悪い点は謝る。しかし、今後はルールを設けてきちんとやろうということで話をつけ、翌年に対校戦は復活したわけです。

伊藤 試合はいろいろあるわけですか。

西田 ええ、テニスと陸上、それに水泳と野球と四種類があります。それまでずっと連戦連敗だったわけですね。

伊藤 すべての種目で、ですか。

西田 ええ、全部です。これで三年連敗なるかというので、私のところで復活して、私が応援団を連れて行って、東京で最初にテニスと陸上と水泳、みんな負けました。最後の野球を京都の西京極でやって、最後の野球戦で二対〇で一高を破ったわけですね。

伊藤 その応援団長をやったのですか。

西田 ええ、昭和十一年度の三高応援団長。これは、さっき申しあげたように、一高と交渉して対校戦は復活する。やると決まったら応援団が要る。前の年の応援団幹部は全部処分されていないわけですよ。旗の振り方も私は知らないわけです。それで、応援団設立準備委員会というのをつくっていろいろ会議しているうちに、ルールは決まっただけでも、誰も引き受け手がないわけです。「委員長、おまえやれ」というわけで、私が何もやったことがないのに初めて応援団長をやったのです。それはやはり一つの運命ですね。

復活した応援団を二〇〇人連れて東京まで遠征にきました。大塚の東京高等師範学校の寮に合宿しました。昭和十一年ですから、東京へ二〇〇人の応援団を連れて行って旗を立ててデモ行進しようと思ったら、二・二六後の戒厳司令部に許可をもらわないといけない。そういう時代でした。許可してくれましたよ。大塚に泊まっていた、駒場の一高までいくのに、応援団の長い旗竿を国電に乗せるのにどうするかというと、電車の横へはりつけて、窓から外へ手を出してそれを持つ。そんな面白いことができた時代でした。

京都を出発するときには、二〇〇人が三高の吉田から京都駅まで行進するわけです。あの頃、京都の電車は電車の架線をはずしてくれたのです。京都駅へ行って、二〇〇人の特別列車ではない普通の列車ですけれども、駅長に、「あの赤旗を機関車の前に立ててくれ」と面白い部下が交渉にいったんですね。「東山トンネルに入れんからやめてくれ」と。実際、今からいえば夢のような話ですね。

伊藤 それで働きまわっていて、勉強する暇がなかったわけですか。

西田 ええ、それで一年浪人してしまっ……。そのときに私が前の年に応援団がけんかした後始末をやった。やむをえず応援団長になった。そのプロセスをずっと見ていたのが、高等学校の生徒主事、今の学生部長みたいなものですが、その先生が後に文部次官になっ

た日高第四郎さんだったんです。日高先生から習ったことはないんです。日高先生がずっと見ていて、「君はああい自治会のことをやったのだから学生のことが分かるはずだ。これから文部省では学生問題が難しくなるから、大阪教育大学の先生を辞めて文部省へ来い」といって、無理やりに文部省へ引っ張られて、夢に思わん文部省の役人になっちゃったわけです。

伊藤 その前は全然直接の面識はないのですか。

西田 日高先生は高等学校のときには生徒主事でしたけれども、授業は受けていませんし……。

伊藤 直接な接触はなかったのですか。

西田 三高の総代会を学校の中でやったわけです。校長のところに談判にいったり、一高と交渉したり。日高先生は一高の卒業ですから連絡もしてくれました。その総代会としての取り仕切りとか、一高との交渉、応援団を連れて遠征のときには、生徒主事はついてきますから、その応援団の旗振りなどをずっと見ていて、こいつはものになると思われたのでしょうか。さっきの女房をもらう因縁はかまぼこ板一枚だったのですが、理科系の理学士が文部省に入るという因縁は、前の年の応援団がけんかしたということなんです。その後始末をしたなり行きから日高先生を知った。その先生に引っ張られたと、そういう格好で後の文部省へいく私のキャリアが決まるわけです。だから、人生の曲がり角にはいろいろな事があるわけですね。

■浪人一年、東京帝国大学物理学科へ

所澤 物理を選んだのはどうしてなんですか。

西田 それがまた面白い話でして、高等学校三年生のときに、最後

の年ですから新潟から朝鮮に帰りまして、来年は大学を受けるのだけれども、どっちのほうにいかうかと相談しました。相談したって、小学校四年生しか出ていないおふくろと親父でしょう、学問のことが分かるわけではないのですけれども……。

あの頃、京都大学に西田幾多郎先生（一八七〇～一九四五年。哲学者）がいたんです。先生が京都大学を定年で辞められた後でしたけれども、ときどき特別講演というのがありまして、京大の教室にもぐりこんで講義を盗み聞きにいったりしました。これは感心しましたが、西田先生が特別講演をなさるときは、天野貞祐さんとか、田辺元さん（一八八五～一九六二年。哲学者）とか、そういったそういう人々が聴衆の席の一番前に座って先生の講義を聞くのです。やっぱり学問の世界というのはこういうものかと思って感激しました。そういうことがあったものですから、なんとなしにあの頃は哲学ばかりでして、鍛冶屋の次男坊で、兄貴がもう跡継ぎをやっていたから何をやってもいいのだと思って、朝鮮に帰ったときに、「何をやりたいか」というから、「京都大学の哲学にいきいたい」といった。そうしたら親父が、「哲学というのは何をやるのだ」というから、「人間の魂の研究をするんだ」といったんです。魂の研究といたら、幽霊の研究をするのかと思って……。そうしたらおふくろが、「そんなことをすると頭がおかしくなるからやめなさい」と。

その次が、私の第二希望で天文学をやりたいと言った。理科系で天文学というのは一番金にならん商売ですからね。「天文学で何をするんだ。お星さんを見るのか」「見る」「夜起きてお星さんを見ていたら風邪を引くぞ」という。しまいはおふくろが、「大体人間というのは、晩早く寝て、朝早く起きるものだ。夜遅くまで起きている商売にろくなものはない。おまけに風邪をひくからやめろ」というのです。それで天文学もだめになったわけです。最後に、「物理」といったら、親父が、「物理というのは物の道理をやるのか」

というから、「そうだ」といったら、鍛冶屋ですから、「それは大事なことだ。それならいいだろう」というわけです。これは本当の話ですよ。明治の人間というのはそういう点で、自分らが学問があるうがなかるうが、子どものいうことを自分なりに一所懸命考えて、自信を持って答えていましたね。

伊藤 工学部にいこうという気持ちは全然なかったのですか。

西田 ありませんでした。私は工学部なんていうのは俗人のいくところだと。工学部のやつにいわせると、理科というのは、工学部で役に立たるところだけやるのだというのです。最初から理学部でした。あの当時、理学部へいって物理をやって将来何がやれるかというと、旧制の中学校の先生をやれるかなというぐらいでした。最初は理化学研究所ぐらいいきたいと思ったのですけれども、そこは募集していなかったから、結局、就職のことなんて大して夢もなかったです。ただ好きだからやるんだというわけです。次男坊だから、迷惑さえかけなければいいだろうと。物理にいったのはそういういきさつです。

伊藤 だけど、理学部の物理学科に入るためには試験があったのですか。

西田 ええ、数学、物理、英語か何かがありました。最初、その試験で落ちたのです。

伊藤 あ、その試験で落ちたわけですか。

西田 そうです。応援団で旗ばかり振っていましたから。

伊藤 そうすると、三高に残留できるわけですか。

西田 いや、できません。浪人です。

伊藤 浪人ですか。間が一年あいちやうわけですね。

西田 一年間、東京の本郷の森川町に家を借りて、それから一年間浪人生活です。

伊藤 浪人して勉強するのですか。

西田 勉強といったって、そんな朝から晩までするわけにいきませんね。それに、まだ二〇歳ちょっとでしょう。若い者が東京で何をしているか危ないと、朝鮮からおふくろが出てきました。妹が女学校にいていましたから、その妹を連れて出てきました。その妹は小石川の女学校へ私が世話して入れた。だから、妹は私のお付き合いで一年間東京の女学校にいったのです。

伊藤 それは妹さんにしたらいい思いをしたのではないですか。

西田 しかし、おふくろは国元を離れて私の世話をするだけで見知らぬ東京に来て、まあ、辛かったでしょう。だけど、そういう点では非常に子どものことを心配してくれました。

伊藤 それで一年間いて、まあ、だいじょうぶだろうと。

西田 翌年、試験のときには親父も心配して朝鮮から出てきました。弟はそのときに東京薬学専門学校に入っていました。試験の発表の日には親父と弟が大学の掲示板を見て、紙がパラパラッと落ちたら私の受験番号が出た。親父は、「あったー！」と腰が抜けてしまった。私が大学を卒業したときに、卒業証書を親父に見せたら、「おまえ、この紙一枚にな、大変な金がかかっているんだぞ」と、感慨深い顔をしていました。それはそうでしょう、何百万でしょうね。

所澤 浪人をしているときなのですが、研数学館に帝大受験科というのがあったように思うのですが、浪人している方で、そういう予備校にいてる方はどのくらいいたのでしょうか。

西田 大学浪人のための予備校というようなものは全然私は知りませんでした。むしろあれで落ちたときは、大学の籍がないと兵役猶予がだめになるのです。だから、落ちた日にすぐ神田に走って行って、専修大学の窓口で入学料を出して専修大学の学籍をもらいました。そうしないと兵隊にとられちゃいます。

伊藤 それは授業料を払うわけですか。

西田 授業料を払うのです。入学金を払って、授業料を全部払ったかな、どうかな。

所澤 そういうふうな形でほかの大学に籍を置いている方は、それなりにいたのでしょうか。

西田 でしょうね。浪人した人は皆どこかで兵役猶予のための学籍を持たないとだめだったわけです。

所澤 あの当時、法学部とか医学部、工学部の入学試験はかなり厳しくなっていたように思うのですが。

西田 そうでしょう。だから、ほかにもやっぱり、浪人したか、どこかだめで、ほかへ移ったとかいうのは仲間とありますね。

伊藤 入学試験なんかない学科もたくさんあったでしょう。

西田 そうですね。

伊藤 理学部の中でもあったんじゃないのですか。

西田 理学部でも、人類学なんていうのはなかったですね。哲学でもあまりなかったでしょう。

伊藤 そうですよ。文学部で試験のあるところなかったんじゃないかな。

所澤 あの当時の大学入試だと、二次募集とか三次募集ということで、東大、京都はないわけですが、東北、九州なんかは確か二次募集があったと思うのですが。

西田 なんかそんな話も聞きました。

所澤 でも、さすがにそういうのは眼中になかったかと思うのです。

西田 もう、昔から兄貴が一高、東大しかないというわけで、東大へ入るのが兄貴の夢ですし、親も大体東京帝大というのを非常に金科玉条にしていましたね。だから発表のときに、腰が抜けちゃったわけです。

伊藤 大願成就だ。親にそれだけ喜んでもらえれば本望ですね。

西田 まあ、そのわりにたいして親に貢献していませんけれども。

伊藤 帝大の理学部の物理学科というのはかなり大きいのでしょうか。

西田 いや、そんなに大きくありません。一クラスしかないのです。

伊藤 教授陣、講座としてどのくらいあるのですか。

西田 講座はぜひぶんいゝんな先生がいらっしゃったのですけれども、一学年の学生数は三五人でした。

伊藤 学科で専攻があるわけでしょう。

西田 物理学科の中で、一年、二年というのは普通の勉強をして、三年のときに卒業研究でつく先生が決まるわけです。それは先生方の専門に合わせて割り振りをするのですね。自分が何をやりたいかはたいして分かりはしませんから。私が振り当てられたのが嵯峨根遼吉さんという方でして、嵯峨根さんというのは長岡半太郎さん（一八六五～一九五〇年。物理学者）の四番目か五番目の子どもさんなんです。原子核物理をやられた方です。私どもは原子核の卒業研究をやりました。

伊藤 研究室の名前は原子核なんですか。

西田 嵯峨根研究室です。

伊藤 それは通称なのでしょうか。

西田 嵯峨根先生について実験物理ですから、放射能の測定器の試作研究をやらされたわけです。これが、海軍に入って私が広島原発や長崎の原爆に出会ったときに、一番にこれは原爆だと判断したのはこの放射能をやったおかげです。そういう運命に出会ったわけですね。

伊藤 なんて原子核になったのですか。

西田 先生の割り振りですから。

伊藤 自分の希望ではないのですか。

西田 自分で希望の先生を出すこともあったのでしょけれど、私は機械的に振り当てられました。何でもいゝやと思っていたので。

伊藤 卒業のときには、その測定器の……。

西田 測定器製作の、中途半端しかできないままレポートを書きました。その放射能測定器というのはガイガー・ミュラーカウンタというやつで、この間の東海村で臨界事故のときに活躍していましたが、あれです。

伊藤 ガイガーというのは昔から聞いていますけれども。

西田 いまだに進歩していないですね。私らがやっていたのと同じです。放射能の元素がある密度以上かたまったら、それが臨界を超えるなんていうのは常識なんです。あれなんかは本当に幼稚なミスですね。

所澤 先生が勉強されていた建物は、本郷のどこの建物ですか。

西田 時計台の裏のほうで不忍池へおりの道の道に近いです。食堂がありますね。物理教室はあれのすぐ前のところですよ。

所澤 レンガの古い建物ですか。

西田 ええ、古い建物です。それで、一方が物理で、他方が化学です。あの辺に理学部が集まっていました。理学部全体で私が思い出があるのは、みんな集まって、毎年一回十二月にニュートン祭というのをやるわけです。ニュートン祭の催しを第二食堂の三階かどこかでやるときに、私どもは毎年芝居をやりました。これも妙な話ですが、私が旧制の中学、高等学校、大学でも、芝居の演出とそれをするのが好きなんです。私が全部、創作、演出をやりました。

伊藤 マネージャーの話と似たような。

西田 剣道部のマネージャーもそうですけれども。大学のときは、二年生のときに菊池寛の『父帰る』というやつです。どうせ下手な芝居ですけど、物理ですから、照明とか舞台装置というのは機械を持ってきてね。おもしろいですね。やっぱりこれは天性ですね。後で入った文部省でも、毎年文化祭があるわけです。各局対抗の芝居で三年間連続優勝しました。私が作並びに演出です。やっぱりそう

いうマネージャーの癖があるんですね。だからやっぱり、物理にいったのが間違いじゃないかと。

所澤 その当時の物理学学科の授業なのですが、大体何人ぐらいで受けているのですか。

西田 選択制も若干ありましたけれども、ほとんどその三〇〜四〇人が共通に聞く科目がたくさんありました。普通のいわゆる力学とかああいうものが全部一通りあるのですが、授業の中で私が印象に残っているのは、イギリスに留学して帰ってこられた方が、「私はイギリスに留学しているときにいわれて非常に肝にこたえたことがある。イギリス人の学者が、日本人の学者は非常にこまめに地道によく勉強するけれども、物理学をやる人間の中に物事の本質を見ようという哲学がない。日本人というのはそういう形の上だけのことをやるけれども、物事の本質を見ようという頭がない。そこからやらなければ本当の物理にならないといわれた。いまだに自分はそのことを考えているのだ」といっておられました。

わたしは今でも思うのですが、フィロソフィーというのはヨーロッパの中世以来の学問ですね。本当の学問というのは、ヨーロッパで哲学と詩学しかなかったのでしょうか。実用の学ではないのですね。日本では、明治のときから実用というところに焦点を絞って、工学部をつくってきた。そういうフィロソフィーというものが後回しになっちゃって、どこへいっても上滑りのことばかりやっていて、今頃になって日本人はオリジナリティーがないとかいわれている。

話は飛びますけれども、そういうことをいまだに感じまして、私は大学の将来についていろいろなことを聞かれたり書かされたりしたときに、実用の学というものはいま大学でやる必要はないんじゃないか。法学といっても、法曹界、たくさんの弁護士、裁判官、これが持っているデータ、法律の知識と判例というものは膨大なものである。大学の法学部が逆立ちしたって間に合わないですね。経済

といったって、いま証券会社の研究所とかシンクタンクの持っているレベルというのは、大学生はとも追いつけない。農学もそうだが、エンジニアもましてそうですね。そういう実用の学というもので大学が一所懸命競争しても追いつかないものだから、今頃やたらに大学院をつくりましたね。いつのまにか大学院教授ばかりできたでしょう。私はそんなことをしても全体に財政の無駄使いじゃないかと。最終的に私の夢は、大学の最後にやるべきところは無用の学問。何かというと、哲学、自然に関する学、この二つだけじゃないか。そこへ戻って、それは大学でしかやれない。人間は何のために存在し、何で生きているのか、それが生きている自然というのは何ものなんだと、これを見つめていくことを最終的にどこかでやらなきゃだめで、それが大学だ。話は飛びましたけれども、これが私の最後の夢なんです。

所澤 ちょっと話は戻ってしまうのですが、一つの授業は五〇人というお話だったのですけれども、それは物理学科だけではなくて、数学だとかほかの人たちも一緒に受けているということなのですか。西田 ほかの学科から一緒に来ている人もあんまりいなかったです。所澤 ということは、物理学科だけで五〇人の授業が。そうすると、二年生、三年生も一緒に受けるというようなことなのですか。一年五〇人はいないと思うのです。

西田 ええ、前の年にとりそこなった人も来ていたかも知れないです。物理の授業で思い出すのは、私のクラスに数学のノーベル賞に相当するフィールズ賞というのをもらった小平「邦彦」君というのが私のクラスにおりました。彼は数学科を出て物理に入りなおしたんです。教室で僕の後ろに席がありまして、授業中に彼が、講義なんか聞かないで一所懸命ノートを出して数式を書いているのです。私が見ても何を書いているか分からないですね。そして「おかしい、おかしい」という。「何がおかしいのだ」というと、「書いてい

る数式が美しくない。美しくない数式というのは自分の理論がどこか間違っているからだ」「数式というのは美しいものか」「一つの理論が成り立ったときには実に美しいものだ」という。数学者の感覚というのは、そういう一つの美しさという調和を求めているということ、実感として彼の話から聞いてびっくりしました。

伊藤 物理学科を卒業なさるときは、将来はどうしようというふうにお考えだったのですか。

西田 第一希望はやっぱり研究者になればと思って、理化学研究所などの募集を見たのですけれども、そのときは募集がありませんでした。私らのクラスの中に現職の海軍の軍人が大学へ依託学生で来ていたのです。中馬という男が三年間一緒にあったわけです。就職のときに、「めばしいところがないな」といったら、「海軍の技術研究所へ来ないか」と誘ってくれたので、恵比寿の海軍技術研究所へ就職したのです。

■海軍造兵中尉として佐世保・呉へ

伊藤 それは正式に就職したのですか。

西田 ええ、就職です。四月に就職して、海軍二等工員です。

伊藤 工員ですか。

西田 二等工員ということだけど、それは研究所の下働きです。しかし大学を出て兵役の猶予がなくなりますから、すぐ兵隊にいかなければなりません。徴兵検査を受けて陸軍へいくのです。ところがあの当時、二年現役という制度が海軍にあって、それは志願制だったので出願していたら、それに合格したので、研究所へいったのは正味二ヵ月でした。すぐ六月には海軍の短期現役技術科士官に採用になって、いきなり海軍造兵中尉ですよ。

伊藤 最初から中尉なのですか。

西田 大学出は中尉です。

伊藤 そうですか、少尉はなしですか。

西田 少尉はなしです。専門学校出が少尉候補生になるわけです。中曽根（康弘）さんだって、大学出だからいきなり主計の中尉になったわけです。そうやって海軍はエリートを集めたわけです。兵隊としての下士官とか兵卒の苦勞をせずにいきなり中尉でしょう。それに合格したといったら、ちゃんと自分に体を合わせた服をつくって、短剣をもらって、何月何日に海軍省へ集まれというわけです。

伊藤 もらってというのは、どこからもらうのですか。

西田 海軍省から通知が来るわけです。

伊藤 その体型に合わせた服を。

西田 それはどこどこにそういう洋服屋がおるわけです。それで寸法を合わせて洋服をつくって、腰に吊る短剣をもらって、指定された日に今の大手町の海軍省へいくわけです。朝、東京駅へおいたら、駅で番をしている憲兵がパツと敬礼するわけです。びっくりしますよね。だけど、こっちは中尉ですから。世の中というのは急に変わるものですね。海軍省にいったら、会議室に四〇〇五〇人おったのでしょいか、短期現役の連中がみんな剣を吊って来ているわけです。きのうまでみんな学生だった連中です。海軍省で何をやるのかと思ったら、しばらく待たされて、海軍大臣の永野修身さんが部屋へ入ってきて、壇上に上がってジロツと皆の顔を見て、何もいわずに出ていったんです。海軍はしゃれているなあと思いました。それで就任式はおわりです。

伊藤 何もなしですか。

西田 ええ、何もないです。一言もない。そして、すぐその直後から三ヵ月間訓練です。海軍士官として恥ずかしい訓練といって、横須賀の砲術学校というのがありますね。

伊藤 砲術学校ですか。

西田 大砲の砲術。大砲の研究だけじゃなくて、砲術学校とか水雷学校とかいろいろありますが、横須賀の砲術学校というのは海軍の軍紀を一番厳しく訓練する学校なんです。そこで三ヶ月間兵舎に泊まって、下士官の人が指導者について訓練されるわけです。大砲の弾の入れ方だとかそんなことまでやらされましたけれども、一番よかったのは、毎朝海軍体操というのをやりますが、あれが非常によかった。その砲術学校の校長さんが猪口敏平さんという人で、後に軍艦武蔵の艦長になってフィリピンの海で亡くなられた方です。猪口さんという人は砲術学校の校長ですから、校長訓話の日には緊張して教室に集まっていたら、入ってこられて、「皆さんは学問をした人だから、学問の上でお国に貢献してもらえれば結構なので、軍人精神なんてやかましいことをいう必要はない。ただ道を歩いてあんまりみつともなくないことだけはちゃんと身につけてもらわないといかんから、それだけを覚えておいてください。私は子どものときから貧乏なうちに生まれて苦労して、シジミ売りとかいろんなことをしたけれども、人間というのはあんまり苦労してはいけませんね。根性がひねくれる」と、そういう話を淡々とされるのです。砲術学校の校長がね。これは驚きました。

所澤 そちらの砲術学校なのですが、大体三ヶ月ごとに変わっているのですか。

西田 どうですかね。短期現役は六月に採用ですから、九月までやって、そこですんだら今度は各職場に配置されるわけです。私は佐世保の海軍工廠にやられたのです。あちこちみんなばらばらです。その後、短期現役というのはいっぱいあります。一年にいっぱいだけです。

所澤 僕の父がやっぱり横須賀砲術学校にいたのですが、それは東大在学中に志願兵でいったのです。数学科だったのですけれども。

それが三期生とかいっていたように思うのですが。そんなに短期ではなかったかもしれないので、ちょっと制度が違うかもしれません。

伊藤 同じ短現でも主計科とはまた全然違う。

西田 主計科は経理学校へいくわけです。築地に経理学校というのがありまして、そこで勉強をすることが違うわけです。文科系の人とはそこへいく。理科系の連中はみんな技術科士官で、その中で造船とか、造兵とかに分かれ、私は造兵でした。

小池 兵器なんですね。

伊藤 実際に配属されると、そこでどういう仕事をするわけですか。

西田 私は佐世保へいかされました、佐世保海軍工廠の造兵部という大砲をやる場所のスタッフになるわけです。佐世保工廠に所属している軍艦があるわけです。私はそこで航空母艦の加賀というのを担当しまして、それに付いている大砲の補修とか修繕をやるわけです。それ以外に、私は入った早々でしたから、大砲のいろんな部品の力学的な計算をやらされました。ただ、佐世保には十月にいつて翌年の四月まで半年ぐらいいしかなかったわけです。

佐世保で一番思い出がありますのは、昭和十七年の四月に特命を受けまして、海軍工廠の部下二十何名を連れて沖繩へ出張したわけです。任務は何かといたら、沖繩の本島の一番南の端に知念岬というところがありました、そこに座っている砲台の大砲をはずして千島に持っていきというわけです。昭和十七年ですから、まだ戦争が始まったばかりでしょう。それを聞いてがっかりしました。取りにいくのが八サンチの豆大砲一門ですね。たとえ南の方が大丈夫で千島の方が危ないからといって、そんな小さな大砲を沖繩ではずして千島に持っていかねければならんほど大砲が足りないのかと、がっかりしました。

しかし、任務だからというので、佐世保から駆潜艇という潜水艦を追い掛け回すっちゃうな船に乗って、二〇人の部下を連れて、奄

美大島へ途中寄って沖縄にいったわけです。その駆潜艇の艇長というのは、戦争中ですから、応召で来た昔の古い少尉さんです。私は中尉ですから位はこっちのほうが上ですが、その人がブリッジに立って船を操縦しているわけです。ところが、奄美大島を出て沖縄へあくる日の朝に着くはずが、いつまでたっても島が見えないのです。こちらでも心配でブリッジへ上がって艇長と話をし、海図の上に船の進路を書いたのを見てみると、海流の流れを計算していなかった。だからフィリピンのほうに向けて走っておったのです。お昼頃に慌てて面舵いっぱい直角に曲がって、夕方に那覇に入りました。ひどい話ですよ。もうあの頃には沖縄の沖にはアメリカの潜水艦が出没していました。だけど、こんな駆潜艇なんかは、魚雷よりも値段が安いから撃たないだろうというわけです。

所澤 そのとき沖縄の那覇の町はごらんになりましたか。

西田 もちろん。沖縄で一番印象に残っているのは、焼けた首里ですね。壊れる前の首里城というのを知っています。だけど、沖縄に船がついたら、すぐ知念岬まで小さなトロッコみたいな軽便鉄道で走りました。知念岬の先端で三日ほど宿泊して、砲台をはずして、秘密ですから全部木で囲って何か分からないようにして那覇へ持ってきて、船に積んで出すわけです。軽便鉄道に乗せて走ると、小さなトンネルの入口で箱の角が引かかるものですから、それをこぎりで切ったりしました。それを船に送り出して一安心して、皆を駆潜艇で帰らせて、私は後に残って首里で一泊しました。そのときにあの当時の首里の芸者さんみたいな人から、三味線を弾きながら沖縄の歌を聞かせてもらいました。一晩だけでしたが、首里の雰囲気は覚えています。

佐世保に戻ってきたら、呉海軍工廠へ配属を命じられ、すぐそれから呉勤務になってしまったわけです。

伊藤 そこでも同じような仕事ですか。

西田 呉海軍工廠では、今度は砲煩^{ほうらん}実験部というところでした。大砲の修繕や製作をやるのではなくて、ああいふ爆発物を使った火工兵器、火薬とか新しい試作兵器の研究です。なんで物理屋がそういう実験部にやらされたのかと思ったら、一番最初に担当させられたのは火工兵器の中で信管という砲弾の発火装置です。信管というのは一種の物理的なメカニズムでしょう。それから、火薬の専門家は山のようにいるのですが、火薬がどういう条件下で爆発するかということは、まだ学問的によく分かっていないのです。爆発したらこういう化合物がこういう化合物に変わるといことだけは分かっている。しかし、どういふときに破裂するかというのかというぎりぎりのところは、火薬の化合物のそれこそ顕微鏡で見なければ分からんような結晶物理学の世界で、その結晶の壊れ方というところまで探らないと火薬の発火のメカニズムは分からない。結晶物理学というのは物理の分野ですから、火薬屋だとだめなんです。よく子どもパチンコで、叩くとパチンというのがあるでしょう。あれの破裂だって、あそこに針をぎゅうっと刺していきますと、刺していく針の大きさと速さによって破裂するときに破裂しないときがあるわけです。そういう実験をやらされました。それをやらないと、弾がうまく破裂するかどうかとか、どこまで危険性があるかとか、そういうぎりぎりのところが分からないのです。

信管のほうでは、あれは発火装置ですから弾の頭とか尻尾についてあるわけです。平生弾につけてあるときには、踏んでも蹴っても大丈夫で安全性が保証されていなければならない。そのため信管をつけたまま二〇メートルぐらい上から落として落下実験をやるのです。そのかわり、ドーンと撃って大砲の口を出た瞬間に、ボール紙一枚あってもそこでパチンと破裂しなければいけない。信管というのは、物凄く安全と敏感という極端な切り替えをやるころなんです。そのメカニズムです。そのメカニズムの研究というのはやはり

物理の世界ですから。その意味で私は海軍の信管の専門家になってしまったわけです。

一番困ったのはロケット砲です。ロケットというのはひよろひよろとレールの上を走って飛んでいくわけですね。回転数が遅いわけです。だから、普通の弾のようにドーンと撃ったときの回転を利用して安全解除ということができないわけです。ロケットはロケットとしての特別なメカニズムを考えなければいけない。しかし、それでレールの上を走らせて二〇サンチの大砲の弾と同じような威力のあるロケットをつくりました。私が呉海軍工廠へいった頃は、戦争がだんだん左前になって、むしろ陸上での戦闘の兵器ばかり考えました。そのときにつくったロケットの二〇サンチの大砲が、硫黄島で活躍しました。

小池 ロタ砲ですか。

西田 硫黄島で非常に威力を発揮したのです。アメリカの海兵隊があそこに上陸しようと思って徹底的に艦砲射撃をやった。それで、たこつぽを全部つぶしたつもりであがってきたときに、穴に隠れていたその二〇サンチのロケット砲を撃ったのです。非常な損害を与えたのですね。それでアメリカは全部一旦撤退しています。だから硫黄島の司令官から呉の鎮守府長官に感謝の電報が来ました。二〇サンチロケット砲の威力を発揮して感謝に堪えないといって。だけど、もう後が続かなかったです。後は玉砕されたのです。終戦後、アメリカの技術調査団が呉にやってきました。江田島で火薬庫にある二〇サンチのロケット砲を見せて、「これを知っているか」といったら、「ああ、これはひどい目にあったんだ」といっていました。小池 あれは電気で発火させたのでしたよね。持ち運びができるような。

西田 レールの上に置いておいて、火をつける。

小池 火をつけたらボンと弾丸が出るようなものですね。

西田 ええ。ロケット砲はそれともう一つ、二〇サンチのほうのロケット砲で、三列と四ですか、一二連装でボンボンボンと次々出ていくやつ。これもつくりまして、これは、伊勢、日向という戦艦の後甲板に取りつけました。それが威力を発揮して、フィリピン沖の海戦でずいぶんこちらは被害を被ったのですが、軍艦伊勢だけが無傷で帰ってきました。敵の飛行機を追い払うのに、それでバーストやる。だから、火工兵器での防空兵器はずいぶんやりました。

伊藤 さて、途中ですがもうだいぶ過ぎましたので、次回ということにしたいと思いますが、いかがでございますか。まだいろいろ話の途中ですけれども。

所澤 次回お聞きしたいことがあるのですが、どんなことを聞きたいかということだけを先にいってしまうと、東大の卒業試験は非常に大変だったかどうかということ。それから、卒業論文はどんなことをしたのか。

西田 それは簡単に申しあげましょうか。卒業試験というのは特にありません。単位をとってきたことと、三年生の一番主なやつは卒業研究です。そのレポートを書いて先生に出した。それで、先生が合格したかどうかと。

伊藤 大変お疲れさまでございました。

西田 亀久夫 オーラルヒストリー

第2回

日時：2002年8月12日

13:50～16:10

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊 藤 隆（政策研究大学院大学教授）

小 池 聖 一（広島大学助教授）

村 上 浩 昭（東京都立大学助手）

■浪人生活を振り返る

伊藤 前は呉のお話まで伺ったと思いますが、ちょうど呉の真ん中で終わってしまったのですけれども。きょう出られない所澤君から最後に卒業試験はどうだったかという話がありまして、先生が少しお答えになっていましたが、どうしても少し詳しく聞きたい。あの人は教育学部なものですからいろいろ関心があるようです。この前のお話だと、卒業研究のテーマはついた先生によって決められるということでしたけれども、そのときは何を専門になさったわけですか。

西田 嵯峨根遼吉先生という方で、この方は原子核物理の専門で、カリフォルニア大学へ勉強にいかれて原子核のいろんな勉強をして帰ってこられて、まだ新進気鋭の方でした。したがって、その先生についた限りはその先生のご専門の分野で先生がテーマを決められて、「これを一年間やってみろ」というようにやられるわけです。そのときに放射能測定のカイガー・ミュラーカウンタというものの性能を上げるための基礎実験というような格好で私もテーマをもらって、それを一年間やったということです。

伊藤 性能は上がったわけでございますか。

西田 いやあ、その目的の半分もいかないうちに終わりが来てしまったので、そこまでのことをレポートに書いて出せば、それはそれで済んだことになるわけです。ですから、それで卒業研究に合格したとか落ちたということではなくて、おしまいになってしまったのです。

伊藤 これもどういふつもりなのか分かりませんが、彼〔所澤〕は東大百年史をやって、私もやっていたのですけれども、坂口裕元教

授からお話を聞いたときに、当時の大学卒業レベルは今の東大のレベルだと修士一年終了ぐらいの水準であったというふうな話を聞いたけれども、西田先生はどんなふうな感じですかという質問ですが、分からないでしょう。

西田 大体今の修士というのを知りませんがね。もう気楽なものですよ。卒業研究は、夏休みもやりたければ出てきて、実験です。自分の機械を使って、途中で暑くなったら第一食堂へいって、プールに入って泳いで、戻ってきてまた夕方までやる。そういう格好できわめて自由自在でしたから、学問的水準というものがどんなものかというのはとても分かりません。

ただ、嵯峨根先生はあの当時においては原子核基礎実験の一番權威で、これは余談になりますが、長崎に原爆が落ちたときに嵯峨根先生宛てにアメリカのカリフォルニア大学と一緒に勉強した人からの手紙が空中から落とされたのです。これは爆弾と一緒にではなくて。その手紙が嵯峨根遼吉さん宛てになっていたもので、嵯峨根先生はあの当時の特高警察からずいぶんいらまされていました。それは開けてみたら要するに、「おまえは俺と一緒に原子核の研究をして原爆というものは恐いものだ」と知っているだろう。だから日本政府にアドバイスして、早く戦争をよすようにしなさい」と、そういうことだったのです。その意味で問題は氷解したのですが、そういう意味でも当時においてもトップレベルの方だったわけです。しかし、私もがいわれたことはせいぜい、カイガー・ミュラーカウンタでガリガリッという放射能の数を数えられること、それです。

伊藤 大学浪人をされていたときにどんな受験勉強をしていたのですか、という質問なのですが。

西田 大学の入学試験は、物理はもちろんありましたが、英語と数学ぐらいです。そのうちの特に物理と数学の部分だけを高等学校でやったところをおさらいしながら勉強すると。

伊藤 特に何か教科書を使ってとか。

西田 そんなことはありません。高等学校でやるその当時の物理と数学のレベルが大体決まっていますから、それを自分でもう一度勉強しなおして、入学試験というものに出てくる問題の質を考えながら、勉強するという程度です。

伊藤 それは下宿か何かでやっていたわけですか。

西田 本郷森川町に一軒家を借りました。

伊藤 そこでやっていたわけですか。

西田 前に申しましたが、朝鮮からおふくろがやってきてまして……。

伊藤 監督ですね。

西田 ええ、監督のもとに。そんな朝から晩まで勉強しておりませんから、受験勉強なんていうのはしばらく義務的にやりますが、その時期はちょうど二〇歳を過ぎたばかりの青年期のところで、いろんな思想的な問題を自分でほじくり返して、その当時にやたらに書きなぐった文章というのは、その後の自分の思想的な成長に対しては非常に大きな意味を持った。そういう点では一番自分が成長した時期だろうと感じます。受験勉強は高が知れていますから、後から振り返ってみるとその一年間の浪人生活は大変実り豊かだったという感じがします。

伊藤 受験勉強以外に、いろんな本を読まれたりしたということですか。

西田 そうですね。もともと京都のほうの雰囲気、哲学が好きだし。あの当時の日記を見ると勉強の計画なんているのを書いていますが、凄いのを書いてあるんですね。森羅万象にわたって……（笑）。だから、その当時はやはりずいぶん張り切っていたんですね。

伊藤 学生生活についてなのですから、大学のときはやはり制服を着ておられましたか。

西田 あの当時はみんな金ボタンですね。角帽をかぶって。今頃は

なくなっていましたのですけれども。

伊藤 あれは着なければならぬものだったのですか。

西田 別に強制された感じはしませんが、みんな着ていました。着ていなければ格好悪いということだったのでしょう。

伊藤 あれはどこで調達するのですか。

西田 本郷の辺りの洋服屋で売っていました。

伊藤 ピンからキリまであるのでしょうか。それで、大学へ入ってからは剣道部だとおっしゃいましたけれども。

西田 大学時代は剣道をやりません。高等学校だけ。

伊藤 そうですか、では大学では。

西田 物理の勉強のほかは、友達と遊びまわっておったわけです。

伊藤 運動部はなしですか。

西田 ただ、理学部の物理、化学、動植物のいろいろな学科がありまして、その全体の理学部会の世話役をしていました。

伊藤 ああ、マネージャー業ですか。

西田 前に申しあげたと思いますが、十二月には理学部で共同のニュートン祭があります。そのお祭りのときには、私がいつも芝居の創作・演出をやっていたわけです。

伊藤 それは自分たちのだけではなくて、全体のマネージャーもやったわけですか。

西田 ええ、理学部会というものでその行事の世話役をやったのです。そんなことが好きで自然にやってしまうのですね。

伊藤 大学に入っても三高の仲間というのは相変わらず団結があるのですか。

西田 いや、理学部には私と一緒に入ったのは一人もおられません。みんなバラバラですから。

伊藤 学部を超えて三高の集まりというのは、いかがですか。

西田 それは昔のクラスの仲間がたまに集まることがありましたけ

れども。

伊藤 そんなものですか。

西田 工学部とか農学部にいったやつと。理学部にはおりませんでした。

伊藤 学生主事というのが当時おりましたが。

西田 前に申しあげたのですが、対一高戦で紛争が起きて後始末をして、その全体の経過をその当時の学生主事が日高第四郎で、その方がずっと見ておられた。その先生とは、学生の総代会の世話役でしたり、対校戦の処理をしたりという、そういう場面で接触をしただけです。

伊藤 大学へいくと学生主事との付き合いはどうなるのですか。

西田 大学もおったのですか。

伊藤 おったと思います。

西田 あんまりそのお世話になるようなことはありませんでした(笑)。

伊藤 戦争中に東大の理学部で映画『風とともに去りぬ』を上映して、学生たちが見たという伝説を聞いたことがあるけれども、どうですかという質問がありますが。

西田 知りませんねえ。

伊藤 そうですか。彼の質問はそんなところでございます。

■海軍工廠砲熷実験部での思い出

伊藤 呉で新しい兵器の開発をずっとおやりになっておられた。これは終戦までずっと続けておられたのですか。

西田 砲熷実験部に丸四年ほどおったわけです。昭和十七年から呉へいって、終戦の翌年二十一年まで。終戦は二十年ですが、その後

を引続き残されたわけです。

伊藤 残されるのですか。

西田 普通の人はそこで海軍がなくなっていってしまったのですが、私どもは火工兵器という特別な火薬を使った兵器をやっていました。しかも、後で申しあげますが、その関係で広島の実験調査をやりました。アメリカが日本海軍の持っている技術を徹底的に調べるために調査団をよこすわけです。たいしたものですね、やはり戦争に勝っても相手国の技術を全部調べ上げる。その来た連中のお相手役をしなければいかんわけです。二十年の十一月に海軍省がなくなつて、第二復員省という名前になり、復員省の事務嘱託になるわけです。復員省から月給をもらいながら、翌年の三月まで、ずっとその調査団のお相手をしたわけです。

伊藤 そうですか。では、この前ちょっと原爆の話なさいましたけれども、そのときのことをお話しただけですか。

西田 原爆の前に砲熷実験部での思い出のことを少し。砲熷実験部は正味二五歳から二八歳の一番若い時分で気ままなことをしたわけですが、結局、火工兵器という火薬を使った兵器の研究というものは日本海軍の中で私どもの砲熷実験部しかないわけです。火薬廠が火薬はつくっていますが、兵器の試作研究というのは私どものところだけです。いろんなことをやりました。

伊藤 ほかの工廠にもあるのですか。

西田 ありません。砲熷実験部のような火工兵器の研究は呉のそこだけです。ですから、火薬に関するいろんな問題が出てくると、そのいろんな研究をする。例えば、あれは戦争中秘密にされていたが、有名な軍艦「陸奥」が広島湾で自爆して沈みました。あれの原因探求です。これも厄介な実験でした。なぜ火薬庫の中で爆発が起きたかということです。そうすると、その中のいろいろな種類の兵器を地上でどういう条件の中で爆発するかというようなこと

をやる。

砲煩実験部で火薬を扱ってそういうことを丸四年間やっていますと、呉鎮守府から海軍の縄張りの中全体の不発弾処理隊長に任命されるわけです。そんな危ないものは誰も触りませんから。その爆弾の処理隊長としての一番の思い出は、昭和十七、十八年でしょいか、ツラギ沖の海戦で日本の軍艦がアメリカと砲戦をやって、巡洋艦「青葉」というのにアメリカの砲弾が十数発命中して、それが破裂しないで呉へ帰ってきたわけです。修繕に来たのですけれども、呉の造船部は弾がくっついていてのですから触らないわけです。それをのけてくれと。のけるとすれば砲煩実験部へ。それで結局、造船部が当たっている弾の周りを五メートル範囲くらいガス溶接で切って、その部分とともに弾をそっと船に下ろして、それを離れ島へ持って行って処分するわけです。

伊藤 それを爆発させるわけですか。

西田 それを捨てるというのではなくて、同時に鎮守府のほうは、それを危なくないように分解しろと。

伊藤 信管を外すのですか。

西田 離れ島へ持って行って、破裂しなかった敵の弾丸の性能を研究しろというわけです。敵の兵器をぶんどったわけですから、なぜ破裂しなかったかと。十何発、二〇サンチくらいの砲弾でしたが、それが全部爆発したら「青葉」は命がなかったでしょうね。そのくり抜いた後を造船部は修繕したわけです。江田島の隣の倉橋島の一番南の端に海軍の私ども砲煩実験部の大砲発射実験所があるわけです。私どもはそれを船に積んでそこへ持って行って、そこで分解をして米軍の信管を調べる。

分解装置の機械もあるのですが、危なくないように弾の後ろからそれを開けるのです。そのときには結局、私と私の腹心の山本君という技手と二人で、私が弾の上に馬乗りになって、彼がハンドルで

開けるわけです。弾がゆがんでいますから、なかなか開かない。とにかくこじ開けて信管を取り出す。信管を取り出せば爆発は恐くないですから。

後でその信管を分解して調べて分かったことは、きわめて幼稚なことでした。弾が当たったときにボツと雷管で破裂しますね。あたった瞬間に破裂したのでは甲板にあたってバーンと船の外で破裂しますから、その火が爆薬のところに行くまでに、時間を遅らせなければいけないのです。あたってから〇・何秒間遅らせるためにそこに黒色火薬の管が入っていて、そこが燃えていく時間だけ遅れるようにできている。これはどこでもやる工夫なのです。そこを見たら、遅れる部分の火薬に黒色火薬を使っておって、しかもその黒色火薬の入れ物がアルミニウムでやっているのです。我々日本の火工屋からいえば、アルミニウムなんていうのに黒色火薬を入れたら、湿気を吸ったらすぐにそこが腐食してしまうのです。なんとこれは常識なことをやっているんだと。アメリカはそういう湿気の多い国で経験していないから知らなかったのですね。それが南方で戦争しているうちに湿気てしまって、二十何発全部だめになった……。それも後から見れば阿呆みたいなものですが、弾の上に馬乗りになってそれを開けているときには、ちょうど私は前に申しあげた下宿のおばさんが世話をしてくれた女房と婚約中でして、ここでドカンといったらもうおしまいだなと思いました。

伊藤 それはドカンといく可能性もあるわけですか。

西田 それはそうですよ。分かったときには何でもありませんけれども。不発弾処理はあとで原子爆弾に関するところでも一遍出てきます。

もう一つ砲煩実験部で、火薬を使った戦時中のいろんな研究というのはおそらくほかには例のないところですから、若干の興味のあるのは、水中弾道の研究をやったことです。弾というものが水の中

へ入ったらどういうコースでいくか。おもしろいのは、鉄砲の弾というものは水面に向けて撃ちますと、小銃弾なんかを撃つと水面で粉々に弾が壊れてしまうのです。それほどスピードの速いものに対しては、水というのは瞬間に剛体として鉄より固い。弾が壊れてしまうのです。水中弾道の研究は、アメリカの潜水艦が非常に暴れるものですから、これを普通は駆潜艇で爆雷を落として水の中でドカンとやるのだけれども、あたりはしないわけです。なんとか敵の潜水艦を艦上の大砲で撃てないか。ところがこれが大変で、大砲の弾だって水面にあたったらなかなかうまく進まない。

というのは、私は先ほどの亀ヶ首という大砲発射場で実験を三年間やりましたが、二〇センチ、三〇センチ、武蔵、大和の四〇センチの大砲の発射実験をやる。大砲の弾を倉橋島からポーンと撃ちます。もちろん火薬は入っていないのです。落ちる角度があるところよりも下だったら、二トン半の弾がポーンと跳ねるのです。水面で石を投げたのと同じで。それで、ポーン、ポーン、ポーンといってしまつて、四国の海岸へ上がっちゃった(笑)。叱られましてね。それほど普通のスピードの速いものというのはいさばり異常なんですね。しからばそれが水面にサッと入っていくためにどうしたらいいかと水槽でいろんな実験をやりましたら、弾の正面を金槌の頭のようにつけておけばいい。とんがっている弾というのは水面に入ると中でグルグルと回ってしまう。どこへいくか分からない。平に切っているとは直進するのです。不思議でしょう。それを唯一知ったのは、鯨を撃つ捕鯨砲がありますね。捕鯨砲というのはこう飛んでいきますが、前に風よけのトンがったのをかぶっているのですが、水面にあたりとその帽子がとれるのです。あとは中をこう切ったようになっているのです。それで鯨の胴体までずっと入っていくのですね。そんなことも、後でやってみればあたりまえのことですけれども、経験しなければ考えられないことですからね。それが水中弾道の研究

でした。

伊藤 それは実際に兵器として使ったわけですか。

西田 いや、研究でだんだんある方向が決まった頃にはもう終戦になってしまいました。もう一つ砲弾実験部で、この前ロケットの話をしたらどなたかが、「それはロタ弾ですね」と質問されましたが、どなたでしたか。

小池 私でした。

西田 あのことには私はお答えしていなかったのですが、あれはおそらくロケット・タ弾というものの簡略だろうと思うのです。ロケットのほうはあるときに硫黄島で使ったことのうまい話だけを申しあげましたけれども、最初にロケットで弾を撃ち出すというアイデアを実行するために、推進するエネルギーとしては火薬を使っていたわけです。無煙火薬でニトログリセリンの、大砲の弾を撃ち出すときの火薬なのです。ご承知だと思いますが、火薬には雷管のように叩いたらパーンといくやつと、うまくやれば爆発して威力を発揮する爆薬と、大砲の筒の中に入れて中で燃やして弾丸を撃ち出す装薬です。その装薬を使ってロケットをやったわけです。固体の装薬を使ってロケットをやったのは日本がおそらくアメリカよりはるかに先で、それがあそこであつたのです。いくまでの実験が大変でした。

大砲の弾を撃ち出すための装薬は、一遍に火をつけてパーンとやるわけですが、瞬間に燃えては困るわけです。ロケットの後ろに筒があつて、そこへ装薬を入れておいて火をつける。そうするとブーッと燃え出して、噴射するやつが一定のスピードですと連続的に燃えていかなければいけない。その条件は、その筒の中の体積と、噴出す穴の大きさと、それによって決まるわけです。それをいろいろやってみると、へたをすると、燃え出してブーッとってポツととまって、またブーッと息をするわけです。大体これでいけそうだと、

亀ヶ首という実験場で偉い人がやって来て最後の実験をやるときに、「今からやります」といったら、ブーッと息をしだしたのです。もう、見ている人がくもの子を散らすように。高松宮さんも見えていましたね。火薬が入ってないからいいのですけれども、それこそネズミが逃げ回るようでした。後からは笑い話ですが。それが今度はブーッと同じ勢いでいって、直線弾道を描いてのぼっていく。それになるまでが一年以上かかりました。それがこの前最後に申しあげたようになったわけです。ロケットのほうにはそういう苦心がありました。

ロタ弾といわれましたもう一つのタ弾というのは、三国連盟で日本の潜水艦がヨーロッパまでいってドイツから技術をもたらって帰ったのです。その中の一つです。これはやはり凄いものでして、火薬というものはボーンと爆発すればあちこち飛び散るだけです。タ弾というのは、弾の格好をしています、中に入れている火薬をこういう漏斗状にえぐってあるのです。前が円錐形に空洞になっているのです。そういう形の火薬です。火薬の種類はそんな特別のものではない。これを鉄板にぶつけて爆発させると、ここから爆発による炎が集中的に出て、相手の四〇センチくらいの鉄板を溶かしてしまふのです。普通だったら、二〇センチ、三〇センチの鉄板を貫く弾なんていうのは凄いものですけれども、ロタ弾というのは火薬の威力で穴をあけてしまふのです。それを戦車にぶつけると、中に入っている人間を焼き殺してしまうのです。それにロケットをつけて、ロケットはスピードが出ませんけれども、二〇〇〜三〇〇メートル飛んでいって戦車にあたってブーッとやれば相手がやられるわけです。これが今でも、アフガニスタンでタリバンがこんなものを担いでいますね。

小池 対戦車砲ですね。

西田 あの小さなロケット。あんなものをひょろっと持っていたけ

れども、アメリカの戦車が来てボーンとやったら、戦車のこんな厚い鋼板にも穴があいてしまうのです。そのタ弾の基礎研究もずいぶんやりまして、何とか使えるようにしたのです。情けないことに、海軍の研究所は一所懸命陸上の戦闘の研究ばかりしていたんです。伊藤 船がないわけですからしょうがないですね。

西田 そういうことが主なもので、ほかにもたくさんありましたが。

伊藤 砲煩実験部はどのくらいの人数がいたわけですか。

西田 実験部は一課、二課、三課というのが全体で第六課までありました。第一課は弾道の研究、第二課は砲弾の研究、第三課は私どもの火工兵器、第四課はケミストリーを使っていたいろんなもので、毒ガスではなかったと思いますが、六課までありました。一つの課の中に私のような士官が四〜五名おりまして、その下に部下が、技手とか工長とか工員がやはり数十名おります。

伊藤 かなり大きな組織なのですね。

西田 砲煩実験部全体だったら二〇〇〜三〇〇名おったのではないでしょう。全体の写真を写しているのは、山の斜面にいっぱいおりますから。

伊藤 部長というのがいるわけですね。

西田 砲煩実験部の部長さんが、私どもがいったときは鈴木さんという人でした。後で少将になりましたが、最初は海軍大佐でした。私が覚えていますのは、始まってすぐ翌年ですからミッドウェーの海戦（一九四二年六月）がありましたね。まだ半年にならんうちにミッドウェーで日本が相当ひどい目にあった。鈴木さんが我々に、「この戦争は負けだな」といわれたのです。「部長、そんなことをいわれていいのですか」「何といおうと、君、負けるものは負けるさ」といったのです。太っ腹な人でしたね。やはり技術的な面からだめだと。それから少将になられて、南方の基地の司令官にいかれて向こうで戦死されましたが、海軍ではそういういぶん太っ腹な人が

いました。

伊藤 部長の下に今度は課長がいるわけですね。

西田 部長から、今の一課、二課、三課と課が分かれていて、私どもは第三課でしたが、課長は少佐くらいの人でした。これは兵学校出の人で、やはり技術の研究を大学へ行ってやってきたような人です。

伊藤 やはり技術者なのですね。

西田 技術の勉強をやった人です。その下に私どもの大尉とか中尉が三〜四人あって、その下に工員がいて実験の手伝いをするのです。伊藤 それは技手というのですか。

西田 そうですね、技手というのは数が少ないのです。技手というのが普通の日常的な仕事をやる上での専門技術者です。

伊藤 これはどういうところを出てきた人なのですか。

西田 これは、呉海軍は技手養成所というのがありまして、そこで高等小学校を出たくらい優秀な連中を訓練したのです。私たちは火薬のことを何も知らないで来て、その技手なんかにもんなう細かい点を習ったわけです。そうでなければとても危なくて扱えません。それは非常に皆どれも優秀な人でした。

伊藤 士官の下は技手になるわけですか。

西田 あと職人上がりから来た工長というのがありました。これはかなり年輩の経験だけを積んできたようなベテランなのです。その下には一等工員、二等工員という一般の職人的な人がおるわけです。伊藤 今度は工員ですか。

西田 そして、実験部全体は大佐の人が総括していました。

伊藤 それ全体は後でアメリカ軍の調査の対象になるわけですか。

西田 向こうは日本海軍の持っている火工技術を徹底的に研究したいということで、私どもの関係者が残されたわけです。

伊藤 私どもの関係者というのは実験部全体ですか。

西田 実験部全体が。だけど、呉工廠全体の調査はやはりほかの分野にも来ていたようです。呉の周りにどういう防空施設があったのか、そういうようなことは別の担当が調べていました。

伊藤 これは戦史ですからね。

西田 私どもは、ネイバル・テクニカル・ミッション・トゥー・ジャパンという、アメリカ海軍技術調査団という名前でありました。初めは砲弾実験部の中のそういうことを調べていましたが、私が原爆に関係したということが向こうに分かったら、昭和二十年の秋でしたか、占領軍の命令で特別列車に乗せられて東京に呼び出されました。東京駅前の明治生命のビルがありますが、あそこに向こうの調査団の本部があるわけです。そこで一週間缶詰になりました、おまえが原子爆弾で見たことを全部一週間でレポートに書けと、英語で書けといわれるわけです。いきなり。それで、持っている資料を全部出せと。これは高度の秘密であるから、ここに連合軍としていろんな者が占領に来ているけれども、アメリカ以外のやつに一切いってはいけません。勝手なものです。その調査は実に綿密でした。原爆のことをまだ申しあげていませんが、原爆というのはアメリカがアリゾナの砂漠の中で実験をやっただけで、空中から落としたことはいないわけなのです。うまく破裂するかどうかも分からなかった。人に対する被害がどれくらい出るのか、これは想像つかなかったわけです。だからその被害状況を徹底的に調べたわけです。私を捕らえてそういうレポートを書かせた。

後で申しあげますが、私が海軍をやめて京都で出版屋に勤めていた昭和二十四〜二十五年です。ある日、その出版屋の前にジープがやってきまして、「ここにミスター西田というのがおるだろう。出て来い」と京都の本部へ連れていかれて、そこでまた原爆のことを。そのあと文部省で東京の公務員宿舎に入っていたら、広島の実験研究所からまた私宛てに手紙がきまして、「お持ちの資料があ

れば、くれ」と。アメリカの機密調査のCIAというのですか、私がどこへ行って何をしているというのを徹底的にフォローしているのですね。たいしたものですね。薄気味悪いから、持っているものをみんな出してしまいました。

砲煩実験部のときの一番最後の思い出は、昭和二十年のかなり終わりの終戦間際の頃、ご存じの戦艦大和が鹿児島から特攻にいきますね。あそこで沈められる。あれは極秘のことだったのですけれども、私はほぼ分かっていました。あの日の夕方、駆逐艦を二隻連れて呉軍港を出ていくとき、「これが大和の見納めだぞ」といって海岸へいって帽子を振ったのです。悲壮なものです。それで、豊後水道を出て鹿児島沖でやられたのです。立派な船でしたけれども。

■原爆投下直後の広島を調査する

伊藤 原爆はどうやってお知りになったわけですか。

西田 原爆は八月六日の朝八時十五分、私らがもう呉の砲煩実験部の自分たちの実験室にいつて何かの仕事をしていたら、ピカッと外が光って、しばらくしたらドーンと震動が来たわけです。

伊藤 距離はどのくらいあるのですか。

西田 一八キロです。私ら火薬屋はああいうのを見ると、「あ、どこかで火薬庫が爆発した」と思うわけです。「やったな」というわけですね。外へ飛び出してみたら、西北のほうにきのこと雲がかかっているわけでしょう。想像がつくことは、広島の比治山に陸軍の火薬庫がありましたから、「陸軍のやつ、何か火薬庫でミスをやりがって爆発が起きたんだ」と、そう思ったんです。その日の昼過ぎから、どんどん広島線の列車に便乗した人が広島線のほうから帰ってきて、どうもただごとではなさそうだと。そういつているうちに、広

島の状況はまったく連絡がつかない。放送局もだめだし、そこに第二総軍という陸軍の本部がありました。これも全然応答がない。

だから、大本営が呉鎮守府に命令を出して、広島島の状況を海軍で調べろということになったわけです。鎮守府は、「爆発物だから呉工廠がやれ」と、呉工廠は、「砲煩実験部がいけ」と、それで、「西田隊がいけ」ということになった。何でも危ないところはね。

夕方頃呉工廠のほうからトラックが二台ほど来まして、それに便乗して。そのときに私の部下は四、五名です。比治山がどこかがやったのだろう。様子がおかしい。十何キロの呉線の沿線に沿って、海田市という広島市の郊外の町まで来た頃には日が暮れまして真っ暗になりました。

伊藤 その日なんです。

西田 その日です、落ちた日の夕方です。だから、原爆の落ちた日の夕方から三日間、広島と私はお付き合いしたわけです。

伊藤 それで被爆されたのですか。

西田 被爆って、当然二次放射は猛烈に受けているでしょう。私たちの同僚で、その後白血病で亡くなったのはだいたいいますから。私は悪運強く……（笑）。

海田市まで来たら真っ暗になって。よく申しあげるのですけれども、原爆で被害を受けた町というものは、日が真っ暗になるとその辺の木造の家とか電信柱とか狐火のような火がチヨロチヨロ燃えているのです。それでところどころ火事になっているわけです。原爆の後の被害調査の写真というのは、そうやってチヨロとした火が火事になって一昼夜かかって燃えた焼け跡の写真なんです。原爆直後の写真なんて誰も撮っていないですから。あの一瞬で町がなくなっただけではなくて、それで火事が起きて燃えて、そのときの爆発の放射能で火傷をした人と、家がガシャッとつぶれて下敷きになって焼け死んだ人、これが大部分の被害者です。

海田市から町へいく道路をいこうとしたら、真っ暗ですが、道路の両脇にうずくまっている何か積んであるようなものがゴロゴロ動いて私どものトラックのところに寄ってくるわけです。つまり、原爆の被害を受けて死にきれない人が、私らなんかを救援部隊が来たと思ったのですね。懐中電灯を照らしたら、唇がだらーっとこんなにくれあがっているのです。無残な姿ですね。私たちの任務は広島被害状況を見てこいというので、救援するあれがありませんから、その皆さんを追い払って、電信柱が倒れているのを起こしながら進もうとしたのですが、二、三百もいかないうちにいけなくなってしまうました。これは大変だ、町じゅう全滅だ。あしたからもう一遍調査しようと、すぐその日は呉まで引き返しました。

呉へ帰ったのは晩の十一時か十二時頃でした。砲弾実験部と、隣の火薬兵器をつくっている火工部が一緒になってあしたの調査計画を立てた。私どもがプランを立てて、広島地図を持ってきて広島を十カ所くらの地域に分けて、そこへ各班がいて、その場所場で被害の状況がどうか、どの方向から爆風を受けているかということを手分けして一斉にいうことで、その晩は終わりました。

伊藤 そのときにはもう火薬庫の爆発ではないということは分かっていたわけです。

西田 分かったわけです。町がほとんど全滅状態だと。

伊藤 やはり敵にやられたと。

西田 それは敵がやったことは確かなのですけれども。その翌日について、今の調査班が各地域ごとに調査をして、その日の夕方もう一遍呉へ帰ってきて報告を書いたわけです。広島地図の上で地域ごとの被害の程度を見ると、その爆発のプレッシャーが来たのが一点に集まるわけです。ここで爆心地が大体分かる。私どもはある班でいったのですが、私どもが回っていった地域の中に、ちょうど広

島大学があったあの辺りなのですけれども……。

小池 千田町ですか。

西田 ええ。そこに防空壕がありまして、その防空壕の飛び出している庇が放射能で木の壁へ焼きついていてるわけです。この庇の角と影が映っているそこへ棒をあてたら角度が分かるわけです。その場所と地図の上の爆心地の水平距離が分かって角度が分かれば爆発の高さが分かる。それで、私どもはその日のうちに、「これは広島護国神社南方何百メートル、高度四五〇メートルが爆心だ」ということを決めたわけです。アメリカはこのデータを全部そのまま使っています。ほかに誰も調べた人はいないのだから。

あちこち町じゅう調べあるいて、昼飯を食うときにお弁当を持っていってトタンの上に座ったところふわふわすると思ったら、下にはみんな死骸が積み重ねてあるわけです。そういうところをその日とその翌日と歩き回って、私も相当二次放射を受けたはずですけども、まだそのときには放射能の恐さとか何とかというのをよく知らないから。ただ、その二日目のときに広島大学の向かい側の赤十字病院にきました。あそこへ行ってたくさんの方々が手当てを受けているわけです。そこへ見舞いとかのぞきにいったら、看護婦がお医者さんに、「レントゲンのフィルムを机の上に置いていたらみんな感光してしまった」という。それを聞いて私はびんときたわけです。これは特別な放射能が出た。レントゲンのあいうケースに入ったやつに透過力のあるものが入ったので写真がみんなかぶっちゃっているわけです。私が大学の卒業研究に嵯峨根先生について放射能の測定の研究をして、広島原爆もそこで看護婦さんのその話を聞いたので、特殊爆弾のことはアメリカがかねてから核反応による爆弾をつくっているとラジオで宣伝していましたから、私どもは、「アメリカの宣伝どおり、これは原子核の核反応による爆弾だ」ということの第一報を大本営へ電報を打ったわけです。こ

れは間違いなさそうだと。

私らが調査した三日後くらい、八月十日近くなってから理化学研究所の仁科「芳雄」さんとか京都大学とかのいろんな偉い先生が来られて、もちろん専門家の立場からガイガー・カウンターで放射能があるとか、やはり原爆だろうということが出てきたのですが、第一報は私らがそのときに見つけたわけです。

伊藤 そのときにはガイガー・カウンターは持っていかなかったのですか。

西田 ガイガー・カウンターなんてまだ砲弾実験部に揃っていません。そんな放射能の兵器が来るなんて思っていないから。

広島市内の原爆の状況は、私は原爆のことをいろいろなところで聞かれるのですが、あんまり楽しくないので話したくないのですけれども、やはり一番無残なのは爆心地から数百メートルの範囲のところですよ。やられた方は着物が全部吹き飛んでしまって、体がぐつとふくれてしまって男性か女性か分からないですね。爆風がバーッと来て、プレッシャーが来てからマイナスのプレッシャーがまた来るのか、目玉や舌が飛び出しているのです。吐き出すように。それから、おへそが飛び出しているですね。おへそから腸が飛び出して風船みたいにふくれあがっている。こんなのは実際に見た人でなければ考えられないことですね。圧力が来て、腸が飛び出して風船みたいになっている。

ところが、爆心地から二〇〇〜三〇〇メートルくらいのところに割合に普通の防空壕がありまして、あのときはもう警戒警報は解除になっていたのですけれども、まだそれを知らないで隠れていた女の人がいて、その人がその後出てきて話を聞いたら、どこも被害を受けていないのです。だから、あの簡易な防空壕でも、原爆の攻撃があることを知ってそこへ入っていれば人間は助かるのだという一つのはっきりした証拠があったわけです。

伊藤 もちろんそうだけれども、放射能は受けるわけですね。

西田 それから歩けば放射能はある程度受けるけど、直に防空壕の中まで放射能がいつているとはかぎりませんからね。ああいう木造のあれでもそんなに通さない。

伊藤 通さないのですか。

西田 ええ。私の従兄弟が広島の高等工業にいて、南のほうですけれども原爆で攻撃を受けたのですが、ガラスの破片で血だらけになったけれども、物陰におって直に照射を受けなければ放射能の被害を受けないで皆助かっているのです。

伊藤 そうですか。逆にいえば、建物の中にいて放射能を直接受けなくても、建物が倒れれば。

西田 倒れて、それで下敷きになって、火事が出て焼け死ぬわけです。朝の八時なんぼですから、まだ朝ごはんの用意をしたばかりのところでしょう。それから、広島の中の原爆の平和記念碑がありますね。あの辺の近くであそこへいく相生橋という橋があります。あそここの橋を渡ったときには、橋の欄干に向こう側を通っていた自転車の人がバーッと爆風で挟まれて、自転車と人間が一〇センチくらいにつぶれているのです。やはり凄いものですね。

伊藤 それは爆風ですか。

西田 爆風です。一番極端な場合には、我々人間というのはおせんべいになってしまふのですね。自転車に乗ったままの格好で。そういったときの写真は一部ありましたが、これは原爆の記念館にも寄贈したし、あと私の持っていたわずかな資料なんかも皆ほかのほうにあげてしまいました。これは記録してもらわなくていいのですが、ちょっと雑談的に、そのときの原爆の資料でいま私の手元にあるコピーだけを持ってきました。これが八月八日に出した呉鎮守府の第一報です。「軍極秘」と書いてあるでしょう。これは我々の上司が書いたものですが。

伊藤 書き込みですか。

西田 書き込みを後からやられたのでしようね。これが海軍省に残っていたのを、その後私にコピーをくださったのです。これはごく簡略な原爆の報告書です。翌月の九月に、「原爆に関する調査報告 呉鎮守府」と書いてあるでしょう。ここに概要からずっと細かく書いて。これだけの厚さでも、この当時はかわいそうにガリ版でやっているのですよね。この報告書のここ、「報告作成者 海軍大佐……」三井さんは、後の砲煩実験部長です。海軍省で私の上の課長の神津さんという少佐です。ここに、「海軍技術大尉西田亀久夫」と書いてあります。この原案は私が書いたわけです。これで広島へ入ってくる途中からずっと全部経過を書いてあって、監視硝はどこでどういうものを見たとか書いてあるのです。それで、これにある程度の写真をつけたわけです。そのときの写真は、これは実際に砲煩実験部の連中が撮った写真で、その後アメリカの調査団にそれを見せるために私の上司の神津さんが英語に訳した。この写真集を神津さんの奥さんが持っていて、最近私にコピーを送ってくださったのです。これが我々が撮ったその当時の写真です。いろいろ英語で説明してあります。

伊藤 全部燃えているわけではないのですね。

西田 燃えているわけではありません。火事にならなければ、べちゃんこにつぶれているだけです。広島は護国神社の近くで電車がレールから外れたのが横を向いちゃっているのです。

伊藤 それは爆風ですね。これは燃えたあとですか。

西田 燃えたあとです。それから、これがさっき申しあげた防空壕の中へ庇の影が映っているというやつです。これは私らの同僚の海軍中尉の被っていた帽子がやられているわけです。

伊藤 それはいつの話ですか。

西田 広島大学の中に実験部の出張所をおいていましたから、そ

のときに帽子を被っていてそこで被爆したときのあれでしょうね。彼はかわいそうに白血病で死にました。

伊藤 それは広島におられた方なのですね。

西田 そうです。広島駅はずいぶん距離がありますが、その当時、臨時列車が出るために紙に墨で何時何十分発と書いてある。ちょうどレンズで黒いところをやると焼けるでしょう。こういう紙に書いた黒い字が放射線で焼け抜けているわけです。放射能がいかに強かったかという。

伊藤 紙自体は残っているわけですか。

西田 ええ、これがそのときのぶら下げてあった臨時の紙です。

伊藤 その黒いところだけが抜けているわけですか。

西田 これが私どもの吉浦から写した広島のものです。一五キロ離れたところから撮ったものです。これは後で申しあげますが、原爆のときに空中からアメリカが投下したという、落下傘をつけてフワフワおりてきて、これは原爆の不発弾だろうといって大騒動になったわけです。これが二発ほど広島郊外の郊外に落ちたわけです。二〇センチの幅、一メートルくらい筒で落下傘がついている。これは持って帰ってきたときの写真ですけれども。

伊藤 それは何だったのですか。

西田 それが広島原爆がすんだ二三日後に広島郊外の加部の近所の田舎の田んぼの中へ落ちている。皆さんの噂では原爆の不発弾だという。原爆が落ちたときに二発ぐらい空中から来たのですね。あれは落とす飛行機のほかに二機やってきたわけです。それが落としたのです。これが空中から落ちてくる。不発弾だろうからと、また不発弾処理隊長(笑)、西田隊が直ちにいつて処分をしろうというわけです。

加部のところへ車でいきましたら、原爆の恐れがあるというので二キロ四方全部立ち退きです。八月の暑い最中で、お百姓さん

は雑草を抜かなければいけないのに、二キロ四方は人が誰もいないわけです。いって見たら、これが田んぼの中へ斜めにささってしました。私どもはそれを私の腹心の山本君という技手と二人で引っ張り出してあせ道へ持って行って、「さて、どうするか。よし、これでいこう」といったのが、この横腹を金切りのこで切ろうというわけです。田んぼの中で、一人が押さえておって、一人は一所懸命切ったわけです。やり始めますと、そこへ大本営からたくさん来ていたのですが、「俺、ちょっと村の様子を見てくる」「俺はちょっとトイレへいく」とかね。やっぱり気味が悪いですよ、誰もいなくなつたのです。山本君と私と二人で切っていったら、この中からバッテリーが出てきて、これは電気の発信機みたいだなと思って、「もうだいじょうぶだ」といったら、皆が喜んで帰ってきたのです。

後でよくいわれるのですが、「得体の知れないものをのこぎりで切るとはなんと乱暴なことを」というのですが、私たち火工屋からすると、「そうではない。もしこれが高度の機密のある原爆のようなものだったら、普通の方法で分解したら爆発するようにできている。だから非常識な方法でやるのが一番安全だ」と。そういうことでしょう。分かってみればそうすけれどもね。

後から分かったのは、工廠の電気部に持っていくて調べてもらったら、短波の発信機だったのです。上の落下傘との間にアンテナを張って、下にぶら下がっている。一番上のところに薄い金属の膜のところがあるのです。これで分かったことは、結局推測でアメリカは説明しませんけれども、アメリカはアリゾナで実験をやって日本で落とすときに本当にうまく爆発するかどうか分からなかった。したがって、原爆を積んできた飛行機が無事に帰ってくるかどうか分からなかった。だから観測機を二つ連れていった。うまく空中で破裂するかどうかも分からん。その二つの観測機自身も日本の戦闘機にやられて帰って来ないかも分からん。そうすると、確実にこれが

破裂して日本に秘密兵器が取られていないという証拠をつかみたい。そのために短波の発信機をやっておいて、バーンと爆発したらショックウェーブが来るわけでしょう。その薄いところの膜がポツと来たら、電波の波長が変わるわけです。沖縄の辺で聞いていれば、ピピ・ピ・ピと、「あ、今やった」というのは分かるわけです。そういうことに使ったのだらうと判定したわけです。アメリカはやはりもの凄く慎重ですね。一種の高度の機密兵器で。

伊藤 これが発弾で落ちたら。

西田 日本に取られちゃう。落とした飛行機も観測機も帰ってこないかも知れない。その場合にでも破裂した瞬間をつかまえる努力をしようという形で。この切ったやつの中をあげましたら、マジックインクで落書きをしているのです。その意味はよく分からないのですが、「トゥー・ヒロ」と書いてあるのです。これは広島にいくという意味なのか、「そうではない、これはヒロヒトだ。昭和天皇にぶつけるのだというあれなのだ」と。分かりませんが、きわめて間に合わせ的に大急ぎでつくったものですね。広島の前爆にやっとなに合わせた。長崎もその直後にできたやつで、今度はブルトニウムでやってきた。広島の前爆がそういう格好で、この不発弾処理をのこぎりで切った話というのが後から聞けばおもしろおかしく笑い話になるのですけれどもね。

伊藤 これも全部アメリカ軍に聞かれたわけでしょう。

西田 これはアメリカ軍にも話しました。

伊藤 アメリカ軍はこれを回収したわけですか。

西田 どうでしたかなあ、持って帰ったかどうか。それが全部終わったら村の人が喜んで、畑もやっと思えるものですから帰ってこられて、私たちはこんな大きな白い握り飯をもらいました。あの当時、おにぎりなんか食べられなかったのですよ。

伊藤 海軍でもそうですか。

西田 そうですよ。原爆についての思い出はそれです。少し付け加えますと、三日後に長崎に落ちまして、また、「西田がいけ」と。伊藤 またいけですか。

■終戦後の混乱期

西田 長崎まで汽車でいったら、諫早まではいけましたがそこから汽車が通じなくて、臨時の機関車が動いていたので便乗して長崎へ入りました。ここは被害状況を見るためにいったのですが、浦上天主堂のある谷にはひどく落ちたのですが、広島と違って町の中に大きな山の敵が通っているわけです。隣の谷のほうはほとんどいたしなかった。だから全体としては被害が少なかったわけです。しかも、浦上の天主堂のあるところの海岸側に近いところに大きな三菱の兵器工場がありました。そこへ行ってみたら、トタン屋根が全部崩れてくしゃくしゃになっていてひどいなと思ったけれども、トタンをのけてほこりを払ったら、工作機械はちっとも傷んでないのです。掃除をしたらすぐ動かせる。

最後に私も呉と長崎をやって報告書を書きました。何かに報告作成書の所見を書けるわけです。広島防空壕で助かった女の人とか長崎の兵器工場とかを見て、原子爆弾であることは間違いないけれども、それによる攻撃を事前に予測してうまく避難すれば、人間の被害を最小限にとどめるだろうし、今の兵器工場などの被害はさわめてわずかだから生産力は落ちない。結論は、断固戦争を継続すべきであると。こちらはまだ二八歳ですからね。

しかも、その直後に今度は終戦になるわけです。陛下の玉音放送というのはあまりよくラジオでは分からなかったのですけれども、ただ、戦争をやめろらしいということで、呉海軍工廠の私も若手

の技術士官が何十人とおったのですが、その連中が仲間で、「こんなことで戦争やめるなんてばかな話があるか。まだまだ本気でやれば戦争はできるのだから」といって、青年将校十数名で呉鎮守府の長官に戦争継続を陳情にしようとして八月十五日から数日後に呉鎮守府に出かけていきました。平生ならばそんなことをしたら軍紀違反ですけれども。鎮守府にいったら、長官はおられなかったのですけれども、参謀長が会議室で話を聞いてくださいました。今でもそれだけは非常に感銘を受けているのですが、戦争の終わりのそういうときでも立派な人はやはり度胸があるなと思いました。私も、「絶対に戦争に負けないんだ。私が原爆を調査してこういう状況だから戦力は決して落ちないし、断固やるべきだ」といいましたら、ニコニコ、ニコニコして聞いておられました。「君たちのいうことはよく分かった。長官が帰られたらよく話しておこう。しかし、これからは僕の命令だから慎重に聞いてくれ。これから君たちにやってもらいたいことの第一番は、この海軍工廠の何百人という勤労動員の女学生たちに持てるだけの物を持たして無事に国に送り返す。これが第一番。第二番目は、ここで終戦となれば、おそらく皆勝手なことをして呉工廠の風紀も乱れるだろう。君たちは士官として最後まで秩序を守ってくれ。終わり」といって、何も一言も……。なるほど、大人はああいう見方をしているのだなと思って感心しました。何ていう方かお名前が聞かなかったのですけれども、参謀長の人でした。少将でしたかな。

伊藤 それは立ち消えですか。

西田 陳情へいっただけの話で、それから後は命令に従って勤労の女の子たちの後始末のこととかそういうことばかりで。

伊藤 持つものを持たせてというのはどういう意味ですか。

西田 持てるものです。民間で手に入らない布とかいうようなものがあるでしょう、火薬の包装のための生地とか、立派なものがある

りました。よくいうのですが、今のような立派な方もあったが、悪いほうの例としては、私どもの砲煩実験部に兵学校出のバリバリの士官がおって、これが自分は軍人精神の塊みたいなことをいつていた。我々大学出はなっとらんといいいつも活を入れられたのです。そんな人が終戦になったら手のひらを返したようになって、トラックに海軍工廠のいろいろな物資を積んで自分のうちへ運んだりしていました。だから、人間というのは土壇場になるとね。我々学校出はもう変わりようがないわけです。軍人精神も入らんけど、べつに将来どうしようという欲があるわけではないですからね。

伊藤 じゃあ、そういうのが軍人精神だったのでしょかね。

西田 もう一つだけ終戦での思い出は、十一月に第二復員省になって、しかしまだ海軍工廠でその後始末に残って翌年の調査まで付き合わないといかん。昭和二十年、まさに終戦の年の十二月三十一日ですが、呉工廠もほとんど帰る人は帰ってしまったて、あの広いところががらんどみたくなってしまっ……。

伊藤 お仕事はもう何もないわけですね。

西田 仕事は何もない。その前に申しあげるのを忘れましたが、その頃は豪州軍が呉へ入ってきまして呉を占領しました。呉工廠の治安を我々が守るのだといって、私はその晩に当直将校で工廠の本部で宿直していました。夜中の十一時頃、呉工廠はずっと東のほうから山があるのですが、山一面に呉工廠の警備のための守衛所があるわけです。その山の上の守衛所で豪州軍の黒人の兵隊さんがやって来て。

伊藤 豪州軍ですか。

西田 豪州軍でした。呉に来たのはオーストラリアでしたから。

伊藤 オーストラリアでも黒人兵なのです。

西田 黒人がおりました。守衛所で守衛が殺されたということです。

「当直将校すぐ来てくれ」というので、それから夜暗いところを懐

中電灯を持って山をあがっていきました。山のところに守衛の見張り所があって、そこへ占領軍の黒人の兵隊がピストルを持って入ってきて、「金を出せ」といったらしいのです。二人おったのですが、一人は寝ていた。その一人の守衛は英語が分からんものだから、「ノー、ノー」といって逃げようとしたら、後ろからバンバン撃たれて、背中からこちらに弾が抜けて倒れていました。その翌日その人の遺族がやってきて、死んでいる人にとりすがって泣いていましたけれども、あの当時の警察に豪州軍のやったことを調べようがないです。それから一、二週間して皆また交代でいつてしまったから、本当の殺され損ですね。これは戦争に負けたということを担当にしみじみと感じました。あれは気の毒でした。それは昭和二十年十二月三十一日です。

伊藤 後始末というのはどういうことですか。

西田 私どもは呉工廠に豪州軍が九月か十月頃かに船で呉軍港へ入ってきて、上陸してきました。私どもは当然海軍の引継ぎだろうと思って私どもの上司やらなんかがちゃんと並んで待っていたのですが、彼らが船をつけましたら、そこへおる日本の兵隊なんか見向きもしないで兵隊がぞろぞろあがってきて、その辺の倉庫の中を開けて、自分の寝袋を出してそこで寝る用意をしているわけです。全然相手にしようとしませんね。

私どもの任務は技術調査団が来るからこれとの対応ということ、それから多少まとまった仕事で、向こうとの話し合いをしたり、江田島の火薬庫を案内したり、いろいろなことをやりました。

伊藤 それは昭和二十一年になってからですか。二十年のうちにですか。

西田 二十年のうちからでした。

伊藤 それはアメリカですか。

西田 アメリカの技術調査団です。

伊藤 豪州軍との関係はどうなのですか。

西田 関係はないのでしょね。同じ連合軍の中の別々の任務ですから。アメリカの調査団がそこへ来て調べたのと、さっき申しあげた、私を原爆の関係で東京へ呼び出したのと。

伊藤 それは全部アメリカですか。

西田 アメリカです。

伊藤 やはりCIAですか。

西田 そうなんですかね。ネイバル・テクニカル・ミッション・トゥー・ジャパンと書いてありましたから、アメリカ海軍技術調査団。

伊藤 後始末というときに、原材料とかいろいろなものが工場というのがあるわけではないですか。

西田 砲弾実験部ですから、結局実験装置とかそういう器具の類です。それからあまりめばしいものはないのです。一番まともにたくさんあったのは、タイガー計算機というのが昔ありましたが、弾道計算なんかをやるのにあれの新品がたくさんありました。

伊藤 ぐるぐる回すやつですか。

西田 はい。豪州兵なんていうのはそんなものを見たこともないのですね。みんな海に持って行って放り込んでいました。あんまりだから、私はうちの主任に、「これ一つだけ記念にもらいます」といってタイガー計算機をもらいました。あとはろくなものはなかったからね。

伊藤 工廠全体としてはあったわけですよ。

西田 だけど、人間の手で持ち運びできるような軽いものはないです。あまり向こうとしては戦利品はなかったでしょう。江田島へいけば、火薬庫で危ないものばかりですからね。その後の話になりますが、二十一年になってから、私は一たんやめて東京の大学へ行って、また戻ってきて江田島の火薬庫の火薬の後始末をアメリカ軍の指揮でやらされました。

伊藤 それはまだ仕事としては第二復員省の。

西田 第二復員省の仕事が終わって。

伊藤 終わってからです。

西田 ええ、二十一年の二月頃に終わったわけですよ。

伊藤 大学の研究室に戻られますよ。

西田 自分の生まれ故郷の朝鮮は音信不通ですし、生きているのかどうか分らない。女房と二人呉に新婚でいて、長男だけ生まれたわけでしょう。親子三人だけ。海軍がなくなったら何をしたいか分からないわけです。海軍を第二復員省でやめたときの退職金が三〇〇〇円かなんぼあって、あの当時の三〇〇〇円といったら、女房子どもを呉において三年間くらい食っていきける。退職金を預けて、私はほかにやることもないから、もう一遍学問をやり直すかという形で嵯峨根先生と連絡して、「俺の研究所へ戻って来い」といわれて東京へいったわけです。それが確か二月でしょう。呉をたつたのが二月十一日、妙なあれですが昔の紀元節です。二ヵ月して今度は四月の天長節に朝鮮の家族が無一物で帰ってきて、これを養わなければいかんものですから研究室をやめたわけです。これが四月の天長節（二十九日）。二ヵ月だけ東京大学へいったのです。

伊藤 朝鮮から無事に帰れたわけですか。

西田 無事でしたけれども、朝鮮の清津というところにいたわけです。終戦直前にソ連が北朝鮮に入ってきました。あそこで戦闘があったはずいぶん日本の兵隊も亡くなったのですが、それが上陸してきたものですから、両親と兄夫婦、弟夫婦、妹、弟の子どもの合計八人が無一物で白頭山のほうへ逃げて。

伊藤 北のほうへ逃げたのですか。

西田 西のほうへ。

伊藤 あれは西ですか。

西田 山沿いにずっと逃げてきて、途中、三八度線の手前の咸興と

いうところがありますが、あそこで全部捕まってしまつて抑留されたわけですね。その抑留された感興で、発疹チフスが非常に流行りまして、そのときに家族みんな病気でふらふらになっていて、気がついたら一番年上の親父が死んでいた。それを葬ることもできないから、眉毛だけを形見に取つて、朝鮮人の人に頼んで埋めてもらった。四月に帰ってきたときには、一番年上の親父だけ死んでいなかったわけですね。あのときはみんな半病人ですから親父の介抱も何もできなくて、眉毛だけを形見に取ってきたと。よくいうのですが、この前申しあげた日露戦争で、乃木第三軍でロシアと戦争して赫々たる戦果を挙げて金鵄勲章をもらった親父でしょう。それがソ連の侵入でそういうところで野垂れ死にするように死んだ。親父は悔しかったらうと思うのです。これは運命ですね。

伊藤　そこで抑留されて、よく帰ってこられましたね。これは北鮮の側でしょう。

西田　三八度ではなくて北鮮の側です。抜け出すきっかけがどういうふうにあったのか知りませんが、それから皆で揃つて歩いてどんどん三八度線を越えていったらしいです。ソ連のほうがコントロールしていたのだけでも、それが緩くなったのでしょうか。私一人が内地におつたものですから、そのへんの経過がよく分かりません。

伊藤　藤原ていさんのあれ『流れる星は生きている』と同じだな。それから後は。

西田　三八度線を越えて帰ってきて、弟が東京に飛んできて、実はこれこれだというので。

伊藤　だけど、よく分かりましたね。

西田　博多に上陸して、広島に母の里があったわけです。花という名前の。母の里へ皆が駆け込んだわけですね。そうしたら私が東京へいっているということが分かつて、それで弟がやってきたわけですね。

親父が亡くなって、皆が帰ってきたのだと。皆半病人で元氣なのは私だけです。これは八人を養わなければいけません。

伊藤　自分の妻子も含めて、大変なことになりましたね。

西田　だから、すぐ嵯峨根先生に暇乞いをして、二日後に広島へ帰ってきました。何も職がないから、呉の界限で昔の海軍の上司が日本火薬という本場の日本火薬の会社とは違う系列の会社をつくつてまして、そこへ雇ってもらつて江田島の火薬庫の処分のことをやっていたわけですね。そのときがちょっと……。

伊藤　それはまたアメリカと何か。

西田　江田島の火薬庫は危ないから、その始末をするというのでまだアメリカはそこにおりました。

伊藤　アメリカの命令でやっているわけですか。

西田　そうです。指揮官はアメリカの少佐の人で、軍服を着て、もちろんピストルを持って、日本の人夫やら我々を指揮するわけですね。私たちはその人夫の人の指揮官みたいになって、船に火薬を積んでいて、瀬戸内海の何とか島の辺までいって海に捨てるのです。

伊藤　海に捨てるのですか。

西田　あのときは気がつかなかったけれども後で分かったのは、海軍の江田島の火薬庫にも毒ガス弾があったのです。毒ガスのイペリットというやつです。そんなことは分からないから、イペリットを詰めた弾から少しずつ漏れていたのです。二日ほど作業をした後、人夫の人の汗をかくところにイペリットの漏れたやつで水ぶくれができていたわけですね。なかなか治りにくかったという話です。私らは一週間ぐらいで全部打ち切りになりましたけれども、それを瀬戸内海のあるその辺に埋めたのです。

小池　大久野島でしょうか。

西田　あの辺にやはり陸軍の毒ガス弾をつくっていたところがあった、その近所へ持つていったらしいのです。私らはいわれたとおり

にやるだけです。何かぐずぐずいっているとボンボンとピストルを撃つ。嫌な時代でしたね。

工員とか技手とかという人は大体呉の地元の人ですからまた自分の家へ帰るのですが、士官連中というのは学校出とかそういうので来ていますから皆失業してしまって、ありがたいことに昔の海軍の上司の人というのがその人たち一人ひとり全部に就職の世話をしてくれました。立派なものです。私は、火工部長の後で来た磯さんという少将の人が京都大学で勉強したので、京大の同級生を通じて、京都の出版社の編集員で雇ってもらえることになり、それで私は京都へ出かけていきました。

伊藤 では、四月から九月までの間は火薬の処理の仕事をされておったわけですか。

西田 四月からというのは、嵯峨根研究所から四月に帰ってきました。高桐書院へいつているのはもっと早いでしょう。

伊藤 九月です。

西田 九月ですね。日本火薬というところで今の……。

伊藤 これ〔履歴書〕にはそれが書いてありませんけれども。

西田 火薬の処分をしたりしているのは、高桐書院へいく九月までの間です。呉の近くの親戚のところに居を据えてそれを行っています。

伊藤 これは、給料はよかったですか。

西田 普通の日本の会社並みの給与は出てきました。しかし、ご承知のように、昭和二十一年の嵯峨根先生ところへいつているときに新円切り替えがありました。すべての貨幣価値が十分の一くらいになっちゃった。三年間女房らが食えると思っていたら、そうではない。そのときはなかなか大変でした。

伊藤 インフレ時代ですからね。

西田 徹底的なインフレで。

伊藤 戻りますが、砲煩部でお仕事をされていて、最初は中尉に任官されますね。

西田 海軍に入ったときにすぐ中尉です。

伊藤 最後まで中尉ですか。

西田 佐世保の海軍工廠にいったときはまだ中尉でした。呉に来たときに、昭和何年だったか、海軍技術大尉になったのです。それは〔履歴書に〕書いてなかったでしょう。昭和十八年か十九年です。私はあと半年ほどしていたら少佐になるところだったのです。

伊藤 ポツダム少佐にはならなかったのですか。

西田 ならなかったです。大尉で終わります。

伊藤 先ほどアメリカ軍の調査団とお付き合いされたといわれましたが、それは通訳を通じてですか、それとも先生は英語ですか。

西田 通訳はおられません。我々が学校で習った英語で、見よう見まねで、手まね足まねで意思の疎通をしまして、結構仲よくなりました。

伊藤 それはやはりテクニカル・チームが同じだからという意味ですか。

西田 中身は技術的な問題ですからね。だから、大体現物に即して話をすれば分かるわけです。個人的にも親しくなって、二十一年の正月にはまだ私は呉におりましたから、技術屋さんの幹部の連中を私のうちへ呼んで新年宴会をやりました。

伊藤 お金はいじょうぶでしたか。

西田 お金はまだ第二復員省からもらっていましたから。そのところの間が抜けていますが、豪州軍が進駐してくるときは、呉は一斉にパニックでね。女子どもはどんなひどい目にあうか分からない。うちの女房なんか全部岡山県の田舎へ疎開させようとして、呉駅で半日くらい並んだのだけれども、汽車が混んでいてだめなんです。死なばもろともだというわけが残っていたら豪州軍がやって来て、

やって来たときというのは町じゅう全部雨戸を閉めてしーんとしていました。だけど、向こうのジープがやってきて二日目、三日目になると、子どもはめずらしがってちよろちよろ出ていくわけです。向こうのジープのところへいくと、豪州兵からチョコレートやチューインガムをもらうわけです。子どもは大喜びですよ。あれもまさしく敗戦の風景ですね。

伊藤 それで、さっきおっしゃったように歩哨が殺されるみたいなことはあったでしょうけれども、さほどのことはなかったのですか。

西田 いや、ずいぶんあちこちで女性が暴行を受けたとか、どこかわけの分からんところで豪州兵に殺されたとかというのはありました。やはり皆非常に警戒していました。しかし、二〜三ヶ月でどんな進駐してきた兵隊を交代させていたようですから、あんまり治安が悪くて外も歩けないというようなことはありませんでした。むしろ、子どもがあんまり兵隊さんに慣れるのが、見ていて情けない。

伊藤 アメリカ軍はそれとはまた別に調査団を送ってきて。

西田 調査団だけです。呉に進駐してきた兵隊としては、アメリカも東京の司令部から来ているいろんなランチの兵隊はおりましたけれども、アメリカ軍というものはそんなに目立つような動きをしていませんでした。

伊藤 進駐軍列車で東京にいらっしゃったのはいつ頃のことだったのですか。

西田 向こうの調査団が来てからですから、やはり〔昭和〕二十年のうちの十一月か十二月頃でしたか。

伊藤 これは待遇がよかったのでしょうか。

西田 呉駅から進駐軍の特別仕立列車ですから、日本人は乗れないわけです。そんなのに乗っていくと、皆に外からのぞかれて。

伊藤 あれは二世かも知れないと。

西田 しかし、いきなり原爆の報告書を英語で書けなんていわれた

りするわけです。

小池 アメリカ軍のもっとも関心のあった日本の技術というのは何ですか。

西田 第一はさっき申しあげた原子爆弾のことです。原爆の被害調査。それ以外には、日本のロケット弾のことを、「これにはひどい目にあった」といってよく調べていました。ほかは何だったかな。

伊藤 これは事細かに質問するわけです。

西田 向こうが自分たちの目で見て大体分かる。分からんことは質問してくるということです。特別にレポートをつくるとかということはありませんでした。

伊藤 それを明治生命ビルで缶詰ですか。

西田 缶詰でした。

伊藤 あそこで簡易ベッドか何かで寝たわけですか。

西田 部屋の中でどこかで泊まったのでしょうか。

伊藤 食い物は向こうのだからいいでしょう。

西田 例の全部セットになった缶詰がありましたね。それはみんな鞆に入れて持って帰りましたけれども、おいしかったですね。

伊藤 軍隊の、あの携帯食料は何ていうのでしょうか。あれはあんまりおいしいものではなかったけれども、当時の日本人としては非常においしかったのでしょうか。

西田 とにかくあれは肉がぎっしり入っていますからね。あと終戦までで何か補足しておくことはあんまりなかったでしょうね。終戦のときには鎮守府へ陳情にいった戦争継続すべしとやったことくらい。陛下の玉音放送、ラジオ放送があったときには、それから二〜三日、進駐軍が来るまでは実は騒然たる雰囲気でした。一番印象に残っているのは、呉鎮守府の管下には真珠湾攻撃をした特別攻撃隊があるのです。海の中を潜っていった自爆するやつですね。それとか、あの当時の特攻で体当たりをする訓練をずいぶんやっていたのです。

だから、玉音放送があった後、いいお天気でしたけれども、数少ない飛行機が空をブンブン気が狂ったように飛んでいました。後で聞いたら、特攻の準備をしていた青年士官がとても納得できないという命令を聞かないで飛び回って、最後に海に突っ込んで自分で死んだ人がだいぶあるらしいです。憐れな話ですね。今まで死ぬ稽古をしていて、これで降参だというのは納得できない。私だってやはり、ミッドウェー以来、これはアメリカに勝てるとは思わなければ、負けるのは嫌だというような感情ですね。だから戦争継続をと……。

伊藤 無事に勤労学生と。

西田 それは皆、係りは違いましたから分かりませんが、特別な列車を仕立てて、汽車に乗せて地方へ。地方から女学生がずいぶんたくさん来ていましたから。

伊藤 地方といったってそんなに広い範囲ではないでしょう。

西田 広島県内でしょうね。

伊藤 一般の工員は。

西田 それは皆どこかへ散っていったのでしょうか。

伊藤 先生の部下なんかいた人たちはどうなったのですか。

西田 私の部下では、技手の人はもちろん広島この界隈に住んでいました。この人は、私どもが東京へ行ってからその後でも、文部省へ行ってから技手の人から二、三頼まれたのは、原爆手帳をもらいたいから三日間広島の調査をしたということの証明をしてくれと。私が士官だったから。その証明書を書いたことはあります。それを書いて一、二年して亡くなったということも風の便りで聞きました。小池 残留放射能がありますと、体がけだるくなったり、あるいは非常にやる気がなくなったり、よく原爆の後にぶらぶら病というふうにいわれたのですけれども、そういう症状というのは先生は出なかったのでしょうか。

西田 私はありがたいことに白血病とか原爆症らしきものはなかったのですが、文部省にいったのが昭和二十六年で、もう終戦後六年たっていますけれども。

伊藤 昭和二十七年ではないですか。

西田 いえ、文部省へ最初にいったのは昭和二十六年です。

伊藤 これ〔履歴書〕だと一九五二年三月になっています。だから二十七年。

西田 そうです、二十七年です。そのときにいって、それから二年ほどたって昭和三十年頃、まだ三〇代で若いのに急性の糖尿病になりました。慶応病院に入院しました。それだけが実に意外な症状でして、慶応病院の人に、「実は原爆の調査をしたので放射能の影響はありませんか」といったら、「そんなことはないでしょう」といわれましたが、それだけです。

小池 普通は甲状腺が腫れたり、食べ物の味が変わったり、少しでも浴びるとそういう後遺症があるのですけれども。

西田 昭和二十八年から現在まで病気はずいぶんしました。海軍の呉における昭和十七年に家内と結婚したのですが、今年がちょうど女房と結婚して六〇年です。ダイヤモンド婚というのだそうですね。

伊藤 金婚式はもう過ぎて。

西田 この間女房に聞いたら、その六〇年の間に、家内は一度も入院したことはないのですけれども、私は八回入院しているのです。これは原爆とは関係ないと思います。おなかを三度切って胆石を取っています。前立腺、これは年です。それから両眼の白内障の手術をしています。これもちょっと意外なのですけれども、脳外科の手術を二回やっているのです。ここここ〔両こめかみ〕がへこんでいますけれども、穴をあけました。慢性硬膜下血腫というのがあります。頭蓋骨の下に硬膜があって、軟膜があって、くも膜があるのです。その硬膜の下に血がたまって、それが脳を圧迫して

物がいいにくくなったり、血圧が上がったり、これで二度手術しているわけです。しかし、これは原爆とは関係ないですね。

■高桐書院編集者から取締役業務部長へ

伊藤 そういう方もいらっしゃるんですね。さて、今のお話で、京都の高桐書院というのですか。

西田 その名前は、京都の有名な禅宗のお寺で大徳寺がありますね。大徳寺の中にいろいろな塔頭がありまして、あの中に高桐院というのがあるのです。その名前をとったらしいのです。その出版社そのものは非常に道楽気の多い人の集まりでして、高桐書院という名前がいうように、いろいろな美術関係とか、そういうあんまり売れないような本、高級な本を出すような出版社だったのです。

伊藤 この資本主は何なのでしょう。

西田 資本主は京都の西京極のほうに日本写真印刷株式会社という大きな会社がありまして、その社長が応援をして、道楽人であるいろんな技術評論家みたいな人とか……。後で私らの頃に社長になったのは、淀野隆三という名前で、三好達治と同級に三高を出たフランス文学をやった人です。こんな人が社長になって、ずいぶん文化人ですけれども、それがマラルメの研究とか売れないような本の企画ばかりして、それでだんだん経営が危なくなってきた。私どもの若手が入って、全体で編集部員は一〇人くらいおりましたけれども、若手の我々で、「そんなことはだめだ。小学生にワークブックをつくって売り込もう」というわけで、『のびゆく子ども』というような本を小学校へ売りに歩いたりしました。それで少しは持ち直したのですけれども、結局その道楽出版のおかげで返本を山のようにつくって、高級な本でしたけれども、蔵にいっぱい残ってつぶれたの

です。

私はそこで編集をやっていたのですけれども、その頃の編集で理科系の本を出そうといったら京都大学という連絡をして、そのとき京都大学の理学部で湯川〔秀樹〕先生の研究室へいきました。まだ湯川先生がノーベル賞をもらう前だったのですけれども、湯川先生が、「もう私の年になるとだめですよ」とかといったらしょうばりしておられたのです。研究室の紀要というのがあるでしょう。その出版を引き受けたのですが、それがノーベル賞をもらったとたんに人気が出た（笑）。それから、京都大学の教育学部に助手でおりましたのが永井道夫（一九二三～二〇〇〇年。教育社会学者）。彼がその助手で、うちの編集部の顧問みたいにして、京都の寺町を連れて歩いてコーヒーをただで飲ませてやったのです。だから彼は私には頭があらがない。その後東京へ来て工業大学の教授になって、文部大臣にまでなったでしょう。世の中というのはいいかげんなものですね。

伊藤 これはとにかく三年くらいはやったのですね。

西田 その出版で最初に編集部をやっているときには、私は従業員組合長をやりました。

伊藤 組合ですか。

西田 その当時ですから組合をつくったのです。錚々たる共産党員と名乗る人がおりました。経営者と交渉しているうちに、ちょうど昭和二十二年に呉においていたおふくろが亡くなりまして、その葬式で私が休んだのです。あの当時は従業員組合がうるさいと、組合の代表を経営者に取り込んでいくというのがはかった。戻ってきたら、おまえが監査役になったというのです。それが半年したら取締役になってしまうって、取締役業務部長です。業務部長というのは営業部長です。会社の経営をやらなければならぬのですけれども、会計学なんて習ったことにはないですね。しかし、自分で伝票を切っ

て帳簿をつけるということをやらずやらなければならぬものですから、会計学の本を買ってきて読みました。

会計学の本の中に経営分析というのがありました。ああいうところは理科系の人間が読むと実におもしろいですね。会計学の本というのは、理科の人間、物理なんかは特に非常に分かる。なぜならば、会計学というのはお金の交通整理でしょう。これは物理という流体力学と同じなのですね。流体力学で管が細くなったりいろいろなスピードで流れるようにその整理ですから、数式で書けば簡単なことを長々と文章で書いてあるだけで、会計学というのは実によく分かる。経営分析をやっているうちに、私が取締役会で、「この会社は二年以内につぶれる」と分析の結果を報告したら社長が怒りまして、「おまえのような若造に何が分かるか」といった。一年目につぶれたんです。

京都の株屋からいろいろ借金をしたり、社長の本当の個人的なつなりの借金をしたり、そういうものでなんとか食いっただけなんです。最後に銀行で不渡りを出してつぶれたのです。文士であったフランス文学者のその人は、夜逃げしてしまって行方不明になってしまったわけです。私が取締役業務部長ですから、京都の借金をしている五つの銀行を集めて債権者会議をやって、会社の清算をやったわけです。

伊藤 やはりどこまでいってもマネージャーなのですね。

西田 会社がつぶれて給料をくれないといったら、従業員もついてこないですよ。そうしたら、一人だけよく手伝ってくれたのだけれども。結局、つぶれた後の会社の財産としたら何があるかといったら。

伊藤 在庫。

西田 三条堀町の蔵のような家でしたが、その中にぎっしり返本が詰まっているわけです。こいつを処分するしかないということです。

誰も手伝ってくれない、従業員一人だけだった。仕方がないから、鹿ヶ谷にうちがあったのですが女房を呼んできて、女房が二つの長男を背中へおんぶして、二人で山のような返本に荒縄をかけたのです。それをトラックに積んで、大阪駅の辺は焼け野原でしたが、大阪駅前には闇市がありましたので、そこでその返本を全部くず紙にして売ったわけです。それでつかんだ金で従業員の退職金なんかを払いました。それを払い終わったときに税務署が差し押さえに来た。蔵の中は何もありはしない。ざまあみろってね(笑)。

よく親父がいったように、人間というのはいろんなことをやってみないといかんのだと。出版屋でまさかと思った経営者をやったでしょう。その経営者をやると一番つき合いの悪いのが税務署ですよ。税務署の小僧つ子でたいして会計を分かりもしないのが一所懸命帳簿の上で文句をいうわけです。私らがびしゃっと説明すると理屈では勝てないわけです。理屈で勝つてもだめなんですね。率直にいったって、その税務署の小僧を飲ませて、食わせて、寝かさなければだめなんです。それには金がかかっても、そのほうが税金をとられるよりも安いのです。悪いことを覚えますね。京都の祇園の乙部ぐらいに連れて行って寝かせるわけですね。だから、差し押さえをやったときにはもう何もなかった。

私はその三ヶ月ぐらい何も給料が出ないですものね。そうしたら銀行の人が気の毒がって、「西田さん、もういいから早くあなたもどこかいきなさい」と。銀行も取れるものは何もないから。それで皆に同情されて後始末をしておしまいにしたのです。

伊藤 その倉庫は会社のものではないのですか。

西田 会社の専務取締をしていた人が地元の人でして、その人が借りてくれていたのですね。そういうものの後始末がどうなったかは知りません。

伊藤 会社がつぶれるときの最終的な清算というのはなかなか厄介

なことだと思いますけれども。

西田 よくいうのですが、その会社の破産と清算をやって会計のことをやらされたことが、文部省へいつから一番役に立ったのです。文部省の学生課長になって、担当が日本育英会でしょう。文部省の中の予算で一番大きなのが国立大学の施設の予算、その次に大きなのが日本育英会の予算です。これの担当をして、育英会の経理をコントロールするわけです。育英会の経理組織を見たら、なっとなんです。何万人という債務者がおるわけですが、これの整理ができていない。来月誰に催促して幾ら金を入れるかという計画も立てていない。育英会の経理組織を全部やり直して、しかも、帳簿組織をやりかえるとともにデータ処理にコンピューターを入れる。これは理科系だからできたわけです。育英会にコンピューターを入れるといったら向こうの理事が反対しまして、「コンピューターでテープの中に入っているだけでは開けて見るわけにいかんじゃないか」と、今からいえば幼稚な話ですね。コンピューター処理をして、やっ

と債権・債務の関係がはっきりして、育英会の経営の合理化をやったという格好で、ある程度軌道に乗せられたわけです。

伊藤 やはりそのときの経理の勉強がずいぶん後で役に立つわけですね。

西田 自分で伝票を切って、複式帳簿をつけて、原価計算をして、販売者に納めて売掛金をとって、利益が幾らで、著者に印税を払わなければいかんわけでしょう。それはやはりいい勉強でした。

伊藤 最後に倒産すれば印税の支払いもできないですね。

西田 そのときに恩借によって借りた身内からの社長の借金があったのですが、そこには一番義理悪いのです。「最後に残っているお金は幾らもないからこれをとってください」と持っていたのが、砲弾実験部でもらったタイガー計算機です。「もうこれしかありません」といって。

伊藤 タイガー計算機がそこで出てくるとは思わなかったですね。

西田 こういう激動の時代ですから、いろんなことがドラマテクラルでしょう。

■大阪第一師範教員、文部省学生課長となる

伊藤 そうですね。それは大阪の第一師範学校の教官に採用される直前までそれをやっておられたわけですか。

西田 最後にそうやって銀行の人が、「もう高桐書院の整理はいいから西田さんもいきなさい」といわれた頃に。

伊藤 そのときは給料をもらっていなかったわけでしょう。

西田 もらっていないかったです。

伊藤 どうやって食っていたのですか。

西田 どうやって食っていたのですかね。高桐書院がつぶれる前の年に、昔三高で生徒主事をしていた日高先生がぶらりと高桐書院に来られまして、「君、どうだ文部省に來ないか」といわれたことがあったのです。「いやいや、私はこの会社がつぶれそうだから、私がおらんと危ないからがんばります」といったら、「やっぱ君はそういうところでがんばる癖があるな」といって。だから、その翌年に危なくなったときに日高先生に手紙を出しまして、「先生、どこか就職をお願いします」といったら、「大阪学芸大学に職が空いているから、その教員にいけ」と。日高先生はそのときに文部次官ですから、鶴の一声ですよ。学芸大学の学長さんは、「はい、はい」といってすぐ受けてくれた。正式には学芸大学ではなくて大阪第一師範学校。昔の大阪第一師範が天王寺師範と池田師範とあったのです。それが大阪学芸大学の天王寺分校と池田分校になったわけです。池田分校の小学校がこの前人殺しのあったところですよ。

田小学校事件、二〇〇一年六月八日発生」。大阪府を天王寺師範と池田師範が二分していて、淀川を境としてお互いの教員の就職口は絶対に譲らないと、仲の悪いけんかばかりしていました。

伊藤 同じ府県に二つ師範があれば必ずそうなりますね。

西田 私はその天王寺師範の、しかも大阪の平野というところが南のほうにあります。そこに天王寺師範の女子部があったわけです。

その女子師範の平野の教諭になったわけです。大阪第一師範学校の平野分校です。だから天王寺のほうよりもっと小さいへんびなところへいったわけです。そこでやっているうちに、第一師範学校と今の大阪学芸大学とが新旧の制度が二重組織ですから、そこで今度は教員資格検定を受けて学芸大学助教教授になったのです。それが一年先です。これは一応教員資格審査を受けたわけです。

伊藤 ここでは何を教えておられたのですか。

西田 もちろん物理です。

伊藤 教員としてのお仕事はここで初めてでしょう。

西田 初めてです。学芸大学へ行ってみて一番驚きましたのは、昔の女子師範ですから半分開らい女の先生ですよね。それも六〇くらいの相当なおばあちゃん、とにかく意地の悪いお姑さんみたいな人がたくさんおるわけです。若手が何をするか、というような格好で。

伊藤 いや、若い男が来たから喜んででしょう(笑)。

西田 生徒は喜んだかもしれませんが、そのおばあちゃん方が師範学校の伝統ということをおっしゃるのが、私から見ると実に古めかしいんですね。これを革新しなければいかんと、若手の教員だけで仲間をつくって革新的なことをやろうとしてしょっちゅう摩擦がありました。しかし、まず専門のほうからいいますと、物理の教師としていつてみたら、実験室の中に、物理の基礎実験としては物の測定、天秤一つ据えて、振動のこないような台がないわけです。板張

りの物理教室の床を全部はがしまして、そこに自分たちでコンクリートを打って台をちゃんとつくって、水道からちゃんと水が出るようにして、私が物理の一年生のときにやった基礎実験が全部やれるような装置をつくりました。金がないわけでしょう。昔からの物理教室の中には、昔でいう島津製作所がつくった標本みたいなものがありますね。あれを全部大阪の闇市に持って行って金に換えました。

伊藤 それは学校の物ではないのですか。

西田 学校の物です。そんなもの、誰も文句をいう人はいないんです。それを金に換えて、大阪の東京という秋葉原みたいなところへ行って半田ごてだとかそういう道具類を全部買って、自分で手を下して実験できるような道具を全部そろえました。まず半田付けからやれと。というのは、「あなた方は卒業したら小中学校の先生だろう。おそらくこの学校へいったって何も道具はありません。先生がまずモノをつくって、そこで手を下してやらさなければ理科の実験にならない」と、その趣旨でいったわけです。東大の理学部の物理の一年生がやるだけの実験、振り子の実験からいろんなものを全部やれるようにしました。そうしたら生徒たちは喜んで、そこで一所懸命夜遅くまで残って実験をやりました。

もう一つ物理の授業でぴんと来ましたのは、これは教育学部の先生方はあれでしょうけれども、私がいつてみて、教員養成大学、昔の師範学校を学芸大学に切り替えたときに、やはり明治時代の師範学校というものはきわめて古めかしいものだといわれますけれども、そこには伝統的な教師としての指導方法というものが本当に伝統的に受け継がれてきた。その教育指導を練りに練ったものがあったのです。そういう先生が研究業績がないからといって全部首になった。私がいいたときにそういうことでどんどんやめさせるといって、私はそこでもやはり職員組合というのをやりまして、学長と団体交渉をやって、「苦情処理委員会」というのをつくって、一人ひとり

の先生のいい分を聞いて、本当にだめかどうかをやって、何人かの先生を救いました。それでも大部分の人がいなくなった。私が来てみたら、ほかの一流大学か中流大学から、そこでうだつが上がらない先生が業績だけあるというので学芸大学へ来ているわけです。こんな人は教育の「きょ」の字も知らないわけです。こういう形で学芸大学は実に荒廃していました。

物理の授業をやりますと、学生たちが皆きょとした顔で聞いているわけです。物理の授業というのは物理の本に書いてあることを覚えることだ、それで正解を出すことだという訓練になってしまふのです。これではだめですね。現場にいったときに理科教育の基礎をみんな自分の目で物を見なければならぬというので、私は終わりの頃でしたが、今から試験をするからといって白い紙を配りまして、「先生がこれからある実験をやる。君たちの目で見て、見たことをそのまま事実を書きなさい。その事実の中で君たちが知っている物理の法則で説明できるものは何かということを書きなさい。今から実験をやるから」といって、教壇の上でゴムのボールをポトンと落として、ポンポンと跳ねて、コロコロといつてとまるわけです。「終わり」といったんです。きょとんとするわけです。いま見たとおりのこと、聞いたことをちゃんと書けと。自然現象の観察というのは自然科学の第一歩でしょう。私はそうだと思い込んできたのに、何を書いていいのかわからない。書いてあるのを見ていたら、初めは速度がなしに落ちて、跳ね返って何回かジャンプして、音を出して、コロコロといつてとまったと、それだけのことを書けばいいのです。ところが、それが反発したということも書かないし、音が出たということも分らない。何を書いたかといったら、先生はガリレオの落体の実験をしたと、本の中の言葉を思い出すわけです。そういう発想なんです。これでは理科はだめだ。

それで私は、自分自身がまず理科の教授方法を一度も勉強したこ

とがない。だから、分校主事に頼んで、教育実習の付属学校があるわけですが、付属学校の教員に私を併任してくれたのです。学生が実習にいったときに私もいって現場指導ができるかどうかやらせてくれといつてやったのですが、見ていますと結局、学芸大学の先生は教育実習という付属の先生に預けているだけで何も指導できない。指導できる先生は学芸大学の教育学部にはいないわけです。これではだめだ。

そのうちに私が一番痛感しましたのは、物理ですから物理に關係のある学芸大学の中のコースとしては、耳の聞こえない聾教育のコースがあったのです。その物理の授業をやると、音響だけを教えるわけです。その聾教育のことをやっているうちに私はだんだんおもしろくなりまして、よし、聾教育の専門家になろうと思ったのです。ところが、聾教育というのをやるためには、昔ドイツのヘルムホルツがああいう物理学の分野を開拓して以来全然進歩していない。聾教育というのは、聞こえる物理的な現実というのは音響学でしょう。物理です。耳のメカニズムで音を感じるのは生理学なんです。それを認識するのは心理学なんです。物理学と生理学と心理学との三つをやらなければ本当の聾教育の専門家にはなれないから、京都大学の医学部へ内地留学させていったんです。若い時分だからいいのですが、分校主事が少し考えておくといううちに、今度は話が途切れて、おもしろいことになったのです。

私がそのときに本当に聾教育をやろうと思ったのは、神戸の盲聾学校へ見学にいきました。そのときに現場の先生の話聞いて感激しまして。生まれて一言も口がきけない子どもに発音させて、自分が聞こえないので言葉を出すための訓練をして、「おかあさん」という言葉をいわせるのに三年かかるというのです。私は感激しまして、こういうことが本当の教育だなと思いました。だから聾教育の教師になろうと思ったのですが、それは志と違ってバアになりまし

たけれども。それが一つ。

学芸大学でもう一つの思い出は、女子師範だから女子ばかりしいなかったところへ男子の生徒も入ってきているわけです。共学になっている。しかし、先生は半分くらい女の先生がおられて、「男女席を同じうせず」というようなことばかりいつているわけです。私は、そんなことをいっても卒業して学校の現場へいったら男性の先生もおる。異性との交流ができなければ一人前の教育にならないからと。私はそのときにまだ平野のほうに家がないものですから、京都に自宅をおいて電車ですべて通っていたのです。片道二時間半。これでは商売ならんからというので、物理教室の暗室の中に布団を持ってきました。そこで寝泊りしていました。そうしたら、「西田君は学校で泊まっているのだったら、女子寮の寮監を兼ねてやってください。どうでもいいや」という。

伊藤 今度は寮監になったのですか。

西田 寮監になったのです。一週間に一遍お米を取りに京都へ帰ればいだけですから、便利は便利です。

伊藤 またマネージャーだな(笑)。

西田 その寮監のときの痛烈な思い出があります。私が今でも思い出すのは、まだ三〇代ですからね、まだ青春の香りがするくらいです。男性のそういう先生が女子の教育というものに対してどこまで深く立ち入るかというのは非常に限界があるということを感じました。

一つは、寮監になった最初の晩に寮生を全部集めて、そこはもちろん女の子ばかり一〇〇人くらいいたのでしょうか、飯を食った後に自由な座談会をやりました。やっているうちにいつの間にか恋愛問題の話になりました。こっちはまだ三〇代でいい気なものですから、女の子ももっともらしいことをいうものだから少し発破をかけてやろうかと思って、「およそ文学作品で恋愛問題というと全部不

倫の恋だ。好きな人を好きになってめでたく結婚したら、そんなものは小説にならない。なぜあれが文学で取り上げられるかといえば、人間が恋愛という本当のところへいくと、二人とも地獄へ落ちてもいいところまでいくのが恋愛なのだ。それが道徳に反するからどうのこうのということになったら恋愛なんかやらんほうがいい」と、そういう極端なことをいったのです。そうしたらその晩に寮の中で女の子が自殺未遂をやりました。「先生、何某さんが部屋で泡をふいています」というので飛んでいったら、前後の見境なしに睡眠剤を飲んだのです。あれは泡をふくのです。それを友達から聞いたら、学校の若手の男性の先生、奥さんのある人に思いを寄せていて、それを地獄に落ちてもいいなんて私がいったものだから、その自分が先生からあんまり相手にされないものだから彼女は悲観して飲んだんだと友達はいうわけです。こちらは、そんなことをいっていてもいま死にかかっている……。

早速寮の小さいさんと呼んできて、荷車を持って、平野の辺から奈良街道を医者のところへ連れていった。それに積んで、近くに学校の校医がおるので校医のところへ担ぎ込んだ。どういうわけか知らんけれども、女子師範だからといって校医さんが産婦人科の人なんです。ここではこんなの扱えないという。それから奈良街道を、布団を乗せて、小さいに後ろを押させて私が引っ張っていったのです。睡眠剤で自殺未遂をすると大きないびきをかきますね。若い娘さんが正体なしにいびきをかいているのを見て、私は厳肅な気がしました。彼女は少なくともまじめな人だ。病院で胃の洗浄をして無事に命をとりとめたわけです。

そうしたら今度は教官会議で、「先生との恋愛問題とかということとで自殺未遂なんていうのは退学処分だ」というので、「年頃の女の子が恋に落ちるというのが何が罪悪なんだ。そんなことはあたりまえのことじゃないか。それに思わせぶりなことをした先生が悪い

ので、先生は処分すべきだけど、この子に何も罪はない。もし指導上困るといふのだったら、私が指導教官になって卒業まで責任をもつ」といって、私が指導教官になりまして無事に卒業して、大阪の枚方の辺で小学校の校長までいきました。

どうも寮には嫌な失敗があつて、もう一つは、寮で私の物理の専攻の学生で非常によくできる子がいました。その人に目をかけていたのですが、少し自分がよくできるものだから気ままなことをして、寮の委員が、「何某さんは非常に勝手気ままをして秩序を破る」といって文句をいつてきたのです。私は女の子を呼んで、「君はこういうことをいわれて寮の仲間から非難を受けるようなことではだめだ。君はどれだけ勉強がよくできても、仲間の秩序が守れないのは人間のくずだ」といって厳しく叱ったわけです。その女の子はにやにや笑いながら聞いていた。それから後は私の想像ですが、彼女は私がよくできるものだから目をかけてくれていると思った。その先生からあんなにひどいことをいわれた。それから、会ってもあいさつしないでブーンと離れていった。それはまあしょうがない、勝手だなと思った。その後、男女共学になって海軍兵学校を中途やめて入ってきた男性の学生がいました。それには女房がいたのです。その男と二人で駆け落ちしちゃったのです。駆け落ちしてどこかで心中でもするのかと心配したのですけれども、けろっとしてまた帰ってきたのですが、二人とも学校をやめました。そのことは私が説教したことで関係があるのではないかという気がしまして、やはり女子学生の指導というのは難しいものだなと思いました。

つまり、まだカウンセリングなんていう言葉ははやらない時代でしたが、指導教官として何でも相談に来いといいました。女の子は自分がこういう悩みを持っていると来るわけです。いろんな話をするから、こちらは理屈を説いて、こうでこうだからこうしたらいいかといったら、それで問題が解決しそうになると、女の子というの

は自分の問題がそんなことでは解決しないということをまた一所懸命いうわけです。だんだんこっちの心の中へ入り込もうとするわけです。これはやはり異性の一種の本能的なあれで、怖いなと思いました。

伊藤 いや、相談にのるといふのは本当に怖いですね。

西田 怖いですね。学芸大学は二年ほどでしたけれども、そこにおりましたときに日高先生が、「学芸大学でやっているようだけれども、文部省はこれから学生問題が難しくなるから、君の昔の高等学校のときを見てみると学生のこと分かるはずだから、今度は文部省へ来て学生の問題をやれ」といって、三度勧誘が来ました。「私はせっかく物理をやりたい、これから聾教育をやろうと思っはりきっているのだから」といったら、「物理なんていうのは君がやらなくなつてやる人は幾らでもおる」と。(笑)、強引な先生ですよ。ね。「学生のことというのはこれから難しく君じゃないとやれない。俺が来いというのだから来い」といって、強引な先生に負けまして文部省に行くことになりました。

伊藤 その頃までにはご家族の方がたはそれぞれ独立されて。

西田 火薬の始末をしたりしているうちに兄もどこかに職を見つけて、弟も働くようになりました。それぞれ生活がたつようになつて、あとはおふくろと妹と私の家族を養うだけですむようになったわけです。

伊藤 とにかくこの学芸大学の先生としての給料でなんとかやっていくのですか。

西田 ええ、それはやっていけました。京都から通つて、寮へ泊り込みでやっていたのですが、学芸大学の時分はまだ三〇代の初めの頃ですから、女の子の教育というのを分からないにやつて、一番張り切っていました。

伊藤 ここでも組合の。

西田 ええ、そこで従業員組合長をやった。

伊藤 組合をつくったということですね。

西田 組合の支部がありまして、日教組の大阪支部の会議へいきましたよ。

伊藤 べつに赤かったわけではないでしょう。

西田 いやいや、何とはなしに世話役に担がれたのです。

伊藤 どこへいってもマネージャーになる宿命ですね。

村上 先ほど学芸大時代に三回日高さんから勧誘があったという話がありましたけれども、きょうの話に、一度高桐書院時代にも声がかかったという話でしたね。そのときもやはり学生関係のお仕事ということで勧誘があったのでしょうか。

西田 いや、その中身までは伺いませんでした。とにかく文部省へ来いよというのがあって、私は今のこの出版屋ではりきっていますからといってお断りしただけです。

伊藤 やはりよほど三高時代の印象が強かったのですね。それ以外に日高さんとの関係はないわけでしょう。

西田 ありません。授業を習ったことはありませんしね。総代会の会合をやって一高との交渉をまとめること、二〇〇人の応援団をつれて対校戦の試合をして帰ってきた、それからその翌年、高等学校では記念祭というのが毎年ありますが、その記念祭の委員長をやった大会をやったと。そんなようなことでマネージャーをやっておったことを見ておられたのでしょうか。だから、学生の中へ入っているまぜかえすことはできそうだと。

伊藤 履歴書を見ますと、一九五二年三月に文部省大学学術局学生課長になられていますが、三月というのは何か意味があるのですか。

西田 三月の年度の変わり目からです。学生課長になったのはそうでしょう。文部省へいったのは、そこには細かく書いていませんが昭和二十六年です。

伊藤 この前の年なのですか。

西田 ええ、前の年に文部省へ行って、文部省の視学官室（科学官室を訂正、第3回参照）へ籍を置いて。

伊藤 どこですか、視学官？

西田 そこに一応任命されて。そこへ行って何をするのかと思ったら、そのときにちょうどアメリカの占領政策として、日本の教育に対するいろいろな改革の指導をしようということでアメリカの調査団が来て文部省へ勧告を出した。そのまた一環として、特に学生指導の問題が戦前から文部省はいわゆる思想統制みたいなことをしてやったから、新しい近代的な学生指導の理念を日本に教えてやろうという形で六名の学生指導の専門家を日本に送ってきたわけです。

その連中が日本で東京・京都・九州で約一年間かかって講習会を開きまして、その講習会がちょうど開かれるときで、私は視学官室からその講習会へ派遣されて勉強にいったわけです。その講習会というのは、各大学の学生指導の関係者を集めて、そのグループを三ヶ月間訓練するのです。そこで訓練を受けて、まずアメリカの考え方による学生指導の新しい考え方を勉強した。その第一回目の京都であった講習会をすんだところで学生課長に任命されたわけです。

伊藤 それはなるための条件なのですか。

西田 たまたまそこへ来ていたので、日高先生はそれを考えておられたかどうか知りませんが、いきなり講習会へいけといわれました。

伊藤 これは英語でやったわけですか。

西田 これは一人の講師に一人ずつちゃんと通訳がついて、レクチャーをやって、通訳でやって。そのときに一番感銘を受けましたのは、我々はそのときに初めてアメリカのグループディスカッションというシステムをやりました。一〇名ぐらいのグループをつくって、そこへ先生が一人ついて、チェアマンを決めて、先生の授業に対する理解の仕方をディスカッションさせる。そのディスカッションシス

テムというのを初めて経験しまして、そのときに私も非常にショックを受けました。

それから、アメリカの学生指導の基本的な理念として幾つかの重要科目があって、残りの先生がそれぞれ、カウンセリングの専門家、グループ・ダイナミックスの専門家、ユニバーシティ・アドミニストレーションの専門家、ボケーショナル・ガイダンスとか、いろんな分野ごとの専門家が六人おったわけです。それぞれ非常にいい話で、最後に本になっていました。

私も最初は、「アメリカ人に日本の学生のことが分かるもんか」といつてやっていましたのですけれども、彼らの話を聞いているうちにだんだん、学問的にこういうものを見直さなければならんと。思想統制とかそういうことでなくて、考え直さなければならんということ、彼らが帰った一年後に日本の学生指導で各大学で勉強した人たちのアソシエーションをつくりまして、自分たちで勉強する会を開いたりしました。それは日本の学生指導に対する非常に大きな影響でしたが、私が学生課長を一〇年間やっている間に、単なる勘と経験でやっているのではなく、なんとかこれを日本でも学問として定着させたい。そのために私が学生課長の四〇五年目のときに局長と相談して、重立った大学に学生指導の基本的な学問として、カウンセリングの講座と、グループ・ダイナミックスと、ユニバーシティ・アドミニストレーションの三つの講座を文部省がセットで講座をつくってあげるからあなたのところへ置きませんかという形で、東京大学と京都大学と九州大学に私は説得に歩きました。

そうしたら、あの予算の厳しいときに文部省があつちから講座をつくってくれるなんていうのは気味が悪いというのです。このままうっかりしたら学生取締りの手先として利用されるのではないかと三つの大学とも非常に躊躇されました。京都大学にいったときには、あそこの教育学部長がまだ高坂正顕さんでした。高坂先生は熱心に

これを受け入れようといわれたのだけど、評議会にかけたらやはり、そんな文部省のいいなりになってはいかんといってだめになった。

唯一九州大学だけが、カウンセリングとグループ・ダイナミックスの講座だけはもらいました。ユニバーシティ・アドミニストレーションというのは、これはやる人もいないし、やれそうもない。これは非常に変な目で見られるからだめですと、カウンセリングとグループ・ダイナミックスの講座だけを九大に置けたのです。それを土台として、大学の学生部の職員の現職教育みたいなことを数年間やりました。

しかし、残念ながら、私たちがあのときにアメリカ人に習うまでは一度もカウンセリングなんていう言葉は聞いたことがなかったのですが、その後、今はもう猫も杓子もカウンセリングですよね。私はそれから数年後にアメリカへ三ヵ月間留学させてもらって、アメリカ人はあれでドクターコースのプロフェッショナルトレーニングを受けなければカウンセラーになれないのですね。日本ではちょっと相談相手くらいでカウンセラーとかいっているからだめだと思うのです。そのときに、グループ・ダイナミックスという形で、学生の自治会とかああいうものも社会心理学の立場から集団としての一種の病理的現象が生じる。それをいかに指導していくか。これなんかは非常におもしろいと思いました。

文部省に入ってからのは話はまた別ですが、そういうのを定着させようとしても、あの当時の大学としては向こうから拒絶された。大體文部省が講座一つとるのは大変なんですがね。

伊藤 それはそうですね。それはもう痛感しています（笑）。

さて、どうもありがとうございました。ちょうど学生課長におなりになるちょっと前のところまで伺いましたので。

西田 文部省へ入るまでのことは大體これで一応一段落つけてよろしゅうございますね。

伊藤 はい、後でまた補充していただくことにいたします。

今度はいよいよ文部省の本番ですのでよろしくお願いいたします。しかし、今までのお話を伺って、非常におもしろかったです。

西田 そうですか。文部省に入ったらこんな血沸き肉踊る話はないですね。

伊藤 いやあ、きつとおやりになったのだと思います。お話を伺っていて、これは天城〔勲〕先生が西田先生をぜひとおっしゃった理由がよく分かりました。

西田 むしろ文部省に入るまでのほうが波乱があるでしょう。しかし、それが結果としてちっともむだではなくて、役所へ入って、普通の公務員として文部省だけでやってきた人の知らない世界をたくさん知っていますから。

伊藤 これも考えなくてはいけませんね。

西田 人間のキャリアというものを考える場合に、本当のエリートを養成する場合には、純粹なキャリアというものの設計をしたのではダメなのですね。むしろ波乱万丈のほうがいいのではないのでしょうか、そう思います。

伊藤 波乱万丈というのはつくってできるかどうかという問題があります……。

西田 私が自分史をつくりだした一つの理屈は、学校を出て兵隊をやって、それから火薬会社で火薬の処分をやって、民間会社をやって、大学の研究室に戻って、だめになって今度は学芸大学の先生をやって、それから文部省の役人をして、世の中の職業として違う分野をずいぶん見せてもらったのです。

伊藤 これを見ただけだと、例えば高桐書院の編集部とあるでしょう。これでさっきお話しになったようなイメージは全然浮かびませんでした。

西田 それには取締役業務部長になったことまで書かなかったので

すが。

伊藤 仮にそう書いたとしても、そこで会計学が云々という話にはならなかったと思うのです。ちっと想像ができなかった。

西田 たまたま私も理科の人間がやって、流体力学と会計学は同じだというのは経験した者しか分かりませんね。

伊藤 そうですね。ありがとうございます。また来月よろしくお願

西田 亀久夫 オーラルヒストリー

第3回

日時：2002年9月17日

14:00～16:20

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊 藤 隆（政策研究大学院大学教授）

小 池 聖 一（広島大学助教授）

所 澤 潤（群馬大学助教授）

村 上 浩 昭（東京都立大学助手）

■文部省学生課長として

伊藤 きょうからいよいよ学生課長時代ということなのですが、その前に、こちらに質問がございますし、所澤君からも質問がありますので、所澤君のほうをちょっと先に。

所澤 前回、大阪学芸大学ができる当時のお話が出てきたのですが、けれども、そのなかで教官の審査の話に少し触れられていたと思うのです。師範学校から大学に変わるときに、教官の資格審査を行なっていて、師範学校の場合はそれが非常に大変だったという話をあちらこちらで聞いたことがあります。なかには同窓会の雑誌に書いた雑文まで業績扱いにして体裁を取り繕ったとか、そんなような話も聞いたことがあるのですけれども、大阪学芸大の場合は先生がいらした頃はどんな雰囲気だったのでしょうか。

西田 師範学校というのがまだ旧制で残っておって、そこへ今度は学芸大学、二重性格ができたわけです。師範と大学が共存しておったのですが、身分としては私も最初に師範学校の教諭で採用されたわけです。天王寺師範学校の平野分校ということで。その当時は、学生を全部送り出してしまえば師範学校を全部廃止して、そして師範学校のなかで有資格の人を学芸大学で採用しようかという身分の切り替えの時期だったわけです。私が師範学校にいったときには別に師範の先生になるための資格はありませんでした。いきなりなっていました。私が審査を受けたのは学芸大学の助教授になるための審査。どういう書類を出したのかどうか知りませんが、これは書面だけで大学のほうが手続きをしてくれて、その翌年くらいに大学助教授というのをもらったわけです。師範学校のほうはむしろ、長年やってきた先生方の首を切るという話が進行中だったわけです。前

に申しあげたように、私はそのときに教職員組合の委員長をやっていました。師範を長年やられた先生方の業績といったら、ペーパーに書いたような論文はあんまりないにしても、長年の実績があり、実力を評価しなければいけない。そのために、首切りをする前に先生方の言い分を十分聞いて、本当に資格ありかなしかということとを審査する苦情処理委員会をつくってくれというのを大学にあって、学長のところで数名の先生が集まって、私どもがメンバーに入ってやりました。そして、そこで一人ひとり呼び出しているんな言い分を聞いたり、話をしたりして、何名かの先生は助かった人もおります。しかし、だめだった人もおります。

伊藤 だめだった人はどうなるのですか。

西田 それはもう、やはり失職でしょうね。かなり年配の人ですから。

伊藤 要するに、学校が廃止されれば……。

西田 学芸大学のほうへ身分が切り替わらんかぎりには、師範学校が廃止になれば自動的にそのポストがなくなるという格好です。だから、学芸大学へ切り替わる資格の有無を審査したという格好です。

所澤 先生は天王寺師範では教授だったのですか。

西田 旧制の師範学校ですから教諭です。

所澤 旧制の師範学校も昭和十八年から専門学校になっていますね。そのときにまた、教諭のまま残っていた人と、専門学校で教授というポストに就いた方と二通りになっていたということなのですが。西田 どちらでしたかな、師範学校の教諭だったんじゃないかな。その当時は確かに専門学校ではありましたね。教授とはいっていませんでした。

所澤 先生は直接資格審査がどういうふうに行なわれたかという側面についてはあまりタッチされていないのですか。

西田 旧制師範の人たちの身分を守るための苦情処理委員会をやっ

たというだけです。

所澤 先生の場合は東京帝大卒業ということでした。たぶん問題なしに助教に切り替わるということだったのですか。

西田 文部省の本部のほうで資格審査の機関があったのかどうかは知りません。そこへかけたのでしょうか。それで学芸大学助教授相当と認められたという格好です。

所澤 その頃のことなのですが、大学に切り替わると教授会がおかれるという形になったと思うのです。その当時の専門学校教授会と大学の教授会というのは権限がかなり違うと思うので、運営の仕方なんかがいぶん違ったと思うのですが、先生はどちらにも参加されていたのでしょうか。

西田 結局、二枚看板ですから、学芸大学の助教授になった頃も師範学校の授業もやっています。師範学校の先生だけの教官会議というのがありました。大学のほうは、大阪学芸大学天王寺分校、もう一つその下の平野分校というところで、分校主事というのが学長のような役割をしていました。主事のもので、教授会というようなことをいっていただけかな。あの当時の雰囲気としては、教授であるが、助教授であるが、助手であるが、みんな寄せ集めで会議をやるという格好で、旧制以来の「教官会議」というような名前で行っていたのではないのでしょうか。教授会というのは、天王寺のほうの本校ではよそから移ってきた大学出の先生方が集まった教授会があったようですけれども、私のおった平野では「教官会議」でみんな運営していたようです。旧制の師範のほうか学芸大学のものかというのは、事柄によって、つまり、学生の成績評価とか身分とかそういう問題を議論するときには、それが師範であれば師範の教官会議、大学なら大学と……。両方のカリキュラムが平行して進んでいますし、学生も入りまじっていますから。私は師範も教えているし、学芸大学も教えた、そういう格好ですから、師範学校が完全

に消えてしまうまでは、そのへんの区別ははっきりしていません。

伊藤 平行している時期がかなりあるわけですか。

西田 あるわけです。

伊藤 最後の卒業生が出るまでということですか。

西田 私は、最初は師範学校のほうの予科の学生の主任みたいなことをやらされました。師範学校のなかには予科というのがありましたね。そのうちに学芸大学のほうの物理の専任教員で物理のほうをもっぱらやるということになりましたけれども。しかし、この前申しあげたように、京都から通うのが無理だから泊り込んでいたら寮監をやらされました。寮にいてみましたら、師範学校以来の女子師範の女の子の寮でしたから、大部分の学生は師範の学生でした。しかし、そこには大学のほうの女子の学生もいたのです。

伊藤 いろいろ取り混ぜて混乱している時期ですから、どこでどういうふうに入り替わったのかというのはちゃんと年表か何かを見なければわからないでしょう。

所澤 たぶんその頃は教育委員会が結成される頃だと思うのですけれども。大阪府教育委員会。

西田 教育委員会というのは大学には関係ないでしょう。

所澤 でも、それ以前は教育委員会がなくて、県の教員の配置にある程度……。

伊藤 大学は関係ないんじゃないか。

所澤 いえ、師範学校の時代。

西田 県知事の支配を受けていたのですか。

所澤 いや、支配は受けていないのですけれども、県の教員の配置に対してかなり影響力があったと聞いているのですが……。大学に切り替わった頃に教育委員会ができて、県の教員の配置がほとんど教育委員会の権限で動くようになっていたと。

西田 教育委員会というのは結局、小・中学校の学校を持っていま

す。そこへ来る教員の人事の問題を教育委員会がいろいろ指図をしたり指導したりしたことはあるのかもしれませんが、そういう状況はまったく知りません。ただ聞いているところでは、同じ大阪学芸大学になっても、昔の天王寺師範と池田師範というのは淀川を境にしてお互いの縄張りをかちりとして、決してこっちの卒業生をこっちに採らなかつたということは聞いております。大学になっても池田分校と天王寺分校とはしょっちゅう喧嘩していて、平野は添え物みたいなものですからその仲介役みたいなことをしていた。三者並立でいつもガチャガチャやっていたね。だから、大学を一本化しようというときには、どちらに集まってもなかなかうまくいかんものですから、結局どちらでもないところに宿替えしようかという話がありました。愛知県でも愛知教育大学というのはその喧嘩のために昔の三河と尾張の県境へ結局つくったのです。大阪では淀川の上につくるわけにはいかんから……(笑)。

伊藤 それでは質問事項のほうにいきましよう。

西田 この質問事項をいただいたなかで、冒頭にありました「確認と追加」(①就職の相談をした一九四九年、日高氏は次官ではなく学校局長ではないか。②文部省に科学官として入省したとのことでしたが、視学官〔新制大学設置学生補導担当〕ではないですか)のところですが、日高〔第四郎〕さんのほうは、おそらく、年報に学校局長となっていればそうかもしれません。私ははっきり覚えていません。

それから、科学官として文部省に入ったというのは私の話し間違いで、議事録は視学官室に訂正しておきました。一九五二年二月のもの〔文部省職員録〕抜粋のリストには視学官となっているが、その後で履歴書に七十四年科学官というのは、これは本当なのです。一たん文部省を勸奨退職で辞めまして予備役召集でもう一遍戻ったときに、科学官室に戻ってきたわけです。ご存じのように視学官室

というのは文部省の教育行政関係の個別的専門職員を集めているところです。科学官というのは学術関係ですね。大学学術局といっているところ、教育と学術とありましたから。視学官室は大学局に属しているともいえない。要するに教員養成のことの専門家とか、初等・中等教育局のほうのそちらの教育カリキュラム関係の専門家は視学官室におられたようです。学習指導要領をつくるとか何とか。科学官というのは大学局へくっついて、学問分野でのアドバイザー。原子力の問題の専門家とか、政治学の専門家とか、そういう方がいらっていました。後の科学官室というのは間違いありません、本当です。前者のほうの昭和二十六年のこれは、明らかに文部省に入った瞬間は視学官室です。このあいだ間違ったのは、視学官室へいったのが昭和二十六年の六月頃について、二ヵ月おただけですぐ外国人の講習会へやられちゃったのです。視学官室におったのは正味二ヵ月くらいですから、四、五、六〔月〕と京都で勉強して。

伊藤 そのときは、視学官室に属してはいたわけでしょう。

西田 身分上は視学官室において、視学官という名前で月給をもらっていたのでしょね。

伊藤 いずれにしても視学官も科学官もスタッフではあるのですね、ラインではないのですね。

西田 ラインではありません。そういう職制上の監督関係とかいうものはありません。みんな局長の下には属していますが、専門職員というような格好です。だから、視学官などは戦前は学校へ出向いていて現場の教育のやり方に目を光らせていたりしたことはあったようです。そう聞いています。私らがいった頃はもう、視学官室はそういう元気のあるのはちっともありませんで、しょんぼりしていました。私は、そこへいったときにちょうどアメリカの教育改革の使節が来たときですから、そのほうの勉強をしろといわれて、一、二ヵ月おったら、京都のその講習会へいけといわれたのです。それ

で、講習会へいつている最中に学生課長を命ぜられたわけです。帰ってきたらもう視学官室を抜けてしまっ、いきなり学生課長。

村上 確認したいのですが、視学官におなりになったのは。

西田 大阪学芸を辞めて文部省へいったのは、確か昭和二十六年六月ではないですか。履歴書にはそれは書いていませんでした。

伊藤 課長からしか書いてないのです。

村上 ええ、そうです。

西田 履歴はいきなり学生課長になってしまっていますが、六月頃に学芸大学を辞めて視学官になって、そして翌年の三月に学生課長ですか。

村上 三月なのですが、正確には学生生活課長におなりになった。

西田 そうです、学生生活課長。学生生活課長になったのは、講習会にいつている途中で日高先生から、もうそのときはたぶん次官だったと思うのですが、今度は学生生活課長というのが来て、今度は文部省へ帰って来いと。

学生生活課というのは、実は戦争中は学徒勤労課とっていたわけです。勤労動員で学生をいろいろ動員していました。その人たちの身の回りの世話とか、食べ物の配給とか、健康問題とか、学生のウェルフェアのことをやっていた学徒勤労課が、学生の戦争中の戦争に対する動員と協力のための仕事をやっていった。終戦とともに、もう勤労動員をやるわけにはいきませんから、それを学生生活課に変えたのです。なぜならば、後でいろいろ資料で説明しますが、終戦直後から物凄いインフレで学生生活が困窮したわけです。今度は学生の生活を助けるということにもつぱら中心をおいて生活課にしたわけです。

三月になって、八月にそれを学生課に変えたというのは、いつてみて、確かに学生の困窮という問題の対策をいろいろ立てるのは大問題ですけれども、その当時から後で出てくる学生運動がだんだん

盛り上がってきたして、厚生ということだけ、学生の生活の保護というだけでは話にならない。もっと真正面から学生の指導という問題が出てくるだろう。しかも、覚えていますが、そのときに次官の日高先生が、「厚生というものは大事だから、一所懸命環境をよくしてウェルフェアを十分やってやれば学生がよくなるという考え方は間違いだ。もし人間に生活の問題の世話をしてその人間がよくなるのならば、それは教育ではなくて飼育だ」というのです。牛や豚を飼うのと同じだということです。最低の条件のなかでも最高のことをし、最高の条件を与えてもつまらんことをするのが人間なのだ。人間はそういう自由をもっているものだから、そこに教育の余地があるのだ」と、これを日高さんから懇懇といわれました。厚生だけ一所懸命やるのでは邪道だ。学生の精神的な問題の指導を併せてやるのが本来だという形で、後には厚生補導という言葉が使われましたけれども、そのときにそれにふさわしいものとして、学生補導課ではなくて学生課にしようということにしたわけです。

伊藤 では、生活の部分も含めてということですか。

西田 そうです。だから学生課の担当は、確かあのときの文部省の職務規定には、学生の厚生補導に関する事務を司ると書いてありました。厚生と補導。

伊藤 少し戻りますが、先ほどの視学官室ですが、視学官にはやはり先生と同じように各大学あたりから連れてこられた方がたくさんいらっしゃったわけですか。二枚目（『文部省職員録』）をちょっと見てください。ここに名前が書いてありますが。

西田 ああ、かすかに覚えています。工学関係、経済関係のこれはカリキュラム関係ですね。この麓（保孝）先生というのは私が三高のときの先生です。この人は留学生問題を担当しておられました。

伊藤 このときに留学生在がおりましたか。

西田 外国人留学生はまだ大々的に受け入れられる段階ではなかつ

たのですが、一番問題になっておったのは日本在留の朝鮮人の学生の扱いです。彼らは日本人として今まで日本育英会から奨学金をもらっておったのですが、敗戦とともに日本人ではなくなったわけです。だから育英会から金をもらえなくなってしまった。そして今度は、では留学生かと思ったら、留学してきたわけではない。昔からおるわけです。どちらでもなくなってしまう。この扱いをどうするかというのは、これは別途あとのほうでまた申しあげたいと思いますが、これに対する特別な対策のことに私はかかわりがあって、そのために朝鮮人に対する奨学金だけを出す団体を育てて、それができあがりました。新宿の西口にあるのです。年間数億円の収入をあげて、朝鮮人の学生だけに奨学金を出している。私がたまたま朝鮮生まれなものですから世話をして、そういう団体を育て上げたわけです。麓先生はその団体の顧問なんかをしておられました。あと野村正二郎さん、名前は覚えていません。西田亀久夫、学生補導担当と書いてありますね。上の人（宮畑寅彦体育担当官、森屋百合子女子教育担当官）も名前はかすかに覚えていています。

伊藤 数ヵ月しか一緒にいらっしやらなかったわけですから。

西田 ええ、正味二ヵ月くらいです。

伊藤 大体各大学あたりから来たのですか、それとも文部省のなかでの人事ですか。

西田 文部省の内部の方で少し古くなった人を専門職としてこういうところにおいたというような感じですね。プロフェッサーのような感じの人は、このなかでは麓先生と工學部の佐藤静一さんかな。

伊藤 先生は視学官として就任されて、文部省というのはそういう大学から引き抜いて人を連れてくるというのはこの当時しょっちゅうやっていたのだらうと思いますが、文部省生え抜きみたいな人たちの反応とか、そういうのはどうなのでしょう。

西田 私がいったときですか。それは、後から考えれば、文部省へ

来て半年ぐらいでいきなり課長になるなんていうのは、文部省の一般のキャリアの人からいうと、「あれはなんだ」とおそらく思われたらと思うのです。こっちはそういう役人の雰囲気というものを全然知らずに、先生が来いというからいったので、俺がいきたくていったんじゃないやと（笑）。ですから、私はしゃあしゃあとしていました。そんなに気にしていませんでした。その点ではざくばらんに付き合って、結局、学生課長だけを十年やったわけです。「君はあんまり長くなるから、今度はほかのポストにかえたいと思うが」といわれるから、「やめてください。私は学生課長をやれというから来たので、もう要らんというのだったらまた大学へ戻してください」といったのです。「そんなわがままをいうな」といって、それでとうとう庶務課長へかえられちゃったわけです。これは役人の普通のステップで、庶務課長というのはその局のなかの総括課長で一番上席ですから、それへかわって、その次に今度は官房へいっちゃったのです。そういうコースを私は夢にも思わなかった。まして、妬まれたり、変な目で見られたりなんていうことを夢にも思いませんし、しかも（昭和）二十二年頃からだんだん学生の騒動が絶えなくなってきました、文部省の門前には学生デモがしょっちゅう押し寄せて、学生課長なんていうポストは誰もやりたい人がいない。たぶん、貧乏くじを引いていると思われた。

学生課長というのは非常に特殊なものです。同じ大学学術局のなかにあり、ほかに課が七つか八つありますが、純粋な学術関係は別として、ほかの大学課とか教職員養成課というのは文部省の官庁でありますけれども、ほとんど国立大学だけを自分の直轄学校と見ているわけです。金を出して、養成して、教員の人事もやっている。私立学校、公立学校に対しては、これは間接的なアドバイスとかで、それほど文部省に強い監督権はありませんから、国立大学のための大学局みたいになっているわけです。国立学校だけは、予算をもら

わなければいかんものですから、来たらみんなペコペコしていますね。どこの先生も懇懇丁寧にやって来ます。ところが学生課は大学に対して何も予算をやっていないわけです。国公立の全部の二百何十万人の学生の生活全部を抱えているのは学生課だけなんです。

伊藤 私立大学もそうなのですか。

西田 私立大学も。国公立大学の全部に対して、やることというのはほとんど同じなのです。学生の奨学金というのは全部同じでしょう。それから、つまらないことですが、学生課の学割。あれは学生課が担当しているのです。私らがあの当時の国鉄と談判して、あの当時、学割は半額だったのを国鉄が二割にするというので、東京駅のままで大喧嘩しにいったことがあります。あれを確保して学割をもらいますと、学割の割引証というのがありますね。お使いになったことがあるでしょう。あれは国鉄のほうで印刷してくれて、何百万枚というのをごそと文部省の倉庫へ持ってくるのです。それを学生課が各大学の学生数に応じて運送屋に頼んで梱包して、国公立の大学へ全部送りつけてやるのです。それが窓口で皆さん方がもらうものです。おもしろいのは、在籍学生数に応じてやるから学生数の報告に来いというわけです。その各大学から来る学割をもらうための学生数の報告が文部省の統計のなかで学生数のもっとも正確な統計なんです。

伊藤 これは水増しということはないですか（笑）。

西田 文部省の統計課が毎年指定統計をやりますが、そんなものよりも正確。これは現ナマをやるのと同じですからね。少なかったら学生が怒るのですから、それが一番数が多いのです。指定統計より大体二割ぐらい多かったですね。

伊藤 本当なんですかね（笑）。

西田 学生課はその点では国公立大学と全部同等につながっている。奨学金の問題がそうでしょう。また後で出てきますが、学生の

健康問題、それから就職問題。大学生の就職は、職業安定法によって労働省から離れて文部省が担当しているのです。そして、各大学は職業安定法による無料職業紹介所としての届出を出して学生の斡旋をしているのです。法令としては職業安定法のなかに入っているのです。その統括は、大学生については労働省がやれない、文部省でやってくれと。本人の専門と中身を見てやる就職斡旋だから職業安定所なんかができせんという形で文部省が全部やっているんです。これも後で出てきますが、凄い就職難のときに、日本じゅうの国公立大学の学生の就職状況を、卒業前の九月頃から十月頃、十一月、三月、卒業後の六月までフォローアップしてサンプル調査ですつと絶えずやって、いまだこまで来ているという調査をしました。今年も就職難だといっていますけれども、一番ひどい「昭和」二十八年は卒業のときに就職者が三〇パーセントでした。凄いことです。この話はまた今回か後で申しあげますが。だから、就職問題も全部、その対策本部をつくって日本じゅう駆け回ってやるのも、私ども学生課がやったわけです。

■学生課と大学の管理

伊藤 わかりました。では、学生課のなかにやはり係が幾つかに分かれていますか。

西田 このあいだ、何人おったかなと思って昔のアルバムを見たら、職員は大体一七、一八人ですね。

伊藤 ちゃんとした。

西田 学生課の事務官です。

伊藤 そのほかには。

西田 そんなにおらんですよ。一つの部屋のなかに係が四つぐらい

あるだけです。

伊藤 それに、例えばタイプピストとか。

西田 タイピストもみんな入って一七、一八人です。一つの係が四、五人ですからね。

伊藤 どういうふうな係の分担になっていたわけですか。

西田 庶務係というのが総括です。それから補導係というのがありました。それから厚生係、就職の係もありました。そんなのが分かれておるだけです。

伊藤 それぞれに係長がいるのですか。

西田 それぞれに係長がいます。それで課長補佐が一人おるだけです。私はその学生課の仕事をする点で、「国公立全部に平等のサービ」と行政上のつながりがある。学校の現場を知らないやつは学生課では務まらんから、係長は全部大学の現場の経験者を引き抜きた」と局長にあって、私が東大と教育大と九州大から優秀な係長を引き抜いてうちの係長にしました。この連中が後で文部省のなかで今度はのびていて、大学の事務局長なんかまでいったのがおります。これは人事としては間違っているなと思います。学生課の通達というのは、大学へこうしてくれといったときに、その通達をもらった現場の人がそれを受け取ってどれだけ苦労するかということが分かる人間でなければ通達を書いてはいかんと。無理な注文ばかりしてね。学生運動が暴れているときですから。そういう点で現場からとったわけです。

伊藤 通達はわかりますけれども、それは国立大学に対する通達ですか。

西田 いや、国公立立同じですよ。

伊藤 みんな一緒ですか。

西田 学生問題は同じです。国立だけがどうということはありません。後で「学生白書」をお目にかけますが、騒動を起こすのはどこ

も一緒ですしね。むしろ全学連なんていう組織は、国公立を網羅しているわけでしょう。向こうも団体がやっているのですから、こっちも一体でやろうと。

伊藤 そうですか。そうすると、文部省の通達として私立大学にもいくわけですね。

西田 いくわけですね。文部省の設置法で、結局、大学の運営について指導と助言を与えるということしか書いていないですね。監督権はないわけですから。それでもまあ、戦前からの慣習で、文部省のいうことは一応皆さん慇懃な顔をして聞いてくれるわけです。しかし、中身を納得させなければいうことを聞きませんよね。

伊藤 まあ、学割なんかは向こうからいつてくることでしょうけれども……（笑）。

西田 恩恵があるのは学割だけです。

伊藤 でも奨学金もあるじゃないですか。

西田 あれは育英会がやっていますからね。

伊藤 でも、育英会の監督もここがやっているわけですか。

西田 所管の課です。育英会予算というのは文部省のなかで国立学校予算の次に大きい予算です。何十億という。だから予算折衝とかああいうのも非常に大きな仕事でした。

所澤 その当時大学に通達を出す場合ですけれども、各大学、学長に出すのかもしれませんが、学生部というのがあるということ念頭においてやっているわけなのでしょう。

西田 学生に関することがいけば、学長さんがごらんになるかも知れないけれども、すぐ学生部へ下げ渡しになって、「よきに計らえ」といわれて（笑）。そして、通達というのは局長名でしか出せませんから、課長通達というのはありません。これはただの手紙です。ラブレターみたいなものですよ。

伊藤 そういうものもあるわけですか。

西田 あります。アドバイスとしていろんなことを専門的な点で。

伊藤 課長名で。

西田 はい。ある特定大学の特定の問題が起きたときに向こうから意見を聞いてきたら、こちらを専門家と思って尋ねてくればいってあげるわけです。今でも覚えていますが、ある大学で、「全校学生がなんぼいっても聞かん。全学ストライキをやる。どう対処したらいいか。断固処罰をするか、何か方法はないか」というから、「あなたに度胸があるのなら、一遍学生大会を開け。そこへ学生部長が出ていって、自治会の委員長と壇上でパネルディスカッションをやりなさい。ストライキは不合理だ、おまえたちの運動は間違っている」ということをそこで自治会の委員長と議論して、みんな学生に聞いてもらって、それで学生がやはり学校の言い分よりも自治会のいうほうが確かだというのなら、ストライキをやるのならやらせたらいいんじゃないか。そのかわり、ストライキを何ヵ月やっても学校は知らん顔をしている。先生は、授業をやってくれというまでは授業をやらん。これはストライキではないですよ。学校が授業をやらないのだから卒業が何年遅れても知らない、それだけ学校として腹を決めてやったらどうですか」といったんです。「そうですね」といったんですが、とうとうそれをやる学校はなかった(笑)。学生のほうにべこべこして、ストライキをやめてくれ、やめてくれという、そんなばかな話があるかと。

伊藤 東大なんかでも、大学本部と学生部というのはまったく違った存在みたいですね。人員構成もだいぶ違うような感じで存在しておりますけれども、各大学ともやはりそんなものでございますか。

西田 学生部というのは歴史が大変悲劇的でした。戦前は文部省に学徒勤労課があったように、学校の現場ではやはり、戦時体制なり軍国主義的な全体の雰囲気の中では、学生のなかに反国家的ないろいろな運動が起こることを抑えなければならぬ。しかも、私が

旧制高等学校へ入ったのが昭和九年ですね。その数年前ぐらいまでは、非常に旧制高等学校から大学にいわゆる共産党のマルキシズムの運動が浸透して、それによる学内の騒動がいろいろありました。三高でも寮をのっとったストライキがあったそうです。あとに三高の先生は寮へ乗り込んでいって学生と徹夜で議論して、彼らをとにかく処分せずに、説得でその問題を解決したという話を聞きました。当時の文部省の学徒勤労課とかそういうものは、学生のいわゆる不穏な行動を抑えるという意味で、あの当時思想取り締まりだといわれたわけです。大学の現場でも「学生主事」というのがおりまして、その人が学生から見れば警察の手先みたいなもので、警察の“特高”と同じような目で見られたわけです。ですから、大学の職員でも学生部の仕事をやりたがらないわけです。あれは学生の取り締まりだと、そういう目で見られるわけです。

伊藤 確かにそういう面はあるのですよね。守衛さんというのは学生課の学生主事の下にあって、いろんな情報収集や何かもやっていたはずですから。

西田 一般の大学職員のなかでも、いわゆる庶務係とか会計とか人事とかというのは正当な事務職員なわけです。学生部というのは、大学の事務局と一般的な人事交流はないのです。学生部の閉鎖的な組織の中でやっていく。そこで幾ら育っても学生部長にはなりえないのです。どこの大学でも部長というのは教授のなかから。

小池 そうそう、教授ポストなんですね。

西田 教授会が選んだ人をもっているわけですね。なぜならば、そこに至ると学生の指導というのは教育だから最高の責任者は教官でなければならぬという議論が出てくるわけです。トップは先生で、下に事務職員がおる。その先生というのは大体、よほど熱心に学生の世話をしてくださる方でも、二、三年やっていたらうんざりする。学生から突き上げを食らって精根尽きるわけです。私は一〇年おり

ましたから、少なくとも国立大学、私立も主なところの学生部長と非常に親しくなりました。お人柄も、大学のなかでは選ばれた非常に立派な方がたくさん出てこられた。おもしろいのは、農学部出身の学生部長というのは一番立派な方がいました。ちょうど作物を育てるというのは年単位でしょう。一番だめなのは経済とか文学の先生。議論がすぐ出てくるのです。農学部の先生はそんな短気なことをなさらないわけです。学生との信頼関係も農学部の先生は立派でした。

伊藤 戦後すぐの学生課はやはり芋をつくったりというふうなことを一所懸命やっていたと、東大の学生課の人たちはいっていましたけれども。

西田 戦争中ですか。

伊藤 戦後も。とにかく芋を農園でつくって、大学へ持ってきて配ったとか、そういう話を盛んにされておりました。

西田 みんな腹が減っている頃だからね。

伊藤 実際に西田先生がおつきになる頃には、それほどひどい状態ではないと思いますけれども。

西田 この前申しあげたように、私が終戦直後に大学の嵯峨根先生の研究室に戻ってきて。

伊藤 その頃はひどいでしょう。

西田 昭和二十一年頃です。それはもう、物理教室で研究どこではない、腹が減ってしょうがないから、川越のほうへリュックサックを持って芋を買いにいった。そんな時代でした。

伊藤 それは「昭和」二十六、二十七年になりますとある程度落ちてきてきているのではないですか。でも、まだお腹が空いている時期ですね。

西田 それは大変です。

伊藤 まだ外食券があった時代ですから。

■『学生運動白書』(「教育の問題としての学生運動」)について

西田 きょうのこの質問書の中に『学生運動白書』について話してほしい、というのがあります。これに関連して、その当時の学生問題の背景をよく知っていただいて、しかも文部省がどういう対応をしたのか、その基本的なことをご説明するのに――、その当時の『学生運動白書』(「教育の問題としての学生運動」)はちょっと今では手に入らないと思うのですが、私はたった一つ自分の記念で持っていたのです。これは昭和二十七年でしたから、五〇年前です。

伊藤 僕が大学の二年ですよ(笑)。

小池 対象ですね(笑)。

西田 これはうちの学生課のタイピストのお嬢さんが打ってくれたやつで、ちょっといま読むに耐えんから、このあいだ一週間かけて全部打ち直しました。ですから、これをちょっとお目にかけて、その要点だけでも。

伊藤 打ち直されたのですか。

西田 ええ。タイピストの方にも念のためにあげておきましょうか。

伊藤 そうですね。

西田 これを昭和二十七年に発行するといういきさつは、私が学生課長になって翌年二十七年の三月……。

伊藤 先生、その現物を見せてください。

西田 古色蒼然たるものですな。半世紀たつとそれぐらいになるのですね。その当時はざら紙ですものね。

所澤 それもコピーさせていただいたほうがいいですね。

伊藤 そうですね。

西田 これは貴重なものですよ。おそらく文部省の文書課にも残っ

ていなかもしれません。言葉づかいも、「される」というのを「せられる」というような、オーソドックスな言い方ばかり書いています。

伊藤 それをそのままの形で。

西田 これの文書をそのまま私のパソコンでワープロ式のやつを打ったわけです。だから、文字もできるだけ変えないようにしたつもりです。

伊藤 まあ、文字はしやうがないですね。今のワープロにない字もありますから。いやあ、懐かしいような感じがする。これは紙のにおいがありますからね。

西田 それをご説明しながら当時の背景を申しあげようと思うのですが。一番に、二十七年の三月に学生課長になりまして、二ヵ月たった五月一日が有名なメーデー事件です。

伊藤 はい、私もいつておりました。

西田 あなたも参加されたのですか。

伊藤 いや、逮捕はされませんでしたけれども（笑）。

西田 あそこへいかれていたのですか。そこへ今の全学連の学生団体が一緒になって労働組合なんかと血を流すような大騒動をして、アメリカの自動車を焼いたりしたのですね。その大騒動があって日本じゅうが愕然とした。特にそのとき内閣で、学生運動がああいう破滅的な状態になってきたと。あのときの文部大臣が天野貞祐さんです。それで吉田内閣ですね。吉田茂さんという方は学者が好きで、議員でもない天野先生を京都大学から引っ張って文部大臣にした。ところが、あの騒動があったときに閣議で、閣僚の中から大臣に、「文部大臣は何をしているんだ。文部大臣はどういう責任をとるのだ」というような凄い抗議が来たので大臣が非常に困られた。総理の吉田さんが、「天野君、文部省の立場をちゃんと釈明するよいうな文書をつくったらどうか」と天野先生にいわれた。これは吉田

さんが助け舟を出したんです。大臣が帰ってこられて次官にいわれて、それが大学局長へいって、学生課長に（笑）。学生運動の白書のようなものをつくってくれというので、湯河原の保養所というところがありまして、そこへ確か三日か四日泊り込んで私一人でこれをやったのです。だから自分では非常に懐かしい。隅から隅まで私が全部考えたものです。誰と相談したものでもない。

伊藤 これは「文部省」と書いてありますね。

西田 文部省です。文部大臣の立場として、文部省としての学生運動に対するステータスをはっきりさせようという形の文部省のアナウンスメントです。

伊藤 ということは、西田先生がお書きになったけれども、大臣まで上がっていったということですね。

西田 もちろん。これは局長、次官、大臣までいって、大臣は閣議でこれを報告されたのです。それで収まったといえは収まったのです。二十七年五月に騒動があって、七月に出してあります。白書という名前ではなくて、「教育の問題としての学生運動」です。あの当時の騒動を見ると、これは治安問題、要するにいかに学生を取り締まるかという問題で、みんな頭がカッとしているのですが、文部省のステータスは、教育の問題として、学生問題をどう捉えるかという形で、これを書こうとしたわけです。

ですから、最初の内容のところでは八つの項目を挙げておりますように、まず学生がどういような社会で育ってきたか。その世の影響を受けて学生がどういような特質を持ってこの運動をやったのか。最近の運動に実際に学生はどれくらい参加しているのか。一体学生運動の問題、問題というけれども、教育の問題としては何が問題なのか。それから、学校当局はどうしているのか。大学というものの自体に何らかの改善が必要な点があるとすれば何だ。文部省はどうだと。最後に、一般社会の理解と協力を必要としていることは何

か。こういう格好でやろうとしたわけです。

その前文の最初の二、三行を見ていただくと、「これを単純にある政治的党派の活動の一環に過ぎないと考えることも、あるいは、これを青年期に特有な一時的興奮現象であるとする見方も、ともにこの問題を正當に評価して適切な方途を発見するための立脚点ではない」と。どちらもだめだ。だからこれから文部省の見方をいうというので次の本文に入ったわけです。

あとポッポッと飛ばしてごらんいただきますと、一ページ、学生が育ってきた社会環境という点で、彼らが小学校時代にどんな時代を送ってきたか、中学校時代はどうだったか。実にその青年期としての自覚がない頃に敗戦を味わってひどい目にあったのだ。何も信用しなくなってしまうのだということが、この(1)(2)(3)(4)に書いてあるわけです。そして、その次に五番目として、社会的な困窮というのが二ページに出てまいりまして、ごらんのようにその当時に文部省が持っておった統計として、全部保護者から収入をもらっているのは三割ぐらいだ。残りは皆アルバイトをしなければならん。しかも、そのアルバイトを希望したうちの就職できるのは三分の一ぐらいだ。一カ月に十日以内のアルバイト日数の者がこうだという点で、学生の欠席日数の四分の一は、このアルバイトのためだ。

こういう環境から生まれた学生というものはどうなるかというのが三ページに書いてあります。「絶対的な権威とか国家」、そういうものに対しての「幻滅の悲哀」という言葉は、そういうものを信用しなくなると。次の四ページのほうへ移りまして、社会秩序に対するいろんな不安から、一切のものを自分たちが拒否するという格好になってきた。こういう格好で学生が生まれてきた状況を見て、次に五ページです。

今度は学生運動の特質として、そこに(1)(2)(3)がありますが、例えば最初の(1)のところでは、学生運動は学生の手による学生自身の防

衛だ。二番目に、一切の外部的な規制作用を排除した自治活動を基盤としている。三番目のところに、既存の政治勢力に対する反抗という傾向が特徴だと。次の六ページにまいりまして、学生運動は国際的なつながりを求めている。(5)のところに、一般学生は民主的な政治能力も非常に貧困だから、少数のリーダーが独善的に指導するとみんなそこへついていくと、こういう特徴を持っている。

その結果、次の運動の発展経過として、昭和二十年から二十二年の間に、各大学の組織がだんだん地域的に広がっていった。京都学連、都学連、九州学連、これは二十年にできているわけです。二十一年に東大の共産細胞。関東の学生自治連とかというのは二十二年までにできてる。この質問のなかで、日高先生が私に文部省へ来いといわれたときに、先生は学校局長としてこの背景を見ておられて、どんどん学生の運動が広がっていく、こういう点の危機感を持っておられたと思います。七ページの(2)に、昭和二十三年から二十五年にかけては、今度は全国的な規模にこれが広がっていった。授業料値上げ反対、教育復興闘争という格好です。このなかで画期的なのは、昭和二十三年九月に全学連という全日本学生自治会総連合ができたわけです。そして、全学連が二十四年から、教育防衛闘争とか、大学管理法反対とかという総括的なスローガンを掲げてやりだした。八ページのおわりのほうの(3)で、二十六年以降というのは今度は非常に政治的な問題が集中してきた。いわゆる共産党のほうの階級闘争の戦線と統一戦線を張って、そこに安保条約反対、平和擁護闘争という格好で、米人教師のボイコットとか、そういう格好で出てきました。それが二十七年の最後の五月メーデー事件として爆発したわけです。

そういう運動の一般的傾向としましては、①平和と独立のための闘い、②経済的要求の闘い、③民主的権利擁護の闘い、④文化闘争と、こういうような格好で非常に特徴的な活動が出てきて、このと

きにはもう、おまわりさんに対する喧嘩をしかけるというのが非常に厳しく出てきまして、あちこちで乱闘騒ぎが起こるようになってしまった。

一一ページには、実際に学生が参加しているのはどうだという形で、全学連の統制によってどの時期に何人ぐらい動員されたのか。これは各大学からのいろんな報告を集計したもので、大雑把な人数です。これが一二ページ、一三ページに出ております。一三ページの「B・運動の実際概況」のところで、各大学の自治会とも在籍学生数の三分の一か二分の一が出席の定足数だといっていますけれども、実際はなかなかそれだけ集まらないで、比較的少数の学生による決議という格好で動いているわけです。

伊藤 一遍成立する数が集まるとその会議は成立して、それからほとんど人が減っていても、その会議はそのまま成立しているというスタイルでしたね。

西田 ええ。ではそれを各大学からつかんだ範囲でいけば、東大でやっているときに全学生数の比率からいえば、三パーセントか八パーセントぐらいだと。都立大が多いほうで、五から一三ぐらいだと、こういう格好でした。全国的に見ると、今度は学生数のところで見ると、四年制大学で学校数としては二五パーセントぐらい、学生数にすれば一・五パーセントぐらいだった。東京都でこうだと書いてあります。

一五ページに、「何が学生運動の根本問題なのか」という形で、ここに問題の所在を文部省の見方としてはそれを取り上げた。これを治安問題という形ではなくて、教育の問題としてどうとらえるのかと。したがって、ここで一五ページの始めのところに書いてありますように……、こういう運動を展開する要素が、広くかつ深く、根深い背景があるということの事実をはっきり認識しなければならん。けれども、それらの運動が正当な根拠によって展開していると

いえるかどうか、これは厳密に区別しなければならん。効果的な方法は、彼らが非常に根深い一つの根拠の上で動いているということと、一つのやり方の正当性というものを評価する二つの観点を十分考えていないと、それをやらないと、単に弾圧をしたり感傷的な無為無策におわるだろうと。

そこで、運動の傾向としてその次に書いてありますように、運動をやるときに、結局、彼らが目的とするところから虚偽と偏見に満ちたいろんなことを勝手にいっているというようなことをいっています。一六ページのところに、「たとえば、どのような客観的な根拠によって、一国の政治機関が売国的卑劣漢の集合であり、学生を戦争の道具として、私利を図らんとする非人間的な階級が存在し、住民登録を徴兵制準備の陰謀であるとするがごとき主張をなし得るであろうか」と、そういうはっきりした根拠とか主張というものが、何なんだということをいっているわけです。

(2)のところに、これが文部省としてその後の学生部長会議などでよく問題にしたところなのですが、一体学生自治会というのは何だと。それが多数決である決議を出したら組織の構成員に指令する権利はどこから生まれてくるのか。個人の集合体において、その自主的な判断と行動が自由な場合においてのみ団体の意志が意味を有するので、それを一方的に決議によって個人の行動を規制するという根拠はどこからあるのか。

後で申しあげますが、学生たちとその後いろんな研究セミナーをやりましたときに、私らがこれをしょっちゅうぶつけたのです。多数決というのは戦後民主化で非常に入ってきましたけれども、大勢の人の決めたことに皆が従わなければならないという理由がどこにあるのだと。つまり、憲法によって集会結社の自由というものができ、表現の自由ができた。結社の自由というのは、ある団体をつくる自由があるとともに、団体に入らない自由があるはずなのです。とこ

ろが、学生自治会というのはその大学に入ったら自治会に入ったという届出をしなくても全員が自治会員になってしまうわけです。包括加入というそういう制度はどこに根拠があるのか。本学の学生になった者は全部自治会員だという、個人の意志にかかわらず団体のメンバーになってしまうという根拠は、「この自治会というものが学生の自治活動によって教育的な成果を身につけるために必要だから、本学の学生は全部自治会員たるべし」という大学の意志がそこにあるはずだ。したがって、そういう根拠なしに、ただ自治会というものは結社の自由から出てくるのだという理屈で、個人の行動を拘束し、ストライキを決議したら学校へ出てはいかん。出るやつはけしからんというようなとらえ方は、どこから来るのかということを真っ向から議論しているわけです。非常に論理的には難しい問題で、戦後の多数決議論のときには学生たちとよく議論しました。「自治会が決議によって君の首を絞めろということを決議したら、君はどうするのだ」といったら、「いや、それは基本的人権に反するからいけません」「じゃあ、学校で勉強したいという人に授業に出るなと強制する権利はどこからくるのか。それは人権に反しないのか」と、そういうと学生は困っちゃうわけです。「それは多数決でしょう」というようなことでとまっているわけです。生ぬるい問題のようですけれども、そこから議論していかないと学生運動の問題が出てこないわけです。

一七ページの真ん中頃に、「集団の圧力によって目的の実現を図ろうとすることは、暴力と同様に不合理であり、人間の弱さのあらわれにすぎない」というような言い方をしております。

運動の形態としては、一八ページに、今のよう包括的加入というのでは、自動的に学生は自治会員に全部なっていくという根拠はどこにあるのか。それは大学というものの自身の教育目的と不可分の問題で、大学自体が、それに対しての教育指導上の責任を持っている

るということと不可分なのだということを強調しているわけです。それに対して、一九ページには全学連からどんな指令が出ているのか。そこにありますように、何月何日にストライキに入れ。第何波で国会デモを行なうというようなことをいっているわけです。

一九ページのおわりから「教育上の問題点」としてあがっておりますことは、アメリカ人の人たちに私どもが最初に習ったいろんな学生補導の理論の問題がそこに出ております。つまり、学生がきわめて不自由な状態のなかでいろんな心理的な欲求不満の状態に陥っている。そういった人たちの抑圧された反動的な欲求阻害の状態から生まれてくるものに対して、教育はどう取り組むかという問題が一つあるということがそこにあります。二一ページには、任意の集団が活動する能力を持っているときには、その集団そのものが本当に民主的に運営されるためのリーダーの育成というのが大事なので、これを学校自身が教育訓練の問題として考えていくべきではないか。そうでなければ、一つのグループというのが社会心理学的に病理現象を起こす。そうすると、ごく少数の人間が全体を振り回すというようなことが起こる。これも教育上の問題だということをいっています。

二二ページには、今度は政治問題として学校の行なう政治教育。この政治教育という問題を、私はここでいろいろ書いたのです。私が文部省を辞めるまでに考えたことですが、初等、中等、大学を通じて文部省の教育プログラムのなかで一番欠けているのが、政治と宗教、それからセックス、この三つについてはほとんど教育でまともなことをしていないと、僕は思うのです。これは僕の個人的な意見ですが、政治学というようなものを一応教科として習ったとしても、社会科学として習ったとしても、人間が集団のなかでいかに自分の個人というものを生かし、全体の調和をはかりながら行動していくかというきわめて実践的な教育の問題ということを考えますと、

これは学校の教育計画のなかでほとんど十分取り上げられていない。教育基本法の中でも、特定の政党を支持したり、反対する教育をしてはいかんというネガティブなことをいって、ポジティブなことをいっていないわけです。それから、宗教教育も特定の宗教教育をしてはいかんを書いてある。だけど、宗教に対する基本的なものの見方というものも、本当の意味で教えていない。だから日本人は無宗教だという悪口をよくいわれますね。セックスの問題もそうですね。これも一種の興味本位の議論はございますし、性病予防の話くらいはあるかも知れないけれども、男女のセックスというものに対する基本的な認識というものを深めていくような教育というのは、ほとんど教育計画のなかにはないのではないか。しかも、これが人間の根源的なものを一番動かす大きな問題なんですよね。そのことが大學生のこの政治教育の問題でもあると思いますが、私はそういう感想を持っています。

二三ページは、学内秩序という形で学校がやむをえず処置をする。しかし二四ページに、厚生補導の任にあたる人々が真っ先に学生の中に飛び込んで報いられない仕事をやっていて苦労しているということをしきりに強調しているわけです。大学の人は研究者としての誇りは持っているけれども教育者としての責任感というものが本当にあるのかと、よくいわれる問題もそこに出ております。

全体的な感想ですが、二七ページのところに、「社会正義の情熱が、人間的な弱点と結びついて、戦争状態をまず人間の心の中に巻き起こすことを防止するためにも、本来人間性に信頼を置く良心的な大学教育の積極的な協力が、まず学生に対してなされなければならない」ということをいっています。

あと、教育行政の立場、その他は文部省の立場をいっているわけです。文部省は大学を指導・監督する権限は持っていないということと。

最後に、社会的な理解と協力を求めたいといっております。教育の立場に対する理解と協力を求めたいというのが三三ページのところにあります。今頃読んでみると少しセンチメンタルなのですが、「直情的な正義感から、激しい政治運動に身を投じた学生は、大正以来数限りないが、生まれながらにして反社会的であり、終生反逆をこととする者もまた希である。しかも、これらのなかには比較的优秀な才能を有する者も少なくない。一時的な反逆を理由に、終生社会人としての立場を回復できないような状態に陥れることを、教育者としては、世の父兄に代わって防止しなければならない」と、これが教育の立場だという言い方をしているわけです。

■学生との対話と大学紛争の処置

西田 これでも思い出しますのは、全学連のかなり初期の時代の委員長で学習院の香山健一がおりましたね。彼とはその後いろいろな形で接触して、文部省の会議のときに何かで会って、「先生、長らくごぶさたしております」なんて話をしたことがあります。西部邁氏なんかも、今はずいぶん逆の、左に対する厳しい批判者になっていますが、駒場の学生課長なんか彼にずいぶん苦しめられていた。そういった者はまた別のどこかでリーダーシップをとっているわけですね。あれだけこの紛争があって、私らが〔昭和〕二十八年にこれ〔教育の問題としての学生運動〕を出して、その後、安保条約反対、破防法反対、そういうのがずっと進んでいった。私の感想としては、私が学生課長をやめる三十六、三十七年頃までは、まだ学生と真正面に取り組みあって話をすれば、理解をされ、いろいろな学生に対する指導の効果を期待できるような状態だったのですが、三十六、三十七年以降ぐらいからは、例の全共闘が出てきた頃から

一種の発狂状態ですね。それから、学生補導の問題からはみ出してしまったような感じがします。最終的な状況は昭和四十年頃まで続くのですが、例の東大の安田講堂の焼き討ちとか、あの段階になりますと、ここでのような学生補導の問題ではなくなってきたんです。

いまだに思うのですが、あれだけの長い大学紛争とゴタゴタがあって世の中を騒がせたけれども、あの当時に関与された大学当局者とかいろんな人がおられますが、あの大学紛争というのは何だったのだということをもとに研究発表した人が一人もいない。ほとんど当時の関与者はあのことに触れるのはいやだという感じでしよう。東大の加藤「一郎」さんでも何でも、その後、黙して語らずです。よく新聞記者が、「西田さん、あの学生運動が収まっちゃったのはどういうわけだ」というから、私は、「人間というのはいつまでも腹を立てることはできない。それしかないだろう」と。だから、イデオロギーの何とかというよりも、やはり動物社会の社会現象みたいな感じがするのです。日本であれが起きたときにアメリカ人の指導者が来ています、彼らはメーデー事件を見ているわけです。アメリカ人はなんとも理解できないというのです。どうして日本の学生はあんなむちゃくちゃをするのか。ところが、その後彼らが数年後また日本に指導でやってきてくれました頃に、ミネソタ大学のアメリカの学生指導の一番リーダーの人がやってきて、「西田さん、私らもアメリカで初めてあの当時の学生のことわかってきた。リーズ・ホステイリティー（理由のない反抗）がうちでも起こりだした。日本のあれはあれだったのだな」と。なんぼ説明してもわからなかったけれども、アメリカで起きてきた。そして、その後でヨーロッパで起こったでしょう。フランスでずいぶんひどいのがありましたね。敷石をはがして殴り合いするようなフランスのあれが出てきた。

私は自分なりの解釈として何だといったら、戦争というきわめて大きな変動によって、伝統的な価値というものが程度崩壊しちゃった状態で、これだけは間違いないと思う手ごたえがあるものがあるものがないときに、一体何が本当なのだというのを、次から次へとぶつけて試してみる。ぶつかったところで手ごたえがあつて、跳ね返されて、なるほどこれが本物かというようなものを必死で求めているのがあの学生のレボリューションみたいなものではないか。私はそうとしか解釈できないのです。非常にそのことを痛感しました。

それ以前のまだ昭和二十七、二十八年の頃の学生運動は、まだまだ話せば分かる状態で、文部省の前に虎ノ門の交通がとまるくらいに学生たちが来るのです。「文部省、出てこい」というと、私は必ず文部省の玄関に出て学生たちに囲まれて、しばらく話しているのだけど大勢で話しができないわけです。だから、「俺は徹底的に話しをしたいから、学生課の部屋へ代表が入って来い。五名以上来られたら仕事ならんから五名選べ」といって、私の部屋へ連れて行って、しょっちゅう機会あるごとに、学生たちと私のテーブルで話しをしたのです。あの当時、二十七年頃に珍しいでしょう、ソニーの、まだリールで巻くテープレコーダーの小型のやつを私は個人的に持っていたのです。あれを置いて、ここ「テーブル」にマイクを出すわけです。学生はギョッとするわけです。「これはただのレコーダーだ。記録をとったかったら、君らもリールを持ってきたらコピーしてやるから。これはしゃべらんことは入らないんだから、ここでちゃんと筋の通った話をしようじゃないか」というようなことをやりました。

私どもは、学生たちと幾ら話してもすれ違って、つまりイデオロギーなり立場の違い人間が、どうしてこんなにむなしく話し合いができないのかということが不思議でならない。東京都内の国公立

の十数名の学生部長たちと研究会をつくっていったんです。学生たちとのディスカッションの研究をやるう、その録ったテープをトランスクリプトして文章にした。あれを書くのは大変ですよ。それをまた持ち寄って研究した。それを二年ぐらいやったのですが、そのときに一つだけ大きな発見があった。つまり、立場の違い、イデオロギーの違う人間の話し合いのなかには、何時間やっても一人称と二人称が存在しないということ。「私は」という言葉もなければ、「あなたは」という言葉もないわけです。学生は「我々は」という、こちらは「文部省は」というでしょう。これはみんな三人称みたいなものです。一人称複数といったって、これは三人称みたいなものです。そういうべくしていているというだけ。一人称と二人称が存在しなから対話が起これない。お互いの考え方が共通するようなものが出てこない。論理的な積み上げが起これない。

それがわかったものですから、その後の学生との話し合いのときに意識的に、一人称、二人称を無理に引き出すために、「さっきから君は話しているけれども、君は本当に日本に革命が起きたらいいと思っているのか」と聞くと、びっくりするんですね。「そんなことは問題じゃないですよ。我々は」と、個人の話になると困るので。「さっきから授業料は全廃とっているけど、君が学生課長だったら、君はそれにどう答えるか」といって、ポジションをかけるわけです。「それは困るでしょう」なんていうから、「それみろ、自分でやれないことを人にいうのは卑怯じゃないか」と。そういう立場というものに対するお互いの自覚というものと、それから今のような形で一人称、二人称を引き出すような話をするとう勢がそがれちゃって、そこから対話が変わってくる。これはつまりらなわすかなことですけれども、そのことを非常に感じました。

やはりアメリカ人から習ったディスカッション方法というのは非常に人間関係には大事なことだということで、その東京都の仲間

『討議の手引き』という本をつくって、天城（勲）さんの民主教育協会（IDE）で出したんです。これがIDEで最近までベストセラーだった。あれにかわる本がまだあまり出ていない。あれは、私や東大の西村（秀夫）君や数名の人が書いたんです。

伊藤 西村さんですか。

西田 ええ。そうやって非常に学生たちとまじめに取り組んだわけです。私が学生課長をやめる前の年、昭和三十五年頃までそうでした。

伊藤 六〇年安保。

西田 最初の安保闘争。国会で樺美智子さんが亡くなったあのときのことが最後の激しいところで、大学の現場から採った係長を現場を見にやっていたら、帰ってきてから、「おまわりはけしからん」というから、「おまえは文部省だぞ」と。まあ、ずいぶんひどかったようです。あの騒動があったときくらいは、まだ学生たちと話す機会がありました。

さっきの学生課長の部屋に呼んで話しをすることをやっているうちに、「代表だけではなくて全学生に話しをしてくれ」という。「それをやるのだったら君たちで場所をしつらえろ。呼んでくれたら僕はいくから」といった。そうしたら国会議員の議員会館を学生が社会党の人に頼んで借りたらしい。そこへ都学連の連中が集まっているから来てくれという。私と係官の二人だけでいきました。私は学生のリーダーに、「こういう大勢で議論するというのは非常に難しい。討議の方法としては、君がちゃんと皆からの質問を集めて整理をして、僕に一つずつぶつける。そうしたら順番に答えるから。ガヤガヤやったらだめだから」「やりましょう」といってやったのです。そのときに彼らが持ってきた問題は、国立大学の寄宿舎の電灯料とか水道料をただだにしてくれという話、それから授業料をまけてくれと。そこに一五〇、一六〇人おったでしょうね。私は聞

いて、「あなた方が生活に困って、お金が少ないから何とか奨学金をふやせという話なら分かるけれども、生活のために使っているガス・水道・電気をただにしろというのは、それは乞食根性だ。そんな費用を税金で払っているのは自衛隊の兵隊と刑務所の囚人だけだ。虎ノ門の角へ立って道を歩いている人に『俺の電灯料とガス代をあなた方の税金で払ってくれ』といって誰が賛成するか。そんなことを私にいったって相手にしない」といって、どぎつい議論をしました。そうすると、リーダーではなくて、その周りの学生が手をたたくのですよね。あの頃はやはり、数の上のことを恐れないで、少なくとも道理をわけて話しをすれば、学生たちは手ごたえがありました。後の何とか派とか全共闘になったらだめです。これはもう殴り合いですからね。

伊藤 まあ、全共闘も初期の段階はやはり話し合いは可能だったと思いますけれども。

西田 学生運動のことだけをちょっとつなぎますと、私がやめて官房にいった頃までずっとまだ続いていまして、最終的な締めくくりはどうなったかという、あれは一九七一年頃です。私が中教審で別の答申のことを官房でやっていた頃に、まだ非常に荒れておりまして、東大が入学試験ができないときがありましたね。片一方で四六答申という教育改革の審議をしているときに、大臣から突然「当面する大学教育の課題に対応するための方策」について諮問が出て、これを別の委員会をつくってやったわけです。結局あれは正味三ヵ月くらいで当面の大学紛争の処置に関する答申を出したのですね。それが文部省で一つの大学運営臨時措置法という法律になったわけです。

ずっと学生運動を見てきて、果てしなく大学で騒動が広がっていく、大学の建物が壊される、授業はできない。そのときに最終的にどうするかというので文部省の省議をやりました。あのときは灘尾

〔弘吉〕 先生だったかな。次官は内藤（誉三郎）さんという元氣のいい人で、対策としては、文部省へ権限を集中して、文部大臣が各大学へ指令を出して、東大に学生が入っているといったら、警視庁へ頼んで警官動員なんというのを文部大臣が指令できるようにしたらどうかとか、何とかかんとかいいうわけです。私は審議官として、そこへ列席していました。私は灘尾大臣に、「私は学生課の仕事をしています、教育行政については文部省の持っている権限というのは、極端な悪いことをとめることはできるけれども、いいことを強制することはできない。教育というのはいいことを積極的にやることなので、悪いことをやらないことではないのです。だから文部省の持っている権限というのは、むなしなものだと思う。次官がいわれるように、大臣のほうへ権限を持ってきた警視庁へ指令を出すなんていうことをして、次から次に来たら一体どうするのですか。そんなものできっこないし、それでは大学はよくならない。最終的には大学をよくする責任は大学にあるのだという大前提はそのままにして、その前提が無限に長引いていつて收拾がつかないという形だけはストップしなきゃならん」と。

あの運営措置法のときに、結局、非常措置をとるということで私も答申したのですが、あの非常措置をとるというアイデアというのは、昭和四十四年のお正月にうちでお酒を飲んで寝ていまして、もうこれしかないと思いつきました。大学は自治ですから全部お任せします。自治で運営していて、いつまでたっても大学のなかで結論が出なかったら、それで三ヵ月間動かなかったら大学をロックアウトします。そうしないと全部壊れてしまいますから。それから半年間してまだ結論が出なかったら、こんな大学を日本に置いておく必要があるかどうかを国会が決めます。国立学校ですから。国会が東京大学を廃止すると決めたら、もう先生も教授もくそもない、パーですよ。国立大学の最後はそれなんだということ、そういう

う最後の引導を渡すというのをお正月でお酒を飲んでいるときに思いついて、それでその会議に持っていっただけです。あのときの委員長は高坂正顕先生で、「大学に死刑を宣告するような話はいやだ」といわれたのですが、次官のところどうとう納得してもらってそれをやったのです。

あの当時は、そういう答申を出して法律をつくることをやろうと思ったときに、自民党の文教部会に説明にいかなければならぬ。文教部会へ説明にいったら、「そんな生ぬるいことで大学の騒動が収まるわけがない。なぜ文部大臣が権限を持ってやらんか。」、文教部会で納得されないで、幹事長が田中角栄さんだったのでしばらく説明したら、「よっしゃ、それでいこう」と。やはり鋭い人ですね。幹事長の一言で、すぐ法律をつくれといった。その法律を国会へ出して、通って二ヵ月したら日本じゅうの学生ストが全部なくなりました。まさにこれは外科療法みたいなものですね。私は今でも思うのですが、それがなければ大学の教授会というのは無限に時間をかけて、ああでもない、こうでもない。大学が幾ら壊れようが、俺の月給はちゃんと出る（笑）。国会で廃止になったら先生はパーです。「俺たちが全部なくなるのか」「そうです」と。まあ、ああいう一種の邪道ですけれども、そういうところまでぎりぎり行って、一応収まった。たった二ヵ月です。坂田（道太）文部大臣のときでした。それが出たので、各大学は学生と筋を通さなくても妥協したか、それとも理屈なしにおまわりを呼んで追い払ったかどちらかでしょう。しかし、それしか方法はなかった。そうしたらあとは皆ふっと癪（おどろ）が落ちたみたいになって、あれは何だったんだ、という格好です。

伊藤　ですから、それは何だったかというのを、総括していいのですよね。

西田　そう、誰もいわない。さっきから私がいつているような、一つの動物社会の現象みたいなもの。学生課長を十年やっていて男が、

大学紛争が何だったかいまだにわからんといっているのですからね。立派な評論家がずいぶん文部省で会議もされたのですけれども、誰もそれについて論文を書かれた人は聞いたことがないですね。ただ、学生ががむしゃらにそれをやろうとしていたのはわかっているのですけれども。

後でちょっと写真を見ていただきますが、現職の先生の再教育よりも、学生と触れ合うことが補導の先生方の自信を深めるのに一番だということで、現場で暴れている学生たちとのセミナーをずっとやりました。文部省が主催したらそんなものはだめです。民間団体でやりました。一番最後のやつが、第一次安保闘争の年の暮れです。北海道の音威子府（おとこね）というところの北大の演習林で、各大学の自治会のリーダーを募集して一週間の泊り込みの合宿をやったのです。今でも覚えていますが、そこに、樺美智子さんの紛争のときに国会へ突入した明治大学の自治会の委員長など、ほとんどがリーダーだったでしょう、それが来ていました。私らはただアドバイザーとしていつているというわけですが「ここへ文部省がおる。これのことには気をつけろ」なんていわれていましたけれども、一週間毎日毎日議論をしていくとずっと変わっていくわけです。最後の日の晩には屋上に上がって夜が明けるまで議論をしたりしました。面白いのは、それで東京へ帰ってきましたら、その明大自治会の委員長が文部省へ訪ねてきまして、「自分は大学で長年先生方と議論をしたけど、あなたの方の議論を聞いたら、初めて俺は何をしていたかわらなくなってきた。今までの専門をやめて、もう一度大学院へ入り直して勉強し直したい」といつてきました。名前は忘れましたが、その後どういう方向へいったかは知りません。それぐらい若い人といふのは一週間で非常に大きく変わるのです。

彼らがいうのは、大学のなかでいろいろな指導の先生なんかと議論をすると、「君、そういうことをすると就職に損する」とか、「それ

をやる大学が……」と、おためごかしの親切そうな話はしてくれ
るけど、あなたのように、「おまえのやっているのは間違いだ」と
やっつけてくれない。それが不満だということです。先生が親切に、
君はそうしないほうが得だというような話をすればするほどイライ
ラして余計に怒るのだと率直にっていました。東大でいえば林健
太郎さんと少し居直ったような先生がいっちゃって、そういう
人が意外に学生から後まで信用されたのですね。学生のご機嫌をとっ
ているような人というのはみんなどこかへいっちゃった。まあ、余
計な話ばかりしましたけれども。

村上 この白書をおつくりになったときに、局長とか庶務課長なん
ていうのはどういうふうに。

西田 これは僕が起案して、それが原案でまず一番に局長に上げて、
局長が次官に上げて、大臣まで目を通して、一応決裁をもらうわけ
です。

伊藤 それは手が入りますか。

西田 入ったかどうか覚えていません。少しはあったかしらん。
おもしろいのは、大臣が閣議へいって帰ってこられて、僕にはな
くて、次官にいわれたのですが、「あれで説明しておいた。大変よ
くできた。ただ、やはり西田君は理科系の人だな」といわれたとい
うのです。統計が出ているでしょう。学生の参加のパーセント。

「西田君はやはり理科系の人だなんて、天野さんがおっしゃってい
たよ」と日高先生から聞きました。

伊藤 どこかに三日間か何かもってお書きになったときには、デー
タは持っていたわけですか。

西田 ええ、私が三月からいって、まだ二、三ヶ月ですけども、
学生課の補導係その他が持っているストライキとかの情報というの
は、彼らは実態についての資料だけは集めていますから、その資料
だけは下げていきました。だけど、ほかは全部自分で作文です。こ

れを出したときに新聞からはあんまりほめられなかったけれども、
一つだけ、東大の手塚富雄先生から、「役所にしては珍しい文章だ」
とほめていただいた。それだけがうれしかった。

所澤 ドイツ文学の。

伊藤 なんで手塚先生なのですか。

西田 大学のなかで補導関係のことをしておられたのです。

伊藤 これは閣議で報告になって、あと一般には出たわけですか。

西田 公表したのでしょう。記者クラブには当然配ったはずで
す。けれどもあんまり問題にされなかった。

伊藤 実際、これを見ていて、詳しく読んだわけではありませんが、
当時の日本共産党の学生対策とすれ違ってしまっているんですか、そ
ういう面はかなりにあるのではないかなという気がしたのですが。

西田 「昭和」二十五、二十六年ぐらいの非常に政治的な色彩を帯
びた頃から、共産党の運動方針が、学生も一つの彼らのいわゆる革
新的な運動の尖兵として使うという方向が強くなりました。私ど
もの意識としては、学生が純粹なまじめな格好で運動しているけれ
ども、これが共産主義者の運動の手先として使われて、騒動が起き
て最後に犠牲を被るのは学生なんです。退学処分とか逮捕とか。リー
ダーは裏のほうにおいて知らん顔をしている。学生がそういう意味
の左翼運動の手先に使われて犠牲になることをどうやって少なくす
るか、そこにしか我々が精一杯やれることはないと考えておしま
した。そのうちに、私がやめる直前かな。共産党のなかで内部の喧嘩
が起きたことがありますね。共産党のなかで分裂が起こっちゃっ
た。そのうちに、全学連か全共闘か、学生団体が共産党のなかに殴
り込みをかけたというのがありましたね。とうとう赤の共産党より
もっと向こうへいっちゃって、赤外線になっちゃった（笑）。こう
いうことをいったのを覚えています。

伊藤 そういう表現は初めて聞きましたね（笑）。

西田 私は専門が物理ですから（笑）
伊藤 いや、驚いた。

■全国学生部長会議での文部省提案とアメリカ視察

西田 これに関連して、白書を七月に出して、その年の分だけを申しあげておきますと、その白書を出しただけではなくて、全国の大学にこの学生対策を実施する上での文部省としての会議をやるという形で、学生部長会議を昭和二十七年の秋にやったわけです。それを全国の国立大学全体、私立大学は別に後でやりましたが、全国学生部長会議というものを東京で開いて、最初の国立大学の会場はお茶の水女子大学でした。国立大学七二大学の学生部長、学生課長が集まってきたのです。

伊藤 部長だけではなくて課長ですか。

西田 課長も。

伊藤 課長は役人ですよ。

西田 役人です。部長は先生方。そうしたらそのときに、文部省が学生弾圧の会議をやると、東京都学連というのが押しかけてきました。お茶の水女子大学を取り囲んで私どもが会場に入るところを妨害しようとするから、あのときはおまわりさんと呼んで追い払った。昼飯を食うときにどうしても外へ出なければならぬ。出ようと思ったら学生が邪魔している。そこを無理に押しのけて出ようとして、わっさわっさとやって、私はシャツの片袖をまがれたことがあります。

その会議は、学生は当然学生弾圧の会議だといっていたわけです。その会議に私どもが文部省としてのどういう提案をするかということとを事前に研究しようと、この白書を書いた後の七月から八、九月

くらいまで連日内輪で会議をし、知恵が足らんものですから、東大の補導の世話をしてもらった尾高朝雄先生に二、三度来ていただいて、その先生のお知恵も借りながら文部省提案というのをまとめたわけです。その文部省提案の本物はここにあるのですけれども、また読みにくいし長たらしいから、その抜粋だけちょっと見てください。（プリントを配る）

伊藤 それは本物ですか。

西田 これ「文部省提案」の本物が二つあるからね。

伊藤 それはコピーですか。

西田 もちろんコピー。これが本物なんです。

伊藤 それはやはり元はこんな「昭和二十七年七月 教育の問題としての学生運動」のような紙なんですね。

西田 これは後からコピーをとったんです。ざら紙の。これを学生部長会議に出したのですが、部長会議で拒否されて、後からこの中の一部だけつくったわけです。このときに文部省が提案した提案というのは学生弾圧どころではなくて、最初に学生活動の規範として、これはごくあたりまえのことですが、第一原則は、民主主義の原理に合致して役立つものでなければならぬ。非民主的なことはだめだということ。第二原則は、学問研究という、真理の探究をやるという大学の使命と反してはいかん。自治会が学問的な根拠のないことで勝手なことをやるのはいかんということです。第三原則は、学生は教育せられるべきであり、必要な場合には制限も必要だと。その次に第二として、学生に対する教育指導として——これが現場でえらくもめたのです——、教職員と学生の間に、相互の善意を信頼し意思を理解し合った関係を発展させるために、積極的な計画をやるべきだと。それはまだいいのですが、その次の第二方法、これが学生部長会議で問題になった。きわめてラジカルな提案で、「学生の善意に信頼をおき、公の協議に学生を参加させることが望

ましい」と。つまり、大学で学生に関する取り締りのルールとか処分とかを行なうための学校の会議がありますね。そののなかに学生の代表を入れるといったのです。これは理論としてはその後も私は間違っていないと思うのですが……、真の自立性というものは、自らを規制するものを定める規則をつくることに自分が参加するということと初めて自覚が出てくるのだと。人に規制されるのではなくてね。対等に責任を分担することによって、一方的利益を主張するよりも建設的な意見が出てくる。つまり、大学の補導委員会で学生に対する処置を決める委員会に、学生の代表を入れるといったのです。私は今でもこれは間違っていないと思うのですが、これを出したときに全国の学生部長から、「教育の現場を知らない文部省の官僚がテーブルの上で考えた案で、こんなことを文部省が提案したということ自身を秘密にしてみたい。こんなことが現場に知れたら学生の収拾がつかなくなる」と。

伊藤 学生参加の問題ですね。

西田 そこで拒否されてこれを撤回してしまったのです。だけど、それから十何年たってフランスの騒動が起きた。そこでスチュUDENT・パティシペーションというのが初めて出てきたんです。そのときに新聞記者や何かが、「日本でこういうアイデアがあるか」というから、「ばかいうな。むしろが昔、今から十何年前にいったんだ。ただ現場の学生課長に相手にされなかった」と。ただ、部長会議でそういう強い反対だったのですが、その当時、部長、課長のなかで二人だけ、「文部省のいうのはもっともだ。現場でやろうじゃないか」といったのがおったのです。京都大学の厚生課長の角南君と、九州大学の垂水君。そのときに私がしみじみ感じましたのは、現場で学生と四つに組んでやっている課長はこれをやる自信があるのです。部長というのはほとんど遠いところから見ていて指図しているだけで自信がないのだ。これは部長にいてもだめだ。あとは

現場の第一線の課長方を訓練してだんだんレベルを上げていく以外にないという形で、それからもっぱら研修とかそういうことのほうに移っていったわけです。私の非常に辛い思い出ですけども、これがそのときのことです。

伊藤 これは確かに受け入れられないでしょうね。

西田 きわめてラジカルな提案でしょう。だけど、さっきの学生運動の発展のなかで、京都大学で天皇事件というのがありましたね。昭和二十何年でしたか……、昭和天皇が京都大学に行幸されたら、学生団体で取り囲んだ。あれは京都大学で大騒動だったのですが、あのときに私どもは京都の研修会へいていたのです。昭和二十六年の秋です。私どもは、学生が陛下を囲んでわっさわっさやったことで、この問題で我々の補導の勉強会をやるうというので、京都大学の学生部長に頼んで、その運動のリーダー数名と私どもの研究会にいていた仲間とが京都の寺町の飲み屋の二階でその晩話し合いをしました。そのときに、「君たちはどういうつもりであれをやったのだ。我々はこう考えるのだ」という議論をしました。私は、そういうきわめて戦闘的な学生たちとも、話しをすれば我々の気持ちとそんなに食い違わないという自信を持ちまして、学生を参加させるということは決して架空の話ではない。

その後、まだ学生運動の関係ですが、どういう経過か知らないのですが、大臣からそれが局長を通じて、昭和三十一年の十一月から翌年の一月までの三ヵ月間、現職の課長をアメリカへ学生補導のことを实地視察にやるというわれましたので、私はアメリカの現場を見てきたいというので喜んでいかせてもらった。

羽田を出るときに、まだ日本航空なんかろくになくて、パンアメリカンでいきました。アメリカのサンフランシスコへ着いて、最初の一ヵ月間は、日本に指導に来たときの主任の先生のユタ州のブリガムヤングというモルモン教の大学へいきました。このあいだ冬季

オリンピックをやったソルトレイクまで飛んで、そこからバスで一時間。その先生の大学へ行って、一カ月間素人下宿へ入って、その大学へいって学校の中でのいろいろな活動を見せてもらった。日本への講師団を送ったアメリカの厚生補導の団体のリーダーシップをとっているのがミネソタ大学の学生部長でしたので、次の一カ月間は、その人を頼ってミネソタにいきました。そして最後の一カ月間で、東部のボストンとかハーバードとかいうところをまわって、十幾つの大学を訪ねて帰ってきたのです。

最初の一カ月間のときには厚生補導どころではない、素人下宿へ入って、終戦後アメリカの調査団とやりあいをしたので少しは英語が分かると思ったら、とにかくまあ、英語が耳から入らないわけです。夜寝ているときに英語で話しかけられて、ハッと目が覚めてね。何もわからないから。そういうので苦労しましたけれども、だんだんやっているうちに、三カ月目に帰るときにはタクシーの運転手さんと世間話をするくらいになりました。これは厚生補導ではありませんが、私というのは。我々の英語というのが学校でどんなに綿密に習ってもだめなのは、日本人のステータス・コンシャスネスです。日本だったら、年齢の関係、地位の関係、立場の関係というものを意識せずに話しができませんね。相手が学長さんであるか、学生であるかで言葉遣いも変わってくる。俺は彼よりも若いのだという意識があると、それに応じた話し方をしなければならんという意識が無意識に言葉を抑えてしまう。向こうへいって学生を見ていると、学長であろうが何だろうが、「ユー」は「ユー」なんです。ね。「アイ・ドント・シンク・ソー」なんて平気でしょう。しゃあしゃあとやっていて、ステータス・コンシャスネスというものを抜きにして自由に言葉を出すということが話なんだということがわかった頃から、平気で言葉が出るようになりました。非常にいい経験でした。

ミネソタへいたり、ブリガムヤング大学を見たりしているときに、アメリカのなかで非常に感心したのは、教師と学生とがまとまった一つのコミュニティとして近親感を持ったためのスチューデント・ユニオンという、日本では“学生会館”と訳している施設があるわけです。学生が自主的に運営していて、そこに学生は自由に出入りをし、先生方もやってきていろいろ社交的なことをやっている。こういう場所が日本の大学にはない。だからそれをつくろうということを考えて、これは後の話になるかもしれませんが、学生会館設立というのを帰ってきてやりだしました。やりだしたら、その学生会館が騒動の種になりました。

伊藤 そうですね、これは巣窟になったわけですね。

西田 これは国立で最初にお茶の水大学にやって、早稲田がやられたのです。それも学生会館の管理権が問題になった。それも結局失敗かもしれませんけれども、しかし、その後は何か役に立っているだろうと思います。

もう一つ、これもいい経験でしたが、私どもでは学生の施設で学生の寮というのが一番の問題でした。ハーバードにいったときには、この寮で何十年も寮を世話している人が、学寮の運営というものは、人間というものが三〇人以上超すと外からコントロールのシステムを持ってこなければ秩序がたもてない。彼らが一つの自分たちのモラルというものをつくって自然に調和した活動をするためには、人数の限度が三〇人だ。これは自分の経験だと。そのことが非常に頭にありまして、私は後で木更津高専にいったときにそのプリンシプルで寮の大改造をやりました。一年生から五年生まで三〇人ごとを一つの群としてまとめて、そのなかに、寝るところと勉強するところ、遊ぶところをつくったわけです。伝統的な寮のなかには寝室と勉強場はあるのだけれども居間がないのです。リビングルームがない。仲間が集まって話をし、遊ぶところというのをつくった。

それを群ごとにやって、その連合体として寮を運営する。それをやらないで十把一絡げの寮だと、必ず上級生が下級生を使ったり、リンチをやったり、これは限らない。君たちのやっていることは江戸の牢屋敷のなかで牢名主がいじめているのと同じだと。あの集団的な病理現象を克服することは、ハーバードで習いました。

もう一つハーバードで感心したのは、有名なビジネススクールがあります。その一番特徴的なのは、マネージメントというのを本当に身につけるには、経営学の書物を読むではなくて、具体的にいろいろな会社で起きた問題のケーススタディをやる。事例研究、それもあそこで習いました。

後の話になるのですが、庶務課長になってから大学の事務局長の研修会をやったのです。そのときに全部事例研究をやりました。事務局長に、あなたの大学であなたがこずって困った事例を書いて来い。それをグループの中に出して、議論する。そうしたら、学生部でこんな混乱があったというようなことをやるわけです。学生と学生部がけんかしているのを事務局長が見ていて批判しているわけです。「あなたがこの場合の学生部長だったらどう処置するか」といったら、「それは困りましたな」というわけです。お互いのアドミニストレーションというものの意味がわかってくる。事例研究もこのハーバードで習いまして非常に良かったと思います。これは飛び入りですけれども、三カ月のアメリカ留学というのは非常にありがたかったと思います。

村上 その日程というのは、いらっしゃる前に先生ご自身で計画を立てられるのですか。

西田 行く先々は皆日本に講習に来た先生ですから、あなたのところに一カ月、あなたのところに一カ月とお願いして、最後に自分でまわったわけです。

村上 今まで天城先生や木田先生の話を聞いているときには、一カ

所に一週間とか二週間というのが多かったような気がするのですが、先生は一カ月、一カ月とボンボンと使っていらっしゃるから。

西田 三カ月も旅行させてもらうなんていうことは、現職の課長ではないはずですよ。現場を離れて、よくそんなことがあったものだと思うのです。私はアメリカの学生指導を指導してくれた先生方の現場を見て、いかにも彼らが言っていることが現場のなかで生きているのだなということを思いました。

伊藤 そもそもその話はどこから出てきた話なのですか。

西田 それはわからないです。おそらく日本に講習で来た先生が、日本の学生指導の問題では、私が講習会にもいっていた、そうやっている最中に課長になった。あれがキーパーソンだから、あいつをもう少しアメリカで勉強させたらどうだということではないでしょうか。それがアジア財団にまわってきたのかもしれない。

伊藤 ほかに行かれた方はない。ただ西田先生だけお一人です。

西田 ええ。しかも現職の課長でポストを空けたままでいったわけです。

伊藤 三カ月。

西田 ええ。

伊藤 その間は課長代理がやるのですか。

西田 課長補佐がやったのでしょね。まあ、三カ月ですけれども。伊藤 三カ月というのは考えてみるとちょっと短いような気がしますけれどもね。

西田 多少英語の勉強になったというくらい。

伊藤 しかし、その当時だと日本とアメリカの生活水準の差というのは物凄く大きいでしょう。

西田 アメリカにいったって、今は普通になっているスーパーマーケットというのがあって、初めて知りまして、感心して女房にお土産を買ってきました。ドラッグストアと書いてあって、ドラッグ

だけではなくて何でも売っているのですからね。

そのときに私は向こうのミネソタ大学なんかの親しくなった人に、アメリカへ来てみて日本の学生と非常に雰囲気が違うのは、日本の学生と人間関係が違う。アメリカ人の学生はきわめて個人として完成しているとか自覚があるとかいうけど、僕らが見ているとアメリカ人の学生というのは道を歩いていて後姿が寂しそうだなあといったんです。何か孤独な感じがする。それを感じますのは、きわめて個人的で自由な行動をしているというけれども、アメリカの多くの大学でソロリティー、フラタニティーというのがあるのをご存じです。あれは一種の秘密結社ですね。男の子はソロリティー、女の子はフラタニティーと、何か特別な非合理的な結社をつくるのです。そこへ入門するときには、真っ暗な部屋でろうそくを立ててお祈りしたりするような、妙な新興宗教みたいなことをやらせるのです。それでその結社に入る。その結社は、ギリシャ文字の $\alpha\beta$ 何とかという名前がついているのです。そこでほかの人たちと完全に遮断して、その仲間だけの共同生活をして、そのなかでは絶対服従的なことをやる。アメリカ社会で想像できないような、日本でいう、ある意味の非常に原始的な血縁集団みたいなものをつくって、それをアメリカ人が要求しているということは、やはり人間性の本性からくるのかなと思うのです。私はソロリティーのどこかの入門式というのを見せてくれといって、いったことがあります。真っ暗な部屋でね。めったにそんなもの入れないのだけれども。

伊藤 入れないでしょうね。やはり人種とかそういう要素が大きいですね。

西田 それが学校を卒業してからでもずっと長い付き合いをしているのだそうですね。

伊藤 彼らだけが分かるバッチをつくったり、かなり小さい頃からやっているみたいです。

西田 その点では、彼らがスチューデント・ユニオン、学生会館のようなものをつくっていたから、私は本更津高専で同じようなものを特別に予算をもらってつくったのです。そのときにやはり私がかかりましたのは、非常に気の合った仲間だけで緊密な仲間をつくるけれども、それ以外は赤の他人だという風習が日本ではあります。誰とでも対等な個人として付き合うという社交というもの、日本人は身についていない。その学生会館のなかに立派なホールをつくって、ソファもあるし、快適な部屋の飾りをしたので。これは公共の社交の場と考えたのですが、千葉県の田舎から来た高専の学生は、そこへ来てソファがあると寝転ぶわけですね。それはホームレスと同じだ。これは決してプライベートな空間ではないのでちゃんとしろと。公と私的なものとの区別というものを空間的に切り替えるということが、何としても私の在任中にはできませんでした。どこかに椅子を集めて、そこでコソコソと仲間だけでやっている。自由な個人として誰とでも対等な付き合いというのが、日本人に一番不得手なところでしょね。

伊藤 やはりちょっと大人になるところが遅いといえますか、そういう感じはありますね。彼らが一八歳になったら独立するというのとちょっと違うのです。

西田 さっきちょっと申しあげましたが、政治と宗教とセックスというものが、教育のなかの欠落しているところだと私は思うのですが、これはどうですか。

伊藤 ま、一番難しいところでしょうね。

西田 難しいものですね。しかし、一番人間の根源的な問題と絡んでいるでしょう。ほかはちょっと上っ面みたいなものでね。

伊藤 これを教育できる人というのは大変ですね。

西田 その教育計画というのを、誰か考えたらどうかと思うのですが……。

所澤 この先生の書かれた提案事項のなかに出てくることで、学生自治会に学生が全員加入制であるというこの問題点があるのですけれども、いま考えてみると、僕たちも中学、高校でそういうことについての疑問というのを教わった経験がない。いま考えれば非常に当然だと思うし、また、最近学生自治会の自治会費を大学が代理徴収しているという問題なんかもだいたい出ていると思うのですが、既にこのときもそういう問題がたぶん意識されていたのではないかと思うのです。そういう点については、先生はやはり何か行政的な処置をとるということはあったのですか。

西田 いまだにそのことはちっとも進歩していないと思うのです。自治会というものはあるのだ、入るのだ、それができたら皆従うべきなのだという、きわめて単純な集団意識ですけれどもね。

伊藤 でも、今は逆にないんじゃないですか。

西田 私どもは大学への提案として示した中に、大学が全員包括加入の自治会というものを認めるについては、その根拠となる「学生自治憲章」というものをつくりなさいというのがあります。つまり、学生全員を自治会員として自治を認めて、それが自分たちの政治的な経験を積む場として役立つためには、こういうルールを守りなさいという大学側の教育上のプリンシプルを明示した自治憲章というものをつくり、それによって自治会が設立される。その根拠なしにいきなり任意の結社として自治会が生まれると、任意の結社は結構だけれども、全員を無理やり入れるという根拠はどこにあるのかという議論になってくるわけです。その欠落したところを埋めるためには、憲章というものを大学自身がたてるべきだといったのですが、これを実行した大学はまだありません。高等学校、大学で皆自治会みたいなことはやりますね。

伊藤 かなり崩壊してしまっただけが多いのではないですか。

所澤 地方大学はそうなのですから、やはり東大などはいまだ

に院生協議会とかが健在なんじゃないですか。この学生自治会なのですから、大阪教育大の前の師範学校の時代なんかでもこういう自治会というものはあったのですか。

西田 知りません。

所澤 大阪学芸大になってからは。

西田 まだあの当時の学生は自治会をやるというような意識はあまりありませんでしたかね。私はそのことに関心を持ったことはありません。

伊藤 大学は自治会を公認するとか、公認した上で自治会費の代理徴収をやるというふうなことは、ある時期から一般化したのでしょうか。

西田 どうですかね、大学は自治会を育てようというつもりなのでしょう。奨励策なのでしょう。あんまり金は出さないから……。

伊藤 あれは奨励策なんでしょう。

所澤 僕なんかも大学に入ったときには、最初から四年分の自治会費をとられたように覚えていますけれども。

西田 それは大学の窓口がとるのですか。

所澤 入学金とか何かの手続きのときに一緒にとられました。

西田 自治会が大学に頼んだんです。そんなのちっとも自治ではないですね。

所澤 僕が大学に入ったのは昭和四十九年です。

西田 ちょうど給与の支払いのところで源泉徴収をやるみたいですね。

伊藤 私立大学で自治会を名乗っているところは、大学からお金が取れるから巨額な資金を持って、それを自治会が取り上げて血を流すという、そういう事態になるじゃないですか。

西田 これ「写真のアルバム」は番外ですが、今までお話ししたなかで、これが私が剣道部で全国大会で優勝したときの記念撮影です。

対一高戦、最後に京都の西京極でやった三高の応援団です。私はこの一番先頭に立っていますが、ここでやったということです。

これは学生時代の話でいかなかったのですが、私は特に朝鮮が故郷でしょう、夏休みに帰ったら二ヵ月くらいかかってしまう。大学の二年、三年のときには帰らないで、木曾の山のなかに奈良井というところがありますね。私らの大学の学生の頃は、そこに泊り込んで、本を下げていって勉強するというのがこの当時の学生では普通でした。

伊藤 たくさんやっていますね。

西田 これはその宿屋なんです。これはみんな違う大学の学生なんです。私はここにおるでしょう。ここにおる男は、私が一高と交渉したときの一高の全寮委員長です。彼は一高を卒業して哲学をやるために京都にいったのです。このときにここで一緒にあった。ほかにこれは皆その後どこかの大学の学長になったりして。この宿屋に娘さんが五人おったわけです。私はまだ二二、三歳で、お嬢さん方は一七、八ですから、きわめて青春の雰囲気（笑）……、この頃に村のお寺とかそういうところへ止宿しているわけです。ご飯だけをその宿へ食べにくる。夜晩飯を食った後、帰るのがいやだから、俳句大会をやらうとか。七月、八月、九月と三ヵ月くらいおりまして、二夏いきました。私は自分個人としては、ここでの夏休みというのはきわめて豊かなもので、私は理科系の人間ですが、情操教育としては、非常にありがたかったです。このときに生まれて初めて俳句をつくったんです。

これは終戦のとき（の写真）。

伊藤 終戦記念で写真を撮るのですか。

西田 八月にもう海軍はなくなるからというので。これは呉海軍工廠のなかの砲弾実験部と火工部の高等官全部です。私はこの一番端っこに座っているんです。

伊藤 そういう余裕があったのですか。終戦になってからでしょう。西田 ええ、まだアメリカ軍が来る前ですから。陛下の放送があったら戦争はおわりですからね。

伊藤 これは非常に混乱しているという感じとは全然違いますね。

西田 私らは最後まで呉工廠の秩序を守れといわれてやったわけです。

これが大阪学芸にいったときです。これはお話ししました。が、女子師範の雰囲気をおち破るために、学校でやったことがないのだそうですが、卒業前か何かに演劇大会をやったわけです。私がここで作ならびに演出でゲーテの『若きヴェルテルの悩み』を、学生とか事務の人を呼んできてみんなに役をつけて、舞台照明とかは物理教室から持ち込んで、こういう芝居を二年間やりました。

これは物理教室の床を全部改造して実験できるようにしたときのお嬢さん方です。私がまだ三四、五歳です。

これは私が京都に講習会にいきましたとき、グループが六つあるのですが、その第六班で私がこの辺におりますけれども、京都大学の屋上で、向こうに比叡山が見えているわけです。これを一年間参加者でやって、その後ずっとまた向こうの人がいろいろ個人的にやって来て、厚生補導の専門研究会をやってくれました。それが四、五年続きました。

これは東大の図書館の上で写した写真です。これがすんだ後、文部省主催ではなくて我々が自主的に学生と触れ合うセミナーをやるというので、〔昭和〕三十一年から、第一回を軽井沢でやったのです。

伊藤 そのWUSというのは何ですか。

西田 これはワールド・ユニバーシティ・サービスというので、日本では日本学生奉仕団と訳しているキリスト教系のボランティアの団体です。ここはお金を持っているのですよね。そこがお金を出し

てくれて、ここの主催にして、東大の西村君や私どもがそのファカルティとして参加したわけです。これは軽井沢でやったでしょう。

その翌年は、これはやはり軽井沢の星野温泉。このときのリーダーは蠟山政道先生です。その翌年はこれです、三十三年、リーダーは矢内原忠雄先生です。そういう錚錚たる人を連れてきて。

伊藤 これは学生ですか。

西田 これはみんな学生です。前のほうに大学の教員も来ているわけですが、それと学生とがグループをつくって、アメリカ人がやった講習会と同じようなグループごとのディスカッションをやったわけです。

最後は安保闘争の年に、音威子府という北海道大学の演習林へ泊り込みました。このなかにさっき申しあげた明治大学の委員長がおるわけです。彼が帰ってきてから自分の将来を本当に考え直したといっていました。

こういうのを五年間続けてやりました。「学生参加」の提案が学生部長会議で総好かんを食ったものですから、あとは現場の大学の先生方と学生との話し合いをうんと積み上げようということをやっていたわけです。

伊藤 これ〔第五回目の軽井沢〕とこれ〔音威子府〕は違うのですか。

西田 違います。これはやった後です。ほとんど直後でしょうね。

伊藤 IDEと書いてあるのは？

西田 こちらは主催がWUSで、こちらは民主教育協会が金を出しています。文部省は金がないし、文部省が主催するとだめでしょう。こういうことを熱心にやったということでこれ〔アルバム〕を持ってきたわけです。

伊藤 それは三十五年で一応おわりですか。

西田 そうですね。三十六年に私はもうかわりましたから。

伊藤 ああ、そういう意味ですか。では、あとは別な方で続いたのですか。

西田 IDEの天城さんのところは各地域の厚生補導研究会というのにスポンサーで金を出して、IDEからレポートがたくさん出ています。だから、私がやったことはむだではなくて、それをコアにしてあちこちでそれが続いておりました。もうなくなっちゃったでしょうな。だけど、学生補導ということはきわめて学問的、理論的に難しい問題で、しかもやることは苦勞の多いことです。やはりちゃんとした制度的な基盤をつくらないと長続きしない。私が唯一残し得たのは、学生部長というのはいいい先生が来られるのですけれども、二、三年で嫌気がさしてやめるわけです。その経験がどこにも残らない。次の人はまた初めてやったような顔をしてやるわけでしょう。それが残念ですから、学生部に次長制というのをつくったわけです。次長というのは事務官ですけれども、部長にくっついてやって、部長の経験のある程度吸い込んで、その後の人にそれをつないでいく。それが一つ私のやったことです。

本当の恒久的なものとしては、大学の中に学問研究室としてカウセンシングとグループダイナミクスとユニバーシティ・アドミニストレーションを講座として置きたい。それを三大学に頼みにいたのだけれども断られた。大学のほうから講座設置を断ったというのは文部省が始まって以来ですね。これができなかったのが残念です。結局、そういう意味で学問的な基礎ができていない。私はその後大学の人の遠慮なしにいうのですが、大学は森羅万象を研究なさるけれども、大学というものと学生というものを誰も研究していない。そういういたら反論する人はあんまりいません。唯一の例外は、東大のあの紛争に苦勞された矢内原先生は教養部長をやっておられましたね。東大総長もやられて定年で辞められてから、あれはアジア財団かどこか金を出したのか、学生研究会というのをつくられ

ました。海後宗臣先生を顧問にしたりしてしばらくやっておられたけれども、先生が亡くなられたらつぶれてしまいました。先生はしみじみ学生というものを研究しなければいかんと思われたのでしょう。大学の先生では学生ということを誰も研究していないのではないですか。

伊藤 そうですね。

西田 ユニバーシティ・アドミニストレーションということをいったときに、大学の人はきょとんとした顔をするわけです。アドミニストレーションというのは何だというので、英語のああいふ説明書を見ると、アドミニストレーションとは「組織をその目的に向かって統合するための権力の行使である」と書いてあります。はっきりしていますよね。日本語に訳せば大学管理になるわけです。管理という言葉をいっただけでも、大学の人は文部官僚の発想だと反発したわけです。

伊藤 今度の独立行政法人でまさにその問題を考えなきゃならなくなっただけですね。

西田 自分で自分を管理しなければいけない。それから、大学自治ということをしているところでよく私はいうのですが、大学の自治の最大の欠点は、自治というのはセルフガバメントですから、自分で自分を治める。国でもガバメントの中には、司法、立法、行政があるわけです。大学の自治のなかには立法はあるわけです。教授会が。行政は大学当局。司法がないわけです。司法がないから、自分の決めたことがまともに動いているかどうかを見て、間違っているものを矯正する力が出てこない。やりっぱなしなんです。大学自治の最大の欠陥は司法がないということ。

伊藤 まあ、アメリカの大学みたいに、ポリスみたいなものを自分で雇えば話はまた別ですけども。

西田 アメリカの大学でミネソタで感心したのは、寮の運営を

やっていて、寮は自治で運営している。学生に対するいろいろな間違っただこの処分をするときには、補導委員会みたいな学校の委員会があって、そこへ学生の代表が入っているわけです。寮で間違いが起きているいろいろなことが起きると、寮の委員長がそこに呼ばれるわけです。そこを一遍見せてもらったのですが、「君の寮には大学が自治を認めて運営しているんだな」「そうです」「寮のなかでこれこれのことがやりっぱなしになっているのは、自治会としてはどうしているのだ。それを君たちの手で運営できないのだったら、寮の自治というものを大学は認めなくなる」といって、寮のなかで間違っただけを起したことが問題ではなくて、それを放置している自治会の責任を糾弾するんですね。ああいうのを見ていて、やはりアメリカ人はしっかりしているなと思いました。

伊藤 さて、きょうはちょっと時間を超過しましたけれども、そこまでいうことにしまして、次回はいろんな問題がたくさんあると思うのですが。

西田 この間の質問事項のなかで私が次回までに資料を出せるのは、ここで学生白書と部長会議はすみしましたね。研修も一応。問題は、就職問題が一つ、育英会、健康問題。学生会館設置の経過はさっきいったことです。そのへんのところは次回に幾つか資料が用意できると思います。

伊藤 はい、ありがとうございます。では、これは新たに作り直す必要はないですね。まだ学生課長時代のお話を伺うので精一杯です。

西田 これだけで一応二時間くらいかかってしまう。

伊藤 十分もってしまいます。

西田 きょうは少し脱線ばかりしてしましまして、すみません。

伊藤 いいえ、非常に充実したお話で。

西田 『学生運動白書』というのは、これはごろんなったのは初め

てでしょう。

伊藤 そうです。

村上 きょうちょっとわからなかった事柄なのですが、昭和二十六年の六月に視学官におなりになって、そのあとアメリカの講師団の研修にご参加なさいますが、あれは三ヵ月単位の研修ですか。

西田 最初が京都でありまして、それから東大と九州でそれぞれ三ヵ月ずつあって、延べにしたら一年間ぐらいあったわけです。

村上 その講習を受けている途中で学生生活課長におなりになったというのは、京都のときなのですか。

西田 いや、京都ではありません。学生生活課長を命ぜられたのは九州のときから。

村上 講習会はいろいろなところを。

西田 私はその講習会に最初のときには研修生として行って、二回目からは担当課長として見にいったわけです。だけど、課長を命ぜられたのは帰ってきてです。

伊藤 そうですか、それは一年単位なのですね。

西田 三ヵ月単位で三ヵ所やりましたから九ヵ月。

伊藤 同じことをですか。

西田 やっていることはそれぞれのところで同じですけども、集める地域が違うわけです。東京、京都、九州。

西田 亀久夫 オーラルヒストリー

第4回

日時：2002年10月15日

13:55～16:15

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊 藤 隆（政策研究大学院大学教授）

小 池 聖 一（広島大学助教授）

所 澤 潤（群馬大学助教授）

村 上 浩 昭（東京都立大学助手）

■戦中から戦後へ、学生課の質の変遷

伊藤 第四回を始めさせていただきます。前回、学生課長時代の半分程度のお話を伺いました。残り幾つか、先生が課題としてお挙げくださいましたけれども、そこからお話いただけますでしょうか。

西田 学生運動は一応あれで締めくくりにしたいと思いますけれども、後の問題に移る前に、学生課長一〇年の間ほとんどが学生運動の問題に明け暮れた私の感想としては、役所へやってきました学生諸君という話について感じたことを一言締めくくりに申しあげたいのですが……。

部屋の中へ入れて学生諸君といっていると話していると、だんだんお互いの気持ちがあがってきて、こちらもぎくばらんに話しました。「きみたちは、文部省といえど虎ノ門の角に化け物屋敷みたいなものがあるって、そこが鵜の目鷹の目で学生を取り締め弾圧しようとしているというイメージを持っているのだろう。文部省に対してといっても、君たちは自分が持っているイメージに対して戦争をしかけているのだ。実際のところは、文部省といってもここには二千何百人の人がいる。そのなかには権力主義者もおれば、ヒューマニストもおれば、いろいろな者がおる。そういう事実をよく見届けて、もう少しものの考え方を覚えてもらわないといかん」ということをいいましたら、「話をしていて、先生は非常に良心的にやっておられる点があるということはお分かりましたけれども、そうはいっても役所とか政治の組織の中では、自由民主党というものが反動政策をもって、それが内閣を通じてあなた方の末端のところへ指示を出してくる。あなた方自身が思うとおりに動けないんじゃないか」「それはきみが勝手にそう考えているだけで、僕は役所で一〇

年間学生課長をしているけれども、大臣室に呼ばれて、こうやって学生を取り締められ一言もいわれたことがない。それが事実だ。僕が信用できるというならば、そういう僕を一〇年間も学生課長として飼ってくれているのが文部省だ。そういう点で、やはりきみたちのものの見方が非常に自分の固定観念の中にあるんじゃないか」「そうはいっても、役所というものは政治の一つの手足みたいなもので、その指図の下に動くのだから、個々の行政官がどう考えるかなんていうことは実際には自由がないんじゃないか」と、学生はこういう言い方をするわけです。私はそのときに、「そういう例えをいうならば、もっと突っ込んで考えてもらいたいのは、人間の体でいえば、頭というものが自分で何をするかということを考えるときには、まず目の前に何が見えているか、耳から何が聞こえているか、俺は今どこにおるか。そういうあらゆる情報を集めた中から脳が判断するので、そのすべての感覚器官の反応なり情報を無視して判断するのを気狂いという。政治というものは我々を動かし、ある直感的な政治の方向を決定付ける力を持っているけれども、一つひとつの場面における判断というものは、むしろ我々行政官が集めた情報が全部逆に政治の方向を決めているという面もある。手足と頭脳というのはそういう関係だろう。だから僕らは自分が手足であることに誇りを持っているので、それが自由意思のない人間の行動だとは思っていないのだ」という話をしました。

それなりに分かってもらったような気がしましたが、所詮、文部省学生課というのは学生弾圧の本山だという目で見られたのでしょう。しかし、この前申しあげました学生参加というような、ある意味できわめてラディカルな提案をしようとしたり、これから後に申しあげる学生生活の内容をもっと高めることについてのいろいろなことも努力しておったということが、私どもとしては本当のことだろうと思っております。そんなことを最後の感想として申しあげて

おきます。

一度だけ、第一次安保の樺美智子さんが死んだときに大臣室に呼ばれたことがあります。あれは誰だったかな。「学生課長、こういう事態になったけど何か対策はあるか」「ありません」「対策がないではすまないだろう。何かあるだろう」「ありません」「それでは君の責任がすまないじゃないか」「大臣がそうおっしゃるなら申しあげますけれども、私どもが平生、学生が政府を信頼し、行政に対する信頼感を持てるように何々をしたいといろんなことを申しあげても、事がここにいたるまでは誰一人耳を貸してくれない。その状態を放りっぱなしにしておいて、事ここにいたって何とかできると思っているから平生何もしない。そういう形で学生問題ができるわけはありません。だめなら私を辞めさせてください」といったら、大臣は一言もいわれませんでした。そういうのが真相です。

伊藤 最後にといわれたので少し聞きにくくなってしまったのですけれども、一つは、目と耳、さまざまな感覚という場合に、当時の学生運動というのは日本共産党がかなり指導権を持ってフラクションをつくって動かしていたと私は思っておりますが、そういうことについての警察からの情報というのはある程度は手に入っていたのですか。それとも全然入らないのですか。

西田 私のほうから積極的に警視庁から情報をもらおうという努力はしておりません。しかし、事前にこういう動きがあつて、こういうまとまった運動が起こるかも知れないということは、警察のほうから積極的に知らせてくれることはありました。しかし、そういう治安的な対策というのは、大学自身も私ども何もとる策はないわけです。

伊藤 もちろんそうですけれども、情報としては必要なわけでしょう。

西田 そうですねえ、だけど……。

伊藤 それをどうこうするというのではなくて、そういうことを前提にして、対応を考えなければならぬという意味では……。

西田 そうですけれども、治安問題というものに対しては文部省が何かやりうる手段も持っておりませんし、警視庁が心配しているようなことに対して直接対応できることはありません。ただ、今度アメリカからこういう人が来ると羽田でこういう事件が起こるだろうとかというようなことは、前もって知っておれば、その現場の様子を見にいこうという形で係官が出かけていく。それはあります。しかし、あくまでこれは傍観者みたいなものです。

伊藤 もう一つは、局長との関係はどうでしたか。

西田 局長からも私どもがやる仕事について、具体的に指図を受けたことはほとんどありません。

伊藤 一応状況は局長にはあげているわけですね。

西田 局長には全国の動きとか各学校からの報告は皆あげておきますけれども、だからどうしようということにはならないわけです。「ああ、そうか。困ったことだな」というだけのことで。

伊藤 局のなかで、ほかの課との情報交換というのはあるのですか。

西田 学生課の仕事については皆さんやはり自分たちのやっている仕事との関連というものはないから、意見をいわれることもないし、まあ、本当に学生課というのは非常に特殊な分野です。

伊藤 離れ小島みたいな感じなのですか。

西田 ええ。ですけれども、逆にいえば、ほかのところ国立大学を中心にして、国立学校を設置してその運営をどうするかということばかりを考えている。こちらは私立を含めた全部をやっているという点では、むしろ大学局の中の行政としては、視野が広い大事な仕事だというプライドは持っていたわけです。今度出てくる就職問題なんかも皆そうです。

伊藤 局の中では課長を集めた会議なんていうのはないわけですか。

西田 いや、局議というのはしょっちゅうありました。そこで報告をするということもあんまりありませんでした。予算の頃になるとだんだん切羽詰ってきて、私は育英会の予算というのが大きな予算ですから、そういうものは皆さんが議論するわけです。ほかに、学生の環境整備という形で、大学の寮をどうするか、学生補導費として大学が学生の面倒をみるときのいろいろな雑用の費用、そんなものが若干あるわけです。今でも覚えておりますが、予算書のなかに予算事項別表として事項ごとに金額が出ているのがあります。たまたま不思議なことに、農業関係の農学校の家畜病院のえさ代の予算の下に学生補導費が書いてあり、家畜病院の予算の何分の一しかないわけです。これは実に皮肉なことですね……。学生を大事にしなければならんなんていっているけれども、何一つ具体的なこととはできていないし、そういう予算を増やそうというときに誰も応援もしてくれない。まあ、悪口もいわないのですけれども。それは学生課がやっているのだという形です。だから学生の環境整備のための予算というのは、非常に日があたらない。アメリカへいって帰ってきてから、学生会館という一つの物になるとときには少し予算が出てまいりました。それ以外は予算化するものは非常に少ない。

伊藤 西田先生は、学生課長ではあるけれども、文部省の役人という意識は薄かったわけですか。

西田 いや、そうでもないですがね（笑）。学生からは文部省の一番責任者だと思われる。

伊藤 こちらから見ればそうですね。

西田 学生の問題についてどうすべきかというのは、自分の判断で動いているだけで、局長から大臣からも指示命令を受けることはちっともありません。つまり、行政といえ、ご承知のとおり、公の金を使って何をやるか、公の権力を使ってコントロールするか、その二つしかないわけです。学生に関してはコントロールするとい

う機能が働く場所が何もありません。結局、現場で学生と対応している学生部の人たちに、こうしたほうがいいのではないか、ああではないかという、あくまで助言指導という格好だけです。相手がそうと思わなければ何も効果がないわけです。お金のほうは、今の育英会のお金のようなものが奨学金としていく、学割が学生のところへいく、そんなことくらいで、直接的に資金と権力を使ってやるような行動というのはあまりないわけです。ですから、行政としてはきわめて特殊な分野でしょうね。

所澤 学生課は文部省のなかである程度ほかのところと隔絶したような感じだとすると、昔から行われていることについて、歴史的な背景だとかいろいろな情報を中で共有していたのでしょうか。

西田 私どもの前のときは学生生活課であり、その前が学徒勤労課であって、それが戦争中からあったということ聞いておりますし、その頃の課長は我々の大先輩として個人的な接触がありました。その当時の中心的な命題は、戦時体制の中で学生を動員して勤労奉仕をやらせたり、学校のなかで反社会的な行動が起きないように、そういう目を光らせることが文部省の一番の関心事だったわけです。

戦後になって切り替わってからの学生課が対応した仕事というのは、一挙に学生全体が貧困化してしまったわけです。その貧困の学生をどうやって救済するか。それがきょうの最初の話になるのですが、学生の健康問題とか、就職問題とか、学生に降りかかってくる困難に対していかにして我々は手を差し伸べて問題を解決できるかという方向へ変わってしまったわけです。戦時中、戦前のものとは内容的につながりがまったくないわけです。

伊藤 でも、学生と直接接するという点では同じなわけですね。

西田 そういうことですね。

伊藤 学生部長会議というのは継続的にあったわけですか。

西田 ありました。

伊藤 毎年ですか。

西田 ええ。この間申しあげたメーデー事件の直後に大きなやつをやって騒動を起こしたのですが、それ以後もやはり毎年一回はやっておりました。

所澤 昭和一桁の時代に思想問題が起きますね。それは旧制高校でも大学でも起こって、大学に学生課ができて、という構造になっていたと思います。昭和一桁の思想問題と、昭和三十年頃の政治情勢のなかでの思想問題というのは、かなり性格が違々と先生は思っていますか。

西田 私が高等学校に入ったときは昭和九年ですから、まさしく一桁代ですね。九年から十二年。僕らが入ったときに、「きみらが来る数年前に、京都の第三高等学校で寮全体が学生たちに占領されてストライキ状態になった。マルキシズムの影響を受けた学生運動が非常に盛り上がった時代。そのときに学校は、先生が寮に泊り込みをして学生と話し合ってストライキの解決を図った。その頃の学生は大変暴れたけれども、きみたちよりもよく勉強したぞ」と先生にいわれたことがあります。だけど、私もが入ったときはもう、満州事変、支那事変からだんだん戦争体制に入っていましたから、そういうマルキシズムの影響を受ける学生運動、進歩的な学生運動というものがあったとしてもほとんど地下に潜行してしまって、学校のなかで芽を出して動くという時代ではございませんでした。だから、各学校にご承知のように軍事教練をするための配属将校というのが来ておりまして、こういう軍人たちがいろいろやることに對して不満を漏らして、三高で配属将校を殴ったというので問題になったことがあります。僕らが二年生のときに二・二六事件が起きたわけです。あのときには学生が寄って集って配属将校のうちへ押しかけて、「軍人がこんなことをするのは僭越だ、生意氣だ」といって……、配属将校も弱っていました。けれども、マルキシズムのそ

ういう系統の運動というのは、私どもが目にするところでは表面上はほとんどありませんでした。

所澤 その時代の文部省の対応と昭和三十年代の対応との連続性はあまりないのですか。

西田 対応というよりも、文部省のその当時の一つの感覚としては、戦前、戦中には文部省は学生の思想取り締まりというネガティブなことをやった。占領軍が来て日本が民主化されたこの段階においては、ああいう過ちを繰り返してはいけないのだという意識が非常に強かったわけです。そういう色合いを帯びたようなことというのは一切いわないようにしておった。だから、学生生活課も生活の保護をするのであって、学生の指導とか取り締まりというのは表面上はやらないのだという看板のかけ替えをやったわけです。それを、私らのときに盛り上がりかひどくなってきた、それではすまないから今度は学生課に変えて、輔導、厚生というのを両方やるということにしたわけです。むしろ戦前から尾を引いている文部省に対するイメージというものをどうやって振り払うかということが文部省の首脳部としては非常に強かったのではないかと思います。

■不況下における大卒者の就職問題

伊藤 分かりました。では、きょうの課題をお話してください。

西田 はい、最初は就職問題ですね。私が「文部省に」来て翌年、昭和二十八年、これが新制と旧制の大学卒業生が重なって出ることで、一二万人という凄い数が出る。これがだんだん具体的な問題で出てまいりました。しかも非常に就職難の時代でしたから、このまま皆が世の中に放り出されたら社会不安が起きるだろう。その対策いかんということで、その頃の総理府に関係各省集まれと呼ばれま

した。私も文部省、厚生省、労働省、関係機関がそこで会議したことを覚えています。ほかの省が、「文部省が戦後やたらに大学をつくるからこういうことが起こるので、文部省はどうするのだ」というから、私も三〇代ですから開き直って、「冗談いな。この大学生というのは外国から輸入したものではなくて、日本のなかで生まれて、日本で育ってきた青年だ。彼らは大学というところで学生として非労働力人口として文部省が抱えている。これを世の中へ出したらむしろ就職難がもっと激化する。就職難の緩和こそしておれ、それを激化させているというのは全然逆立ちしている。もし絶対量として人口のほが多すぎるというのなら、これは厚生省の問題だ」といったことを覚えております。そんなに大した議論ではありませんね。

しかし、そうはいっても文部省としてはどうするのだといえ、最大の問題は、戦前からのイメージとして大学卒業生はこういう仕事にしかつかないという先入観がある。これを打破することだ。文部省はそういう意味で、「あらゆる職場に大学卒業生を」というスローガンをつくりまして、そのキャンペーンをやるという形で、東京と大阪と九州に、今という日経連、経団連、そういう経済団体と共同して学生就職対策本部というような看板をあげて、私は大阪や九州へいきました。そういう地方で「あらゆる職場に大学卒業生を」というキャンペーン——まあ、大したことはありませんが、そういうものを打ち出していきました。

そのときに覚えておりますのは、「そんなに大学生というのは余っていて安い月給でもいいのか。思い切って少しまとめて採ろうか」といったのが今の証券会社です。株屋さん。私も古いことは知りませんが、証券会社というのはその当時まで高等学校校出の人が場立ちをやる、いわゆる株屋の集まりみたいなものだったのです。大学卒業生をまとめてそのときに採った。これだけは覚えております。

す。その後証券業界の人から聞きましたが、それから一〇年たって何が起こったかといったら、昔からの徒弟制度でやってきた証券会社がコンピュータを導入した。そして、労働組合ができた。一種の職場の革命が起きて、新しい近代兵器としてのコンピュータを使った証券事務というものが軌道に乗ってきた。それが証券業界の現在の近代化の大きなきっかけになったということを聞きました。不景気という形によって、普通ならばそこへいかないうような人材がある別の分野にいつて、そこで社会の革命を起こすという効果があるのだなということを実感しました。今から数年前、バブルが崩壊したときに証券会社がある種のお得意さんに利益を戻そう、損失を埋め合わせしようと、その責任を負ってずいぶん辞めましたね。大体年代からして、あの辞めた人たちがその頃に大学生としていった人たちです。

伊藤 トップまでいったわけですね。

西田 ええ。そんなに知的なエリートはあんまりいなかった（笑）。そういう意味で、景気のいいときには大企業とか有名会社に皆いてしまうけれども、就職難ということが社会の人材を再配分する効果がある。その意味においては非常にいい。職業がなくて雇われる人がなかったら何をするかといったら、あの当時ですから遊んでいたら食えません。自分で仕事を始めるより仕方ないわけです。その頃の言葉で、あれはフランス語から来たのでしょうか、アントレプレナリシップ。自分で企業を起こそうという精神が学生の中から出てきて、自分で仕事を始める、雇われるのではなくて雇い主になる、この方向へ学生が動いていく。これが日本の産業構造を変えていく。日本の中小企業というのはある意味でそういう人の集まりみたいなものですね。だから、就職難ということは社会を長い目で見ていけばそんなに悲観することではない。今頃は逆に遊んでいても食えるのですね。親が食わせてくれるものだから、フリーターと

かなんとかいって、何もしないでアルバイトのできそこないみたいなことをして過ごしていこうかと。こういう人が三〇、四〇になったらどうするのだろうかと思うのですけれども……。豊かになった世の中においてそのほうがむしろ心配です。昭和二十八年頃のきわめて困窮した時代の就職難というのは社会的に大きな意味を持った。

そのときに私どもがやったことを今でも覚えていますが、大学生が就職難だからといって就職に走り回っておる。学校もおたおたしてろくに勉強しない。これでは悪循環だから、大学生の就職のスタートを切るスタートラインをぐっと抑えようということを僕らがいい出して、その当時の大学の学生部はみんな賛成してくれまして、日経連、経団連とも相談して、就職のスタートする限度を確か十一月に決めたのです。不景気な時代ですから、会社はそんなに慌てて採ろうとしない。大学側が自分で引き締めて、「おまえたち、これより早くおたおたして就職しようとしても学校は証明書を出さないぞ。就職の斡旋を一切しない」という形でやれば、そこまでは落ち着いて勉強させられる。そういう就職の開始期限というものの協定をしました。これはそれから大体一〇年くらいは守られたはずですが。ところが、その後好景気になってしまって、産業界のほうから、「何でもいいから来てくれ。学力なんかは問わない」という形できだしたら、大学のほうが手綱を外してしまった。産業界のほうも統制がつかないで、今はバタバタになっちゃったでしょう。

それに関連して思い出しますのは、有名なリクルートという会社の江副〔浩正〕社長が、官房長官の藤波〔孝生〕さんの所へ、「国家公務員の就職採用を早くやっているのを、あれがほかのものの刺激になるからもっと遅くしてくれ」と頼みにいった。そのお土産に株の景気のいいのをあげたのですかね。藤波さんは文部政務次官をやっておられるからよく存じ上げておるのですが、立派な方でしたかね。僕らの頃も公務員の採用試験が早すぎるというので抑えさせ

て、産業界と足並みをそろえるようにしたわけです。それが崩れてきたから江副氏が頼みにいった。決して間違っていないことで、それは政府としてはいわれなくてもやるべきだと。ただ、それで景気のいい株がまわってきたというのがいけないのかも知れないけれども。だから、それはむしろ話が逆転しているのですね。政府のほうも野放しになったし、産業界のほうも統制をやめてしまった。今頃はあれでしょう、二年生の頃から就職に走り回っているようですね。

小池 青田買いですね。

西田 一体何をしているのかと思います。

伊藤 一方で、就職を希望しないでフリーターになるという、初めから就職をあきらめている学生がたくさんいますね。

西田 いつまであきらめているつもりでしょう。

伊藤 まあ、そのうちに落ち着くのでしょうか。

小池 いま教員をやっていると大変ですよ。三年の今頃は浮き足立っていますし、実際には四年に入る前に早い者は決まっています。大体ピークは四年の五月くらいです。その後には公務員試験です。この点問題で、比較的規模の大きい優良企業では公務員試験に就職時期を合わせていこうという動きがあるのですけれどもね。

西田 だんだん産業界が、大体毛並みのいい粒のそろったがこの学校の卒業生なら採れそうだと大学の銘柄で多少仕分けをする程度で、大学で何を教わったか、何を身に付けてきたか……、大学教育の中身はあまりあてにしない、という方向にいつてしまっているのではないのでしょうか。

所澤 先生の頃は、例えば東大から何人とか、どの大学から何人とか、指定校みたいになっているのが結構あったのではないかと思うのですが、それはいかがでしたか。

西田 それは会社によってはあったでしょうね。学校の銘柄によって採用を決める。それが一番確かだということなのでしょう。後は

入れてから自分らで教育するのだと、そういう方向へだんだんいきました。これは後の話ですが、私が高専にいった頃にその点が非常にはっきりしてきて、大学生と高専卒業生というのは勉強した年限が二年も違うわけですが、採用試験も後の訓練も一緒にやって、伸びるほうを伸ばす。大学卒と高専卒との給料の差をつけることをやめたというような会社がいぶん出てまいりました。だんだんそういう方向で、むしろ実力方向へいくということですね。逆にいえば、大学で教えていることなんてあてにしていけないのです。

所澤 僕が大学に入ったのは昭和四十九年です。その頃から指定校みたいな学閥をはずすという動きが出てきました。結局どうなったかというと、学閥をはずすと試験の成績の優秀な人が入ってくるので、どこの会社も有名な学校ばかりになってしまいます。一つの学校、東大なら東大の人間ばかりが増えてしまっていて、いろんな私大などから人が入っていた会社だが、一部の国立大学とか早稲田、慶応くらいしか入らなくなるといったことが起こって、かえって実力型にするというのがいいかどうかという話も出ていたみたいです。そのへんのバランスみたいなことは、文部省の中では考えられたのでしうか。

西田 いや、そんな先のほうまでは知りませんね。僕は学生課は三十七年までですから。

伊藤 とりあえずは、まず職を探してやらなければならないということでしょう。

■朝鮮奨学会に関連して

西田 就職問題はそのくらいです。

その次に年代からいって昭和三十年頃のことですが、ちょっと話

の毛色が変わりますが……、外国人に対する奨学資金の問題で、朝鮮人の問題にちょっと触れておきたいと思います。これは発端が変なこととして、私が文部省へ出てきた頃には東京の新宿西口のほうは焼け野原でして、闇屋が走り回っていました。そこに、日本の植民地時代に朝鮮総督府が日本内地へ来ている朝鮮人の留学生を指導監督するための「朝鮮教育会」というのをつくっておりました。それが後には日本の財団法人になって、「朝鮮奨学会」という名前にして土地建物を持つておったわけです。これが、敗戦になって総督府がつぶれてしまって、その持ち主が消えてしまったわけです。

伊藤 財団は継続してあるわけでしょう。

西田 財団はあります。朝鮮総督府の権威がなくなってしまうわけです。そうしたら途端に日本内地におった朝鮮人の学生たちが、「これは我々の民族財産だ」といって、南北に分かれてそれを取り合いたわけです。新宿の西口にあったその建物に学生が泊まりこんで入っていました。そこで大乱闘が起きて、血の雨を降らせました。私はその現場は知らないのですが……、あの当時は淀橋警察といていました。警視庁が治安上危ないからそれを警備して全部取り囲んで、中の者を全部追い出した。これは治安上困る。これは何だといったら、朝鮮奨学会という財団法人だという。こんな法人は早く解散させようという形で調べてみたら、その法人の所管官庁は奨学金を出すところだから文部省だ。文部省へいったら、学生課だ。こういうことで警視庁が私のところへやってきて、「治安上困るから、ああいふ団体は早く解散させてくれ」といつてきたわけです。私はそのときに初めてそれを知ったのですが、とにかくその現場へ見に行くことにして係官と新宿へいきました。寮は閉め切ってあってお巡りさんが警備しているのですが、中にとぐろを巻いている寮生みたいな者がおりました。

彼らは戦争中までは日本人だったわけです。日本育英会の奨学金

ももらえた。敗戦とともに外国人になってしまった。外国人留学生でもない。文部省の留学生援助ももらえない。全然どこからも金をくれない。それではいぶんかわいそうではないか。せっかく朝鮮奨学会という看板が残っているのなら、この団体を育ててやったらどうだろうかということを考えました。後から考えると、それは私が朝鮮の咸鏡北道の生まれで、朝鮮人というものに対するいいところも悪いところも自分なりに知っていて、朝鮮人と接することが怖くないものですから……。そういうことを考えて局長にいましたら、あの頃は南北の対立が厳しかったですから、局長が、「そんなものをやると火傷をするから、よせ」といわれました。「いや、私は朝鮮人が怖くないから、私の思うようにやらせてください」といったら、「きみがそういうのならやってみろ」ということで局長から任されました。昭和三十年頃ですから、私がまだ三八歳くらいですね。

伊藤 それは課長の時代ですね。

西田 もちろん学生課長です。若かったものですから、偉そうに、「南北朝鮮の代表者は誰だ。朝鮮総連の議長と韓国居留民団の団長は文部省に出て来い」と大胆なことをいったわけです。「新宿の朝鮮奨学会を解散するかどうかということで相談したいが」というと、皆関心を持っているのですけれども、俱に天を戴かず、一緒に座るのは嫌だ。それなら別々に来いといって、かなり上層部と話をしました。擦った揉んだしました。その頃には、あそこにおった闇屋が権利を主張したり何だかで、財団法人の中身はめちゃくちゃで、理事は皆辞めてしまつて責任者はいないという格好でした。財団法人の理事というのは、理事がいなくなると裁判所が仮理事を選任するのです。そのために、所管課長の西田学生課長来てくれと東京地裁から呼ばれました。「文部省としてはどうするのだ」「いま南北の朝鮮というのはどこも色合いがついているのだから、中立の無色の朝鮮人なんていやしない。むしろ北と南からちゃんと代表を出させて、

それに日本人の側からも信用のある人を入れて、三者構成で法人を運営するようにしたい。そういう形の理事の選任をやってください。それが文部省としての方針だ」「分かった」ということで、裁判所から仮理事の選任がありました。今度は、朝鮮総連と韓国居留民団に、そういう形で今後運営するから、南鮮と北鮮からこれだと思う推薦者を出せ、それを理事に選任してもらってやるからと。

ずいぶん後に出てきたのですが、これ〔文書〕は昭和三十一年に私が学生課長名でそのときの仮理事に出した文書です。三者構成でやる。一旦これをやった後は外からコントロールしたら承知しないぞという、これは通知でラブレターみたいなものです。課長は通達を書けませんか……。これはこの後の学生課が何かのときに見つけてきて、「これは公文書ですか」と聞きに來たことがありました。しかし、相談した結果こうなりましたということにして……。結局、これで両方が推薦した者が理事になりました。朝鮮奨学会というのはその後何十年、現在まで南北が一緒にテーブルについて仕事をしているのです。

伊藤 これはなぜ船田さんなのですか。

西田 船田さんが仮理事になっていたのですね。この崔竜洙というのは闇屋です。南正一というのも日本名を名乗っていますけれども朝鮮人です。もう本当の理事はいなかったわけです。

伊藤 どちらが北なのですか。

西田 崔竜洙は闇屋で分らないですね。南は北鮮です。この船田さんというのは日本人です。

伊藤 船田中の弟〔享二〕か。

西田 私は、裁判所が理事の選任をやつて三者構成ができて、この年の十一月にアメリカへ三ヵ月出かけたから、後すぐは知りませんでした。それが動き出して、特に北鮮系の理事がなかなか優秀で、彼がそこでいろいろ借金をしたりして西口に新宿ビルという地

上九階建ての建物をつくったわけです。それが朝鮮奨学会の土台になっています。

伊藤 監督官庁は文部省になったわけですか。

西田 もちろん学生課です。

伊藤 もともとは朝鮮総督府が監督官庁だったのでしょうか。

西田 ええ、それが昭和何年かに文部省・厚生省共管の民法法人になったのです。この騒動が起きた頃は民法法人だったわけです。だから警視庁が私のところへ来たわけです。私はその後何十年ぶりに新宿へ帰ってきたときに、これがあるのを見つけてひょこりのぞいたら、「西田先生」といわれて、今日まで評議委員をやらされているのです。現在は新宿ビルは立派な建物で、この店子は、東京三菱銀行、東海銀行、この間まで住宅公団も入っていました。その納める家賃が年間に十何億と入るわけです。それで朝鮮奨学会は堂々たる奨学事業ができるようになったわけです。

伊藤 在日朝鮮人の。

西田 一応、日本の学校教育法による学校にしている朝鮮人の子弟に出すという形でやっています。

伊藤 在日ですか。

西田 在日でも向こうから来ても構わない。これが年間どのくらいかと、きのう調べてみたら、平成十四年度、今年度の本館ビルから年間に入る家賃が一億です。そのうち七億七〇〇〇万が奨学金にまわる。家賃その他の修繕費。奨学金の予算が四億二〇〇〇万円。

奨学金を出しているのは、これは凄いですよ、日本育英会のような貸与ではなくて、みんな給費、やりっぱなしです。高校生が月額一万円、大学生が二万五〇〇〇円、修士課程は四万円、博士が五万円。毎月ですよ。それを、大学生は六五〇人、大学院は一〇〇名ほどの奨学生を毎年とっているわけです。これは日本の民間団体の法人としては堂々たるものです。これもこの家賃収入があるから。し

かも、元朝鮮奨学会の基盤があった。それを生かしたことによってできたというので、この人たちはそのときの斡旋をした私に非常に恩義を感じているものだから、私が何年か後に評議員になったときに、「朝鮮で引き揚げのときに家族が向こうで抑留されて、年寄りの親父だけが死んでしまった。墓がどこにあるか分からんから、一遍墓参りもしたいのだ」という話をしたら、「それなら、西田先生に恩を返すためにあなたを北鮮に招待しましょう」という話になりました。これ「招待状手紙」はそのときにもらったコピーですが、ハンゲル文字を日本語に訳してくれました。朝鮮の対外文化第四課から——総連という北鮮系の団体がありますが、東京の総連地方部に手紙が来て、西田亀久雄氏と私の女房と、わが国の訪問を熱烈に歓迎しますと。これが来たものですから、北京にいったピザをもらって、平壤に入って、清津まで約一週間の旅行をしました。伊藤 今その清津が問題になっていますね。それはいつの話ですか。西田 これ「文書」はそのときに向こうへいく計画を書いて出したのですが、一九九〇年。私のいきたいところは清津のこういところで、ここどこにお墓があって、親父はこの辺で死んだのだと……。一九九〇年十月二十二日から三十一日まで女房と二人で旅行したわけです。費用は全部朝鮮奨学会が持ちました。これぐらい金がかかったと、後で向こうからもらいました。百何十万かかったのですね。朝鮮人というのは恩義を感じると、我々日本人以上に綿密なことをやります。

これで行ったものですから、私は女房と二人で周ってきて、写真とビデオを全部写してきたのです。戦後一九九〇年頃に、北朝鮮の日本海側の清津の辺りにいった日本人はいません。それをどこからか聞き伝えてきて……。『不審船が消えたとき』という毎日新聞に掲載された写真は僕が撮ってきた写真です。そうしたら、四、五日前の十月八日、先週ですね、連れ込みの人が清津にいったというの

がありましたでしょう。毎日新聞があのかきの写真をもう一遍使わせてくれと。こういう戦後の清津の写真なんていうのはほかにないはずですから……。僕が清津の山の上から港のところを写したところですよ。

小池 よく撮るときに許可されましたね。

西田 このときは熱烈歓迎ですもの。ゲストですよ。

小池 写真を撮ってもよかったのですか。

西田 ああ、もう自由にやった。港へいったときに船を写していたら、鉄砲を持った女の兵隊が出てきて、「ノー」といってとめられました。ほかは自由でした。元の親の墓のあったところは、めちゃくちゃにひっくり返っていて、町は元の面影もありませんでした。

伊藤 町並みもですか。

西田 町並みもすっかり変わっていました。ここに親父の鉄工所があったんだなんていう話をしていたのですが。ゲストだから、最後に平壤に帰ったときに朝鮮労働党の中堅幹部の人が一席設けてくれたのです。平壤の郊外の物凄く立派な特権階級の保養所みたいなところでご馳走してくれました。最初にマグロの刺身が出てきたりして……。みんな通訳をつけて朝鮮語でしゃべっているわけです。

「清津にいかれた感じはどうですか」というから、私は、「もとの町はまったく壊れていたけど、山の姿とかそういうものは同じで、ふるさとの山はありがたきかなという感じがしました」といったら、「啄木ですな」と日本語でズバツというのです。日本語を使わないだけで知っているのですね。きょう帰ってくるのでしょうか、拉致家族が。

小池 もう今頃は羽田へ着いている頃ですね。

西田 朝鮮奨学会に関連して、こういう平壤の話、清津の話から、熱烈歓迎まであったということです。

小池 先生、もしかしたらそのときにお会いした通訳の人は拉致さ

れた人たちに教わった方かも知れませんよ（笑）。

西田 いや、女房に、あのかきによく拉致されなかったなと（笑）。今から考えるとぞっとしますね。特に清津の近くの咸鏡北道の日本海側のほうは、戦後日本内地から北鮮に引き揚げたたくさん朝鮮人のなかで、向こうに適応できないでむしろ反政府的になって、政治犯のように抑留されている人の抑留所が、たくさんあるのではないかと。いうわさは聞きました。

伊藤 今でも日本育英会は朝鮮人には奨学金を出していないわけですか。

西田 出していません。

伊藤 あれは日本国籍ということだ。

西田 日本人に帰化すれば別ですけどね。

■学生の実態調査の実施

小池 就職問題の話なのですが、現在国立大学でも就職部等をつくるところが出てきましたけれども、その当時、大学の就職問題を先生のほうからいろいろ話をされるときに、大学側はどのように対応をしたのですか。

西田 労働問題は、労働省が全体的にやって、「職業安定法」という法律を持っています。その法律で、大学生の就職斡旋というのは、大学自体が無料職業紹介所としての登録をして、自分の責任で学生を世話するという体制にしているわけです。特に国立よりも私立が熱心ですが、学生の就職がどれくらいいいかということで大学の評判が決まるものですから、大学は就職問題には非常に熱心です。学生部だけではなくて、学部の主要な先生方が就職口開拓のために実際に動き回るといのが実態でしょう。

小池 先生の頃、就職問題で大学の先生方はよく動いたものですか。
 西田 そうだと思います。不景気な頃でしたから。大体先生の口利きで就職するということをみんなやるのが普通で、戦後、私の長男も次男も東京理科大学卒業ですが、みんな先生方の世話で就職しました。実際の会社とのコネからいえば、やはり学生部の人よりは、個々の先生方のほうが、非常にコネが強いわけでしょう。先生に頼んで、いい人を送り込んでもらうということが、会社としてはメリットですからね。

その次に育英会のお話にく前提として、学生の経済生活なり健康問題なりが非常に逼迫してきたということで、昭和二十八年頃、私が学生課長になった翌年くらいから、学生の経済生活の実態調査というのをやりました。文部省に昔から——戦中、戦後、統計課というのがありますけれども、これは教育委員会や府県から集まってきた統計をタイガー計算機を回して勘定するだけのものです。私が学生課にいったときに学生課の生活調査の予算というのはあったのですが、それはやはり大学の学生部からいろいろレポートをもらうという程度でした。理科系の人間として私がいつて、この限られた予算の中でもっと信頼性のある統計をつくるために、その当時だんだん普及してきた標本調査、サンプル調査の方法でもっと実証的ないいデータをとろうと、全国的な調査をやることを設計したわけです。これだけは、私は多少自慢しているわけです。大体文部省の中に私のような理科系の人間が採用されていないのですね。法学士と文学士ばかり。

一番最初の二十八年度の実態調査というのは相当膨大な全国調査でしたけれども、昭和二十八年十一月頃の一ヵ月間の生活実態調査をやったことです。しかし、私はその翌年からもっと改良して、一年間ぶっ通しの調査をやるうとしました。予算は決まっていますけれども、サンプルの採り方で、日本中の大学を国公私立に分

類して、各大学に、おまえは今月だ、あなたの学校は翌月だと、その学校の中で学生名簿からサンプルで学生を任意抽出するわけです。一年間一二月、違う地域の違う大学から全部データを集めて、このときはまだ文部省にはコンピュータがなかったですから、学生課長が机の上でタイガー計算機を回して計算したわけです。この集計も学生課の中の一般の職員ではできませんから。「課長は窓のほうに向かって計算機ばかり回している」と、よく悪口をいわれました。そういうサンプル調査をやることについては、ご承知のように文部省には統計数理研究所というのがくっついていています。ここに専門家がいます。サンプルのとり方とか、信頼性がどうか、その指導も受けましたと書いてあります。

伊藤 調査局は全然関係ないのですか。

西田 調査局はこんな調査をしません。どこの国の教育制度はどうなっているとか、そういう文献資料の調査です。統計はやりません。

伊藤 でも、法定の調査はやるでしょう。

西田 その頃調査局には統計課と調査課があって、調査課は文書調査。統計課は都道府県や学校を通じて指定統計という形で報告を求める。おまえさんのところの学生は何人おるかとか、それを集めて文部統計という報告書をつくるわけです。だけど、実態調査という、学生がどれくらい経済的に困っているかという調査はそういうところの手に負えないわけです。これ〔報告書〕なんかを見ていただくと、私は理科系ですから、出てきた膨大な統計を整理して、学生がどれくらいアルバイトしているかとか……。これは二冊に分かれています。

伊藤 同じ年ですか。

西田 同じ年です。同じ調査のなかの、経済生活がこちら、疾病がこちら。この疾病調査は何でやったかというところ、学生課長になった翌年に、育英会の監督官庁ですから、学生課長は育英会の評議員と

して育英会の役員会に出るわけです。そこで育英会の事業報告を聞きましたときに、奨学金をもらって途中で亡くなって奨学金を辞退する人が出てくる。一年間に何人か現役の学生が死亡する。その亡くなっている学生の三分の一が自殺だったのです。大変な数ですから心配になった。表向きにはあまりしきりませんから、びっくりしました。各大学にデータは残っていますから、内密で学生の自殺調査もやりました。戦前、戦中、戦後のこともできるだけ集めてみましたら、おもしろいことに戦争中のあの厳しい時代というのは自殺がほとんどないのです。一種の違う意味の緊張感があるわけです。むしろ戦後の経済的に困ってこういう拘束力がなくなったときにどんどん増えてきた。それから、もちろん学生の休学者がどんどん増えて、この統計に出ています。休学者の四割が結核。

小池 結核ですか。

西田 まだその頃は結核です。昭和二十九年頃ですね。しかも、その学生たちは、あの当時の健康保険制度からいえば、自宅を離れている連中は、医療費の支払いを親の健康保険で払ってもらえないのです。生活の本拠が親のところであって、寮とか下宿というのは仮住まいだから健康保険の適用はされていない。そいつは困るから、これで医療費が幾らかかって、誰が払っているかというのが全部出ているので、この調査を土台にして学生健康保険組合というのをつくろうとしたわけです。そのために、学生が年間にどれくらいの病気になるか。この調査の一番後ろに厚生省の病気の種類の一覧表が載っています。これごとに全部、学生に毎月こういう日計表をつけさせるわけです。今月は幾ら金を使って、風邪を引いたとか。一ヵ月ごとに大学は本人を呼び出して聞いて、これを書くわけです。翌月はこの学校、翌月はこの学校と人が変わっても、一年間出てくるわけです。この膨大な調査をやりました。これは大変得意だったのですが。こういう形で、年間の学生の医療費はこのくらいかかっ

て、結核の費用は半分国がみるとしたらこれくらいかかるとか。

そういう形で一応の目処を立てていけそうになったのですが、その頃厚生省のほうも、自宅を離れている学生の健康保険というのが気の毒だから、これの改善をしたいという形で、厚生省と私どもと総理府の人と集まって会議がありました。健康保険というのは、生活の本拠に親がおって、そこが保険料を支払うと。生活の本拠というのはどこだといったら、下宿や寮はだめだ。その相談に、どういうわけですかねえ、総理府のほうから、昔の最高裁みたいな戦前の大審院というのがあったでしょう。その判事をやっていた人が出てきて、「生活の本拠なんて分かりきっている。仏壇のあるところだ」と。戦前の人からいえば、長男が仏壇、生活の本拠は仏壇のあるところだというのを聞いて驚きました。そういう議論が出たことを覚えていますが、その後の経過は覚えておりません。厚生省の健康保険制度が改良されて、学生も寮などで健康保険が使えるようになってきたので、これは調査しただけで立ち消えです。

伊藤 結果が出たということですね。

西田 こういう調査をしたことが一つの刺激になった。学生の病気をしている度合いも分かった。

伊藤 やはり結核が一番多いのですか。

西田 この当時は一番多かったです。

伊藤 しかし、もうそろそろ結核は……。

西田 昭和二十九年頃は、まだペニシリンなんて出てこない頃ではないですか。

伊藤 いやいやいや、もう出てきていると思います。

西田 そうですか。この中で結核の次に多いのが精神神経症です。ノイローゼ。こんな資料も結局うずもれてしまいました。が、貴重な一つの文献ですね。今これ「報告書」はどこにもないでしょう。文部省ももう置いてないのではないですか。私としては大変未練のあ

る調査でした。

小池 これもずっと毎年同じような調査をされたのですか。

西田 これから後も毎年かやっていました。学生の就職情報についても、年五回くらい、卒業前の九月頃、十一月頃、翌年の二月頃、卒業した四月、六月まで追跡調査をやっていました。そういうサンプル調査も私が得意として、設計して、一応近代的な調査法は確立したつもりなのですが、私が辞めた後は自然につぶれてしまったでしょうね。誰もそんなことをする人はいない。

伊藤 だけど、数理統計研究所があるわけでしょう。

西田 それは研究しているだけで、文部省がやる実態調査について相談にあって、向こうの人に協力を頼めばやってくれますけれども、そんな面倒なことを普通の行政官はやりません。

村上 統計課のほうがそれを引き継いでくださるということもないのですか。

西田 私がその後官房のほうへ移って、今度は直接、調査課、統計課を所管するようになったときには、統計課の中にそういうコンピュータを駆使する専門家を育てました。文部省には明治以来のたくさん文献があります。その数量的なものは可能な限り全部データベースにコンピュータに入れることをやらせました。それが文部省で生きているはずですが、それを使っている人がいるかどうか。

所澤 そんなデータは公開されていないのではないかな。

西田 情報公開のデータベースとしてはあるはずですよ。

小池 いや、あるんですよ。資料の目録はあります。資料もマイクロー化されています。文部省はそういう意味では所蔵されている資料のマイクロー化は官庁の中でもっとも早かった。先生がやられた仕事があるがゆえに、古いものが整理されていたということではないでしょうか。

西田 その後で出てきます中教審のときには、そのデータベースか

ら全部資料を出して会議に出しました。実証的なデータが、明治以来こうでしたということがすぐ出てくるわけです。ただ、これも後の笑い話ですが、コンピュータを入れて仕事率が能率化してきて一番困ったのは統計課なのです。これまではタイガー計算機を回して地方から来た報告を集計して、一年かけて報告書を書いていたわけです。コンピュータに入れたら数時間で出てしまうわけです。統計課の連中はやるのがなくなってしまう。むしろ、コンピュータを遊ばせてはいかんといわれるから、機械のほうから、「次に何をやりますか」と人間が問われるわけです。コンピュータを入れたためにきりきり舞いしなければならなくなった。次は何の調査をする、次はどういう分析をする。これで統計課の連中からは評判が悪かったです。機械というのはそういうきわめて皮肉なものがありますね。人を助けてくれるのではなくて、余った人手を今度はどうするか、考えるのは人間のほうですから、機械がそれを問いかけてくるわけです。

所澤 コンピュータはいっつ入ったのですか。

西田 私が大臣官房へ移ってからですから、昭和四十三年です。

伊藤 このとき（学生の実態調査のとき）はタイガー計算機ですか。

西田 ええ、このときはタイガー計算機。懐かしいですね。

小池 昭和四十三年にコンピュータを入れるというのは、中央官庁でも結構早いほうだったのですね。

西田 早いほうです。東芝と富士通と四つくらいの会社を見て回りました。ろくに分かりませんけれども、とにかくマークシートがそのまま読めるようなコンピュータという形でやりました。コンピュータを入れるときに、僕は参考に関係の情報を聞きまして、一番進歩しておったのが防衛庁と、もう一つはどこでしたかな。

伊藤 労働省ではないですか。

西田 ああ、労働省でしょうね。

伊藤 職安紹介がありますから。

西田 一番遅れているのが外務省でした。

伊藤 要らないんだろうな(笑)。

小池 いや、いろいろ仕分けしなければいけませんから必要だと思えますけれどもね。外務省は導入したのが四十六年ぐらいでしょうか。遅かったと思います。

西田 四十三年にそれを入れまして、私らは野心的に、このコンピュータを最高度に活用する責任がある。レンタルで入れているでしょう。使わなくなった金がかる。コンピュータというのは人間が将来の行動を起こす一つの指針を与えるデータだ。そういうふうに使うためには、各局の行政目的が何であるかということをはっきりつかもう。それで各局の第一課長を呼んで、「あなたのところの局の行政の目的は何であるか。その目的を達成したかどうかを測るメジャーとしては何があるのか。それを一覧表にして出せ」といったら、「そんなことが分かるか」といわれました(笑)。コンピュータを入れて初めて、どの局も行政目的をはっきりもって仕事をしているところはないということが分かりました。情けない話ですね。学生課ならば、日本育英会の仕事は貧困による就学困難な人を少なくするというのが目的でしょう。それを測るメジャーとしては、同一年齢層の卒業生の中で進学を断念した者の率がどれくらいあるかないか、そのデータをとればいいわけです。それははっきりしているわけです。ところがほかの局はだめですね。何もやっていない。そんな目的なんて分かるかというわけです。それで、コンピュータとリンクしたようなことをやることはあきらめました。だから、人間のほうが機械についていけないのです。

伊藤 やはり、三十一年で紙が悪くなってきていますね。劣化している。

小池 酸性紙ですね。先生がこの円グラフをつくられたのですか。

西田 その絵を描くのも全部自分で描きました。

伊藤 これは凸版にしたのですか、それとも。

小池 活版ですよ。

西田 凸版の絵ではないですか。

伊藤 この部分は凸版でしょう。でも、なんとなくガリ版刷りみたい(笑)。

西田 ガリ版の一步進歩したくらいでしょう。しかし、日本中を対象にして、しかも毎月やるという調査を限られた予算の中でできるというのは標本調査の得意なところですね。それで信頼度が非常に高い。

伊藤 予算はどうなるのですか。

西田 予算は、学生課に昔から学生調査予算というのがあったのです。僕はそれをちっとも増やさないで、サンプル調査にして同じ予算の中でそれだけ規模を広げたのです。むしろ使い残りが出ました。そうしたらうちの庶務主任から、「課長、こんなに金を残されたら困ります」といわれました。出版におったでしょう。民間の会社から来た人間として、お金を使い残して文句をいわれるというのは初めて聞いた。効率をあげたらいけない。

小池 必要なものを買えばいいんです(笑)。

西田 大学の法人化でもその点はそうですね。とにかく効率という思想が官庁にはないのです。予算というのは大蔵省に談判してもらってくるものだ。もらったやつは使わなきゃ損だ。使い残したら翌年減らされると。悪い制度ですよ。

伊藤 悪い制度ですよ。僕らも科学研究費をいただいて、ゼロにしなければいけない。

西田 つじつまを合わせなければならぬ。

伊藤 現実にゼロになるなんていうことはありえないのですけれどもね。

西田 残したら次の年にそれを有効に使えとまわしてくれればいいですよ。法人化した場合もそれをしなければだめですよ。それを一々取り上げたら、誰も使い残す人はいなくなってしまうですね。

小池 特に研究費等は、単年度予算にしたら絶対だめだと思うのですけれどもね。

伊藤 そうですね。必要な年はうんと要るし、それほどでもない年だってあるのですから。これ〔資料〕後でコピーさせてください。

西田 はい、うまくとれますかな。

伊藤 とれます。なるべく傷めないようにとりますから。

小池 できれば先ほどの朝鮮奨学会のものも。

西田 これは奨学会自身が出している「奨学会の概要」です。

小池 それから、先ほどの談判表というか、先生がラブレターとおっしゃられたものもぜひ。

伊藤 そういう形のものがあるとは知りませんでしたね。

小池 はい、僕も初めてです。

西田 これもおそらく朝鮮奨学会が金科玉条にして、資料の中にも書いてありますが、「西田課長の通達によって」なんて。

伊藤 これはどういう性格の文書なのですか。

西田 要するに手紙です。公文書ともいえない、私文書に近い。だけれど、それを金科玉条として。

伊藤 これを出すためにはやはり局長の許可をとるのですか。

西田 それはとりました。

伊藤 局長の許可さえあればいいわけですか。

西田 ええ。

小池 外務省だったら「半公信」といいます。

西田 「理事会再建」とここに書いてあるでしょう。「昭和何年、西田課長の通達により」なんて書いてある。

小池 あ、本当だ。通達になっていますね。

伊藤 そういうふうに理解してくれればいい(笑)。

小池 受け取り方次第ですね。

伊藤 やはり法的な根拠があると。南北朝鮮がよく話し合いがつかしましたね。

西田 それをやらなかつたらつぶすといったわけです。南北で思想が違って、この土地建物を利用して朝鮮人の子弟のために金を出すという事業のやり方について意見が違はずがない。誰が一番いい運用をするか。ここで南朝鮮、北朝鮮の区別なしに学生にちゃんと出すという仕事をやるのなら、きみたちは協力してやれ。北から来た、南から来たという看板をはっきりさせる。誰がつまらんとをいっているかというのは、理事会をガラス張りにしてやれば、奨学会のためになることをいっているかいないかははっきりしてくる。日本人もそこで聞いている、監督官庁も見ているのだから、堂々と南北一緒にやれと。その後、僕が知っている限りでは、公の席ではちっともけんからしいことは出ませんね。私がときどき一杯飲んで、「あなたたちはお互いに何の恨みがあるんだ」というと、「いや、別に何もない」という。「どうして親子の行き来さえ制限しているんだ。何の権利があつてとめているんだ。おかしいじゃないか」というと、にやにや笑っている。不思議なものですよね。

伊藤 それは意地悪というものです(笑)。

小池 先生、今そんなことをいったら、日本のせいですから。

■日本育英会の窮状

西田 では、これ〔資料〕は皆お預けしておきましょうか。

後は育英会の話になりますが、昭和三十三年頃、中教審にやはり奨学援護の議題があつたときに、学生課から中教審に來ている報告

書のコピーです。この後ろに育英会の現状。今のままだと三〇年の後に育英会の学生に貸した借金がいなくなって、毎年その金をとるのにこれだけの金がかかって、にっちもさっちもいなくなるだろうと書いてあります。最近、今度は法人化のときに育英会がだめだということでそれが出てきたでしょう。不良債権がたくさんある。育英会も不良債権で弱っているわけです。

伊藤 そのときに、もうそういう状態ですか。

西田 ええ、私が予測したわけです。

伊藤 では、それも貸してください。

西田 育英会のことは今から申しあげますけれども、そういう点で、やはり私の頃から既に企業体としてはきわめて弱点のあるものだったということがはっきりしていたわけです。

伊藤 育英会は学生課の所管ですか。

西田 所管です。官庁で、一つの団体を所管するのはこの局の何課ということが決まっているわけです。一般的に財団法人というのは総務課がやっているわけですけれども、中身によって、奨学事業は学生課というふうに決まっています。

伊藤 ほかに学生課として所管している財団はあったのですか。

西田 育英会以外で民間の財団法人があります。

伊藤 やはり育英事業ですか。

西田 ええ、育英事業をやっているやつが。三重県の田舎の親父さんが亡くなって、山に森林が何町歩ある。その木を切って材木で出せば金になる。親父さんがそれを子どもに引き継がないで財団に寄付して基本財産にして、毎年材木を切って儲かった金だけ奨学金を出すという団体ができました。

伊藤 結構たくさんあるのではないですか。

西田 ありますよ。

伊藤 それは県の所管になっているものもあるわけでしょう。

西田 いや、財団法人はやはり直接の監督官庁は国でしょう。

伊藤 そうですか、県もあるんじゃないかな。あれは社団か。

小池 社団法人なのかも知れませんが。ただ、僕の学生なんかでは、宮崎県のなんとかの奨学金でお金をもらっているとかというのもしましたよ。「どうして育英会でもらわないんだ」といったら、「育英会は返さなければいけない。こちらは返さなくてもいいから」と。

伊藤 学生課でいまだに大きなのは日本育英会と朝鮮奨学会ですね。朝鮮奨学会も金が大きいですから。財団法人ですけれどもね。

伊藤 そうですか、朝鮮奨学会は大きいほうですね。

西田 大きいほうです。年間純益が十億近く出てくるというのは、そんな財団はありませんからね。

伊藤 そうですね。基本財産が大きくても、今は利子を生みませんからね。

西田 育英会なんていうのは親方日の丸でもらってくるから大きいだけで、自分で稼いでいるわけではない。

小池 確かに。

伊藤 でも、返還された額だってあるわけでしょう。

西田 ええ、それが滞るばかりで。

伊藤 課長は育英会の何になるのですか。

西田 監督官庁ですから、役所の立場になれば、育英会の理事に対して命令をしたり指示したりすることもできるわけです。日本育英会は財団法人ではなくて特殊法人です。法律でできているわけです。育英会法には、「文部大臣の監督に属す」と書いてある。文部大臣の手足として私どもが直接理事に文句をいえるわけです。だから学生課長に対してはピリピリしていますよね。予算も僕らが大蔵省と交渉して育英会に渡すわけでしょう。すべてのルートを握られているわけです。

伊藤 文部省のなかでは育英会の予算というのは一番大きなもので

すか。

西田 二番目です。国立学校予算というのが一番で、その次です。育英会のことを申しあげますと、発祥からいえば、日本育英会法というのが法律でできて特殊法人として生まれたのが、昭和十八年か十九年〔昭和十九年法律三〇号〕。これは、昔の議事録でいいますと、戦争中で兵隊さんが軍事予算で威張りまくって国会がほとんど権威を持たなくなったときに、国会の与野党の議員が議員立法で日本育英会法というのをつくって、奨学事業という誰がみても将来の日本のために一番いい仕事をやろうということのできた法律です。これは役人が起案したのではないのです。国会の与野党合同の議員立法でできたのですね。大日本育英会。

伊藤 そうだ、大日本育英会だ。

西田 そのときの国会の議事録を見てみますと、おもしろいですね、国会でまじめな議論をしたのです。私もその後で問題にしました、なぜあれをやりつきり〔給費〕ではなくて貸与にしたのかというのは、子どもの学資というのは親が出すべきもの。それを親が困難だからといって国が出してやるというのは社会主義だ。堂々たる家族制度の国家を維持するためには親が第一に責任を持つものだから、親に借金させて親に出させる。あるいは、それを給費にしているのかん。給費にしなかった理由は社会主義だという。そういうその当時の長老型の考えなのです。毎年育英会に何億円か出していったら、それが今度は戻ってきて、そこで貯まった金ぐるぐる回るだけで育英会は自動的に動けるようになるはずだと、総額何百億円で動くのだという計算までできているのです。

そういう格好でスタートしたのですが、貸付を受けた人が返還する期限というのは平均して一五年間です。学校を卒業してサラリーマンになって稼いでやると。そういう格好になっていきますと、だんだん返還が滞ってきて、その滞っている人に遅れていますよと催

促する事務が大変な量になってくるわけです。私が昭和二十七年の学生課長になった途端から育英会の所管になったのですが、育英会の役員会に出て話を聞いているうちに、「じゃあ、来年この奨学金を戻せと催促すべき人がどこに何人くらいいるのかということはどうやって分かるのか」といったら、「それが大変なのです」というようなことをいっているわけです。そんなばかな話があるかと。債権者が債務者をきちんととらえていないのですからね。親方日の丸で金はどんどん来るものですから、貸した金が戻ってこようがこまいが平気な顔をしているわけです。

それでは話にならないので、横浜市立大学の会計学の先生にお願いして育英会の経理組織を全部再検討して、その処理をコンピュータでやるということを私が提案して、育英会のすべてのデータをコンピュータ化したわけです。これは年寄りの昔の文部省の大先輩みたいな人が理事でいっているわけでしょう。こんな人はもうコンピュータなんていうのはなじみがない。「西田君、コンピュータを入れたら、帳面ではないからどこに何があるか開けて見るわけにはいかんじゃないか。目に見えないから不安だ」というわけです。理事の人はずいぶん消極的でしたが、もうそうはいっておられないで導入しまして、なんとか動くようになったわけです。

伊藤 やはり何年かかかったのですか。

西田 ええ、かかりました。私もが在任中にもちろんできましたから、まあ、三、四年でできたのではないですか。それができてデータをいろいろ出させてやってみると、返還状況が非常に悪い。戻さない人に手紙を出して督促しても返事をしない。借金ですから最後に差し押さえますよというところまでいかなければいかんわけですね。それをやったときに、家まで押しかけていって無理やり強制執行するところまでやるのか。それをやると大変なのですが。そういう催促にまわる人たちを育英会が職員として持って、その地

域に出かけて行ってやるのにどうするか。そのためのオートバイを買って、その人は郵便局（のポスト）みたいな赤い着物をして、周りの人がびっくりするようなスタイルで家に飛び込んでいくと、そこまでやるのか。本当にそういうことの計画も、返還、督促計画まで考えてやりましたら——育英会のどこかに書いてあったな。さっきの下データのの中に書いてありましたかね——、あの当時で、いま貸し付けている金を毎年三〇億円取り戻さなければならぬ。三〇億円回収するための費用が三億円かかるのです。人件費がかかる。そして、回収してきたやつを次に使うときに、平均一五年ですから、その間に貨幣価値が下がってしまうわけですね。明治以来の物価の変動をずっととりましたら、一五年間の平均の貨幣価値の低下というのは、昔貸した一〇〇円が戻ってきたときには、平均六〇円になってしまうのです。しかも一割の手数料がかかる。一遍入れた金が無限に回っていくのではないということに気がついたわけです。

私は理科系ですから、無限級数の計算をしたら、一つの金が無限に使えるのではなくて、何倍に使えるのかといったらわずか二・五倍です。だんだん、六割、六割に減っていく、それに手間がかかる。二・五倍にしかならない。そのために膨大な手間をかけて、法律をつくって差し押さえまでやるのか。こんなばかな話があるのかというので、私は学生課長のおしまいの頃に大蔵省の主計局に談判にいったことがあります。そのときの文部担当の主査が、今ときどきテレビに出ますね。自民党の税制調査会をやっていた相沢「英之」君というのが出るでしょう。彼が担当です。大体貸与にしたというのは昔の先輩が社会主義ではないと決めたのはいいけれども、親が出すべき金を出せないから借金させる。そうすると誰の借金になるかといったら子どもの借金になるわけです。親が貧乏なために学資が子どもの借金になるというのは、親の因果が子に報いるという制度で、これぐらい封建的なことはない。親が貧乏というのは子どもの責任

ではない。しかし、子どもに借金が残る。その子どもが次の子どもを養うときにまた借金をする。これはもう貧乏の悪循環だ。こんな悪い制度はやめて全部給費に切り替えるべきだ。貸費にしたからとあったって二・五倍しか使えない。こんなばかな制度はないということでもやりましたが、相沢君はうんとはいいませんでした。彼が主計局の総務課長になったときに、「西田君、君がいていたのは本当だったな」といいましたから、「今頃いっても遅い」といっておきました。

私はそのときにも本心に心からそう思いました。給費制度のほうがあるかにお金を与える値打ちもあるし、金の運営の効率としてはいい。ところがばかなことに、日本の育英会の貸費制度というのは世界でも非常に珍しいものですから、アメリカがまねしたのです。アメリカの連邦政府というのは教育の権限を持っていません。オフィス・オブ・エデュケーションというのが中央にあります。が、アメリカの防衛教育法という法律をつくったのです。防衛は連邦政府の権限です。アメリカは、ソ連がスプートニクを上げたから、あれに負けられないようないい教育をするための金だと。給費はもったいないから貸費にして、日本の育英会と同じように貸費制度に戻すというのを向こうが始めました。その後あれはどうしていますかね。動きがつかなくなったのではないかと思います。

伊藤 僕は自分で育英会からお金を借りまして、大学院の分は免除になったのです。国立大学の教官になりましたので。高等学校のときにもらっていた分はずっと後まで返済してましたけれども、物価が変わったでしょう、非常に安い感じになりました。

村上 経済成長の時代はいいですね（笑）。

小池 デフレの時代はきついですね（笑）。

西田 これからはだめですよ。世界でもスカラーシップというのは給費が普通でしょう。ローンでやるというのは民間にやらせてお

けばいい。

伊藤 今は民間でローンがありますよ。

西田 ありますね。だから育英会はそういう格好で私のときに給費に切り替えるという方針を問題にしましたが、誰も相手にしてくれないし、そのためには育英会法自身を変えなければならぬですね。育英会法というのは、私が担当したときに見てびっくりしたのですが、カタカナの法律なのですね。

昭和十八年、大日本育英会法「大日本育英会ハ優秀ナル学徒ニシテ経済的理由ニヨリ就学困難ナル者ニ対シ学資ヲ貸与シ以テ国家有用ノ人材ヲ育成スルコトヲ目的トス」と第一条に書いてある。

私はこれは教育基本法違反だというわけです。教育基本法では、能力に応じる教育を受ける権利があると憲法でいっているわけでしょう。国家有用の人材を育成するというのは昔の考え方、育英ということよりも学問奨励ということに質を変えるべきだ。そのためにはこれは全文改正して。カタカナの法律というのは。文語文で句読点がないのですね、あれは参りました。こんなカタカナの法律は口語文に直したいといったら、局長から叱られました。「おまえ、ばかなことをいうな。あの法律ができたときは今の大臣の劔木（享弘）さんが担当課長だ。あの人が計算してつくったので、国会にはあの議員立法のときのお偉方が与野党にたくさんおる。そんな法律の改正案を出してみろ。国会でひどい目にあう」と。そういうものですね。それほど歴史のあるものです。

今度はどうなりますかね。きっと育英会法というのは廃止になるのでしょうか。

伊藤 育英会自体はどうなるのですか。

西田 まあ、貸与事業を続けていく気なのか。私は本当はスカラシップをしたらいいと思うのですが。やはり昔のように奨学というものが一方であるにしても、私は現在の学校のなかで、ある意味の

社会全体のためのエリート養成が必要だという時代が来ていると思うのです。そのための手段として奨学金は必要じゃないか。

これだけ大学が膨大になってしまって、私立学校が際限なく増えて、みんなに補助金を出して、出し切れないものですから中途半端な補助金で、各大学も中途半端な教育をしている。この悪循環を断ち切るのには、私学助成金というのをやめて学生のほうに目をつけてしまおう。幸い入試センターが能力調査をやっていますね。例えばあの何科目の教科のなかで平均六〇点以上とった人間はエリート層としてみなす。この中の生活状態の困る人には全部スカラシップをつけると、本人に持参金をつけてしまおうわけです。そうしたら私立学校なんかはそんな人を無試験で入れますでしょう。そうすると入学試験問題も解消するわけです。だから、テストであるレベル以上の人は学校が取り合いです。学校に奨学金を提げて来るわけですからね、私学なんかはもう、「いらっしやい、いらっしやい」でしょう。そうしたらいいといったのですが、これは誰も相手にしてくれません。私学助成の大変革ですからね。

私はむしろ国家的な見地から学生に着目して、学生を助けることなので学校を助ける必要はないのだと。そういう学生が来ない学校がつぶれると、それは仕方ないでしょう。おたくさんの店が悪いのだから。これもきわめてラディカルな意見で、あまり実現性がないのですけれども……。

所澤 我々の大学で学生補導関係で奨学金を与える業務をやったことがあるんですが、現実的には親の年収で学部生の場合は決まっています。成績は「不可」がついていればちょっと違うかも知れませんが、ほとんど無視になります。現実には、群馬大学のようなところでも公務員の子どもはもらえない。ほとんど自営業者、農家と商店で、要するに親の年収が低く出てくる職層の人しか奨学金がもらえないというのが現実で、非常に困った状態にある。

■琉球育英会への贈与金に関連して

西田 つまり源泉徴収をもらえるような人というのはだめなのですね。給料がピシッと分かってしまうから。

もう一つ育英会の関連で、育英会というのは優秀で困っている人に金を出すのだと分かりきったような理論ですけど、私は庶務課長や官房にいた頃、文部省に新入生が入ってきてきて研修をやらされたときに、こういう問題を出すのです。「今ここに奨学金が一つしかない。二人の学生がおる。優秀度はこちらが大きい。貧乏はこちらが貧乏だ。この一つをどちらにやるのか」と聞いたら、困ってしまうのですね。その新入生たちは大議論します。「それは育英だから成績」「では貧乏でなくてもいいのか」「いや、そうではない」と。育英会は何をやっているかといったら、貧乏と優秀度というのをうまく掛け算したような格好で指数をつくっている。貧乏と優秀度というのは何も関係ないものだ。これに関連して思い出すのは、あの当時進駐軍がやってきて、進学適性検査というのがありましたね。全国的に膨大な大学進学者の適性検査をやったわけです。あの成績がまだ分かっている頃に、あの成績と学生生活調査とを組み合わせてみた場合に、日本の場合にはありがたいことに貧困度というものとは成績の優秀さというのはほとんど無関係だということがはっきり出てきました。これは日本の社会のきわめて健全な証拠で、イギリスなどは違うそうですね。特権階級と下層階級とは優秀度が違うそうです。日本では特に戦争後に世の中がひっくり返ってしまったから、貧乏の中にも優秀な者がおるけれども、金持ちの中にも同じようにおる。そして相関がないということを確認めたことがあります。これは非常におもしろかったです。

伊藤 育英会の予算というのは、育英会が来年度はこのくらい欲しい

ということをいつてくるわけですか。

西田 ええ、育英会も要求しますし、学生課自身が今の学生生活調査から見て、貧困のために進学困難な人というものを減らすためにこれくらいの奨学金をもらう人がいる。しかも、その金額はこれくらいでなければならん。人数を増やすか金を増やすかということを、あの調査から出すわけです。それで、来年度の予算は望むらくはこれくらいというのを出すわけです。

伊藤 もちろんそのなかには収入として返還分も入ってくる。

西田 もちろん。返還の見込みは育英会が出してくるわけです。ですから、返還見込み額と国の支出とを足して予算を組むわけです。そういう計算はできるのですけれども、大蔵省の相沢君のところではそんなに出不せないといってバサッと切ってしまうわけですね。おもしろいですね、大蔵省の主計局の担当主計官というのは、文部省と防衛庁と二つを担当しているのです。一人の主計官が防衛政策と文部行政と両方にらんでいるのですね。

伊藤 アメリカと同じではないですか(笑)。

西田 そうやって予算をもらってきて、三ヵ月ごとに文部省の予算から育英会へ交付するわけです。今度は育英会がそれを学生に対して毎月送金の手配をするわけです。思い出しますのは、会計検査院がやってきまして、「毎月渡す奨学金の元になる金を国が四半期ごとに三ヵ月まとめて渡しているのはおかしい。毎月渡せばいいじゃないか」と。育英会は一日も早くもらいたいです。何十億という金を銀行に預けたら、一日違ったって利子が凄いのですよ。育英会としてはそれで収入になる。それを検査院が、「そういうことは不要で、やってはいかん」という。僕はそのときに会計検査院とけんかしました。向こうの担当課長に、「そうやって毎月苦勞して渡して利子が出ないようにして誰が得するのだ。うんと利子を出しても、その利子は全部育英会の予算に計上してあるわけで、育英会

が勝手に使える金ではない。それで育英会の金になれば、国が育英会の事務費に出す補助金が減るのだ。国の得になるのではないか。

それを毎月やれとは何の理由があるんだ」といって、結局、理屈で僕が勝ちました。やはり検査院なんて杓子定規なことをいいますね。

小池 毎月なんかやれば事務も非常に面倒くさくなりますしね。

西田 大変なことですよ。そういうことで、育英会の監督は主として財政的な問題で、それについては、私が出版屋で会社が破産した後始末をしたという経理の経験が非常に役に立ちました。普通の行政官ではそういう経験がないから無理でしょう。

伊藤 これはぐるぐると回って小さくなっていった、その分を補填していくという感じになるわけですか。

西田 ええ、前の戻ってくる分が少ないから。返還金が少なければまた継ぎ足す分が多くなるわけだから、奨学事業を減らさなければ永久に続いていくわけです。

所澤 先生が会計の仕組みを全部変えられたことによって、回収率はだいぶ高くなったのですか。

西田 いや、遠いところから手紙を出すくらいですから、回収率というのは大して増えません。

伊藤 でも、あれはある時期からきちんと来るようになりました。

西田 そうですか。先生のようにきちんと戻された人もおられるけれども、やはりどこかへ行方不明になってしまう者もおりますしね。

小池 僕の友人なども育英会から呼び出しがありましたよ。呼び出しに応じて、「誠意だけでも見せてください」といわれ、一万円置いて帰ってきて、そのあとで大学の先生になったのでお金を払わなかった、という者がいます。

西田 最後に差し押さえるまで体制をつくったのですからね。

所澤 もう一つ、先生がされていたときは大学の数がどんどん増えてくる時期だったので、基本的に学生の定員が増えてきますね。そ

の定員に見合った分だけ予算の額がどんどん増えていったということですか。

西田 そうですね、そういう傾向はあります。私はそれから数年後に学生課長を辞めて育英会の評議員になったときに、日本の経済がこんなに成長して国民が豊かになったのに、育英会の予算が毎年増えていくというのはどういうわけだと私は文句をいったのです。当然、それだけ奨学金の対象者は減っているはずだと。それを、毎年毎年予算というのは要求するものだということでやっている。情性ですね。したがって、もう人の質も変わってきたでしょうし。だから、ああいうやり方はあまりよくないですね。育英会の予算に関連して一つ思い出しますことは、昭和三十五年ですが、沖縄が日本に返還される前……、返還は何年でしたかな。

村上 昭和四十七年。

西田 三十五年頃です。沖縄の人にはやはり日本育英会の奨学金はいかないでしょう。アメリカの施政下ですからね。琉球大学なんていうのをつくって、沖縄で私立学校もできているし、だけど奨学金をもらえるところはどこもない。琉球育英会をやるうとしているけれどもお金がない、ということを知って、私は沖縄に日本から金を贈与して琉球育英会を育てようじゃないかということを考えて、沖縄の人口とかいろいろなものを調べて、沖縄に金を贈与したいという予算要求をしようとしたわけです。

やはり占領下ですから、アメリカの施政権下にあるわけでしょう。だから、一番に外務省に相談にいったわけです。僕はそのときに、今度の拉致の問題ではありませんが、外交官という公務員というのは非常に我々とは違うなという感じがしました。長年外交交渉をやっていると、誰に対してもぎくばらんに腹の内を見せるということをしていないですね。まず構えてしまっていて、自分の考え方を小出しにしながら相手との折衝をやる。これが長年の習性になっていて、

僕らが話しにいても外交交渉をされているような感じなのです。冷たい感じで、取り付く島がないような、あれが外交官かも知れませんが……。「アメリカの施政のところに日本がそういうことをするのはアメリカの権益を侵すことではないですか」というのです。「冗談いうな。向こうで困っている人にやりたい。あそこに住んでいる人は国籍からいえば日本人なんだ。アメリカの施政であっても、そこへ金を出したい。アメリカが出すのならこちらはしなくてもいいけれども、アメリカがやらないからうちが出そうというのに、アメリカが文句をいうはずはない」「それは外交上困る」「あなたが困るといふのなら、私がアメリカ大使館に交渉にいく」といったら、「それは待ってくれ」と。それで外務省がアメリカの大使館に聞いたら、「ああ、結構です」という。ざまあみろというわけですね。

今度は、奨学金を出すためには法律上の問題があるといって法制局に呼ばれました。そのときがおもしろいのです。沖縄に出すというのは、アメリカの施政権があるけれども、あそこにおけるのは国籍上日本人だ。あのときには、戸籍がなくならないように戦争中から沖縄の人の戸籍というのは熊本県に持ってきてあったらしいですね。戸籍法上ちゃんと日本人だ。しかも沖縄は占領下でも日本内地と同じような沖縄の教育基本法をつくっているのです。日本人としての教育をするのと同じと書いてあるのですね。だから、日本人の、日本人による、日本人のための教育と、三拍子そろっているじゃないか。リンカーン演説ではありませんけれどもね。「これでどこに法律上問題があるんだ」といったら、法制局のほうで、「うまいこと考えたな。君はどこの法学部だ」というから、「私は理学士です」といったら、「そうだろう。法学士はそんなことをいわないからな」と、法制局の参事官と仲よくなりました(笑)。

向こうへ贈与するといったら、今度は大蔵省が、「渡した金がちゃ

んと向こうにいったかどうか、使い方がどうかということを経済検査する方法があるのか」という。「そんなものはないだろう。人を信用して渡す。贈与するということは相手を信用するということから、会計検査なんか問題にならない。会計検査法の法律でも関係ないはずだ」といって、これも大蔵省を蹴飛ばした。そうして私は沖縄にいて琉球育英会の人にそれをやって、向こうでスタートしました。喜ばれましたね。

伊藤 円で送ってドルに。

西田 そのへんの為替上のことはどうだったのでしょうかね。やはり何億円かの琉球育英会への贈与金というのをやりました。

伊藤 琉球育英会というものはあるわけですか。

西田 あるわけです。向こうの法人でした。

小池 一方で、当時沖縄の人たちが日本の大学にたくさん来ていますね。そういう人たちには育英会からお金は出していたのですか。

西田 もちろん、それは日本人ですから国籍上問題はないでしょう。そうだと思います。

もう一つ外交官で思い出したのは、これは後の話になりますが、今度は調査局にいて国際会議があって、革命前のイランで世界文部大臣会議がありました。まだパーレビ国王だった。あの人が各国の文部大臣が集まっているところで格好いいところを見せて、各国がそれぞれの国の軍事費の何パーセントかを教育に使うという総会決議をしましょうと提案したのです。各国の代表がどうするか。日本政府も、外務省に電報を打って、こういうイラン国王の提案について日本政府の対応をどうするかと相談したら、外務省から来た返電というのが情けないですね。「問題きわめて複雑であり、米英各国の動向を見て適宜処理されたい」と書いてあった。

小池 アハハハハ(笑)、いいなあ、責任を。

西田 まだ昭和四十年頃ですから、その当時の日本の外交というの

はそんなものだったんです。アメリカ、イギリスの顔色を見ながら角が立たないようにやると。私はそのときに反対したわけです。外務省がそんなことをいっても、もしそれに日本がここで賛成して帰って日本の新聞にそれが漏れたら、あの当時日本政府は自衛隊の予算を軍事費とはいっていないでしょう。あれは軍隊ではない。自衛隊の予算を軍事費と認めたということになるぞ。それで日本の内閣としては一体どうなんだ。それは国内問題になってしまう。だから、こちらとしては賛成できないということにしたのです。

小池 でも、そのときにオーケーしていたらまたおもしろかったかも知れませんね（笑）。

西田 こちらは法律のことも教育のことも習ったことがないですから、ずいぶん乱暴なことをやってきました。育英会については、あとはあんまりありません。

小池 育英会の組織ですが、会長があって、理事長があって、理事がいて、事務局があって組織運営をしている。育英会のイメージが少し分からないのですが。

西田 日常的な仕事は全部各課の事務組織が動かしているわけです。予算要求とか、いろんな大事なことにについての政策決定について理事会が招集されてやる。そういうところへ私どもも評議員として呼ばれていくというだけで、そんなに理事その他が重要な仕事をしているとは思いません。

小池 理事長などでも。

西田 ええ、理事長などでも。

小池 森戸辰男（一八八八〜一九八四年。経済学者、元文部大臣）は会長をやっているのですが、育英会の資料が著しく少ないのはそういうことですね。

西田 森戸先生は会長をやっておられましたね。それから、歴代偉い人はずいぶんやっておられましたよ。だけど、あんまり育英会の

仕事の本質について関連するようなことを理事がやっておられたとは思えません。

伊藤 一種の天下りのポストですね。

西田 前田多門（一八八四〜一九二六年。元文部大臣）さんとか、ずいぶん偉い人が来ておられました。

伊藤 林健太郎（一九一三〜 歴史学者。）さんもなかったのではなかったかな。

小池 なりましたね。いわゆる名誉職みたいな感じですね。

西田 文部省の次官が大体歴代理事長になったりして来るでしょう。私が昭和五十九年に肩叩きで役所を辞めてくれといわれたときに、その次官から、「育英会の理事になれ」といわれたのです。そういうところへ天下りすると、育英会の理事の給料なんていうと凄いですよね。局長くらい以上に高いのです。しかも、二、三年勤めて辞めたら退職金をもらうわけです。僕らはそういうのを知っていますからね、「お断りします。一〇年間監督していた育英会に私がいたのでは育英会が仕事にならない」と。そうしたら、勝手にしやがれといって放り出されて、半年間何も仕事がなかった（笑）。だけど、今でも僕は間違っていないと思います。役人の天下りというのがあるでしょう。あれはお手盛りでいたのですよね。給与をもらうのはまだいいけど、退職金を二年ごとにもらって凄い金儲けをしているわけでしょう。

伊藤 それが今だって続いているわけですからね。

■学生会館の管理権問題

西田 まだ続いている。

最後に学生会館のことにちょっと触れておきます。これは、この

前申しあげたように、昭和三十一年に三ヶ月間アメリカへ行って、アメリカのスチューデント・ユニオンというのを見てきて、日本の大学には先生や学生が自由に出入りをして、いわゆる大学のリビングルームに相当するような場所がない。非公式のところでは個人として親睦を深め、お互いの気持ちが溶け合うような場がない。これが日本の大学の非常に悪いところだと。寄宿舎もそれがない。そういう意味で学生会館をつくるために文部省の施設部に非常に骨を折ってもらって予算をとって、国立学校で一番最初にお茶の水女子大につくりました。ほとんど同じ頃に、考え方として賛成だといって早稲田が学生会館をつくられましたね。駒場にもつくったのです。そうしたら途端にそれが学生騒動の種になりました。学生会館管理権問題という、どちらが主であるかということでけんかになってしまっています。だから、学生会館の建設予算というのは、西田さんが騒動の種をつくってくれたといっている非常に評判が悪かったのですけれども、しかしそれが私の夢でした。

日本では、前に申しあげましたように、非常に仲のいい、ちょうど血の通った身内だけが物凄く親しくて、それ以外の人間は「赤の他人だ」という言葉があります。だから、味方が敵かと非常に割り切った考え方で、そういう非合理的な結びつきというものを大事にする。それ以外の人たちとも、淡々と対等に付き合うという生活習慣がない。これが一体いつになったら変わるのか分かりませんけれども、私はやはりそういうものができてこないで、学生運動における大学の中の教師と学生の関係も解決しないのではないかと。日本人が今後世界に出ていって外国人と対等に付き合うときにもその欠陥が暴露されるだろう。これを非常に感じて学生会館は間違っていないと思ったのですが、どこでもなかなか成功しなかった。工業高専へいったときに理想的な施設をつくったのですけれども、それもなかなかうまく運営されていないようです。

伊藤 アメリカの場合も「スチューデント」がついているわけですか。

西田 ええ、スチューデント・ユニオンといっていました。私は、木更津高専につくったときには学友会館という名前を付けました。そのときには管理権の問題なんか出るところではない、学生自治会に、自治会と校長とが正式な契約を結ぼうと。この管理を自治会に任せる。したがって、施設の管理、運営、すべてについて自治会は責任を負う。その中の器物が壊れたら、自治会が責任をもってそれを弁償する。鍵の開け閉めも全部自治会の責任だ。これらのことを守ってきちんとやれば学校が干渉しない。しかし、万一この協定に違反したらこの協定を破棄するところまで書いてあるわけです。そういう自治会長と校長との協定書をつくりまして、それを全校の生徒に発表して、学則と同じように学校の規定に載せて、学友会館というのを発足させたのです。そうしたら学生たちは初めきょんとしてしまっていました。彼らも自治会で毎朝来てやるのは大変だから、各クラスに当番を決めて、今月は何年生だ。その連中のうちの一番を決めて、朝八時半に来て鍵を開けて、部屋の中を掃除して、ごみためを全部きれいにする。トイレの掃除もする。「それを全部自分らでやるのは大変ですな」という。「あたりまえだ。自治会というのはそういうものだ」と。少なくとも私が学校で七年間校長をしている間はそれで動いておりました。その後はよく知りませんけれども。本当にセルフガバメントというのは大変なことだということを実感するのが子どもが大人になる一つのプロセスだと思うのです。早稲田の騒動もあれは後で収まったんだな。今はどういう運営になっているのか知りませんが。どうも学生課長は、学生運動をはじめ、いろいろな形で失敗の連続ばかりです。

伊藤 失敗といえるかどうか分かりませんが、ずいぶんいろんなことをおやりになったということがよく分かりました。その学生会館

の場合は、管理権の問題といえますか、結果として学生運動の拠点になることになりましたわけですけども。予測されてはおられなかったのですか。

西田 拠点になるといったって、結局、会館の運営について責任を持ってやっている人がそこを非合法な活動の拠点にして学校の規則に反するようなことをすれば、今度は学生会館の管理者自身に対して責任を追及するわけです。そういうことでけじめのつけようはあると思います。

伊藤 まあ、向こうは実力を持っているわけですからね。これは非常に難しい問題だと思いますが、今はそういうのがなくなってしまったから、逆にどうしているのだろうなど。

所澤 でも、まだ駒場なんかはあるのではないですか。もう駒場もありませんか。

伊藤 学生会館が？

所澤 いや、そういう自治会みたいな。

伊藤 いやあ、どういうふうになっているのかなあ。

小池 自治会を名乗っている組織はあります。

所澤 一〇年前くらいの頃は、役員を決めるのも二〇名連記とかをやって、特定の勢力が全部の権力を握れるように仕組みができていましたね。確か二〇人役人を選ぶ二〇名連記だったと思うのですけれども。

伊藤 とにかく、僕ら自身もそうだったけれども、部室とかそういうものは汚くするのが好きでしょう。コンフォタブルな状況にしておくと落ち着かない。

所澤 東大の駒場なんかを見ると、駒場寮と学生会館との管理が連動して、うまくいかないような感じてしたね。

西田 日本人がまだパブリックな施設というものを全体のために公平に、しかも誰もが使いやすく運営するということに慣れていない

のでしょね。公の施設に対する意識がはっきりしない。俺のものが他人のものとどちらかなんですね。

伊藤 そうですね、これは非常に難しい問題だと思います。

西田 これで学生課長のときはおしまいにします。

伊藤 学生課長から庶務課長に移られますが、ずっと学生課長でいようと思っておられたわけではないのでしょうか。

西田 ほかの仕事に変われというのに、「学生課長をやるために来たのだから、いやです」といったことはあります。

伊藤 でも、自分自身は将来はどういうふうにと思っておられたのですか。

西田 日高先生にいわれてやってきて、だめなら大学へ戻してくださいといっているのですね。もう一遍大学の教授に戻りたかったわけです。物理の先生に。

伊藤 だけど、その間に物理の世界はだいぶ様変わりしたのではないですか。

西田 それはもう、十何年たてばね。

伊藤 現役として戻れますか。

西田 まあ、自分のことはあんまり考えていませんでしたな。役人になるとは夢にも思っていなかったわけですから。だから文部省も戸惑ったでしょう。庶務課長の段階になっていくと、今度は相手が日教組とのごちゃごちゃとか、大学管理法とか何とかという。

伊藤 それでは学生課長とあまり変わらないじゃないですか。

西田 まあ、その延長みたいなもの。

伊藤 でも、庶務課長になるということは、これは一種のエリートコースに乗るということでもあるわけですよ。

西田 役所ではやはり、普通の一般の課長から、庶務課長は第一課長、それが一つの栄進の道ですよ。そういうことをやった人はその次に審議官になったり局長になったりするわけでしょう。

伊藤 一種のパスポートを持ったという感じになるわけですよ。
所澤 後任の学生課長の人選などは、どうなんですか。

西田 それは上の人の。人事については全然、事前に知らされませんし、命令が来たら。

伊藤 庶務課長のときは事前に打診があるわけでしょう。

西田 事前に打診ではなくて、「きみは今度庶務課長をやってもらうから」とそっと来るわけです。

伊藤 ああ、そうなんですか。通知なのですか。

西田 ええ。

伊藤 学生課長を辞めてもらうと。

西田 「今度きみは庶務課長になるから」「そうですか」というだけです。役所というのはそんなものですよ。

所澤 話とかうわさとか、そういうのも全然ないのですか。

西田 人事のうわさは聞きません。大学局はもと専門職みたいな人が多くて、私がおった頃の大学課長というのは、春山（順之輔）さんという、これこそ戦前からの生き字引みたいな大大学課長でした。学術のほうは、ご承知かと思いますが、岡野（澄）さんという方がやはり十数年やっているベテランで、南極探検から全部準備したでしょう。春山課長は大学行政の専門家で、おもしろいのは、あるときに局長が代わられて、緒方さんという人が局長で来られて、大学局の説明を聞きたいといった。春山課長がやりましょうというて局長室でやりだした。某大学の付属学校の何とかの先生がこうした、この学校にはこういう問題があるということをもんな知っているわけです。北海道から始めましょうというてやって、とうとう北海道を出られないうちにもうやめたのです。それぐらい凄い人でした。春山さんというのは僕らの大先輩。

伊藤 では、一〇年続けられたというのは先生だけではないのですね。

西田 春山さんや岡野さんが一〇年選手ですけれども、ほかにはそんな人はいりません。

伊藤 では、何人が例外がいるということですか。

西田 もう一つの例外は、著作権課長をやった佐野（文一郎）君です。次官になりましたけれども、彼も十年選手でした。著作権というのは専門職ですから、特定の仕事の性質上、そうくるくる代わったのでは慣れないうちはやれないというような仕事があるわけです。学術課長なんていうのはやはり主な大学の主な先生を皆知っていないければいけませんからね。そういう人に科学官をお願いして学術のことをやるわけですから。

岡野さんから聞いた話がおもしろいですね。筑波に巨大加速器というのがありますね。原子核の実験をやっている。何十億という凄い金がかかる。あの予算がとおるときに大臣のところに相談があったそうです。朝永（振一郎）先生とかそういう偉い人がおられて、「これをつくったらどういう結果が得られるのでしょうか」と大臣から質問があったら、「分かりません」「何か具体的にこれで得られる成果があるのではないですか」「いや、学問というのはやってみなければ分かりません」と朝永さんがいわれたものだから、大臣は感激してしまって、「やろう」ということになった（笑）。学術行政というのはおもしろいものでね。大臣も偉いですよね。朝永さんは決して甘いことはいわれなかった。やってみなければ分からない。今度はカミオカンデのところがあれを飛ばしたりしてやっていますね。だから、日本でやはり世界的な実験になっているわけです。それは朝永さんでも分からなかったでしょう。

この次は庶務課長から。庶務課長は三年やって。

伊藤 庶務課長が三年、四年ですか。

西田 三年ですね。三十七年から四十年まででしょう。

伊藤 四十一年までになっています。それから調査局。

村上 調査局は何をおやりになったのですか。

西田 履歴書には調査局は書いてないかも知れない。調査局へ一遍いって、調査局も一年くらいつぶれてしまったのです。庶務課長から調査局の審議官になったのです。そのときの調査局長が天城〔勲〕さんです。天城さんが調査局長を投げ出して、「きみ後始末してくれ」といってほかへ移られて、何かやっていたら調査局は廃止になって、今度は官房になったわけです。調査局審議官から官房審議官に移ったわけです。

伊藤 誰かが、「西田さんという人は天城さんの後始末をした人だ」といっていました。天城さんは何でも投げていくから……（笑）。

西田 私はその点天城さんには恩義を感じてもらわなければいけません。彼が借金を山のようにしたやつを後始末したわけですから。

小池 その話を聞きたいです（笑）。

伊藤 天城さんはまたいろいろおやりになる方でしょうからね。

村上 学生課長時代のことでお伺いしたいことがあと二つございまして、前の回に尾高朝雄さんの話が少し出しましたが、文部省とはどのような関係があった方なのでしょう。

伊藤 確かあの頃尾高先生は東京大学の中で学生補導のことの総長の相談相手とか、多少内容的に世話をしておられた方ではないですか。そういうことを僕は聞いていました。だから尾高先生は学生のことをよく知っておられると思って、相談相手に文部省に来てもらって、会議を二、三回やったわけです。

村上 木田〔宏〕先生からも、あれは教科書をつくるときのお話でしたでしょうか、尾高氏とは関係があったという話をお伺いしたので、文部省と密接な交流もあったのかなと思っていたのですけれども。

西田 国立学校ですから、気に入ったらどの先生でも呼んできて相談させてもらうということはよくありましたけれども、気安くやれ

る人とそうではない人とあって。

村上 では、尾高さんはちょっと気安かったという。

西田 そうです。あの人は哲学でしたね、法哲学。

村上 もう一つは、この前の回のお話でしたけれども、学生課の係長に大学の事務官の方から来ていただいたというお話でしたが、そういうことは前例としてあったのでしょうか。それとも先生が初めてですか。

西田 学生課以外にはなかったでしょう。文部省がどういう格好でほかからとってきたかどうか。例えば会計とか庶務とかという分野ではあったかも知れませんが。大学の事務局も、文部省の会計から大学の事務局長にいたり、それはやっていました。しかし、係長というようなポストを現場の係長からとってきてうちの係長に据えると、学生課の係長をやっているうちに、だんだんうちの課長補佐になったり、それがしまいに大学の事務局長に出ていたり。東京大学の根本君なんていうのは、私がとって、後は東北大学の事務局長になったりしました。私がとった係長の中で、その後、確か辞めた後でしたけれども、工業高専の校長になったりしていった者もあります。

伊藤 でも、文部省はすいぶん各大学の事務局からノンキャリアの人をどんどん引っ張り上げて、文部省のなかで昇進する人もいるし、また大学に戻してやるというのもやっているのではないですか。

西田 ええ。私は人事課長に、文部省がキャリアの訓練として普通出すのは教育委員会の課長とかそういう格好ですね。そうではなくて、一番いいのは大学の学生課長か厚生課長に出さない。大学のなかに入ってみて、学生からいじめられ、事務局から意地悪をされて苦労したときに大学というのが分かる。そういう訓練をさせてくれといったのですが、あんまり喜ばないコースですからね。

伊藤 エリート官僚を目指す人は文部省にあまり来ない。これはちょっと

と問題だと思えますけれども。

西田 公務員試験を通じて入ってくる人で、あの頃は大蔵省へいった。しかし、それからずっと後ではエリートがずいぶん通産にいきましたね。大蔵官僚というのは確かに私らが付き合ってみて優秀ですし、手ごたえがありました。

伊藤 さあ、それでは次回を決めさせてください。

〔十二月の日程を相談〕

西田 これは年内には終わらないのですか。

伊藤 おわりません。

西田 そんなに長引いてもいいのですか。後の予定がつかえていないのですか。

伊藤 いいえ、だいじょうぶです。成り行きで何回でも、全部お話しくださるまで釈放しないという方針なんです（笑）。

西田 こんなとりとめもないお話でも、何か将来役に立つのでしょうか。

伊藤 誰も分からなくなりますからね。

西田 普通の表向きにあらわれた資料とか文献とかでは出てこないような裏話が出てくるほうがいいのですか。

伊藤 はい、そうなんです。やはり一つの法律にしても慣行にしてもそうですけども、紙に書いたものは、どうやってそれができたのかということが非常に明白ではないのです。官庁の文章は大体が、成案になったもの、でき上がったものを記録していくというスタイルですから、プロセスが全然分らないのです。法律であれば、国会なんかの質問でポロリと少しは出ることは出ますけれども、けどやはり本当のところは分らない。

西田 政策研究会という名前をつけていらっしゃるの、政策というのはいくつかのプロセス。

伊藤 あるいはバックグラウンドといえますか。

西田 そちらに影響を及ぼしているのはどういう要素があるのかということ、ダイナミックにとらえようという目的なのです。

伊藤 それぞれの立場でいろんな方が一つのことに関与されるわけです。だけど、それぞれの人はもちろん思惑が違うし、もちろん共通なところもあるのですが、ご記憶もちょっと違うのです。「みんな俺がやった」という方もいらっしゃいますし（笑）。ですから、いろんな方からお話を伺わないと、大体この辺ではなからうかというのなかなか察知できないということです。

西田 しかし、私どもが不安になりますのは、今お話ししているようなことというのは、私個人にとってみたら大体四〇年昔です。だんだん自分の記憶はあやしいですからね。不思議なことに、終戦直後から文部省を定年で辞めさせられるまでのこの期間というのは組織的な記録がほとんどありません。このへんは日常生活に振り回されていて日記をつけていないのですね。それ以前は全部つけている、それ以後もつけている。戦争中もだめですね。

伊藤 しかし、手帳があるでしょう。

西田 手帳にいったい詰まっている。それを見ると、ときどきおもしろいのが出てきますね。

伊藤 少しはいろんな思い出になるでしょう。

西田 あります。

伊藤 それを実際に文章にして日記にするなんていうことは、非常に忙しいときはとてもじゃないですけども、そんなことができるはずがありませんね。

西田 これ（オーラル）で少しリハールをして思い出すことができるものですから、この前申しあげた自分史をちょうど終戦のところまでしか書いていないのですが、戦後を書くときのいろいろな材料がもう一遍よみがえってきますから、ありがたいです。

伊藤 よろしくお願ひします。どうもありがとうございました。

西田 亀久夫 オーラルヒストリー

第5回

日時：2002年11月19日

14:10～16:00

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊 藤 隆（政策研究大学院大学教授）

所 澤 潤（群馬大学助教授）

村 上 浩 昭（東京都立大学助手）

■文部省関係在職経歴表をみながら

西田 実は、この前役所のOB会があったときに初めて文部省が職員一覧表をつくりました。これは〔図版「文部省関係在職経歴表」参照〕、大臣、次官、局長が全部、何年から何年は誰がやったというのが、ずっと一覧表になっているのです。

伊藤 貸してくださいよ。

西田 これ、いいでしょう。こういうの必要でしょう。

伊藤 課長ぐらいまでですか。

西田 課長はありません。大臣、次官、局長、審議官までですね。これがずっと。

村上 私も同じようなものを自分で作ったことがあります。

西田 昭和二十四年から比較的最近まで。そして、その中で私自身に関連する分だけの表をつくりました。いつ頃私の上にどんな局長がおって、大臣がおったか、主な自分に関連した行事を下にメモしています。〔配付資料は〕二行に分けていますが。

伊藤 この前のお話ですと、学生課長のときは上が誰でもあんまり関係ないと……。

西田 そうですよ。だけど、ごらんのように、大臣というのはよくわかるものですね。

伊藤 よくわかりますね。

西田 一枚目の一番上の段が全部、私が学生課長のときです。この間にも大臣がぞろぞろかわる。

伊藤 そうですね。

西田 二行目が〔昭和〕三十七年から四六答申のところですよ。二枚目のほうが四六答申以後の、今度は私が外へ出ていくほうの関係で

すね。ユネスコから木更津高専。

伊藤 東京工大の教授ですか。

西田 科学官室のときに東京工大教授という肩書きで月給を出したわけですね。科学官というのは本来専門職ではありませんから。

伊藤 こういうときはやはり、一応、本籍は東京工大の教授になるのですか。

西田 なるんですね。文部省は東京工大が手元にあるものだから手なずけて、教授会にかけないで、「これをちょっと教授にしてくれ」と。それは普通だったら大変ですよ。もちろん大学にももっともいきませんし、月給だけは役所の中でもらうわけです。

伊藤 そうですか。東京工大というのは文部省と関係あるのですね。

僕のところの大学も新設の大学でしょう。そうすると、人数が足りないものですから共済組合を独立できないで、私は東京工大の……（笑）。

村上 東京工大って便利なんですね。

伊藤 保険証を見て皆が「何であなたが東京工大なんだ」という（笑）。

西田 一番文部省でご用達するのは東京工大と東京医科歯科大学ね。そのへんの事務局長に声をかければ、何でも便宜を図ってくれるわけです。

伊藤 まあ、お返しもあるのでしょうか（笑）。

所澤 そういう科学官のポストで東京工大の教授という形になりますと、学部には所属しないということになりますね。

西田 学部なんかいいでしょうね。まあ、学内では内緒にしているのでしょうか。私はいったこともないし。

所澤 でも、職員録には載っているわけですか。

西田 載せているかどうか。しかし、辞令はちゃんともらいました。こっちは月給さえもらえば文句いいませんからね。しかし、その何年間かは東工大教授ということになっているわけです。

(西田重久夫) 文部省関係在任経歴表(I)

昭和	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
西 臣	1962	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961
大臣	天野 田	田 野	大 連	安藤 松村	清 渡	渡 尾	松 永	梅 在	松 田	荒 木
次 官	日 高	飯 本	西 崎	田	中	稻	田	緒	方	
局 長		稻 田	清 助			統 方	信 一		小 林	行 雄
<div> <div>3/6</div> <div> (大 学 々 術 局 学 生 課 長) (手紙記録) 10/13 2/9 </div> </div>										
引 家 記 著										
昭 和	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
西 臣	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971
大臣	荒 木	渡 尾	愛 知	中 村	有 田	鉢 木	渡 尾	坂 田	高 見	
次 官	内 藤	小 林	福 田	天 城	宮 地	村 山	松 雄			
局 長	小 林	行 雄	杉 江	清						
<div> <div>1/23</div> <div> (大 学 々 術 局 学 生 課 長) (手紙記録) 10/13 2/9 </div> </div>										
引 家 記 著										

(18/11 ~ NET 放送)

文部省関係経歴表 (Ⅱ)

昭 和 西 暦	47 1972	48 1973	49 1974	50 1975	51 1976	52 1977	53 1978	54 1979	55 1980	56 1981
大臣	高見 1/19 稲葉 12/23	奥	野	永	井	海部 12/24 11/28	砂田 12/17	内閣 11/28	谷垣 7/1	田中 11/30
次官	村	山		岩	田	木	井	井	内	諸
局長	木	田	井	内		佐	野			宮
	<p>(2次次長 事務次長) 6/15 10</p> <p>● 2/16 山梨県知事 ● 7/18 世界会議 ● 9/1 国連大学 ● 5/15 研究 ● 6/15 退官 ● 3/24 3/5 博士 ● 5/12 東京工大教授 科学官 ● 12/12 東京工大教授 科学官 ● 12/12 東京工大教授 科学官 ● 12/12 東京工大教授 科学官</p>									
昭 和 西 暦	57 1982	58 1983	59 1984	60 1985	61 1986	62 1987	63 1988	(H)1 1989	2 1990	3 1991
	<p>(木更山高等学校校長)</p> <p>3/1 空手道</p> <p>3 (JICA有リビシ) 11 (4-24-11-4-1)</p> <p>(東京工科大学短期大学長) 1995 9月</p> <p>● 3/1 東京工科大学 ● 10/1 北野寺 ● 10/1 北野寺</p>									

所澤 そういう仕組みですか。

伊藤 おもしろいですね。

西田 この表〔(西田亀久夫) 文部省関係在職経歴表〕のほうを見ていただきますと、一枚目のところ、上が学生課長で、「昭和」二十九年のところで手帳が初めてあらわれたというのは、終戦後、中学四年からつけていた日記を全部ストップしてやめていたのですね。終戦後、ここで文部省を辞めるまで日記をつけていないんです。メモとしての手帳が二十九年から初めて出てきました。

伊藤 その前は手帳もなしですか。

西田 そうです。終戦後、これまでは。

伊藤 だけど、あしたの予定とか、そういうのは書かないで生活できますか。

西田 戦中、戦後の一番厳しい時代に、手帳、日記を書くとかそんな。

伊藤 いや日記じゃなくて、明日の予定とか……。

西田 そんなものはないですね。転々と職を変えて走り回っているうちに、行き当たりばったりでいっちゃった。役所へ入って二年ほどして、学生課長になってから三年目ぐらいにやっとスケジュールをつける。

伊藤 落ち着かれた。

西田 〔在職経歴表の〕真ん中のほうに米国へいったというのがあります。ずっと右のほうへいって、沖縄に三十六年にいっています。これぐらいしか手帳から出てくるメモはないわけです。次の段の三十七年から庶務課長が始まります。三十七年一月二十三日。それがずっと続いて、四十年の六月一日に調査局審議官、翌年に一年で官房。上のほうに書いてあります局長というのは、私は大学局長しか書いてありません。調査局へいったときの調査局長はもっと前から天城〔勲〕さんがやっていました。ですけど、この七月一日か

ら天城さんは大学局長になっています。上のほうの次官は、内藤〔誉三郎〕さん、小林〔行雄〕さん、ずっとこういう格好です。大臣は目まぐるしくかわって、灘尾〔弘吉〕先生が何遍も出てきておられるでしょう。

伊藤 灘尾さんは何遍も出てきますね。

西田 一番下の段には、その年に私の関係した仕事の柱書きだけをちょっと書いてあります。これは余興みたいなものですが、「昭和」四十三年の一番下に「(一九)六八年一月からNET」と。NETという放送局があったんですね。あれは今の朝日放送の前身ですか。

伊藤 教育放送ですね。

所澤 NETは教育ですよ。日本エデュケーションナルからの。

西田 これは今は日本教育テレビになったのですか。

所澤 いや、今はテレビ朝日です。

西田 これに四十三年の一月から十二月まで一年間、私は毎週NETの『日本の教育』というテレビ番組のレギュラーのスピーカーだったんです。たった一五分間ですけれども、いろんな人と対談して。

伊藤 いろんな人と。

西田 ええ、それはプロデューサーが考えるわけです。今月呼んできた人は曾野綾子だとか、いろんな著名人がいます。落語家を連れてきたりね。そのときの教育トピック。これは余興で、後でそのときのアルバムを……。放送局が全部つくってくれた写真があります。それが一つ余興。

もう一つその欄で、四十二年からずっと、「*12文」と書いてありますね。この年から十二月に文部省の文化祭があったんです。

伊藤 文部省の文化祭というのは何ですか。

西田 各局対抗の省内の余興ですよ。

伊藤 ああ、そうですか。

西田 私がそのときに官房において、官房審議官として官房の傘下

を統括して芝居を出すわけです。そして、○がついているのは全局の中で優勝したときです。

伊藤（笑）、お手盛りじゃなくですか。

西田 そう。四十二年、四十三年は○でしょう。四十四年に△がついているのは準優勝。四十五年も○ですね。ユネスコへいっても芝居ばかりやっていたんですね。これもほかのときに申しますが、この芝居というのは各局一〇分間でやれというのです。それを超えたら減点になります。それを見事に編成して、統括して、芝居をする。この芝居をやったということ、官房審議官になって中教審を運営したということ、内容的に非常に同じことなんですね。いろんな委員会をつくって。芝居のプロデュースと中教審と同じなんですよ。後で芝居の写真も見ていただきます。

それ以外は、ごらんのようにとどころで、特に調査局審議官になってからは軒並み国際会議ばかりです。

伊藤 そうですね。

西田 ええ、ぞろぞろ、ぞろぞろ。重立ったところの特徴だけお話し申しあげました。質問書を二、三日前にいただきまして……。

所澤 すみません、先にちょっと確認してよろしいですか。前回、沖繩の育英会の話を伺ったと思うのですが、昭和三十六年六月二十五日から七月一日の沖繩は、その問題でいらしたのですか。

西田 それでお金が出て、沖繩の人がお礼の意味で一遍西田さんを招待したいといって、呼ばれていったわけです。

所澤 では、それは向こう側から招待されていたわけですか。

西田 向こう側でサービスされていたわけですね。向こうの琉球育英会に寄付をしたものですから、琉球の状況を見てくださいと、沖繩の戦跡などを案内してもらいました。これはそういうお礼の意味の漫遊です。

所澤 そのときの印象を伺いたいと思うのですが、いかがでしょう

か。

西田 私は、実はこれ以外に昭和十七年四月に佐世保海軍工廠の海軍技術中尉のときに命令を受けて沖繩へいきました。あのときに申しあげたと思いますが――、その受けました命令が、沖繩の南のほうの知念岬の灯台の大砲をはずしてアツツ島のほうへ持っていけという。情けない話ですよ。大砲が足りないから。

伊藤 そのときは上陸したのですか。

西田 私は沖繩にあって、大砲を山の上からはずして、軽便鉄道に積んで、那覇の港から送り出したわけです。

伊藤 あの頃は軽便鉄道があったのですね。

西田 あったんです。軽便鉄道のトンネルまでいくと、その大砲の囲いが引かかるものですから、のこぎりで角を切って。そういうのんびりした話です。沖繩のおいしい豚の料理をたくさん食べて。そのときに私だけ後に残って、首里ですね、首里城。戦争でやられる前の首里城を知っています。首里城で三味線を弾くお姉さんのしみみとした情緒を味わって帰りました。それが十七年です。私が結婚する年のまだ前です。次にいったときには、もちろん戦後ですから、首里は荒廃して跡形もなかったですね。このときは沖繩の人は意識的にももちろん戦跡をずっと案内してくださって、例の、私どもといった知念岬の端っこのほうの沖繩の軍司令官など全部自決したあの……。

伊藤 壕ですね。

西田 海岸の辺を見たり、それから健児の塔とか、ひめゆりの塔とか、きわめて厳しいところばかりでした。那覇の近くに海軍の基地がありました。そこで私の従兄弟が戦死したのですけれども、もちろん場所所はわかりません。沖繩の人がその頃は一所懸命、復帰、復帰ということで必死でした。だから、何かメモを書かされるたびに、「日本に復帰するのは、沖繩問題の解決のおわりではなくて始

まりである」と私は書いたのです。やはりそれから是非常に辛い経験をされたわけですからね。しかし、あの当時は日本に復帰することですべての苦境から逃れうると考えられたのですけれども、そうはならなかった。この三十六年頃というのは、もちろん戦後すいぶんたっていますし。

所澤 琉球政府の教育関係の部署の人たちとお会いになったのですか。

西田 いや、琉球育英会の理事長みたいな人がずっと中心でやってくださって、琉球政府にはあんまり会いませんでした。多少、お礼の意味もありますけれども、資格としてはプライベートな格好が主でしょうから、日本の文部省がやって来たということではないわけです。琉球育英会を見たり、私立学校を見たりはしました。

所澤 そのときは、琉球大学なんかもごらんになったのですか。

西田 いったと思います。が、よくおぼえていません。

■庶務課長となって

伊藤 では、きょうのお話に。この前のお話だと、学生課長からかわるということについては、そんなに積極的ではなかったというお話でございましたけれども。

西田 学生課のおしまいの頃のことをもう一遍見ていましたら、三十七年に庶務課長にかわったのですが、三十五年頃、長男坊が高等学校の試験に通った頃に、「きみは学生課長が長いからかわらんか」といわれたので、「学生課長がだめなら大学へ返してください」「まあ、固いことをいうな」といって、それはそれっきりになったのです。その三十五年に、人事の話として具体的に次官から、「きみは名古屋大学の事務局長にいらっやうから」といわれた。「あ、そ

うですか」といって、役所ですから、いわれたとおりですから、うちへ帰って女房に話しました。それは大変だというわけで、長男が高校に通ったばかりなので、名古屋の親戚に電話をかけて転入ができるような用意をしたりして、もう私どもは名古屋へ引越するつもりにしておりました。そうしたら、表の三十五年のところを見ていただくと、次官が緒方（信一）さんで、局長が小林さんですね。小林さんという人は私が長く仕えた局長ですが、小林さんが次官のところへ談判にいった、「私はそんな話を聞いていない。取りやめにしてくれ」と小林さんがごねて、とうとういかなかったんです。それが私の運命の分かれ目ですね。前に日高先生にいわれて出版屋から文部省へ来たのが一つの転機。このときに名古屋へいったら、おそらく普通のキャリアのコースとしては、ほかの大学の事務局長を転々として、地方まわりでおわりだっただろう。官房審議官なんかなりっこないし、まして中教審なんかまったく関係ない。それが、こういうまったく独特な生き方をできたのは、そのときの小林局長の押しですね。小林局長には課長として仕えて、ずいぶんいろいろ大事にいただいたものです。

小林さんと一緒にずっと庶務課長をやって、小林さんがかわった後で今度は調査局の審議官。局長は大学局長しか書いていませんけれども、調査局審議官に私を引っ張ったのは天城さんだと思います。天城さんは会計課長だからいろんなことをやっておられて、省内でときどき勝手な議論をふいたりして気心を知ってくださったのでしょうか。だから調査局の審議官ができたときに、こいつを引っ張ろうということでお考えになったのだらうと。

伊藤 では、前々から天城さんとはよくお話になったわけですか。

西田 ええ、よく話をして、あの方はアカデミックな話が好きなものですから、私のように理屈っぽくやっていると非常に面白がって。庶務課長にかわったのは小林さんのあれで、今度は……。

伊藤 審議官ですか。

西田 審議官。その後官房審議官になったのはどういうわけか知りませんが、天城さんがやめた後しばらくおって、すぐ調査局審議官はなくなっていましたからね。調査局がなくなっていました。

伊藤 バラバラになったんですね。

西田 ええ、それで官房審議官のほうへ上がっていった。天城さんが文部省の中でいわゆる教育計画という役所の長期の教育行政のプランをたてるということに一番熱心で、ユネスコのほうで出した教育計画の本を木田〔宏〕さんが訳した本『ユネスコ編 教育計画 その経済社会との関係』が出ていますし。天城さんはその方面

に熱心で、そんなことで官房審議官は私にやらせようという形で官房へいったのだと思います。官房審議官だという名前だけを見ても何をやるのかわからなかったのですけれども、いつてみてしばらくして、官房の教育計画担当ということになるのです。官房審議官というのは、そのあと国際会議やらOECDでいろんなところへ出ていくときに、外国語でカウンセラーとか何とかいったって何が何だかわかりませんから、訳としては、官房長の下ですから教育計画の副官房長ということで、Deputy Director for Educational Planning、といって通っております。その下には企画、統計、調査と三課が。調査局のときは期間が短かったから、バタバタしてただけであんまり覚えていませんが、やっぱり調査課、統計課がそこにおりましたからね。

伊藤 ちょっと継続の面もあるわけですね。

西田 そうですね。だから、仕事としてはつながっている点があります。まず庶務課長から申しあげましょうか。

伊藤 僕は役所の生活がないものですから、庶務課長というのは何のことかなあと。

西田 各局の第一課といって、その局内の各課の仕事のとりまとめ

です。もちろん局長がそのヘッドですけれども、実務的に各局の間の調整を要するような問題。それも内容的な問題よりは予算編成をやる。各局は要求を出してきますね。それをそのまま足し算したのでは会計課長のところへ持っていったら叱られます。「こんな、去年の二倍も。ばかなことをいいやがって」と（笑）。そうすると、多少ともその重点事項に少し話し込んで、「これはもうちょっと削るよ」とか、「新規が多すぎて、これは今年は大めだ」とか、そういう交通整理をする。局の会議にかける前の多少の事前調整をやって、局議のときは、局長がここに座って、庶務課長が司会をするんです。

伊藤 司会ですか。

西田 司会までやります。局長のやり方によって違いますけれども。その意味で、局内の予算の調整、それからもちろん人事のことも局長から相談を受けますし、課と課の間で揉めごとがあると調整しなければならぬ。それから、大学問題に関する総括的な問題がやってくる、どこの担当かではなくて、庶務課長のところへぶつかってくるわけです。日教組なんか、「文部省は大学管理法をつくって大学を締め上げるのか」といってくると、庶務課長が応対するわけです。局長の腹心として局全体の取りまとめをやる。局内のこと以外に、今度は省全体で大臣のところまで省議というのがあります。それ以外に、僕らのときはちょうど木田さんが総務課長でした。総務課長のところで、各局の第一課長を集めた定期の会議がありました。それはごく事務的な形で、今度は大臣がどこへいかれるからとか、外からこういう問題がきているからどうかという情報交換ですね。各局との間の情報交換と連絡、そういう第一課長会議があります。

伊藤 これは定期ですか。

西田 定期です。

村上 週に一回とかいう感じですか。

西田 一回ぐらいはあったでしょうね。これは木田さんが司会して、あの人が一人でしゃべりまくっていたけど。

伊藤 なんともなく分かるような気がします(笑)。

西田 私がこの庶務課長のときには、小林局長が一番長いですよ。この人が大酒のみで、飲むと必ず二次会、三次会で新橋のガード下へ。それで夜中まで付き合うんですね。庶務課長の第一の非公式の任務は、局長をフォローして、無事に下高井戸の家まで送り届ける。そして、飲みすぎてあくる日ダウンしないということですね。局長が遅れて、「来庁勤務を示す」電灯がつかないと、木田総務課長から電話がかかってくるんです。「庶務課長、局長はどうした。きょうの国会答弁は誰がやるんだ」といって。こういうのが本当はあからさまなところですよ。そういう意味の局長の介護をやったということ、小林さんが私を珍重してくれた。新橋の辺で飲んで歌って、それも三つ四つまわって最後に車に乗せますね。やはり、はしごというのは帰らないんですよ。局長というのは車つきですから、運転手も待たせていて。ここから下高井戸というのはずいぶん距離があるでしょう。

伊藤 まあ、あるといえはありますけれども。

西田 甲州街道をね。そのどこかでハッと目が覚めると、「おい、おりろッ」といって、おりてまた飲むんです。歌を歌っていると局長はごきげんなので、途中下車させないために庶務課長はいつもそこで歌を歌うわけです。私は、「ここはお国」を二三番まで全部知っています。次から次へとその当時の流行歌をやると、局長もよろこんでこうやって「手拍子をして」、それで途中下車しないで帰るわけです。家の近くまで来るとシャンとされましてね、夜中に奥さんが扉を開くと、「西田君が酔っ払ったので一緒に連れてきた」なんて(笑)。まあ、いい人でした。

伊藤 それから西田さんはどうなさるのですか。

西田 それから僕は局長の車を借りてうちへ帰るわけです。私は中野区のほうに住んでいましたから。これは本当の裏話ですが、庶務課長というのはそういう局長の面倒をみるというのが一つありまして、休まないようにしないと木田さんから怒鳴られる。第一課長というのはどこもそんなものですね。

伊藤 体力が必要ですね。

村上 局の審議官はどのように。

西田 大学局に審議官ができましたときに村山(松雄)さんが確か大学関係担当、岡野(澄)さんが学術関係。大学局審議官は二つあったんじゃないですか。

村上 初めに一つできて、そのあとで。

西田 もう一つできたでしょう。ずっと一〇年来、学術関係の研究助成とか、南極探検から全部取り仕切ったのは岡野さんでした。岡野さんが学術関係の大学局審議官、村山さんが大学課、技術課、学生課も広い意味では入っていますが、大学関係の審議官という格好です。局長、課長というのは一つのラインですから、審議官というのは、副局長ではなくて一つの専門職としての局長の補佐官ですね。審議官から命令を受けるということではない。しかし、中身についてはずっとやってきた経験豊富な人ですから、何かにつけて課長は審議官のところへ相談にいく。だけど、学生課は全然毛色が違いますから、誰とも関係がなかった。

■大学設置基準と手引き書の作成

伊藤 学生課長から庶務課長にかわられたら、ずいぶん仕事の内容がかわられて、ちょっとびっくりだったのではないかなと思うので

すけれども。

西田 かかりました。最初は局長と飲み歩くようなこともありましたが、庶務課のときは、局の総括ですから、最初にやっぱり局の担当している法令の整備ですね。私は教育についても法律についても一度も教育を受けたことがない物理屋ですけれども、いろいろ学生課長をやっているときに見よう見まねで見ておりました。大学関係の法規というのは非常に学校のほうの変化が激しくて整備されていない。特に新制大学になるときに昔の学校を合体させたわけですね。もとはといえば工業高等学校だった、こちらは師範学校だった、そういうのを集めて全然毛色が違うのを無理やり一つの大学にしている。そのまとまりをつけるというのはなかなか大変でした。しかも、そのときに新制大学では一般教養を重視するといって教養部というのをつくったわけです。私が庶務課長になるまで、教養部を設置するための法的根拠を何も設けていないのです。そのときに初めて、〇〇大学に教養部を置くという形で教養部というものを制度的に決めた。教養部ということと教養学部というのは違うのですよね。東大なんかは教養学部でしょう。

伊藤 東大は教養学部です。東大しかないの？

所澤 埼玉大学にあります。

西田 それから私立で真似してできましたがね。私どもはそのときに、教養部はごちゃ混ぜみたいところだけでも、教養学部というものを一応制度的に認めるのなら、大学設置基準という格好で学部ごとの骨組みがありますが、教養学部についてもその骨組みをつくろうとしました。

伊藤 教養部ですか。

西田 教養学部。教養部はそれに準ずるものだとして。

伊藤 ああ、準ずる。

西田 教養学部という正規の学部の設置基準をつくった。ちょうど

その頃は理工系増募で、日本じゅうの私立大学は大学増設でひしめきあっていた。やはり中途半端な学校が、教養学部というのがあるのなら一つそれを設置しようかといって、申し出てくるわけです。それはそんな生易しいものではないんだ。文科系、理科系、すべてについてこれだけの条件を満たさなければいかんという基準をつくりました。そのときに、それまでなかった教養学部というものを。それから、日本の看護婦の養成というのは、昔から看護学校というところに高等小学校を出た人を取り込んで、半分看護婦で使いたが、教育したことにして資格を与えていた。これが正規の学校ではない。だから、看護婦養成の正規の学部をつくるというのが看護学科というのをつくった。その看護学科で最初にできたのが聖路加です。聖路加の看護学部。これの設置基準をつくりました。医学部とは違って、看護学部という正規の四年制大学として。看護短大もできるようにしました。

伊藤 それは何の法の整備なのですか。

西田 文部省の中に大学設置審議会というのがあって、学校をつくるときには文部大臣の認可を受ける。その認可のための審査する大学設置審議会というものは、大学局の庶務課の担当なんです。私のところがその設置審議会を担当して動かすわけです。その中の専門委員会があって、医学部の新設をいつてきたら、そこにかけて審査して、認可するという格好になるわけです。

伊藤 設置基準ですか。

西田 設置基準をつくるのも、その専門委員会にかけます。これは常設されていますから、看護学部なら、医学系の専門委員会に看護の専門家を呼んできて——今の聖路加の日野原（重明）さんとか、あの人がある後学長になりましたけれども——看護婦さんが看護をするのはどうするんだというのを、あそこへ一所懸命にいったりしました。

伊藤 これは法律ではなくて。

西田 設置基準は、文部省がつくって、このものさしに合ったものしか認可しないぞと……。

所澤 大学設置基準の下位法令になるのですか。

西田 学部学科専門分野別の設置基準として、大学設置委員会が決めているわけですね。そのものさしに合わせて審査をする。

所澤 では文部省令ですか。

西田 省令でしたかな。

所澤 訓令扱い。

伊藤 国会にかけないでしょう。

所澤 かからないと思いますけれども。

西田 もちろん国会にかからない。設置基準はあくまで文部省だけのものです。しかし、文部省の役人がつくるのではなくて、その審議会にかけて一応決める。

伊藤 しかし、ここに書いてあるのは設置法施行規則と書いてあります。

西田 それはまた……。

伊藤 また別なのですか。

西田 それは今のよう新しい学部をつくるためのものですね。この設置法施行規則というのは、さっき申しあげたように、教養部もはつきりしてない。どこの大学にどういう学科があって、そこへ先生が何人はりついているのだという学校の組織を決めた規定が旧制大学にはあるわけです。○○大学○○学部○○講座、教授何名と。それは旧制大学にはあるのだけれども、新制大学には学科という名前が漠然とあるだけで、そこに学科が確定したような制度がまだできていなかったのです。それで、私どもは講座学科学科目省令というのをつくりまして、すべての新制大学の各学校ごとに、正規の学科としては○○学科、○○学科があると。そこに教授何名、助教授何名

がはりついているという定員表をちゃんとつくって、それを省令で一覧表にする。それがこのときの……。

伊藤 この時期なんですか。

西田 私が庶務課長をやって、大学課長が井内〔慶次郎〕君でした。彼が各大学を呼んで、「おまえのところの先生は何人おるのだ。これがどの先生だという表を書いて持ってきてい」というと、どこの所属かわからない先生がゴロゴロおるわけですね。その交通整理をやったわけです。

伊藤 ああ、そうですか。

所澤 旧制のときは官制というので決まっているものですよね。それが戦後官制がなくなって、ポストがどうなっているか法令的根拠がなくて、文部省と折衝の中でどんどん決まっていくな形だったような。

西田 確かに、力づくでたくさん定員をどこかに引っ張り込んだり、やり場のない先生を無理やりにどこから借りてきて置いておったというような形で、中身が非常に雑然としておったわけです。その交通整理を庶務課長として大学課長と一緒にやって、省令をつくった。

伊藤 この定員問題というのは厄介な問題ですよね。

西田 旧制の人を取り込むときにある程度は整理しても、なかなか首を切りにくいのが残りましたね。

所澤 今もこれは文部省令か何か決まっているのですか。

西田 ええ、講座学科学科目省令というのはそのままあるはずですよ。新制のほうは講座のかわりに学科学科目という名前を使っていますので。村上 いま教養部のお話がありましたけれども、教養部は三八答申で出てくる話だったと思いますけれども。

西田 教養部の問題は、正式には教養部というのは事実上先に存在したのです。京都大学はいまだに教養部ですね。私の卒業した旧

制第三高等学校がそのまま横滑りして教養部になったのですが。

所澤 当時は教授会がなかったのですか。大学によって違うのでしょうか。

西田 教養部というのはもともと旧制高校の先生が主体になっていますから、専門で集まっていけないでしょう。もうピンからキリまでおるわけですが、文科系、理科系。だから教授会の体をなさないのでしょうね。教授会としての独自の意思決定機能を持たされていなかった、認められてなかった、学部のような独立性が認知されていなかった。それが、教養部というものが制度化されて、そこも学部並みの運用をするということにだんだんなったわけです。ところが教養部がこういう事業をやろうとしてカリキュラムを決めると、専門のほうから、俺のところへ来る学生がちっとも基礎ができていないじゃないかという文句が出るわけです。それなら専門のところから教養部と専門学部との間の教育内容に関するお互いの角突き合いというのがしょっちゅうありました。

伊藤 ずっと後までこれはあったわけです。

所澤 群馬大学の場合は、学芸学部があって、学芸学部が昭和四十年頃に教養部と教育学部に分割。そこで教養部ができるのです。旧制高校のなかった地方大学はたぶんそういう形ではないかと思うのです。

西田 教養部ができると、入学した前期、一年か二年の間そこにお預けして基礎訓練して、専門のほうはそれを引き取る。最初の一、二年の教養課程というものをこなしていくのに便利だったということです。学問的な組織ではないという格好になっているのですね。伊藤 ですからやっぱり大学の中ではなんとなく二等市民みたいな、そういう扱いだったと思いますけれども。

村上 庶務課長時代には中教審の審議とかかわりがあるということ

ですか。

西田 いえ、担当は全然ありません。ほかの審議会で大学のことが上がって、大学問題が中教審で主題になっているときはもちろん私どもが会議の様子を絶えずフォローしていくという格好はありました。だけど、官房審議官になって直接担当すると、これは寝てもさめても中教審の問題。そのプロデューサーですから。

伊藤 設置基準問題というのは、これは直接の担当だということですね。

西田 ええ。教養部をつくったり、講座学科目省令を規定した。その仕事をしたということが一つです。今の大学設置審議会というのを抱えて、全国から殺到する大学設置認可の申請ですね。私どもの三十七、三十八年というのは最盛期でございます。理工系増募ということがいわれだして、私立学校が各大学ひしめき合って申請をしまいにあります。その学校一つ一つの中身を見て、審議会にかけられるだけの材料を整理して、最終の認可までもっていく。この手順は、毎年各学校が認可申請書を出してきて、その年の十月頃に設置審議会を開いてそれを審査し、十一月に専門委員会、これは文科系、理科系、医学系というふうになって、大体その結果を十二月にもう一遍審議会にかけておよその良し悪しをきめて、翌年の一、二月に実地視察にいくわけです。その中身を書類に書いてあるとおりの中身かどうかを見て、そして三月頃に認可するというのが決定するわけです。審議会が予備審査をし、二月頃に視察の結果まで出す。それで認可されなければ四月から店を開けないわけです。

伊藤 それは認可されれば四月からできるのですか。

西田 そう、四月から開きたいという申請をしてくるわけです。大学は、それまでに校舎を全部建てて、必要な先生を全部集めてきて、まだ月給は払ってないですけども、この講座は誰先生、この授業は誰がやると、教育組織を全部。具体的な個人名とその人の経

歴も全部載せた一覧も、全部書類をそろえて。

伊藤 こんなものでしょう〔高く積みあがった様子を手で示す〕。

西田 一つの大学の申請書類はこんなに〔たくさん〕あるでしょう。多いときには、一四、一五人おりました庶務課の職員と、隣の技術教育課と、大学課と、全部で四〇人ぐらいの職員に、一人に四つか五つの大学を担当させているのです。むちゃくちゃでした、あの頃は。申請が来れば、受け付けなければいかん。そして、その担当した職員はそれを審議会の会議のときまでにちゃんと用意して、自分のところを通そうと思って一所懸命やる。関係の学校を呼んでは、ここはどうなっているんだという格好で調べる。一番難しいのは、当然、出てきたカリキュラムの審査ですね。それが学問的に設置基準にふさわしいかどうか。担当する教員の資格、この個人の資格審査をやるわけです。設置委員会で一人ひとり、〇〇大学のこの候補者は〇と書く。これは合格とか、その及落が決まるわけです。出てきたものの半分も通らないと、それはアウトですね。そういう厳しい審査をやるのですが、これは専門的な仕事ですけれども、非常に精力的にやらなければいけない。それを、私もうちの課長補佐と一緒に整理をしながら、審議会全体の会長と相談しながら運営をしていくわけです。

そのときに私もが一番神経を使いますのは、まだ二〇代の若い職員が三つも四つも大学を担当しているわけでしょう。その大学は通してもらおうと思っただけであらゆるサービスをするわけです。文部省で金の心配がくるというのは大学局の庶務課くらいでしょう。設置認可のために、私立学校はあらゆる手を使ってその担当者のご機嫌をとったり、サービスをしたりしてやるんですね。二、三年続けさせると必ずスポイルされて接待オーバーするやつが出てくる。庶務課長として一番神経を使います。もちろん担当は交代させたりしますが、多いときにはなかなか手が届かない。大学側も必死です。落

ちたら一年浪人ですからね。建物も全部宙に浮いているわけです。

伊藤 人事もどうしようもなくなっちゃいますね。

西田 私も一つそのときに、もう審査のおわりの頃でしたが、自分の公務員宿舎に帰ったら、女房が、「きょう、〇〇という薬科大学の人がごあいさつ見えて、お菓子折りを持って来られた。お父さん、開けてみたら下に札束が入っているんだよ」というんです。女房が震え上がってね。私はそれを役所へ持って行って、「おい、その学校を呼び出せ」といって、庶務課長のテーブルのところで、学校の担当者に、「きみ、これは僕は食べられないから戻すよ」と。庶務課はそういう金のこととか、不当な接待の危険性が非常にありますから神経を使いました。

そのときに私が三年ほどやっていて非常に不親切だと思ったのは、認可権を持っているから、向こうはあらゆることで丁寧に来るわけです。しかし、役所のほうがどこまで親切に基準に合うような申請ができる世話をしているかというと、職員も一人ひとりはその専門的に詳しくない。長年やっていて詳しいやつは少ししかいませんから、全員が担当したりすると、相手に対する行政的な指導も十分でない。これは一遍、専門家の知恵のある方を集めて、大学設置をするにはどういう準備をして、どれだけの条件が必要かというのを一冊の本にしようじゃないかというのが、「三十九年大学設置の手引書」。これは熱海の公務員の宿舎か何かに三泊ぐらいしまして、五、六人泊まりこんで、それで皆で原稿をつくりました。大学設置の手引書というのは、当時の私立学校の人に非常に喜ばれました。それが虎の巻になって、それを見ていけば少なくとも事務的には通るのだという。これが私のやった一つの仕事のうちに入ります。

伊藤 しかし、持ってきたら受理しなければならんわけですか。

西田 ええ。けれども、事務的に見るだけでだめだといえるようなものもありますからね。

伊藤 あるのでしょうか。必要な書類がそろってないとか。

西田 必要な学科構成の職員の数がそろっていない。その先生方の資格が何も学位を持った人がいないとか、そういうことで「これはだめです」とつき返すような場合もあります。

伊藤 要するに、行政のレベルでつき返してしまう場合があるわけですね。

西田 あります。しかし、審査になると、むしろ審議会の方々の心証によって非常に左右される……。大学としては、今度は裏で個々の審議会の先生に根回しにまわるんですよ。だから審議会の各専門部会の主査だとかというのは皆外には秘密にしているのですけれども、やっぱり蛇の道は蛇で、その先生方の家にもおそらく皆いつているでしょう。認可申請というのはそれだけの非常に危険性のある仕事です。

実地視察のときには私もぜひぶん先生方と一緒に中国地方から九州までまわりました。今でも覚えておりますが、皆さんご承知の、最近よく問題になります帝京大学の医学部、それから平塚にあります安楽死で問題になった東海大学の医学部、ああいう大学の医学部は初年度は落第しました。審査の結果、理事長候補者がやって来て、「おたくは今年はだめです」といったら、庶務課長のテーブルの前で泣いていましたね。すべての経済投資を一年間棒に振るわけですからね。しかし、これはどうしようもない。時にはそういう人が手を回して政治家のところから大臣のところへ。どの大臣だったかな、大臣室へ呼ばれて、「西田君、何とかならんか」「だめです」「どうしてもだめか」「だめです」「じゃ、僕からそう引導を渡そう」といって、決して無理はされなかったですね。

伊藤 やはり設備の問題とか教授陣の問題とかカリキュラムの問題とか、大体そういうことですか。

西田 カリキュラムは大体目に見えないものですから、書類に書いて

ておればいいように見えますよね。教員資格審査です。有資格教員が必要な数そろっているか。この教員がこの科目をやれるかという、中身が非常に問題なわけです。

伊藤 大体それだけ大学がどんなできるときというのは、教員がそもそも足らんわけですからね。

西田 専門部会の先生というのは、これも誰が専門部会の委員かと公表はしていきいのですけれども、その先生方は、例えば医学部の先生だったら日本じゅうの医学部の一応名の通った人は皆知っているわけでしょう。「こいつが小児科のこんなことをやるもんか」といわれたらどうしようもない。事務のほうは先生方の話を整理するだけですから、そんなに知恵は使わない。

伊藤 実際に審査にかかるまでの間にアウトになる場合もかなりあると思うのですけれども、実際に審査に入ってからだめになるという事例もかなりあるわけですか。

西田 それはもう、合格率はどれくらいでしたかな。三月の末頃に明年度の設置認可になったと新聞に出ますね。あれは申請の何割くらいでしたかな。僕らのひどい頃には、それは半分もいかなかったのではないのでしょうか。一人、三校か四校担当しているくらいたくさん来ているのですから、「あなたのところはまた来年いらっしやい」というようなもので、浪人二年、三年ということもあり得るわけですね。

所澤 国公立大学でも結構そういうところがありましたか。

西田 国立大学もこの設置委員会にかかるんですよ。学部の新設とか、そうそう、大学院の新設もそうです。国立の場合特に、あの頃は大学院の新設がずいぶん出ました。そのときには学部の先生を大学院のこの講座の担当として申請する。その資格審査でずいぶん落ちる先生が出てきます。一所懸命その学部長さんがやってきて、自分のところへ大学院をつくろうと持ってくる。ふたを開けてみたら、

先生のところは半分位の先生が合格だけでも、よく見たら、その学部長も落ちているんですよ。

伊藤 ああ……。

西田 厳しいです、どうしようもない。これは私も中身はわかりませんけれども厳しいものだし、審議会の先生方は皆、少なくとも学問的にはどこからも非の打ち所のない方々でしょう。だから皆文句をいいませんでした。実地視察にまでいったのですから、なかなか苦勞の多い仕事です。あの当時の設置審議会の会長は明治大学の学長さんでした。佐々木さんといったかな。設置審議会の運営というのが庶務課長の一つの仕事というような格好でした。

伊藤 ご自身も実地にいかれるわけですか。

西田 いかれるわけですね。どこか専門の分野で。

伊藤 分担して、先生ご自身も。

西田 その専門部会の人为主としていかれるわけです。設置委員会の正委員の先生方も。

伊藤 それに課長がついていくこともあるのですか。

西田 僕も。庶務課の連中は皆先生方のお世話でついていきます。向こうの学校と相談して、宿の世話から何からね。いった先で必ずお土産が出たり、昼飯の接待があったり。

伊藤 そうでしょうね。

西田 それは、こちらの意向として、昼飯は簡単にしてもらいたい、夜は宴会なんかやらないとか、そういうコントロールはしました。

伊藤 そうですか、お目付け役の役もあるのですね。しかし、お目付け役が自分でやっちゃったらずいいな（笑）。

西田 菓子折りを持ってこられたのには参りました。

■日教組との付き合いと大学の管理・運営

所澤 先ほど設置基準の話があったのですが、教育学部の設置基準というのは今もないようなのですけれども、教育のほうについては、何か問題が起こっていた時期ですか……。

西田 その当時はあったのか、新規でつくった覚えはありません。だから、どこまで確定的なものがあったのかどうか。しかし、教育学部というのはそんなに作りましたか。あんまりつくってないでしょう。

伊藤 戦後にワーストとできただけで。

所澤 学芸学部が教育学部に切り替えになったときに、教養部が教育学部と一緒にできるところが多いですよ。

西田 どこにでもわんさと師範学校があったわけですよ。これが母体でしょう。旧制師範学校というものが衣替えして、多少人間の入れ替えをした。むしろ師範学校固有の先生のほうが立派な教育能力を持っておられたのだけれども、学問的業績という点で落ちて、新制大学のほうであまり評判のよくない先生方が学芸大学に流れてきたということはよくありますね。

伊藤 東大のように、師範がなくて、文学部の教育学科かな、それが教育学部になるわけですよ。だからまあ、同じ教育学部といっても全然違いますね。

西田 東大の教育学部の先生方は私も個人的に知っているのですけれども、「あなた方は教育学といつて、小中学校の教育はあって、大学教育というのは誰が研究しているんだ」といったら、誰もやっていない。

所澤 そうなんです。僕が大学院にいた頃はまだやっていまして

した。

西田 紺屋の白袴だと。だからこの前申しあげたように、大学は森羅万象を研究するけど、大学というものと学生というものだけは研究していない。学生課長のほうがよく知っているんだって。

村上 先生が庶務課長をおやりになった頃に、教員養成の制度についていろいろ議論されているということが……。

西田 あったでしょうね。教員養成課というのがあって、ベテランの課長がおられた。

村上 それは教員養成課のほうのお仕事であつたということですか。

西田 ええ、それは庶務課では直接は。教員養成課というのは大学局の中では非常に独特の雰囲気を持ったところでした。前の師範学校以来の伝統……。

伊藤 ああ、そうですか。

西田 ええ。ほかの学問分野の人から見ると、教育学なんて学問じゃないなんて混ぜ返す人がいますけれども、教員養成というのは非常に実践的な手段ですからね。

伊藤 そういう意味では法学部と同じですね。

所澤 独特の雰囲気なんです、今でもあるようですね。文部省の中でどうしてそういう雰囲気が残っているのでしょうか。人が異動しないからなのでしょうか。それとも、そういう人がいっぱい入ってくるからなのでしょうか。

西田 教員養成の課長さんは、あの人は古い人だったなあ。やっぱり、文部省の中では昔から師範というものの系列はずっと独自の分野でしたでしょう。大学なんかとは違った師範教育という。教員養成というのは明治の初めから非常に大事にして、森有礼大臣のときに師範学校の制度というものを確立して。あの当時の思想からいえば、師範教育というのは軍隊教育のいいところを全部取り入れようという形で、師範学校の寄宿舎というのは兵舎と同じ構造にしたわ

けです。ずうっと並んで、廊下があつて、「集まれ」といったらパツと出てくる。軍事教練みたいな非常に厳しい管理をする。国民精神の育成の根源だという形。やっぱり国家的な筋金入りの先生をつくるという意気込みがあつたのでしょう。宿舍がそうですし、教育制度がある意味でマンツーマンの非常に厳しい指導があつたのでしょう。

後の話になるのだけど、私が庶務課におつてからずっと中教審のおわりの頃まで、日教組が一番強い頃でした。あの日教組の人たちといろんな接触をし、国会答弁などいろいろ見ていて、日教組の反政府運動とか文部省に対する反対運動というものは、私はこれはイデオロギーではないと。戦前の師範教育によって徹底的な忠君愛国の国家を一〇〇パーセント信頼する教育を受けてきて、それで子どもを教育してきたやつが皆戦争にいつて死んじゃって、そしてコロツとひっくり返っちゃった。その戦前の師範教育の国の指導方針、これが一〇〇パーセント間違っているんだといわれたことに對する一つの怨念みたいなもの。だまされたという。それがやはり文部省に對する反発で出てきている。日教組の反対というのはそういうので、左翼のイデオロギーとは全然違うね。国家主義的な教育指導方針に對する恨みだと、こういう感じですね。

おもしろいのは、NETのテレビでおしまいの方に、あの当時の日教組の委員長の檳枝「元文」さんと對談を二度ほどやったんです。それはプロデューサーが決めてきたんだけど、「日教組とやりますがいいですか」というから、「ああ、いいですよ」といったんです。檳枝さんと、たった一五分間ですけどもね。「あした日教組の委員長とやるんだ」といったら、女房が緊張してテレビで見ていた。うちへ帰って、「どうだった」というと、「檳枝さんって話の分かるいい人じゃない」と（笑）。二回目か三回目のときに、放送がすんだ後に喫茶店でそのプロデューサーなんかと一緒に彼もコー

ヒーを飲んでいまして、「実は、きのう帰ったら、『横枝さんってなかなか話の分かる人だ』と女房がいていました」といったら、「いや、私の女房も、『文部省の人ってもっと怖い人かと思ったら、いい人じゃない』って」と(笑)。プロデューサーが、「こういう話をしてほしかった」といって悔しがってね。正式な話し合いというのは型にはまったようなもので。

伊藤 そういう話をなかなか本番ではできないですよ(笑)。

西田 もう台詞が決まっていますね。人間というのはそういうものなんだね。そういう点ではずいぶん私も日教組の連中とお付き合いしました。

その後の大学管理法の問題なんかのときに関連して。このときだったかな、もうちょっと後かな、教員に対する超過勤務手当てを出せとかというような問題がありました。そのときは、それに対する教員の勤務状態の正確な統計をとろうと、私得意の例のサンプル調査で、日本じゅうの県の中で、それぞれ違った地域の旧制師範学校に関係のあるところから現在の小中学校の先生をサンプルして、その学校を毎月違うところにあてて、その学校の中でまた違う人を選んで、その人の一カ月間の勤務状況の時間割を全部書く。この人は授業をした、これは試験の問題をつくった、この日は受験勉強をさせたとか。そういうものを作って、先生方がどんな仕事にどれだけ忙しいのかというのをやったのです。あの調査は文部省に残ってないかな。僕は残念ながら手元にはないのですが。膨大な調査でしたが、私が非常に自信を持ってやったのです。

おもしろかったことは、出てきた結果は、先生方が朝八時半なら八時半に出ていって、忙しいから後に残っていると、勤務時間が長いとか超過勤務しているとかといえますけれども、先生がいつ学校を引いて帰るかというのは、その地方の日暮れが何時頃かによって決まっています。それはそうでしょうね。田舎の小学校で、

田んぼでまだ人が仕事をしているときに学校の先生が知らん顔してかばんを提げて帰るといのはみっともないから、まだ日のあるうちは帰れない(笑)。それが一つ。同じ県内でも、この地域とこの地域、昔の前身の師範学校が違うとまったくその勤務のパターンが違うんですね。だから、やっぱりあれは一つのカルチャーですな。その師範学校の先輩以来、先生の勤めぶりというのは、この学校ではどこまで残っていても生徒の試験問題の世話をすると、こちらはサッサと帰っちゃうということは、その地域の前身の師範学校の区画によって非常にはっきり違いました。それ全体を通じたら、何も超過勤務手当てを出すような理屈はちっとも出てこない。それで日教組の代表を呼んで、そのデータを見せて、超過勤務はだめだぞといったら、「こんなブルジョア統計が」といいやがったから僕は癪に障って、「どこがブルジョア統計だ。変な言葉を使うな」といってね(笑)。

伊藤 それも計算機を回してやったわけですか。

西田 統計の面では、そういうこともあったし、いろいろやりました。

所澤 それは一応印刷資料をつくられたわけですか。

西田 つくったはずですが。文部省の中のどこに残っているのではないかと思います。

伊藤 あるでしょうね。

所澤 それはいい資料ですね。

西田 個人を全部サンプルしたのですからね。膨大な調査でした。結局、その後統計課のどこかに入っているでしょうけれども、私のような立場から統計をやるという興味を持っている人がいないとだめですね。結果は使うけれども、企画してやるという人はやはり多少とも理科系の素養がないと。

伊藤 こういう目的のためにこういう調査をするということですよ

ね。

西田 あと庶務課長のときに……。

伊藤 大管法ですか。

西田 庶務課長の仕事で定期的に行ったのは、国立大学の事務局長、庶務部長の再教育という格好の研修です。文部省がときどき、一年に一遍か二遍はやるのですよ。この庶務部長、庶務課長の研修は大体庶務課長の私の担当でして、文部省の隣の会館に集めて一般的な話をしたり。そのときに私がいつもやっておりましたのは、前にこの本『教育改革の課題』に書いた私なりの大学論、つまり、大学というものの運営がどんなに難しいかという私の一つの考え方です。大学というのは一般の会社とも違う。企業や普通の役所とも違って、大学の運営の難しい原因には、大学の中に三つの違った原理が共存して、それを並行的にやらなければいけない。

法律によって設置されている国立大学などは、公共の営造物として、これは一種のピラミッド型なんだ。その面から見ると、学長がトップにおいて、教授会もあり、学生もおる。しかし、そういう公共営造物という立場から見れば、すべての権限が学長に集中していて、教授といたって大学の雇い身なのだ。月給をもらって雇用されている雇用関係。学生は電車のお客さんみたいに賃金を払って乗っているだけなんです。四年たったら卒業していくので、乗客みたいなもの。その全体を運営しているのは大学の当局なんだ。その意味で大学を見ると、大学の管理者、教授、学生というものは、一種のピラミッド型において、絶対的な権力体系として、政治組織でいえばオートクラシー、専制主義なんです。何人にも侵されない権限というものを学長が持っている組織であるという見方がある。オートクラシーという原理がまずある。

その学校が何のためにあるのかといえば、学問研究のためにある。学問研究ということになれば、その学問を体得し、研究能力を持つ

た教授というものがもっとも権威を持つ。そうすると、その学問的な権威のある教授団というものが大学の中で一番オーソリティーを持つ。学生はそれを学ぶものだから、その先生方に教えを請う。管理者というのはそういう人の研究活動がうまくやれるようにサビスするもので、サビス機関なのだ。その立場から見れば、大学の教授団というものが最高の権威を持つということは、これは政治組織からいえばアリストクラシーだ。

今度は、学生の教育という立場。教育という立場からいえば、大学の中で一番大事なのは学生なんだ。その学生をうまく育てていくように世話をするために教授会がある。その全体の学園生活というものをうまく調整していくために管理者というのがあるので、これもサビス機関だ。この意味での管理者、教授会というものは、それぞれ役割はあるけれども、そこに上下の関係とか権威の関係というのはない。完全に対等な人間の立場にいる。これはデモクラシー。だから、オートクラシー、アリストクラシー、デモクラシーと、まったく違う構成要素というものがある。そのどれか一つだけが大学だといったらだめになってしまう。その三者を同時にわきまえたうえで、すべての問題の解決についてどういう割り切り方をしているかというところにある。それを、教授会が万事やれるのだといって教授会が思い込むと変なことになってしまう。学生が、俺たちの大学だからと勝手なことをやってもだめ。管理者が、俺たちのことを聞けということだけでもだめ。そういう点が大学運営の凄く難しい点。これは会社にもないし、役所にもない。この難しいことをうまく運営のうえでどうやっていくかという大学運営論というものをも誰も研究していないという話をしました。その大学論というのが私の持論でして、そういうことをいってみたら、「まあ、そんなものかな」というだけです。

結局、運営について事務局長や庶務課長を訓練する方法というの

は、私がアメリカにいったときに向こうの大学で見てきたケーススタディーです。その事例研究のシステムというものをやろうという形で、あそこの会議で集まって、数名ずつのグループに分かれて、各大学の事務局長や庶務部長に、自分の学校で運営に困っているケースを具体的に書いてくれと。それをケースブックとして皆に配って、そこでそれについてディスカッションするという形で、生きた運営上の問題にどう対応すべきかということを少しずつ学習していく。これがやはり一番いいだろうというので、それを私の庶務課長だったときには少し続けました。私は、高専にいった場合も高専の先生方に毎年夏研修会を開いて、やはり学生指導と学生教育のケーススタディーをやりました。個々の先生の持っている教育体験というのがそこに生に出てきて、そんなことをほかの先生方はやっているのかということと非常にいい勉強になりますね。だから私は、実践教育学というものをやるとすれば、そのケーススタディーメソッドというのは非常に意味があるだろうと。

伊藤 ケーススタディーですね。

西田 それなしに、「教育とは」というようなことで厳かなことをいってみてもだめですよ。

伊藤 おっしゃるとおりですね。

■教育課程のシステム分析を通して

西田 私はよくいうのですが、学生の教育実習だといって、それを指導といえるのだったら、その先生が、「今からこのクラスの生徒が数学が好きになるような教育を俺がやってみせるから見ておれ」と。それがやれなければ本当の指導にならないわけでしょう。医学部の先生は威張っているというけれども、彼らは、「盲腸の手術は

こうするんだ」と、全部見せておいてやるわけですね。あの年寄りの大家が。心臓の切除から全部。それが一つの臨床教育。医学というものが人間の体を相手にし、教育は心を相手にしている。なぜ教育が医学ほど専門分野として発達しないかと我々は議論したのですが、医学部のやっていることの一番の特色は、その臨床をやっている。特に病理学をやって、一人の患者を一所懸命治療しても、亡くなったら病理解剖をやる。そして、なぜあのときにあの処置をしたのは間違っていたか、どうして薬が効かなかったか。あそこで失敗したんだなど。すべてのケースについてケーススタディーというものを徹底的にやって、それが臨床のほうに跳ね返ってくる。医学部は生きた人間を相手にしてケーススタディーをやって、それで問題の根源を探るということをやっている。医学は、生理学、解剖学、病理学という基礎学をやって、臨床をやって、そしてケーススタディーをやる。ところが教育の世界で、私が学芸大学におったかぎりでは、教育学とか心理学とかひととおり基礎は習いますけれども、生きた子どもを相手にした臨床というものを本当にやるところまでいっていない。

伊藤 教育実習。

西田 いったときに実習を指導できる先生がいなくてですね。盲腸の手術はこうするんだとやれるように、先生がその見事な模範授業をやるかといったら、指導の先生がやれないんです。少なくとも僕の知っている範囲では。それでは実習にならないじゃないか。そういう意味で、教育学が高度の専門分野になるためには、臨床教育学というものを確立しなければだめだ。

私が後で官房審議官になったときですが、そういう議論からとうとう、仲間で教育のシステム分析の研究をやろうということをやりましたね。何かというと、教育というものがこういうことを身につけさせるのだという目的はいろいろ議論があるのですけれども、そ

れをどうやったらいのかという具体的な方法論の議論がなかなか発達しない。例えば、義務教育の段階で二千何百字漢字を教える。もっとも模範的な漢字の教え方というのはどうなんだ。皆がやっておられるだろう。日本中の学校の中で一番見事だと、誰もがいいという先生の授業というものを完全にビデオに収めて、それを一遍研究会で分析してね。まず最初に黒板に先生が字を書くのか。生徒に当てて答えを出させるのか。つまり、生徒と教師との間の情報のフィードバックですね。その交流のプロセスをシステム分析する。これはエンジニアリングの仕事ね。そのシステム分析をして、このシステムでいくことが一番最終的なアウトプットが大きいとか、学生の中に残るといふ分析ができるはずだ。それができたら、名教師というようなことを抽象的にいわないで、そのシステムを公開してやれば誰だってできるじゃないか。そこまで教育というものをシステム分析して一般化する方法をしらどうか。その研究会を官房審議官のときに仲間ですり始めたのですが、中教審が忙しくなってすっ飛んじゃいました。

村上 ああ、それは惜しかったですね。

西田 そんなのはどこでもやる気になったらやれるはずでしょう。

所澤 今、僕の個人的な体験からいくと、どうも教育委員会では逆行しているような感じがすね。まず、そういうまい先生とか、要するに腕のいい先生という特殊な存在を消そうとしているような感じがするのですね。つまり、そういう人を模範にしてというふうに動いていかない。

西田 誰かをほめるとか手加減するというのはなくて、事柄の合理性を追求していったね。一所懸命先生は教えているけれども、無駄なことの繰り返しかも知れないしね。どうやったときに生徒を喜ばせて、どういうときに一つの罰を与えて、それによって人間というのは反応するわけでしょう。一つのアクション、リアクションの

フィードバックなのだから、そのプロセスが教育課程というものだろうと。ティーチング・ラーニング・プロセスのシステム分析をやるうというので。おもしろいでしょう、こういう考え方。

伊藤 おもしろいですね。

西田 そのときにはね、単なる心理学者ではなく、理科系のエンジニアでシステム分析をやっている専門家も入れて、そうしたらもっと教育の進歩はあるだろうと。

所澤 実は大学で教育工学という授業を担当していて、その話をするのですね。ただ、事例がないんですよ。つまり、ちゃんとそういうことをやって、本当にこういう形で、うまい先生がこうやって教えて、そしてこういう結果が出てきたと。あるいは、先生の教え方にどこに問題があって、それをどういうふうに改善したら変わるのかということを実例がないんです。理念的には教育工学はそれをやるということになっているんですが、現実には、学生に見せられるものとか、実際に教育現場に持っていてこうなっているのだと見せるものが、今はないですね。

西田 教育的成果というものを評価するのが非常に難しいのですが、さっきのように漢字を教えるということだけのきわめて単純な目的に、例えば千字の漢字を何ヵ月間に覚える。どこまで覚えたか。何人に成功したか。こういうのはデータが数量的に出てくるわけですね。そういうところから始めていくと、教師と生徒の間の交流の仕方についてある種の法則性が分かるのではないか。それはやはり教育研究だろう。明治以来、役に立つ知識、技術を教えてきたけれども、豊かな社会になったときの最大の問題は、人間の価値観の問題だろう。すべての人が生きがいをどこに見出し、どういうところに人生観を形成していくか。その価値観の形成という問題について教育学というのはどういうアプローチをしているのか。これは大問題なんです。だから、人間が生まれて、それぞれ自分なりの価値観を

形成していくプロセスというものをもっともって研究して。道徳教育という言葉をしきりにいいますけれども、今頃また中教審がしきりに生きる力というのをいっているでしょう。あれなんかも、そういつているけれども、じゃあ、生きる力というのは何なんだ。それをどうやって測定するのか。それを高めていくための方法としてどんなことが可能なのか。それをやらないとね、学校に向かって、「生きる力」といっても、何もいわんのと同じですよ。

伊藤 そうですよ。

所澤 本場に現場の多くの人はそう感じているのではないでしょうか。

西田 あと庶務課長時代に多少印象に残っていることで感銘深かったことを少し付け加えます。昭和三十七年だったな、東京大学の医学部に有名な沖中内科というのがありました。あの沖中〔重雄〕先生が定年でやめられるときに私どもの小林局長を訪ねてこられました、「私は医学部を長年やっていて今度やめるのですけれども、大学局の人に話を聞いてもらいたい」といったら、局長が課長全部集まれとって、局長室で話を聞きました。非常に謙虚な穏やかな話の方でした。あの人は大学の卒業講演でも、自分が何十年間教授をやっていて、自分がやった内科診断でどれだけミスがあったかという自分を発表されましたね。その先生が、最高の大家とあらうたら、「私は将来の医学部の教育について心配していることがあります。なかなかその意見は通らないのだけれども、一番心配しているのは、だんだん医学教育というのは、人間というのを全体で見るということがなくなってきた。ある人は心臓ばかり見ている。ある人は胃袋ばかり見ている。それでその専門性が高まっていくけれども、一人の人間の調和した命というものがどうなのだと見る目がだんだんなくなってしまうって、これで一体医学といえるのだろうか。だから、医学教育というもののカリキュラムのたて方から根本的に

考え直さなければならんのではないか。長年専門化していくにつれて私はそういう不安を持っております」と諄諄と話されました。私は専門のことはわかりませんが、非常に感銘を受けました。ご立派な方だと思いましたね。沖中先生は虎ノ門病院の院長になられて、まもなくあの立派な方が痴呆になられたのだそうですね。

あとは庶務課長時代では、聖路加の看護学部ができたときの話。

伊藤 それが最初の看護学部ですか。

西田 そうです。その後もまねしてできたかもしれませんが、あれが初めて四年制の……。大学院もつくったのかもしれませんが。看護婦さんというもののステータスがパッと上がったわけですよ。看護

所澤 その頃に、東大で看護学校を短大にするとか、そういう問題が起こっていたというように思います。

西田 そうそう、そうそう。

伊藤 医学部看護学科にしたんじゃない？

西田 医学部の中に看護学科をつくったでしょう。

所澤 そういうコースがあって、看護学校を短大にしようとしたときに、文部省は短大の部長を医学部長の下に置くということに対して反対して、学長の直轄じゃないとだめだと主張したと、確か『東大百年史』に書いてあったと思うのですが。

西田 文部省の制度からいうと、短大というのは全部大学に並列して置かれているという、〇〇大学短期大学部というやり方になっているから、学部の所属ではないということですね。

所澤 東大の医学部は、短期学部を医学部長の下に置かなければ医学部のコントロールができなくなると。それで結局、東大は今でも看護学校は看護学校でそのままですよ。短大化していない。

伊藤 看護学科は看護学科としてあって。

所澤 今は保健学科になっています。

西田 看護学校というのはお医者さんからいうと便利なんですよ。

学校にいつて教育しているといいながら、実は安い月給で看護婦としての准看護婦か何かみたいなもので、身分の安定しない形でこき使っている。これが非常に不満があるわけですね。それでは看護学校を出ても何も学歴にならない。お嫁さんにいくときだって、看護婦あがりといったらそんなに高く見られない。それで看護短大というものをつくったわけです。看護短大をやるときには、普通の短大が二年だけでも、厚生省の看護婦の基準からいうと、三年は勉強しなきゃいけない。だから、看護短大は全部三年制にしたわけです。文部省は短大制度で看護短大を認めるということにしたわけです。

所澤 東大はそのところで短期大学を医学部の下に置きたいということだったようです。

伊藤 ずいぶんガタガタ揉めていたという記憶だけがありますが。

■大学管理法の中止に関連して

西田 庶務課長のことについて申しあげるのはそんなことですか。あ、大学管理法の中止というやつがあった。これは大学管理法をとにかく何とかせにゃいかんという形で審議会が答申を出されたところ、それが決まった途端に大学側が猛烈に反対されましたね。古い手帳を見ておりましたら、日程表なんていうのは何もわからないですが、ところどころ中身が。幾つかの手帳に、この大学管理法を法制化しようという提案に対して、国立大学協会の会長、副会長が文部省に来て、皆さんがそいつをせひやめてくれといっておられたというところがメモしてありました。要するに、大学のことは大学に任せてくれと。文部省があんまり言い出すと内輪がおさまらないからという形で、いろんな反対論が出てきて。

大学法の始末。衆議院の別館で文部大臣が説明をされて、これまで六・三・三制をやってきたけれども、最後の四の大学のところは充分検討されていないので、中教審に諮問をして、そこから答申が来ましたと、文教部会の中で説明しているわけです。なんとか間に合えば法案作成をもっていきなさいと。しかし、三十七年六月に新聞がそれをスクープして公表したものですから、国立大学協会が各大学ごとに検討して意向を取りまとめた中間報告を持ってきた。新しい権限でコントロールするという一つの被害妄想みたいなものが出てきて、新しい自治、学問の自由のつかえ棒としてやりたいと思っているのだけれども、どうもそうはいかない。三十九年の十一月に、茅（誠司）先生と平沢（興）さん、東大と京大ですね、とりやめたらよからうということでも申し入れがあった。三十八年には、中山伊知郎さんかな、東畑（精一）さん、有沢広巳さん、同じことととにかく了解を求めるということで、中教審の努力は分かるけれども、せひ法案化はやめてくれと。そういう格好でやっているうちに、この当時の総理は誰でしたかね、国会对策上、総理大臣もあんまり乗り気ではない。結論は、文教部会で事前相談ができなかったのはまづいから、大勢やむをえない。もう一年見送って世論各方面的意見を聞きましょうと、次期国会提出はやめになった。今後うまくいかなかったらまた法制化を考えろということで、政治家のほうも腰折れしてしまっただけです。非常に大学が組織的に反対をされました。

伊藤 何が一番反対点だったわけですか。

西田 それは、大学管理という言葉自体で大学の人はごそっと反対されるので。その後、中教審の中心になられた森戸（辰男）先生が、国の行政権による大学のコントロールというものを非常に皆さんが心配されるけれども、それは戦前の歴史をいろいろ考え併せるからだ。森戸先生自身が「森戸事件」という格好で東大を追われた人でしょう。その森戸先生が、「戦前の国家権力」というものは軍隊とい

う一つの暴力組織を持っている。その背景における国家権力と、新憲法下における国の行政権というもののコントロールというものはまったく異質なものだということを知らない。今の大学の人は、大学の自治というのはまさしく戦前の「天皇の神聖は侵すべからず」と同じような考え方をしている。おかしいじゃないか」と中教審のときにいわれました。先生ご自身はそういう感想だったわけですね。だけど、そのへんは非常に短絡的に考えられるわけです。戦前の大学は文部省がコントロールしたとか、教授の首を切ったとか。大学管理という言葉自身が既にアレルギーですね。今だってまだそうじゃないですか。

伊藤 まあ、そうかもしれませんね。

西田 結局、大学管理というのは。

伊藤 この法案の担当は。

西田 これはもちろん大学課です。そういう法制化をするとすれば。

伊藤 大学課ですか。

西田 ええ、大学課で。あとは調査局審議官のほうへ少しいきますか。

所澤 すみません、もう一つ。先生が庶務課長をされていた時期というのは、一年生で入って、三年生になるときにほかの大学にかわるというような制度があって、例えば医学部などで、東大の医学部に入れないために千葉大の医学部にいったとか、あるいは群馬大学でも三年から東大の教育学部に入るとか、そういう三年次編入の制度がずいぶんあった時期だと思うのですが、そのへんのことについては何か先生はかわられましたか。

西田 医学進学課程というのがありましたね。正規の医学教育を受ける前に医進課程というものがあって、教養部は医進課程の役割をするという格好なのかな。あんまり私は正確に覚えておりません。所澤 タッチされてなかったのですか。

西田 ええ。これ〔文部省歴代幹部職員一覧（平成十三年一月五日現在）〕は便利ですよ。縦横そろえて見るのは大変ですね。これをつくった人も大変だったと思います。

村上 庶務課長時代に、理科教育の振興のお話が高等教育でも話題になったと思うのですけれども。

西田 それを忘れていましたな。庶務課長の頃に今の理工系増募が非常に問題で、私はもともと理科系なもので、今の工学部の教育というものは、機械装置、実験装置と非常に手間がかかってなかなか大量養成ができないというので、大学の先生方と一緒に文部省の庶務課の中で、「多人数教育」という言葉で一つのカリキュラムの合理化をし、大勢の学生に効果的な理科教育をやるような体制をつくらうと、理工系増募の一つの手段として、理工系の多人数教育というものをどういう実験装置をそろえてどうやればいいか、そのマスタープランはこしらえました。国立大学では電気通信大学がそれを取り入れて、学校の実験装置その他をかって新しいモデルプランをやり始めました。旧制の大きな学校というのはとてもそんなものは入らなかったのですけれども、私立では早稲田大学の理工学部が、学部長は何ていう方でしたか、大変熱心で、早稲田で模範的な工学部の多人数教育をやり始めました。そのきっかけをつくる仕事を私が庶務課長のときにやったことがあります。

伊藤 一番最初にお話しがありました教養部設置等については、私どものほうで村上君がつくった表によりますと、国立大学設置法の一部改正（一九六三年三月）が行なわれていますね。やはり法改正なのです。

西田 講座学科目省令などで学部の構成をやったときに、その土台としての法律のほうも、国立学校設置法のほうもかえなければならぬようになったかもしれません。そういう法令関係は庶務課の担当でした。

伊藤 学長認証官法案が廃案になったというようなこともあります、何かご記憶はございますか。

西田 大学管理法と関連しているのでしょうか。

所澤 認証官にするというのは、御名御璽が要するというやつですか。

西田 あれは不思議なものでね、国立学校は、「あなた方は身分上は文部教官です」というのですね。文部教官と「文部」がつくのはやはりあんまり気持ちよくないのじゃないかな。しかし、今の国立学校設置法による国立学校をやめて、最近やろうとしている特別行政法人とかというのがありますね。筑波大学ができるときに中教審の答申で、あれと同じように筑波はやりませんかといったら、筑波の福田〔信之〕学長が、「ほかのことはいろいろ採用したけれども、それだけは勘弁してくれ。特別の法人になったら、国家公務員ではなくなるのか」というから、「それはなくなりますよ」と。「そうしたら年金はどうなるだろう」とかね。今まで先生方は文部教官ということで文部省からコントロールされるのはいやだといっていたのに、今度は自由にやれといったら、身分が国家公務員でなくなるということは不安だ、やめてくれといってね。だから、今の独立行政法人もやはりそんな問題が絡んできますね。

伊藤 そうなんです。僕もあれはよくわからないのですけれども、国家公務員の定員を減らすことがあれをきっかけで始まるわけですよ。

西田 それは形式的ですよ。

伊藤 けど、なんか……。

所澤 実質的にかわらないですよ。

伊藤 かわらないというようにことをいっているからね。

西田 ここまで公務員でありませんといって横へのけるだけの話でしょう。それでも筑波は中教審の答申のように学部というものを解体して、学系と学群という形に分けた。そして、こちらは教育のシ

ステムで、こちらは研究のシステムだと。学部はそれを一体のものだと明治以来してきた。しかし、これだけ大学が多様化してきたら、教育のシステムは別に分けて、学問は学問のシステムでいくべきだ。

これを中教審で議論したときのおもしろいのを思い出しますが、京都大学の堀尾〔輝久〕先生が、学群と学系というのは何だかよくわからないんじゃないかという、あの先生は京都だから、京都の祇園にいくと、芸者さんの組織があるわけですね。芸者の置屋というのがあります。そこで琴、三味線の修行をしている。お座敷があったら、そこへ舞妓さんとかをチームで連れて行って芝居をやる。学系と学群というのは、その置屋とお座敷みたいなものだ。

伊藤 ハッハッハッハッ(笑)。

西田 そのものずばりでしょう。芸子さんとしての修行を置屋でやって、そこにおかあさんがおって、それが厳しく訓練する。それは学系ですよ。学群というのは、きょうのお客さんには舞妓さんが多いほうがいいとか組み合わせで。中教審でそんな話も出ていたんですよ。おもしろいでしょう。筑波大学はそれだけ採用したんだね。

伊藤 でも、実際の運用はなかなか大変みたいですね。そういうのは人事権がどうなるかと、いろいろ複雑な問題が絡まっていますからね。

所澤 国立大学特別会計法公布というのがありますが、先生はこれには何かかわられたのですか。

西田 これは大蔵省のほうから言い出してきたんですよ。大蔵省の文部関係の主査、今の自民党税調会長の相沢〔英之〕君、彼が担当で国立学校特別会計法というのをやろうと。そうすると、これによって国立学校をどんぶり勘定にして、こちらの学校で余裕が出た金をこちらにも使って、中で金のやりくりが楽になる。一つ一つの学校で予算をつけないで。そういう点で、長期計画として国立学校を充実するのにはそのほうがいいじゃないかという形で特別会計法がで

きたのです。しかし、総額自体を大蔵省のほうで締めている限りはそんなに代わり映えしなかったと思います。

所澤 それ以前は一つ一つの大学、全部別個に。

西田 ええ、一つずつの査定ですよ。

伊藤 それは大蔵省は面倒くさいだろうな。

所澤 大学の数が増えてくると特にそうですね。

西田 きょうは庶務課のところだけでいいですか。

伊藤 それでもいいですね。やはり切れ目で切ったほうがやりやすいかも知れません。

西田 官房審議官のほうへはこの次から入りましょうか。

伊藤 はい、そうさせてください。

所澤 すみません。先ほど私は教員養成関係学部設置基準というのはないのではないかといたのですけれども、その年表には書いてありますね。一九六〇年六月五日のところに、日本教育大学協会が教員養成関係学部設置基準要項を決定したと。

伊藤 これは協会の話だから。

所澤 あ、なるほど。

西田 きょうはちょっとくたびれましたね。

伊藤 少しお疲れのご様子ですので、無理なさらないでください。

西田 鳥取に一人で介護施設で療養していた私の九〇歳の兄貴が亡くなりまして、先週の水曜日のお昼頃連絡があつて、その日の午後二時の汽車で鳥取へいったのです。丸一昼夜生きていたのですけれども、木曜日に亡くなりましたね。金曜日にお通夜をして、土曜日にお葬式をして、日曜日の夕方に帰ってきたのです。きのう一日休んだのだけでも、きょうはまだ目がしょぼしょぼしています。

伊藤 次回は決まっておりますので、一月の分はまたこの次に決めましょう。どうもありがとうございます。

西田 国際会議がそろそろありますから、またかわった話がで

るかと思います。

伊藤 少しお休みください。

西田 ああ、これは重たいからこれ〔アルバム〕だけ、さっきのテレビ出演ですが。

村上 それも審議官時代のお話になりますね。

西田 これは官房審議官のときですね。

伊藤 これもおもしろいですね、文化祭。

西田 文化祭の芝居です。これで、作ならびに演出ですからね。これは事務所の中を片付けて練習しているわけです。

伊藤 これは練習風景ですね。

西田 これは記念撮影。これだけ職員を動員してやるんですよ。

伊藤 ふーん、女性がいっぱいいるなあ。

西田 ここからです、「NET日本の教育論」。

所澤 これはどこかにフィルムが残ってないですかね。

西田 これは読売新聞の加藤さんという人。それから、これは秋山ちえ子さん。なかなか名士が来ておられるんですよ。これは俵萌子。それから池田弥三郎さん。

伊藤 三人でやっているのもあるんですね。

西田 ええ。

所澤 金沢嘉市もいますね。

西田 うん、金沢嘉市さんね。曾野綾子と俵萌子と両方出てきたときもあります。戸塚文子さんか。この佐藤忠男というのは映画評論家ね。これもいま有名になっている人だな。

伊藤 西田先生、お若いんだなあ（笑）。

西田 それはあなた、これは昭和三十何年でしょう。三十何年前ですよ。それは若いですよ。「通知簿について」という話があるね。うっとうしい話ですよ。この入江徳郎さんというのが朝日の論説委員だったでしょう。

伊藤 そうですね。あ、これが曾野さんだ。

西田 曾野綾子と俵萌子さんが出られて。

伊藤 宮沢浩一と佐藤忠男さんか。

西田 これだけ話をしているなかで、私が対談の相手として一番見事だと感心したのは落語家ですね。やはり話術の専門。こちらの話を見事に引き出してくる。

伊藤 柳家つばめ。

西田 これこれ、このおっさん。「先生はかわいいそう」というテーマで。入江徳郎さんが出ているでしょう。

伊藤 「暴力学生対策」という。

西田 村松喬は毎日新聞の論説委員で、少し左がかったのだけど。

これはフジテレビの人。永井道雄が出てきているでしょう。これは京都時代にコーヒーを飲ませてやったから。これは加藤地三さん。

伊藤 この方はよく出てきますね、読売の人。あ、黒羽さん。

西田 黒羽さん、これは読売か。これは外大の学長だった小川芳男さんね、受験雑誌なんかを書いた。入江徳郎さんも出ているなあ。

西田 伊丹十三、これは珍しい人でしょう。伊丹さんは亡くなりましたね。

伊藤 わあ、黒柳徹子さんも若い、若い（笑）。

西田 少なくとも三十年前ですね。それから茅誠司さん。茅先生も若いでしょう。ソニーの井深〔大〕さん。こんな偉い人とやってね。

伊藤 これが槓枝さんだ。

西田 うん。おもしろかったですよ。ここでおわりですな、ここで最後か。これ、代々木ゼミの校長です。若いでしょう。これは文化祭の中の一つだな。昭和四十三年。

伊藤 ずいぶん簡単なセットですね。

西田 そうそうそう。

伊藤 張りぼてのものね（笑）。

所澤 生中継だったのですか。

西田 生中継。遅刻したらいかんし、時間が来たらピシャッと、「そこまでのところを西田さん一言で総括してくれ」とパツといわれるわけです。

伊藤 いわれるといったって。

西田 ナレーターが入るわけです。これ〔写真〕は芝居だな、何年か。

伊藤 こういうのがあると、いろんなことを思い出すでしょうね。

西田 おもしろいでしょう、これ。これはうちの家族です。この女房も今は八〇歳ですからね。

伊藤 それは、年が離れていくということはないですからね（笑）。

西田 年を追いつ越すわけにはいかんしね。

伊藤 お子様は？

西田 これが最後の子で、これが次男坊。

伊藤 では三人。

西田 男二人女一人で、三人です。末っ子の娘が、もう五十何歳になりましたからね。まあ、そんなところですよ。

伊藤 ありがとうございます。

西田 亀久夫 オーラルヒストリー

第6回

日時：2002年12月16日

14:00～16:20

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊 藤 隆（政策研究大学院大学教授）

小 池 聖 一（広島大学助教授）

所 澤 潤（群馬大学 教授）

村 上 浩 昭（東京都立大学助手）

■ 調査局審議官として

西田 きょうは私が官房審議官になってからの話ですね。調査局審議官と官房審議官で。

伊藤 両方ですね。

西田 きょうは国際会議のいろいろ関係しているところを。中教審の答申の問題はこの次にもう少しまとめてお話しします。

伊藤 あれはまとめてお話しただいたほうがよろしいと思います。

西田 きょうは国際会議としていろいろ出入りがあったこと、私が学んだことを少しご説明します。

伊藤 その前に、最初にやはり調査局の審議官というのはどういう存在なのかということだけ、ちょっと簡単にお話してください。

西田 それが私もよく分からないんです(笑)。天城(勲)さんが局長をやっておられて、私がいつてしばらくして天城さんがかわられて、調査局審議官の私の在任期間は正味一ヵ月くらいなんです。それでなくなっちゃったから。

伊藤 これは前からあるポストですか。

西田 いや、私がいったときに初めてできたのではないですか。

伊藤 そのあとなくなるのですか。

西田 ええ。調査局そのものがなくなっちゃうんです。

伊藤 ですから調査局審議官もなくなるわけですね。

西田 そして官房審議官ができて、ちょっと間をおいて私は官房に移った。天城さんは調査局長をやめて管理局長にかわった。

伊藤 その調査局審議官というのは先生お一人。

西田 だったと思いますよ。

伊藤 前任者もなし、後任者もなし。

西田 ええ。審議官制度ができて、調査局審議官というのは私が初めてではないですか。それでわかりでしょう。調査局がなくなっちゃったのですから。

伊藤 たった一ヵ月の話ですか(笑)。分かりました。今度は官房の審議官になれるわけですが、これとは違うわけですか。

西田 前にいただいた天城さんのレポート『天城勲オーラルヒストリー』がありますね。あれをきのうもう一遍念のために拝見しました。天城さんがいつておられるように、調査局というのはいろいろなもの寄せ集めであって、あるものは文化庁へいつちゃった。国語課とか文化財とか。

伊藤 著作権課はどこへいつたのですか。

西田 著作権課は文化庁へいつた。それで、前は調査局にあった中で、企画、統計、調査の三つが官房へいつたわけです。そこへ私がいつたわけですから、官房へ移った調査局の三つの課を私が向こうで総括するようになった。

伊藤 新たに加わったのはないのですか。

西田 官房にいつたときには、前から調査局にあったその三つがいつただけで、もともと官房にはロジスティックのほうで、総務、会計、人事。官房長はもっぱらそれを束ねて、大臣のセクレタリーをやる。官房長の一番大きな仕事は国会との関係ですね。官房長はそちらできりきり舞いされているので、同じ官房にあっても、企画、統計、調査、これは中教審および教育計画の関係で、「きみ、やってくれ」ということで審議官が全部任されていました。事実上、官房長の指揮を受けるということではなくて、官房審議官としての仕事はほとんど次官へ直接していました。天城さんが次官でしたから、中教審のときもしょっちゅう天城さんと連絡をしながら、「こういつています、こういつています」と、官房長は別に通り抜けみたいになって。そういう格好で、教育計画のプランニングをやる総括の職だという

ことです。

伊藤 審議官というのはスタッフなのでしょう？

西田 ええ、ラインの命令系統の中で部下を持って指揮するという格好ではないわけです。

伊藤 今のお話を伺っていると、なんとなくラインのような感じがしますけれども、

西田 しかし、文部省の実際の行政を実施する仕事を担当して、いろんなお金をどうこうしたり、法律をつくったりということではなくて、むしろ政策の中のプランニングをやるということで、そのためにはほかの局という関係がありますが、で上がったものは答申とか勧告とかという形になるだけで、自分が直接大学と学校を相手にしてある行政処分をするというような活動はやらないわけです。

伊藤 だけど、その三つの課に関しては。

西田 これは直接私の指揮下に入るわけです。

伊藤 指揮下に入るのですか。そういう意味ではラインみたいな感じですね。

西田 ラインですかねえ、言い方ですけれども。ほかの局へいきますと審議官というのはむしろ専門職みたいになって、局長を助けて、ある特定の分野の仕事について局内の仕事を調整していくという形で関係の課にいろいろアドバイスをしたり、助言を与えたりする。官房審議官だけは、その三つの課は丸っきり私にかかりっきりで、まとまった仕事をやっていくという格好です。その後は制度が変わったから今はどうなったか知りませんが、私の頃はそうでした。ですから、前に申しあげたように、外国人のところへ出るときには、deputy director for educational planning という言い方をしておりました。

伊藤 はあ、はあ、分かりました。

西田 調査局審議官は約一ヵ月だけで、四十年六月一日に就任してすぐそこで降って湧いた問題で、やらなければならんことが出てまいりました。一番最初に出てきたのが、最近問題になっています全国学力テストですね。これを福岡県がボイコットした。調査局が一応学力テストをやっていましたから、福岡県けしからんということとで、審議官が大将になって初中局の人なんかを連れて県に乗り込んで、福岡県の実情を調べてこい。向こうでなぜやらなかったかということをつるし上げてこいという命令を受けました。六月一日になって、二十四日から二十九日の五日間福岡県へ出張です。初中局の今村君とか渋谷君とか、そういう人たを四、五人連れて乗り込んでいったわけです。

これはそのときだけの仕事ですが、出かけていって、県の教育委員会の本部、県の指導を受けているボイコットした北九州、八女とか大牟田とか、そういう地方の教育委員会をそれぞれまわって実情をいろいろ調べました。そして、どういうわけでボイコットしたのだと。まあ、向こうの言い分は、教育の現場に混乱を起こさないために組合と円満に話しをして、一応これはやらないことにしたのだということをするのです。そのときの言い分をこのときにいろいろ聞いたやつが手帳の中にあります。

伊藤 手帳に書いてありますか。

西田 要するに、本来学力調査というものと教育委員会の教員の人事問題というのは関係ないのだけれども、これからやるやつもそうですが、あれで生徒の学力のレベルが県によって違うとなると、その県の先生の評価になってしまう。ひいては教員の勤務評定になってしまう。勤評反対ということで日教組は強くかみついたわけです。したがって、教育委員会が県教組といろいろ折衝して、学力調査に関する折衝を困難にしないためにという理由で、実質的に承認した人事を組合の要求によって取り消したということがあらしいです。

県教委が学力検査を不可能ならしめた原因は、次の事実を見ればその主張するところが教育的配慮にあるのではなくて、その不正な組合との関係からきているのだということをメモしていますね。要するに、県教組のやり方はなっとらんというので。結局それは、教委にいてもそういうことで暖簾に腕押しみたいなものですから、私のほうから福岡県教組に会見を申し込んだのです。県教組もおびえたのか、なんだかんだいって逃げ回って、とうとう会見が成り立たなかった。文部省のほうから申し込んだのに断られた。これは会見はできませんでした。県教組などの言い分を報告したという形で、それ以後そういうことは起こらないようにという格好で、文部省の初中局のほうが具体的に指導したのでしょうか。調査局は学力テストの実施部局ですからいっただけで、あとの処理には私どもは関係しておりません。これが審議官になっていったところで途端にやらされた仕事です。

■能力開発研究所の後始末

西田 私が六月一日にいったのですが、今度は天城さんが七月二十九日に調査局から管理局へかわってしまいうから、天城さんとは正味一ヵ月ぐらいいしか会っていなかった。それで、よくいわれるように天城さんの後始末をたくさん頼まれました(笑)。そのなかの一番大きなやつが能研という、能力開発研究所。天城さんが前から、学力テストだけではなくて、入学テストそのものの合理的な解決をやるためにどういうテストをして、どんな評価をしたら、入学試験がうまく合理的にいくか、そのための研究的なものとして能力開発研究所をつくった。一番初めの段階では森戸「辰男」先生を理事長に担いで、文部省の建物のなかではなく、向かい側のTOTOの三

階くらいに事務所を置いてやっていたのです。

伊藤 TOTOのですか？ そうですか、へえ。

西田 そのときに私が最初にその仕事をやってくれということで、いま覚えておりますのは、広い意味での全国的なサンプル調査をやっている、そのテストの結果を集計して、いろいろ成績評価の仕方を研究するわけです。その場合に、やはり今の入試テストがそうですが、まだその当時は入学試験の成績をコンピュータで処理するという技術が確立していなかった。東芝とか日立が、まだやっと郵政省のはがきの数字を読むことができた程度だったんです。入学試験の答えを記してカードのマークを読むなんていう技術はまだできていなかった。東芝で少しで上がっているのを現場に見にいきました。したがって、TOTOの三階にその機械をレンタルで借りてきてまして、実際に学生がチェックしたやつがどの程度正確に読めるか、そんなことをテストしたりして、そのへんから始めたわけです。きわめて初歩的な初期の段階です。

それが続いているうちに、文部省がそういうことをやりだし、能研自体のテストが普及していくと一番商売上困るのは、入試の問題をいろいろ売り込んでいる例えば旺文社ですね。あいう会社がそれに目をつけまして、能研のテストと同じ日に自分のテストの日を決めまして、妨害に入ります。向こうのほうが老舗ですから、お客さんが向こうへいっちゃって、物凄く意地悪されました。そういう格好で二、三年やっていううちに、能研のテストというのはお客さんが減ってくるし、成果がいつ出るのか分からんからというので、もうこれは店じまいだということになったわけです。天城さんがかわられる頃にはほとんどそれはだめになった。その後始末をやってくれと。そのときに、能研が今まで全国で調査し、いろいろ集計をよそへ頼んでやったりして、一応のデータがまとまったものがコンピュータのテープにできていたのです。それ全部やるために

二四〇〇万円ほど赤字になって借金が残っていたのです。その赤字をこさえたのは財団法人ですが、その法人がスタートしたとき、必要な費用は文部省のバックがあるからだいじょうぶだと銀行がどんなお金を貸してくれたわけです。そうしたら、二四〇〇万の借金を残したまま解散する。それを西田君なんとかしてくれという（笑）。そこで役に立ったのは……。

伊藤 倒産処理ですか。

西田 文部省へ来る前に京都の出版屋で破産処理をしたという経験が一番役に立った。「分かりました」というわけで、虎ノ門のあたりの住友銀行、第一銀行など、四つぐらい銀行をまわりました。役所が世話したのだから、役所の借金ではないけれども、絶対に迷惑はかけない。そのかわり、利子の支払は全部ストップしてくれ。そうしたら、これから三年間のうちに元金を分割して戻すから安心して任せてくれといって銀行の支店長に会って話をしたのです。「西田さん、あなたはこうしてそんなに借金の話までできるんだ」というから、「実はこれで会社の破産整理をしたんです」「そうでしょうなあ、役所の人がそんなことをいうわけない」と待ってくれました。三年間にそれを戻す算段をするには、結局、大蔵省から金をもらうより仕方がないですな。二四〇〇万の借金のために金をくれなんて言ってもだめですから、能研のテストでつくったコンピュータのテープがちゃんとデータとして残っているわけで、もったいないから将来のためにこれを国立教育研究所で買い取らせようと。そのテープの作成費用の原価計算をすると、かかった費用から収入のあったものを引いたら、ちょうど二四〇〇万ぐらいになるわけですよ。その買い取りの費用を三カ年で分割して出してくれと。大蔵省の主計官がいま党の税制調査会の相沢（英之）君ですが、「うまいこと考えたな。仕方がねえや」といって、八〇〇万ずつ三カ年毎年出してくれた。それで銀行に三年間でピシャッと戻しました。やっぱ

り破産整理というのも役に立つ（笑）。銀行屋とそういう話をするには度胸がいります。銀行は元金さえ戻れば、利子はとめられたって儲からないだけでいいですよ。元金がつぶれちゃったら大変です。能研の後始末はそういう格好で解散になりました。そのテープが国立教育研究所にあるはずですが、おそらく誰も使ってないでしょう。

伊藤 それは延べ人数にしてみんなの人になるのですか。

西田 かなりのデータだと思います。全体の仕事の記憶はありませんけれども。

所澤 その職員とか研究員だった人たちはどういうことになったのですか。

西田 どこへ行ったのですかね。そのときは私どもの調査局のなかの今の調査課がやっていました。そこがいろいろ世話をしたりして、どこかへ就職したかも知れません。育英会をあぶれて出てきたとか、そういう人を集めてやっていました。非常によく働いてくれた人たちです。しかし、せいぜい一〇名もいなかったでしょうね。

伊藤 そんなものですか。

西田 そんなものです。ちっちゃなもので。

伊藤 ではまあ、実際は能研のほうのお仕事というのはもっぱら整理のほうの。

西田 ええ、私は能研の後始末です。破産整理（笑）。しかし、その頃から私は今の入試問題に非常に関心を持っていて、前の庶務課長のときも全国的な学長会議とかいろいろところで入試問題をやって、その頃から入試方法の改善というのを自分として個人的なプロジェクトとしてやってみたいという気があって、能研にも大変興味を持っていたのです。いま能研がそういう始末になってしまっただ変残念だというのですが——これは私が一番最後の頃に総括してまとめてご報告しようと思うのですが——、それ以来、私は調査局の

審議官、官房審議官をやめてから、高専の校長、それから短大の学長、そのあいだずっと入試の選抜方法の改善というものについて、どういう方法が合理的かということ自分を分なりにいろいろ検討するのです。というのは、それぞれの学校で、試験をして入れた学生が入ってどんな成績か調べたのです。高専や短大で校長がやる気になれば全部調べがつくわけです。

伊藤 追跡ですね。

西田 ええ。そのデータをパソコンで集めて分析してやった結果、この方法でいいじゃあぶだというのを最後の短大をやめる直前に選抜方法をその新しい数式を使ってやったら、普通の選抜方法で入る場合の学生と三分の一が入れ替わります。

伊藤 あ、そんなに違うのですか。

西田 しかも、その入った学生が確かに先でのびたというのを一年か二年だけフォローできただけで私はやめてしまったのですが。高専のときにはそれを教授会でかけたのですが、先生方が噛み付かないわけです。そんなややこしい方法はいやだというので。つまり、入ってからの学業成績というものを何らかの形で総括した一つの数値に直して。入学試験のときには、学校の内申書の成績が九教科ぐらにあるわけです。そして、入学試験で高専だと五教科、一四のデータがあるわけです。その一四のデータと入ってからの成績との重相関係数ですね。重相関係数というのはコンピュータでなければやれないような厄介なもの。校長の道楽なんて笑われたのですけれども、それをずっとやってあちらこちらで発表しましたけれども、「ああ、それはいい方法だな。しかし、とても難しくて歯が立たん」というようなことをいわれました。これは一つの私の仕事として、いつかの時期にまとめてご報告したいと思っています。

伊藤 それは何かの形でブック化されたのですか。論文？

西田 論文というよりも、自分でつくったペーパーに興味を持たれ

たのが、この前事件を起こしてまだ生きていますリクルートという会社がありますね。リクルートの会社が教育関係の雑誌に載せてくれというのでペーパーを発表したことがあります。それ以外は、まあ、重回帰分析なんていうのは大体普通の人が全然理解しようと思えませんからね。

伊藤 まあ、それは僕だって全然分かりませんけれども。だけど、その入試の方法をやるためにはその難しい数式を使ってやるわけでは必ずしもないのでしょう。

西田 自分の学校に入った学生の追跡調査をやる。

伊藤 そうでしょう。

西田 入試のときの判断材料であるデータがどういう関連性があるか、これを調べて、こういう方法で組み合わせたら一番関連性があるということでは選ぼうということだけのことです。考え方としてはあまりまえることなのです。五教科の試験をして、その合計点の平均値の高いやつを順番に入れるというのでもいいのかどうかということは、何も根拠がないわけです。だから私はいったのです。今の入学試験であんな方法をしていて、もしへそ曲がりの親が、「俺の子どもが落ちたのはどういうわけだ」と裁判所に訴えて、「大学の選抜方法の合理性を説明せよ」と裁判官のところまでやられたら答えられないわけです。「長年そうやっています」というだけの話ですよ。それがいい人を選んでいるかという証拠は何もないのです。高専のときなんか、入学試験で全国の高専で統一テストやって、そこでやった数学や理科の成績と、入ってから五年間の数学、理科の成績との相関はほとんどゼロなんです。それを教授会に出したって、数学の先生は、「そんなはずないッ」なんて。

伊藤 ハハハハハッ(笑)。

西田 手前がいいと思った問題を出しているけれども、全然相関はないぞ。あれで選んでいるのは何だと。そういうようなことがやっ

ぱり出てきているのです。これは今になるとごまめの歯軋りみたいなものですが、それがいまだに少し手元にありますから。

伊藤 そうですか、またお話しください。

西田 能研のことはそういう格好で、私の個人的な意見として……。

伊藤 天城さんの後始末というのは、一つはそれですね。

■アジア・アフリカ諸国に対する教育協力

西田 うん、後始末です。学力テストは引き続き続いているということでしたけれども、私は一年でかわってしまったから、次は関係ない。あとは、アジア・アフリカ諸国（A A諸国）に対して教育協力という格好で、あの当時ハイカラなことがありましたな。教育学ですか、どなたかもやっていたらいいでしたね。

所澤 はい。

西田 ああいうことで、新しいメディア、機器を使って教育を効率的にやろうなんて。先進国のやったものをそのまま、ラジオやテレビを使ったら非常にいいだろうということで開発途上国へそんなものを持ち込んでみた。ラジオをずいぶん持っていて聴覚を利用したいいろんなことをやろうとしたら、ラジオは喜んで受け取ってくれたけれども、一年もたつと乾電池がなくなって補給ができない。バッテリーのないようなところへラジオを持っていたってどうしようもないです。日常のこんな電気（部屋の明かり）はもちろん使えませんし。だから、A A諸国の教育協力の問題は非常に難しい。一番そのときに役に立ったといって喜ばれたのが紙芝居で、これが視覚教育としてビジュアルなもので教える。そういうものが役に立つのです。

伊藤 単純明快でいいですね。

西田 テレビなんかだめなんです。電気がないですから。まあ、そんなことも少しかじっただけです。

所澤 その紙芝居ですが、日本でつくったものを持っていってやったのですか。現地で作られたのですか。

西田 そういうものを自分たちの学校でつくってやれば生徒は非常に学習意欲を出すということをしただけです。

伊藤 具体的にはどこの国の話ですか。

西田 どこでしたかな。A A諸国で、そういう人が集まって東京で会議をやったりして。まあ、そんなことでA A諸国の協力の問題にも関係しましたが、ほとんどおぼえていません、一ヶ月でやめましたから。また、調査局には留学生の問題があり、その当時から日本語教育というのが一番難しい問題でした。これも私はたいしたこととはしませんでした。そのときの感想として、開発途上国から日本にやって来て、とにかく日本で留学生として勉強して一応成果は上がったけれども、よくできるまともな連中が向こうの国へ帰らないのです。頭脳流出といわれるやつです。ですから、留学生の募集の場合に、必ず元の鞘におさまるだろうという見通しをもって選考しないと、自分の国から逃げ出すために勉強しているような者がずいぶんあるわけです。特にインドなんかはひどいですよね。日本よりもはるかにノーベル賞が出ているでしょう。大体皆よその国へ行ってしまって、インドのなかに根付かないわけです。

そのときに私が矛盾を感じましたのは、日本へ来て、日本以外のところで通用しない日本語という難しい言葉を覚えて、それが身についたからといって、あとでどう役に立つのかということ。日本に残って商社へ入れば別ですが、それ以外では、本国へ帰っても日本語はあんまり役に立たないのです。日本の商社がいていれば就職できるというくらいの話。その当時の私の感覚としては、日本がそういう開発途上国に教育援助するのに、留学生を日本へ呼

んできて、中曽根さんなんかは一〇万人呼んでくるとか、そういう景気のいいことばかりいわないで、むしろ日本の先生を外国へ輸出すべきではないか。現地で、その国のなかでいい教育ができるように。そのためには、外国へ行って教える能力と、外国語のできる先生を日本で養成して、それを輸出したほうがいいのではないか。人間の教育水準の高さと普及度というのは日本は世界でも有数なので、すから、そのもったいない資源を外国に出す。留学生ではなくて、先生を外に出すべきじゃないか。

開発途上国へ行ってよく感じますのは、ヨーロッパの国なんかはポツリポツリ、個人的なベースだけれども、その国へ入ってきてそこで一生、骨をうずめるまで、その教育をやっている人がいるのですね。日本人というのはそんなのはあまりいません。しばらくいていたら、早く国へ帰らないと自分のポストがなくなると、すぐみんな帰っちゃうわけです。本当にその国のために骨を埋めるような、そういう教育をやるべきではないか。その意味で私は留学生政策でどんな人をふやすというのはいまだに疑問を持っています。しょせん、なかなかものにならないかと。

所澤 その当時の留学生ですが、どこの国から来た留学生が多かったですか。インドネシアですか。

西田 東南アジアの方面でいろんな方。留学生会館というのがあるのです。そこで日本語教育を受けていましたから、いろんな国がありました。

それに関連したことで、ちょっとあとの話になりますが、木更津高専の校長をしておるときに、初めて文部省が工業高専に留学生を入れようと言いだしたので、一番に手を挙げたのです。そうしたら来たのは、中国とマレーシア、その後は韓国もインドネシアも来ました。毎年数名ずつ受け入れて、日本人の学生と一緒に学校で教育して卒業させる。彼らのための特別のテキストをつくったり、そう

いうことをやりました。そのときに、日本に連れてきて、やはり日本語を教えることが最大の難関でしたけれども、それ以外に、留学生が来ると、住むところがないから寮に入れるわけでしょう。マレーシア、インドネシアなんかにはイスラムが。授業中だろうと何だろうと、ある時期になると外へいってお祈りをしなければならぬ。ラマダンとかいったら、寮に住んでいたら飯は昼間食わないですね。あれは変なんです。夜中には食うんですね。

伊藤 そうです、そうです。

西田 そういう連中で、自分らで自炊して勝手にやれるようにしなければならぬ。それから、南方の人たちというのは水の豊富なところですから、一番困ったのはトイレの構造を変えなければならなかった。

伊藤 えっ？

西田 トイレ。日本はまだ今のうちに水洗トイレというトイレがなく普通のあれでしょう。自分の後始末を紙でやるというのは物凄く不潔だということです。彼らは自分の国ではみんな水で洗っているのです。今のようなシャワーはもろんない。あんな紙で洗うのはいやだから水で洗いたい。トイレの中にちゃんと水の出る装置をつくってくれと。そういうことで、やっぱりカルチャーの違いというのは、いろんなことがあるなと思いました。それを全部やりました。これは雑談ですけども。

所澤 留学生のことですけども、その頃は留学生問題でかわるという、国際学友会が窓口になるのでしょうか。

西田 そうですね、国際学友会が。

所澤 そのときは、先生と国際学友会の関係はどういう形でされていたのですか。

西田 調査局の一種の監督下にあるような……、留学生会館を経営したり、あれは特殊法人じゃない、財団法人ですかね。

所澤 そうではないかと思えます。戦前からありますからね。

西田 調査局のほうが所管しているような財団法人だったのではないのでしょうか。あんまり深く立ち入ってはおりませんけれども。

伊藤 あれは大学院ですか。僕なんかは留学生が来ると最初に千葉大かなんかにいかせて、というのがありましたけれども……。ああいう制度は。

西田 東京の日本人学校へ入れて留学生の日本語教育をやる。そのあいだ住まいは留学生会館。そういう形では日常的に日本語に親しめないから、もう少し日本人の学生と交流しながら日本の生活になじむような場所として千葉大学に特別な留学生のための寮をつくって、そこに日本人学生も留学生も入って、一緒に共同生活をしながら日常のなかで言葉を覚えていくというようにしたほうがいいんじゃないか。そこへ日本人の学生を同じように入れるということについて、大学側が消極的であったりしてゴタゴタしましたが……。確かそういうものを千葉大学でスタートさせた覚えがあります。

伊藤 それはやはりその頃ですか。

西田 そうです。

伊藤 関西は別な大学がございましたね。

西田 そうですか。工業高専だと寮に入れるものですから自然にそういう格好になった。数名の部屋の中に留学生を一人入れて、そのなかの上級生をチューターとして特別に本人の面倒をみてやるということをやりました。そうしたら非常におもしろいことがあって――、日本人と一緒に交流しながらやっていく。その日本人の学生も一所懸命彼らに正しい日本語をしゃべらせようとする。あとで寮務主事から話を聞いたら、「先生、あのチューターをやっている学生たちの日本語がきれいになりました」という。

一同 アハハハハ（笑）。

西田 千葉の方言ではだめだと（笑）。外国人と接すると、日本人

がまともな日本語を。

伊藤 それは傑作だな（笑）。

西田 いや、文化交流というのはいいいものですよね。

伊藤 僕のところへ来ていた留学生は、どういう関係か知らないけれども、半年間大阪のほうの大学で日本語教育を受けていたので、ちょっと大阪弁になっていましたよ（笑）。

西田 昔の中国の留学生は神田で勉強していたら、やっぱり東京弁とかああいうものになったそうですね。周恩来とか、ずいぶん偉い人が来ているのですね。

伊藤 そうですね。

■世界文部大臣会議に出席――文言撲滅と義務教育

西田 「調査局審議官は」正味一ヵ月ですから、たいしたことはしておりません。

その次に調査局の審議官のときに、四十年の六月一日に就任して、その年の九月にいきなり国際会議、世界文部大臣会議がイランのテヘランで九月八日から十九日まで一〇日間もあるのですね。なぜユネスコが世界文部大臣会議をあそこで行ったのか私はよく知りませんが、とにかく「調査局は国際関係だからいけ」といわれて。文部省から、大臣はいけなから中野文門という政務次官。これはお寺の坊さんなんです。外国はもちろん、日本のこともご存じないような人でした。その人をヘッドに立てて、文部省と外務省から数名がお供していきました。生まれて初めて、国際会議というのはこういうものだということ……。オリエンテーションも何もなしに、いきなりチームをつくって、外交関係があるから外務省がやはり数名入って出かけていくわけです。何がどう動くのか分からない。ただ、ユ

ネスコが掲げたその会議のテーマが、「文盲撲滅」。そういうきわめて初歩的な話なんです。「リテラシー・キャンペーン」といっていいました。そういうことをやる会議だから、我々が勉強するとすれば、日本が明治の初めにどうやって文盲を撲滅したか、日本の「教育事始め」、これを調べてみようと思って、それだけは非常に勉強になりました。一所懸命文部省の文献で調べていきました。

そのときに非常に感銘を受けましたのは、明治五年に森有礼が義務教育制度を敷いた。日本の教育がぱっとなったといういい話ばかり聞いていたのですが、実は、明治の初めに義務教育を強行しようとしたら、物凄い国民の反対があったのです。政府は金がないものだから、町や村に自分で建物をつくれといって校舎をつくらせたり、先生はお寺のお坊さんやら神主さんをつれてきて無理やりやらせた。そういう強行措置をやったので、ある村に建てた校舎、それが自分たちの金を絞りつくしてつくられたとうらみを持って、その村の人がいって校舎を焼き討ちしたそうです。そういう暴動みたいなことがあった。決して日本人が初めから教育に熱心だったのではないのです。政府がそういう強行措置をした。それから何年かたつて、学校出というもの、今までの侍やお偉い方の子どもでなくても政府は採用するぞと。お役人だからいい月給をもらえるぞと。立身出世というのに結びつくのだというモチベーション、そのインセンティブが与えられたことによってパーツと学校へいきだしたのです。教育というものはそういう格好で、親が教育熱心だったというのではなくて、やはり自分よりも子どもが偉くなってもらいたいと思うから、そういうところへ来た。そういう流れがあった。しかも学校はそうやって森さんらがつくった、先生もなければいけません。かき集めてやった。しかし、あとからいろいろ調べて分かりましたが、徳川三〇〇年の間の寺子屋とか藩校の普及によって、日本人はいわゆる文字の読み書きのできる率というのは、世界でも有数に高

かったのではないかと、そういうことはあったようですね。

伊藤 そういう前提がないと強行策は成功しませんね。

西田 そういうことで勉強していったのですが、一遍資料を出しただけで、やろうかと思っていっただけですが、一遍資料を出しただけで、国際会議というのがどういう筋書きで動いて、どの段階でどういう発言をするのか、どういうようにパティシペートしたらいいか、これはやはり長年の慣れがなかったら分からないですね。どこで物を言っていいいか分からないし、日本語はしゃべれないから。そういう形で、最初の会議はいっただけで、イランの見物はさせてもらいましたけれども、日本の代表团というのは、ほとんどサイレント・デリゲーションで、何一つ貢献はしなかったということです。伊藤 ペーパーを出しただけですか。

西田 ええ、レポートを出しただけ。それでも、あのときのイランは今のあれではなくて、前のパレビ国王の王政で、この人は開明的な君主だといわれているのですが、イランの文盲撲滅をモデルケースでやっているというので、リテラシーコー (Literacy Corps) という文盲撲滅のための特別な部隊をつくっている。それが兵隊の服を着て町や村へいって、そこで勤労奉仕で校舎をつくって、そこへ生徒を連れてきて、彼らが先生をやりながら読み書きを教える。確かにそれは開明的でおもしろいのですが、まだまだとても。しかしその当時で、そういうことを王様がやっていたらイランのテヘランにある大学の学生が王様を狙撃しようとしたという話がありました。だから、国自体としては決して安定してなかったと思います。パレビ国王が開会式で演説をして、二日目か三日目に、「世界じゅうの国々が文盲撲滅のためにお金を出すべきだ。そのためには各国が軍事費の三パーセントを出してやろう」という決議を提案します。皆さん賛成を」と王様が言い出したわけです。世界各国もいきなりだからたまってしまった。日本はどうするかといって、外務省の連

中は、「これは本省に一遍電報を打って訓令をもらわなければならん」と。向こうから大使館を通じて日本の外務省に聞いたら、前に申しあげたと思いますが、外務省の返事が「英米諸国の動向をよく見定めて、遺憾なきを期せられたい」と。情けない話ですよね。それで外務省の連中に、「米英はどうか」といったら、なんか消極的だと。日本は賛成していいかというから、私はそのとき、「とんでもない。今ここで軍事費三パーセント削減するといったら……」、その当時、まだ日本は自衛隊は軍隊ではないといっていたでしょう。伊藤 まあ、今でもそういっています。

西田 「それを日本が賛成したという話が国会へ出たら、内閣は軍事費を認めたのかと嘯み付かれて内閣の命取りになるぞ」といったら、外務省が、「ああ、それはそうだ」と。

一同 (笑)。

西田 外のことばかり見ているからね。まあ、その話は流れてしまいました。

伊藤 決議そのものが流れたのですか。

西田 決議にならなかったでしょうね。王様の提案はけっこうですけども……と。そのときに私も痛感したのは、国際会議というのは、なんらの手ほどきを受けないで「ぼっと出」がいくらいつてみたって何も貢献できないということです。

その次に、今のが九月ですが、十一月に今度はタイのバンコクでアジア文部大臣会議があって、どういうスケジュールでユネスコが動いたのか知りませんが、またそれをやることになって。わずか九月からで二ヵ月あとです。私は前ので懲り懲りしたものですから、今度は少しまた勉強しよう。このときは大臣が中村梅吉さんという人でしたけれども、中村さんが大臣で筆頭でいかれました。バンコクへ私ももお供していきました。この会議は、ユネスコが日程の形で動かしていった、当たり障りのない決議をたくさんつくる。

各国ががんばりましょうということ、あまり印象に残っていない。

一番印象に残っているのは、タイのバンコクへ行って、このときは既に十一月で、日本なら冬に近い。タイのバンコクは真夏と同じ感覚で暑いですね。そのときに中村大臣が、「西田君、この国では教育の普及は大変だよ」「どうしてですか」「この国の国民は飢え死にと凍え死にの怖さを知らない」と。日本の教育の普及というのは、先ほどのように立身出世のモチベーションができたということ。日本では、勤勉に働かなかつたら食えない。冬になったら凍え死にする。飢え死にと凍え死にという怖さが日本にはある。それから抜け出すために日本人というのは努力するようになったのだ。ところが、天然のバナナがそこにもなっている。フィリピンのときにもそれを感じました。野生のバナナがなっているわけでしょう。この国では飢え死には起こらない、凍え死には起こらない。そういうところでは、人間というのは日本人のようにきりきり舞いの勤勉さというのは出てこない。大臣にいわれて、僕は初めて分かりました。開発途上国への教育の普及といったときに、その国の風土というものが一番大きな要素になってくるのではないかと。

後の話で、私は一遍役所をやめてから途中で呼び出されて、アメリカのケニアへいきました。ケニアの人たちの小学校を見たときに、町を走っている自動車が、ケニアの町の中でもトヨタとか日産とか書いてあるわけね。小学校へ見学にいったら、生徒から質問がありました。「日本はどうしてそんな小さな国でああいうテクノロジーが非常に発達して、ああいう機械ができたのか」と質問を受けました。私は中村さんの話を思い出して、「あなたの国は国全体が私の国よりはるかに大きい。日本の国はもっと小さい。しかも、日本は火山列島の上に住んでいる。毎年地震があり、大水があり、一遍台風が来たら木でつくった家が全部流れて。だから、日本人は勤勉でなかったら生きていけない。勤勉なやつだけが生き残った。だから

勤勉なのはあたりまえなんだ。しかも、この狭い国土の八〇パーセントが山だから、食べ物が自分で補給できないから買わなきゃならない。買うための金をどうするかと思ったら、よそで売れるものをつくらなきゃならない。それが、一番少ない材料で高いものがつくれるのだったらテクノロジーだ。それは日本人がここで生きていくためにやったのだ」という説明をしたことがあります。その国のエコロジーがその国の国民性とかいふことに全部つながっているということ。外国へ行って初めて日本が特別な国だということがよく分かりますね。

こういうことをその会議に出そうということは、ドラフト・リコメンデーション、つまり勧告案というものをちゃんとした文章でつくって、しかもそれは様式があるのですね。「〇〇は〇〇であり、〇〇が必要である」とずっと前書きを書いて、日本政府はこういうことを提案するという、ちゃんとそれを出さなければいけない。それを議長のところに行って、ドラフティング・コミッティのところ議論されて、それが提案されて、採決する。そういうプロセスを知っていないと何もできないのですね。

そういう会議には皆、これは教育問題だけど外交と関係があるからと外務省が必ず半分乗ってくるわけです。外務省の連中というのは、向こうでパーティーだとかレセプションだとかというところでは生き生きとして、会議になると中身は分らないです。そのことが、あとで出てきますOECDなんかで出てくる。中身が教育問題プロパーになったら、現地にいる大使館のアタッシュなんか全然だめなんです。内容で貢献できないから、彼らはパーティーだけではりきって。あんなのを一緒に連れていくのはむだだと思いますね。それは、もとはといえば文部省自体が国際会議へ出ていって自分に参加する訓練をしていないからだとこのことを痛感しました。

伊藤 この頃は、その文部大臣会議に当たって前からあるわけでしょ

う。

西田 前からあったらしいですね。天城さんのレポートで、バンククの中でも、第一回か何かは東京であつたらしいですね。その二回か三回目のやつでしょう。前のいきさつを知りませんけれどもね。

そういう頃の天城さんのあれ『天城勲オーラルヒストリー』を見ますと、今までは大臣は連れていくけれどもあまりしゃべらせないで、天城さんがもっぱらやった感じですね。あの人は特殊技能で、国際会議では発言もし、参加もできるだろう。訓練されておったから。文部省をやめてからもあの人はしょっちゅう外交専門で扱われていたでしょう。ちょっと気の毒です。だからやめちゃったあとに継ぎがないでしょう。いま誰かやっていますか。

伊藤 一応、後進を育てたとかいっていましたよね。

小池 元の文部次官の佐藤さんでしたかね。

伊藤 佐藤禎一さんのこと？

小池 そうです。「あれを外務省用の候補として僕は育てたんだ」みたいなことをおっしゃっていました。

西田 私らは、いけといわれたけれども、天城さんはバツとよそにかわっちゃったから、一度も天城さんの薫陶を受けていない。

一同 アハハハハ(笑)。

西田 後始末ばかりで。あとは見よう見まねで、官房審議官をやめるまでずっと国際会議ばかりでしょう。これも天城さんからは何も申し継ぎはなかったんです。「きみ、やってくれ」というだけで。小池 一緒にいかれたこともないのですか。

西田 それはあとで申しあげますが、OECDの教育政策会議、コンフロンテーション・ミーティングが四十五年にあります。このときは日本の代表として、天城さんと私と京都大学の先生と一緒にいきました。これはその次に申しあげようと思っています。

所澤 このアジア文相会議のときは、特別に何か議題だとかテーマ

というのは先生は覚えていらっしやらないですか。

伊藤 やっぱりリテラシーの問題ではないですか、文盲撲滅。

西田 リテラシーの問題だと思いますね。まだしゃれたことを議論するほどの時期ではないですね。

伊藤 それは日本にとってはあまり切実な問題ではないですね。

西田 ええ、明治初年の話です。だけど、日本が明治初年に義務教育をスタートしたときに、森有礼が張り切って八年制の義務教育をやりましたね。どうやって金がないのだから、結局、一挙に四年に縮めてしまいました。それで、その四年をずっと続けて、それが六年に延びたのは明治四十何年でしょう。四年間の義務教育が普及するのに四〇年かかっているのですね。

伊藤 だけど、明治の末年になると就学率が九〇パーセント超えていますからね。

西田 その四年間で徹底的にやったわけですよ。四年間でそれが進んで、九〇何パーセントが普及したら——私はよくいうのですが、それによって最大の効果は何かといったら、士農工商という階級がなくなった。インドの階級制度というものに対して、私はインドの人にいったことがあるのですね。日本は士農工商というのが徳川以来三〇〇年あった。それが半世紀でなくなった。それは何かといったら義務教育。義務教育で教育を受けるのに同じ教室で座ってみたら、「なんだ、あの侍の子どもはでかいじゃないか」と百姓の子どもが自信を持つわけですよ。それでも僕らが子どもの頃は田舎へいくと表札に「士族」と書いてありました。まだその意識があったのですね。「士族〇〇」と。

伊藤 まだそうですね。昭和の初めくらいまでは履歴書に「平民」「士族」とか書いてありましたね。

所澤 卒業証書にも書いてあったと思います。戦争中になくなったと思うのですが。

西田 階級がつぶれるのですね。その意識を完全に無くして、そんなものはいくつものばかばかしいとみんなが思うようになったのは、やはり学校で同じ机を並べて。しかし、そのことで思い出すのは、明治の初め、侍の子どもと町人の子どもを同じ学校へ入れていいかと義務教育制度の執行のときに問題になったらしいですね。森有礼が、それは一本だと決断をした。そのときに今まで寺子屋と藩校と分かれていたのを一本にしたというのは大変な決断だったのですね。一緒に座らせたことによって階級がなくなってしまったわけです。

所澤 森有礼が文部大臣になるのは明治十八年。

西田 執行されたのは明治五年ですね。

伊藤 田中不二麿か何か。

所澤 田中不二麿でしょうかね。学制ができた頃ですね。

西田 有礼はずっと外国を見てまわったのですね。

所澤 ええ、そうです。

西田 そういう格好で、調査局審議官というのはその程度の内容しかありません。

村上 あと調査局の仕事のなかで教育計画の話もあると思うのですが、けれども、調査局審議官時代の教育計画のお仕事というのは。

西田 教育計画に関することは、あの当時から文部省がそういうことを考える場所では中教審しかないわけです。中教審の事務的な世話は調査局の企画課がやっていた。しかし、企画課の仕事に私はこの一ヵ月の間に携わった覚えがありません。あの当時中教審が動いていたのかどうかあんまり記憶にありません。

村上 官房にお移りになって教育計画ですか。

西田 ええ、官房に移ってから。教育計画という言葉自身は、木田〔宏〕さんが『ユネスコ編 教育計画 その経済社会との関係』という本を翻訳して出した頃のこと、私どもは初めて教育計画ということがあるんだ、それをユネスコは熱心になっているんだという

ことを聞きました。ユネスコが国際教育計画研究所をドイツのハンブルクにつくりましたね。あとで私は役所をやめる直前までその理事をやられて、そこへ何遍もいきました。いつてみたら、あれはとにかく金の無駄遣いですね。各国の教育マニアみたいな人を集めていろいろ議論していますけれども、あんまり役に立つことはやっていませんでした。

所澤 その当時の調査局の中にいる人たちですが、事務官なのでしょうが、その方たちはその後大体どういうところに転職されるのですでしょうか。

西田 大体元の自分の所属していた課と一緒に。企画、統計、調査というのは官房へ来ちゃったでしょう。そのままそっくりですよね。国語課とか、国語文化課とか、国語課とか著作権課というのは文化庁へいっちゃったでしょう。だから、その課の枠と一緒に新しいところへ移ったのではないですか。人間の出入りがあったかも知れませんが、いくところはちゃんとあったわけです。つぶれた課はないわけですから。

所澤 その当時、国立教育研究所に出ていたり、大学に出ていくとか、そういう人たちはいらしたのですか。

西田 覚えていません。人事上の異動はあったかも知れませんが、政府としては元の課をどこかへ仕分けをしておいただけですから、あんまり大きな変動はなかったのではないでしょう。

村上 先生が官房審議官になられるときには、似たようなポストとしては調査局の審議官が廃止されて文化局のほうにいらっしゃる可能性もあったと思うのですけれども、やはり官房審議官として、先ほどの調査、統計、企画を担当なさる形になったということなのでしょう。

西田 文化庁のほうに審議官みたいな制度がありましたか。ないでしょう。

村上 調査局がなくなって文化局ができるときに、文化局のほうの審議官と、官房のほうの審議官ができたということが一応記録はされているようです。

西田 そうですか、ほとんど私は記憶がありません。それとの関連も知りませんし。官房審議官になってくれといわれて、そのときに、企画、統計、調査課をあなたが束ねてやるんだということを聞いただけです。そして、とりあえずは中教審の問題に取り組んでもらいたい。そのときに中教審が既に動いておりました。私が官房審議官になったときには、中教審が高坂（正顕）先生をヘッドとした、「期待される人間」というのをやっていた。これは内藤（誉三郎）

さんが事務次官のとき。あの人はそういう国粋派みたいな人で、教育勅語がなくなっただけから、それにかわる倫理綱領みたいなものをつくらなきゃいかん。そのために「期待される人間」というのを中教審でつくってもらって、これを将来生徒の道德教育の教育勅語のかわりにしようという意図があったのだと聞きました。それで私がいつて、その答申が最終的に出かかっている段階で、そのときの次官は誰だったかな。内藤さんはかわってしまったんだ。福田（繁）さんか誰かから、あんなものを教育勅語みたいにして発表して出したら大変なことになる。また文部省が戦前に逆戻りだと……。だから、せっかくできたのだけれどもあの答申が表向きにならないようにしてくれと、変なことを指示されました。結局、高坂主査がつくられた「期待される人間論」というのは、答申の付属資料として正式の答申に入れないようにしたわけです。高坂さんはこんなに苦労してやったのにといわれて非常に悔やまれましたね。結局、それは日の目を見ないような格好にしまったので、非常に寝覚めが悪いわけです。もっとも、あの当時の政治的な状況としては、教育勅語にかわるようなものを文部省がつくったといったら、また騒動の種になったでしょう。

伊藤 その調査局が廃止されて、大臣官房審議官が置かれるまでちょっと間がありますけれども、そのあいだ先生はどういう立場におられたのですか。

西田 何をしていたのでしょね。

伊藤 調査局がなくなれば、調査局の審議官自体もなくなるわけですよ。失職したわけではないし（笑）。

西田 五月一日に官房審議官を命ぜられるのですが、だから正味一カ月というその抜けたところというのは官制上どうなっていたのですかね。

伊藤 どこかにくっついていたのですね、きっと。官房付きか何かになっていたのかな。

小池 外務省という待命です（笑）。

伊藤（笑）、付きというやつ。

■国際会議に出席——義務教育を考察する

西田 役人が悪いことをすると官房付きになっちゃう（笑）。官房の審議官のほうに移ってから、私のこのメモに書きましたように、ずらりと国際会議ばかりです。

伊藤 国際会議ですか。

西田 一つはIBE（インターナショナル・ビューロー・オブ・エデュケーション）ですね。スイスのジュネーブに本部があるのですけれども、これも私は得体が知れません。もう一つ、一番多かったのがOECD、それからユネスコ。そういうのが軒並み出てきました。古いパスポートが残っているのを全部調べてみたら、私はこの一年半か二年の間に、OECDの会議を含めて、パリへ二〇回回っています。

伊藤 へえーっ。

西田 というのは、OECDというのはご承知のように経済協力開発機構という格好で、私の理解しているところでは、アメリカが第二次世界大戦後マーシャルプランをやる。その受け皿としてヨーロッパのほうの側が一緒に手をつないで共同的な経済発展を行うための連携組織をやるうというのでした。したがって経済協力が主だった。ところが、それで動き出してみて、彼らが将来のヨーロッパの経済発展をやっていくうえにどうなのだと手をつなぐことをやったのですけれども、どこから手をつけていいか分からない。その当時にいろいろ検討して——、これは聞いた話ですが、あの当時戦争に勝った側として、アメリカ、日本、ソビエトというところを調べてみると、ヨーロッパの各国に比べて、過去半世紀の間に教育に対して公の財政で投資した金というのはアメリカと日本とソ連が桁違いに大きい。教育投資の大きかったことがヨーロッパの国と桁違いで、ヨーロッパがおくれをとったのはそのせいだ。だからヨーロッパの経済発展をやるためには教育投資を根本的に考え直さないといかん。そのために初めてOECDのなかに教育委員会というのをつくったのです。天城さんもその頃から介入されたのですね。だから、OECDは経済ばかりやると思ったら、その基盤として教育をやらなければだめだと。あの当時、天城さんのレポート『天城勲オーラルヒストリー』にもありますように、『日本の成長と教育』という中で、教育投資をやったら、教育にかけた金というのは人間のなかに教育効果として蓄積されて、それが一つの資本になっている。建物とか土地とか労働力とかという機械的なそういう資源以外に、労働力そのものの質を変えているのが教育投資なのだ。だから、教育投資というのは消耗ではなくて資本なのだ。それによって経済成長のある部分が説明できるといふレポートが出ているのですね。それを天城さんが喜んで、あの『日本の成長と教育』を一所懸命つくった

でしょう。そういう思想がだんだん出てきた。ヨーロッパもそのことに気がついて、OECDが教育ということを非常に熱心にやりだした。なぜ教育を熱心に考えたかというのは、やはり経済発展のもととそこだということを考えていた。

これは私の学説ですが、その後、教育投資をすれば経済発展するということは因果関係として一応分かるけれども、そのなかで一番大きな問題は――、国連やユネスコが世界各国を調べてみてはつきりしたことですが、教育といっても大学教育などの高等教育ではなくて義務教育。義務教育の発展度合いというものが、その国の経済成長の最大の原因となる。それがなぜかというのは、これは私の仮説です。義務教育の最大の効果というのは、読み・書き・そろばんを身につけさせるというのももちろんあるでしょう。しかし一番大きなのは、義務教育をやりますと、満六歳になったら有無を言わず朝寝ている子を起こして、「おまえ学校へいけ」といさせるわけです。教室へいって、おもしろくない授業を我慢して聞いている。つまり、朝早く起きて自分の作業するところへ出かけていく。そこで、いやなことでもがまんしてやる。しかも、定期的にやったことを評価される。「おまえはだめだ」と。そして、初めて評価の結果によって上へのステップへいく。これがディベロップメントのシステムだと。それを幼年期に仕込まれた国民が経済成長する。

小池 はあ、なるほど。

西田 アジアで国際会議をやって各国が集まってきたときに、韓国と台湾の人がよく日本語で、「西田さん、私どもは日本の植民地政策に恨みはあるけれども、これだけは日本に感謝している。日本が日本内地と同じ義務教育をやってくれた。これが戦後の韓国と台湾の経済成長のもとだ」というのです。彼らは認めているんです。それは読み書きができるというより、朝起きたら仕事にいく。いやなことを我慢してやる。そういう生活のマナーです。それ

を子どものときに染み込ませたのが義務教育だった。こういう説明をする人はあまりいないでしょう？

伊藤 いやいや、非常に説得的です（笑）。

西田 今頃は学校で自由にのびのびなんていうけれども、学校というのは本来そういう強制のシステム。いやなことをやらせるシステム。だから、のびのびとやらせておって本人ができるのだったら学校なんて要らない。そのことを一番感じましたのは、あとでできる放送大学のことをやったときです。どんなにいい放送をしても、聞くか聞かないかというのは本人の勝手です。それを無理やりに時間を決めて聞かせるというのは、通信教育とか何とかで、これを聞かないと卒業させないぞというシステムがあるから聞くわけです。イギリスのオープン・ユニバーシティーを見にいったときにそうでした。オープン・ユニバーシティーというのは学校へいくのとは違いました。そうじゃない。時間を決めて放送するから、いやでもそのときにテレビのスイッチを入れなきゃならない。いやでもそのときに勉強しなきゃならん。その強制がなかったら、通信教育だけではだめなんだと。それがオープン・ユニバーシティー。学校教育のとりえは結局、変な話ですけども、あるスケジュールを決めて、それを子どもに強制しているというのが学校の最大の強みなんです。決して自由にのびのびやらせているのではなくて。それだったら、人間、放つといっても皆できるようになりますからね。人間ってそんなに本来勤勉なものではないですよ。怠け者です。

伊藤 ハッハッハッハッ（笑）。

小池 そうですね（笑）。

西田 情報さえあればいいのだったら、図書館の中に入れておけばいいでしょう。読むか読まんかは本人の勝手です。読まなきゃならないように仕向けているのは宿題が出るからです。学校は強制のシステムだという普通の人がいわんようなことをいうと、みんなドキッ

とする。私はそうだと思います。

伊藤 では、森有礼の軍隊説はいいわけだ（笑）。

西田 そうです。本人の自主性を尊重してなんでだめ。

伊藤 ゆとり教育なんていうのはだめですか。

小池 だめです（笑）。

西田 この頃は文部省もまた少し後戻りしていますね。

伊藤 そうですね（笑）。

西田 脱線してしまいましたが。

伊藤 いやいや、今のところは一番おもしろい。

西田 そういう話のほうがおもしろいでしょう。これは少なくとも私の学説です。私は間違っていないと思います。

伊藤 いや、すばらしい学説です。これは凄く腑に落ちますね（笑）。

西田 国際会議のなかの一つでIBEというのがインターナショナル・ビューロー・オブ・エデュケーションですね。それは、世界各国がメンバーとして、毎年かどうか、スイスに集まって、教育問題を持ち寄っていろいろなみなで話をして大いにやりましようというような、情報交換をしたり、決議をしたりするところらしいです。

伊藤 これは先進国も途上国も全部ですか。

西田 主として先進国でしょう。後進国はそんなに入ってなかったと思います。このIBEの会議に私は二度だけいています。そのときのテーマは、オーガニゼーション・エデュケーション・リソースズ、教育資源のいろいろな合理化、ティーチャー・ワーキング・アプロード、先生方の海外留学、プロGRESS・レポート、そんなことをやっているだけです。

手帳にこう書いているところのこちら側に歌が書いてあります。

「知床の岬……」と。これがなんで関係があるかと思ったら、思い出しました。IBEの会議にいったときに、各国が集まってやって済んだあとで、僕らのグループの中にハンガリーの文部大臣がおら

れまして、グループのメンバーを晩飯に呼んでくださった。ハンガリーという国はフン族の何かですね。東洋系。

小池 そうですね、東洋系ですね。

西田 その宴会の席で、やっぱり一五、一六人がおったら、ハンガリーの文部大臣が、「ジャパン、隣に座れ」というのですね。ソ連はまだソビエト連邦で威張っていた。「ソ連は一番端っこへいけ」と。「あいつは英語が分からないからだめ」といって、僕に横へ座れという。「なんであなたは日本が好きなのか」といったら、「日露戦争に勝ったから」と。

一同 ワハハハハハ（笑）。

西田 あの東欧諸国のなかでソ連に痛めつけられて、彼らは日本が日露戦争に勝ったというのは非常にいいことだといって。「あなた方の国とソ連とどちらが上だ」といったら、「そんな問題にならん。あんなやつはシベリアの田舎者で、文化の程度からいったら我々のほうが大先輩なんだ」と。だんだんお酒が入ったときに私が、「日本の習慣では、こういう会では歌を歌う。ジャパニーズ・スタイルで私が歌を歌ってもいいか」といったら、大臣が、「やってくれ」と。そのときに歌ったのがこの『知床旅情』。

一同 アハハハハ（笑）。

西田 そのときに、ソ連のおじさんは分からんというから英語で説明をして、「日本の北のほうに四つの島があった。戦争に負けて、我々のふるさとの島はいまだに日本に帰ってこない。それを非常に悔やんでいる日本人のメンタリティーを歌った歌だ」といって歌ったわけです。ソ連の人は何も分からない。それでこの手帳に書いてあるわけです。古い手帳を見ていると、いろんなことを思いますね。もっと艶っぽい歌があった。「あなただけはと信じつつ」なんていう、それを英語に訳したのを書いてある。

一同 ハッハッハッハッ（笑）。

西田 何をやってたんだろう。暇だからそんなことをやってたんですね。「酒がいわせた言葉」は英語でいえるかって。

一同 アハハハハ(笑)。

村上 先生、それは準備されていたのですか。

西田 いや、手帳に書いてある場所からいうと、向こうでまじめな合間に暇で仕方がなくて……。

小池 会議のときに(笑)。

西田 こういうのは自分だけの貴重なものです。エピソードばかりですが、もう一つその会議で。ある程度会議をすると、今までの議論したことをまとめようと、起草委員会(ドラフティング・コミッティー)で、何人かのメンバー、五、六人で報告書の起案をする。しかしまあ、報告書なんていうのを最初に起案して文書を書くのはネイティブ・スピーカーがいいだろうと、イギリスから来ているに書かせるわけです。それをみんなに配って、またいろいろ議論する。そのまとめ方の議論をしているときに、なかなかディスカッションの中へ我々がパーティシペイトするのは難しいですね。タイミングをはかってという。ほとんどそのドラフティング・コミッティーの会議には参加できなかった。最後に配られたこれ(文書)を見たときに、「ここに文法上の誤りが三つある」と私が指摘したわけです。みんなびっくりしましてね。「おまえは一言もしゃべらないのに、この英語の間違いがどうして分かるんだ」というから、「これが日本の英語教育だ」といった(笑)。

一同 アハハハハ(笑)。

西田 読み書きと文法は仕込まれましたね。しゃべることはだめ。イギリスのおっさんはびっくりしていましたよ。「これは文法上の誤りだ」といったら「そうだ、そうだ」と。これから小学校から英語を教えるなんていうけれども、実際にどの程度効果があるか分かりませんが、私は終戦後初めてアメリカ人と接して、見よう見

まねで少しずつ参加するようになっただけで、所詮本式の教育を受けていませんからね。高等学校でやったまでが精一杯ですから。伊藤 まあ、小学校から教えるというのは、みんな英語をやる必要はないと僕は思うのですよね。

西田 IBEについてはそんな二つのエピソードくらいですね。あとはスイスのレマン湖とか、あの辺を見物してまわったというくらいです。

所澤 そのときにはどなたと何人くらいいらしたのですか。

西田 あのとときには、僕と、七田君と、そのときも外務省がいていたかな。IBEにはいっていなかったですね。現地のスイスの大使からご馳走されたり、いろいろ大事にしてもらいましたけれども。まあ、皆さんの話を聞いて帰るというようなことが主ですから。

伊藤 どうですか、そういう会議に出て非常に示唆を得るとか、そういうふうな感じではあんまりないのですか。

西田 示唆を得たのは次に申しあげますOECDです。

伊藤 そうですか、そちらのほうですか。

■四六答申の基本的構想

西田 今のIBEなんていうのは、物々しい大臣とかお偉方が集まってきた非常にフォーマルな会議でしょう。OECDというのは、天城さんも言っておられますけれども、一種のサロンの雰囲気、そこで決議をするとか、何かリコメンデーションを出すとかということとは本来やらない。学究的な人が集まってきて、教育成果に関する自分の経験だとか情報を持ち寄って、お互いに啓発しあうというのが主ですから。OECDも経済のほうのことは知りませんよ。閣僚会議なんかがあって、リコメンデーションを出して、日本の経済

成長はだめなんていわれましたから。だけど、教育に関してはそんなことはありません。

私はOECDというのは教育に関して非常に学ぶことがあって、中教審の四六答申の基本的な構想というのは、このOECDで学んだことが非常にたくさんあるわけです。これは四六答申の諮問を見ていただくと分かるのですが、普通、文部省が諮問に出すときには、検討すべき問題点というのを挙げて、それは大体文部省がもう答えを持っているのですよね。それを審議会にいわせようというだけの話でしょう。四六答申では検討すべき問題点というのは出さなかったのです。検討の観点、ポイント・オブ・ビューといって、検討の観点を三つ出したわけです。

諮問に書いてあるのは日本語で難しく書いていますが、私がOECDで学んできたその三つというのは、教育のことを検討するには、教育の内部効率と外部効率。何だか分からんでしょう？ これはOECDの皆さんの会議で聞いたことなのですが、インナーエフィシエンス（内部効率）というのは、教育というシステムのなかで先生や生徒がお互いにどう働いて教育効果を上げているかという、教育制度のなかの内部効率です。先生の月給を上げたほうがいいとか、教科書はこうしたほうがいいとか、教育カリキュラムだとか、そういう教育制度のなかでのエフィシエンスがどうかということ議論するのが内部効率です。外部効率というのは、ある国の教育制度が、その教育制度を取り囲む社会、国家の中で、どう社会的な要請にマッチしているか。教育制度の社会的な妥当性です。それを外部効率という。教育制度というのはその国の社会のためにあるものでしょう。国民一般、国家全体の必要性に応じて、教育制度がどううまく適応しているか。そういう評価を外部効率という。その二つを私はOECDで学んだ。それに私は三つ目を加えた。それは財政効率。使った金と教育効果というのがどう結びつくのか。これは内部

効率と外部効率とは全然別の観点。中教審の四六答申の諮問には、その三つのことを日本語で書いてあるわけです。

内部効率、外部効率、財政効率、その三つを並行してやるために委員会をずうっとつくったわけです。それであんなに委員会がたくさん出ている。その三つことに、最初の二年間で過去の文部省のデータを調べて、どこに問題があるかと検討すべき問題点を自分で発見しよう。文部省からいわないで。最初の二カ年間で検討したやつが中間報告として中教審の答申に出てきます。あとの二年間で、じゃあ、その検討すべき問題をどう解決するかと解決提案するのが次の二カ年。これが中教審のプログラムです。それを総括するための委員会をつくると、いろいろなことをやりました。最初の二年間の過去の問題を全部拾い出して、どこに問題があるかをやるのは三つの観点からやるわけです。内部効率、外部効率、財政効率。これは、この次のときにまたもう少し整理して申しあげます。

伊藤 しかし、今のお話を伺っています、そういうふうになりますと文部省の役人は、「これは自分たちのことではない」というふうに考えがちになりませんか。今までの答申は、文部省の役人がやりたいということを腹話術みたいに向こうにいつてもらって権威付けてやるということですけども、今度は自分たちにその答えがないわけでしょう。

西田 文部省のやったこと自身を自己評価しようと。

伊藤 まあ、そういうことです。自己評価といっても……。

西田 そのとき、昭和四十何年にちょうどコンピュータを文部省が導入する時期に私がその担当をして、それを土台にして文部省の歴代持っているいろんな統計資料、記録、これを可能な限り全部データベースに入れる作業をやったわけです。それができたものだから、今のように入力するときに必要なデータを委員会へどんどん出していったわけです。これは非常に皆さん方に喜ばれました。東大の教

育社会学の清水義弘さんは、「この会議に二、三回出ると、半年分くらいの俺の講義の材料が得られる」と（笑）。

小池 ハハハハハ、ずるい（笑）。

西田 それはそうでしょう。育社会学のデータみたいなものがドーンと出てくる。「今度はこういうものをつくっていけばいいんだな」と。それくらいコンピュータというのは中教審では役に立ちました。それなしで宙で議論していると分からないものばかりなのですよね。伊藤 それは文部省の役人にとってどうですかね。やろうという気になるかという。

西田 たまたま私のような変なやつが、物理をやった理科系の人間が入ってきて、そして官房審議官なんかをやらされた。これは一つの運命ですね。私のような者がいなかったら、コンピュータを使ってそういうことをやろうともしないでしょうし。

その最初の二年間でやった過去の実績をあとで出てきますOECDの教育政策会議というのに出してやるということを天城さんがいわれて、中教審の前半の二年間のやつを全部英語に翻訳したんです。これ『エデュケーション・ポリシー・アンド・プランニング ジャパン』はOECDの出版物になっています。これは全部、私が書いた文章を英文に訳して、グラフなんかはみんな私が書いたグラフです。これはまた後日説明します。これは統計数理研究所の指導をいろいろ受けまして、中学から高校、高校から大学といくときに、どういう要素が進学を促進し、それを阻害するかという要因分析をやりました。つまり、親の職業がどういう人がプラスのほうへいって、どういう職業がマイナスのほうへいくか。男の子と女の子でどう差が出るか。これを見ていくと、教育の機会均等というけれども、本人を取り囲む社会環境が大学進学や高校進学にどう働いているか、そういう要素分析ができるわけです。こんなことを文部省の普通の統計課はやらんです。私はおもしろがって文部省の統計

課の連中にこういうコンピュータの使い方を勉強させてこういうことをやりました。これが教育政策会議のときに各国へ配ったやつです。

伊藤 反響はいかがでしたか。

西田 いや、皆がこれを読んだかどうか分かりませんね。まあ、そのこともあとでちょっと。

伊藤 『エデュケーション・ポリシー・アンド・プランニング』。

西田 ええ、「教育政策と教育計画 ジャパン」と書いてあるでしょう。これはOECDの出版物になっているわけです。

伊藤 何年に出ていますか。一九七三年。

所澤 今のOECDなのですが、先生が今の三つの観点の二つ目の観点に気づかれたというのは、どういう場面で気づかれたのですか。

西田 OECDはサロンの格好で各国のエキスパートが集まってきて、いつでも十数名各国からみんな来ています。これはいわゆる開発途上国はいないわけです。先進国ばかりで。

伊藤 OECDですからね。

西田 特に私が感銘を受けたアカデミックな非常にいい話をしてくれたのは北欧関係です。スウェーデンとか北欧方面の人が非常にイギリス、フランス、このへんの人はあたりまえのことしかいいませんし、そんなに学究的なことをあんまり出していません。十数名の人が集まってある会議をやるときに、この次のテーマはこれだからこの文書を読んでいってパリのOECDの本部から送ってくるわけです。出発する一週間ぐらい前に、これぐらい（二センチぐらい）の厚いものを。そんなもの読めないですよ。英語で書いてあって。いきの飛行の中で拾い読みしていくぐらいです。あの当時は、東京からアンカレッジへ飛んで、こうおりにくるのです。あの向こうへ着いて、時差で八時間ばけているときに会議が始まってしまつて、三日ほど会議をやつて、すんだときにまた飛んで帰るわけ

です。もう、上下時間が狂っちゃうわけです。一番ありがたかったのは、十二月頃にあったときに、戻ってきたら時差で逆さまになっているのだけれども、ちょうど夜中から予算折衝をやるときでしたから目がぼんやり開いて。それだけです。実際、時差を逆に戻すと人間の体には物凄く辛いですね。

その会議でやりますと、非常にサロンの雰囲気ですから、散々議論して二日ほどやって、「じゃあ、これでおわり。この次にいつやるか」とみんな手帳を出して、「来月はどうだ」なんて言い出すんです。日本内地の会議と同じようですね。そうしたら、アメリカが「手を挙げて」、「ちょっと待ってくれ。俺たちは大西洋を越えてくるんだ。そんな気楽な話をするな」と。アメリカとカナダがね。私も手を挙げて、「わしは北極を越えてくるんだ」と。そういう雰囲気でした。「じゃあ、いつがいいか」なんてやっていました。このOECDの会合では非常に学究的な、アカデミックな刺激を受けました。

もう一つ、今の三つのこと以外に中教審の基本的な答申の要素になっていることで学んだことは、これはスウェーデンの人だったかな、名前を忘れてしまったけれども、「教育発展というものは、ほかの経済とか産業技術の発展のようにいかないのだ」と。つまり、普通のそういう工業技術だったら、基礎実験をやる。それを応用研究をやって、よかったらそれをすぐ生産に移す。教育はそういうプロセスでのびない。教育には三つの要素がある。学校教育というのは、一つは先生というファクターがある。教えられる生徒というのは、それから、教育を研究している学者がいる。それ全体を国の制度として管理している行政庁というのがある。特に行政庁と学校の先生と教育に関する研究をしている学者の三つのファクターが、お互いに違う能力を持っていて、お互いにけん制しあっていて、一緒に仕事をしていないからだめなんだ。つまり、学校の先生という

のは現場で毎日の教育をやっている経験をもとに持っている。しかし、先生は情けないことにそれを学問的に解析するだけの能力を持っていない。学者の人は一所懸命本を読んで勉強していて、本の議論は知っているけれども、現場で生きた人間を相手にした経験というのが非常に乏しい。それを管理している行政庁というのは、それを指導する学問もなければ経験もない。しかも、お互いがほかのものにない権限を持っている。先生は教育上のオーソリティーだ。学者も学問的なオーソリティーだ。そのお互いの間の共通の話し合いがない。教育発展をやるためには、その違っている三者が同じテーブルに座って、今度はこういうことをやってみましょう。では、学問的にはどうか。現場の経験からいったらどうか。行政官庁はどういう処置をしてくれるのか。みんなが話し合って、「じゃあ、これをやろう」というので、それぞれ責任を分担して、みんなが力を合わせてあるプロジェクトをスタートする。そして、何年間かその目的のプロジェクトを実行してみても、どれだけの成果があったかその三者で集まって評価する。このシステムでなければだめだと。

それを私は中教審の中で「先導的試行（パイロット・プロジェクト）」という言葉で書いたわけです。彼らはパイロット・プロジェクトという言葉を使う。ある目的に向かって、ちょうど橋のない川を危ないところを一つ一つ瀬踏みをしてながら川を渡っていくように。パイロットというのはそういう水先案内ですから、危険に陥らないように川を徒渉していくように、しかもある目標に向かってやっていく。こういう三者協力体制をつくらなきゃいかんということで、中教審答申の中に、教育の研究開発システムをつくれ。三者が同じテーブルについてやれ。これはついに中教審で答申したけれども実現しなかった。文部省がポーンと実験学校をつくって、金をやるからやってみろというのでしょ。学者がどの程度それをフォローしているのか知りません。子どもを実験台に使うのはけしからんというけ

れども、実験をやらないういきなり独断でやるのかといったら、それはいかんでしょうし。それではどうするのだ。そうすると、パイロット・プロジェクトで瀬踏みしながら一歩一歩川中を徒渡るという方法しかない。その先導的試行というものをやるべきだと。

中教審の四六答申でついに実行しなかったのは、そのパイロット・プロジェクトと、それから一番後ろにつけました長期教育計画。あの二つだけはいかに実行されていない。このパイロット・プロジェクトというシステムがなければ教育は進まない。北欧のあの人が自分らの経験ではそうだといいことをいわれました。僕はそのことが非常に頭にありまして、中教審の答申の中の一つに入れたわけです。それからあとOECD……。

■OECDの「フロンテージン」

所澤 今回のOECDのときなのですが、外務省の関係はそのときはどうだったのですか。

西田 おもしろいですね。OECDの会議へいくときも、あれは国際機関だから、あそこへ私が出かけるときは私に「外務事務官を併任する」と辞令を出すのです。外務事務官という肩書きもあっていつて何の効果があるのか知りませんが、形式上、外務省からもいつています。向こうの会議にいくときは公用旅券ですよ。ね。公用旅券というのは、どことどこの国で役に立つと書いてあるのです。それ以外の国には通用しないのです。だから、あれだけ二〇回もパリへいつてもフランス以外出られないのですよ。ね。

小池 目的地しかいいけないのですよ。ね。

西田 ええ、目的地。フランスの中だけは、マルセーユへもいつたりしましたけれども。公務出張ですから金も決まっています、あの当

時は一人五〇〇ドル以上持たせなかった。

伊藤 まだ外貨持ち出し制限のあるときですね。

西田 自分のお金で勝手に歩き回れるかといったら、パスポートが通用しないからだめ。私は、それ以外の国はあとでスイスとイギリスへいつただけです。そういう格好で、OECDの会議というのは私には一番根本的なことを教えてくれました。

所澤 会議の席に、現地の大統領の人だとかそういう方たちも参加されるのですか。

西田 大使館の人も傍聴に来ています。来いても話が分からんですよ。教育のことというのは目に見えるような物がありません。国際会議をやるときに非常に優秀な通訳の人をお願いするのですけれども、その通訳の人が告白していました。ほかのお料理の話とか何だとかは具体的な物がイメージにあるけれども、教育でカリキュラムの話なんかをされたら、いつておられることが何だか分からん。分からんから訳せないというのです。そうでしょう。ね。カリキュラムなんていうのは非常に抽象的なものでしょう。だから、どの英語を使っているのか分からない。具体的なものというのとは分かりますよ。ね。

伊藤 まあ、そうですね。

西田 だから、外務省なんか来ていても何も役に立たない。レセプションとパーティーだけです（笑）。

所澤 外務省の人が、傍聴だから発言することはないのでしょ。うけれども、会議に直接かかわるようなことというのはあるのですか。

西田 そういう会議なんていうのは皆、フォーマルな会議だったら、いつているかぎりは偉い人がいくと御礼のために文部大臣の招待会なんかを催さなければならんのです。ね。各国がやってくれるから、日本もやる。文部大臣のパーティーをどこの場所で設営して、誰と誰に招待状を出すか、そんなものは外務省にやらせたらいいのです。ね。

伊藤 儀典係だ、やっぱり。

村上 日本側から学識経験者の方がいらっしやることは。

西田 それはあとで申しあげますが、昭和四十六年にこれ（『エデュケーションナル・ポリシー・アンド・プランニング ジャパン』）を土台としたコンフロンテーションというのをやったわけです。そのときには、京都大学の堀尾先生というのが中教審の委員でしたから、私と天城さんと堀尾さんと三人でいきました。写真を見ると、その横に外務省の現地の大使館のアタッシェみたいな人が座っていますけれども、何もいうことはないです。

OECDのコンフロンテーションというのは、これは日本だけではなく各国のサロンの議論をしているけれども、ある程度まとめをやるために、この次は少し研究的な資料を集めて、その文章を皆さんに共通に配って、ある国の学術関係の政策、教育政策というものを中心に議論しようという会議を開くわけです。コンフロンテーションというのを英語で辞書を引きますと「対決」になっています。言葉で聞くと物凄いのですが、当事者の国を日本と決めたら、日本について調べて、それに関するレポートを配って、ほかの国が日本の向こう側に全部座って日本に質問を投げかけるわけです。日本がそれに答えなければいけない。そういうのがコンフロンテーションです。昭和四十五年十一月にOECDの教育政策会議というのがあったわけです。この会議の模様は天城さんのレポートに書いておられますが、朝日新聞の深代（惇郎）君が傍聴に来てまして、彼がそれを全部日本語に訳して朝日新聞から『日本の教育政策』を出版しています。私どもが出したのは中教審の最初の二年間のレポート。これができたところで翻訳して、これを配っておいだ。ところが、コンフロンテーションをやるときには、いきなり配っても読めないし、すぐ議論できないから、前もって日本という国の教育政策を外からの目で見ようと日本へエグザミナーというのを送ってくるわけ

です。そのエグザミナーが五人やって来ました。それはこの年の一月に来ました。

伊藤 これ（『エデュケーションナル・ポリシー・アンド・プランニング ジャパン』）がまだできていないうちですか。

西田 まだできていない。この会議は十一月ですけれども、その年の一月十日にエグザミナーが来た。そのエグザミナーが凄い人で、天城さんのレポートにも書いてありましたが、一人がフランス人で文部大臣からフランスの総理をやったエドガー・フォールという人。北欧のほうからはガルツング、アメリカからはライシャワー。それから、天城さんの推薦でイスラエルのベン・デビットという人。イギリスからは――、よく日本で名前が売れています、ロンドン大学のプロフェッサーのドーアという人。この五人がやって来たのです。そろってやって来て、日本に何日間くらい滞在したのですかね。二、三週間滞在して、文部省に来てインタビューし、日教組にも会い、自由に見て回って、彼らのエグザミナーレポートを出すわけです。それがこの会議に配られるわけです。検察官みたいなものです。それを土台にして各国が質問するわけですから、いくほうが大変です。

このエグザミナーが来られたときに、私どもはその先生方と話し合って、さすがに皆一流の人ですから非常に啓発されました。いまだに覚えているのは、フランスの首相をやったエドガー・フォールが、日本の一つの教育の大きな問題である大学入試というものについて、それだけを目標にした激しい競争があり、教育の歪みというものが大変だと。しかし、競争社会というものが現実存在する限り、これは避けて通れない問題だろうと。そのときに私は、私どもの目標とするところは、競争がなくなるのではないけれども、最終的に教育では何が実現したのかといえば、他人と競争しているうちに、自分は自分と競争するのだと。人との競争ではなくて、自分と

競争するところへ自分の目標を決める。そこまで自分の生活態度をかえる。そこまで持っていけば、それが本当の教育だといったらフォーエルさんが誉めてくれました。自分自身と競争、そこまで到達させるための手段なんだ。そこまでいかない、いつもガツガツしていて物欲しげな。自分自身との競争、自分の目標を決めて、自分と競争する。そういう生活態度をつくる。私はそう前から思っています。

イスラエルのベン・デビッドには初めて会ったのですが、この人がおもしろいことをいわれました。日本に来ていろいろなことを見ていて、ヨーロッパ人というのはきわめて合理主義で、いろんな会議なんかでお互いに違う意見をはっきり出し合って、ぶつかり合う。したがって、ヨーロッパ人やアメリカ人というのは、一つの問題が起きれば訴訟を起こしてそれを徹底的に叩き合う。それで解決していく。そういう生き方をしているけれども、日本人はそれとは違うようだ。日本人はそういう意見の食い違いや対立が起きたときに、それを徹底的にほじくり出して問題点を煮詰めるということよりは、そういうときには事を荒立てない。そういう日本語を使ってですよ。事を荒立てないでそうっとしておく。時間をかけたら自然に解決のときが来る。この日本人の生き方というのは、どちらがいいか簡単にはいえないと、ベン・デビッドはイスラエル人ですがそういう言い方でした。簡単にいえないことだけれども、これは一つの物の見方ですね。これから日本で法律家をたくさん増やして訴訟をジャンジャンやろうというのがいいことかどうか。日本では昔から事を荒立てない。荒立てたら、解決したようでその恨みが残り、いつまでもたっても問題が解決しないということで、時間をかけてその鎮静を待つというのが東洋人のやり方として非常に意味があるのだと、ベン・デビッドはそうしていました。

ライシャワーさんにはこれ以外の機会にもたくさん教えられることがありました。私がさっき申しあげた、入試問題の合理的な方法

を純理論的に突き詰めていくと、最終的にはやはり、どういう実験成果を見ても、入ってからの本人の成績の伸びというものに一番深い関連性があるのは、入学試験の成績ではなくて高等学校の内申書。それはすべての実験結果で出ているわけです。その内申書の成績というものをもっと尊重して、それを土台にして学生の選抜をやる。もし同点だったら、あとはくじ引きでいいじゃないですか。そんな細かくより分ける必要はない。くじ引きなら落ちても恨みっこないだろう。ライシャワーさんに、「とことん突き詰めていくと、どんな入試問題をやるよりも、内申書一本でやって、それであとくじ引きでやるというのがいいんじゃないですか」といったら、ライシャワーさんが、「西田さん、それは日本では成功しないね」といった。「どうしてですか」といったら、「合理的であろうが非合理であろうが、あの真剣勝負のような、入学試験一本で落ちるか通るかの潔さというのが日本人にはたまらないんだ。これは日本人のメンタリティーから来ている。あれは日本の武士道、サムライの伝統だ。その証拠に、試験で落ちた人を浪人というでしょう」と。

一同 ワッハッハッハッ(笑)。

西田 私はそれを聞いて、まいったなと。我々は日本人でそれだけの洞察がない。あの潔さが日本人はたまらないのだから、日本人はあのシステムを捨てませんよ。あなたのいうようなことは日本では通らない。どんな合理的なものを出してもだめだ。入試問題の改善というのは、いってもだめなんですね。そのときの話で、ライシャワーさんが、「潔さという言葉をいいましたけれども、これは英語に無い言葉なんです。日本語しかない言葉で英語に訳せない言葉は、潔さという言葉、それからもったいないという言葉」と。あの日本に長年住んでいた方がおっしゃるのだから間違いないでしょう。ウェイストフル(wasteful)というのはモノを無駄に使うということで、それだと観念が違うのですね。仏教の思想が入っていますね。

私があったくないということを説明するときに外国人にはこういって、いますといったら、ライシャワーさんにそれでいいといわれたのは、私は子どもごときにご飯をこぼすと、私の母が、『落ちたご飯粒が泣いているよ』というのです。あんたがちゃんと食べてやらないうから、下へ落ちてむだになっちゃったからお米が泣いているよ。一つ一つの米粒が命を持っている。それを愛しむという気持ちがある。泣かないという気持ちにつながる。ドロップコーンがウィーピング(weeping)だと、そういう説明をすると外国人に分かるだろう。もったいないということと潔さというのは外国にはないということ。初めて知りました。お侍の世界は潔さですよ。例えどういう理屈で言い訳してみたって、勝ったのは勝った、負けたのは負けた、一本勝負です。その潔さがたまらないんだということです。そういうところがあるでしょうね。

伊藤 あるでしょうね(笑)。

西田 「ああ、落ちた。また来年やるか」というわけです。

小池 そうかあ、それで浪人ですか。

伊藤 浪浪の身になって、またがんばるか(笑)。

西田 落ちたら浪人というでしょうといわれて、まいったなあ、実際。

伊藤 驚いたなあ。

西田 でも、おもしろい話でしょう。エグザミナーからそういう話を聞きまして、彼らがレポートを書いて、そしてその年の十一月にパリで会議をやったわけです。

伊藤 それがコンフロンテーションなのですか。

西田 ええ。

伊藤 そのときはこれ『エデュケーション・ポリシー・アンド・プランニング ジャパン』ではなくて、そのエグザミナーのレポートが中心になるわけですか。

西田 これは全員に配ってあります。だけど、そんなものは特に見やしないですよ。

伊藤 やっぱりそうですか。

西田 エグザミナーのレポートが一番問題点を指摘していますから。日教組に会ったらいっていったとか、みんな出てくるわけです。そのコンフロンテーションは、向こうへ十何ヵ国がずらっと座っていて、天城さんと私と堀尾先生がこちらへ座って、半分取り囲むようにしてまさに尋問を受けるような格好ですね。それで、レポートを見ながら質問をしてくるわけです。そのときに……。

所澤 すみません、そのコンフロンテーションなのですが、どうして日本がコンフロンテーションの対象になったのですか。

西田 前の年はどこの国がありましたね。私らも聞きにいったけど、あんまり身にはならなかったけれども。ほかの国も順番にやっているんですよ。それから、天城さんのレポートで私は知ったのですが、その前に学術政策に関するコンフロンテーションがあって、日本でOECDの会議があったらしいですね。教育のほうは日本がこのときに初めて。その翌年がフランスかなんかで、それはかすかに。あ、デンマークかどこかをやりました。デンマークのコンフロンテーションのときにいろいろ聞いてみて初めて知りましたが、ヨーロッパの古い国というのは、大学や学問の伝統というのは日本よりうんと古いわけでしょう。そういう国の特に大学教育の段階になりますと、個々の大学が中世以来の学問的伝統というのをどしどし構えて、文部省が何をいおうが、政府が何をいおうが、相手にしない。きわめて保守的で動きがとれない。新しい時代に相応して高等教育の改革とか急増とかいったって、大学は鼻も引っかけない。弱っているんだという話を白状するわけです。びっくりしましたね。案外ヨーロッパというのは古めかしい。文化の伝統というのがそういうことになるのかと。

それを一番感じましたのは、OECDとは離れますけれども、その後、日本へ各国の国会議員の団体が調査に来ました。一つはドイツがやって来ました。何年頃でしたか。ドイツの国会議員が文部省の会議室で会議をやったときに、日本は、敗戦後アメリカの教育使節団が来て、あしろ、こうしろといって六・三制にしたり、実にアメリカの言いなり放題の教育改革をした。「よく日本の国内では、『あれはばかだ。ドイツを見る。あれはヨーロッパの老舗で、アメリカがどんな勧告をしても何もやらなかった。立派だ』といわれているがどうだ」といったら、ドイツの国会議員が、「全然違う。日本はいいときに変えられた。あの敗戦というときだから変えられた。いまドイツでどんなに変えようとしても動かない。日本がうらやましい」というんです。だから、物は見方ですね（笑）。ドイツは連邦制だから文部大臣が一〇人ぐらいおるでしょう。とても意見なんかまとまりません。こういう平和な時代にどう制度を変えようとしても動きがとれない。日本はいいときにされましたねといわれました。そういうことで、物の見方が違うということ。

もう一つは、インドから国会議員団が来ました。そのときに文部省で話したら、インドの人の発想というのは、日本がこれだけ教育が急速に発展したというのは、インドではガンジーだとかネルーだとかという偉い英雄がおって、その教祖の威力によって何でも進むのですね。「日本は誰がそういうスターなのだ」と聞くのです。インド人はおもしろいですね。私は、「日本にはスターは一人もいない。スターダストばかりだ」と（笑）。

一同 アッハッハッハッハッハ（笑）。

西田 文部大臣なんていうのは次から次へと幾らでもありますものね。スターダストは山におられるけれどもスターはいないんだといったら、向こうの人は不思議そうな顔をして見ていましたけれども、インド人はそういう発想をするわけです。一人の教祖が出てくる。

伊藤 OECDはしょっちゅう会議をやっているわけですね。

西田 そうですね。この二年ぐらいの間に二〇回もいつているわけですから。

伊藤 そうですね。二月に一回とか、それぐらいはやっているわけですね。

西田 行ったり来たりしていて、時差に慣れましたけれどもね。

伊藤 時差というのは慣れるものですか。

西田 逆さまになって、戻ってきたら元通りになるはずだけど、そうはいかない（笑）。あとは、ユネスコの総会というのはユネスコのほうへ私がかかったあとの話だから、日米文化交流会議というのが（昭和）四十三年の四月にワシントンでありました。これはカルコン（CULCON）といって、天城さんのレポートに何回かありましたね。そのときに私は参加しました。このときは森戸先生が大将で、フォーマルな会議だから外務省もいきまされたけれどもね。これもやはり日本とアメリカの状況の情報交換みたいな話です。ライシャワーが向こうのメンバーでした。

会議の席上で覚えているのは、アメリカのオフィス・オブ・エデュケーションというのがありますね。アメリカは、連邦政府は教育権がないわけです。「アメリカが日本の中から一番学ぶべきことは義務教育の制度だ。日本が日本の国内で同じ学問水準で統一的にレベルを上げて日本の全体的な進化をやったのは日本の初等教育だ。アメリカはもっと日本の初等教育を勉強しなきゃだめだ」といって、向こうの教育局の人にライシャワーさんが注文をつけていました。しかし、各州の独立権がありますから、向こうの教育局もどの程度やれるかが問題でしょうけれども、そういう話がありました。このときもフォーマルな会議で、いったときにもう外務省の連中は向こうの事務局の人と話し合いをしていて、どういうファイナル・レポートをつくるかという案をどんどん書いてあるわけですね。議題に関

連して、どうせこういうことをいうのだろうと。それを最後の会議に出して採択というようなことになってしまおうので、あんまりいたしたものは出てきません。その前の事前の話し合いのディスカッションのなかで啓発されることがあるという程度でした。

伊藤 カルコンというのは外務省がそういうふう絡んでいるのですか。

西田 外務省がかんでいました。日本でも一遍、あれはカルコンかな。ある会議が伊豆のどこかであったときに、あれは何年ですか、富士山の上でイギリスの飛行機が墜落したことがありましたね。イギリスの何とかという航空会社の飛行機が富士山の上で急に墜落した〔一九六六年三月五日、BOAC航空のボーイング七〇七機が富士山に墜落した事故〕。あれを伊豆のところで会議をやっているときに見た。だから、それを調べれば分かります。これも会議と関係ない話だけど。そのときも外務省が一緒にいていました。

伊藤 そうですか。

■国連大学創設のねらい

所澤 六七年九月二日からあるのは、これは何でしょうか。

西田 六七年の？ あ、SEAMEESか。これは、サウス・イースト・アジア・ミネストリー・オブ・エデュケーションみたいなものですな。東南アジア各国の教育会議みたいなものです。

伊藤 それはどこでやったのですか。

西田 アジアの会議はいつもバンコクでしたね。

伊藤 天城さんの話でしたっけ、よくアジアの話が出てきましたね。

小池 アジア教育者会議。

伊藤 やっぱり、いつもリテラシーの問題で。

西田 リテラシーというのは、まだ東南アジアの国で割合に一つにまとまった国でも大変なようですね。リテラシーということは結局、読み・書き・そろばんを教えるということを中心に行っていますけれども、そうではなくて、さっきのように初等義務教育の最大の目標は、いやでも学校へいき、そこで勉強をすることをしつけるということでしょう。そこに踏み切るのが大変なのでしょうね。それは中村大臣がいわれたように、飢えと寒さで凍え死ぬ怖さを知らないから。それと、やっぱり貧しさというものの悪循環があって、子どもを働かせないと飯を食えない。フィリピンなんかへいっても、町の中へ自動車がとまると子どもがワーツと寄ってきて、「マンガーを買ってくれ」とか、「花を買ってくれ」とあるでしょう。一つ買っていると、そういう子どもがパーツと走って行って、物陰に隠れているお母さんにお金を持っていくわけですよ。かわいそうに。

私がユネスコの事務総長のときに、結局、貧乏というものと文盲ということ、いろんなものとの関連性がどういう悪循環になって、どこからその悪循環を断ち切ったらいのか。このメカニズムのシステムを考えないと、「教育が大事だ、教育が大事だ」といったってどうしようもない。じゃあ、その教育を受けたらどういうメリットがあるのか。そこにどういうインセンティブが働いているのか。そういう社会的なメカニズムを考えなければならぬ。そういう点で教育計画という問題を考えるときに、全体構造のシステムをデザインするということが大事なので、そのためには学問的にそういう問題を分析をしなければならぬ。それを学問的にやらないで、ただスローガンとして「文盲撲滅」とか「経済発展」とかいつてみただけ、空回りばかりしている。それを本格的にやる場所が必要だということに私はピンと来て、自分なりに熱心にやったのが国連大学なのです。アカデミックな立場からそういうものを国連大学がやれるようにしたい。

私の話はこのまま続けて、文部省の任期がおわったらもういいでしょう。そのあとの高専や短大の時代のことはいつてもしょうがないでしょう？

伊藤 いや、それもいくのです。

西田 その中で大事なことは、あとでまとめて申しあげたいのだけれども、入試の問題が一つですね。国連大学をつくったときのいきさつと考え方。それから、放送大学も私は創設の一役だったのです。私がつくったレポートのとおり。この二つの生みの親ですから、それも私なりの一つの夢がある。

伊藤 それは全部お話ししていただければ。

西田 国連大学はウ・タントさんが言い出したわけです。ウ・タントさんが国連の事務総長を長年やってみて、世界の平和とか、各国は仲良く手をつないでなんていってみたって、集まってきた人間は結局パワー・ポリティックスですよ。自分の国の利益に引っ張ってこういうことばかりで、本当に筋を通した議論をしない。そういう国別の利害関係というものを離れて、純粹にアカデミックな立場から、貧乏の追放とか、教育の普及とかというものをどうしたらいいのかと学問的にやれる場をつくりたい。これがおそらくウ・タントさんの基本的な最初のご思想だと思っております。私もそういう立場からやれるようにしたいという気持ちがありまして、大蔵省から一億ドルの開設基金を引っ張り出して日本に持ってきたわけです。天城さんのレポートにありますように、その後はかなりこと志と違っています。国連大学は宙に浮いていますけれども、本当はもっと本格的なものをやりたいと思ったのです。国連大学と放送大学と、それからもう一つは何だっけかな。

もう一つ私の大問題で、中教審のときにやりかけて、手をつけて未完成のまま放りっぱなしだったのが、今いわれている「生涯教育」という問題。あれが今、生涯学習局とか何とかいって、もともとの

発想からいったら骨抜きになってしまった。「死ぬまで勉強だ」なんていうのは昔からいっていたことで、そんなことをいつてみたってしょうがないですね。あれはユネスコが最初に言い出したときは、ライフロング・エデュケーションといって、生涯教育といっていた。学習というのは本来、没価値的なもの。ただ学ぶというだけ。泥棒の稽古をするのも学習ですからね。教育というのは、ある一つの目標になる理想に向かって進む。そういうものが生涯教育になったはずです。

最終的には、私らが中教審でやりかけたのは、人間が生まれて死ぬまでの間に、どの時期に、どういう条件のときに、どういうやり方をしたら一番いい学習ができるか。どの時期に何が必要かという全体的なシステムについて研究して、そのシステムを本当に動かすためにどういう教育装置を社会につくったらいかなというのが生涯教育。本人のしたいときに勉強すればいいのだったら、いま学校へ行って勉強するのはいやだとサボる理由になるわけですね。ところが、その当時に私は、音感教育なんていうのはある時期にそれについての基礎訓練をしなかったら、あとでやろうとしても手遅れだということのようなことを聞いたことがあるのです。本当かどうか知りませんが、少なくとも、人間の生涯のなかでどの時期にいかなる意味の学習が必要であり、もっとも効率的に行なえるかということをもっと研究して、それにふさわしい社会的な教育システムをつくるというのが生涯教育の思想です。今はそうでなくなっちゃったでしょう。勉強したい人はカルチャーセンターへ行って何でも聞きなさいと。スーパーマーケットへ入って欲しいものを取ってくるのと同じ。その点では、私はいまだに生涯教育の問題は残念ですね。

伊藤 先ほどから先生のお話を伺っていると、文盲の問題というのは先生はあんまり関心ないみたいですね。

西田 ない。

伊藤　ねえ。だけど僕は、日本が近代スタートしたときに三〇パーセントの識字率があったわけですよ。三〇パーセントまでいくというのは、これは大変なことですよ。それがどうして可能になったのかというのを考えないと、今の開発途上国の教育がある程度のところにテイクオフすることができない。

西田　それが幕藩時代に行なわれていたわけですね。あれを可能ならしめたのは徳川の幕藩政治で、その当時に町人の力が出てきて、士農工商の侍よりも町人のほうが金の力を持ってきた。経済を動かしていくためのテクノロジとして、読み・書き・そろばんが必要だったということがありますね。侍のほうはあのお役人みたいなもので、各藩という一つの閉鎖的な社会のなかで、どうやってつぶれないでやっていくかということに必死だった。幕藩政治の最大の功績は、ライシャワーさんがいわれたように、日本の近代化の基礎であった。泣いても笑ってもこのなかで生きていかなきゃならんから、殿様も搾取はしたかも知れんけれども、あらゆる産業を興し、能力を伸ばすこともやらなければいけなかった。だから教育もやったわけですね。そういうことをある閉鎖的な社会のなかで自立的に努力するように仕向けたというのが徳川幕府の政策としてあった。そういう全体の体制が、教育という問題を否でも応でも町人もやるように仕向けたのではないですか。やればやったメリットがあったということですね。メリットが出るような社会組織があった。

伊藤　だけど、逆にいうと、そういう条件のないところは文盲退治をいくらいってもだめという感じですか。

西田　インドのカーストが牢固としていまだに動かんでしょう。義務教育をやったあれをつぶすということをやろうと思ったら、それは大変ですよ。

伊藤　まあ、それはそうですね。同席しないわけですからね。

西田　あそこで掃除をするときに床を拭いたら、「あなたはそれをやっちゃいけません。それは〇〇にやらせるんだ」ということをすぐいうでしょう。だから、カーストを打破するために義務教育をやるなんていうのは、ネールが出てきても、ガンジーが出てきても実現できないですね。その牢固たるものは、それをやったら明日から俺の生活がよくなるんだという一つのインセンティブを与えなければだめです。だから、明治政府がやった革新はやはり凄いことですよ。侍から全部刀を取り上げたのですから。よくいわれますが、侍の刀を取り上げるのは大変なんですよ。大久保利通がやったのでしょうか？　それから、藩をつぶしたというのも凄いことですね。

伊藤　しかし、むざむざとつぶされたんですよ（笑）。やっぱり、このままではやっていけないという、その状況認識があったということです。

西田　幕府の体制が崩壊した。もう一つは、外圧があったということ。

伊藤　そうですね。それは非常に大きいです。

西田　ぼやぼやしていたらアヘン戦争みたいになっちゃう、日本がとられちゃうという危機感があった。だから、その外からの危機感がなければだめだろうね。

伊藤　その危機感というのは情報の力ですよ。情報はやはりリテラシーの問題ですから。

西田　日本の幕末と明治維新というのは革命かどうかという議論があったそうですが、凄い変革ですよ。

伊藤　まあ、そうですね。支配者が交代していますからね。

西田　それで一番暴れた西郷（隆盛）さんが最後に腹を切って死んだのですからね。

伊藤　だけどそれではやっぱり、開発途上国というのはかなり絶望的な感じですかね。

所澤 だけど、僕が開発途上国に関して不思議な感じがするのは、これだけ初等教育の問題が出ているにもかかわらず、いまだに日本の経済援助で学校をつくったりするじゃないですか。だから結局金を使っていないですよ。初等教育に金を投下していいですよ。日本の場合は高等教育と初等教育と両方から近代化が進むというか、近代学校制度ができていきますけれども、大抵の国は初等教育のところにお金がいらないで、高等教育のところだけにいく。目先のものというのか、そんな感じを僕は持っていますけれども、どうでしょうか。

西田 それで思い出したのは、だいぶあとで私がユネスコに移って官房審議官をやめた頃。アメリカ大使館からマクナマラという人を紹介された。

伊藤 はい、国防長官。

西田 国防長官をやって、それから世界銀行総裁。あの人が世界銀行の総裁になったときに、「西田さん、マクナマラさんが開発途上国の援助についてあなたの意見を聞きたいといっている」といって、ホテルオークラへ呼ばれました。マクナマラさんの部屋へいって、スイートの立派な部屋でしたが、日本は開発途上国に対する援助をやっているのだけれども、私は文部省がやっている教育投資というのは、一遍人間に投資したら、それは人間のなかに生きて働いて、それが次から次へと広がって、一〇人に教えたらその一〇人の人が今度は一〇〇人に自己増殖していくものだ。教育投資ぐらい効率のいいものはない。経済援助である会社に一所懸命投資しても、その会社で資本になってそこで消耗してしまえばなくなる。教育投資は無限に拡大するので、ぜひ世界銀行も教育投資をやるのが私は一番大事だと思いますといったら、その翌年から世界銀行が教育に金を出すようになったのです。開発途上国にね。どぶに金を捨てるようなものだと言行はなかなか金を出さなかったのです。特に開発

途上国にやることは膨大ですからね。

伊藤 まあ、そうですね。で、効果というものがすぐに見えないでしょう。

西田 すぐ見えない。しかもイランやイラクの中近東にいきますと、あそこに行ったときに感じましたが、とにかく住民が同じところに住み着いていないのですよね。羊を追いかけてたりして草の生えているところを動き回っているでしょう。地域に定着していないから義務教育なんてやりようがないんです。ああいう人たちにリテラシーということをもって義務教育をしつけるのはどうしたらいいか。ある段階では、放送でやったらいいだろうというのですよね。放送を聞かせるラジオをどうするんだ。ラジオを動かす電気はどうするのだという、何もかもないない尽くすよね。だから、彼らに一つのインセンティブを与える方法があるのではないか。あの遊牧民のなかで私が聞いておもしろいと思ったのは、読み書きはできないけれども計算だけできる。羊の売り買いをするときに、生活の必要に結びついていればやるのです。親から子どもにずっと。しかし、文字なんか覚えても何も役に立たんというのです。これはやはり根本問題で、そういう世界的な課題を一体どうやったらいいのか学問的に国連大学で研究してほしいと思うのですけれども、やる人がいません。

伊藤 それはおもしろい問題がいっぱいあると思うのですけれどもね。

西田 貧乏とそういうもののシステムを一所懸命絵を描いて考えたこともあるのですけれども、どこから手をつけて良いか。それが回りまわって人間のねたみとか憎しみとかになって、それが戦争というところへ結びついていく。ユネスコは、戦争は人の心の中に始まるということをしているわけでしょう。これからも世界平和にとつて、最後は憎しみというものが湧いてくる根源があったら、戦争は

永久に絶えない。なんぼ原爆禁止してみたって、戦争になれば誰でも使いますよね。日本だって、もし日本が原爆を持っていたら使ったでしょう。

伊藤 まあ、それはそうですね。

西田 だから、殺し合いをすることをやる気になったら、武器をいくら押さえてみたってどうしようもない。そこでやっぱりユネスコのように、「戦争は人の心の中に始まる。だから人の心の中に平和の砦を築かなければいけない」。これは非常に厳粛な言葉で、難しいことですね。

伊藤 難しい。いうべくして、なかなか実行が難しい。

西田 「我々は平和のために断固戦う」なんていうのだから。

伊藤 (笑)。

西田 もう心の中で始まっている。全学連がいつもそういうことをいうから冷やかしているんです。もう戦争は始まっているじゃないかと。きょうはこんなところで。

西田 亀久夫 オーラルヒストリー

第7回

日時：2003年1月21日

14:05～16:05

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊 藤 隆（政策研究大学院大学教授）

小 池 聖 一（広島大学助教授）

所 澤 潤（群馬大学 教授）

村 上 浩 昭（東京都立大学助手）

■付属資料 「期待される人間像」について

伊藤 きょうで七回目のお話になりますが、きょうは一番の山ですね。

西田 質問書をいただきまして、私が関与した三つの諮問についていろいろということをおっしゃられますので、一番目の二十回答申は簡単なことで最初に申しあげます。二回目の第二十一回というのは時間的にはその次になっていますが、実際はあとの四六答申とまとめましょう。

伊藤 これは大学紛争のあれでしょう。

西田 紛争のやつです。諮問の手順としては、あとの答申でやっているシーズンの中に割り込みましたので。

伊藤 きょうは四六答申を中心にお話しただくとありがたいのですが。

西田 四六答申というのは、ご承知のようにそれ自体が非常に膨大なものですから、私の案としては、最初に四六答申というものの審議経過、スタートから全体の流れというものの概略を申しあげます。その次に、答申全体は膨大なものですから、私が大事だと思うところで必ずしも注目されていないところがたくさんあります。特に前期の二年間では過去の実績、そのときのいろいろ、今でもあれは我々としては大変貴重な発見だと思っていることを個別的に申しあげて、答申そのものに対する最終的な全体の評価を最後にまたやらせていただくことにします。

伊藤 これが実施のレベルでどうなったかというのも、ちょっとお話し頂いてよろしいですか。

西田 ええ。結局、私としましてはこれはずいぶん長らく突っ込ん

なのですが、今になると大体三〇年昔の話ですね。今の感想としていろいろなことはありますけれども、全体の方針については、それに近い年代で中教審について自分で書いたものとか、それに関連してどこかで使った資料が私がためているドキュメントの中から中教審関係のものを拾い出したら、五、六点出てきました。それは生の形で皆様方に差し上げて、それに即しながら申しあげたほうが、できるだけ当時の事実ということではないかと。一人ひとり、A〔「高等教育政策に関する中教審四六答申の特質（要約）」〕、B〔「日本の高等教育政策——その傾向と展望（メモ）」〕、C〔「中教審42年諮問事項に関する政策形成活動の要点」〕、D〔「教育改革を実施する上の問題点と戦略」〕とドキュメントの順番をつけています。

最初は初中関係のやつですね。これ〔「高等教育政策に関する中教審四六答申の特質（要約）」〕は私が五月に就任して、十月には答申が出ていたわけです。実際にそこへ官房審議官として関与することになったときには、審議の本身は実際上は全部済んであったわけです。あと最終的なまとめ。そこへ付け足しとして、特に大事な問題として「期待される人間像」というのが出てきた。これらを最終的に答申の形にまとめあげるといふ段階だったと思います。ですから、答申そのものの審議経過とか何かは、私はまったく知りません。最後に私が関与した頃には、次官が福田〔繁〕さんです。これは、大変景気のいい内藤〔誉三郎〕さんが次官のときに、教育勅語にかわるべき倫理綱領のようなものをつくりたいということで「期待される人間像」がスタートした。それが大体まとまって高坂正顕さんがやられた。それを、「君、あんなものを答申としてまともに出して教育勅語のかわりだというような形で受け取られたら大変なことになる。日教組やその他の批判がひどくなるから、これが表向きにならんようにしてくれ」と次官からいわれたのが、私がこれについて受けた指示の根本なのです。だから、それを何とか答申の本文で

はなくて付属資料という格好でまとめるようにもっていく、その根回しですね。高坂先生ともずいぶんお話し合いをしまして、「役所の事情は分かるけれども、これだけ苦勞したのに」といって、先生は非常に慨嘆しておられました。結局、その根回しの結果、答申の付属資料という格好で収めたところだけが、私が実際上関与した記憶にあります。

伊藤 これはやはり、次官がかわらなければ、それが答申そのものになったんですね。

西田 それをやっていて、事務次官が内藤さんから小林行雄さんになって、今度は福田さんになった。そのへんからやはり、全体の世間の情勢を——あの当時、一般的にも教育勅語のかわりというような話がありましたので、それが日の目を見るようになったらえらいことになりそうだという雰囲気だんだん出てきたのだと思います。

伊藤 内藤さん自体は、これはそういう意味でやっていくという。

西田 内藤さんはある意味の国粹主義みたいで、大変威勢のいい人で、ご承知のように、義務教育国庫負担法をあの人がつくったのですね。非常に推進力のある人ですから、教育勅語のかわりといわれなくてもやるべきだと思っていたのでしょう。もう代がかわっちゃったし。

伊藤 やはり役所というのはそういうものですかね。

小池 中教審会長の森戸さんはどうでしたか。

西田 森戸さんがずっと会長でしたかな。

小池 会長だったと思いますし、また、そうではなくても委員には入っていた。

西田 ええ、もちろん。

小池 各委員の方々はどうだったのですか。やはり中に入れようとしていたのですか。それとも、文部省の意向をくんで外に出そうと。西田 それを答申の本文から外す方向については、内部であまりも

めたような議論はありませんでした。私が高坂さんとお話しをして、大体こういうまとめ方ということでも議案を出してしまったら、「ああ、そういうことになったのか」という形で、「おかしいじゃないか」ということをいわれた覚えはありません。

村上 内藤さんご本人もこの特別委員会の専門委員だか特別委員だかで参加していらっしゃったと思うのですけれども。

西田 もう事務次官をやめたあとですか。

村上 はい。

西田 ああ、そうですか。それは私の記憶にはありませんね。あの人はそんなものを買って出たのですかね。普通、役所のほうが役所のOBを引っ張り出してくることはあまりないのですよね。ただ、中教審にはいつも、役所が操縦しやすいように次官経験者みたいな人をレギュラーメンバーの中に入れて、ときどきその人を通じて役所の立場を発言させる。そういうことはやっていったようです。私のときも、ずいぶん古い次官で河原〔春作〕さんなんていらっやいましたけれども、その後はあんまりそういう人を役所の中から採用した覚えがありません。

伊藤 それは大ごとにならないで比較的スムーズにいつてしまったということですか。

西田 ええ。その根回しのほうでだいぶあれでしたが……、最終的に高坂先生に次官のところへ来て頂いて、とくと役所の立場を話してご了承願ったということです。あとの話になりますが、高坂先生にはもう一つそのあとの第二番目に出ています「当面する大学問題」のときも最終案のまとめは高坂さんがやっておられます。そのときも、どうしても大学が暴れて収まらなかったら引導を渡すという案を私自身が四十二年の正月に思いついて、最後にそれを答申に入れたわけです。それについては、高坂先生は大学人ですから、最終的に大学に死刑を宣告するようなものでしょう。そういう道を開くと

いうことについては、やはり非常に抵抗されました。しかし、これも次官のところで話しをして、仕方がないかということになりました。高坂先生には大変申し訳ないことをしました。

伊藤 まあ、それがなかったら、この第二十一回答申というのはあまり意味がなくなってしまうわけですからね。

西田 これはいまだに大学運営の臨時措置法として法律が残っていますね。あれは時限立法みたいにして廃止するはずだったのですが、あの答申が出てすぐ立法措置をやって、法律が通って二ヵ月たったから日本じゅうの紛争が全部なくなったんですね。一度も執行しないで法律の効果はあった。だから、もう廃止してしかるべきなのではないけれども、安全装置としておいておくという。

伊藤 あれは臨時措置法ではなかったのですか。

西田 臨時措置法、大学運営の臨時措置法。

伊藤 そうでしょう。臨時とつくものは……。

西田 大体付則にその有効期限が書いてあります。だけど、法律としてはいまだに残っているんじゃないですか。廃止されていなかったと思います……。〔平成十一年十二月、法律一六〇号、廃止〕

■「明治百年」と文教政策の見直し

伊藤 そうですか、それはちょっと調べてみます。それで、四六答申なのですが。

西田 最初に全体の概要みたいなことを。いま差し上げたBの資料に四六答申の審議経過というのがどんなものだったかという表がついています。

伊藤 その前に、この四六答申はどこからどういう発想でこういう諮問が出てくるのかということ……。

西田 そうしたら、このAの一番最初の「答申作成経過の特色」のところ。私が四十二年に入ってから早い時期にこの諮問が浮かび上がったのは、後期中等教育も済んでしまったから、この次に中教審は何をやるかということで、いろいろなテーマを物色しておったわけです。そのときにここでいわれたのが、明治百年。一九七二年。学制公布からちょうど一〇〇年目が四十七年になるわけです。その二年前だったわけです。文部省はそろそろ学制公布百年記念といういろいろな行事をやらなきゃいかん。だから、先輩がつくった学校制度が一応一〇〇年を迎えるので、この際一遍全体的に見直すということも必要だろうという漠然たる雰囲気と、昭和二十三年に大体すべての学校教育を改正してやりましたから、そのほぼ二〇年目ですね。そうすると、戦後の学制改革も二〇年たった。明治百年と、その二〇年とで、ちょうど一遍見直すべき時期が来ているのではないかという理屈があったこと。

それと、このときの諮問をするときの背景として、これはあとの資料に出てまいります。幼稚園から大学まで非常にいろいろな形の問題が文部省へ突きつけられておった。幼稚園は普及しかけたときですから、幼稚園と厚生省の保育所との関係が、お互いにけんかあったり、幼稚園のほうは学校教育だから卒業したら資格がつくけれども、保育所というのは保母さんに世話してもらっただけで学校としての資格がない。幼児に対する指導の仕方、幼稚園はある程度教育基準としてやっているけれども、保育所のほうは中身がピンからキリまである。それともう一つは、幼稚園へできるだけ入れたいという人が殺到して、しかしその地域地域に幼稚園が足りないものだから、幼稚園を義務化しろなんというような極端な意見がいふんありました。片や、厚生省が都道府県や市町村に保育所をつくるときには、厚生省の基準によって、いいものについては補助金を出したりしている。ですから、都道府県としては厚生省の言いな

りにやると補助金をもらえて保育所がつくれる。幼稚園にはそんな補助金はありませんから、つくるにおいても幼稚園と保育所は非常にちぐはぐだ。学校としての資格も違う。しかし、親はとにかく何とか幼稚園に入りたい。幼稚園に入りたいという要求と、片や、幼稚園というのは朝出ていったら、お昼ご飯を食べたらもう帰ってくる。だんだん働く人が多くなって、子どもをできれば夜まで預かってほしいといながら、幼稚園ではそれやってくれない。そういう形で幼稚園と保育所に対する不満、利害関係があって、これをどう調整するかという問題が幼稚園にありました。

もう一つは、後期中等教育をやった頃には高校への進学率が増えてきて、高等学校も義務教育化したらという議論がずいぶんありました。日本では、義務教育というのは無理やりにも学校へ入れるコンパルソリー・エデュケーションという感覚ではなくて、義務になったら授業料がただになるという思想しかない。だから義務化すると。高等学校を義務化するかどうか、それは大変だと。

伊藤 高校全入という。

小池 全入時代を迎えて。

西田 試験なしに入れて、授業はただ、こんなに気楽なことはないですから……、高校をどう位置づけるかという問題もございました。片や、大学のほうがかなり急速な経済発展の段階にきていて、いわゆる理工系増募、文科系、理科系の比率をどうするか。しかも、私立学校が今までの文部省の強いコントロールを跳ね除けて自由につくれるようにしてくれとか、いろんなことがあったわけです。高等教育についても、量的、質的な将来性をどうするかという問題があった。まさに幼稚園から大学までの全体の問題を統一的に一遍見直さなければいかん。こういう背景もあったわけです。ですから、この諮問自体がごらんのよう到大変包括的な、「今後における学校教育の総合的な拡充整備の施策」という格好で大きくぶつけようと。そ

れで、まあ、明治百年記念だからゆっくりやってくれと。そんなに急いでやらんでいい。のんびりやって、審議会を二、三年抱えておいてもらえば、中教審が動くからだいじょうぶだと。役所としては、ある審議会を全然眠らせてしまうと、もう廃止したらどうかなんて大蔵から言われますので、開店休業にならないようにしろというような魂胆もあって、非常に大きな問題をゆっくりやってもらうという。

伊藤 こういう諮問をするというのは、発議はどこがするわけですか。

西田 文部省の中で、初中局は済んで、大学自体の問題もその前にやって、これは宙に浮いちゃったのですね。初中も大学も済んだのだからもうないだろうというから、今度は包括的なもの。こういうものでやろうかというのは、私は発端は知りませんね。やはり文部省の次官、官房長、そういった上層部で大体話が出て、固まってきたところで大臣の意見を聞いて、諮問をするという格好になるわけです。私が審議官として話を承ったときには、そういう明治百年のプランとして、ひとつ中教審でのんびりやってくれと。幼稚園から大学まで全部だ。

伊藤 そこまで決まったものが先生のところに来たわけですか。

西田 ええ、官房審議官が決めたというよりも、私のほうへ注文としてそういうものが来るわけです。

伊藤 そうですか。

小池 四十二年の諮問のときの文部大臣が文部省出身の剣木（亨弘）さんだったということもやはり大きな影響があったのでしょうか。

西田 そうかもしれませんね。剣木さんが大臣でしたね。

小池 戦後改革があって、それに対する再点検をしたいという意思が凄くあったのではないかと思うのですが……。

西田 剣木さんとしては、戦後改革というものについても一遍反

省してみたい、見直してみたい、いろいろ功罪があっただろうということを経括したいという気持ちはおありになったと思います。

伊藤 そういう課題が審議官である先生のところへ来たときに、どういう形で諮問するかということをつくるのは先生のところですか。

西田 そういうことになったら、まず諮問のテーマとして「学校教育の総合的拡充」と表題を決めて、普通は、文部省が諮問するときには検討課題というものを決めて、これとこれとを検討してくれと。これは、そういう格好をしています。実は文部省が既に答えを持っています。その答えを審議会が権威付けてくれというようやり方が普通なのですね。

伊藤 審議会というのは大体そうなのでしょう。

西田 ペーパーがあって、事務局としてはもう答えを用意しているようなやつを検討課題として渡す。しかし私のところは、幼稚園から大学までの検討課題を全部挙げたら大変なことですし、そういうことをやるよりも、ゆっくりやってくれということから考えると、ひとつ本格的にどういう問題があるかというところから見直すことをやってみようかという形で、検討の課題というものを出さなかったわけです。検討の観点という。

伊藤 普通、そういう審議会に諮問するときは、それが包括的であっても、各局からいろいろ意見を出させて、それをまとめてやるわけですね。

西田 省で決め付けるわけですね。とんでもないことが飛び出たら困るから、これとこれだけを訊いているのだから、あとはあんまり余計なことをいわんでもらう、とやるわけですね。

伊藤 そうですね。だから、先生がこの前おっしゃったような「検討の観点」というやり方は、省内ではどうだったのですか。

西田 皆さんは、中教審をこれから遊ばさないで何かゆっくりやってもらおうというくらいのことです。了承していますから、それで時間

がかかって茫洋たるスタートを切っても、それはそれでいいじゃないか、この問題をやってくれというような切羽詰った感覚はなかったわけです。それを受けて、私のほうとしてもゆっくりやりますと。観点としては、この前申しあげたOECDなどのことを考えて、こういう三つのポイント。明治百年記念だから、過去の一〇〇年間の教育発展を全部見直してみて、どこに問題があるかというところからスタートしたいという言い方をしまして、次官も上層部の人も皆さん賛成してくれたのです。「じゃあ西田君、ゆっくりやってくれ」ということだったので。ここからそんなに大げさな答申が出てくることを期待はしていない。

伊藤 は、はーん。

西田 中教審が遊ばないでゆっくりやってくれということ。所澤 ということは、委員会の規模も最初はそんなに大きなものというふうには考えていなかったということですか。

西田 検討の観点でスタートして動き出すときには、こういう委員会をつくってこうやりますというスケジュールは全部私のほうが考えて、上のほうの了承を得てやるわけです。だから、審議の進め方は官房審議官が案として持って行って次官の了承を得てやるという形で、上のほうから審議会の動かし方まで指図はありません。

小池 審議会のメンバーを選抜されたり、例えば第八期とか第九期中教審の委員は先生が当てはめられるのですか。

西田 いや、正委員は諮問にかかわらずレギュラーメンバーとしてある。今度は、諮問した事項に応じていろいろな専門委員という形を追加していく。だから、正委員は大体決まっています、ご承知のように教育問題なのですが、いろいろな分野からバランスをとって、経済界から何名、教育界から幾ら、それも初中から大学からみんな網羅している。言論界からも入れる、ジャーナリストも入れる。そういうレギュラーの枠はあるわけです。欠員であれをかえたほうが

いいかとか何とかいうのは、そのへんのレギュラーメンバーの人事は文部省の次官あたりのトップのほうを考えられるわけです。政治的な色合いも考えながら。だから、私どもは人事にはあまり関与いたしません。むしろ専門委員会をつくったときの専門委員ですね。

これは中身によって、私どもがこうしたい、ああしたいという人を出すわけです。それを了承を得てお願いする。専門委員は一つの専門委員会がおわったらそれでさようなという格好が多いわけです。

それでもなおかつ、あとで申しあげようと思ったのですけれども、中教審の委員をやっているということを非常に名譽に考えられる方と、あそこは反動文教政策の……と見られるから嫌だという人となるわけです。四六答申の諮問をしている途中でも、中間報告を出した頃に言論界その他から轟々たる批判が出て、再任してくれといったらやめた人がいます。しかも、あれはロートルの文部省の言いなりになるような人はかりを集めてきてやっているから御用機関だといわれた。我々も癪に障るものですから何とか若手の錚錚たる人を引っ張り出そうと思って、上の了承を得て……、一番最初に私どもは、あの頃は東京工業大学にいた永井道雄ね。あとで大臣になったでしょう。あれは京都時代にコーヒーを飲ませたことがあるものだからね。永井道雄を口説きにいったら、「三日ほど考えさせてくれ」といって、「俺は外から応援をするから」と断られた。私はそのときに、「中教審の委員になんかなったら岩波から原稿を頼みに来なくなるからだろう」といって冷やかしてやりました。その次には江藤淳さんね。あの人のうちまで訪ねていきました。この人は非常に懇切丁寧に話を聞いてくださったが、「私はどうもそういう任ではない」といって丁寧に断られました。三番目が、劇作家の山崎正和さんという人。これもハイカラな評論家だね。これが東京へ出てきたというから、東京駅へ行って寝台車の中まで入って行って私は頼んだのですが、「勘弁してくれ」というわけです。文部省の枠の中

へ入ったら物がいえなくなると、大体進歩的文化人が嫌がったのですね。というような格好ですから、結局レギュラーメンバーとして残る人は、悪くいえば古色蒼然たる人になるわけです。どちらに転んでもあんまり角が立たないような人。

しかし、私どもが実際に正委員の方々と四年間お付き合いして、世間で見ているような目とは違って、それぞれの方が各分野の達識の人ですから、実に立派な方でした。一番感心したのは財界から来る人です。これは経済団体から推薦されますが、やはりトップクラスですから、教育問題の議論をしても、「私は教育のことは素人で分かりませんが、私の経験では人間というのはこういうものではないですか」とそういった方がボソツとした話というのは、ドキッとくるような話をされました。そういつては悪いですが、一番つまらない議論をするのが教育界から出た人です。自分の後ろに何か背景があるのですよね。利害関係団体。それで、どこかの本で書いたか読んだようなことばかりしかありません。

所澤 先生が教育界といわれるときはどのへんのことですか。

西田 主として、小学校代表、中学校代表、高等学校代表。

小池 名前が分かっちゃいますね(笑)。

西田 その三つの段階は選んでいるわけです。だから、中学校を俺が代表しているんだというような人が来ているわけですね。まあ、形でいえば中学校長会長とか、そんな人。そういった人はとにかくいつも後ろを見て物をいっていますから、いっていることは感心することはちっともありません。

■ 審議会と企画会議

伊藤 審議会と先生との関係はどういうことになるわけですか。

西田 関係といいますと、私は官房審議官でお膳立てして、委員会が決まったら、何月何日に何委員会を開きますというスケジュールを私どもが立てて、最初に委員会を開いて、委員会のなかで委員長を決めるわけです。そうしたら、あとはその委員長と相談して、「先生の日程からいつて何日に開いてよろしゅうございますか」という形で、一、二ヵ月先まで日程を決めるわけです。

伊藤 審議会の事務局を担当することになるわけですか。

西田 ええ、官房審議官が事務局全体を代表するわけです。中教審の実務は、企画室というのが直接、内容的にタッチするのが調査課、統計課、この三つを私が総括しているわけです。企画室の企画室長というのは実務的な事務局長になるわけです。私は三課を代表して委員長と相談し、皆さん方にいふべきことはいいい、審議の中にも入っていくという格好でやっているわけです。

伊藤 審議の中にも入っていけるわけですか。

西田 ええ、審議の途中だって官房審議官は自由に発言させて頂いています。

伊藤 委員というわけではなくて。

西田 委員ではありません。だけど、そのお膳立てをして、そして運営で、「ここは先生、もっとこちらのほうが問題ではないでしようか」というようなことをいったり、「そこまでの議論は次回にまとめられます」と、その次に前回の議論をまとめてドラフトで出すわけです。それを読んで、「ここはこんなことをいわなかった」とか、「ここは直したほうがいい」とか批評をして、答申の文章になるものの草案を書くのはもっぱら審議官でした。次回にそれを認定してもらって、よければだんだんそれが積み重なっていく。それがたまっていけば、大体何ヵ月かたてば答申の文章を書けるわけです。そういうふうに、毎回議論したことを文章にまとめて次回に出して、それを積み上げていくという形です。

小池 八期、九期に、二十一特別委員会とかと委員会をつくりますね。この委員会のつくり方というのは、これは先生が分野に分けて四つという形で決められていくわけですか。

西田 委員会の専門事項で検討すべき課題が決まっていると。その中でどういうことをどういう順番で議論するか。例えば、二十一特別委員会の審議事項というものをどう立てるかということは、私ども内部で物凄く議論するわけです。それを委員会へ出して承してもらってやる。そういう審議すべき事柄を決めてなければ専門委員会は動けないわけです。

Bのこまごまとした長い表〔図版「中教審の審議過程」参照〕がありますね。この表で特に注目いただきたいのは、一番上に四十二年から四十三年というので、七月から六月末の一年間がありますね。この一番左に、二十一、二十二、二十三と書いてあります。四十二年七月にこの専門委員会が三つスタートしたわけです。最初は諮問事項の説明をしたりしていますが、十月頃から右側に×印がずらっと入っているでしょう。「企画」と書いてありますね。この「×」というのは、企画室を中心として三課のヘッドを集めて内部の検討事項をやった回数です。凄いでしょう。この資料をまとめたのは昭和五十一年で答申が出てから五年くらいたっていますけれども、これをまとめるのに私の手帳だけでは間に合わないのです、企画室に審議会を運営した全体の日記みたいなものがあるわけです。それを借りまして、何月何日にどんな会議をしたというのを全部書いてある、それから拾ったわけです。「◎」は総会を開いたときです。「●」が専門委員会。それらの合同会議をやったり、小委員会を開いたり、×印は内部の企画会議です。この企画会議というのは三課のヘッドを集めて担当者を決めてやるものですから、審議官室で一日じゅう大議論するわけです。これは、「西田学校だ」と皆にはよくいわれました。このときに関与していた連中は非常に懐かしがってくれて

います。だから、二十一特別委員会に何を議論させるか。そのためにはどういう資料を用意したらいいか。四十三年一月の中頃に「コンピュータ始動」とありますね。その前から準備はしていましたが、このときから本当に動き出したわけです。その企画会議で、今度の入試問題をやるのだったら、こういうデータをコンピュータに入れてこういう整理をしたものをいつまでに統計課が責任を持って出せというふうに、各課に仕事を割り当てるわけです。その出てきたのが全部答申の後ろに載っているドキュメントになっているわけです。だから、この企画会議というものが実は一番実質的に審議会にかけ、その前の問題の整理と、その進め方を決めて、それを委員会で議論してもらって、さらに専門的な立場からいろいろ付け加えてもらう。毎回議論がすめば紙に書いて、次の回に出して、一步一步進めていくという進め方です。

伊藤 そういうときには三課長の会議のプロセスで、例えば小中学校に関するものは初中局や何かに相談ということはするのですか、しないのですか。

西田 もちろん必要な事柄によって初中局のほうに相談にいたりすることはあったと思います。担当の連中がどういうようにやっておったか細かい点は知りませんが、自分らだけで判断つかないこともあります。ただ、企画室に來ている事務官というのは一般の事務官ですが、いま振り返って顔ぶれを見ても、その後道府県の課長とかそういうところへ出ていけるくらいの、文部省の中でのポツと出ではありません。大体皆それぞれの部局を渡り歩いてかなり経験を積んだ連中ですから、それぞれ意見をまともにくいうくらいの男でした。企画室長というのは、その後次官になった佐野（文一郎）君。佐野君の前の企画室長は文化庁の長官をやった犬丸（直）さんですよ。犬丸君とか佐野君とか、かなり文部省の中で局長クラスから次官までいったような人が企画室長でした。その下のスタッ

フも、補佐とか何とかみんなその道のベテランばかりでしたから、ほかの部局へ相談にいかねければ困るほどのことはなかったと思います。

村上 この企画会議という方式は、先生が案出された形なのですか。西田 そうですね。官房審議官室というのがあって、そこにみんな寄せ集めて、そこで七、八人の連中が議論して、この次の会議はいつだから、そのときまでにこの資料と同じものを用意しろという形で宿題を出すわけです。

伊藤 これを見てみると、×印は十二月のところではいっぺん区切れていますね。あとはブツンと。

西田 それから後は、そこまでに会議をしたものを準備して、実際上はごらんのように三つの特別委員会は翌年の二月から「●」が動き出していますね。A、B、Cと書いてありますが、このA、B、Cというのは、二十一特別委員会の大きな審議事項が三つあったわけです。Aのテーマ、これはこちらを見ていただくと出てきますけれども、Aというのが例の外部効率。文章では、「国民の教育需要と教育の機会」というテーマです。ですから、学校教育制度が、はたして国民がどんな希望を持っているか。それに対してどれだけ機会がうまく開かれているか。それがAです。Bは内部効率です。「人材需要と卒業者の……」という名前になっています。この内部効率へ入っていったのが六月からですね。その最後の財政需要のほうは翌年になって四十三年の十月頃から。

伊藤 まだDもありますね。

西田 あ、四つあったかな。最後のやつは「いろいろな諸条件と教育の機会」、教育の機会均等の問題をもう一回やっていますね。そちら側の各委員会の諮問事項を見ていただくと出てまいります、A、B、C、Dですね。

伊藤 各委員会に対する諮問事項というのは、べつに文部大臣から

中野の審議経過

◎ 終会, ● 特別会, ○ 合同会

○ 小笠
① 第1期(42.7.1~44.6)

[XXI] 特委
改訂の特別会

[XXII] 特委
改訂の特別会

[XXIII] 特委
改訂の特別会

② 第2期(44.7.1~45.6)

[XXIV] 特委
改訂の特別会

③ 第3期(45.10~46.4)

[XXV] 特委
改訂の特別会

④ 第4期(46.10~47.4)

[XXVI] 特委
改訂の特別会

⑤ 第5期(47.10~48.4)

[XXVII] 特委
改訂の特別会

⑥ 第6期(48.10~49.4)

[XXVIII] 特委
改訂の特別会

⑦ 第7期(49.10~50.4)

[XXIX] 特委
改訂の特別会

⑧ 第8期(50.10~51.4)

[XXX] 特委
改訂の特別会

⑨ 第9期(51.10~52.4)

[XXXI] 特委
改訂の特別会

	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
昭和 42 ~ 43	昭 和 42 年 7 月 1 日 開 会 後 復 員	(15) 昭 和 42 年 8 月 1 日 開 会 後 復 員	(21) 昭 和 42 年 9 月 1 日 開 会 後 復 員	(22) 昭 和 42 年 10 月 1 日 開 会 後 復 員	(23) 昭 和 42 年 11 月 1 日 開 会 後 復 員	(24) 昭 和 42 年 12 月 1 日 開 会 後 復 員	(25) 昭 和 42 年 1 月 1 日 開 会 後 復 員	(26) 昭 和 42 年 2 月 1 日 開 会 後 復 員	(27) 昭 和 42 年 3 月 1 日 開 会 後 復 員	(28) 昭 和 42 年 4 月 1 日 開 会 後 復 員	(29) 昭 和 42 年 5 月 1 日 開 会 後 復 員	(30) 昭 和 42 年 6 月 1 日 開 会 後 復 員
43 ~ 44												
44 ~ 45												
45 ~ 46												

X : 三野の長の内閣会議
(全議会議)

ということではない。

西田 ええ、いま説明を間違えました。二十一特別委員会は外部効率を全部やって、このA、B、C、Dというのは外部効率の中の種類です。それから、二十二が内部効率をやって、二十三が財政効率。これを見たら、七月に諮問が出て各委員会にそれをお膳立てをして、八月に検討事項とかそういったものをそこで決めておりますね。そして九月にそれぞれの委員会が動き出して、そして、企画小委員会というのは、委員会のなかで少数のメンバーで今後の検討課題のことを相談して、審議方針を十一月に決めて、という格好になっています。そして、実際に審議が始まったのは翌年の二月頃から。こういう格好でレギュラーに動いていると思います。

■各委員の選考

所澤 七月の時点で特別委員会のほうの委員も全部決まっていたのですか。

西田 そう思います。専門委員の人はときどき必要なときに追加したりということはありません。議論すべき事柄によって。だけど、一応専門委員会の形としては、専門委員を追加して、前の年の九月頃に大体形は整っています。

所澤 この専門委員の名前を見ますと、東洋先生とか、一番ヶ瀬〔康子〕先生とか、潮木守一先生とか、柿内賢信先生とか、河野重男先生とか、いま相当名前を知られている方が出ているのですが、こういう方をどのようにして選ばれたわけですか。目をつけたのはどういうところですか。

西田 東君なんかは、私が学生課長のときにアメリカ人がやってきて日本人の再研修をやりましたね。それで、東大、京大、九州大学

に三ヵ月ずつの現職教育をやった。そのときには大学の学生部の現職者を各大学から集めることと、各大学の中の教育関係のエキスパートをその会議にメンバーとして呼んだわけです。東大でやるときには、東君がまだあのときは助手だったかな。東さんとか、肥田野さんとか、そういった人にレギュラーメンバーで入ってもらったわけです。僕らもメンバーに入っていましたから友達付き合いをしておりました。だから、東大の教育学部ならあの人たちに話しをすれば分かる。それを東京と京都と九州でやったものですから、それぞれの教育学部と人的に密着しているわけです。「おたくならこれに出てくるのは誰がいいだろうか」というような格好でやりました。その内部効率、外部効率と、事柄によって必ずしも教育学部の中では齒が立たないので、むしろ役所自身が自分たちのデータを分析してやらなければならないという格好になると思います。

それで四十二、四十三年がずっと動いていて、それが翌年になってさらにA、B、C、Dとやって、まず二年間で過去の分析をやるというのは大体スケジュールどおりに動いているでしょう。それが四十四年の四月頃からまともに入って、六月頃にそこまでの過去のデータの一応中間報告をまとめたわけです。その要点を右側に枠外に書いています。二十一にやったことはこれだと。いつからいつまで。第一段階がその段階で、今度は第二段階に入ると今後の問題をやるわけです。最初の二ヵ月間で第一段階の過去の傾向の分析がおわった。第一期の中間報告が出た。総会があった。そういうまとめ方がそこに出ています。

ごらんのように四十三年の十一月、このときに「当面する大学問題」、紛争問題が一方で激化してきたものですから中教審へ別途諮問が出たわけです。四六答申の諮問でない。質問事項でいわれた二番目ですね。あれはここで割り込んできたわけです。これは一番上

の行に書いてあるでしょう。二十四特別。だから、一、二、三で、二十四は別途諮問にあてたわけです。そして、これは十一月頃にスタートして、ごらんのようにその翌年の四月中に四ヶ月くらいで答申を出しちゃったわけです。物凄いスピードを上げているでしょう。だから、別途諮問のやつは四六答申とは別ですからカッコをつけてありますけれども、ずっとこれだけの猛烈な密度でやっているわけです。

伊藤 これは委員は同じわけですね。

西田 いや、二十四だけ別途。正委員でだぶっている人もあるかもしれないけれども。

伊藤 そうでないのもあるのですか。

西田 ないのがあるのではないですか。二十四の委員の名簿を見て頂いて。二十四は、ここへ専門委員の人がずらっと入っていますね。このときも、高等学校代表、大学代表から道路公団まで入っているな。それから学術会議。これはレギュラーの二十一、二十二、二十三には入っていない人ばかりですね。全然委員は別ですね。だから、正委員のほうからも入っているのが……。

伊藤 正委員のほうは少ないですね。

西田 ええ、高坂先生が一人入っているでしょう。それから古賀〔逸策〕先生と、慶應の高村象平さん、国研の平塚〔益徳〕さんと、新聞社の萬〔直次〕さんと、こういった方が四人くらい入って、あとは特別委員で入った人がずらっといます。実際上は、主査は高坂先生になっています。だぶっている人は若干ありますが、ほとんど専門委員を中心にしてやったわけです。専門委員といってもべつに格が低いわけではなくて、このために特別委員をお願いした格好です。

伊藤 これは臨時委員と書いてありますね。

西田 あ、臨時委員。専門委員というのはもう一つ下の枠ですね。

これは個々のエキスパートという格好になりますから。
伊藤 これ、正委員がまったく同じだったら大変だろうなと思ったんです（笑）。でも、このだぶっている人は大変ですね。
所澤 これが本業になるわけですね。

伊藤 まあ、そうですね。

西田 高坂先生なんかは二十一の主査をやっていて、こちらでだぶっていますから、これだけのお膳立てを立てて、それをまた動かしていくというのなかなかスケジュールが大変ですからね。だから、二十三、二十四のこのだぶったときのやつは、特別委員会が三つと、その上に臨時が飛び込んで、四つの委員会が走ったわけでしょう。だから、四十四年の一月からの範囲が一番ひどいですね。

伊藤 無任所というのはどういいますか。

西田 無任所というのは、正委員にはなっているけれども、個々の特別委員会で決めないという人。どこへ出ていてもかまわない。特定の特別委員会に専属しない。

伊藤 どこへいってもいいわけですか。

西田 ご本人がご希望ならどこへでも出ていいのです。

伊藤 会長や副会長は。

西田 会長や副会長はとにかく全部の委員会に出ておられました。

伊藤 えっ、そうですね。

西田 森戸先生なんかは。

伊藤 じゃあ、森戸先生は大変だなあ。

小池 そうなんです、出ているんですよ。

伊藤 まあ、育英会の会長だからな。

西田 もう育英会長になっていました。

小池 だから育英会の仕事はほとんど残っていないんですよ。だからということないでしょうけれども（笑）。

伊藤 たぶん、育英会はある仕事がないんだろうな。

西田 もう広島大学はやめておられたのですね。

小池 中教審の資料はたくさんあるのですけれども、育英会の資料はほとんどないです。

伊藤 そうですよ。林健太郎さんがあとで育英会の会長になったでしょう。暇だといっていた。

西田 育英会もね、退職金ももらえるし……。

伊藤 老後を養っておられる。

西田 この頃よく問題になっていきますね。

伊藤 だから、こういうときはちょうどいいんですね。この専任みたいな感じじゃないですか（笑）。

西田 中間報告を四十五年のおしまいにし出して、その頃から、出た中間報告を一般の意見を聞くようにしようと……。それが四十五年から始まっていきます。このときに今までのまとめをもう一度見直すために、四十四年の七月、八月に箱根に合宿というのが書いてありますね。箱根の立派な旅館に泊まって、ごらんのように三日か四日泊り込みでやっています。

伊藤 これは箱根のどこに泊まったのですか。

西田 七月は小涌園、八月には宮ノ下の富士屋ホテルです。

伊藤 ホテルを使ったのですか。

西田 ええ、役所の施設ではなくて。立派な庭があるところです。

森戸先生なんかは奥さんを連れて来られました。私も別は別の安いところへ泊まって。

伊藤 その会議室か何かでやるわけですか。

西田 ええ、その会議室。食事もそこでして、わりあいにつくつき。公聴会などは、最後のところで四十五年の七、八月頃に、仙台、東京、広島でというのが書いてありますね。私もそこへいってパネルディスカッションみたいに並べてやっていきます。

伊藤 公聴会はどういう人が来るのですか。一般的に誰でも自由に

というわけではないでしょう。

西田 会場の都合があるから申し込みを受けたのですかな。東京だと、霞ヶ関の教育会館の広いところでやりました。壇上で委員が並んで、一般の人が自由に質問する。ですけれども、会議が大きすぎて、特定の質問者を決めておかないと質問が出てきませんからね。十月頃には日教組も呼んで意見を聞きました。

元へ戻ると、四十四年のおしまいに前期二カ年間の見直しが大体おわって、四十四年から二十五、二十六の特別委員会がスタートしたのですね。前の三つの委員会が解散して、そこが見つけた問題を、初中関係、大学関係と二つに分かれて、どう解決するかという方策を考える審議に入ったわけです。だから、前期二カ年のデータをもとにして審議に入るといって格好です。

伊藤 これが第二段階ですね。

西田 ええ。第二段階が四十四年の七月から四十五年の十月までずっと続いております。ここで初中教育の改革の基本方針というのが出てきて、その草案を四十五年に公聴会にかける。そのときには中間報告を新聞発表しまして、それに対して世間の反応を伺ったわけです。四十四年から初中と大学とに分かれたこのへんの特別委員会の審議はかなり密度が高いですね。前は一月に一遍ぐらいあった。今度は一月に三回も四回もやっているでしょう。今度はもう、この頃には少し急がれたわけです。前の年に大学紛争の問題があって、大学問題のことはもっと早く答えを出さないといけない。当初ののんびりやってくれという話が、そういうことではなくなってきた。東大の安田講堂が焼かれたのはいつでしたかね。二十四特別委員会を開いたのはあれなんかがあったのがきっかけでしょうかね。当時の安田講堂とか、東大の入学試験がずれたことがあったでしょう。

伊藤 四十四年の一月だと思うのだけれども。

西田 二十四特別委員会の諮問の頃ですね。

伊藤 諮問の最中だ。

西田 この紛争問題のあれがあって、答えを出して、翌年におわった。大学問題はそういうふうには火がついていったから早く答えを出せといわれた。この二十五のほうは初中関係ですから、これは翌年までずっとやっていますね。大学のほうは二十六ですから、四十五年の四月、五月のところまでで大体まとめをやっています。そして、大阪公聴会とか東京公聴会というのは四十五年の三月頃にやっています。国公立の大学協会のヒアリングもやっています。だから、大学のほうはスピードアップして四十五年の初めくらいに大体出しています。

伊藤 構想というのと試案というのは違うのですか。

西田 ええ、基本構想の試案というものをつくったわけですよ。

伊藤 大学のほうは「構想」になって、初中が「試案」と書いてある。そのあと翌年に……。

西田 翌年にヒアリングをやるから「試案」にしてあったのでしょうね。

伊藤 次の段階で初中が「構想」になっていますね。

西田 大学のほうはヒアリングを先にやっているでしょう。だから、それを取り入れて構想を固めた。初中のほうはまだ「試案」にしておいて、翌年四十五年の七、八、九頃に、東京、広島、仙台でやっていますから、初中のほうが一步おくれたような格好でまとめたわけですよ。両方がまとまってきたところで、四十五年の九月頃から初中と大学の両方の結論を一本の答申にするための最終的なまとめをやりだしたのです。それが二十七特別委員会、翌年の四月頃の最終答申まとめがここに入っていく。そのときにその上に「予計」と書いてあるのは、予測計量という、全体の学校制度を整備していくのにお金がどれくらい要るかという経済的な計量関係のレギュラーの部会をまた別に開いたわけです。

伊藤 これは小委員会ですね。

西田 小委員会です。一番おしまいの行に二十八というのがありますが。これは、答申をまとめていく段階で、今まで初中、大学にまとめてやっていたのですけれども、そもそも学校教育というのは今後どうなるべきかという全体を見直すような一番総合的な観点から再検討しようというのが二十八になったわけです。これが答申全体の改革の基本構想というよりも前に、この諮問の冒頭に答申として出てくる最初の第一章のところは全部この二十八がやったやつなのです。それがやった中身としては、例えば、大学と高校の基本構想以前に、今後の社会における学校教育の役割という格好で、いろいろな移り変わりが激しいので学校教育がどういう役割をすべきか。生涯教育とユネスコが言い出している。そういう考え方をどう取り入れて考えていくか。初等、中等、大学に分かれる前の学校教育自体の今後のあり方をどう見るかというところからやったのが二十八です。

■学校教育のあり方

伊藤 その場合は、教育というのは学校とくっついていっているわけですか。

西田 学校教育です。これは、諮問自体が学校教育の整備の問題だから、家庭教育とか社会教育は入っておりません。ただ、明治以来、学校教育というものを金科玉条にして、これが何もかもやるようにいつていたけれども、この激しい世の中の移り変わりによると、学校がやれる限界があるのではないかと。

この答申の中に書いてあるのですが、学校教育というのは絶大な威力を発揮したけれども、逆にいえば、学校教育というものはある

年代になった子どもたちを学校という特別な社会の中へ放り込んで、ここで世の中とある程度隔離したわけです。実際的な仕事をやる責任も負わなければ、何一つ物事を成就しないで、一つの空想的な社会の中で可能性の探求をやっている。そういう学校にいつまでも入れておくことは意味があるのか。そこで何もかもやれるのか。むしろ、そのために世の中から宙に浮いたようなことになってしまっただけで、教育としてはどこか抜けていくのではないか。そういう反省をやるべきだという議論が出てきました。そのことは中教審の箱根の合宿のときのある日の朝のときに出てきたのです。つまり、学校へ入れているということが青少年にとっていいことなのかどうか。世の中から隔離して、実際に自分で汗を出して仕事をするという体験を持たないで空想的な格好のことばかりやっている。これはむしろ教育として間違っているやしないか。箱根の席では、満一五歳になったらすべての学校を出たやつを一遍世の中に放り出して、世の中で何かまともな仕事をやらせてみて、自分がどれだけのことができるか。「俺は本当にこれをするためにはもっと勉強しなきゃ」という人間だけが大学へいくという制度に切り替わらんかというまじめな議論があったんですよ。散々議論したあと、「それは日本が社会主義にでもならんかぎりにはできないな」といって（笑）、そのあとは笑い話になったのだけれども、本当に真剣でした。そのことは現代の日本教育状況をみると私は間違っていないかと思っています。教育そのものは学校というものを金科玉条にしていることが間違いだ。むしろ学校におけるから学べないことがたくさんあるんじゃないか。一遍世の中に出して、ということがありました。そんなことから、それが最後二十八特別委員会を発端させる契機にもなったと思います。もう一度そこで学校教育の限界を見ていく。

この総論のところはあまり皆さん注目されない。ここが一番苦労したところで、この答申のところに恐ろしいことが書いてあるんで

す。今後における学校教育の役割のところでは「今後の社会における人間形成の根本問題」とまず表題をあげて、「人間形成の多面性と統一性」というところで、人間は、過去・現在・未来にわたる人類の歴史の中で、その生きる環境に適応したり、それに働きかけて自分自身を実現しようと努力したりすることによって、たえず成長・発達を続けていくものである。このような人間形成の過程は複雑・微妙であるけれども、次のような多面性をもつ。一つは、自然界に生きる人間としての発達だ。つまり、自分が自然界の一部として、健康とか肉体とか、そういったことを自然の一部としての人間を形成していく。二番目が社会生活の中のメンバーとしての人間形成。三番目が、これはもののしのですが、文化的な価値を追求する主体的な人間としての形成。このような三つの側面は互いに有機的な関連を持っていて、それが均衡とれた発達をとげ、自然と生命に対する愛と畏敬の念に支えられて統一的に働くところに人間形成の真の姿があると。哲学的、文学的文章でしよう。教育の問題を考えるとときには、このような多面性と統一性を考えるべきである。それから、人間形成の問題を考えると、男女の性別の問題がある。中教審は、人間としての平等はいうまでもないが、その文化の維持発展に対して男女の特性に差異があり、それを認めながら可能性を追求するということを言っている。それ以外に、社会がこんなに変わってきて人間にこういう挑戦をしている。今までなかった。これは我々の祖先が経験しなかったことだ。そういう意味で教育を考えなおさなければいかん。そうすると、教育体系というものを、学校全体を見直して、学校教育はその全体の教育体系の中のどの位置を占めるのかということで学校の役割を決める。

そして、そこから生涯教育という考え方が出てきた。それがいま文部省では生涯学習局なんかになってしまっただけで、人間は死ぬまで勉強だと。そんなものは大昔からいっているんで、生涯学習というの

私は没価値的な考え方だと思う。学習というのは価値追求の問題ではなくて、泥棒の稽古をするのも学習ですからね。生涯教育の思想がユネスコのなかから出てきたときに、私はユネスコの関係をしておりまして身にしみています。人間というものが生まれてだんだん成長していくプロセスのなかで、どの時期にどういうことが必要になっていくか。そのときにやっておかないと一生悔いを残してやり直しがきかないところがあるんじゃないか。その例としてよくいう音感教育。これをやらないと永久に音痴になっちゃう。そういうことがあるんじゃないだろうか。必要な時期に必要なことを教える。そして、それが学べるような状況を周りにつくって、それに自然に流れていくようなシステムをつくるのが生涯教育なのだ。それなしに、いつでも好きなときに勉強できるなんていったら、スーパーマーケットに入って欲しいものを取ってくるのと同じで、その理論が正しいのだったら、「俺はいま勉強したくない。いつかやるだろう」とサボる理由になる。

この時期にやらなかったら悔いを残すということがはっきりつかめたら生涯教育の設計ができる。そのために、特別委員会が特別会議を開いたのです。つまり、人間というものは成長のどの段階で何をやらなければ取り返しがつかなくなるか、それを見極めたい。それで、文化人類学の人から、大脳生理学の人、もちろん教育学の人、そういった人で七、八名集まって会議をやりました。「どの時期に何をやらなければだめだということでああなたの学問の分野ではっきりいえていることは何ですか」と議論してもらったら、むしろ先生方は冷や汗を流して、「残念ながら分かっていません」といった。それで投げ出したんです。専門家が提案するだけの結論を持つていないということです。音感教育なんて俗にいわれていることですが、本当にそういうことがあるのか。人間の価値判断とか人生観とかいうものの形成も根本的なそういう問題があるわけでしょう。そういう

うものがその時期に本人が学ぼうと思ったら学べるような条件整理しなければならん。そうすると、生涯教育のためには教育システム全体の総合的な設計が要るのだろうと。そういうところまでいこうとしたのですが、とうとうそれができませんでした。それが二十八です。

伊藤 そうですね。おっしゃったことで非常におもしろいと思ったのは、学校は隔離された、一種バーチャルな空間で教育をする。だけど、結構いま穴が開いておりまして、高校生とか大学生はみんなアルバイトをして、あの連中と話していて、いろいろなことをよく知っているんですよ。社会の実際のな仕組みとか、嘘や、建前と本音とか。これはまあ、半分くらい現実の社会に触れているから、先生たちよりももしかするとよく分かっているのかもしれないなあと思いますけれどもね。

西田 私がアメリカへいったときにミネソタ大学の教育学部の人と話していて、「学生の教育者になるための訓練で、教育実習というのが必要だ」「俺の学校では、教育実習よりも、教員になる人に社会実習をさせなきゃだめだ」と。小中高等学校から教員養成学校を出て、卒業して社会へ出ないうちにまた学校へ戻ってきて、これだったら教育バカになってしまおうってね。だから、教育者ほど世間を知らないやつはいないということになってしまふ。

伊藤 まあ、そうですね。

西田 明治の初めに学校制度をつくったときは、幸か不幸か先生になるのがいなかったのです。神主や坊主とかを呼んできて、世の中のすれっからしみたいな連中が先生をやったわけです。その意味では、初期の学校教育というものは社会のあらゆるものが流れ込んできたわけですね。それが、師範学校ができてだんだん純粹培養しだしたらおかしくなっちゃった（笑）。

所澤 その問題は、今、改めて大きな問題だと感じます。

伊藤 アメリカとかオーストラリアへいったときに向こうの学生のゼミや何かをのぞいてみたら、年齢がばらばらじゃないですか。日本でゼミをやって、まあ、たまにそういうことがあります、大体同世代の人間だけで、社会的な移動の手段としての教育といえますか、それは日本ではとてもまだできていないという感じですよ。

西田 高専の校長をしているときに、高専の学生に、夏休みに特別なゼミを設けて、これに単位を与えるようにしよう。夏休みの一ヵ月間、全体で使っているお金は一万円だけ。それを使って、木更津ですら房総半島を野宿をしながら歩け。そして、いたるところでボランティアとして役に立つことを、どこかのお百姓さんの手伝いをするとか、漁師さんが魚をとるのを手伝うとか、やれると思うことをやってみる。帰ってきて、何をやったという報告を書かせよう。そして、これで単位を与えようじゃないかという話をしたんですけれども、実現しませんでした。

一同 アハハハハハ(笑)。

西田 私は、「いつてみて、漁師の世界のあんな汚いところで自分に何ができるかとやってみたら、いかに自分たちがやっている学問というものがまだ実社会に遠いものかということがしみじみと分かる。もっとこの学問をやってみようという気になるだろう。どこかの家の軒を借りて寝たりしてみるのもおもしろいじゃないか」と。先生方が賛成しませんでしたね。

伊藤 小中学校はちょっとバーチャルな感じでいいと思うのですけれども、高校くらいになったら入れ子みたいな形をもっと積極的に推進したほうがいいんじゃないかな。

西田 この頃はボランティア活動に単位を与えとかいっているけれども、あれも形式的になるとどうしようもないですからね。むしろ墮落してしまうかもしれません。さっきの中教審の人々がいった一遍世の中へ出してしまおうという思想は決しておかしくないと思う

のです。本当にしみじみと先生方はそういわれました。そうせうに学校へ入れて大学院まで上げちゃうというのは青年にとって物凄く不幸なことじゃないかと。一種の軟禁状態ですよ(笑)。だからおしまいは、大学で何をやりたいのか分からないで、大学に何をしに来たのかなんて、そこから疑問を持ち出すわけでしょう。分からんはずですよ。生きた世の中で自分で困難に直面してないのだから。学問というのがどんなに尊いものかという経験がないわけですね。

伊藤 大学にいったら今度は実際の、どうやって大学の教員になるかとか、非常に現実的な問題ですよ。先生のご機嫌を損ねないようとか(笑)。

所澤 しかし、それがバイトに流れていくのがどうなんですかねえ。今の大学というのは本当に、学生は空いている時間は全部アルバイトしているんじゃないか。

伊藤 いや、空いている時間に学校にきて勉強しているんじゃないかな(笑)。

四六答申というのは大変すばらしい答申だといわれていたのだけれども、じゃあ、どこまで実現できたのですかという問題が最後に残るんですよ。またこれ、同じ審議会をやったら同じことになるかもしれませんね。

■教育改革を阻害する要因について

西田 それで、あとの資料で説明を申しあげますけれども、結局、答申が出て半年たないうちに、あれは実行できないという雰囲気になってきました。例えば、答申の大事な一つの柱として、新しい教育制度をつくるための研究開発というシステムをつくれ。そのた

めには文部省自体の中にそれを推進するセンターをつくれという形で、「教育研究開発センター」というものがある局のなかに作った。そうしたら、僕らの中教審の担当をしていた仲間の一人がその室長みたいにされたのですが、私を訪ねてきて、「先生、私は上の局長からおまえは仕事をしていたかんといわれました。どうしてでしょうか」と。物凄い役所の中のレジスタンスがあるわけですね。逆にいえば、天城さんを大将として西田があんな夢物語みたいな答申を出して、あんなものにまっとうに取り付いたら、あとで収拾がつかなくなる。教育改革なんてうっかり乗ってはだめだという形で、そういう賢い人は、「あんまり仕事をするな」という。それが半年ぐらいでつぶれました。だから、研究開発という仕事はついに日の目をみなかった。

Dの資料は、私の自筆ですが、その日付にありますように書いたのが四十七年九月七日でしょう。四六答申が出て一年ちょっとですね。この頃にはにっちもさっちも動けないということになっていた。これはなんでつくったのかと昔の日記を調べてみました。一九七二年の五月七日に晩の六時から九時にホテルニューオータニで、香山健一君がそのときの内閣の審議室か何かの顧問みたいになっていて、そこから、「一遍、なぜ中教審のあれがうまくいかないのか今の状況を聞かせてくれ」といつてきまして、そこへ説明にいくときにつくった資料なんです。だからその表題にありますように、「教育改革を実施する上での問題点と戦略」と。

いま当面見ていただくのは、「答申による教育改革を阻害する要因」として、教育改革というマクロの政策論というのは国民一般に非常になじみにくい。答申を提案していることのその意味の必要性が理解されない。これは私はしみじみ感ずるのですが、放送大学をつくるときに国民一般に調査したら、教育に対して関心は非常に強いのです。しかしその関心が強いことの意味は、人間形成が大切だ

とかいう話ではなくて、うちの子どもが上の学校へ上がれるか。手前の子どもの成績がどうなるかとか、入学試験がうまくいくかということについての関心は強いですけれども、審議会がいうような教育政策としてのマクロの問題というのは一般の人には非常に縁が遠くて、しかも言葉が抽象的で、カリキュラムがどうだとか、学習指導要領がどうだというのはほとんど分からないわけです。だから、中教審が何をいつてみたって一般の人たちには分かりにくい。

二番目には、政府および中教審に対する不信と反感から、政府が主導する改革というものを危険視して、原理的、手続的、付随的な欠陥をあげて改革の着手を阻害しようとする。これは特にジャーナリズムやいろいろな文化人が、政府のやることはろくなことがないと。これはやはり敗戦の後遺症ですね。そういうことから非常にそれが強く出てまいりました。

三番目に、教育関係者の中に改革に伴う既得権の剥奪、未経験の事態に対する不安から、さまざまな理由によって現状維持をはかろうとする。特に一番覚えていますのは、幼児教育の改革を世界的にあの当時の課題としてやろうとしたのは、四歳児の幼稚園から小学校三年までをくっつけて、四、五、六、七、八と、これの幼児学校をつくったらどうだと。これは幼稚園教育と違った新しい幼児教育の解が出せるのではないかと提案したのです。これは小学校や何とかはもうとんでもないでしょうね。明治以来一〇〇年間、俺たちは六年間でやっているんだ。下のほうをむしりとられてはだめだと、そういうことをいうわけです。四、五、六は上の中学校とくっけてもいいわけですからね。そういうことは小学校校長会の代表が真っ向から、審議会の委員になっても反対をいつてきたりしてね。だから、既得権というものがあることと、慣れていない未経験なこととはやりたくないという。教育者というのは非常にそういう点は保守的です。

最後に、教育改革という長期の政策を推進する政治体制が整わない。行政当局も当面の困難な仕事に手を着けたがらない。中教審のいつているような百年の計という教育問題を取り扱うときに、それを本当に試みようとして一つのシステムが政府の中にしっかりしていなければ、文部大臣なんてくるくるかわってしまいうし、いつていたことが一貫していかないわけです。

伊藤 こういう中教審の答申が出てくるということについて、自民党の文教部会とか、そういうところはあまり関心を持たないのでしょうか。

西田 断片的には、幼稚園の義務教育はどうなったとか、高校全入がどうなったとか、世間的なテーマで関心を持つ人はおりますけれども、答申が真っ向から取り上げているようなわが国の将来の教育のあり方というのは一般の議員さんに分かんでしょうね。唯一強い反応があったのは、初中教育の答申の根幹の一つが、能力適性に応ずる個別的な教育という問題をしきりにいったわけです。あとの臨教審がいったのではなくて、中教審自身がそういう教育の個別化をやれといった。そのときに共産党のご婦人の議員さんから呼ばれまして議員室にいきまして、「文部省は差別教育をやれというのか」というのですね。個性に応ずる教育というのは差別教育だと。ご婦人だったものですから、私は、「先生、ではこういうようにご説明しあげたらお分かりいただけませんか。私は子どもが三人おります。同じ親から生まれて、長男と次男と三番目と、みんな好みが違うのです。うちの女房が何に苦労しているかといったら、同じ献立の飯を出して、『さあ、食え』といったのではだめなんだ。この子はなんとしても魚が嫌いだから肉を食わせよう。体につけなければならぬものは、たんぱく質が幾らで、ビタミンが幾らで、これは厚生省の栄養基準で決まっている。このレギュラーなものを破ったら体がもたない。それはきちんと守らなきゃならぬけれども、さ

て食わせるときにはどういう味付けをして、どういう材料を選ぶかというのは、女房は朝晩それに苦労しているのです。それを子どもに対する差別だとは私は決して思いません。それぞれの子どもが喜んで一番食えるような食べ物にしてやるというのが目的なので、同じ献立を立てることではないでしょう」といったら、「あなたのいうにいつてくれればよく分かるね」と（笑）。ご婦人にはそういう説明をしました。だから、カリキュラムというのは一定の基準性が必要ということは今の栄養基準表と同じですね。それを無視したら体がもたない。しかし、だからといって同じ献立でいいか、同じ味付けでいいかということは違う。一人ひとりに好みや本人の体格に合わせて栄養を考える。一八〇〇カロリーで、たんぱく質で何グラムなければならぬという最低の基準というのは、これは学習指導要領でそれを決めているはずだと思います。学習指導要領は要らない。全部自由にやれ。これはもうめっちゃくちゃなんです。栄養学を無視して飯を食えというのと同じですよ。

伊藤 まあ、必須科目と選択科目みたいな話ですね。

西田 基準というものと個別化というものが矛盾する概念ではなくて、それを両立させることが本当の教育なのだということがなかなか分からない。国会に呼ばれてしみじみ感じたのはその一回ぐらい。ほかは、代議士さんの教育問題というのはやはり、頼まれているあの子の大学入学がうまくいくかどうかということだね。ろくでもないことをいつてきますよ。この大学の新しい認可を文部省はなんとか通してやってくれとかね。

伊藤 文教族の人たちというのは、この頃は誰ですか。

西田 文教族で国会で私が印象に残っているのは、自民党にはいろいろな派閥がありますが、三木（武夫）さんの三木派というのは非常に熱心な人がたくさんあって、あとで総理になった海部（俊樹）さんとか、河野洋平とか、ああいう文教族のなかでやっていったよ

うな人が三木派にはおりました。三木さんは夏休みに自分の派閥の若手の代議士を全部連れて軽井沢で内部研修会をやり、あるときに私は教育の話をしてくれと呼ばれていったことがあります。海部さんとか西岡〔武夫〕さんが私の下で講義を聞いていましたよ（笑）。

伊藤 西岡さんは確かに間違いなく文教族ですね。

西田 海部さんも文部大臣になったでしょう。

伊藤 なりました。

西田 河野洋平とかね。

伊藤 西岡さんとか藤波〔孝生〕さんとか、そのへんが一番の親玉。

坂田〔道太〕さんがちょっとその上に位置する。

西田 永井道雄が文部大臣になったというから、とんでもないやつがなったと思ったら、三木さんがあの人を文部大臣にしたのですね。

永井氏が三木さんが呼んでいるからといって、渋谷の三木さんの自宅へ永井道雄と一緒にいきました。三木さんが、「中教審でいろいろ書いてあるけれども、教育をよくするには何が一番大事なのだろうか」と。三木さんというのはまじめな質問をされる人ですね。審議会でいろいろいっています、特に初等、中等教育で何が大事かといったら、一言でいえば立派な先生をつくるということでしょうね。先生が立派であるかどうかで、あとは教科書がどうかとか、校舎がどうかとかというのはどうでもいいような問題だといったら、

「そうだろうな。じゃあ、いい先生をつくるにはどうしたらいいんだ」というので、それには中教審が三つのことをいっていますと。

一番に、教育というのは非常に難しい仕事ですから、少なくとも平均水準よりかなり高い知能水準を持っている人が来なければだめです。そういう能力的に優秀な人というのはどこにでもいってしまから、それを教育界に引っ張ってくるためには、あんな安い月給ではばかばかしくていけないというのでは困る。だから先生の月給を上げることだと、中教審はそういっているわけですね。中級公務員

よりも三割高くしろといっているわけです。計算してね。じゃあ、月給を上げたら先生はみんなよくなるのかといったらそうじゃない。それで、教育ということへ入ってきた人に、教育はそんなに難しいのだ。教師をやったら一生の勉強なのだと。それを勉強しようと思ったら、自分の本職をしばし離れて勉強できるという制度をつくらなければいかんというので、再教育のあり方を提案しましたね。大学でね。そうすると、月給が上がって勉強ができるようになったら人間というのは勉強するものかという、そうではない。そこは性善説ではない。人間というのは、勉強しようがしまいが同じように、「先生、先生」と持ち上げられていると勉強しなくなる怠け者だ。勉強した者は地位も月給も上がるようにする。そのためには、先生は一色ではなくて格付けしている。大学には教授、助教授とあるじゃないか。あれで格付けしているということはおかしくないだろう。小中学校の何十万の先生も上級教員というのをつくって、ある資格を持った人を上級教員にして、地位も高いし、月給も高い。そういうリーダーシップをとる先生が一つの学校に二割ぐらいおれば、学校全体の教育がかわるのではないか。だから、月給を上げること、勉強すること、それから地位・待遇を差別すること。これが日教組が一番嫌ったことです。

一同 アハハハハッ（笑）。

西田 それを真っ向からいったわけです。あの答申の中の三番目だけが実現しなかったのね。一番目と二番目はやったのですが。それは今でも間違っていないと僕は思います。

伊藤 そうですね。

西田 そうやったら、「俺の学校の先生は上級先生じゃない」といって親がひがむだろうという（笑）。そうしたら、みんな勉強してなればいいのですからね。

所澤 しかし、日教組が反対するにしても、やはりこちらの阻害要

因の三番目に書いてあるように、教育関係者もかなり反対するのではないかと思います。そのせいか、現在の様子を見ると、教育関係者があまり教育改革の議論のなかに入れないような形で改革の議論が進むような展開ですね。東京都の教育改革が特にそういう形で、教育委員会の外から改革を促すような形が行なわれているようです。先生のこれを見て、なんかそういうふうな感じが。

伊藤 それは官僚制度の改革に官僚を入れたらできないというのと同じですよ。

■進学率の傾向の分析

西田 このA B C Dという資料はまた機会があったら細かくご説明しようと思うのですが。きょうはAのところを概略を説明しようと思っております。Cは、五十一年にシステム開発研究所から人がやってきて、中教審がずいぶんシステムティックにいろんなことを諮問を受けてやられたので、あのときの結論を出すまでの全体の動き方を詳しく聞きたいと。「政策形成活動の要点」という、ここに書いてありますように、諮問事項の準備はどういうことをしたか、審議会の委員構成はどうした、しかもそれを審議会の中でやったのと外でやったのと分けて、私がやったことをずっとその当時の記憶によってまとめたわけです。

最後のページに、「政策形成過程に重要な関係がある幾つかの要因」という事項で書きましたが、企画室というものが非常に大事だったということと、官房審議官というのは私のことですけれども、私が二年間民間の会社におったということが関係あると申しました。第一段階の審議で、内部効率、外部効率、財政効率などという観点を何で考え出したのかというと、私が会社におるときに、一つの会

社をよくしようと思ったかどうか。生産会社だったら、まず生産部門がどうなっているか現場の製造部の意見を聞くらう。その次は、できた商品を世の中に売るときに世間がどういっているだろう。これは営業部ですね。内部効率と外部効率。それ以外に会社をよくするときには経理部長を呼んで、一体うちの金は足りるのかと。だから、内部効率、外部効率、それから財政効率というのは会社だったらあたりまえのことなんですね。製造部長、営業部長、それから経理部長、この三者の意見を総合しなければ会社の改革はできないわけです。ところが、教育の世界では経理部長のことをいつも言っておらんわけです。それを一遍やろうというのがこの中教審です。私はそのことがわりあい自然に出てきたわけです。O E C Dで習ったのは内部効率と外部効率だけですからね。

伊藤 僕がこれをいまちょっと読ませて頂いて、「文教政策の特質に由来する政策形成上の問題点」の三、「政策対象の特異性」というところです。「公教育は自由競争の危険負担もない公的独占事業であり、制度的・財政的に国の役割が大きく、その政策は全国百七十万人の学校関係者に直接影響を及ぼす」という見方ですね。これは公的独占事業だというふうに、今まであんまりそういう直接的な言葉で聞いたことがなかったもので、これは非常におもしろいなと思って読ませて頂いたのですけれども。

西田 これは私が民間の会社にいたからです。初めから役所に就職していたら、そんなことはあたりまえだと思っていました。民間の会社において、株式会社で経営困難で破産して、後始末までしなければならなかった。一つの事業をやるといことはどんなに危険負担が大きくて、人との競争によって負けたらつぶれるのだと。役所に来したら、金の使い方について誰も注文をつけないし、金は大蔵省にいつもらえばいいんだということでしょう。まさしく親方日の丸そのものだ。国公私立あるようにすけれども、実はその事業と

いうのは、システムが決まっています、公の支配を受け、公の援助を受けなければやれないようにできているわけです。だから公的独占事業になる。そうでないのは予備校ぐらい。

伊藤 最近も私立の大学がつぶれていますけれども。

小池 広島でも大学が一つつぶれました。

伊藤 でも、国立大学はつぶれる心配はない。やはり政策対象の特殊性というのは非常に大きな問題ですね。

西田 Bは先ほどおしまいのところだけをちょっと引用しましたね。伊藤 これは「学習院学内研究会での説明資料」と書いてありますね。

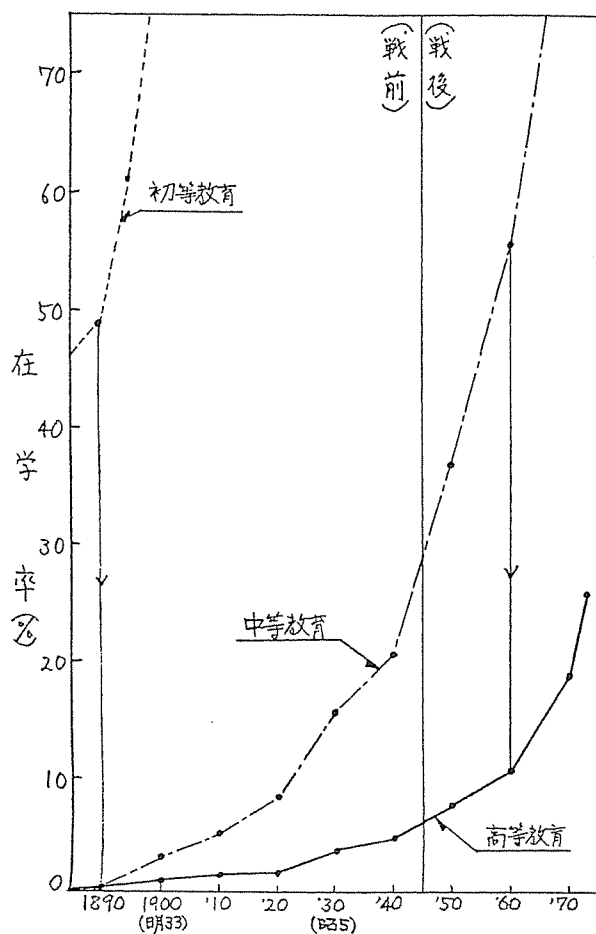
西田 Bは、今の香山さんとのつながりがありましたが、香山さんが学習院の教授になったでしょう。五十一年、五年たっていますね。学習院のほうから中教審のときのことをもう一度学内で勉強したいからというので、学内の有志の法学部の教授なんかが集まってきたところへ持って行って説明したのです。主として高等教育だけに絞って書いたわけです。

高等教育の在学率上昇の要因分析をコンピュータで成分分析という方式をやって、どういうファクターが押し上げてきたか調べてみました。戦前と戦後で、I「均衡発展成分」というのは、初等、中等、高等と、三段階があるバランスをとっていいこうという一つの傾向があるというのが第一の要因で一番強い。「段階的發展成分」というのは、下のほうが充実したら上が伸びてくる。ここへグラフを書いてありますね。このグラフ（次ページ上、参照）で非常におもしろいと思ったのは、初等教育が、政府が一所懸命義務教育を普及しようとしてもうまくいかなかったけれども、それが五割を超した瞬間から、いくほうがあたりまえだということになってグッと増えた。私はそれを雪崩現象といっています。初等教育があたりまえになったら、今度は上のほうへいくといって中等教育を押し上げて

いく。中等教育が五割を超したら、大学教育へ今度は圧力がいく。そういう雪崩現象が起こる。こういう段階發展の下から押し上げる要因が二番目に強い。それよりもファクターは弱いのですけれども、三番目、四番目にもおもしろいのがあった。戦前、戦後全体を通じていえば、「学歴指向成分」、つまり親が経済的に豊かになったから俺の子どもも大学へやろうかと、お金にゆとりができたから上の学校へやろうかという一つのファクターが働いている。それは戦前戦後を通じて全体的にあるのだけれども、特に戦後に顕著に見られるのは、金があるからいこうかというファクターよりは、「現状離脱成分」という、親が金がないほど大学へいかせようとする。親のゆとりがあるからいかせようかというのと逆に、生活が苦しいから、親の暮らしを抜け出させるようにという違ったファクターが特に戦後は強く効いている。

伊藤 それはどれに示されているわけですか。

西田 そのファクターは、この表（次ページ下、参照）の中で、親の一人当たりの国民所得だとか、父の年齢、母の年齢、在学率、これだけのファクターを使って、進学の上昇というファクターとどういう関連性があるかを調べ、その中から出てきたファクターをどう意味をつけて解釈するかという成分分析というやり方をやりますと、ある時期の伸び方の中で、親の一人当たりの国民所得自体が高くないのに、それが下がっていくような状態のなかで進学率が上がっているというようなファクターが出てくるという分析が出てくるわけです。ゆとりができたからいかせるといふのはもちろん強く出てきますが、その逆が出てきておもしろいですね。父の就学年数が高いほど高いかというそうではなくて、戦後は母親の就学年数が少ないほど多い。お母さんが学校へいっていない人ほど、男の子や女の子の……。特に女の子の場合は偏相関がマイナス〇・九四でしう。



高等教育在学率の各変量との偏相関係数

変 量		戦前・戦後 (1885~1965.5年毎)	戦 後 (1950~1965.5年毎)
男 (α_1)	α_2 中等在学率(%)	0.01	-0.54 *
	Y_1 父の修学年数	0.00	0.08
	Y_2 母の "	0.03	-0.40 *
	Y_3 生産年齢人口	-0.07	0.37 *
	I/N 1人当り国民所得	0.39 *	0.59 *
	E/I 教育費比率	0.05	0.00
	E_2/E 初中教育費比率	-0.04	-0.14
	重 相 関	0.98	0.99
女 (β_1)	β_2 中等在学率(%)	0.60 *	0.62 *
	Y_1 父の修学年数	0.26 *	0.86 *
	Y_2 母の "	-0.30 *	-0.94 *
	Y_3 生産年齢人口	-0.13	0.93 *
	I/N 1人当り国民所得	0.00	0.81 *
	E/I 教育費比率	-0.05	-0.54 *
	E_2/E 初中教育費比率	0.03	-0.06
	α_3 男子在学率	0.63 *	0.45 *
	重 相 関	0.99	0.99

伊藤 あんまり関連がないということですか。

西田 いや、逆の強さ。

伊藤 マイナスというのは逆の意味ですか。

所澤 自分の就学年数が低いから就学年数を高くしたいのですね。逆向きだということですか。

西田 お母さんの学校へいつている経験が少ないほど娘をたくさん学校へやるのです。おもしろいものですね、出てくるんですね。戦後は父親の学歴も〇・八六でかなり強く効いていますね。それと、単一のものだけの相関をとったのがこの偏相関というやつですね。だから、*印のついているのはかなり強い相関で、生産年齢人口が増えてきたから女の子も学校へたくさんいくようになったとか。男のほうが上に三つありますね。やはり母の就学年数がマイナスで出

てくるでしょう。それから、一人当たり国民所得は増えたほどしている。〇・五九。そういうのはありますけれども、やはり男と女とだいたいそのへんの効き方が違ってきている。こういう個別な項目との相関はこれなのですけれども、それを総合した場合にどういうファクターが進学率を押し上げたかということの成分分析の手法があるわけです。そういうコンピュータソフトを使って統計課にやらせたら、下のような形で現状離脱成分というのが(*)。これの詳細いのは、また後日、新しい発見のところでご説明申しあげます。

* 高等教育の在学率上昇の成分分析

戦前・戦後 — I (均衡発展)、II (段階発展)、III (学歴指向)、

IV (現状離脱)

戦後 — I (均衡発展)、II (段階発展)、III (現状離脱)

伊藤 今の分析というのは四六答申のときになさったのですか。

西田 四六答申の先ほどの外部効率のときに。国民の教育需要と教育の機会というもので、進学率がどうなってきたかという傾向の分析をやったわけです。そのときにこういうこともついでにやっただけです。そして、そのときにももしろいのは、明治以来一〇〇年間の間に、男子の学校へいった平均就学年数と、女子の平均就学年数の差が常に一定である。つまり、男性がいけば、それとつり合ったお嫁さんになるためには女の子も。一〇〇年間の分析をやるのは文部省のデータしかないですね。各年度の平均就学年数を出せるわけです。その相関を見たら、ほとんど差が一定なんです。男が大学へいきだしたら、女の子は短大へいきたい。そういうように、やはり性別の配偶者意識というのがあるのだということ。

伊藤 そういうのはやはり、分析してみても新しい発見ですか。

西田 ええ、初めて分かります。

伊藤 その要因をまず選択するというのは勘ですか。

西田 成分分析というのは、どういうファクターの絡み合いで効いているファクターがあるかということは、その成分分析の手法でやりますと、第一要因、第二要因というのが出てくるわけです。第一要因はこれが高くてこれが低くて、その組み合わせだと。この要因をどう解釈するのかというのは解釈の問題になってくるわけです。

伊藤 要因自体は。

西田 要因自体はコンピュータの進学率ののび方というんなファクターの相関関係を。

伊藤 でも、そのファクターというのはまた選ばなければならぬわけでしょう。

西田 ええ、それは選べるファクターとしてはこれだけのものしかなかったわけです。

伊藤 ああ、データですね。

西田 年齢なんていうのは文部省のデータで出てくるのですけれども、このときに一番困りますのは一人当たりの国民所得ですね。これは調査課の連中が往生したのです。明治、大正、昭和を通じて、その貨幣価値の変動をどう修正するか。経済企画庁のいろんなデータを使ったり。こういう分析の手法は、ありがたいことに文部省に統計数理研究所というのがあるでしょう。その林先生なんか相談すると、手法としては幾らでも文部省に知恵があるわけです。百年間の経済指標を統一的に見るなんていうのは、経済学者から見ればむちゃくちゃですけれどもね。だけれども、それをしゃにむにやっただけです。

所澤 このデータはそれとかなりいろいろところで紹介されたのではないですか。僕が教育学部の大学院に入った頃（一九七九年）に、この母親の学歴が少し低い短大くらいのほうが子どもの教育に熱心だというような話は大学院の授業で聞いた印象があります。

西田 清水義弘さんが専門委員に来てくださった。この審議官に出てデータをもらうと、一年分の講義の資料だと（笑）。だいたい教育学部の人にはサービスしたはずですよ。

所澤 僕は東洋先生から聞いたと思うのですよね。ま、はっきりどの先生だったか憶えているわけではありませんが。

西田 東さんも専門委員に入っているでしょう（笑）。だから、決してマイナスではなかったわけですね。

最後に「参考」と書いてあるのは、電電公社はその後変わりましたね。実はその前に、やはり昭和四十八年頃に電電公社の将来計画を考える上の政策立案をやりたいということで専門家を外部から呼んで委員会をつくったわけです。税制調査会長をやっていた加藤寛さんがおられたでしょう。彼が慶應の先生で、文部省から中教審の西田を呼べというわけです。一二名くらいの委員会をつくって、政策

立案という問題についてのいろいろな経験を討議しようという形で、中教審を一つの材料にして議論をしたいからその材料を出してくれといわれて、書いてそこへ出したものなのです。だから中教審の名前は出ていませんけれども、私の経験からいって、行政という形で、先ほどの独占事業ですね。電電公社もそういう傾向がありますから、そういう領域における問題をやる場合に、政策形成過程としてどういう問題で苦労したか。政策目標の設定と政策手段の選択。それから、決まったやつを世間に提示して一般庶民の理解を得たり、関連施策との調査をやったりする。国民的合意をつくる。そういうことが難しいのだ。それから、最後は政策実施過程ですね。地域的な適応。実施成果の評価。こんなような形で私どもはこういう点で苦労して大変難しかったということを書いて出した。これについて第一回で議論をして皆さんから出た意見を、三枚目のところに未完成ですが前回討議の示唆として、これについてこんなことを皆さんから言われたというのを書いたわけです。実施計画の合理的設計をやるためには、そこにシンクタンクによる戦略的な行動計画が必要なので、それがなかったと。右のほうに参考事例として、東京都のごみ戦争とか、あの当時問題になっておりました背番号制ですね。それから原子力発電のこと、中教審の教育改革、こういう行政上の大問題がありますと。大学管理法の問題もそういう格好で行き詰ったわけですね。こういう課題をやるときには、こういう段階でのいろいろな難しい問題がありますということを議論したときの資料が出てきましたので、ご参考にと。

伊藤 これはもう一度お話しただきたいくらいの感じですね。

西田 これは政策研究大学院ですからね、おそらく皆さん政策研究というのは興味をお持ちなのではないかと。電電公社がこれをやっておったのですよ。

伊藤 そのメンバーになったわけではないのですか。

西田 いや、政策研究会を電電公社がつくって、そのメンバーに私が入って、半年間くらい加藤寛さんと数名の人とやったわけです。そのときに、メンバーである私に、「あなたは中教審をやったのだから、その経験からメンバーを出してくれ」と。これはそのときのディスカッションメンバーです。このなかには間接的に私が困ったこととか、こういう点でこう考えたとかということが書いてあるわけです。だから、先生方には違った意味で政策研究のご参考になるだろうと。中教審の答申を見てもこれが出てこないわけですけどもね。政策提示の過程とか、実施の過程の問題があるわけです。そういうことで、今後のご研究の参考になれば幸いです。こういうのもおもしろいでしょう。

伊藤 これは凄くおもしろいですね。中教審のお話をこの次にもう少し詳しく伺うとして、やはり参考としてこの話もしてください。

西田 きょうはAだけをやるつもりだったのが大体時間が来ちゃったのだけれども、全体を申しあげたので、この次はAを中心に中教審の答申の中身を申しあげていきます。それで余裕が出ればこちらのほうへ移っていった。先ほどの答申の中の大事な要因、発見は、別途またペーパーをつくってきます。それがまた答申のエッセンスのいいところですから。先ほどの成分分析とかいろいろなことがありますから。この中に、企画室長の犬丸君がこのときに明治百年の勉強をするのだといって、文部省の中にたまっている過去のいろいろな答申を全部調べてくれました。最大の発見は、明治以来さまざまな審議会をやってきたけれども、教育はどうあるべきかという教育の目的論については山のように答申がある。その目的を達成するためにどうやるかという教育の方法論に対する答申は一度もなかった。方法論なき教育論というのはまさに無であるということをお我々はしみじみ感じました。国民精神の作興だとか、この前の臨教審もそうでしょう。個性の尊重とかいっているのですよね。だけど、個性を

尊重する教育というのはあしたからどうやるのだということを誰も
いわんわけです。「よく考えろ」というだけです。そうすると、
現場の先生は、「そんなこといわれたって」といって、きのうまで
とそう変わらんですよ。そういう点でしみじみ感じましたのは、教
育改革という場合に、本当はその目的に向かってどうやったらい
かという方法論が開発されなければ教育というのは進歩しないわけ
です。目的論の議論ばかりで、親孝行は大事だとか、国民精神の作
興だとか、愛国心だとか、そういうことはしょっちゅういっている
わけですね。過去の文部省の審議会というのは、そういう理念的な
目標を掲げることばかりで、その実現についてどうするかという答
申を何もしていない。それが今度の中教審で新しい先導的試行によっ
て研究開発をやれといった最大の理由なのです。

もう一つ犬丸君に調べてもらったのは、入試改革というのは明治
以来繰り返しやっているけれども、ほとんど同じことの繰り返しだ
と。客観的評価が大事だといってしばらくやっていると、これでは
人間の値打ちは分かんたといって面接をやったり、作文をつくらせ
たりしている。やっているうちに、これはあまりにも恣意的で客観
性がないからと、ほとんど進歩がない。

伊藤 名前は変わっているのですけれども、やっていることはその
繰り返しですね。

西田 ライシャワーさんがいったように、潔い一本勝負、あの説明
が一番正しい。きょうはこんなところでよろしゅうございますか。

伊藤 はい、ありがとうございました。

西田 亀久夫 オーラルヒストリー

第8回

日時：2003年2月27日

14:00～16:15

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊 藤 隆（政策研究大学院大学教授）

小 池 聖 一（広島大学助教授）

所 澤 潤（群馬大学 教授）

村 上 浩 昭（東京都立大学助手）

■「教育改革のための基本的施策」

西田 ずいぶんここに付箋をつけておりますが、これ『今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について』以下、原本答申書』のなかから事項を抜き出してみて、これ〔資料「中教審四六答申の『要注目点』について」以下、答申要注目点〕を皆さん方に。妙な表題ですが、四六答申の「要注目点」といいます（笑）。

伊藤 いや、よく分かります（笑）。

西田 私の主観的なことでたくさんの方が書いてありますが、このところは将来のためにもやはりかなりいいのではないかと思います。答申は、おそらく発表されたものとしては、一般には薄いこれ『教育改革のための基本的施策』以下、抜粋答申書』しか出ていない。これ〔原本答申書〕が本物です。

伊藤 これ〔原本答申書〕は答申そのものでございますか。

西田 答申そのものです。

伊藤 これ〔抜粋答申書〕は答申の要約ですか。

西田 ええ、そのときにこれ〔原本答申書〕をPRするために。これ〔原本答申書〕の大部分が文献資料の付属品が多いですね。そのところはのけて、一番主文のところは全部載せてあるわけです。ですけれども、前期の二年間の多少実証的な検討という部分の具体的な点は全部省いてあるわけです。ですから結論だけ書いてあるというわけです。

伊藤 タイトルはもちろん違う。

西田 同じものです。

伊藤 「教育改革のための基本的施策」。

西田 ええ、それを短くしてあるのですが、ここ〔下の部分〕には同じものが書いてあるわけです。これ〔原本答申書〕を要約して書いてある。

伊藤 答申自体は、「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」。

西田 これが諮問の本当の表題です。

伊藤 そうですか。それに対する答申ということでございますか。

西田 ええ。こういう長たらしいタイトルになったのは、この前申しあげたように、何をやるかということ考えたときに、幼稚園から大学まで全体だと。しかも、明治百年記念でとにかくゆっくり時間をかけてやってくれと。

伊藤 これ〔原本答申書〕は大変なものですな。

西田 何百ページあるでしょう。

伊藤 六三三ページあります。

西田 これの三分の二は結論を出すために使ったドキュメントです。私らがこれに取りかかる前に、確か「ロビンズレポート」といったのですが、ちょうどイギリスが教育改革の報告ですべての検討資料の文献を全部くっつけたものとして出している。やはり、ああいうように結論が出てきた元になるものをちゃんとつけなければ、後足で全部足跡を消してしまったような答申というのは、後で何とでもいえるというのでこれにしたわけです。こんな答申はおそらく文部省で過去にもこれからもなかったと思います。

伊藤 これは英訳されなかったわけですか。

西田 この前半の二年間に、第一段階で過去の一〇〇年間の検討をしました。その部分だけができ上がったところで、例のOECDに討議資料で取り上げようということになって、全部英訳したやつをつくって、そして向こうの会議に出したわけです。それが基礎になって日本の教育政策についてのディスカッションが起こった。

伊藤 それの元なのでですね。

西田 その後半の最終的な政策のまとめというのはそのあとにやったわけですね。ですから、この前プログラムでお話ししたように、第一段階というのがこの三つの委員会がバースと走って、最初の二カ年かけて過去のレビューをした。第二段階が、三年目に入って答申の主文のまとめに入る。初中局と大学局の両方をまとめました。最後に最終段階として、四年目にいわゆる総論とかすべてのところを全部やったという格好になっています。きょう持って来ましたプリントでちょっと見ていただきますと……。

伊藤 では、後半の部分は英文にはなっていない。

西田 英文にはなっていないですね。きょう、冒頭〔答申要注目点〕に第一段階と書きましたのは、最初の二カ年間で、二十一、二十二、二十三という三つの特別委員会が、内部効率、外部効率、財政効率、この三つを担当して二年間でやったときのものが第一段階。これは要約されたこれ〔抜粋答申書〕には載っていません。したがって、これ〔原本答申書〕のなかの場所を引用するために、右側にP292と書いてあります。私はこれ〔原本答申書〕が手に入らなかったのを、私どもの関係している研究者の方がコピーをつくりたいということで、これ〔原本答申書〕のコピーをつくったのを一部差し上げましたね。それが元なんです。ですから、現物を見るとすれば、これによってやらないと第一段階のところのデータは全部見られないわけです。言葉としてこういう問題があったということはこれ〔抜粋答申書〕にも書いてありますけれども、出てきた元になる実証的な検討の中心はこちら〔原本答申書〕でないと分からないわけです。

第一ページ〔答申要注目点〕、第二ページの真ん中頃までは第一段階です。第二段階のところで、今度はごらんのように、四十四年と四十五年に、初等教育と高等教育に分かれて二つの委員会が改革の基本構想をやった。これは、当時大学問題が非常に火がついたも

のですから、結果として高等教育が先に結論を出してしまった。そのあとに初中教育。それについて公聴会をやって第二段階をおわって、その次に、四ページを見ていただきますと真ん中に第三段階とありますが、ここで二つの委員会が出したあるべき姿としての基本構想は出たけれども、それは教育のあり方を論じているだけで、政府は何をするのだという政府としてのやるべき基本的施策。それがこの第三段階で四ページの真ん中以下になっているわけです。

審議会としては、第一段階で明治以来のことを全部見直して、どこに問題があるかを出した。その問題を解決するために第二段階で初中と大学に分かれて基本構想をつくった。それはあくまであるべきビジョンを描いただけなのです。第三段階で、それらのなかで政府として何をしなければならんかという政策の問題を第三段階で書いた。きょうは、そこまでのものをつくってまいりました。実は、このあとに最終段階が。今度はもう一度翻って、今後の教育のあり方はどうなんだ、生涯教育はどうなんだというような全体の総まとめの文章、主文の冒頭の第一章全部、それは最終段階でやったわけです。その部分はまだここに書いてありません。それは次回までに用意してまいります。

伊藤 その部分はこれ〔原本答申書〕に載っているわけですか。

西田 もちろん。これの第一章というのはそういうのです。

伊藤 分かりました。

西田 そこにはむしろ、今後の社会の変化によって教育はどう変わるか。学校教育は一体何をすればいいのかというところまで戻ってやっているわけです。そのところが実は、文章が中心ですが、一番骨を折られたところですね。そこへさらに、今後の改革をしていくのに、財政の問題を含めた長期教育計画という計量的な委員会を開いて、その問題も最後につけたわけです。そのへんのところが、実は、最終的な答申が出たあと実施の段階になったらまったく何もな

されていないという一番痛いところですよ。それまではいわば学問的な作文みたいなものですけれども。

■社会的な条件と就学率との関連を調べる

伊藤 では、頭からお願いします。

西田 冒頭のこのところは、結局、これ〔原本答申書〕をときどき見ていただかなければなりません、やったことの最初の第二十一特別委員会は「教育制度の外部効率」と、学校教育制度が社会にどれだけうまく適用しているかという問題をやったわけです。そこで、一番に在学率と経済社会指標との相関分析というのを、ちょうどこの頃でできましたコンピュータで文部省のデータを全部インプットして、いろんな手法については文部省の統計数理研究所の人たちにいろいろ指導を受けて分析をやったわけです。これの部分的な点を少しずつ見ていただきます。

明治以来一〇〇年間、中学校、高等学校、大学というのはずっと在学者が増えてきた。その就学率というものはどういう条件によって増えてきたのか。それは戦前と戦後で一体どういう特徴があったか、学校教育の膨張の度合いをいろんな社会的な指標で見ている。その結果これに出ておりますことは〔表〕「在学率と各種社会経済関連指標（中等教育）」参照、例えば、ある段階までは経済が伸びていったことによって当然増えていったという場合。例えば女子のほうだと、母親の学歴が低いということが逆に女の子の就学率を上げる形に強くつながっていると、国民所得に対して幾ら教育に金を使っているかという割合とか、そういう格好で、社会のいろいろな条件を示している数値というものと就学率との関連をいろいろ調べたやつがここに載っています。これはおそらくその後もやられ

たことがないでしょうし、今後ともこういうものをフォローしていくデータをつくっていけば非常に意味があるのではないかと思うのですが、これは私どものその当時の関係者の努力でできただけで、その後はほとんど進めていないと思います。

伊藤 このへんの在学率というのは、中、高、大学。

西田 ええ。

伊藤 大学という場合は、私立も含めて。

西田 該当年齢人口の何パーセントが学校教育に在学しておったかという比率です。

伊藤 その学校という場合には公教育ですね。

西田 国公立を含めて、正規の学校に在学している人です。

伊藤 今はやっている専門学校みたいなものは。

西田 専門学校は、いま学校教育の制度のなかでは、あれは各種学校でしょうね。各種学校というものは含めていないと思います。明治十八年から昭和四十何年までの全体を見通したわけで、そういう古いところになると毎年やれませんが、五年ごとにデータを拾い上げています。その当時の在学生数を全部統計で調べてやったものから、それでこんなに膨大になってしまったわけですね。

伊藤 現状でいうと、各種学校というもののウェイトがかなり大きくなっていますから、またちょっと違った統計をつくらないといけませんね。

西田 その次に書いておりますのは、今度はそういう在学率に対してどういう社会的な条件が働いたかどうかを調べるために、成分分析という大変難しいことをやっております。これは、実はこの資料のなかで文献資料のところに詳しく書いてあるのですが、その当時、統計のこんな本を買ってきて。これは『多変量解析』という本です。これは、中を開けると頭が痛くなるような（笑）。私も三十年たったものですから、もう一度これを読み直して主成分分析というもの

敬啟者

年 度	男							女							
	在学率	1人当り 国民所得	父 の 平 均 学 歴	母 の 平 均 学 歴	男子生 産年齢 人口の 平均学 歴	教育費	初等・ 中等 学校費	在学率	1人当り 国民所得	父 の 平 均 学 歴	母 の 平 均 学 歴	女子生 産年齢 人口の 平均学 歴	教育費	初等・ 中等 学校費	男子の 中等教 育在学 率
						国民所 得	総学校 経費						国民所 得	総学校 経費	
明治18	0.95%	21,980 円	0.00	0.00	0.52	1.80%	94.2%	0.04%	21,980 円	0.00	0.00	0.15	1.80%	94.2%	0.95%
23	0.61	30,092	0.00	0.00	0.98	1.09	77.3	0.15	30,092	0.00	0.00	0.33	1.09	77.3	0.61
28	1.87	36,320	0.00	0.00	1.52	1.17	78.6	0.16	36,320	0.00	0.00	0.58	1.17	78.6	1.87
33	4.99	41,785	0.01	0.00	1.96	2.05	66.3	0.80	41,185	0.01	0.00	0.78	2.05	66.3	4.99
38	5.19	37,498	0.07	0.05	2.52	2.03	64.8	1.79	37,498	0.07	0.05	1.09	2.03	64.8	5.19
43	6.01	45,028	1.24	0.65	3.23	3.01	67.9	2.88	45,028	1.24	0.65	1.49	3.01	67.9	6.01
大正 4	8.29	54,669	3.55	1.49	3.94	2.47	67.1	4.15	54,669	3.55	1.49	2.03	2.47	67.1	8.29
9	10.54	63,227	4.80	1.96	4.66	2.62	66.8	6.02	63,227	4.80	1.96	2.64	2.62	66.8	10.54
14	15.95	73,323	5.00	2.22	5.42	3.60	62.0	10.69	73,323	5.00	2.22	3.29	3.60	62.0	15.95
昭和 5	18.37	74,328	5.33	2.62	6.09	4.39	61.3	12.98	74,328	5.33	2.62	3.97	4.39	61.3	18.37
10	18.50	95,489	5.66	3.44	6.47	3.68	65.6	14.13	95,489	5.66	3.44	4.58	3.68	65.6	18.50
15	22.95	101,813	6.10	4.53	6.91	2.54	64.2	17.69	101,813	6.10	4.53	5.16	2.54	64.2	22.95
25	45.10	73,970	7.33	6.19	7.77	5.14	72.3	28.53	73,970	7.33	6.19	6.47	5.14	72.3	45.10
30	55.45	108,589	7.62	6.70	8.32	6.09	67.8	42.52	108,589	7.62	6.70	7.19	6.09	67.8	55.45
35	59.28	174,069	8.08	7.24	8.87	5.78	64.3	51.70	174,069	8.08	7.24	7.87	5.78	64.3	59.28
40	72.53	255,068	8.46	7.47	9.37	7.13	55.5	67.33	255,068	8.46	7.47	8.45	7.13	55.5	72.53

(注) 1 中等教育、高等教育の定義は次の通りである。

中等教育……高等学校(新)、中学校(旧)、高等女学校、実科女学校、実業学校(甲・乙)、高等学校専修科(旧)、師範学校予科
高等教育……大学(新・旧)、大学予科、高等学校高等科(旧)、専門学校、高等師範学校、師範学校本科、青年師範学校、教員養成専門学校、教員養成所

2 在学率は各学校種別ごとの学年別在学者の学年を、そのまま相当年齢にあてはめ、中等教育にあっては明治18年～昭和15年は12歳～16歳、昭和25年～昭和40年は15歳～17歳について、高等教育にあっては明治18年～昭和15年は17歳～19歳、昭和25年～昭和40年は18歳～19歳の年齢層について

在学者

人口(4.1 現在推計) %の算出を行なった。

なお、専攻科、別科等正規の課程外に在学する者は在学者から除いた。

3 父母の平均学歴

父・母の定義は、人口動態統計から初婚の平均婚姻年齢、結婚後第1子出生までの年数、同じく第3子出生までの年数を調べ、これに子どもの入学時の年齢(中等教育は15年、高等教育は18年)を合算して、これを父母の年齢とした。

この結果、父母の年齢層は、中等教育では父は44歳～51歳、母は42歳～48歳、高等教育では父は47歳～54歳、母は45歳～51歳であった。そして、この年齢層の平均学歴を合算して算術平均により、中等、高等それぞれの父母の平均学歴を算出した。

平均学歴の算出方法は、各歳ごとの在学率を当該年齢の者の平均在学年数と考え、年の進行につれて、前年の平均在学年数を加算して算出した。

4 生産年齢人口の年齢は、15歳～64歳である。

を見てみて。これは、さまざまな関連した社会的な条件がある。そういうものがどういう絡み合いで進学率を押し上げたかということ調べる場合に、例えば経済がよくなったから増えた、親の学歴が増えたから、それは全部絡み合っているわけですね。それを幾つかの要素に組み合わせて、少ない要素で説明をしようという分析の仕方です。これは非常に説明が難しいのですが、一番よくいわれるのは、洋服を買いにいったら、既製服というものは、A型、B型、A型とありますね。あの型を決めたのは何でやったのかというと、やはりこういう成分分析でやったわけです。その人の体重、身長、首回り、胴回り、ウエスト、さまざまな変数があるわけです。それらのなかから少数のファクターで体格というものを定義する。そうすると、A型の人というのは、背の高さ、それから胴回り、その二つだけで全部組み合わせて大体洋服のタイプが決まる。そういう分

析が洋服なんかをつくる場合にもできているのです。経済の場合もそれをやってみますと、結論としてそこに四つ書いてあります。その分析で、一つは段階発展成分というファクターが出てきた。というのは、いろんな経済とか社会とか親の学歴が絡み合っているけれども、進学率を押し上げていくときに、小学校、中学、大学という、学校段階別のバランスをとりながらそれを膨らしていこうという一つの機能がある。これが、明治以来、戦後まで非常に強く日本で働いている。日本は、ご承知のように、義務教育の就学率がほとんど一〇〇に近くなければ中等教育なんか増やさなかった。中等教育が戦後六割を超えたときに高等教育がふえ出した。その段階的なやり方。これは戦後の後進国なんかではそうでもないのですね。逆立ちしていて、大学からやっているところもあるわけですね。初等教育の就学率はるくにいていないようなところがあるのです。

日本は下からやっていった。そういうのが一番強く働いている。

その次に、均衡発展というのは、経済とか、社会とか、親の学歴とかという、社会のさまざまなファクターと一定のバランスをとりながらやっていく。そういう社会的な条件と均衡をとりながらやっていくという一つの傾向が出ている。

あとの二つは力としてはだいぶ弱いのですが、非常に興味がありますのは、特に戦後、親に金ができたからよい学校へいくという学歴志向成分。金ができたからうちの子も学校へやろうか、大学へやろうかというのが働いてきた時代。これは戦前からもあるわけです。戦前の女子教育の振興なんていうのはそういうファクターで専ら動いている。ところが、戦後に一番顕著なのは現状離脱成分。経済が落ち込んで貧しいから、親の苦勞を子どもにさせたくないから、無理をしても学校へやろうという働きが、戦後においては特に顕著に出てきている。

どの時代にどういうファクターがどのくらい強く出たかというのが、一応ここでは計量的な表として出ております。こういうことは一つの数量的な興味だといえ、それまでですけれども、日本の過去の教育発展というものを、常識的に見ている以上に、多少とも世の中の動きというものと結びつけて解釈しようとした。こういうものが委員会に出てきて、これが今後の学校教育の膨張にどう絡むかということの後で検討することになったわけです。

伊藤 いってみれば裏づけですね。ウェートのつけ方といえますか。我々が日常的にこういうことがあるのではないかと考えていることはかなりはっきり出てきて、その効き方が。

西田 効き方が定量的に出てきているわけです。一番強いのは、しかしそうはいってもバランスということを考えていることで、下の学校が充実しないうちは上はまだやたらにつくらぬという政策的なもの、非常に強く働いておったということは確かだった。やたら

に大学だけをつくるということはやらなかった。

伊藤 本当にそれは政策として意図してやったことかどうかということはちょっと疑問がありますけれども(笑)。

西田 三番目に、「男女学歴の均衡」(図版参照)というのが、これは本文のなかで出ているのですけれども、ここにこういうグラフとして出ています。戦後、急速に学校がのびていた頃ですから、「なんだって女の子が学校へいくんだ」ということをいう人がおったわけです。お嫁さんになるのにそんなにいかになくてもいいとか。なぜ女の子が学校へ来るのかということについての疑問なり、それを奨励すべきだというものがあって、まさしく明治十何年から昭和四十何年まで一〇〇年間くらい、男女別の就学率を調べてみたわけです。その場合に特に、これは意図的ですけども、男は二五歳、女性は二〇歳を中心に調べてみたら、この一〇〇年間の間に男女の学歴差の平均値というのはほとんど一定なのです。これは学歴均衡の一つの、男が大学へいきだしたら、女性は短大にでもいこうかと。短大へいくのなら、高等学校へいこうかと。

伊藤 逆転している時期があるじゃないですか。

西田 これは戦後です。

伊藤 一九五〇年から六〇年のあいだに。

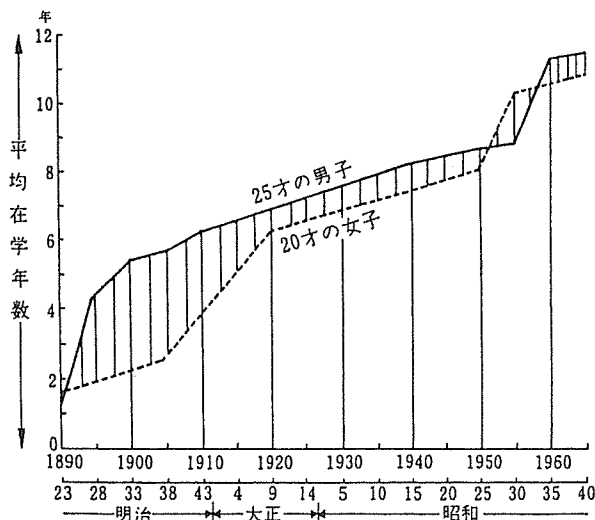
西田 男性のほうが急速に伸びていって、女性のほうが後から追いついているわけです。

伊藤 追いついて、追い越しているじゃないですか。一時期。

西田 一時的にここです。女性の方がこの辺からガンと上がりだしたわけです。ここは戦後でしょう。それまでは、学校の始まった当初は男性の方がいって、女性はなかなかついてこれなかった。ここで追いついた。これからは約三、四〇年ずっと一緒ですね。

伊藤 平行線を辿るということですね。

図I・A-1 男女の学歴の均衡



(注) 資料No. I-6 参照

西田 何だかんだと言っても、要するに男性と女性の適齢期の人がバランスのとれた相手を見つけるため、社会的な一つの均衡がとれているのだろうと。

伊藤 非常に自然にそうになっているわけですね。

西田 これも発見したときは大変おもしろがって、喜んじやった。誰もそんなことは知らなかった。やたらに、「女はなぜ学校へいくんだ」なんていつてみたってしょうがないよね。すべての親の意識の平均値がこうなっているということですね。

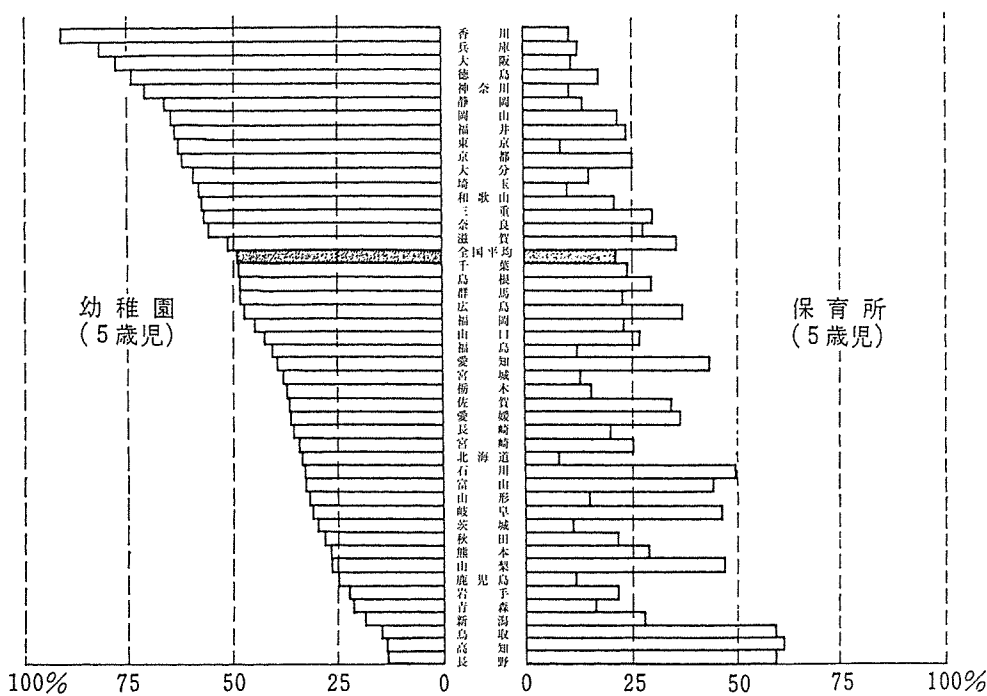
伊藤 おもしろいですね。

西田 これが一つ。その次に上級学校への……。

伊藤 いや、四番目に「幼稚園と保育所の収容率」というのがありますよ。

西田 そうそう、これは九六ページ「府県別幼稚園・保育所収容

図I・A-4 府県別幼稚園・保育所収容率（昭和41年）



(注) 資料No. I-12参照

率（昭和41年）」。幼児教育をどうするかというときに、文部省としては保育所のこととはあまり関心なかったのですが、そのときに初めて一緒に考えなければいけないと統計をとって見たら、府県別に並べてみたら、幼稚園で就学率の多い県から一番少ないところまで順番に並べて保育所をこちらにやると、両方足したら同じようになっているのですね。

小池 ああ。

西田 一番上はどこですか。

伊藤 これは香川ですか。

西田 香川県というのは昔から教育熱心なところで、幼稚園をやたらにつくったのですね。

伊藤 そうですか。兵庫、大阪と続いて、徳島か。突然神奈川が出てきますけれども、大体トップのほうは西日本ですね。

西田 香川県というのは、よく学力調査でも全国でトップをとったりしたことがありますね。不思議に熱心なところなんです。

伊藤 でも、これは長野県でしょう。

西田 一番ビリです。

伊藤 長野県というのは教育県といって……（笑）。

西田 けれども、幼稚園をつくるより、保育所のほうをつくってしまったわけですね。保育所のほうは厚生省が補助金を出すんです。だから、県の財政上からいうと、文部省で幼稚園をつくるのに公立でつくったら県が金を負担しなきゃならない。厚生省から補助金をもらってやったほうが楽だという考え方もあるでしょう。だから、右のほう〔保育所〕はでこぼこですけれども、これが一つのバランスがとれている。

伊藤 一応ですね。

西田 ええ。では、これをもう少し制度として一体的にできないかというのが一つの課題になったわけです。結局、幼稚園は学校だし、

こちらのほうは託児所みたいなもので学歴にならないという負い目があるとともに、幼稚園のほうは、いまいったと思ったら、昼飯を食ったらもう帰ってくるというので、親の助けにならない。だから、幼稚園も夕方まで保育してくれるようにならないかとか、保育所のほうにも学校としての資格を与えるようにできないか。なぜそれがうまく一体的にできないのかというのが課題だったのですけれども、この答申のなかには、かなりそういったことを提案しているのですけれども、役所が違って、答申が出ただけでは、これは何も動きませんでした。

伊藤 ハハハハハ（笑）。しかし、今また問題になっているのではないですか。

所澤 いま凄く問題になっていますね。今は、幼稚園はガラガラなんです。保育園のほうは満杯で、あふれて待っている状態です。

西田 つまり、お母さん方が働きだしたから、幼稚園では間に合わなくなってきたわけですね。

伊藤 いま幼稚園は人集めに必死でしょう。

所澤 そうですね。

西田 毎朝、バスを持ってきて、子どもをさらいにいきますものね（笑）。

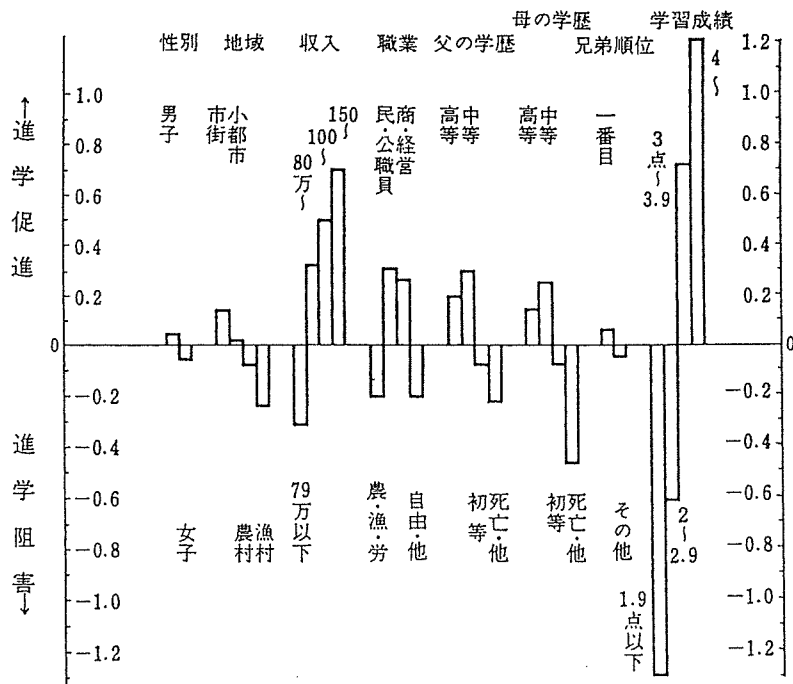
伊藤 そんな感じですよ、本当に（笑）。

西田 私のマンションだって、三種類くらい幼稚園が来ますよ。その次に、これは育英制度と関係があるのですが。

伊藤 進学希望の阻害要因。

西田 これも非常におもしろがってやったのですが。一三〇ページにこういうグラフが出ていますが〔図版「進学に影響を及ぼす諸要因の数量化（昭和43年）（中学校↓高等学校）」参照〕、教育の機会均等なんて気安くいうけれども、実際にみんなが均等に学校へいけているのかどうか、それを計量的に分析してみよう。この手法は、

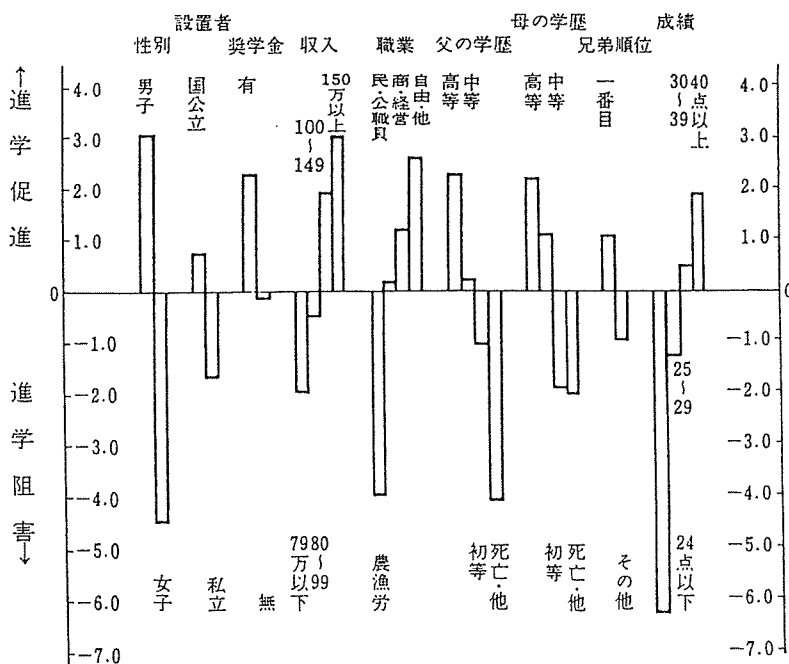
図 I・D-5 進学に影響を及ぼす諸要因の数量化（昭和43年）（中学校→高等学校）



(注) 資料No. I—67参照

統計数理研究所の林知己夫先生が開発した方法です。所澤 はあ、僕はちょっと知りません。伊藤 有名な方ですね。西田 有名な方です。国民意識調査なんかもやっている。林先生が開発した特別な数理解析の方法でして、林の数理方式の何となくここ（原本答申書、一二九ページ）に書いてありますが。つまり、全

図 I・D-6 進学に影響を及ぼす諸要因の数量化（昭和43年）（高等学校全日制普通科→大学）



(注) 資料No. I—67参照

国の高等学校や大学の学生のある年の進学状況を調べて、上へいった子と、やめていかなかった子、それから大学にもいった子、その子の親の学歴、家庭の所得、そういうものを調べたわけです。そういうものを全部やって、いった人といかない人の割合がどういふファクターによって支配されているかと。伊藤 それはサンプリングをやったわけですか。西田 サンプリングでやった。その膨大な分析を数値解析の方法で

やりますと、結果としてこういうグラフができたわけです。こちらのほうは中学から高校へいった人。真ん中の線というのは平均の進学者の割合になります。これは単なる強さをあらわしている数値です。どういうファクターが進学率を押し上げ、どういうファクターが平均以下に押し下げているか。ごらんのように、中学から高校の場合には学習成績です。学校の成績のこれくらいの人が断然こんなに強くいつている。これ以下の人はダーツといていない。これはまあ、あたりまえのことです。

伊藤 まあ、そうですね。入試がありますからね。

西田 それ以外に、親の収入が高い人と低い人。それで、何番目の子どもかね。一番目の子どもか、三番目の子どもかによって違ってくる。

伊藤 は、はあ。

西田 親の学歴が大学卒のように高い人と低い人で、これだけ促進したり阻害したりしている。これは中学から高校ですが、大学になりますと……。

伊藤 これ〔図版「進学に影響を及ぼす諸要因の数量化（昭和43年）（高等学校全日制普通科↓大学）」参照〕は高等学校から大学ですね。これは普通科ですよ。

西田 普通科の高等学校から大学の場合になりますと、学業成績では、いいからといってうんといくよりも、だめだというのていかないうちが多いのですね。いいものはわずかで、その強さよりも性別による差が強いのですね。親の意識として、男の子はいかせるけど、女の子はいかない。それから家庭の収入などがここにあるでしょう。やはり何万円以下というものはいかない、上はいつている。それから親の学歴、父の学歴、母の学歴も、それがどの程度の強さで阻害しているか。こんな表も、おそらくこのとき以外一度も出てきたことはないでしょう。

伊藤 兄弟順位で一番目がいいのですか。

西田 一番、やはり長男はよくいさせる。二番、三番は、「おまえ、ちょっと待った」ということになる。

伊藤 そうですか。古い時代でいえば、一番目は跡継ぎだからいかせないと（笑）。

所澤 明治時期はそうですね。

西田 性別の差がひどいですね。

伊藤 最初は昭和四十三年ですね。

所澤 じゃあ、もう四十三年頃はそうかも知れない。昭和三十五年くらいまでは、一番上の子は一所懸命金を稼いで、二番目からいくというのが東京は結構多かったような印象ですけれども。

西田 これは個人の家庭状況を中心とした調べ。これ〔答申要注目点〕には書いていませんが、その前に、その人が住んでいる場所が日本のどの府県にあるかと、その府県によって、非農業県はこんなに進学率が高い、農業県はこんなに低い。ズラッと並んでいるでしょう。それほど、機会均等といっても状況は違うのだと〔図版「進学率と非農業率（昭和42年）」参照〕。

小池 先生、秋田は最低のほうですよ。

伊藤 それはそうですね、そうだと思います。まったく農業県ですからね。

西田 こういう直線上に乗っているわけですからね。

小池 茨城、山形、新潟、秋田ですかね。

西田 東京なんか、あふれるほど外に出ています。

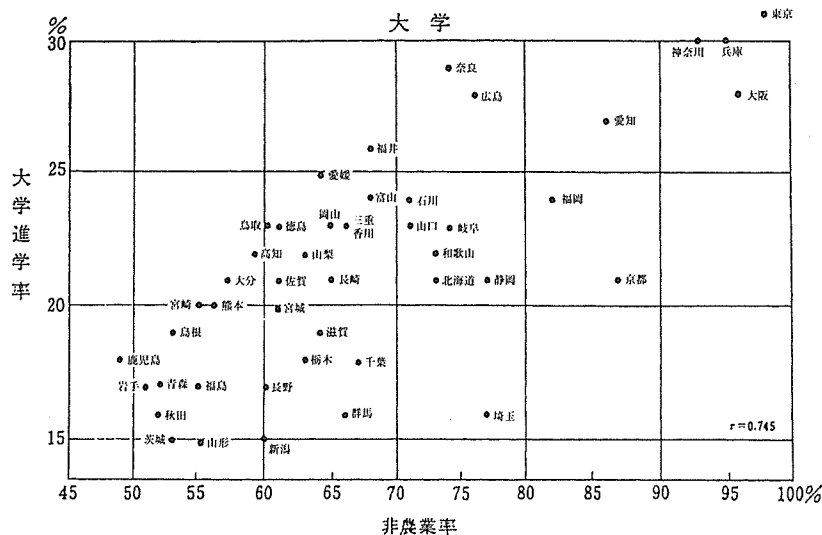
伊藤 外に出ちゃっていますね。

西田 こういうデータを出して、委員さんは非常におもしろがって（笑）。

伊藤 しかし、きれいに出るものですね。

小池 出るものですね。基本的に一直線ですね。東京だけは外れて

図 I・D-4-(2) 進学率と非農業率（昭和42年）



(注) 資料No. I-66参照

いる。
伊藤 こんなに収斂するとは思わなかったな。これが四十二年の段階ですからね。
西田 ええ。ここ「原本答申書、一一五〜一二三ページ参照」では省略しましたが、あと社会的なあれで、学校へいった人間を世の中がどう評価しているかとか、そういうことも書いてあるのです。それなんかは、問題というよりも、結果的にもしろかったというだけで、ここでは一々取り上げませんでした。男女の均衡がバランス

をとっているというのはおもしろいと思うのですが。
伊藤 こういう統計をつくられたわけですね。

■学校教育の中身について

西田 一応、外部効率という形のほうはその程度にしまして、次に今度は内部効率で学校教育の中身のほうの問題。最初に、教育理念といっています「原本答申書」、教育の中身のほうはどういう傾向があったかと。小・中・高等学校で一体どんなことを教えることになっていったか、その教科の中身が年度によって非常に変わってきたというのが一四〇ページに出ています「図版「初等教育（戦後は義務教育）における教科等の時間配当の変遷」参照」。

伊藤 そんなに変化するものですか。

西田 ええ。これが初等教育の教えた中身で、ここところの最初が国語ですか。だんだん中身が細分化されて細かくなってきたわけですね。

伊藤 ええ。でも、やはり国語と算数というのが主流ですね。読み・書き・そろばん。

西田 このへんからずっと諸々のものが出てきています。

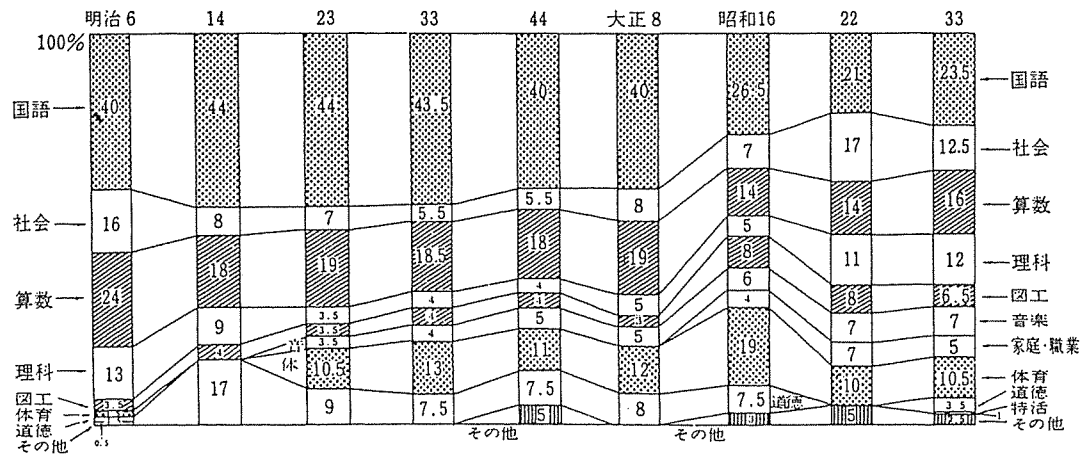
伊藤 これは初等教育ですね。

西田 初等教育です。これで、明治六年から昭和三十三年までです。この程度の変遷があるわけですね。中等教育はこちらです「図版「中等普通教育機関における教科等の時間配当の変遷」参照」。明治十九年から。下のほうからこれが増えてきたんですね。体育がかなり増えてきていますね。

伊藤 でも、外国語は減っているのですね。

小池 減っているんですね。しかし、体育といった場合には、中等

図Ⅱ・A-3 初等教育（戦後は義務教育）における教科等の時間配当の変遷



- (注) 1 戦前は8学年，戦後は9学年間につき，法令等に規定された各学年別の男子の週当たり時間数を教科別に合計し，総時間数に対するその平均的な割合を求めたものである。
2 資料 No.Ⅱ-2 参照

教育のときには軍事教練というのもあったでしょう。

西田 入っているでしょうね。それから、これ〔図版「中等実業教育機関（工業）における教科等の時間配当の変遷」は中等の実業学校、工学における教科。こういうなかでは、やはり初めは実習が多かったのですね。だんだん授業科目が講義中心になっていったのです。こんなにひどく変わっています。〕

伊藤 実習は物凄く減り方ではないですか。

西田 ええ、最初は実習が凄いですね。大学の場合には、これ〔図版「大学・短期大学の在学者の専攻分野の割合の推移（昭和34～42年）」は専門分野別の学科の専攻分野の割合の推移です。まあ、文科系、理科系というのが大雑把なあれですが、それほど顕著ではありませんけれども。〕

伊藤 そうですね、一直線みたいですね。昭和四十年から四十二年にかけて、短大では理科系が増えているのですね。あ、その他が増えてるんだ。

所澤 高等専門学校が増えたという。

伊藤 高等専門学校なんてどこに入っているの？

所澤 短大って高等専門学校。

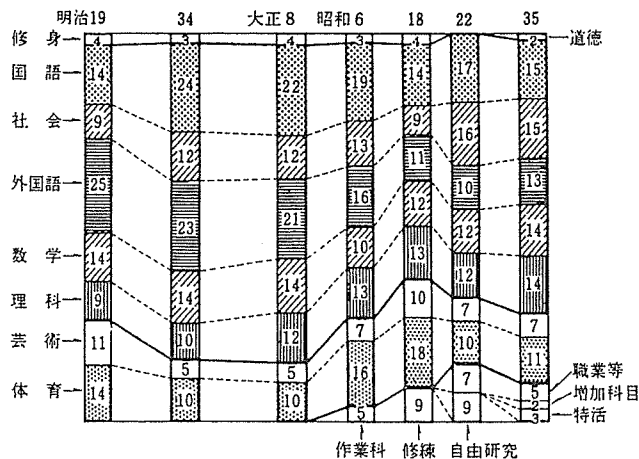
伊藤 高等専門学校は短大なの？

所澤 最後の二年。

西田 それを含めていましたかね。それから、一五一ページに女子教員の割合〔図版「主要国における女子教員の比率の変遷」参照〕。主要国における教員のなかで女性の割合がどうなっているかという一つの統計がありまして、日本ではずっと横になっている。これは初等教育と中等教育ですが、初等教育では日本はぐっと下がって四八％。

伊藤 ピークになったのは戦中期ですよ。〔一九四九年がここです。ここは三九年です。〕

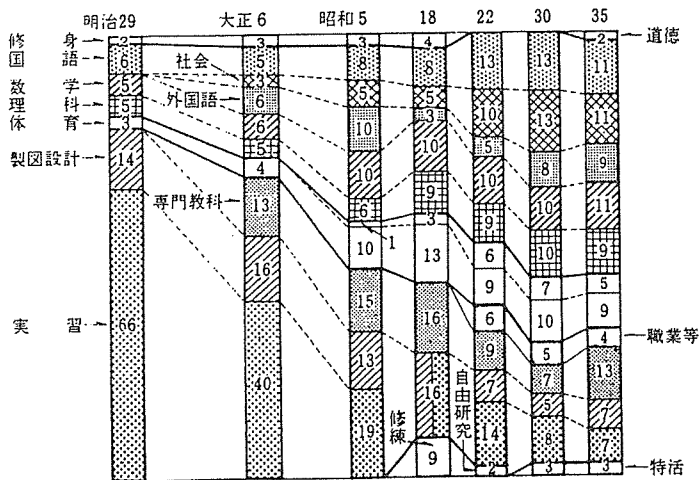
図Ⅱ・A-4 中等普通教育機関における教科等の時間配当の変遷



(注) 1 戦前＝中学校，戦後＝中学校＋高等学校普通科
2 資料 No.Ⅱ—5 参照

小池 まあ、戦中期にぐっと伸びていますね。
伊藤 これは「一九」四〇年くらいですよ、昭和十五、六年。
西田 イギリスあたりは少しずつ伸びている。ドイツはどんどん増えているのですね。逆にアメリカでは、中等教育では女の先生の割合がだんだん減っちゃっているわけですね。
伊藤 しかし、初等教育は凄いいじゃないですか。これ、八六％。
西田 アメリカの初等教育というのは女の先生が大部分なんですわ。
伊藤 中等教育となると極端に今度は下がってきますね。半分くらいになっちゃう。
西田 アメリカはだんだん減ってきていますね。

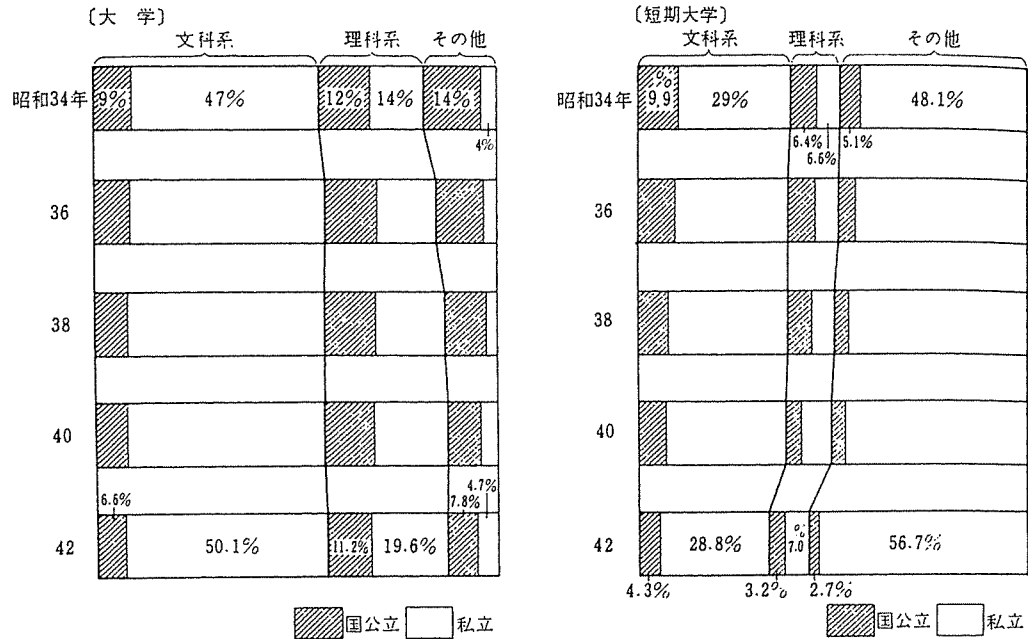
図Ⅱ・A-5 中等実業教育機関（工業）における教科等の時間配当の変遷



(注) 戦前＝実業学校（明治29～昭和5は具体的な事例）の金工科または機械科、
戦後＝中学校＋高等学校工業課程機械科

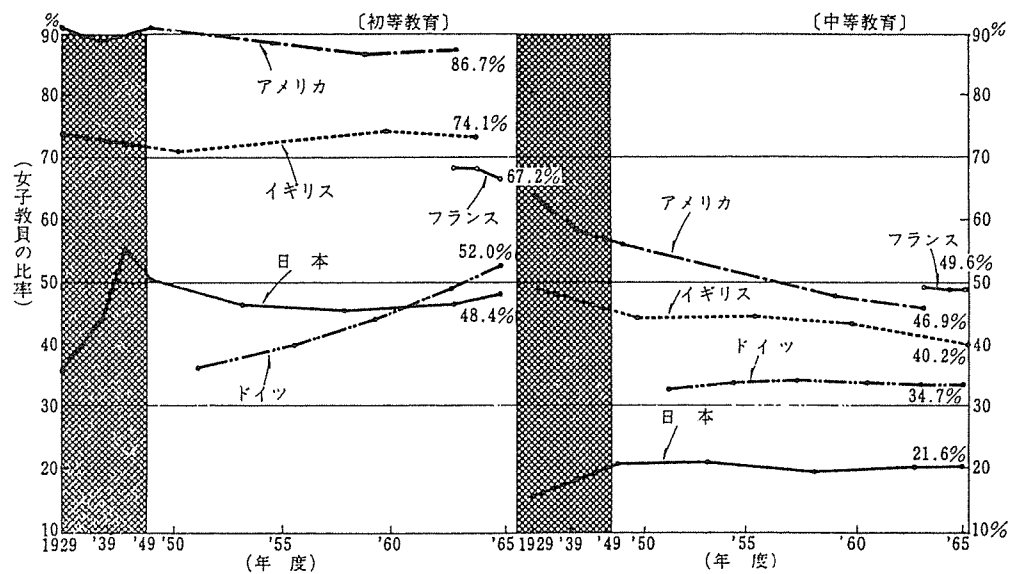
伊藤 日本はまあ、二〇％くらいですか。だけど、今は初等教育だと日本は女性教員のほうが多いんじゃないですか。
西田 私が学芸大学のときに、男性と女性と入学試験の合格率をコントロールしようかなんていう話もありました。だけど、それは大変なことになりそうだったので。まともに試験をさせたら女の子がよくできます。入ってからよく勉強しますしね。
伊藤 ところが、体力が足りないから、運動会の準備とかそういうときに困るというのですよ。

図Ⅱ・A-7 大学・短期大学の在学者の専攻分野の割合の推移（昭和34～42年）



- (注) 1 大学は学部学生のみ。短期大学は本科学生のみ。
 2 文科系……文学，法政商経。理科系……理，工，商船，農，医歯薬。
 その他……看護，家政，体育，教員養成，芸術，教養。
 3 資料 No.Ⅱ-7 参照

図Ⅱ・A-8 主要国における女子教員の比率の変遷



(注) 資料 No.Ⅱ-16

所澤 ですから、採用試験はどうも、実はコントロールしている県が多いらしいですよ。

西田 そうでしょう。学校のなかの雰囲気として、父親と母親の役割が違うような形のバランスをとりたいという気があるのでしょうか。特に、幼稚園なんかは伝統的に女性の保育さんばかりでしょう。これがやはり幼児教育のしつけとしてはよくないんだということ、保母ではなくて保父というのができましたね。今は男性も女性も区別なしに一本になっちゃったのでしょうか。

所澤 保育士という名前になりました。

西田 保育士になったね。子どもにしてみたら、お父さんがわりの男性の保育士さんにも大変なついて、おもしろい点があるらしいですね。それはかなり違いがあるようですね。ま、これは教育の中身のほうの問題ですね。

伊藤 かなり国によって女子教育の比率は違うのですね。

西田 違いますね。その次に、「人間の発達段階と学校体系」という形で一五七ページ〔原本答申書〕。

伊藤 就学前教育と初等教育との関連性。

西田 このときにいろいろな研究者のデータのなかから、ここでは結論だけしか書いていませんが、五歳児というのは幼稚園に入っていますけれども、むしろ五歳児というのは、発達段階からいうと小学校の一、二年生、六、七歳くらいの人と非常に近似性がある。小学校のなかで、六、七歳の頃と、三、四年生とはかなり発達に違いがある。だから、小学校と幼稚園の区切りはあのままでもいいのか、それをもう一遍考え直したらどうか。これは、実はあとの基本的施策の実施の段階で提案されています。幼児教育のやり方を変えてみたらどうか。先導的試行として、幼稚園の四、五歳児と、小学校の三年生までを一本にする。むしろ上のほうは中学校と一本にしたらどうか。この頃新聞で見えるのですが、品川区かどこがそういうこ

とをやりたいようとしているでしょう。だから、いつていたことがいろいろなところでいままた蒸し返されているわけですね。小学校の上級部分と中学校をつける、中学校と高等学校をつけたらどうかかね。中・高一貫。

伊藤 中・高一貫は盛んに最近聞いていますね。

西田 そういうことがやはりこの発達段階という形で、いろいろな調査の結果、ここに違いが出ているという、これもここでいろいろ報告されています。それから小・中の発達段階ですね。初等教育と中等教育との分岐点も今のような格好で。

伊藤 同じことですね。

■個性尊重教育と「先導的試行」

西田 ええ、問題がある。その次に、一番はやりの「能力・適性に応ずる教育」ということ。これもこれからの大問題なのですが。むしろこの研究のずいぶん長いいろいろな報告では、能力適性に応ずるという形を考え方としては誰でも賛成なのですが、個人差というものをどうやって見分けるのか、能力適性というのをどうやって定義するのか、そのことがはっきりしていないということがいろいろここでいわれています。それによってコースを分けたり、専攻分野を分けたりしてみても、じゃあ、分けたものをどんな先生がどんな教え方をするかということが何も分かっていないじゃないか。分けただけですぐ能力が伸びるというものではない。そういう意味での教える側の方法論の研究も何もできないで、ただコースを分けるとか、能力に応ずるとかということやと、できのいい子どもだけを大事にして、ほかはほったらかしでということと何ら変わりがない。非常に成熟度の遅い子どもを早めるための教育指導としては

どんなことがあるのか、その研究ができないで、ただ能力別、コース別というやり方では何も問題は解決しないのではないかとこのことをむしろここでは強調しています。こういうのはむしろ現代的な課題だと思えますね、これからの学校の。

所澤 先生は、今の発想はどこから出てきたものなのでしょう。たぶん、一九七〇年代くらいに「脱学校論」とか何かはあった頃に、能力による不平等ということでアメリカで大変問題になっていきますね。つまり、能力の高い子どもに教育投資がいて、能力の低い子どもに教育投資がいかないから、結局能力の高い子どもだけが恵まれた環境にあって、能力によって非常に大きな不平等を生むというような議論がなされていたと思うのですが。

西田 そうですか、ああ。ここでは、子どもの個人差というものがあり、発達段階が違っている。それに対して学校がもう少し適切な対応の仕方というものを考えるべきではないかということが中心でいわれているわけです。では、そこで一挙にすぐ、コース別、能力別の分割ということをやればいいのか。それは安易にやったのではだめだぞということをしているわけです。

伊藤 急に力を伸ばしてくる子どもの年齢というのは、かなりばらつきがありますね。つまり、小学校の三、四年でガッツと伸びる子と、中学へいってから伸びる子、高等学校へいって伸びる子もいるわけです。ここはやっぱり……。

西田 それは一概に論ぜられないわけですね。だから、一人ひとりののび方と特性を見極めて、それに一々対応できるようなやり方を学校は用意できるかどうか。その場合に、非常に伸びの早い子と遅い子に対して、先生がそれにアプローチする仕方自身が変わってこなければならぬ。そういう場合にどうしたらいいのかという教育方法論のほうについては何も開発されていないじゃないか。だから、あとで基本的施策のところで初等教育で一番真っ向からいって

いるのは、教育の質をよくするためのことは何も分かっている。しかも、それをやろうとすると、単に教育学だけではなくて、社会学、医学、心理学、全部の学問分野を総合したところから研究し直さなければだめだ。その研究をやって、その結果どういう結果が出るかというのを学問的、実践的に突き詰めていって、それによって初めて教育改革ができるのだと。それをやるための先導的試行をやるというのがこの答申の中心になっているわけです。それをついに文部省はやらなかったわけです。今は実験学校に金を出して、「何かやってみろ」といっているだけなのでしょう。

伊藤 教育学のほうでもそういう問題発想というのはないのかしらね。

所澤 いま先生のおっしゃったような話が、僕が大学院に入った頃（一九七九年）にはずっとあったと思うのですけれども。そこで結局、政治的に機会均等の問題と衝突してくるのですね。というか、意図的に衝突させたグループがあるのですね。

西田 その当時の私どもの印象では、膨大な勢力を持っておりました教員組合は日教組だった。これが真っ向から反対したのです。能力適性に応ずる教育というのは差別教育だと。だから、平等な教育をすべきだ。そういうコース別を分けるとか、能力に応じてとか、そういうことをやるのは個人の差別だからいけないという、そういうイデオロギッシュな強い反対があった。この前申しあげたように、共産党のおばさんに私が説明にいった、「目的は栄養をつけるはずだ。献立が同じではないんだ。献立を変え、味付けを変えて初めて栄養がつけられるのだ。その工夫をするためのものが適性に応ずる教育なのであって、同じ献立を出して、『さあ、食え。食わないやつは勝手だ』というほど不親切な親はありません」といったら、『それは分かる』というのですね。だから、その能力適性に応ずる教育というのは、できの遅い子にはそれだけ行き届いた違った方法

でいい教育をするということが一方でなければだめなんです。ただ分けただけでは、できの悪いやつは「おまえは劣等児だ」というレッテルを貼って、ますます劣等感を持たせるだけだ。それはむしろ教育としては非常に悪いことだ。これは誰でも分かるわけですね。じゃあ、それをさまざまな能力適性に応ずる人にどんな教え方でやるかということとは、やはり綿密な実験を経なければいかん。そのことをスタートしろと。

伊藤 研究ですね。

西田 ええ、研究。研究体制をつくれというのはあとで出てまいります。

所澤 そのような今の議論はどなたがリードされたのですか。それとも、全体的に話していると自然にそういうふうに向か方向が定まっていたのでしょうか。

西田 そうですねえ、教育プロパーの人というのは委員のなかにだいたいおられましたけれども、誰がリードしたというか、人間の能力というものに対する物の見方というのは何も教育学者が専門ではなくて、大勢の人がやはり自分の身の回りから見て、伸びるやつも、伸びんやつもおる。十把一からげではだめだというのは分かっている。だけれども、それを教育の問題としてどうするかということになると、丸っきり具体的な提案がないわけですね。「個性を尊重する」といっただけで、何をしたいかわからない。

伊藤 そうなんですよ。

西田 あとで出てきます先導的試行という問題が出てきたときに一番しみじみと皆さんが感じましたのは、この答申は第三次の教育改革だ。第一は明治維新、第二次は敗戦のとき、今度は三次だ。なぜだといえば、第一次も第二次も、教育改革ということとは、どこかの国でやっているよいやり方をポーンと真似て、その日からそれに乗り換えることだと、日本人はそういう考え方になっちゃっている

わけです。明治維新のときにはフランスやドイツのやり方を見てパッと乗り移った。戦争に負けたときには、有無をいわずアメリカのをやっちゃった。あれが教育改革だとみんなが思い込んでしまっていて、自分で開発をして、これがいいと見極めてやった改革というのは一度もないのです。それを「第三の教育改革」といおうとしたわけですね。それは生易しいことではない、自分で開発しなければならん。そのスタートを切れというのがこの答申の主文なんです。それがついに手が付かなかった。

所澤 そこで「先導的試行」という言葉が出てくるわけですが、先導的試行ということはそれ以前はやることは禁止されていたということになるのでしょうか。

西田 ええ。それは、子どもを実験材料に使うのはいけなとか、教育というのは志のある立派な人がやるのであって、素人がごちゃごちゃいってもだめだということになっていたのですね。しかし、先導的試行というものは、前に申しあげたように、一つのきっかけは、私がOECDについて北欧の教育学者だのいろんな人たちから、教育というものは三つの分野の人たちが一緒になって共同責任で新しい開発をしなければのびないと。学問をやっている先生と、実践家の現場の教師と、それを制度として取り締まっている行政官と、それが一緒になって共同責任でやらなければものは動かない。そのことで三位一体という考えが出てきた。しかも、その改革は、自然科学の工場の生産物のように、どこか実験室のなかで実験をやって、よかったら生産に移すという形ではだめなのだ。教育の現場のなかで、特別な条件を設けて、そこでやらなければならん。それはあくまで深い川を溺れずに渡るような一つのパイロット・エクスペリメントだと。それを先導的試行と訳したわけですね。私がOECDにいったときに受けた印象から、そういう形でこの答申をスタートしなければならんということを考えたわけです。今の能力適性に応ず

る教育というのも、口を開けば今だって誰でも皆いうのですけれども、これはいふべくして実際はなかなか難しいことなのです。

所澤 今の先導的試行のことで、先生がいまおっしゃられた内容を聞いてなるほどと思うのですが、我々が昔から本などで読んで聞いていた話では、学習指導要領の改訂をして、昭和五十年くらいいでしょうが、理科で探究の過程とか何かそういうものを導入してやってみようとしたときに、実は、やってみたらどういふことが起こるかというのを試しているところはどこにもなくて、全然どういふふう

に手をつけていいか分からないので改訂がうまくいかなかったと。そういうことがあって先導的試行を制度上可能にしたのだという説明を書いたものを昔読んだことがあるのですけれども。先生のお話を聞いていると、理由は同じかも知れませんが、背景になっているものがだいぶ違うというふうな形で、たぶん、その説明をした方は在野の方ですから表面的な理解なのかなという感じを受けました。

西田 この答申でいろいろ専門家の意見を聞けば聞くほど、肝心なところになると、専門家の人はみんな、「分からん」とおっしゃるわけです。教育の実践の現場でどうやるのかということはなかなかいっていない。前にも申しあげたと思いますが、企画室長だった犬丸（直）君が、この答申をやるときに、明治、大正以来の文部省の諮問と答申を全部調べてくれた。彼がいったなかで非常に印象に残っているのは、どういう教育をすべきかというこの答申は山のようにある。教育の目標論です。その目標に達するためにどんなやり方をしたらいいかという方法論のことは何も無いというのです。答申に一つもないし、その研究も行なわれていない。だから、目標論を掲げて方法論がないということが教育の内容の進歩を妨げていることなのだ。犬丸君の報告のときにも、そのことを非常に私どもは肝に銘じたわけです。

それともう一つ、どなたかにお話ししたと思いますが、私の一つの個人的な思い込みとしては、昭和十三年か十二年頃、高等学校を出て大学へ入ってしばらくした頃ですが、東京の日比谷公会堂で西田幾多郎先生の公開講演会があったのです。なぜ西田さんがあんなところへ出てきたのか知りませんが、これは『西田幾多郎全集』を見ても載っていないのですが、そのときの先生のお話が、「学問的方法について」という題でした。結論は、要するに東洋の学問と西洋の学問を比べてみて、東洋には東洋なりの鋭い捉え方と直感と理念というものがあるけれども、どうしてヨーロッパの学問に東洋の学問が圧倒されて今の科学技術の進歩という形で押しまわられているのか。これは、東洋の学問には、その学問の結論に至るための方法論について何らの解析とか学問的な方法というものは開発されていない。それを抜きにした、結論にポツと飛びつくような学問のやり方というものだけでは、東洋の学問はやはり太刀打ちできていない。教育の場合も、教育の方法論を抜きにした教育の目的論というのはまさに不毛の議論であると。「個性の尊重」ということをいっていいか分からない。「能力に応ずる教育」ということは誰もいわない。そのことがこの答申のなかで私の心のなかにいつもありました。

伊藤 教育の対象になる学生・生徒の能力の問題もさることながら、教える先生の側の能力の問題が一番大きな問題ですね。実験をやるにしても、そういう意識をもった、ある程度まとまった先生集団がなければできないでしょう。

西田 それはあとのほう政策のところ、教員の養成の地位と待遇の問題が挙がってくるわけです。それが答申の非常に中心におかれていることなのです。そのときに、一番は、そんなに月給が安くてはばかばかしいと人が来ないから月給は上げると。月給を上げて、素

質的にいいのが来たら、勉強させなければ伸びない。一生の勉強をするための再教育機関というものをつくる。だけれども、その勉強した人としらない人が地位・待遇で何も変わらなければ、人間というのは怠け者だから、これを待遇的に差別すべきだ。その次に、本当にいろいろな人があそこが本当に生き甲斐のある仕事だとして教育に来るためには、さっきいった先導的試行という形で、まったく新しいアイデアで、特別な条件で、金と予算がついて、おもしろいことがやれるのだと。これは会社でモノをつくっているよりも物凄くおもしろいのだと。そういう状況をつくるのが有能な青年が来る最大の原因だということが答申のなかに書いてあるんです。だから、それがいい教師をつくる。イタチごっこですがね。来てからやれる。こんなことをやるのはおもしろいじゃないかという形で、若い人というのはそういうところへ飛び込んでくるものですね。

伊藤 例えば大正の自由学園（一九二一年、羽仁もと子・吉一により創立）とか、小原（国芳）さんのあれ（玉川学園）とか、いろんなそういう先導的な教育、成功もあるし、失敗もあるのですけれども、それが公教育のなかではちょっと縛りがきつくてできないわけでしょう。

所澤 師範学校の付属学校がどういう位置づけなのか、戦後、国立大の付属学校が実験校なのかどうかという問題があります。その問題がたぶん絡んでいて。大正自由教育のときは、師範学校が実験校として機能したのです。ところが、戦後のいろいろな改革のときには、たぶん国立大学の付属学校はほとんど機能していない。で、完全な進学校化してしまうのです。

伊藤 そうですね。

西田 学芸大学というのは、戦後のものをつくったときに私が大阪学芸で経験したのは、旧制師範学校からの非常に力量のある先生方が研究業績不足で全部ほっぽり出されてしまった。新しくでき

た新制大学に学問的に迎えられるほど偉くはないけれども、形式上一つの資格を持っている人が学芸大学にたくさん入ってきた。教育の実験の経験もなければ、教育というものについての勉強もしたことがない。そういうもので学芸大学の首脳部ができてしまうのです。そのときから師範学校のいいところが全部つぶれちゃって、新しい学芸大学の先生方がほとんど教育についての体験がないものから、その付属学校にいった教育の実践的な研究の指導をする能力なんていうのはほとんどないわけです。教育実習で学芸大学へやっても、その先生に任せきりで。

所澤 そうですね。

西田 だから、私が物理の授業をやっていて、教育実習のときにあるクラスの担当をして、そこへ預けるといって私は一緒にいったわけですが、大学のほうから来た先生がそういう実習場面でも発言をしたり指導したりすることはまったくないので。そのことをしみじみ感じて、前に申しあげたように、私は聾教育の専門家になろうと思って、京都大学へ内地留学させてくれ、生理学と心理学の勉強からやり直したい。医学部の教授は威張っているというけれども、教授は、実習の病院へ行って臨床医学をやるときには、「盲腸の手術はこうやってやるもんだ」といって、八〇歳のおじいさんでもやって見せるわけですよ。学芸大学の教育指導法の先生が、付属の先生に、「数学の嫌いな子にこれから好きになる授業をやってみせるから、見ておれ」とやる人があるか。それができれば本当の実習ではないでしょう。

伊藤 しかし、教育学部には教科教育法という講座があるじゃない。小池 ありますよ。

西田 私も物理を教えているから教科教育法をやれといわれたんです。そんなものは習ったことないし、分からんといったけど。

所澤 教科教育法の専門の先生が教育教養学部にもポストを持つよう

になったのは、修士課程をつくってからあとなのですね。それ以前は、結局、教科専門の人がポスト待ちで、たらいまわしで現場の経験のない人を入れていたというような状態ですね。だから、今でも教科教育法の専門の先生がいなくて、ところがたくさんある。実は、専門家を養成している機関がほとんどないんです。広島大学と筑波くらいしかない。

西田 教育の方法論についての研究がろくにないからですよ。

所澤 そうなんですね。

西田 方法論の専門家が教科教育法になるわけでしょう。

伊藤 そうですね。

西田 自分が物理学の知識があるからといっても、物理という学問を通じて、小・中学校でどうやって理科に対して興味を持たせ、理科学的な思考ができるように教育できるかということとは全然別な話なんです。

伊藤 別ですね。

西田 とても難しいことです。

所澤 ですから、今でも大学の教科教育法の授業では、指導要領を説明している先生だとか、小学校の教科書を読んで聞かせている先生だとかがいるという話なのですけれどもね。もう少し気の利いた先生でも、実際に模擬授業を学生にやらせて見ているくらいで。例えば、中学生とか高校生にとっての物理学というのはどういうものかとか、そういうレベルのことを研究していて、そういうことを踏まえて教科教育法の指導を考えている先生はほとんどいないというのが現状だと思います。

西田 だから前途多難ですよ、これ。能力に応ずる教育なんて、本当にどうするのかしらね。

所澤 できない子にとっての算数と、とてもできる子にとっての算数というのは全然見え方が違うと思うのですけれども、それを研究

した人自体がいないのでしょね。

伊藤 なぜこの子は数学が好きで、この子は嫌いなのか。

小池 分かってくれたらありがたいなあ（笑）。

伊藤 そういう研究があつてしかるべきだと思うのだけど（笑）。

所澤 もう一つは、そういうことを研究しているように見える人たちがいるのですけれども、書いた論文を読むと、論文になっていないということが非常に多いですね。

小池 教科教育法に関しては、業績のあり方が非常に難しいですよ。

西田 能力に応ずる教育でそんなことが出てきました。

■入学者選抜の基準

伊藤 では、次へいきましよう。入学者選抜、これはまあ。

西田 今の能力のところで、そこに挙げてありますのは、学級編成をどうするか。英才教育なんていうけれども、本当にどうするか。特に創造性の開発です。これは現代でもワーワーいつているわけですね。こういうものの教育がやれるのかどうか。これが、このなかの文章のなかに非常にデータをいろいろ挙げて懷疑的に書いてあります（原本答申書、一六六―一六七ページ参照）。

伊藤 懷疑的ですか。

西田 そういうことを気楽にいうなと。創造性の教育なんて。

小池 しかし、懷疑的に書いてあるにもかかわらず、その当時の新聞等を読むと批判的ですよ。それは誤解されたということなのでしょう。

伊藤 取り上げていること自体がいけないのでしょうか。

西田 いや、誰も答申なんか読んでいないわけですよ。名前だけで、

「あ、差別教育だ」というわけです。

伊藤 でも、これは民間といいますが、要するに、幼児英才教育なんて盛んに宣伝しているじゃない。

小池 いま凄いですね。

伊藤 ねえ。

西田 今から三〇年以上昔にやったことが、ほとんど今もまだまだ未解決の問題ばかりですね。

「入学者選抜（制度）」は、これはかなり力を入れたのですが、四四四ページ（原本答申書）から。これも企画室長が調べてくれて、明治の初めから、どの時代にどんな選抜方法をとったというのを文書で拾ってあるんです。これをともに読めば、要するに試行錯誤の繰り返しであったということだけははっきりしているわけです。

伊藤 つい最近だけを見たってそうですね（笑）。

西田 最後に、能力判定資料の妥当性の結論というのは本文の一七一ページのほうにあります。この委員会としては、この段階で手に入る資料を見たかぎりでは、入学者選抜というのは、どの人が優先的に入る権利を持つべきかと、いわゆる選抜妥当性という問題がありますね。その人がその学校の教育を受けるのに一番ふさわしい適応性を持っているかということを見るのが目的のはずでしょう。そうすると、入ってからの学問的な修業が身に付きやすい、そういう用意ができていくかということとをどこまでより正確に見分けるかということとを能力判定の妥当性といっているわけです。この妥当性の議論という問題は非常に難しいわけで、結局、それを判断する材料としては、本人が高等学校時代にどんな成績をあげておったかということと、そこで行なったテストでどういう成績だったか。そのくらいしかないわけですね。この段階で少なくともいっているのは、いろんな研究者が出したものを全部総合したところ、結局一番基礎資料として大事なのは高等学校の調査書だと。それによっての個人の

能力的な優劣というものが一番信頼性がある。その次に、ピンからキリまでである高等学校で、学校単位の評価の水準にばらつきがあるじゃないか。それを補正する方法がないとうまういかなんじやないか。その補正の方法として、広域のテストというものをやる。その組み合わせによって妥当な選抜ができるのではないか。個々の適性を調べる場合に、現在のテストによってどれだけ問題が解けるかというアチーブメントテストと、あの当時アメリカが持ち込んできました、今の問題解決能力だけではなくて、あの当時は適性ということをいっていましたね。将来のアプティテュード（適性）を見るテスト。そういうものを組み合わせれば、入ってからの成績を予測する上に非常に信頼の高いものができる。そういうことが一応このときにこういうグラフに書いてあるわけです。何と何を組み合わせたら入ってからの成績ともしっかりも関連性が高いか、こういう研究がある。

伊藤 相関性を考えているわけですね。

西田 ええ、入ってからの。これをやると一番難しいのが、入ってからの成績というのが実は大変問題なんですよ。

伊藤 これはいい加減なんですよ。

所澤 そうですね。

西田 大学の先生の評価の仕方というのは、基本的に気ままで、まことにそのへんがお粗末な点がある。その日に思いついた問題で、あれを解けないやつはだめだというようなことをいっていたら……。しかし、それをしゃにむにやっこういうものをつくったわけです。現在の段階でこれ以上うまくいかなければ、高等学校のそれが一番信頼性がある。その当時に私は大学局で入試の改善の委員会にも関係しまして、高等学校の内申書を非常に尊重して、それによって優劣の判定をするといったら、その委員会では反対したのは高等学校の先生なんです。そんなことをしたら、今はそういうものを使わ

れないから公正に書いているけれども、それが選抜にかかわることとなったら、どう作為されるか分からない。まあ、それを聞いてがっかりしちゃったんですよ。

伊藤 それは、親は先生のところにいろいろ持って行きますよ。

西田 先生のほうも、確信のある評価をしないで、そういう点でお手盛りを勝手にやるかも知れんからやめてくれというわけです。

伊藤 それはある意味では理解できるね。

所澤 でも、現実に東京の高校の入試で内申書を導入して、中学校はかなりそういうふうになったわけですね。

西田 そうだと、何をかいわんやだね。高等学校による格差があるじゃないかと。それに対して私は、「格差があるのは、いま内申書を使わないから格差があるので、東京大学は内申書だけで選ぶといったら、一番できの悪い高等学校へワーツとみんながいくだろう」と。一同 アッハッハッハッ (笑)。

西田 そこでトップをとったほうが入りやすいからね。有名校にいったらだめですよ。だから、有名大学がそれをやったら、格差はたちどころになくなる。それはそういうことでしょう。

伊藤 ハッハッハッ、まったく分かります (笑)。

所澤 東京の都立高校が学校群制度を導入したときにそうなるはずだったのですが、ところが、中学校から私立の中・高一貫校にどんな生徒が流れて、予想外の結果というか。まあ、想定された結果かも知れませんが、そんなことが起こったり。

伊藤 まあ、それはほかに逃げるところがあったからでしょうね。

所澤 東京の場合は、ですね。地方社会ではそうはいかない。

西田 内申書だけで選別をし、細かい点数の数が同じなら、そこはくじ引きで決めたらいいじゃないか。あとは入ってからの勉強なんだから、といったら、この前申しあげたライシャワーさんが、「西田さん、それは日本ではだめだ。あの選抜試験の潔さが日本人には

たまらないんだ」と。そうなると改善のしようがないだろうと (笑)。

伊藤 そうですね。合格発表の掲示板の前で泣く人、胴上げする人 (笑)。

西田 それで落ちた人間が浪人になるというところがまさに日本的だと。侍の文化だという (笑)。

伊藤 これもしかして、やはり本当は研究が足りないですね。

西田 これはまた二度も三度も出てくる。おしまいところで、基本的な施策のなかで入試選抜の改善というのが出ています。最終的な結論はあとに出てきますが、高等学校と大学とが一緒になって具体的なやり方の研究を進めるようにしろ。その協力がいつまでもできないで、こうやればいいというよりいい方法が分かっているのに個々の学校がやらないのならば、必要な場合には国が法的措置をとれと提案しています。その前提としては、入学者選抜制度というのは日本の学校の中で各学校段階の間の生徒の引渡しを決める一つの重要なものなので、選抜制度というのは一種の学校制度だというわけです。それを個々の学校が自分の好きなように勝手にやっているということがおかしいのだと。国が統制するのかもしれない、これがいいということの総括的な結論が出たら、それを全体にあてはめるということは学校制度としてあたりまえのことだという形で、最終的に必要な法的措置も検討すべきだということをいっていますでしょう。しかし、これはついに文部省は怖いから手をつけなかった。

伊藤 国による大学進学のための適性検査というのを一斉にやって振り分けちゃうというのは一つのやり方ですよ。

西田 今の共通一時テストが一部分そういう役割をしているわけですね。今頃は私学もあれをずいぶん利用するようになっていきますものね。

伊藤 しかし、あの入試問題はひどいからなあ。僕らの歴史学なん

かを見ていると、本当にイデオロギーだよ。

所澤 しかし、去年あたりまでは国立大学の二次試験の出題の間違いが叩かれて大騒ぎしていましたけれども、今年は私学が叩かれていますね。

伊藤 ああ、そうですね。

所澤 今度は標的が私学になった。あれでまたセンター試験への方向が出てくるんじゃないかなと思っていますけれども。

伊藤 ハッハッハッ、意図的なものかどうか知らないけれども(笑)。

所澤 ただ、試験制度については本当に研究している方が非常に少ないということは間違いなし、大学のなかでも入学試験を研究するセクションはない。

伊藤 教育学部のなかにはないんですか。

所澤 ないです。評価法とか、そういうところが最近で始めているくらいです。

西田 これは専門家に訊きますと、こういう試験とかそういうものは教育心理学でもあるけれども、教育測定学という学問があるのですか。私はこんな膨大な本を誰かからもらったのですが。アメリカあたりでは非常に発達しているけれども、人間の能力というのはいろいろな側面から多様な形で測定するという教育測定学という学問の本来の問題なので、個々の教科の専門の先生が、「俺の試験に通らなきゃだめだ」と言っているようなやり方では、いつまでも何をやっているのか分からないということですね。

伊藤 アメリカの大学の入試制度の話を聞いていると全然違いますね。あれほど違ったやり方がなんでできるのかなと思いますけれども。

所澤 裁量があるんですよ。

伊藤 そうです、そうです。

所澤 日本であんなことをやったら、不正だとかといって大騒ぎに

なりそうなのが。

伊藤 だけど、今度は逆に先生たちの学生教育についての評価が出てきちゃうわけだから、下手な学生をとったら大変ですよ。教職員組合は教員会じゃないのだけれども、日本医師会だって、本当はあれは医師のお互いの技量の向上とか、とんでもないやつを追い出すとか、そういう機能をしなきゃいけないわけだけど、自分たちの利益団体になっているでしょう。日教組だってそうじゃない。自分たちの利益を守っていて、教研大会とかいったって、あんなの研究にも何もなっていないですよ。

所澤 すべて評価するというのが日本の場合は避けられているように、非常に典型的なのは、実は教科書の評価という問題があるので。民間教科書で、国定ではなくて開放制の教科書制度をとっている国は、たいてい教科書の評価制度というのがあって、民間で発売した教科書はどの程度の点数だとかというのはある段階でいろいろな団体から評価が出てくるらしいです。台湾で国定教科書を開放制に変えるのでその調査をした人たちがいて、日本の資料を探してくれと頼まれたんですよ。日本にはまったくないですね。

伊藤 あるんだよ。

所澤 あるんですか。

伊藤 同和のグループがね(笑)。

所澤 ああ、なるほど(笑)。それにしても、あるだけでもましですね。

伊藤 それはあるんですけど、本当に客観的な評価をするという考え方はまったくないですね。だけど、そこは教育学部の仕事だろうからさ。

所澤 そういうことを担当する講座とか何かもまったくない。

伊藤 講座があるうがなからうが、研究者はやるべきなんじゃないの(笑)。

所澤 それはそう思うんですけど。

西田 教育測定学の講座を設けましょうか(笑)。

所澤 全国的につくってもいいんじゃないかと思うのですけれども。僕は、大学入学試験の歴史をずっと明治の初めから研究しているのですけれども、ほとんど先行研究ゼロ。今でも皆さんやれないのですね。みんなが過去の思い出として語っていることの大半は全体像とはいえない。というのは、入学試験というのは大学の先生でも必ず毎年違う人が担当しているのですね。一〇年間同じ人が担当するということがないわけです。だから、過去がどうだったか分からない。思い出は、自分が担当したり、受験したりしたところの話だけというような状況です。大正期から昭和にかけては大学の入学試験というのはほとんどなかったんだ、というのは文学部の先生たちがおっしゃることですけれども、医学部とか工学部とか法学部はむしろちゃんと入学試験が大変だったと。

伊藤 それはそうですね。

所澤 試験場で卒倒した人がいたとか帝国大学新聞に記事が出ていますが、でも、そういうことは文学部の人たちが書いた入学試験の本には出てこないというようなことになるわけです。

伊藤 まあ、入学試験の成績というのはプライバシーの問題で表には絶対に出ませんから、分析のしようもない。

西田 情報公開という形であれがオープンにされるようになったら大変ですね。

伊藤 まあ、そうですね。けどまあ、あれはプライバシーだから絶対に公開しないですね。

所澤 自分の分だけは教えてくれるんです。

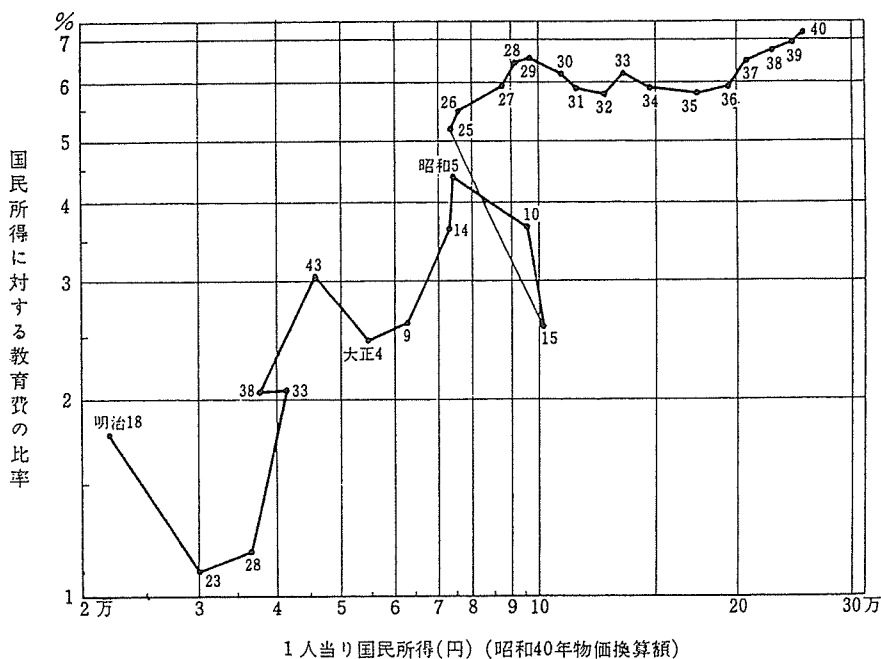
小池 例えば落ちた者がいますよね。落ちた者が自分の成績はどのくらいなんだ、といったときに、番号を消して、点数の配置を出しのです。だから、私のいる大学院等で採めましたけれども、成績の

悪い者を合格させたりするわけですよ。「それはちょっと情報公開法では生きていけないですよ」という議論が出ますからね。やはりプライバシーで問題でも、偏差という形で出す等、統計的には研究できるようになるんじゃないですか。情報公開法で、墨塗りをすれば、分析できるようになってくると思います。

■学校教育の経済的効率

西田 次の、今度は「教育費の財政効率関係」の問題。これがおそらく、この委員会でも取り上げて、文部省でもいまだかつてやったことがない財政の問題です。これはこの委員会で大変興味をもたれました。二十三特別委員会。「国民経済と教育費」というもので、国民の所得水準というものと、教育費に金を幾ら使うかという割合、これがやはり時代によってどう変遷したかという。これはマクロの一つのあれですけれども、この報告では分かりやすいグラフで全部出ているわけです。ここにあるのが国民所得に対する教育費の比率(図版「国民の所得水準と教育費支出の割合」参照)。教育費というものをご公のものが使っている場合に、国民所得の何パーセントを使っているかという比率です。こちらは一人当たりの国民所得、懐具合ですね。国民がだんだん豊かになっていけば、だんだん教育費の割合もふえていくとうなるわけですが。ここに載っているのは日本の明治の十何年から、いっぺん落ちて、明治の所得があまり伸びないこの時期に非常に急速に明治の努力によって伸びているわけです。ここは戦争です。昭和十五年、ガタンと落ちたわけです。戦後回復して、それで横ばいしていますね。つまり、戦後の経済成長によって所得はグーッと伸びたけど、所得に対する教育費の使い方は伸びないで横ばいになっているわけです。このことから、我々の先輩の

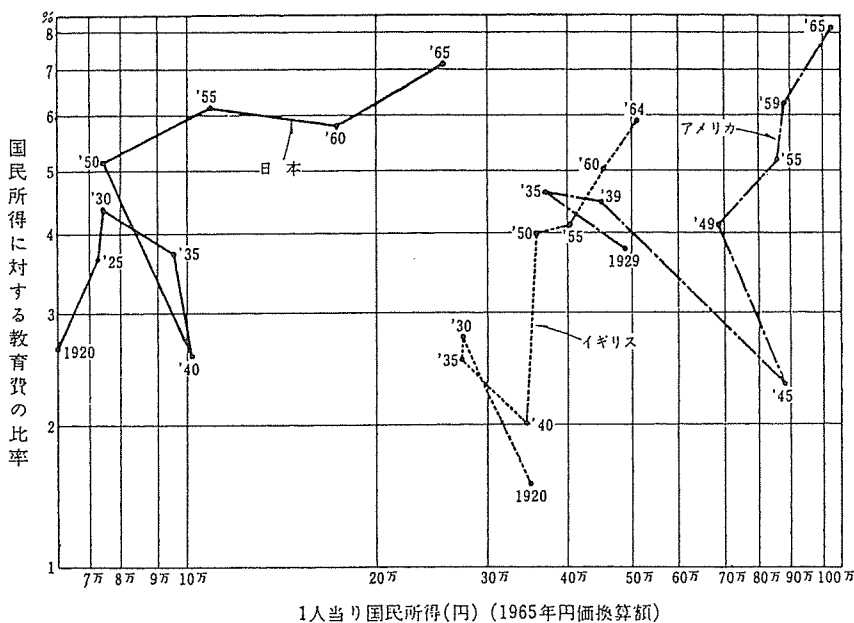
図Ⅲ・A-2 国民の所得水準と教育費支出の割合



(注) 資料 No. Ⅲ-2 参照

伊藤 大体六%台ですね。
西田 それに対して今度は、初等・中等教育です。学校段階によって教育費がどう使われたか〔原本答申書、一八〇ページ参照〕。お

図Ⅲ・A-4 日本・アメリカ・イギリスの国民の所得水準と教育費支出の割合



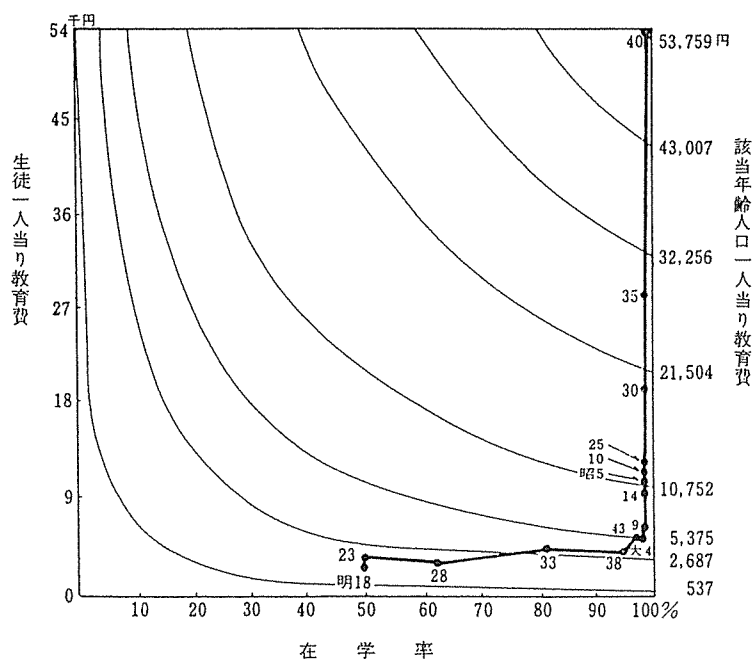
(注) 資料 No. Ⅲ-6 参照

もしろいのは、この一八一ページに国際比較があるわけです〔図版「日本・アメリカ・イギリスの国民の所得水準と教育費支出の割合」参照〕。日本とアメリカ、イギリスの。これが今の日本のあれです。日本と外国諸国とを比べるのはとても乱暴ですけども、とにかくその当時の為替レートから換算して、日本がこうやっているときに、これはイギリス。イギリスはきわめてこの段階において急速に伸びているわけです。アメリカも戦後にガタンと落ちて、終戦後にグ

ングン伸ばしています。確かに日本とアメリカとは所得水準は違うけれども、日本は戦後経済がともにいきだしてからあまりのびていない。向こうはとにかく伸びている。この伸びている時期というのが、調べてみますとスプートニクが上がったときです。そこからアメリカはソ連に負けないように非常に強く伸ばしています。こういう傾向が出ています。

これは〔図版〕「生徒1人当り義務教育費と義務教育該当年齢在学率

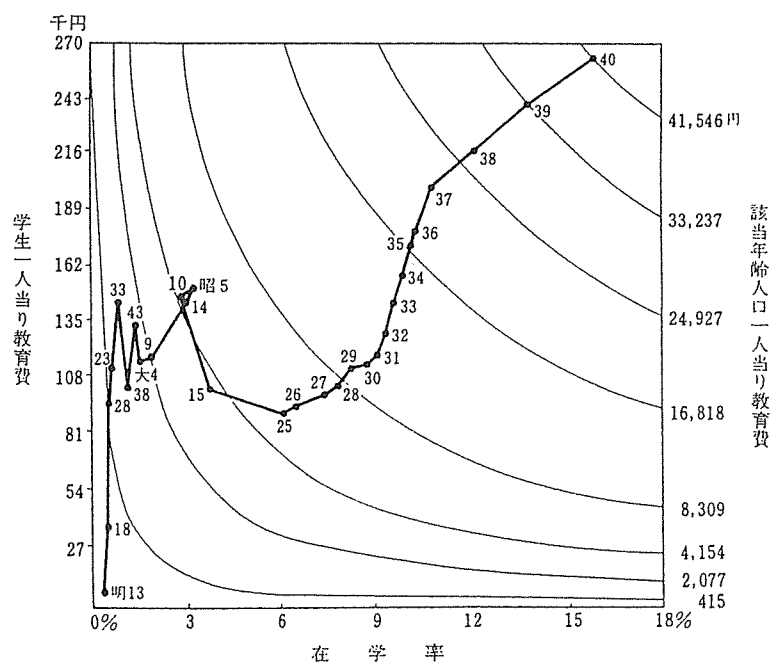
図Ⅲ・A-6-(1) 生徒1人当り義務教育費と義務教育該当年齢在学率との関係



(注) 資料 No. Ⅲ-7 参照

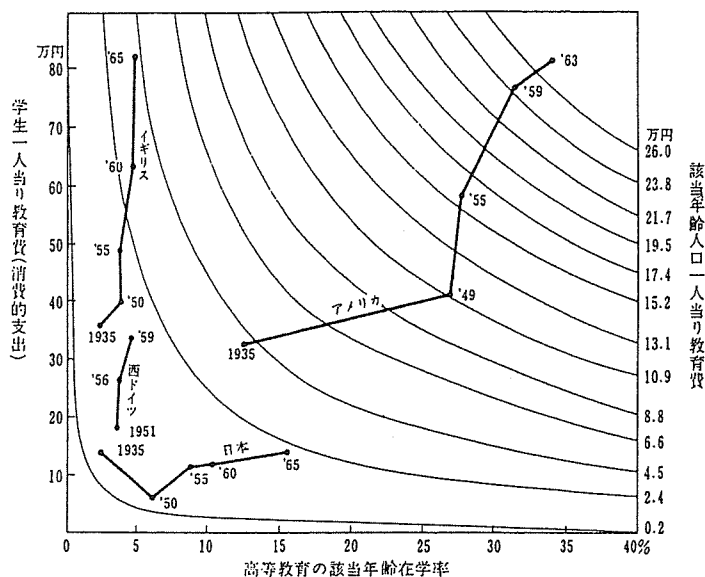
率との関係」参照)、縦軸が教育の場合に一人当たりの教育費、つまり学生一人、生徒一人に幾ら金をかけるかということ。グラフの横軸は在学率です。生徒の一人当たりの教育費を上げないでもどんどん増やしたほうがいいというので、明治の初めからこの段階までは、一人当たりの教育費はほとんどのびないで、在学率だけを伸ばしているわけです。明治何年かにこのへんで義務教育が普及したときに、それからあとはグーッと一人当たりの教育費を伸ばしてきた。

図Ⅲ・A-6-(3) 学生1人当り高等教育費と高等教育該当年齢在学率との関係



(注) 資料 No. Ⅲ-7 参照

図Ⅲ・A-7-(2)
主要国における高等教育機関学生1人当り消費的教育費と
該当年齢在学率との関係



(注) 1 各国別の高等教育機関の種類は、次のとおりである。

アメリカ……大学および短期大学

イギリス……総合大学

西ドイツ……国公立の総合大学・単科大学・教員養成大学

2 資料 No. Ⅲ-8 参照

伊藤 だいぶギャップがありますね。

西田 これは高等教育です〔図版「主要国における高等教育機関学

初等教育は在学率の上昇ばかりで、大正何年ぐらいいから一挙に一人当たりの教育費を増やした。それに対して大学のほうを見ますと〔図版「学生1人当り高等教育費と高等教育該当年齢在学率との関係」参照〕、明治の初めの頃には一人当たりの教育費を伸ばしたけれども、あとは昭和五年、昭和十五年、このへんは戦争中ですね。在学率は横ばいになっているわけです。これらあとは、今度はやっとこの辺からグッと伸び出した。やはり、これに対する国際比較があります。

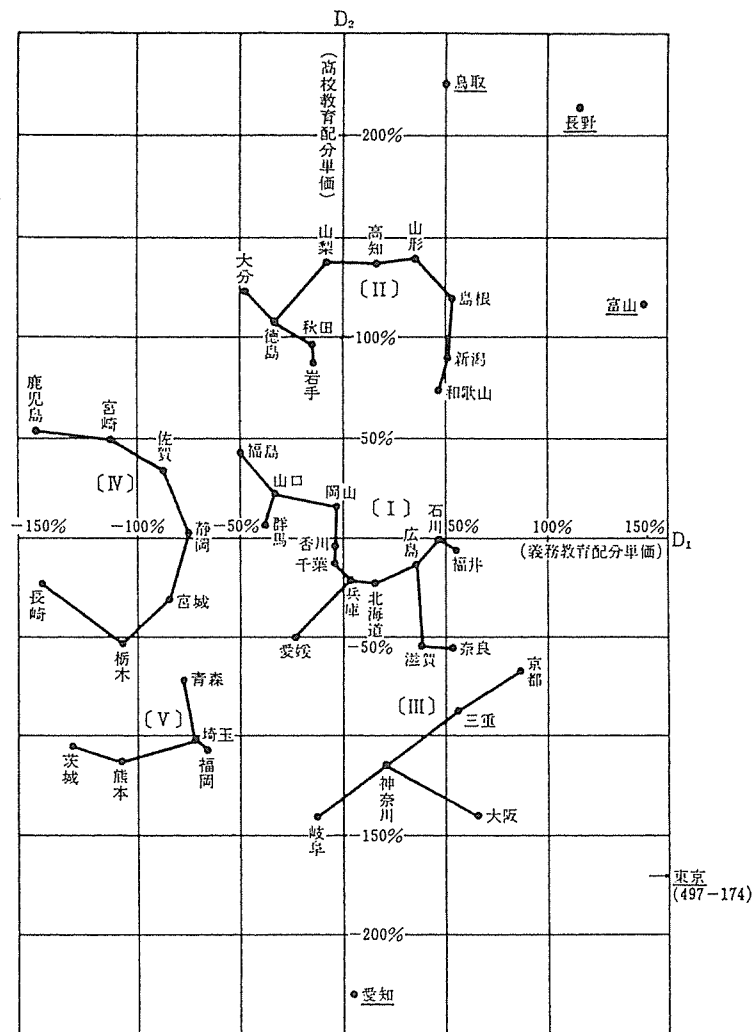
生1人当り消費的教育費と該当年齢在学率との関係」参照〕。こちら側の一人当たりの教育費ですが、こちらは在学率。日本の高等教育というのはグッと横ばいしているわけです。一人当たりの教育費を増やさないと、大学というのは在学率だけを増やした。イギリスは少数エリート主義ですから、在学率を伸ばさないと、グリーンとこういつている。アメリカは、こういつている、スパートニクでグリーン伸ばした。非常に政治的な傾向が分かって、日本の高等教育投資というものは経済成長以後は横ばいしている。大蔵省が一番嫌がるデータなのですけれども、一人当たりの教育費という、どれくらい金をかけているかというのは、国民の所得水準によりますが、日本がずっとこういつていますね。イギリス、アメリカ、

所得によって、日本の初等教育は各国の趨勢とほとんど同じ傾向を辿っていて、初等教育は非常に国際水準並みにいつている。経済が上がっていけばどんどんいくのだと。ところが、それが高等教育になってきますと、イギリスがグングン上げている、アメリカもこういつている。日本はこんな下のほうを這っているわけです。一人当たりの教育費については、特に私学が多いものですから、ずっと国民所得の割合に比べて一人当たりの教育費が低迷しているということです。まあ、こんなようなことで、国際的な数字から見ると、日本の高等教育に対して、国の財政の伸び方に比べて努力が足らんぞということをいつているわけです。

伊藤 確かにそれを見ると非常に極端に差がございませうね。

西田 国が貧しいからということだけではなくて、同じ水準でも、小学校教育だけでは一人当たりの教育費は大体国際的にいつている。だけれども、高等教育は

図Ⅲ・B-5 各都道府県の義務教育・高等教育の配分単価（昭和40年度）



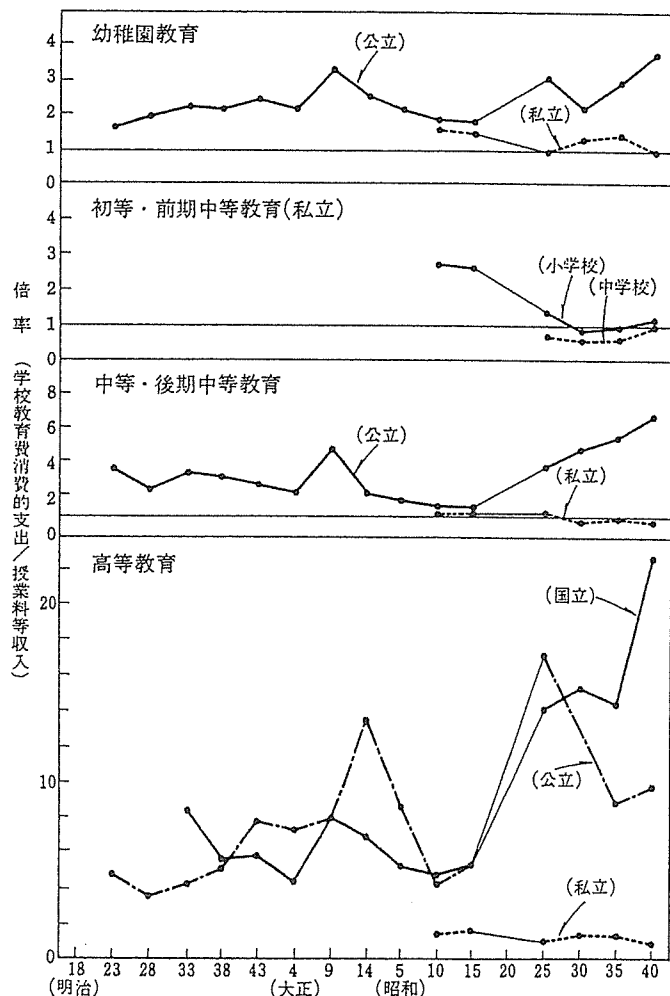
(注) 1 「配分単価」とは該当年齢人口1人当りの公財政実支出額をいい、両軸の目盛りは、それぞれの全国平均値を原点として、それぞれの標準偏差に対する比率を%で示した。
2 資料 No.Ⅲ-15参照

ガタ落ちだ。特に大学は私学が多いものですからね。これが国民経済と教育費の問題です。(答申要注目点、二ページ) Bのところでは「教育費の負担区分」というのがありますが、一体その教育費を誰が出しているか。国が出しているか、都道府県が出しているか、個人の受益者負担か。この「原本答申書」なかで、一九一ページです

西田 これなんかは、義務教育にかけるとともに、高等学校教育にも非常に金をかけている。愛知県なんかはこの辺に落ち込んでいるわけですね。
伊藤 東京はこんなところにある。
所澤 東京は、高校は私立が多いからですよ。

か。一九六ページにもおもしろいのがあります(図版「各都道府県の義務教育・高等教育の配分単価(昭和40年度)」参照)。これは、全国の平均を真ん中にとって、これ(縦軸)は高校教育のほうの単価、これ(横軸)は義務教育のほうの単価。平均値というのは真ん中です。義務教育と中等教育のどちらにウェイトを置いているかというのは府県によって非常に違うわけです。義務教育のほうに落ち込んでいるのが、こういう県ですね。
小池 鹿児島とか。
伊藤 これは義務教育のほうにあまり負担をかけてないということですか。
西田 金をかけていない。大体この平均値よりも低いんですね。鳥取県とか、長野県なんているところはポイントと出ています。
伊藤 富山も。

図Ⅲ・B-7 受益者負担額に対する教育サービス還元率



(注) 資料 No. Ⅲ-20参照

西田 そうですね。

小池 長野とか鳥取というのは国公立高校に比重が大きい格好になってしまっているわけですね。

西田 ええ。こういうところで地方公共団体の金の出し方の問題と、それから「原本答申書」一九九ページです。

伊藤 受益者負担額に対する教育サービス還元率〔図版参照〕。

西田 個人が学校の授業料負担で幾ら出しているか。出した金に比べて、教育費としてどれだけ教育してもらっているか。だから、出した金よりももらっている教育費のほうが少なければ還元率が少ないわけですね。これはそういうものをやったんです。幼稚園教育だと、二倍か三倍くらいもらっているわけです。ということは、授業

料以外に外から負担してくれているという。

伊藤 受益者負担だけではなくて、という意味ですか。

西田 そういうことです。ほかから助けてもらっている。高等教育の場合には、明治の初めから最近まで「一九七〇年頃まで」受益者還元率というものがだんだん上がってきている。

伊藤 上がってきているというのはどういう意味ですか。

西田 より多くを。

小池 払っているということですよ。

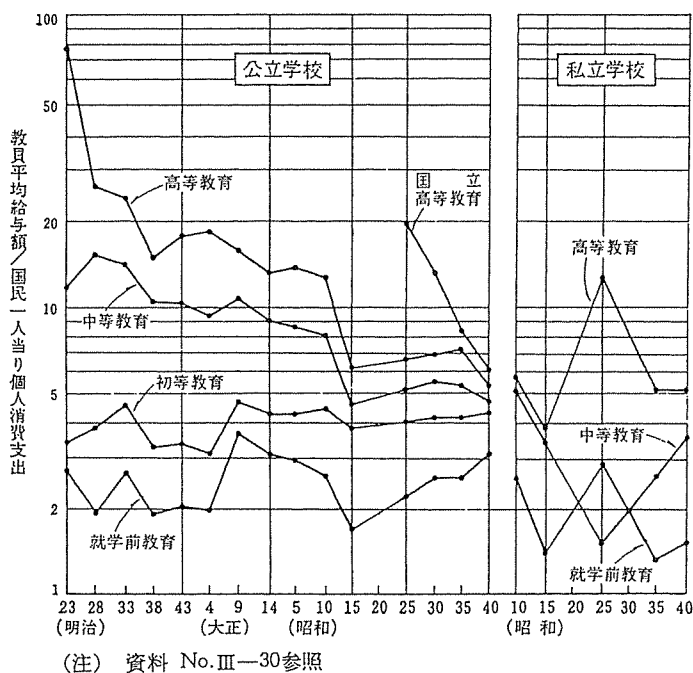
所澤 授業料が高くなかったということと関係があるんじゃないですか。

西田 だけれども、公立と国立ですよ。私立は一くらいです。一よりちょっとスレスレで、授業料と同じ程度くらいしかもらっていない。国公立は高くなって、これだけ還元率が違うわけです。国立はもらっている授業料の何倍ももらっているわけですね。これは一〇倍くらいもらっているでしょう。

所澤 前にも話したことがあるのですが、僕が大学に現役で入ってれば一カ月の授業料が一〇〇〇円〔昭和四十八年〕でした。浪人して入ったら一カ月三〇〇〇円になりましたけれども、一年間の授業料は三万〇〇〇円です。今は一年間の授業料が五〇万円くらいですから、急激に上がっているわけですね。だから、たぶん今はもっと国立の部分の低くなっているのだと思います。

西田 低くなっていますね。還元率は下

図Ⅲ・C-3 教員平均給与額と国民1人当り個人消費支出との関係



がっているでしょう。私らがやった頃は、国立大学の授業料が本人にかかっている一人当たりの教育費の四、五%しか出していません。九五%は税金でまかかっていました。

伊藤 幾らだったかなあ、三六〇〇円とかいう時代じゃなかったかな。

小池 いま授業料は国立と私立はそう変わらないんですよ。

伊藤 今？

小池 今はあんまり変わらないと思います。変わっていても二〇万くらいですね。

所澤 まあ、領域によりますけどね。

小池 文系だと、中央大学が七〇万くらいで、広島大学が五〇万くらいですから。ただ、教員一人当たりの学生数は、広島大学が一人くらいで、中央大学は二五人くらいでしょうか。だから、そこで二倍程度の差がつく。このため差は縮まったのではないのでしょうか。

西田 そのあとの教育費の用途別のところの二番目に、先生の平均給与というのが明治以来どう下がってきたかということ。〔図版「教員平均給与額と国民1人当り個人消費支出との関係」参照〕。

伊藤 どう下がってきたか(笑)。

小池 高等教育の下がり方はひどいですね(笑)。

伊藤 それはそうですよ。僕が助教授から教授になったときに、岡〔義武〕先生が、「あ、きみも給料が何倍かになったろう」といったんです。びっくりしてね、「いや一〇〇〇円か二〇〇〇円上がりましたよ」と(笑)。

一同 アハハハハッ(笑)。

小池 そうなんですよね。昔だったら、号俸が上がると、それに伴って級も持ち越しになっていたのだけれども、今は公務員と同じようにそれをならしちゃった。

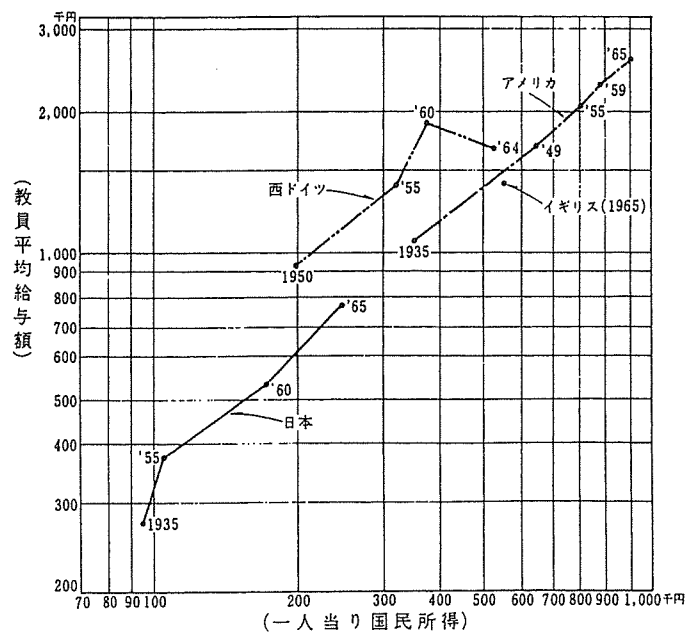
伊藤 それと、教授は特別なお金がつくんですよ。

所澤 昔は。

伊藤 ええ。助教授というのは、昔は教えなくていいのですからね。だから、教授は負担があって、給料がガーンと上がると。

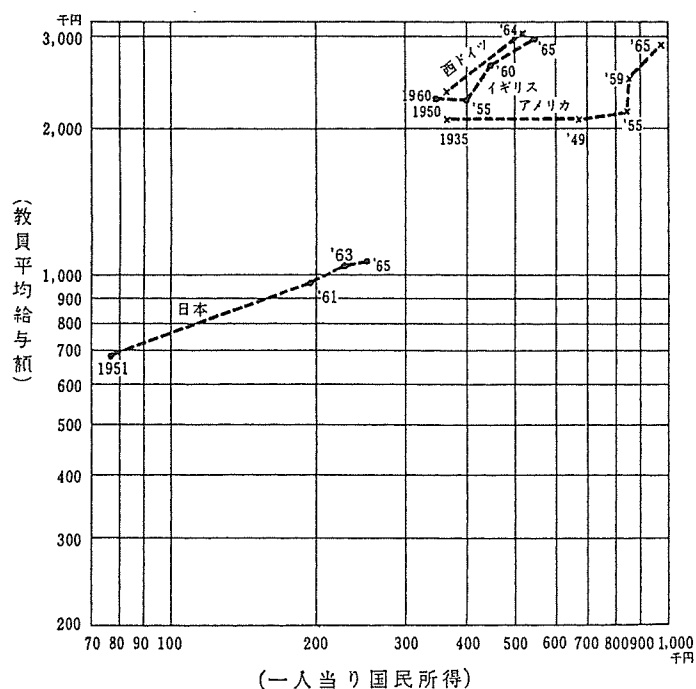
西田 ここに、主要国における平均給与と国民一人当たりの所得ですね〔図版「主要国における教員平均給与額と1人当り国民所得(初等・中等教育)」参照〕。これは所得水準です。初等、中等教育は日本がこうで、所得の高いところの西ドイツ、アメリカはこんなですね。大体国際水準にあるわけです。大学教育はだめなんですね〔図版「主要国における教員平均給与額と1人当り国民所得(高等

図Ⅲ・C-7-(1) 主要国における教員平均給与額と1人当り国民所得（初等・中等教育）



- (注) 1 教員の範囲
 日 本……公立学校本務教員
 ア メ リ カ…… " 教職員
 イ ギ リ ス…… " 有資格教員
 西 ド イ ツ…… " 教職員
- 2 資料 No. Ⅲ—35参照

図Ⅲ・C-7-(2) 主要国における教員平均給与額と1人当り国民所得（高等教育機関）



- (注)
- 1 教 員 の 範 囲
 日 本……国立大学本務教員
 ア メ リ カ……公・私立大学教員（講師以上）
 イ ギ リ ス……総合大学（すべて私立）教員
 西 ド イ ツ……国立大学教職員
- 2 資料 No. Ⅲ—35参照

教育機関)。日本はこの辺をウロウロしているわけです。こちらはこんなに高いですね。この水準からいくと高等教育は落ち込んでいるわけです。

小池 日本の大学は大衆化していますから。

伊藤 これは国公立大学を含めてですか。

西田 国公立を含めてです。

伊藤 今は国立大学のほうが安いんだものな。

所澤 はるかに安い。

伊藤 はるかに安いですよ。いや、あんまり自信を持っていいっても(笑)。例えば、いま早稲田大学の僕と同じくらいの平均給与が二〇〇万くらいですかね。僕らが八〇〇万程度ですから、四〇〇万ほど、一・五倍くらい違いますね。

西田 第二段階のおしまいの経済の最後にDと書いてありますが〔答申要注目点、二ページ〕、「教育投資の経済的・文化的効果」。これはこの本文には文章しか残っていないのですが、経済的效果というのはソ連かアメリカの経済学者が最初にやり出して、教育投資というものは、お金を使うのではなくて、人間のなかに能力の蓄積として残るといいうゆる資本的な投資だという考え方で、いわゆる資本と人数とかいろいろなものを計算していても、教育投資をした量に応じて生産性が上がっているという形で経済効果というものを実証したものがあつたわけです。それに応じたようなものをこれでもある程度やりました。ところが、それはそれでいいのですけれども、非常に意欲的に手をつけようとしたのが文化的効果。教育というのは経済のためにあるのではなくて、やはり文化全体の発達のためにあるんだ。文化的効果を評価できるようなことをやろうというので委員会をつくりました。委員長が三菱製鋼の社長の中島さんという人でした。その先生も非常に張り切つて、いろんな資料を集めろというのでやったのですが、この答申のなかに書いてありますが、

最終的にそれにふさわしいデータが得られないことと、経済的效果と文化的効果の分離が非常に難しいので、とうとうお手上げになった。非常に残念だということで、その委員会の文化的効果についてはさじを投げたのです。

普通、効果といえば、乳幼児の死亡率が減ったとか、病気が治りやすくなったとか、そういうのはみんな経済的效果に還元されるのですね。医者にかかる金があるから、文化的効果ではない。純粋な文化的効果とは何かといえば、同じ経済的条件のなかで、ある教育を受けた人と受けない人が自分の価値判断によって物を選択したり、道を選んだりする、仕方が変わるということを立証しなければだめでしょう。文化的効果というものは金で計算できないものなのだから。そうすると、そういう人間の価値の選択が教育程度によって変わるということとを、経済を捨象してデータが得られるか。これが非常に議論されて、結局、今のところは間に合わないということとでさじを投げたのです。そのときに、情けないことに文部省ともあろうものが、教育というのは経済に対する法、手段に過ぎないと。「もって文化の向上に寄与する」なんていつもいつもいっているくせに、向上したという証拠を見せろというと、何もありませんってね。それでいいのかということと非常に悔しがったのですが、だから、文化の発展に寄与するなんていうことは何をもっていつているのかと。それがきわめて架空の議論だということがやっと分かったのです。一体何なのでしょう(笑)。文化庁なんていうのを掲げていてね。明治から大正、現在まで文化が発展したといえるのかどうか。

伊藤 質のことをいわなければ、例えば図書がどれくらい売れているかとかね。

西田 それだって買う人があるからでしょう。

伊藤 まあ、それはそうですね。いやいや、図書館ももちろんありますから、図書館がどの程度利用されているかとか、美術館の入場

者がどれくらいとか、音楽会に。

西田 何人来ているとか？

伊藤 ええ。

西田 そのなかから経済のことを捨象する方法が。

伊藤 それはなかなか難しいです。

西田 お金のほう条件が同じでも、確かに教育によってこういう効果が出ているということをどうやって出したらいいのか。四年間の審議のなかで、我々としては一番そこが敗北感を持っているところです。しかも、文部省での審議会でも文化的效果を出せなかったというのは恥ずかしい話です。

伊藤 まあ、最近いっているのはノーベル賞の数とかね（笑）。

小池 あれも経済的效果に還元されていますね、今。島津製作所みたいに株価に反映されるわけですから（笑）。

西田 ノーベル賞の数からいうと、インドなんかに負けるんじゃないですか。人口比率からいってもね。

■ 高等教育の改革すべき課題

西田 あとは第二段階です。こういうところからどんな問題があるかというのは一応これ〔抜粋答申書〕にも書き上げて文章として出ているわけです。それをどう解決するかということを、初等・中等と高等に分けて、二十五、二十六の委員会をやり出した。最初の高等教育のほうの改革の構想は二十六特別委員会が担当したわけです。この部分がそこ〔答申要注目点、二ページ〕に書いてあるわけです。冒頭のところだけを申しあげますと、これは私どもが多少得意だったのですが、高等教育の改革すべき課題は何かということは、単にこれをこうすればいいのだという一直線の改革方向があるので

はなくて、ここに「二元対置」と書きましたのは、相矛盾する要求にどう対応するかというのが高等教育の難しいところだと。第一番目では、一方においては趨勢として高等教育は大衆化して、われもわれもというような人に対する高等教育の皿が要る。そのことと、限られた少数の知的エリートはどう養成するかという、この矛盾した要求にどう対応するかという問題です。それが一つ。その次に、一方においては、学問がどんどん進歩するので専門性というものがどんどん深まっていかなければならない。しかし、この複雑な世の中ですます基礎的な教養というものを充実しなければならぬ。一般教育と専門教育との矛盾した要求ですね。三番目が、大学というものは学問の教授・研究について自由が保証されなければならぬということ、膨大になっていく大学の組織・運営をどう効率的にやっていくかという矛盾。四番目が、大学自身の自主性というものが確保されなければならぬけど、それが独りよがりになる閉鎖性をどうやって排除するか。最後に、大学の自発的な創意、俺の学校はこういうものにしたという方向の決定を、大学自身の自発性に期待するということ。個々の大学が自由にやれば全体がうまくいくか、そうはいかない。国として計画的にそれを調整しなきゃならぬ。国が統制ではなくて調整をやるということ、個々の大学の創意というものをどう調和させていくか。これはどれも難問なんですよね。この点が初等教育とまったく違うところで、この相対立する要求というものにどう対応するか、これが高等教育の最大の問題だということをまず挙げているわけです。

こういう発想法であとの改革の方法をやらうとしたということが前提で、その一方で、「いや、大学の自治だ」というようなことばかりをいうと、一方だけを強調しているだけで問題解決にならないわけですね。このなかで最初の、いわゆる大衆化とエリートの育成ということとの解決策として提案しているのが、次のAの「高等

教育の多様化」です。これをいったら、日本じゅうの大学から悪口をいわれたわけです。それで、中教審が初めて、第一種から第五種の高等教育機関というのを提案したわけです。一種は俗にいう大学で、そのなかにも、総合領域を勉強するものと、専門体系をやっているもの、ある目的だけを専攻するものがあったいいのではないか。短大は、教養型と職業型。これは今もありますね。それから、高専について非常に議論があったのです。工業高専だけができていなければならないのではなから、中学校を出たばかりの人に高等学校の段階に大学の二年間を加えた五年間のあの年齢層というのは非常におもしろいので、このなかで、何も工業だけではなくて一種の早期教育をやったほうが効果が上がるようなこと。例えば音楽の学校などというのはそれからやったらいいのではないかと。もう一つは、旧制高等学校みたいなものをつくったらどうだと。大学の入学試験なしに、五年間できわめてリベラルな自由な勉強をする。高専ではないですけども、そういう学校を考えたらどうかというのが一つ。そのあとは、大学院はむしろ学部の特長として社会人のある分野をもっと勉強したいという再教育の機関とし、純粹な博士課程の学問は研究院というのを別にしたらどうかと。今はなんかそんな傾向に進んでいるでしょう。この頃は研究大学院教授というのがそろそろできていますね。

小池 大学の学部が重点化して研究科になっていますからね。

西田 そうでしょう。だから、そのときに研究院というものを独立させるという考え方が出ているのは、私は先見の明があったと思うのです。こういうことで多様化ということをしたのですが、これはついに手が付きませんでした。これが答申のなかでの一つの重点なので。この問題は、さっき申しあげたOECDの会議に日本の教育政策の議論をやったときに、日本の大学というのは全部が同じようなどんぐりの背比べみたいな格好で、個々の学校の特色がない。

もっと多様化しなければいけないけど、その多様化を妨げているのは文部省が窮屈な制度でしばっているからだという議論が強く出まして、それを専らいったのがロンドン大学のドアさんです。

伊藤 よく知っていますからね。

西田 私はすぐ手を挙げて反論したんです。「アイ・ドント・シンク・ソー」とね。日本の大学に自由に学校を自分の好きなように改革しろという案を出したら、みんなが東京大学のまねをする。それが日本なんだ。決して多様化しない。多様化しようとするならば、画一的に多様化しなければだめだとね(笑)。

一同 ハッハッハッハッハッ(笑)。

西田 ユニバーサリー・ダイバーシファイド(笑)。天城さんと一緒にいって、僕は癪に障ったからすぐに手を挙げた。あなたは日本のことを知らないけれども、自由にやれといったらみんなが東京大学のまねをするのが日本の風土なんだ。

伊藤 今、独立行政法人になるというので、みんなやっていることは同じじゃないですか。

小池 画一的多様化の時代なんですよ。

西田 明治の学制改革とか明治維新というものが日本の近代化を推し進めたのですけれども、ああいう形での近代化とか進歩という考え方が日本人のなかに後遺症として残っている。新しいものとか、改革というのはお上のほうから来るものだと思って、それを待っているというところがあるのですね。個々の部分が自発的に自分でオリジナリティーを出しているというこの改革の思想というのが日本のなかでまだ根付いていない。

所澤 まったくそうです。

西田 そこが明治維新の後遺症だという感じがするのです。あの早い近代化というものをお上の力でやってしまったということが、よかったとともに、いつまでたっても本当のデモクラシーの基礎がで

きないという一つのジレンマです。痛し痒しなんです。ドアさんにはそういう格好で反論したことを思い出します。

所澤 ちょっと雑談ですが、今でも大学の改革をしようとする、「文部省が」一体何を考えているのか分からない。文部省の考えていることを探れ。学内では、「学長が何を考えているのか分からないから意見が出せない。学長の意見をどうやったら聞きだせるか」。そんな話ばかりしているんですね。まさに明治維新の後遺症なのか。

西田 どこか外から来るということのを待っているようなところがあるでしょう。

小池 自分で改革しようという発想はないですね。

所澤 ないですね。いや、まだ若いほうはあると思うのですけれども、年配の人たちはないと思います。

小池 特に五〇代の人にはないですね。

伊藤 国大協というのがあるでしょう。あれが文部省と各大学の学長たちをつないでいる組織ですからね。文部省もあれに乗っかって、名前は変わっても現状維持をやっている。公立大学のほうもある程度そうです。だけど、実際に独立行政法人というのはどういう姿になるんだという姿がまだはっきり見えないんですよ。これは文部省も見えていないんですよ。

西田 独立で、自己責任で一人歩きするということを経験したことがないから。その点、私もがこの法人化をいったときに、私自身がありがたいことには前に申しあげたように会社で破産を経験したこと。完全に独立して、破滅した、その体験というのは非常に貴重ですね。だから、独立法人をここでも提案しているのですが、それをするかといったときに、私はあの段階で、今の文部省の役人として育ってきた人間がそれに手をつけようとしてもだめだろうと。独立して歩いた経験がないのだし、文部省の行政官を全部教育し直さなければ新しい法人の事務組織というものはだめですと、私はそ

う思ったんです。それはまだ容易なことではないです。特殊法人といっても、中途半端なことをしてやると、法人化したことの意味は何もなくなってしまうからですね。

伊藤 まあ、そうですね。

西田 それは、特に育英会を私は担当していて、育英会は大きな特殊法人でしょう。法律でできている。育英会を見ていて一番感じたのは、政府と民間との悪いところだけをとったようなものだ（笑）。いいところをとるのではなくてね。親方日の丸で金をもらえるから気楽だ。しかし、中身においては、民間だというから労働組合があって、勝手なことをいっているわけです。私どもに給与の待遇改善というので育英会の労働組合が押し寄せてきますから、私が労働組合の人にいったのは、「僕は前に民間の会社で労働組合の委員長をやっていたんだ。民間の場合には、その会社の生産したものに對して俺たちにどれだけ分けてくれるかという生産物の配分なんだ。あなた方は育英会で何を生産しているのだ。国民があなた方を養っているのならば、国民の立場からいえば、できるだけ安い給料で仕事してくれたらいい。これしかないんですよ」と。育英会の労働組合は弱っていましたよ（笑）。基本的に、そういう富の配分という思想がないわけです。だから、それはやはり労働組合にしてもちょっと不満でしょう。中途半端なんです。自分たちが努力して、生産性を上げて、内部の経費を浮かせて、次にいいことをやろうと思ったらそれだけの富の蓄積ができるようにしてやらなきゃいかん。余った翌年の予算を削られるだけです。まさに民間の悪いところをとったわけです。きょうはこの辺まで。

伊藤 そうですね、切れ目としては。

西田 この二ページのおわりのところまでにさせていただきましょうか。

伊藤 では、三ページから次回ということでお願いします。

西田 この次に最終段階のやつ〔答申要注目点の続き〕をもう一遍また〔作成して配布します〕。あと二枚くらいでおわると思いますが、最後にこの答申の後始末という問題と、これがどういう運命を辿ったかというところの問題が、特に大事だと思います。しかし、ここでごらんいただいたように、第一段階で過去のデータを実証的に調べ上げて、その次にそれを解決するためにどういうことが可能かという基本構想をつくって、その次に、基本構想を実現するためには政府としては何をするかという政策立案。これは政策研究所の立場としては一つの興味あるポイントだと思います。そういうステップを踏んだということだけは一つはつきりしていると思うのですが、それが今度の第三段階に出てくるわけです。

伊藤 でも、本当は第四段階がありまして、考案した政府が何をなすべきかということを実際に法案なり制度なりにして動かしていくというところが実は問題でありまして。

西田 我々の中教審が行き詰まったあとで臨教審ができましたね。

伊藤 同じことをやったじゃないですか。

西田 私はそのときに申しあげたのですが、中教審の場合もいろいろな方のお知恵を借りてやって、審議会がこうしたらいいだろうという案を出す。私は、それは一種のアリストクラティックなプロセスだと。知恵者が集まって知恵を出して、こうすればよくなるという案を出した。そのアリストクラティックなプロセスでは物が変わらない。その次に、出た答申を実行する段階はデモクラティックなプロセスが要るのだと。そのためには、中教審の一番後ろの段階で、この答申が実行できるかどうかと非常に委員さんは皆さん疑問を持っていたのです。第三の教育改革なんて、これはとてもだめだろうと。組合が反対しているし。だから、これを実行するためのシステムというものを考えなきゃいかん。そうじゃないとこれは宙に浮いてしまう。そのときの委員会の議論として出てきたのが、国民教育会議を

つくれと。デモクラティックなプロセス。それには、父兄の代表も、学識経験者も、労働組合も、みんな入れて国民教育会議をつくって、そこで、「中教審はああいうことをいったけれども、あのなかから何を実行したらいいか」ということを議論して、「これを取り上げよう」「いや、これはだめだ」と、甲論乙駁の結果これだけはやろうと決まったものを、内閣はそれを取り上げて実行する。そういう国民教育会議システムというものをつくらうということで、それを答申に書くということになって、私が起案しました。そうしたら森戸先生が、「我々が諮問を受けているのは答申の出たあとのことまでではないから、それは越権だ。だから、それは答申が出たときに私が総理大臣に持って行って説明するから、それは答申に書くのはやめてくれ」といって、森戸先生の意図でストップになったのです。私は今でも、その国民教育会議、デモクラティックなプロセス、そのステップが次にないと、出た政策が実行段階には入れないだろうということを感じます。

伊藤 しかし、四六答申の場合は文部省の諮問機関ですから、文部大臣が決意するとか。実際問題はどうかでしょう、文教族の人がカチッとこれを受けとめて政策実現の方向に持っていけないかぎりではないのでしょうか。

西田 政党のほうの文教族というのは、何が答申されたかなんていうのはまったく関心ありませんでした。坂田大臣のときにあれが出て、大臣もまもなく変わられて、天城さんも変わっちゃって、私は答申が出て二ヵ月目にほかに配置換えになって。

伊藤 どこに配置換えになったのでしたっけ。

西田 ユネスコ。それで、文部省の内部がガチャガチャと、もう一段落だという格好で、かろうじて前に申しあげた初中局に教育開発研究センターをつくった。それが、局長が、「おまえ仕事をやるな」といったという。そういう格好で、率直に言って行政のサボ

タージユです。それを一貫してやるというシステムができていないから。国民教育会議をつくらうなんていうアイデアは、それが書かれたとしても、誰もそれを実行する人がいなかった。それは、本当はその中心である文部大臣が内閣の問題としてそれを取り上げればいいのですけれども、そういう政治力は出てこないんです。

伊藤 やはり最終的には総理の決断だと私は思いますけれども。

西田 総理は佐藤（栄作）。森戸先生があの人だったら、「よく分かった。大変ご苦労でした」ということで。ところが、佐藤さんはそのときには沖縄返還の問題で頭がいっぱいだったから、中教審どころではなかった。

小池 日記にも出ていますね。

村上 国民教育会議について、表に出た文章とかそういうものがあるのですか。まったく内部のなかだけですか。

西田 ええ、ディスカッションだけです。私はそれを答申のどこかへつけるように文章までつくりましたけど、もうどこかへいっちゃった（笑）。

伊藤 それはどこのレベルのお話ですか。

小池 森戸さんまではいきましたね。

西田 最終段階の答申書をまとめる段階で、序文とかああいうところのことを全部まとめたときに。

伊藤 特別委員会。

西田 特別委員会か総会でしたかな。こんなに俺たちはいいものをつくったつもりだけれども、これは一体実行されるだろうかといつて。皆さんも、とてもこれはむりだと、あちこちから悪口ばかりいわれて。

伊藤 この委員会は、議事録があるのでしょうか。

西田 文部省にあるはずです。

伊藤 速記録みたいな形で。

西田 企画室が全部それを保存・整理しているはず。もちろん審議日記も書いているから。前のこの表「中教審の審議経過参照」は、私は企画室の昔の審議日記を元にして書いたわけです。とてもこんなものはメモにありませんから。

村上 特別委員会だとすると、それは一番最後の第二十八の特別委員会になるという形になるのでしょうか。

西田 そうです。

伊藤 最後、まとめは二十八ですね。

西田 順序からいえば、二十七特別委員会がずっと総論のところをまとめて、全体を二十八がまとめて。二十四というのは時間的には前にやってしまったわけですね。この特別の諮問は。だから、最終段階で二十七と二十八が出てきます。一番おしまいには、この前の、四十六年の一番おしまいの答申の前に、河口湖で合宿というのが書いてありますね。確かこの頃でしょうね、これで実行できるのだからかといつて。

伊藤 では、ここで一応おわりにしましょう。

中教審46答申の「要注目点」について

2003-2-27

[第1段階] 前期2カ年の調査審議の結果(昭和44年6月30日中間報告)

(P は原本答申書のページ)

1. 教育制度の外部効率関係(第21特委関係)

- (1) 在学率と経済・社会指標との相関分析 P-292
- (2) 各指標の背景にある主要な成分分析 P-298
 - 「均衡発展成分」「段階発展成分」「現状離脱発展成分」「学歴志向発分」
- (3) 男女学歴の均衡 P-93
- (4) 幼稚園と保育所の収容率 P-96
- (5) 上級学校への進学希望の阻害要因と促進要因の分析(S43) P-130
 - 中学⇒高校: 強度Ⅰ＝学習成績、Ⅱ＝世帯収入
 - 高校普通科⇒大学・短大: 強度Ⅰ＝学習成績、Ⅱ＝性別、父母の学歴・職業

2. 教育制度の内部効率関係(第22特委関係)

A. 教育理念について

- (1) 小・中・高等学校段階に於ける教科等の時間配当の変化 P-140
- (2) 大学・短大の専攻分野の割合 P-146
- (3) 小・中の女子教員の比率(国際比較) P-151

B. 人間の発達段階と学校体系

- (1) 就学前教育と初等教育との関連性 P-157
- (2) 初等教育と中等教育の分岐点 P-161

C. 能力・適性に応ずる教育

- 個人差の考え方、能力・適性の把握の方法、コース分けと教育方法 P-162
- 学級編成、英才教育、創造性開発の教育 P-166

D. 入学者選抜制度

- (1) 制度の歴史的変遷 P-444
- (2) 試行錯誤の繰り返し P-450
- (3) 能力判定資料の妥当性の結論 P-171

3. 教育費の財政効率関係(第23特委関係)

A. 国民経済と教育費

- (1) 国民の所得水準と教育費支出の割合 P-179

(2) 学校段階別教育費の比率と配分単価	P-180
(3) 教育費支出と公財政支出の国際比較	P-181
(4) 生徒1人当たり消費的教育費と在学率(義務・中等・高等)	P-182
(5) 同前 の国際比較	P-184
(6) 消費的単位教育費と国民所得水準の国際比較	P-156

B. 教育費の負担区分

(1) 財政主体別の教育費支出率	P-191
(2) 各都道府県の義務教育・高校教育の配分単価の比較	P-196
(3) 主要国の学校教育費の財源別構成比	P-198
(4) 受益者負担額に対する教育サービス還元率(各学校段階別)	P-199
(5) 国民消費水準と受益者負担額の国際比較	P-200

C. 教育費の用途別配分

(1) 消費的単位教育費と生徒数の関係	P-207
(2) 教員平均給与額と国民1人当たり個人消費支出	P-208
(3) 教員平均給与額と1人当たり国民所得の国際比較	P-213

D. 教育投資の経済的・文化的効果

[第2段階] 後期「基本構想」作成審議の結果(昭和44年4月30日及び昭和45年1月12日の中間報告)

(p は抜粋答申書のページ)

1. 高等教育の改革(第26特委報告)

[二元対置式課題設定] p-45

- (1) 大衆化の趨勢 vs 知的エリート育成の要請
- (2) 専門性の深化 vs 基礎的教養の充実
- (3) 教育研究の自由 vs 組織の効率的な管理
- (4) 大学の自主性の確保 vs 閉鎖性の排除
- (5) 大学の自発的創意の尊重 vs 国の計画的調整・援助

A. 高等教育の多様化

p-52

- 第1種(大学) ⇒ 総合領域型、専門体系型、目的専修型
- 第2種(短大) ⇒ 教養型、職業型
- 第3種(高専) ⇒ その他の早期専門教育、リベラルー貫教育
- 第4種(大学院) ⇒ 修士課程、社会人の再教育
- 第5種(研究院) ⇒ 博士課程

B. 教育組織と研究組織の機能的分離	p-62
大学院・研究院で組織を区分して編成、助手の職務と身分の再検討	
C. 高等教育機関の規模と管理体制	p-65
中枢的管理機関の整備、学外者の参加	
D. 教員の人事・処遇	p-68
人事の閉鎖性の排除、教員の任期制	
E. 国公立大学の設置形態	p-69
公的行政法人、新しい管理機関	
F. 私学に対する国の財政援助方式と奨学制度	p-72
標準教育費助成方式、国公立への適用、助成効果の評価	
G. 高等教育の整備充実に関する国の計画的な調整	p-74
国の長期教育計画の立案・推進の公的な体制	
H. 大学入学者選抜制度の改善の方向	p-77
(1) 高校調査書 ⇨ 選抜基礎資料、(2) 広域共通テスト ⇨ 高校評価水準の補正	
(3) 進学分野で重視する特定能力のテスト	
大学と高校の協力による選抜方法の改善研究の推進	
2. 初等・中等教育の改革(第25特委報告)	
A. 学校体系の開発のための先導的試行	p-21
(1) 4,5歳児と小学校低学年を含む幼児教育	
(2) 中学と高校の一貫学校によるコース別・能力別教育	
(3) 小・中・高の学校段階のくぎり方の変更	
(4) 高専のような中等から高等への一貫教育を他の目的に拡張すること	
先導的試行は、学問的根拠に立ち、制度上の特例を設け、教育者・研究者・行政担当者の協力による専門組織で、10年程度継続実施する。	
★ B. 学校内管理組織と教育行政体制の整備	p-35
(1) 校務分担の職制の整備	
(2) 公立学校と私立学校の地方教育行政の一元化	
(3) 一般国民の教育施策に対する批判・要望を改善に反映させること	
C. 教員の養成確保と地位の向上	p-36
(1) 新任教員が特別な身分で1年程度実地修練して、教諭に採用する	

- (2) 学識経験のある一般社会人を教職に招致するための検定制度の拡大
- (3) 高度の専門性をもつ教員を育成するため、現職研修の大学院の設置すること
- (4) すぐれた教育実績者や高度の研修終了者に、職制と給与で別種の待遇を用意
- (5) 教員が、国民の信頼に応えて専門的な職能団体を結成し、自主的に相互研鑽に努め、建設的な発言で社会に歓迎されるようになること

D. 教育改革のための研究推進措置

p-41

- (1) 教育の質的发展の課題に取り組もうとすれば、その具体的な方法が明らかでなく、今後の研究にまつものが極めて多い。
- (2) 本来教育の問題は、教育学はもとより、哲学・心理学・社会学・医学・工学など、あらゆる分野の学際的協力無しには解決しないものであるのに、そのような体制は出来ていない。
- (3) この現状を改善するには、教育改革のための重点研究課題の選定、その研究開発のための協力組織の整備、必要な研究費の配分、研究成果の普及などを推進する「教育研究開発センター」の機能を確立する必要がある。

[第3段階] 国の基本的施策の立案(第27特委関係)

1. 新しい学校体系の開発と現行教育の充実

p-83

- (1) 先導的試行の総合的な実施計画を立案すること
- (2) 学校の設置者側の希望を考慮して実施校を選定すること
- (3) 実施校を特例校として独自の教育課程と教員組織で運営すること
- (4) 実施校に財政措置を講じ、研究開発に指導と援助を与えるとともに、その成果を継続的に評価できる体制を整備すること

2. 教育改革の推進と教育の質的水準向上のための研究開発

p-84

- (1) 関連学問分野の連携のもとに、学理面・実践面・行政面の努力を結集して課題解決に取り組む推進体制を確立すること
- (2) 文部省の組織の中に、研究協力体制を組織し、関係者の連絡と情報交換を幹旋し、研究費を配分し、成果を行政施策に生かす役割を持つ「センター的機能」を設けること
- (3) このような活動によって、教育という無限の可能性をもつ分野に生き甲斐を感じ、優秀な青年を教職に誘致できるようになる

3. 教員の資質の向上と処遇の改善

p-87

- (1) 新任教員に対する1年程度の実地修練を制度化すること
- (2) 現職教員の再教育のための大学院を創設すること
- (3) 次のような「職制・給与・処遇の改善措置」を講ずること
 - a) 初等・中等の教員給与は、学校種別で差等を設けず、教頭・大学院再教

- 育者・高度の資質認定者には別種の等級を適用すること
- b) 初等・中等の教員の初任給は、人材誘致のため一般公務員に対して30～40%程度高いものとし、校長の最高給は行政職のそれと同等にすること
- c) 大学の助手の初任給は教諭と同等とし、教授の最高給は行政職のそれと同等とすること

4. 高等教育の改革と計画的な整備充実 p-90

- (1) 政府は、高等教育の多様化を促進するため設置基準の運用を弾力化し、整備充実に関する国の基本計画を策定し、目標年次を定めて、政府と大学との緊密な協力によって準備の整ったものから重点的に財政支出を行い、先行的に整備充実を行うこと
- (2) 文部省に、a) 国の基本計画の策定と実施計画の大綱、b) 実施成果の評価、c) 大学設置基準と設置認可、d) 既設大学の提出する改組充実案について、大臣に答申建議する新しい審議機関を設けること
- (3) 大学が全学の意思を結集して改革案を取りまとめ、その実現を強力に推進する指導性を確立するため、学長を助けて改革の仕事に専念できる常任委員を置くことができるようにすること

5. 国・公立大学の管理運営に関する制度的な改革 p-91

- (1) 大学の内部管理には幾多の問題が指摘されながら、これまで具体的な成果が上がっていない。これは大学側の閉鎖的な自治意識から外部からの批判を受け入れようとしない長年の慣行のためである。これを改めるには、前述の制度改革の推進体制を進める過程において、政府と大学の間に基本的な信頼関係を確立することが先決である。
- (2) 「新しい形態の法人」は国の標準教育費による定額補助により、財政運用上大幅な弾力性を認められるものとし「新しい理事機関」は設置者から大幅な権限の委任を受けて自主的に運営するためのものであり、このために必要な法制の整備を行う必要がある。

6. 教育の機会と教育条件の保障(とくに私学助成の問題) p-93

私学政策の転換のため、次のような各種の助成方式から、私学自体がそれを選択できるようにする。

「方式 A」 公立学校とともに、教育の機会を均等に保障する役割を分担する。教育条件、経済負担等につき公的な調整を受ける。公立学校と同程度の財政援助を経常的に受ける。

「方式 B」 一定水準以上の教育の機会を一定量確保する役割を分担する、又は、特定の専門分野の人材育成を分担する。教育条件、経済負担の限度等につき公的な調整を受ける。国・公立学校に準ずる財政援助を経常的に受ける。

「方式 C」 適当な教育条件のもとに特色ある教育を担当する。援助の効果について定期的に厳正な評価を行う。標準教育費の一定割合を助成する。

「方式 D」 公的な計画に基づき特定分野の教育・研究を振興するため、特定の経費を指定して奨励的な補助金を交付する。

7. 大学入学者選抜制度改革

p-98

- (1) 入学者選抜制度は、教育過程の青少年が、学校段階の区切りを最も適切に移行できるための広義の教育制度であり、各学校の都合だけで運用されるべきものではなく、公共性が重視されるべきである。
- (2) これまでの研究により、選抜の妥当性についてはほぼ結論がまとまっており、政府は、その実現のため、関係者の努力に援助を与えるとともに、その実効を保障する必要がある時は、立法措置も検討すべきである。

[特 論] 長期教育計画の策定と推進の必要性(第27特委専門部会)

1. 長期教育計画の必要性

- a) 国家目標による公的な計画的調整の要請、 b) 教育事業に必要な巨大な資源
- c) 質的な刷新のための国家的規模の研究開発、 d) 実施成果の確認に要する期間

2. 予測計量の意義

外的要因と政策選択の選別、予測の失敗による未知要因の発見

3. 予測計量の試算方式

基準推計値 + 課題別推計値 + 政策変動値 = 教育投資総額 ⇨ 負担区分推計値
⇨ 教員需給推計値

p-117

4. 試算結果からの問題点

p-104

- (1) S45→S55 入学者数の膨張率: 高校=17%, 短大= 88%, 大学=49%

p-119

- (2) 公財政支出教育費の国民所得に対する割合の国際比較

p-122

この答申提案の全ての政策課題の実施の可能性あり

- (3) 教員の需給調整の必要

p-118

大学院・研究院の先行拡充、一般社会からの補給の必要

[最終段階] 今後の社会における学校教育の役割(第28特委関係)

1. 人間形成の多面性と統一性

p-8

[A] 自然界に生きる人間、[B] 社会生活を営む人間、[C] 文化的価値追求の人間

それらの均衡のとれた統一的発展が人間形成の目標

2. 社会環境の人間に対する挑戦

p-10

- (1) 経済的・時間的余裕の増大 ⇨ 自由と責任の拡大への対応
- (2) 都市化・大衆化 ⇨ 連帯意識・公共心・主体性の衰退
- (3) 血縁関係の変化 ⇨ 人間の基本的性情形成への家族の教育的機能の低下
- (4) 寿命の伸長 ⇨ 高齢者層の健康と人生設計の問題
- (5) 女子教育の普及 ⇨ 女子の社会的進出の要求
- (6) 国際交流とマスメディアの発達 ⇨ 国家観・民主主義観の混乱

〈対論〉これらの環境に対応する人間形成に問題があるときは、
生活の意味喪失感・目的の一挙実現・欲求の無制約充足・
青年の逃避的傾向・性と暴力の問題が生じやすい。

3. 教育体系の総合的な再検討の必要性

p-12

- (1) [教育]の定義 ⇨ 「人間が、環境とのかかわり合いの中で、自分自身を主体的に形作っていく過程において、さまざまな作用を媒介として、望ましい学習が行われるようにする活動である。」
- (2) 「生涯教育」の観点 ⇨ 「今後の社会で、人間が直面する人間形成上の重要な課題に対応して、いつ、どこに、どんな教育の機会を用意すべきかを考えること。」
- (3) 上のような生涯教育の観点から、家庭・学校・社会の相互補完的な役割を究明し、教育体系の再編成を進めるには、次のような点に調査研究が必要。
 - a) 人間の成長・発達には、いつごろ、どんな学習体験が望ましいか。
 - b) そのための教育的な働きかけには、その目的に対応して、次のどのような態様のものが適当か。
 - ① 環境整備、② しつける、③ 感化を与える、④ 教え導く、
 - ⑤ 訓練する、⑥ グループの中で体験させる、⑦ カウンセリング
 - c) 家庭・学校・社会の中の生活時間・人間関係・期待できる教育機能・自然な学習意欲などの諸条件を考慮して、三者の役割分担を定める。
- (4) このような教育体系の根本的な再編成には、現在、未研究なことが余りに多いので、この答申では、将来の課題とした。

4. 学校教育の役割

p-13

- (1) 当面の対策としては、学校教育とその他の教育活動の相互関係を、次のように要約した。
 - a) 学校教育の特質 ⇨ 一定の教育計画による学習の制度的な保障、同年齢層の同質的な集団、一定資格の教員団、現実社会を離れた学園内の原理的・一般的学習
 - b) 家庭教育に期待すべきもの ⇨ 基本的な生活習慣・行動の節度、自

制心の涵養、自然と生物に対する愛情、人に対する敬愛の念と敬虔な心、生活と勤労に対する真剣な態度

- c) 社会教育に期待すべきもの ⇨ 自然や文化遺産との接触、様々な年齢層と多様な目的をもつ集団活動への参加、思考の抽象化と社会からの疎外感の克服、職場に於ける活動意欲と職務遂行能力の向上

(2) 学校教育それ自体は、今後、次のような点に、改善を加える必要がある。

- a) 特定能力の伸長だけで評価するのではなく、人間形成の多面的・総合的な発達を重視すること
- b) 社会性の発達を助長する集団活動、個人指導のためのカウンセリングなどの方法の充実
- c) 情報化と教育環境の混乱に対応して、学習意欲の正常な発達、知識・経験の再整理による基礎的能力の定着を図ること
- d) 国民一般が必要とする学習のために、学校を開放すること

[中教審46答申の審議経過の概要]

P-545

[諮問]: 昭和42年7月3日

[答申]: 昭和46年6月11日

[中間報告] 昭和44年6月30日 「我が国の教育発展の分析評価と今後の検討課題」

[中間報告] 昭和45年5月28日 「高等教育の改革に関する基本構想」

[中間報告] 昭和45年11月5日 「初等・中等教育の改革に関する基本構想」

[同上の基本構想試案についての公聴会] 関係諸団体・審議会・官公庁 40以上
 仙台(45.7.31)、東京(45.8.13)、広島(45.8.21)

[特別委員会]: 第21, 22, 23, 25, 26, 27, 28 特別委員会

審議回数 240回

[参加委員数]:

(第8期) 正委員=19、臨時委員=20、専門委員=12、研究協力者=4

(第9期) 正委員=21、臨時委員=19、専門委員=5

西田 亀久夫 オーラルヒストリー

第9回

日時：2003年3月15日

14:00～16:00

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊 藤 隆（政策研究大学院大学教授）

小 池 聖 一（広島大学助教授）

所 澤 潤（群馬大学 教授）

■国立大学の設置形態

西田 きょうは、三ページ「資料」中教審四六答申の『要注目点』について以下、答申要注目点の冒頭のところです。このBは中教審の新しい思想で、昔からの伝統的な学部というものが、多様化してきた大学では、教育と研究を一体的にやっていくのに無理があるという思想です。このときに、教育組織と研究組織を機能的、ファンクショナルに分離したらどうかという提案があった。これは筑波大学で一部やったのですが、答申そのものがいつているのは大学院や研究院ですね。そういう一番上級の段階で、この両方を分けたらどうかと。筑波のように学部段階でやるということ必ずしも想定していなかったのです。というのは、上級段階までいくと、先生方が研究に専念する立場と、学生に教える中身というのは完全に表裏一体という形にはいけません。きわめて独創的な研究というのが一人歩きするし、学生には教育上必要なものをオールラウンドにやらなければならないので、そのためのチーム編成ができるようにそれを分離し、一人の先生はその両方に属するというようなことがいわれておりました。これは、筑波が学群、学系という形で一応やっておりますが、はたして成功したかどうかはよく分かりません。

その次に、高等教育機関の規模の管理体制。これはその前の三十八年答申でもいつてきたように、大学が非常に巨大化してしまったから、学長が一人ぼっちで大学を切り回すということはできっこない。中枢的管理機関の整備をやれと。できれば、そこに学外者の知恵も入れたらどうかということが、こここの要点だと思います。

伊藤 今頃いっていますね（笑）。

西田 もう昔のことですね。ここできているのは副学長など。こ

の後置かれた大学はだいたいありますね。これなんかは部分的にやられているところがあります。それから、教員の人事・処遇の問題。これは高等教育だけに絞っていつてみますと、一つは弊害の面で、人事の閉鎖性の排除。これは非常にいうべくして難しいですね。大学間の教員の交流というのができるかと。任期制を設けてほかのところからスカウトする。これは外国では珍しくないのですが、なかなか日本の風土に……。しかし考え方としては、それをやらないと人事が閉鎖的になって、大学の研究活動が生き生きしないということをいつております。

その次の国立大学の設置形態。これはいま問題になっている行政法人化、別の新しい理事会のようなものをつくれと。この公的行政法人という思想は、このときにいわれておりましたが、この前も申しあげたように、一応提案として出しまして、筑波大学でもこれをやらんかといったら、勘弁してくれということ。私は今でもそうですが、この問題を取り上げてやるときに、伝統的な文部省で教育を受けた文部事務官というものを根本的に再教育しなければできないだろうと。幸か不幸か私は株式会社でやってきまして、完全独立採算をやった会社がつぶれたわけですから、借金するということはどういうことかということには身にしみております。これは、そのような必要な経験者を集めなければ行政法人というのは動かないだろうと。今後、親方日の丸で国に何もかもおんぶするというような人ではだめだし、さりとて、いつまでも大蔵省が目光らせて、運営については一々予算の隅々まで指導するというようなことをしたらどうしようもない。やはり、ある基準的な教育費、あるいは行政費というものを渡して、その範囲で運営していつて、金が残れば自分で蓄積して、それを次の生産的なことに使える。その自由裁量の余地を残さなければ、新しい行政法人の意味はないだろう。そのかわり、これになれば、国会公務員制度という予算制でも縛らないし、

人事でも、今の国立学校はいわゆる文部大臣の任免権ということになっていくわけですね。各省大臣のなかで、文部大臣の任免権というのは凄いですよ。日本じゅうにいる何百万人という先生の形式上の人事権を持っている。これが縛りになって、むしろまずいことだろうと。そういう点でこれは、人事の面と、予算の面と、運用の弾力性と、そういうところで非常にうまみを出してくるということが考えられるということです。

伊藤 この行政法人の考え方は、いまいわれている独立行政法人とはちょっと違うのではないかなという気がしますけれども。

西田 まあ、前のときでもそれほど具体的な中身はつめていませんから。ただ、今までのような国立学校設置法でつくと、国立大学というのはみんな、法令上は一種の行政官庁なんです。そして、その長である学長は、文部大臣が任命して、国の行政組織の管理規則というもので全部縛られていくと。したがって、本来、大学の自治なんていうような、そういう自由度があるはずはないのです。最終的には、文部大臣が「これ」といったら、それをやらなければならん。そういうのがもとと建前なんです。独立の行政法人にしていけば、そういう意味で、必要なものを与えて、あと運用の弾力性で自分の責任でやっていって、それがいいか悪いかということの結果的に評価して。評価によって、より手厚く財政上の援助が来るとか、いろいろなことがあってもいいのではないか。そういう形でその当時は考えておりました。今のものがどういう点で新しい構想としていわれているのでしょうか。

伊藤 結局まあ、実際に読んでみますと、逆にがんじがらめといえますか。評価も、文部省が任命した者が評価をするわけですから、文部省自体は、一応第三者といいながら、結局そのへん責任を押し付けて、評価をして、資金の配分をする。それから、実質的なボードがないのです。学長独裁はいいのですけれども、意思決定が完

全に学長一人ですから。

西田 しかし、学長も運営はとても一人ではやれないでしょうからね。

伊藤 一応、理事会……、国立大学法人というものをつくって。

西田 その法人の理事会ができるわけですか。

伊藤 法人の理事会がないんです。

西田 ないんですか。

伊藤 ないんですよ。

西田 株式会社でも取締役会がありますね。

伊藤 はい、ないんですよ。

西田 そうですか。

伊藤 ですから、変な組織なんですよ。その法人が大学を経営することになっているのですけれども。

西田 それはちょっと離れたところにおけるわけですか。経営して。所澤 今度の大学法人は、経営ではなくて、大学自体を法人にするという。

伊藤 そうじゃないの。

所澤 ではないのですか。

伊藤 法人が大学を経営する。

西田 だけど、今は学校の存在の基盤である設立者というのは国ですね。この行政法人になった場合には誰が設置者になるのですか。その法人が設置者ですか。

伊藤 いや、国が法人を設置する。

西田 国が法人を設置して、国の委託を受けて法人の組織がそれを管理・運営していくと。

伊藤 そうですね。で、法人の長と学長が同じなんですよ。

西田 それは私立学校法で、私学の人は学校法人の理事長がちゃんとおられて、形式上は学長というのがまた別ですね。

伊藤 大体別になっていますね。

小池 一緒なんですよね。

西田 今度はそれが一本化されているような形ですか。いや、今度のやつはよく知りません。

伊藤 本当に、ちょっと変なことになったなあと思っていますけれども。

西田 どういう点で、それが今の行政組織としての国家公務員法による大学よりも自由度ができて、新しい独創性がそこから生まれるのか。

伊藤 いや、あんまり独創性は生まれそうもないような感じですね。

西田 文部省はあんまり一人歩きされると怖いのですかね（笑）。

伊藤 まあ、そうですね。

西田 自分の配下で、舵がとれるようなものがほしいという、役人の本能的なあれがあるのかも知れません。

伊藤 むしろ、逆に文部省の天下り先をつくっているというような感じがしますけれどもね。

西田 そうですか。そんなもの、下っていったって仕事はできないですよ。

伊藤 いやいや、仕事ができなくていいんですよ。

小池 給料があれば。

所澤 僕は、文部省に勤めている若い群馬大学からいった事務官がいるので聞いたのですけれども、何を文部省の若手の事務官が恐れているかという、地方国立大学が法人化したら、たぶん、銀行だとかそういうところから事務官をどんどんとるようになって、文部省と事務官を交換するなんていうようなことは全然しなくなるのではないか。要するに、文部省の役人のポストがなくなりそうだと、それを非常に恐れている。

西田 それは、文部省の会計職員なんかをとってもだめですよ。

学校の運営をやるのは銀行屋さんのほうがよっぽどましでしょう。

小池 複式簿記になりますしね。

伊藤 そんなに給料払えないんだから。

小池 でも、いま銀行からはじき出される人がたくさんいますから、そういう点では、複式簿記になるし。今までの国立大学会計ですか、ああいう会計ではなくなる。

伊藤 非公務員型というけれども、国家公務員共済組合のメンバーにはなるんですよ。だから、何だかよく分からない。

西田 公務員制度から枠は出ていないわけですね。

伊藤 ええ、ですから何か中途半端という。一応、国家公務員の枠から外れるのですけれども、実質は……。

小池 事実上の給与体系も変わらないと思うのですよね。俸給表なんていうのは全部変わらない。

伊藤 いや、自由にするとはいっているんですよ。いっているのですけれども、逆に国立大学のほうが恐れているわけでしょう。自由を与えられて変なことをやってはまずいから、やはり文部省が決めてくださいと、こういう感じで国大協なんかも。

西田 評価をするといっても、教育・研究なんかの実績というものをどうやって評価するかというのは非常に難しいですね。

伊藤 それもあんまりきちんと決まっていなくていいわけですよ。それをどういうふうな次の年度の予算配分にフィードバックするかという、その仕掛けがまだできていないんですよ。

小池 でも、うちの大学なんかでも、この五年間くらいで業績リストを七回くらいつくられましたけれども、これからは数値化していきますよね。

所澤 業績でも何でも、評価するというのをし始めると、その評価をするのが大変なんですよね。その手間が物凄く大変で。

伊藤 評価のために、まずいろんなデータをたくさんつくらなきゃ

ならない。各大学とも凄いものをつくるでしょう。一〇〇近い大学からドットとその評価する機構にいくわけですよ。そんなものをどうやって評価するのですかね。そうすると、いろんなところから専門家を集めなきゃならないでしょう。大学の先生は、自分でつくらなきゃならないわ、人の評価はしなきゃならないわ、とにかく一年じゅうそのことで追われて、独創的な研究どころの話ではないですよ。

所澤 我々のところでもそれがかなり問題になっていて、結局、学内評価というのも出てくるわけですね。自己評価。自己評価なんかをするよりは、基礎データを全部出して、あとは勝手に外部の人に好きなようにそのデータを使って……。

伊藤 その「外部の人」って、自分たちは関係ないと思うと大間違いで、それが自分たちに来るわけですよ。

所澤 いや、何かオンブズマンの人がいっぱいいるじゃないですか。ああいう人たちに。

伊藤 いえいえいえ、そんなものは評価できない。

小池 日本のオンブズマンなんていうのは、いわゆる食糧費とかああいうものだけを調べるだけの人だから。こんなことをいってはずいか（笑）。

西田 汚職のあら捜しですよ。

小池 あら捜しですよ。お金が適正に使われているかだけを見て、やっているわけだから。

西田 評価というのは、オンブズマンのやっているのは、悪いことをしていないかという見方でやる評価だからね。どこまでいいことをしたかという評価をするのはとても難しいですね。

小池 学位授与機構等が、本当はそういう機能をしなければいけないと思うのですけれどもね。

伊藤 ユニークな研究なんていうのは、そんなものは誰も評価できないですよ。

西田 このときの漠然たる思想としては、国立大学の工学部、法学部、文学部で今までやってきた教育の実績があるわけですね。先生の経費とか、いろんなもの。それを含めて、法学部の学生一人当たりの標準教育費というのは幾らかかる。それは学部ごとに大体決まっています、その標準教育費というのを大学に渡して、あとはそのなかで運営をやってくださいというやり方しかないのだろうと。それで、何年かやっているうちに、それが今の物価なり実情なりから見ても十分だといえ、文部省がそれを考え直す。あとは、どこまで効率的にやったかということはその学校の経理の報告を見れば分かるわけですね。お金は使い残したり、いろんなことをしないで、おいて、しかも、教育効果というものを十分上げていると。そちらのほうから見ていけばいいので、お金の出し入れを一々評価するのなんてできっこないですよ。まあ、そういうことで、これは今日の問題ではありません。

伊藤 いや、本当にそうですよ。

■高等教育の整備充実と入試制度の改革

西田 その次にFは、ここでやはり大変な問題は、私学に対する国の財政援助です。要するに、私立学校が際限なく増えていく。その増えた私立学校に国が援助する責任があるのだという言い方をされたのでは国の財政がもたない。また国民の立場からいっても、そうやたらに学校が増えるのはいいことではない。そうはいっても、この当時で七五%が私立学校なんです。しからば、この委員会では、国の財政援助方式というものをいま申しあげた標準教育費、つまり、その学校の学部、学科の構成から見た標準教育費の一定割合を渡して、そのあとは自分で授業料を取って全体で運営していく、そうい

う国の援助の仕方を標準化したらどうかと。そして、それがもし私立でやれるのだったら、国立もそうしたらどうかと。各大学が毎年予算要求を出して、予算がとれた、とれないということではなくて、国公立大学でもこの方式をやったらどうか。ここに、助成効果の評価ということがやれるのならばやるということが書いてありました。

奨学生のこととは書いてありませんが、財政問題の点から見ると、国が教育投資として、一人の学生にどれだけの金を使って教育するか。それによって内部効率を上げて、教育効果を上げる。お金というものは教育効果に結びつく。奨学金というのは何かといったら、その教育を受けていい成果の上がるような素質の者を入れる。ちょうど工場の生産でいえば、原材料購入費だということです。いい材料を買ってこないと、粗悪な品物を買ってきたら、いい製品はできない。そういう意味で、国民の立場からいえば機会均等という立場がありますけれども、さりとて、誰でもいく権利があるのではなくて、能力に應ずる教育を受ける権利ということですから、その場合の優先度というのは、やはり教育を受ける適格性という形で、奨学金というのは原材料購入費だ。その出し惜しみをすると、粗悪な材料が入ってきて、教育効果が上がらんぞと。財政の立場から見ると、そういう目で奨学制度のウェイトというものを考えたらどうかというのをいいたことがありました。

その次には、Gが一番難しいことで、あの当時もほとんどん学校が増えつつありました。高等教育の整備充実について、やはり国が計画的な調整をしないと、できたものは全部認可される、できたものは必要なのだという形になると、私学に対する援助もできないし、国立学校だって、お互いに将来どうするかという見通しが立たない。今頃になって国立学校の統合なんていっているわけですね。国民の立場から見ると、どの地域にどんな専門分野の大学があったらいいのかということ、何か一つの国家的なマスタープランがあつてしか

るべきで、それに適合するようなものを国が調整してやっていく。このときに、そういう長期計画というものを立てるといふことと、それを一つ一つやっていく場合に、例えば五ヵ年計画でそれを推進していく推進母体というものが要るだろう。その国の一つの行政機関として、文部省のなかに、この答申のなかには、今までの審議会と違った意味での新しい審議会をつくって、各大学の要求を出して、「うちの学校はこういう新しい方向へいきたい」という内容を見て、「結構でしょう」ということになったら、その学校だけに独自の予算を出して、それを実現すると。「あれができたのなら俺のほうも」といふことで、皆さんが積極的に出てくるはずですよ。そういうリーダーシップのとり方をしたらどうかというのがこのときの思想です。それを文部省の役人が予算の査定という形でやるのではなくて、そういう特別な審議会をつくれということを行っています。その後、中教審が終わったあとと大学審議会というのができたのですけれども、これは設置審議会と同じようなものになってしまつて、このときの機能とは違います。これもだめでした。ただ、この計画的整備というのは、それからもう三〇年たちまして、今の段階で見ますと、もう手遅れだと私は思っています。今から外科手術をしたり、それができるかどうか。やや捨て鉢な言い方をすれば、もう自由競争を完全にやらせて、国民のほうがその選択をして、だめなものはずぶれる、いいものは伸びていく、そういう自由競争の方式でいくしかないのではないか。その場合に国立と私立が自由競争できるためには、国立にも私立にも標準教育費というものを渡して、財政面では対等に競争できる、今はそれしかないのではないかと私は思っております。その場合に、量的にどこまでの限度で抑えるかというのは非常に難しい。これもそのときに一部議論はされたのですが、実現はもちろんでおりません。共通一次テストというもので例えば有力な能力テストというものができるようになったとしますと、あのテス

トで、満点が一〇〇点で五〇点以上の人というのは、大学教育を受ける有能な資格を持っている人だ。そのテストで五〇点以上の人については、その試験に合格した人に金をつける。育英会ではなくて。その学生が俺の学校へ一〇〇人入ったといったら、一〇〇人分の金が大学へいく。そうすると、私学は「いらっしやい、いらっしやい」とやるだろうと。しかし学生のはうは、「俺はあんな学校よりもこっちへいったほうがいい」と、入学試験による選別ではなくて、学生の自由選択。持参金付きの学生をもらうようなものですね。そうすると私学の人が大歓迎だと思うのです。そういう思い切ったやり方をしたらどうか。そこまで奨学制度も飛躍的に変わらなければだめだろう。そうすれば、国の財政状況から見ても、学力テストで毎年何万人のうちの何人までを限度とするという形で、一応抑えが効くわけですね。それ以上の人がいくのは自由だけど、国がそこまで責任をもてませんと。そういう限界を設けたらどうかという話がありました。しかし、今はそれをやるうにも手おくれになってしまいましたね。

最後に、Hが入試制度の改革です。これは前から申しあげましたように、いろいろなものを調べた結果、一応、学者の研究としては、高校調査書が選抜の基礎資料だと。それに広域の共通テストをして、高校間の格差の水準の是正をする。今度は、受け入れる側のほうが、俺のこの分野では特定能力が特に重要だからという、非常に目的のはっきりしたテストを加える。これによって選抜をするということが大きな思想としては一番妥当じゃないか。今のうちに、各大学が、自分のところの学生は俺のほうが好きなように選ぶのだといって、学校によって試験科目も違うし、試験の期日もいろいろやっておりますけれども、こういう形は入学選抜というものが、広い意味の学校制度という立場から見ると、各大学の恣意的な運用でやっているのはおかしいのだということが非常に強くいわれました。したがっ

て、一応最大公約数としてのいいものが出てきたら、それを方針としてやるということについて、選抜方法を大学と高校でさらに細かく詰めていって、改善の研究を推進するようにしなさい。これはあとの基本的政策のところに出てくるのですが、そういう方向が出ているのに幾らいつてもやらなかったら、国が立法措置をとりなさいということまでいっています。いつまでも入試というものが自由歩きしているという形では国民のためにおかしいのではないかということです。

所澤 入学試験に対する基本的な考え方なのですが、その考え方は学生の能力をなるべく正確に公平にはかって、そしてそれを入学選抜に利用しようという考えだと思うのですけれども、そういう考え方が支配的になったのはいつぐらいからなのでしょう。僕は、昔は必ずしもそうではないと思うのですね。

西田 支配的かどうか。過去の入学試験選抜の歴史をこれ（原本答案書、一七一ページ、四四五～四五二ページ参照）のなかで膨大に調べていますね。ああでもなければ、こうでもないという試行錯誤をやっています。が、やっていた目的は何だろうと。大勢の入りたい人がおるときに、人数が多すぎるから絞らなきゃならんとなったら、一番公平で恨みっこないのはくじ引きなんです。くじ引きでやるということ。皆さんが納得しないで選抜をやってきたというのは、その選抜試験でこの人のほうがこの人よりも大学教育を受ける資格が優先的にあると、その優先性というものを認めるといふことなどではないか、それしか考えられません。その方法として、テストをやったり、面接をやったり、作文を書かせたりしたけれども、どれもあまりピシヤリという結果は出なかったということではないでしょうか。だから、その大学へ入ることの優先権を持つべき人というものを何らかの方法で見つけるためにやったのだらうと、私はそう思っています。それ以外の思想は、例えば特定の私立学校が、

「うちの学校の心情としては、こういうことをやる人が入ってこい」というようなことを自由な学校がやられたかも知れませんが、一般的な選抜試験としてはそれしかないのではないですか。

所澤 昭和五十年前後だと思うのですが、確か東大で入学試験のくじ引きというか抽選という話が出たことがあるんですね。あれは東洋先生がどこかで話したものが非常に拡大して話が出たのではなかったかと思うのですが、ある程度くじ引きのような要素を入れても、実はその合格者の水準というのはほとんど変わらないのだといううなことが前提にあってそういう話をされたということ聞いたことがあるのですけれども。そういう序列化の行き過ぎということに対するブレーキという意味で、公平性とか公正さというものについて疑問が差し挟まれるということはなかったでしょうか。

西田 東大では、ご承知の、中野区のほうに付属高等学校がありましたが。あそこはむしろ非常に特異なキャリアの人、双子だとか。それで、その他は一般の選抜試験はやらないで、むしろ抽選でやったのではないですかね。あれは教育研究の目的があったわけでしょう。だから、むしろサンプリングで偏りのないものを選ぼうという思想があったのかも知れません。だけど、一般の選抜試験で東大がくじ引きをということをやったら、その当時大問題だったでしょうな。

所澤 付属学校については、僕が聞いた話では、試験をやって、下から四分の一は切り捨てて、上から四分の三のなかで正規分布になるように学生を合格にしていたということだったと思います。付属の場合は、大学の入学試験の問題とはちょっと別なのですから。西田 だけど、その四分の一、四分の三というもので、その分布というのは何の分布なのだと。それが点数の分布ということは、裏をかえせば、大学教育を受ける適格性というものをそれが表示しているのだという考え方があっていいのですか。何なのですか。ただ

選ぶことだけで、中身が分からんということ。

所澤 いろんな考え方があると思うのですが、試験の高得点を目指す競争が激しくなりすぎると、それに対してブレーキをかけようという話があるところから出てきます。その中に、ある程度ギャンブル性みたいなものを入れないと入学試験はどうしても競争を抑制することはできない、——そういうような発想があると思うのです。

西田 この中教審でも、表向きの結論にはならなかったのですが、私どもが主張したのは、高校内申書だけでやって、おそらくそれは同点がそろそろ出てくるだろうから、後は全部くじ引きで決めなさい。それが一番簡単じゃないかと。それに、恨みっこなしだ。そういういたらライシャワーさんが、「それは日本ではだめだ。日本人はああいう一本勝負の真剣勝負が好きなのだ」と。しかも、この前申しあげたように、それをいったときに反対したのが高校の先生で、「内申書を重く見たら、高校のほうが今のよう公平な内申を書かなくなるでしょう」といわれて、がっかりしちゃったわけです。

伊藤 当然、親からの圧力がかかるでしょうからね。

小池 それで一生が決まると思えば、僕も圧力をかけるかも知れませんな。

西田 千葉県の工業高専というのは中学校から入ってくるわけですね。このときに千葉県内の中学の内申書というものは、あそこの教育委員会が、県内で内申書の「一二三四五」の分布というものを標準分布になるように非常に厳密にやらせていました。だから、どの学校から来ても、この人は偏差値が幾らだということが平等に判断できる。そのときに、中学校ですから、学区制があります。ある地域に特別優秀な人が集まっているというはずはないのだから、それを公平に見ていったってかまわないじゃないかと。

伊藤 更正しなくても大丈夫だという意味ですか。

西田 ええ、そういうことですね。

伊藤 でも、中学のレベルでは、やはり都会地と田舎ではだいぶ違うのではないですか。

西田 ところがおもしろいのは、木更津高専に入ってきた者で入ってから成績を見ますと、特に推薦入学なんていうのはもっぱら内申書でやったわけです。そうしたら、市川とか船橋とか東京に近い受験勉強の影響を受けているところの者はたくさん通って、九十九里ヶ浜とか銚子のほうというのはなかなか不利なんです。ところが、入れたあと三年、五年たつと、その九十九里ヶ浜のほうのびるのです。その点もやはり、学校による風土の違いがあるなどという感じがしました。まあ、これは永久の問題で、難しいですね。思い切ってくじ引きでやるというわけにはいきまじせんかな。そうしたらもう、受験勉強なんてばかばかしくて誰もやらないでしょう。

伊藤 しかし、くじ引きでやったら教えるほうが大変だろうな。相手のレベルがバラバラだからね。

■第二十六特別委員会とストレス解消

村上 この第二十六特別委員会で特徴的な考え方を示されたり、議論をリードした方というのは。

西田 この高等教育ですか。

村上 はい。

西田 いやあ、それは、二十六特別委員会の委員の名前を見ていただいても、皆錚錚たる人で、この人がよくしゃべったとか、この人の意見によってやったという記憶は、私はあんまりありません。前に申しあげたように、一つの特別委員会を開くときには、この次の会議にはどういうことを議題にしておうか、このA B C Dの

なかの今度はDをやろうとか。それは私どもが官房審議官を中心に三課が集まって担当者が議論するわけです。それにはどういう材料を出すか、どういうことが問題か。そこで、それに関連した資料を用意しておいて、おそらくこんなことが議論になるだろうとお膳立てをして出すわけです。あと先生方は、それによって問題点に関連してどんな議論されるわけです。その審議のときに私どもも発言しますが、話し合いの結果の大勢というものは私が文書に書いて、その次の会に必ず出すのです。先生がその文章を見て、「俺はこんなことをいってないぞ。もっとこういう雰囲気だ」といったら、それを直す。そういう格好で、私どもも無意識のうちに自分の意見を入れていかも知れませんが、先生方の論議の流れというもののはできるだけ忠実に扱ってきたというやり方です。だから、議論のサマリーをつくるというプロセスでだんだん結論が固まってきた。この答申はそういうものの集約です。非常に手間がかかりますけれどもね。

伊藤 ある意味では事務局が推進力だといっていいですね。

西田 前もって用意をし、あとの結論のまとめも事務局がやるわけですから。それを事務局がやらなかったら、誰もやる人がいないわけです。そんなもの、自分で書き下ろす人はいないですから。だから、書かれたものが答申だとすれば、やはり事務局の役割というのは大きいですね。

伊藤 逆にいえば、全省的な事務局じゃないと、その結果を実現していくためのインセンティブにはならない。

西田 むしろ官房で我々が議論した方向で、先生方の議論も踏まえて、ある方向に進めたときに、もとの原局のほうで、「そんなことをいってらうって困る」というので、クレームが出たことはよくありました。特に初中局段階で、初中局長が大変意見の強い人でして、ちょうど家永〔三郎〕さんの教科書問題で揉めていた頃に非常

にフリーなことをいおうとしたら、「そんなことをいわれては困るから、これは削ってくれ」といわれたけど、「これは委員会の議論として出てきたので、私の裁量では削れない。どうしても腑に落ちないのだったら、この次の委員会に出てきて、局長、あなたからいってくれ」といって引っぱり出した。局長が滔滔^{とうとう}とやりましたら、そのときに森戸先生が怒りましてね。「俺たちは大臣から諮問を受けているので、今の初中局が仕事をやりにくいからということを考えて答申をつくっているのではない。これは僕たちの意見だ」といって一蹴されたのです。森戸先生はその点はきりしていましたね。

伊藤 それは逆にいえば、原局のほうはやろうという気持ちからは離れてしまうということですね。

西田 ええ、「もう勝手にしやがれ。あんな理想ランドみたいなことをやっていて」と。その点は、天城さんもそうだし、私どももそうですが、多少、原局のほうからは「狐を馬に乗せた」ようなところがあると思われたでしょうね。あんなやれもしないことを物々しく書いて答申を出されたら、こっちが迷惑だと。そのことがこの答申が出たその後の停滞に大きな関係があるでしょう。われながらそう思います。しかし、我々は委員のお話をまとめながらやっていったので、べつに、そう一人走りしたつもりではないのですけれどもね。原局のほうは今の困難というものばかりを考えますから、将来の改革は俺の知ったこっちゃないというような……(笑)。

村上 その場合、審議途中における原局との連絡というのはどういうやり方だったのでしょうか。

西田 それは、私どもが官房審議官のほうで議論するときに、事柄によって、初中局なり、大学局なりの関係者を呼んできて議論をやることもありました。ですけれども、この前も申しあげたように、官房の企画室とか何とかというのは、みんなほかの局で相当仕事をしてきた人間ですから、一々もとのところへいって聞かなくても、

大体向こうの雰囲気は分かっているという点は自信を持っていたようです。ただ、さっきの日教組とか家永さんのように政治的な問題になると、事務官の考え方と局長の考え方はまた違うのですね。そうするとそこで俄然、「こいつは困る」というのが出てくるわけです。なぜ困るのだといったら、「これは政治問題になっているのだからやめてくれ」と、こういうふうになる。それで森戸先生が、そんな話はここで聞くことはないといわれたのですね。

村上 あともう一つ、前の回の議論をサマライズするときに、皆さんが一つの議論の方向にまとまっているところはよろしいと思うのですが、意見が対立するときもございますでしょう。そういうときは両論併記していく形になさっているのですか。

西田 いや、両論併記ではなくて、丸めるような話に持っていくようにして、その丸め方がいかどうかをその次に議論してもらうわけです。どちらをいっているか分からないようなことは書きませんでした。そのときには私どもの主観が非常に入ったかと思えます。しかし……、それでふと思いついた。このあいだ自分の昔の写真を整理していました、中教審を四年間やっていたあいだに、今のようなまとめをやるときには物凄いフラストレーションが起きるわけです。私自身は、自分の個人の意見とそれとは必ずしも一致してないのですね。こうしたほうがいいんじゃないかといって、違う方向へいってしまう場合もある。しかし、それはそれでまとめなければならぬ。そうするとストレスが物凄くたまります。私は中教審の四年間の間に、市ヶ谷の官舎にいましたが、自分のストレス解消のためにプラモデルをやり始めたわけです。毎晩うちへ帰ってきて。あの頃、プラモデル屋で昔の軍艦をやっていたのです。私はこれでも帝国海軍のはしりですからね。

一同 (西田氏が持参したプラモデルの写真をみながら) アハハハッ(笑)。

小池 ウォーターラインシリーズですね。

西田 五十何隻の軍艦のプラモデルがうちにあるんです。その一部分を写真に撮って。戦艦、巡洋艦、駆逐艦、航空母艦、武威、大和から、五十何隻揃っていますよ。

小池 先生はいいですね。僕はお金がなかったので巡洋艦までしかできませんでした。

西田 潜水艦まであったんですね。飛行機を載せている潜水艦がある。

伊藤 しかし、これは細かい作業が必要でしょう。ストレス解消になるのですかね。

西田 それをやっているときは夢中ですね。接着剤でこうやって煙突を立てたりして。女房が、「お父さん、やめなさい」といって。一同 ワッハッハッハッハッ。

西田 家内も、亭主が欲求不満を何とかしているんだろうと。だから、決して中教審の事務局というのが揚々たるものではなくて、結果的には、このプラモデルを見ていただければ、欲求不満の塊。

小池 先生はちゃんと着色までされたんですね。

西田 ああ、全部そうです。

小池 凄いですね。

西田 そのなかで、私が佐世保の軍港や呉で担当した軍艦もありますしね、愛着があります。

伊藤 大体が沈没していますね。

西田 もう、みんな。この前、NHKでやった短歌の会で海という題だったものから、私は、「わだつみへ帝国海軍消えゆけり滅びしものは美しきかな」と。本当に滅びたものはね、日本海軍とこのは明治以来一〇〇年間の伝統を閉じたわけですから。

伊藤 今でもこのプラモデルをつくっている方はたくさんいるんじゃないですか。

小池 多いですね。今はテレビのキャラクターものが中心ですね。

伊藤 でも、軍艦はずいぶんつくっていると思う。

西田 今はオートバイだとか、そんなものばかりでしょう。飛行機だとか、戦車だとか。

小池 つくることがありますけれども、昔は削らないといけなかった部分がたくさんあったのですけれども、今はパチパチパチと組み立てて、接着剤が要らないんですよ。

所澤 戦艦は高いからな。

小池 高い、戦艦は三〇〇〇円くらいしたんですよ。

所澤 僕は小学校の頃につくったけど、なかなか戦艦は買えなかった。

西田 武威、大和。

小池 今度、呉の海事博物館〔大和ミュージアム〕で、一六分の一の大和をつくるという話があります。

伊藤 かなり大きな。

西田 戦艦大和なんかが、宇宙何とかになっているね。

伊藤 宇宙戦艦（笑）。

西田 大和の亡霊が走り回っていますね。大和が沖縄にいくときに、私は呉軍港で最後に見送りましたからね。

伊藤 やはり、「滅びしものは美しきかな」ですね。

西田 駆逐艦を二隻つれて出ていきました。

小池 今でもマニアは、その頃のウォーターラインシリーズというのは、連合艦隊三艦隊分そろえている者もいるんですよ。

西田 このなかで、ここ〔写真〕には載っていませんが、伊勢、日向という戦艦があった。これが、戦争が激しくなって後ろ半分を飛行甲板にした。それを防御するために、両脇へロケット砲をつけたんです。このロケット砲は私どもが呉の研究でつくったわけです。二〇連装の、バババット。この伊勢の模型を買ったときに、それが

ちゃんと飛行甲板の横についているんです。中の説明には、「これは何だか分からない」と書いてある。これは俺たちがつくった(笑)。一同 ハハハハハ(笑)。

西田 これがフィリピン沖の海戦のときに、ババッと飛行機を追いかけて、戦艦日向は無傷で帰ってきました。まあ、滅びしものは美しかなで、変な話になってしまってます(笑)。

所澤 今のは重要な話なんじゃないですか。何か分からないというのが、それが何だか分かったから(笑)。

西田 中教審のまとめについての事務局というのはどういう立場にあったかという一つの説明でありますね(笑)。そうのびのびとやっていなかったということです。

村上 この第二十六特別委員会るときに一番プラモデルづくりにはまってしまうような時期というのはあったのでしょうか。

西田 僕は、自分が大学局に長年おりましたから、高等教育の関係のところは内容的にはむしろリードできたし、自分の意見も言えていた。むしろ、初中は私は全然関係しなかったんです。しかも、初中局は政治的な問題があったでしょう。日教組の問題、それから教科書の家永問題。そういうデリケートな問題があるので、初中局のまとめのほうに苦労しました。クレームが出てくるのは初中局のほうです。

伊藤 それは二十五特別委員会ですね。

西田 ええ。

■中高一貫教育と教員養成の問題

伊藤 では、そこへ進んでください。

西田 大学局には私は十何年おったから、局の人もそんなに心配し

ていなかったと思います。初中局の最初のところは、そういう非常に微妙な問題はあまり触れなくて、改革の方向としてはむしろきわめて大きな目標だけを挙げていました。

Aのところで「答申要注目点、三ページ」いきなり、ここで学校開発のための先導的試行をやれというでしょう。これが非常にこの委員会の問題になりました、特にそこで、四、五歳児と小学校低学年というものは非常に類似性があるので、そういう新たなくくりの学校をつくったらどうだ。それから、中学と高校の一貫教育。これは、いま中高一貫をいっていますね。これを小学校の分割とあわせて考えたらどうか。しかも、ここにコース別、能力別ということを行っています。これは前回申しあげたように、それを実施するのに一体どういう教育をやるのかが分かっていないと釘をさしております。小中高の全体のくくり方の変更。最後に、高専のような中等「教育」と高等「教育」二年を一本にした五年教育。これは非常におもしろいと皆さんいわれました。私はまだそのとき高専にいくとは夢にも思っていなかったのですが「昭和五十四年、木更津工業高専の第三代校長となる」、この一貫教育をやると、結果的に私が思ったのは、中学の一五歳から一八歳くらいの年頃の人と、大学の最初の一、二年、このへんの人にはかなり年齢的に発達段階の違いがある。しかも、その違いがあることが、上の人が下の人に対して違った意味の影響力を持つ。先生が教えるよりも、学校というのは仲間同士の影響力が多いので、この五年間の一貫教育というのは非常に面白いということを考えました。ここで、先導的試行をやるのには、何か学問的根拠に立って、制度上の特例を設けて、教育者、研究者、行政担当者が協力して、専門組織でやれと。この先導的試行というものは三者が協力してやるので、少なくとも一つのことについて一〇年くらい続けて結果を出せということをいっています。

伊藤 どこかモデル校をつくってみようということですか。

西田 モデル校ですが、今のように特定の学校に文部省が金を出して、「おまえのところは実験校だ」といってお墨付きを与えるのではなく、それをある学校でやるについては、その学校のプロジェクトについて、文部省のほうも、また地元の教育委員会も、この大学の研究者も、チームとしてその企画を立てる段階から運用の段階まで一〇年間フォローするのだと、そういう共同研究でやれということをしきりにしていました。これはついに手がつきませんでした。伊藤 しかしまあ、このなかで〔答申要注目点、三ページの2のAに含まれる四項目のなかで〕中高一貫はある程度実現されていますね。

西田 幼児教育は、あの当時OECDへいっても、ヨーロッパでも、これは幼児教育として野心的な試みだからいいじゃないかということを書いていました。この部分は英訳して向こうに出したものですからね。

伊藤 高専の場合は、五年間で終わったところで大学にこういうことはあり得るわけですね。

西田 それはまたあとで行政組織のほうで出てきますが、中学校一年から一緒に始めるといふ意味において、早期教育の効果を狙うという意味においては、音楽教育などをそういうところでやったらどうか。それから、きわめてリベラルアーツの旧制高等学校みたいなものにしたかどうかという意見もありました。そこを終わった人は、必要があれば大学や大学院へいくという道を開いて。現に高専からいく特別な国立大学ができましたね。ああいうことが当然あり得たわけです。長岡と豊橋に技術科学大学院がありますね。

所澤 東大も工学部が三年生から一〇人入れていますね。

伊藤 これは、いま高専といってももっぱら工業高専ですね。あれはロボコンで全国的に非常に有名になって、高専というと、みんなロボコンと。

西田 ロボコンで有名になりましたね。あれは高専の特色を宣伝するには非常にいいと思います。ああいう機械いじりの好きな子がたくさん来るでしょう。あれも一つの方法ですかね。

伊藤 あれはおもしろい試みだなと思っているのですけれども。

西田 NHKが担いでね。この当時、「一〇年間も続けてやるなんて、そんな気の長い」といわれたけど、この答申が出てから、もう三〇年たっているのですね。もし手をつけていれば、幾つかのプロジェクトの結果は出ているわけです。

伊藤 そうですね。複線的なことになるわけですね、いってみれば。それはもう、日教組は絶対反対ということでしょうから、まあ、なかなか大変だったのだろうと思いますけれども。

西田 次のB〔答申要注目点、三ページ〕のほうが、初中局の最初の提案で、学校内管理組織と行政組織の整備。それに、校務分担の職制。これは、校長が一人裸ではだめなので、教頭その他諸々の分担を決めると。広島校長さんが亡くなったようですね（一九九九年二月）。それから、公立学校と私立学校の地方教育行政の一体化。地方は、公立と私立がまったく違う。片一方は知事部局でしょう。それから片一方は教育委員会。それから、一般国民の教育施設に対する批判・要望を改善に反映させることを考えると、こういっています。これは、ある意味で、今でもPTAはよくしゃべっていますけれどもね。

伊藤 Aの先導的試行の部分は、初中局はどういう反応だったのですか。

西田 いやあ、あんまり聞いたことはありませんが、「何をいっているんだ。とんでもないことだ」と思ったでしょうね。

伊藤 やはり、そういう反応は予想されましたか。

西田 ええ。こちらは新しい分野で張り切っていたのですが、答申が出た途端に、審議会のなかにいた小学校、中学校の代表が真っ先

に反対しました。「わがほうの小学校は明治以来六年間でけっこう間に合っていますよ」と、理屈にならん理屈ですがね。新しいプロジェクトをつくってほかに迷惑をかけないでやるんだという、納得しないわけですね。どこかでいい答えを出されたら困るから。

小池 今のあれですよ。特区のなかで教育をやるうというのは、文部省は猛反対ですものね。

西田 ある意味ではきわめてドラスティックな提案ですからね。

伊藤 ドラスティックといっても、先導的試行ですからね。全体に及ぶわけではない。

西田 全体には及ばないと、そういうことをいつも断っているのですけれども、そういうものが出てくると、こちらがおちおちしておられないと。

伊藤 しかし、これをやっていたらおもしろかったらうね。

西田 C〔答申要注目点、三ページ〕が教員養成の確保と地位の向上で、やはり初等中等教育というものの良し悪しは、ほかのどんなことよりも先生で決まる。そこであれこれいっていますのは、教育実習だけではだめだと。新任教育というのは、一年間実地研修して、初めて教員に採用するということにしたらどうかということをしていました。

伊藤 これはいまだどうなっているのですか。

西田 初任者研修というのはあるのでしょうか。

所澤 初任者になっていきますね。だから、採用は採用なんです。

伊藤 採用はもう、教諭として採用ですね。

西田 研修は一年間もやるのですか。

所澤 一応、初任者でもクラスを持つのですけれども、一方で並行して研修が行なわれています。

小池 県によっては、教員に採用する前に一旦講師で採用してから正教員にする。採用枠が非常に厳しくなっているところもあるんで

すよ。大卒とか大学院卒ですぐ採用されることはほとんどない。

所澤 それは採用数が物凄く少なくなっているから、試験を受けても合格しないということではないですか。島根の場合はそうです。

ただ、その初任者研修自体はやり方がいろいろあって、退職した校長先生が指導しているところと、三〇代とか四〇代のバリバリやっている先生が指導しているところと、いろいろあるようです。

西田 誰がどういう中身でやるかが問題ですね。どこかへ預けっぱなしでほったらかしていたのでは、身分が不安定であるだけでどうしようもない。

所澤 もう一つ研修で問題になっているのは、非常勤で採用した人たちに研修がないということです。

西田 次に、学識経験のあるところで、一般社会人を教職として採用する。これは、最近、校長さんに採用して問題が起きたということでしょう。

伊藤 そうですね。

西田 それから、高度の専門性を持つ教員を育成するために、現職研修の大学院を置けと。これは実現したのです。二つできましたね。鳴門とどこにあるのですか。

所澤 三つですね。兵庫と上越と。

西田 ああ、そうですね。そこまでは実現したのです。優れた教育実績を持っている人に職制と給与で別種の待遇を用意しろと。つまり、勉強してすぐれた内容を持った人を特別待遇しろ、差別をしろと、日教組が一番怒ることをいったわけです。それをしなきゃ、人間というのは本気でやらないものだ。最後に日教組に一言ものをいっています。日教組というのは、労働組合ではなくて、職能団体として結成して、自主的に相互研鑽をやって建設的な発言をすれば世の中が大いに歓迎するだろうと、日教組に訓示したわけです。教員というのは一つのプロフェッションだから、プロフェッ

シヨナル・アソシエーションというものは、労働組合のように資本家と富の分配について争うという、そういう性格のものではないんだということをいったわけです。

伊藤 しかし、日本で職能団体ということになりますと、それは弁護士会にしたって、何にしたってそうですけれども、自分たちの利益を擁護する団体になってしまうのですね。

西田 医師会もそうですね。

伊藤 医師会もそうです。アメリカの医師会と全然違うじゃないですか。

西田 プロフェッショナルということが本当の意味で日本に浸透しないのか。外国人に聞いたら、職業と日本語に訳しているが、プロフェッショナルというのは、昔の牧師さんと先生と医者、つまり人間の魂と命を扱うものだ。それがプロフェッショナルだといわれて、なるほどと思いました。そういう人が職能団体をつくる。ほかの職業組合とは違うのだ。医者は生命ですよ。坊さんも人の魂を扱う。先生も人の心を扱う。これがプロフェッショナルだと。その神聖さというものがまだ本当に理解されていない。

伊藤 自己研鑽をする、そして相互研鑽ですね。やはり、ここは本当は格付けをしなければいけないですね。職能団体であるのだったら。

西田 一般の国民が尊敬するような形で、一つの提案をしたり、そんなことをやるといいのですが、日本学術会議でもそうはいきませんでしたな。学術会議の議長を長年やった近藤次郎は私の高等学校の同級生で、同じクラスなんですよ。おまえがやっている、ぐらいでね(笑)。あれがこのあいだ文化勲章をもらったんですね。「おい、何でももらったんだい」と冷やかしたのですけれども、やはり、「まアまア、まアまア」とまとめるのがうまかったのでしょうか。あれもプロフェッショナルになるのですかね。

一同 ハハハハハ。

伊藤 「まアまア」のプロフェッショナルですか。

西田 最後は、教育改革のための研究推進措置をやれと(答申要注目点、四ページ)。初中局で教育の質的改善ということをやろうとすれば、その具体的な方法が明らかでないことばかりだ。今後の研究を待たなきゃだめだ。今、能力に応ずる教育、創造性の教育、そういうことをいってもどうしていいかわからない。

伊藤 今はスローガンだけですからね。

西田 そうです。個性の尊重だって分らない。だからその二番目で書いてあるように、中教審は居直って、本来教育の問題は教育学はもとより、哲学、心理学、社会学、医学、工学のあらゆる分野の協力なしには解決しないものである。ところが、そういうものに協力する体制ができていない。教育学者だけが固まって、勝手に熱を上げているのではないかと。この現状を改善するためには、教育学のための重点的研究課題を選定すること、その研究開発の協同組織を整備し、必要な研究費の配分、研究成果の普及などを推進する教育研究開発センターという機能をつくれと。ここでは抽象的にいっていますが、まずそのためには文部省にそういう開発センターがなきゃいかん。それが、中教審が終わって、その直後にできたのですが、半年後にはつぶれてしまいました。これが、前申しあげたように、私の官房で部下だった人がその室長になったのですが、局長から、「おまえ、仕事をしてはいかん」といわれたのですから、情けない話です。

そこまでが第二段階の終わり、初中と大学ができて、今度は最終段階のところになります。

所澤 すみません、今の教育研究開発センターを実際に実施するとき、国立教育研究所を活用するというようなプランは出てこなかったのですか。

西田 あの時の中教審のときには、国立研究所は信用なかったですなあ。いろいろなテーマによって、専門委員をお願いしたいと国立研究所の人に出てくれといったら、みんな尻込みしましてね。そういう高級な議論にとってもついていけないから勘弁してくれと、自分で積極的に行うようなことがなかったです。この委員名簿で専門委員のところに幾つか教育研究の人が入っていますけれども、しかし、研究所とタイアップしてどうするか、向こうからまとめたデータをもらうというようなことはありませんでした。むしろ、この膨大な資料のうちの大部分はみんなうちの調査課がやった。研究所がまとめてくれたところはまったくありません。

伊藤 役に立たない研究所ですね(笑)。

村上 初中局のほうから意見が出たというのは、ここに取り上げられているAからDまででしたら、やはりB「学校内管理組織と教育行政体制の整備」なのでしょう。

西田 局長がクレームをつけたのは、ここに書いてあるものではないかったですね。さっきの家永問題に関係したところだったと思います。前期の教育発展を振り返ったときに、やはり、今までの国の教育に対するコントロールというものと、学校の先生方の自由というものについて、指導要領なんかでしぼりつけないで、もう少しゆるめたらいいんじゃないかという話が出てきたことがあります。そういうことについて、こんなことをされたら、まさに家永さんがいっているようなことになってしまいうわけで、教科書検定もやめるとか、そんなことになっては困ると。そういう議論があったときのことだと思います。この答申に載っている部分では特にありません。

伊藤 しかしまあ、この答申に載っているようなことは、基本的にはあまり乗り気ではなかったでしょうね。

西田 ええ、「そんなことをいったってやれっこない、誰がやるんだ」という調子ですね。

伊藤 しかし、せっかくこういう考え方が出てきて、何かやってみようという気に初中局はまったくならなかったのですかね。

西田 あの時の中教審の係で私どもも親しい人がたくさんいますし、優秀な人もいらっしやるのですが、残念なことに、その当時の社会の雰囲気として、日教組が突き上げてきて地方の教育委員会が音を上げて、それに対応するために、今のようないくつかの雰囲気の中だけでは、あまり将来の夢のような話はちょっと考える余裕がないという感じですね。むしろそういう点で、組合のほうと真正面から喧嘩するというわけにもいかんし、彼らが反対するようなこと、火をつけるようなことをやってももらいたくない。さりとて、文部省としてはやはりきちっとけじめをつけていきたい。その教員組合との対立意識というものが非常に初中局の人のなかには強かったですね。その典型的なのは、木田「宏」さんなんかがそうですね。

木田さんは初中局の地方課長なんかをやったし、次官になられた安嶋「彌」さんもそうだし。私が初中局に話しにいったら、あの人らの組合に対する感覚は力んでいる感じがありました。その点、今度はたまに日教組が大学問題についてクレームをつけにくると、私は庶務課長のときに対応したわけです。大学管理の問題とか。私は自分も組合をやったことがあるから、堂々とやりあいましたね。教員の勤務量調査をやったときに、教員の先生というのは超過勤務手当てをもらうようなことは何もないという喧嘩ができたわけです。日が暮れたら帰るので、田舎の先生というのは日没とともに帰っていると。なぜならば、生徒の父兄が畑でまだ仕事をしているときに先生が帰るのはみっともないわけですね(笑)。仕事が忙しいからではなくて、日没によって決まっているのだ。だから超過勤務なんていうのはあり得ないと、そういうデータを説明したら、「これはブルジョア統計だ」といいやがった(笑)。私も癪に障って、何がブルジョア統計だ。日本じゅうの各県の小学校、中学校をサン

プリングして、しかもそのなかの個人をサンプリングして、その先生が帰ったデータを集計したのですから、ブルジョアもクソも入りようがない。最終段階に入ってよろしいですか。

伊藤 はい、では第三段階ですね。

■大学の管理運営に関する制度的な改革

西田 今の問題を拾って、初中、中等、大学とやってみて、これを結局政府の施策としてどうやるかというこの問題に絞って見たわけです。そのなかで、この提案を要約して幾つかのプロジェクトにまとめた。その第一が、新しい学校体系の開発と、現行教育の充実。そのための研究開発の総合的な実施計画を立案すること、これは政府がやれと。学校の設置者側の希望を聞いて、実施校を選定すること。実施校を特例校として、独自の教育課程と教員組織で運営すること。実施校に財政措置を講じ、研究開発の指導と援助を与えるとともに、その成果を継続的に評価できる体制を整備する。こういう先導的試行のやり方を、まず政府が政策としてやりなさいということ。これはとうとうやりませんでした。

その次に、教育改革の推進と、教育の質的水準の向上のための研究開発。さっきと同じですが、関連学問分野の連携のもとに、学理面、実践面、行政面の努力を結集して、課題解決に取り組む体制を作る、そういう学者グループのまとまりをつけなさいと。文部省の組織のなかに研究協力体制を整備して、研究者の連絡と情報交換、研究費の配分、成果を行政施策に動かす役割を持ったセンターの機能を設けろと。さっき申しあげたように、これができたのですが、つぶれました。このような活動によって、教育という無限の可能性を持つ分野に、先導的試行で今までにない新しいことをやらせる。

ここで特に強調したのは、こんなおもしろいことがあるのか。そういう生き甲斐を与えるようなことをしたら、本当に教員に良い人が来るだろう。会社へいって何か機械をつくっているよりも、教育の世界ほど面白いものはないぞと思わせるのが、教育の質的向上の一つの決め手だということを、委員会では皆さん非常にいわれました。

その次に、教員の資質の向上と処遇の改善。これも何遍も出ていくのですが、一年程度の実習の制度化、現職教員の大学院。これはできたのですね。このような職制、給与、処遇の改善措置を講ずることで、中身としては、これはずいぶんドラスティックなことをやっているのです。先生の給与を学校種別で差等を設けない。小学校と中学校と幼稚園とで先生の俸給が違うというのはおかしいじゃないかと。プロフェッションなのだから、優秀な人はどこでも優秀なので、これは小学校だ、中学校だ、とかで格付けするのはおかしい。それから、教頭や大学院で再教育を受けた人とか、高度の資質、認定を持った人には、これこそ給与表を別にして、別種の等級を適用しよう。それから、初等、中等の教員の初任給というのは、人材入手のために一般公務員に対して三〇ないし四〇％上げましょう。こういうきわめて大胆なことを答申にはっきり書いたのです。

これを大蔵省は怒りましてね。この計算は、学生の就職状況調査からやって、コンピュータで結論を出したわけです。職業の魅力というものと、同じ職業でも給料が高ければそちらへいくと、給与と職業の種類とによって優秀な人間がどうより多くいくかという分析を一つのモデルをつくってやりました。一般公務員の中級くらいの人があるためには、教員というのは残念ながら職業的魅力が低いから、給与のほうで三、四〇％上げてそれを埋め合わせよう。これがコンピュータで出てきたわけです。おもしろいでしょ。そのコンピュータが打ち出したやつを、「これを見てくれ」と大蔵省へ持っていったわけです。分かりやしないですね(笑)。ざまあみろとい

う。これを堂々と書きまして、文句をいわせませんでした。あの当時の文部政務次官だった西岡〔武夫〕さんとか、その友達の河野洋平さんとか、このあいだリクルートでやられた官房長官だった藤波〔孝生〕さん、そういった方が文教族として、「西田君、どれをやったらいいか」というから、「これだけやったら組合は文句いいませんから」というと、「よし、それでいこう」ということになって、義務教育教員の確保に関する法律〔学校教育の水準の維持向上のための義務教育諸学校の教育職員の人材確保に関する特別措置法〕（昭和四十九年法律第二号）ができたのです。それで、二、三年で三割くらい上げたのです。その後は元の木阿弥になったかも知れませんが、これだけは実現しました。これは、文部省にコンピュータが入って、行政の実益として出てきた最初のものです。

その次に、大学の助手の初任給というのは、助手のご経験のある方はやはり、雑用ばかりやらされていると。だから、もっと助手の人は一般教諭と同じくらいにして、大学の教授の最高級は行政官の最高級と同等になるようにしろとか、なかなか教員尊重ということを強くいっております。

伊藤 助手の初任給は確かにだいぶ上がりしましたよね。僕の助手の頃と、そのあとに助手になった人では、相当な格差がありますよ。

所澤 そうですか。間違いかも知れませんが、昭和二十年代くらいまでは、助手は年齢ではなくて採用された一年目からという形でカウントされるので、年齢が高くて低くても、一年目、二年目、三年目と数えられて給与が同じだったという話を聞いたことがあるのですけれども、そうでしたか。

伊藤 ああ、そうかも知れませんがね。

所澤 それがどこかで変わったみたいですよ。

西田 この委員会では大学の先生方が特にいわれたのは、助手の人というのは教授のセクレタリーみたいで、教室の雑用をやらされて、

ろくに勉強もできないし、待遇も悪いから、これをなんとかしろというのが主でした。

伊藤 僕は研究所の助手だったものですから、非常に楽をいたしました。本当に研究に専念できました。

西田 そうですか。

所澤 本当に助手は勤めている部局によって全然待遇が違いますね。伊藤 そうですね。

西田 次に、高等教育の改革と計画的な整備充実ということで、ここでも高等教育が出てきました。既にいつていることで、多様化を促進するための設置基準の運用を弾力化し、整備充実に対する国の基本計画を策定し、目標年次を定めて、政府と大学とが緊密に協力して、準備の整ったものから重点的に財政支出を行なって、先行的に整備をしろ。つまり、みんなを一齐に変えるというようなことはできないからということで、この当時は、政府がリーダーシップをとって、「いい案を持っていらっしゃい」と、それが来たら文句なしでそれだけ予算を出しましょう。まあ、金で釣るような話ですが、そういう形で改革を進めようといったのですが、そういうことはついに実現しませんでした。

文部省に国の基本計画の策定をすることと、実施成果の評価と、大学設置基準と設置認可のことと、それから設置大学の提出する改革の案について、これがいいということを大臣に答申建議する新しい審議会をつくれと。それが大学審議会という名前で別にできましたが、そういうものではなくて、もっと計画的整備のためのリーダーシップをとるところだと考えていたわけです。

それをやるためには、大学の側も全学の意思を結集して改革案を取りまとめて、その実現を強力に推進する主導性を確立するために、学長を助けて改革の事に専念できる常任委員を置くことができるようにと。学長さんが一人ではどうしようもないということですね。

私ども国立大学のことに深く関係したのですが、大体三年ぐらいたつと学長さんは皆さん任期が終わるのですかね。ですから、毎年学長会議をやる、三分の一ぐらいの人は新人です。パッと立ち上がって、「私は最近こういうことをしたんだ」と、もう何年も前に誰かがいったようなことばかりいうわけですね。繰り返して、経験の蓄積がないわけです。今の教授会が選んでやるというのは結構だけれども、学長になるときに、その人が学校の管理者としてリーダーシップをとるための研修を、国立大学協会に金をやりますから、協会がやりませんか。文部省がやるというたら角が立ちます。やはり、そこで学長さんの最低限度のマネージメントの研修をしたらどうだと。その優秀な人がもっとパーマネントの学長もやるようになっていったら大学も変わるのではないかといいたのですが、これは実現しませんでした。

伊藤 素人が非常に短い期間にどんどん代わって学長をやっていた日には、これはとてもではないけれども、何もできません。

西田 できません。私どもはよくいったのですが、大学のなかに経営学部というのがあり、会社のマネージメントについての学問としてある。しかし大学の経営というものを誰がやっているのですかと。大学の経営学部というのではないじゃないか。それをどこかの講座でつくったらかと。だけど、その授業を担当する人が（笑）。

伊藤 まあ、そうですね。だけど、大学は経営ではなくて、あれは先ほど先生がおっしゃったように行政組織ですから、経営はあり得ないですね。

西田 しかも、私が持論としているのは、大学というのは一般の会社や何かのように経済的利益を追求するという目標がはっきりしているところと違うのですからね。大学のなかには、行政官あり、教授があり、学生がおる。まったく違ったものをどうまとめてやっていくかという、この経営・運営というものは物凄く難しいものです。

伊藤 それはそうです。

西田 そういう学問的なあれが何もないじゃないか。紺屋の白袴だということをしているのです。

伊藤 本当にそうですよ。皆、なりたくてなる人が多いのですけれども、しかし、三顧の礼をもって迎えられたのでやむを得ずやるというような顔でやるわけですね。

西田 やめたときに、「おめでとうございました」というのだからね（笑）。ご苦労でしたと。だけど、年々歳々そういう格好で、学長会議というのは何も進歩しない。先生方が研修を受ける機会もないし、それが最大の問題です。

伊藤 学者ではあっても、管理者としての能力があるかないかというのは全然別問題ですからね。

西田 ノーベル賞の朝永（振一郎）先生が教育大の学長をやる。

まあ、立派な方なのでしょうけれども、私はとにかく皆さんの大勢が支持するところを実行するのが責任で、それ以上の意見はありませんと（笑）。どうしようもない。だから、そういう学長の分身をつくって、少なくとも仮に学長さんがかわったとしても、副学長とかスタッフというものが経験をずっと引き継いでやるようにしなければだめだ。経験の引継ぎがないところに進歩はないですね。

五番が、国・公立大学の管理運営に関する制度的な改革で、先ほどの行政法人に関係があります。幾多の問題を指摘しながら、これまで具体的な成果が上がっていない。これは大学側の閉鎖的な自治意識から、外部からの批判を受け入れようとしないうる慣行のためであって、今までどう答申を出しても、国大協が真っ先に、「ちょっと待ってくれ、これをやらんでくれ」という。これを改めるには、制度改革の推進体制を進める過程において、政府と大学の間信頼関係がないというのが最大の問題だと。だから、上の先導的試行みにたいに、「俺の学校はこう持っていきたい」というモデルプランを

持ってきて、それを文部省へ相談して、どんな金を出す。そういう新しい実行をやっていくうちに両者の信頼関係ができるだろう。その基本的な信頼関係を確立するのが先決であると、このところを非常に強くいっています。ただ答申を出したって、文部省がやることは信用ならんという形では何も進まん。それから、新しい形態の法人とは、国の標準教育費によって定額補助により、財政運用上大幅な弾力性を認められるものとし、新しい理事機関は、また、設置者から大幅な権限の委譲を受けて自主的に運営するものであり、このためには法制の整備を行なう必要があると。これは、いまいわれている行政法人とはどういうものか分かりませんが、かなりリベラルなものにしていきたいということがあったわけです。所澤 今のところなのですけれども、標準教育費という発想なのですが、このときに国立大学の特別会計を大学ごとにばらばらに分けるというような考えは出てこなかったでしょうか。

西田 これは、今の税制調査会長をやっている相沢〔英之〕君が大蔵省の主計官でして、あの人の思いつきで国立大学特別会計をつくって、どこかの学校の予算で余裕があるのをこちらのほうへ持っているようなブルをつくらうという思想でいたのですが、全体の懐自身が大きくならなければどうしようもないのですね。個々の学校という話はなかったと思います。聞いたことはありません。

教育の機会と教育条件の保証。いろいろなことを書いてありますが、特にここでは私学助成のことが問題になって、私学政策の転換のためには次のような助成をし、私学自体がそれを選ぶようにしろと。これは私はあまりよく分からなかったのですが、天城さんの発想です。天城さんが方式A、B、C、Dというのをつくって、書いたことがよく分かるといえば分かるのですが、Aは、公立学校とともに教育の機会を均等に保証する。やることは公立と同じなのだ。だから、教育条件も、財政負担も、公のものと同じものをもらっ

て、そのかわりに公のコントロールを受ける。そういうやり方もあるじゃないか。Bは、一定水準以上の教育の機会をやるということ、特定の専門や人材育成をやる。これに対して国の調整はあるけれども、国公立に準ずる財政だと。これもまあ、中途半端なことですね。Cは、このへんは少し変わってくるのですが、適当な教育条件のもとに特色ある教育を担当する。援助の効果については定期的に評価を行なう。標準教育費の一定割合を助成する。最後は、公的な計画に基づいて特定分野の教育研究を振興するために、特定の経費だけを援助するというやり方がある。こういうことをしたらどうかというのですが、しかし、全体としては標準教育費という考え方は一応出ているのですけれども。

伊藤 いろいろな選択肢をつくったということですね。

西田 そういうことです。あんまり芸が細かくて、私らもよく分かりませんでした。

■長期教育計画の策定と予測計量

西田 その次に、大学入学者選抜制度の改革として、選抜制度というのは、結局、教育過程の青年が学校の区切りの段階で適切に移行するというのがための広義の教育制度なのだと。だから、各学校の都合だけで運用されてはいかんということ、ここでは非常に公共性を重視する。これまでの研究ではこういうことが分かっているから、その実現に援助を与えるとともに、そこに最後に、その実行を保証する必要があるときには立法措置を検討すべきであると、選抜制度について枠を決めろということを行っています。

前回の資料はそこまで書いておりまして、それから以降をきょうは二、三枚やりましたので、次の資料をごらんいただきます。きょう

うはおしまいまでいけると思います。

その次に、これは「特論」と書いてありますが、この答申のなかに、おそらく今までの文部省の答申には一度もなかったし、今後もないでしょうが、長期教育計画の策定と推進の必要性というのを二十七特別委員会の専門部会がこれを取り上げました。いろいろなことをやれといったけれども、本当にそれをするだけの財政的な裏づけができるかどうかということもやってみる必要があるという形で、この問題をやったわけです。最初にまず、必要性としては、国家目標による公的な計画を調整する必要があるのだからこれをやれと。二番目に、教育事業というのは膨大な金がかかるので、とても当事者の負担だけではやれない。公の財政が必要なのだから、その見積もりをしておかなければ、何をいつても架空の話になってしまふ。質的な改善のための研究開発というのは国家的な規模だ。実施成果を確認するのにも、三年や五年じゃない、もっと長期を要する。そういう意味で長期計画をやれと。このときに私どもが一番頭にありましたのが、経済企画庁の経済計画。経済五ヵ年計画というのを経済企画庁がつくって、大蔵省とすったもんだして、あれを閣議決定すると、それが結果として大蔵省も縛るし、通産省も縛るし、全部がそれに右へ倣えになってしまふ。そういう形で教育計画というものもできて、一々文部大臣が毎年大蔵大臣と膝詰め金をもらうというようなことではだめだと。そこまでもっと本格的な経済計画に並ぶようなものにしたたい。しかも経済計画は、五ヵ年計画を立ててうまうまかなかったら毎年修正しているわけです。教育というのは五年先どころではない、それこそ百年の計で先の見通しを立てながらやるので、結果が出るのに非常に時間がかかるのだから、経済計画よりもっと長期計画をしなければだめだというのが思想にありました。このことはあまり今でも認識されていないと思います。予測計量というものは、いろんな外からの要因というのは、人口の

増加とか、日本の経済成長とか、いろんなことがある。これは教育政策ではどうしようもない。しかし、政策選択として何をするかということによって、そこにいろんな財政上のものが変わってくる。その両方を見分けて、どうしても自然の形でいけばこうなる。それへこういうものを入れたらこうなるというような区別をして、仮にその予測ですから、失敗があると。ここで一番いつているのは、予測が失敗すること初めて、なぜ失敗したかということ、今まで見落としていた要素が分かるのだと。予測していなかったら何も分からないのだと。このことを非常に強調しております。

予測計量の試算方式としてはこんな形で書いてあります。基準推計値というのは、今後の人口推移だとか、学齢人口のあれだとか、そういう外から決まってくるものです。課題別推計値は、このテーマをやったらこれだけかかるというテーマ別のものもある。それから政策変動値として、例えば先生の月給を何割上げるとなったら、それだけ増えるわけです。その三つの種類がある。それを足し合わせたものが教育投資総額になる。その投資総額を誰が負担するかという負担区分を分けて、そしてそれをやっていくための教員の需給調査というものがあるだろう。こういうことが長期計画なのだ。これはここで試算しまして、長期計画の資料をここに載せているわけです。一一七ページですか。

伊藤 一一七と書いてありますね。

西田 抜粋のほうですね。これは私も苦労してつくって、得意なのですが、ここに教育投資総額というものがありまして「表「教育投資総額」参照」、ここに標準教育費として、自然のあれからいうと、幼児教育の普及ということでこうなる。基準推計値というのは人口統計のこれからできている。課題別というのは、幼児教育の普及、特殊教育の拡充、先導的試行の実施、教員再教育と、こういうのは課題別です。政策変動値としては、教員給与の改善。初中教育の改

2 教育投資総額

事 項 別 区 分			46年度	47～55年度		55年度
				累積額	年 平 均	
基 準 推 計 値 (S)			億円 29 790	億円 529 030	億円 % 58 780(100.0)	億円 93 550
課題別推計値	(1)	幼稚園教育の普及充実	1 100	25 650	2 850(4.9)	4 830
	(2)	特殊教育の拡充整備	630	17 790	1 980(3.4)	3 580
	(3)	先導的試行の実施		2 940	330(0.6)	460
	(4)	教員再教育「大学院」の創設		1 580	180(0.3)	300
	(5)	新任教員の研修の実施		8 120	900(1.5)	1 560
政策	教員給与の改善	幼稚園(公・私立)		6 310	700(1.2)	1 360
		小学校(公立)		17 680	1 960(3.3)	3 800
		中学校(公立)		8 390	930(1.6)	1 820
		高等学校(公・私立)		7 780	860(1.5)	1 710
		大学(国・私立)		2 770	310(0.5)	660
	幼稚園以外の課題別推計値に関するもの			2 700	300(0.5)	690
変動	初中教育の改善	単 位 教 育 費		17 630	1 960(3.4)	3 500
		教 員・生 徒 数 比 率		7 610	840(1.4)	3 050
		事 務 職 員 比 率		2 570	280(0.5)	1 010
		課題別推計値に関するもの		2 340	260(0.4)	260
値	高等教育の改善	単 位 教 育 費		12 030	1 340(2.3)	3 480
		教 員・学 生 数 比 率		5 730	640(1.1)	1 330
		事 務 職 員 比 率		600	70(0.1)	120
	大学院 研究院 の拡充	「大学」の拡充		6 530	730(1.2)	1 910
	「研究院」の拡充		7 150	790(1.3)	2 250	
教 育 投 資 総 額 (T)			31 520	692 930	76 990(131.0)	131 230
T/国 民 所 得 (名目額)			4.87%	5.86%	—	6.28%

教育投資 総額の学 校段階別 構成比	幼 稚 園	3.5%	4.6%	—	4.7%
	義 務 教 育	55.9	53.7	—	52.0
	高 等 学 校	19.7	16.1	—	15.0
	高 等 教 育	20.9	25.6	—	28.3

善のための実験をやる。こういうものをやると、そのたびに金が増えるわけです。それが、この五カ年間の間に毎年平均幾らで、最後に幾らかかる。それをやって、最後に大学院の設置から研究院の設置までやっているわけです。これ全部やって、ここまで必要な金が出てくる。それを昭和四十六年から五十五年までやって、この一〇年間で幾らになるか。そして、この金額というものは、その間の日本の経済成長がいま予測されているような形で経済計画のほうがいいいたら、決して過重な方法ではない。十分やれるのだということを証明したわけです。そのことが非常に私どもは得意だったのですがね。このときの予測計量で、これは教育投資のことですが、ついでに見ていただくと、中学から高校へいく進学者の進学数というものがどう上がっていくか〔図版「中学校卒業者の上級学校進学率の予測」参照〕。過去の実績をこういう統計的な一つのモデル式でやりますと、これくらいまでピタッと合うわけです。今後の一〇年間でどうなるかというのをずっと出したわけです。赤がその後の実績なんです。このへんまでいったのですが、昭和五十五年頃からガタンと下がっている。なぜかと思って見てみたら、昭和五十五年からちょうど石油ショックになる。だから、経済成長が狂ってきたわけです。それまではずっとここまでいっているのですね。

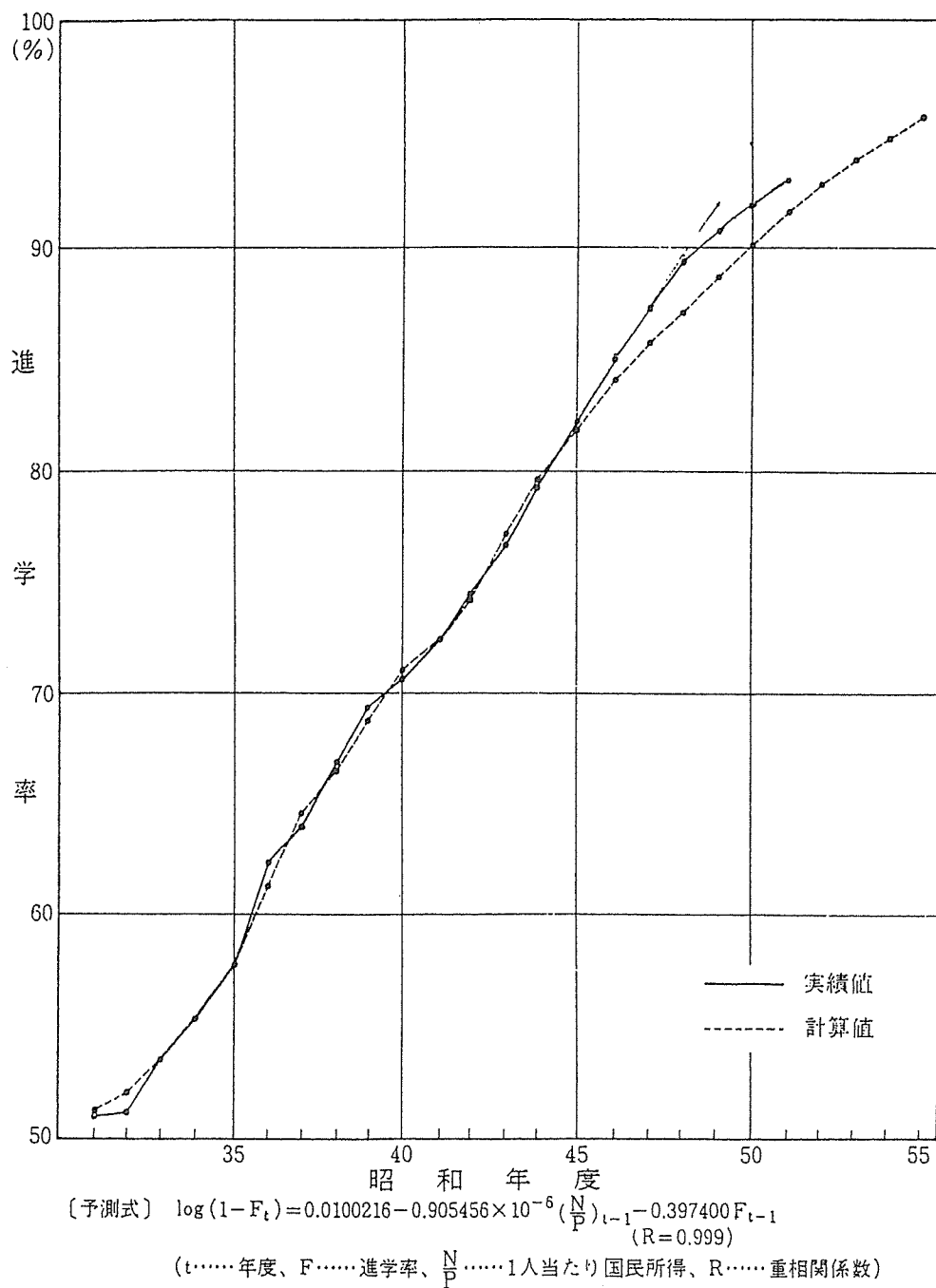
伊藤 むしろ予測値を上回っているわけですね。

西田 ええ。それから、これは大学と短大です〔図版「大学・短期大学入学者数の予測」参照〕。これもここ〔昭和五十五年〕まで上がっているんですよ。ここから、ガサッと落ちていくんです。だから、予測計量というのはそんなにばかにしたものではないと。これが、今のようないかなる支出ということをやっていた場合に、日本の支出というものは、経済成長がこうなっていけばこのくらいまでいけて、それは諸外国のやっているものに比べてとんでもない金ではない。経済さえいけばいけるのだということをここで証明しよ

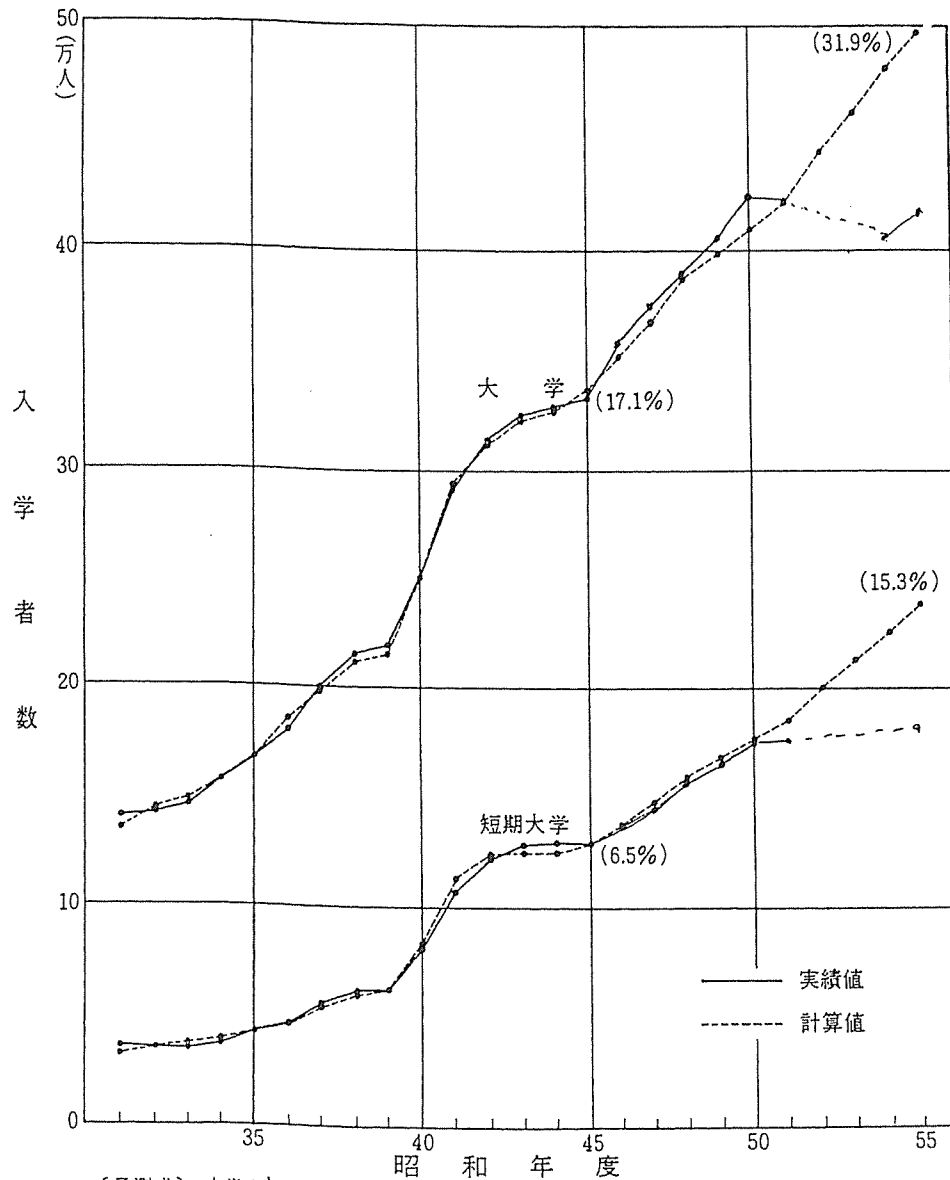
うとしたわけです。予測計量は、私どもが多少得意になって、いささか技術的に自分で独りよがりになっているところもあります。要するに、今までの答申というものは、「あれをやれ、これをやれ」といったって、「そんなもの、金があるか」といったらそれきりなのですけれども、やる気になったらやれるのですよと。狂ってきたのは経済成長がそこで足踏みしちゃったということが一つのあれですね。

試算結果の問題点ですが、五十五年までの一〇年間で高校が一七%、短大が八八%、大学が四九%伸びた。大体今の赤い線とほとんど合っているわけです。それから国民所得に対する割合というのは、この答申ですべての政策課題の実現の可能性があると。教員の需給。ここで問題は、あれだけ下の学校の教員の給料をのばしていくと、大学院・研究院を先行的に拡充してやらないと、先生が足りない。特に一般社会からの補給が必要になるということをいっています。だから、これを本気でやれば確かに説得力のあるものが出てくるし、こういうものを大蔵省へ突きつけて、文部省の長期教育計画として世の中へ打ち出して、できれば強力な文部大臣が閣議決定してもらって次の一〇年計画でやろうということになれば、毎年予算で一人苦労しなくても軌道に乗るのではないかと思っただけです。これはそういう格好で、これの付録みたいなものになってしまいました。ほとんどその後も注目されていないでしょう。その後文部省がやったことは、この五カ年間に大学がどれくらい増えるかという予測計量みたいなものをしていましたけれどもね。あのときに私がいったのは、「予測して、放っておいたらこうなるだろうとか、どうか、そうならんと困るというのは、そうしてみせるというのか、どれなんだ」といったら、「いや、その全部だ」なんて。そうしてみせるというのだったら、それだけの札付きの政策がなければだめだ。なるだろうというのは天気予報みたいなもので、俺の知ったこっちゃ

付図1 中学校卒業者の上級学校進学率の予測



付図2 大学・短期大学入学者数の予測



〔予測式〕 大学： $\log N_t = 3.70227 + 0.338438 \times 10^{-7} C_{t-3} + 0.993096 F_{t-3} + 0.312469 \alpha_t + 0.100261 \log \left(\frac{N}{P} \right)_{t-1}$ ($R = 0.998$)
 短大： $\log N_t = 2.95117 + 0.971084 \times 10^{-7} C_{t-3} + 1.85031 F_{t-3} + 0.193445 \alpha_t + 0.0566863 \log \left(\frac{N}{P} \right)_{t-1}$ ($R = 0.998$)
 (t ……年度、 N ……入学者数、 C ……中学校卒業生数、 F ……高校進学率)
 (α ……入学定員充足率、 $\frac{N}{P}$ ……1人当たり国民所得)
 (R ……重相関係数)
 (注) ()内の数字は、該当年齢者数に占める入学者数の割合である。

ないと。予測計量というものも、目標としてやるんだという決意のあらわれでなければ予測計量する意味はない。これは、少なくともこれだけのことをやりますという目標ですからね。

伊藤 まあ、これでやっていけば、当然、ずれが出てきます。経済成長がとまる、人口増加がとまる、その場合に一体施策をするかという次の課題に入るわけですね。

西田 この予測計量の計量式からいうと、このなかに人口とか何かが皆入っているわけです。今から何年先の小学校卒業生というものが次の高等学校の数に影響している。その変更がくれば、出生率の数値から独りでこのカーブは修正されてくるわけですよね。

伊藤 人口問題研究は厚生省か、人口推計が間違っているというもののね。あの推計よりもはるかに人口増加率が下がっちゃったなあ。

西田 まあ、こういうことは、四六答申以降、文部省はやったことではないでしょう。

伊藤 今もないんじゃないですか。

村上 この特論の考え方といいますか、特論そのものに対して文部省の内部での受けとめ方というのはどうだったのでしょうか。

西田 これは私がおもしろがってやっただけで、とにかくこれだけいろんなことをいっているけれども、金の面で本当にやれるのかと。それは、少なくとも経済成長が順調にいけば十分やれます。しかも、それは諸外国の財政状況による教育費の伸び方と同じ傾向でやれるのです。むしろ戦後はそれを怠けていますということをいっているわけです。そのことの証明としてやろうとしたわけです。やってみて、日本経済では歯が立たないということなら、それはまた、それを引っ込めなければいかん。やりたいことをみんなこちらでいつてきたわけでしょう。それをここへ全部並べてみて、結構やれますよということを出したわけです。これが間違っているのなら、間違っているという証明をすればいいのだからね。

伊藤 国家財政のなかに占めるパーセンテージが、そんな欧米諸国に比べて高くなるということはないわけでしょう。むしろ低いほう。

西田 それが最後の国際比較の表（原本答申書、七五〇七六ページ）で出ているわけです。日本の戦後のやつは、経済が伸びだした頃から横ばいしちゃっているわけです。あんまり出さないわけですね。

伊藤 そうなんですよ。

西田 経済企画庁が経済計画をやるのが悔しくてね。文部省がやらに大学生を卒業させて、理科系と文科系の調整をやっていないなんてよくいわれましたからね。教育計画というものでやる場合には、今から五年先の大学の理科系の卒業生というのは、今から四年前の大学入学者で決まってくるのだ。だから、三年や五年の短期で、すぐ理科系の人をたくさんくれないって間にも合わないんだ。高等学校からの進学者、そののずっと積み上げなのですから、経済企画よりはるかに長い見通しを立てなければいかんということをいったつもりです。

所澤 ここで「研究院」という言葉が出てきているのですが、この研究院というのはどういうイメージなのでしょう。

伊藤 大学院、研究院というのは同じなのですか。

西田 大学院というのはあの段階で、むしろ社会人の再教育機関としてきわめて実用的なものをやるようになるだろう。むしろオリジナルな、海のものと山のものとも知れないような探究というようなことは研究院で自由にやれるようにしたいじゃないかと。

伊藤 一応、別なものとして認識しているのですね。

西田 ええ、別のものと考えています。

所澤 研究院は学生がいらないということですか。

伊藤 いや、いるのでしょう。

西田 こころ「研究院」と書いてありますね。

所澤 大学に付置研究所とかいろいろあって、その後、付置研究所

は減らす方向に進んでいるようですが、付置研究所のイメージとはまた違うのですか。

西田 違いますね。大学院はあの当時だんだん社会人の再教育ということでウェートが上がってきたから、もう切り替えようということになったのだと思います。

所澤 独立した組織として大学のなかにつくるという。

西田 そうですね。あのときは大学院も研究院も特定の大学に置くという思想を離れたほうがいいといっている。幾つかの大学の連合によってつくるという考え方でいいのではないかと、そういうことをいっています。

伊藤 まあ、総合大学院みたいな。

所澤 総合大学院大学みたいな連合大学院。

西田 今は独立の大学院もできたのですか。

伊藤 ここは大学院です。

西田 慶伊〔富長〕君がやっていた先端科学技術大学院というのが、ずいぶんあつかましい名前を付けたなといったんですがね〔笑〕。

小池 先端科学大学院が、大学院大学になってきました。その大学院……。

西田 あれは大学院大学でしょう。

小池 はい、独立大学ですね。

西田 学校の学生はいないのでね。

小池 いないですね。

西田 先端科学技術大学院というのを聞いたことがあります。

最終段階で、二枚追加していますが〔答申要注目点〕、ここでは結局、そういうものを全部いろいろ個別政策をやったら、やっているうちに、一体日本の教育は将来これいいのかという疑問がいろいろなところへ出てきて、それを総まとめしようというのが最終段階です。今後の社会における学校教育の役割、これを二十八特別委員

会でやりました。ここで、あと二枚ほど文章が書いてありますが、書いてあることはあたりまえのことで、人間形成の多面性ということです。これは森戸先生がいわれ、皆さんで推敲して、かなり得意なところなのですが。「人間形成」と俗にいうけれども、人間が自分の環境とインタラクションによってだんだん自分というものを形成していく。そのときに、人間というのは自然界の一部分なのだから、体とか健康というのは自然界の法則に従わなければだめになっってしまう。その自然界のなかに適応する人間というものの形成と、社会生活のなかで適応できる人間。それから、文化的価値を創造していく人間。三つの側面があって、その効率的な発展というのが人間形成の目標になる。どれが欠けてもだめなのだと。頭がいいけれども体が弱いというのはだめなのだとということですね。そこで人間形成というものをそういうふうにとらえる。

その次に、ところが人間形成というのは人間の環境とのかかわりが出てきているので、教育とはまた違って、人間は自分で自分を形成していく。そうすると、社会環境の人間というものに対する挑戦というのが起きてくる。私はこれが非常に現代的な問題と関係あると思います。このときに、経済的・時間的余裕の増大。もうあの当時出ていましたからね。これで自由と責任が拡大しちゃった。これに対応するというのが実は大変な問題なのだ。金と時間に余裕があったら、人間は何をするか分からない。

■生涯教育と学校教育の役割

伊藤 ハハハハハ〔笑〕、まったくそのとおりです。目標を失う可能性はありますからね。

西田 権力というものがあって金持ちになったら、アラビアンナイ

トの王様みたいになっちゃうわけですね。しょっちゅう人の首を切っているほかなくなっちゃうわけです。これが私は一種の豊かな社会のパラドックスだといっているのです。この挑戦が人間に降りかかっているというのが、まだ自覚されていない。それから、都市化・大衆化による、連帯意識・公共心・主体性の衰退。みんな、「隣は何をする人ぞ」ですね。それから、血縁関係が変わってくる。これは今日ありますね。人間の基本的性情形成の家族の教育的機能の低下。

伊藤 これは歴然としていますね。

西田 既に三〇年先を見越していた（笑）。それから寿命の伸長。これはあたりまえで、高齢者の健康と人生設計の問題。これは、僕はひしひしと感じています（笑）。このあいだも年寄りの仲間で、子どもがみんな卒業したあとの夫婦の生活というのはどうするかといった難しい話で、朝から晩まで顔を見合わせてもつまらないですからね。

伊藤 ハッハッハッ（笑）。

西田 私は出かけていくし、女房も出かけていくし、それぞれが勝手に出かけていって、ときどき一緒に飯を食ってというのが一番いいですね。それが、うちのなかで鼻を突き合わせていると喧嘩をしちゃう（笑）。それから、女子教育の普及によって女子が社会に出ていく要求、これも今は歴然とあります。それから、国際交流とマスメディアの発達によって、ここで国家観・民主主義観というものが混乱してくる。

伊藤 これもこのとおりですね。

西田 「日本国」なんていったって、ピンとこない人もいるでしょう。その下に結論として、これらの環境に対応する人間形成に問題があるときは、生活の意味喪失感ということが書いてあります。何のために生きているのか。だから最近、集団自殺が出ましたね。自動車で心中が。鳥辺山の心中よりは色気がないですけどもね。そ

れから、目的を一举に実現しようとしたり、欲求の無制約な充足。いきなりゲサツと人を刺したり、かっぱらっていったり、ATMの機械を壊したり。それから、青年の逃避的傾向、性と暴力の問題が生じやすい。少なくともこれだけのことが起こるだろうといっています。

伊藤 今、本当に起こっています。

西田 三〇年先の予測です。

伊藤 今、この挑戦に対して対応できていないですね。

西田 その次に、今度はその挑戦が来る。しからば教育体系の総合的な再検討の必要というのは、そういう挑戦にどう人間が対応していくかというときに初めて教育というものが出てくる。教育を定義した人もあまりいないと思うんですね。教育の定義として、「人間が環境とのかかわりあいのなかで自分自身を主体的にかたちづくっていく過程において、さまざまな作用を媒介として望ましい学習が行なわれるようにする活動」のことを教育という。人間形成は本人がやるのだ。それにある媒介作用を加えて、望ましい学習が行なわれる。一つの価値選択があるわけですね。そうでなければ、ただ学習といったら価値観がないので、泥棒が泥棒の稽古をするのも学習なのですからね。教育というのはそうではなくて、ある望ましい活動が行なわれるようにする活動だと。そう考えた場合に、この頃にちょうどユネスコが「生涯教育」というのを言い出したわけです。生涯教育というものは、今後の社会で人間が直面する人間形成上の重要な課題に対応して、いつ、どこに、どんな教育の機会を用意すべきかを考える。これが生涯教育なのであって、文部省のように「生涯学習」なんていってしまったらだめなのです。これは死ぬまで勉強だということでしょう。そうではなくて、いつ、どこで、どんな教育の機会を用意することが人間に必要なのかと、その挑戦の起こってくる場所と時間ですね。

所澤 これをこういうふうな形でまとめるのは非常に大変だったのではないかと思うのですが。

西田 ええ、大変でした。この生涯教育の問題でずいぶん議論しました。この二十八特別委員会です。

伊藤 これは議事録はあるのですか。

西田 議事録というのは、結論だけを文章に書いてあるやつです。

伊藤 実際に発言そのもの、やりとりは記録としてあるのですか。

西田 あったと思います。この〔四六答申〕本文の第一章のところですからね。二十八特別委員会の議事録を見れば、経過としては出ていると思いますが。

伊藤 では、文部省が持っている可能性はありますね。

西田 あります。

所澤 生涯教育だけではなくて、教育の定義もこういう形でまとめるというのは非常に大変ですね。

伊藤 これは議論が沸騰したのではないですか。

西田 多少、これは普通の教育学者、哲学者がやるような定義ではなくて、かなり機能的な、ファンクショナルな、私どものような理科系の人間のやり方の定義ですね。

伊藤 いわゆる本質というやつではなくてですね。

西田 教育哲学なんていうのは私は習ったことがないのですけれども、ここではこういう形でそういう機能媒介とした。そういうことをいったもので、その次に、生涯教育の観点から、家庭・学校・社会の相互補完的な役割を究明し、教育体系の再編成を進める。この環境に対応するために次のような調査が必要だと。一番に、人間の成長・発達には、いつ頃、どんな学習体験が望ましいかということが分からなければいかん。それで、この委員会とき、大脳生理学者、心理学、社会学などの人、五、六人集まってもらって、「あなたの学問分野のなかで、人間というのはいつ頃何を身に付けなければ

ば一生涯困るのか、そういうことで分かっていることをおっしゃっていただきたい」といったら、どの委員の人もそれこそ冷や汗を流して、「残念ながら分かっていません」と。「よく、子どものときに音感教育をやらなかったら音楽はだめになるというじゃないですか。ああいうことがあるのではないですか」といったら、「分かっています」と、大脳生理学も、心理学も、教育学も、どなたからも何も提案がありませんでした。その委員会は解散しました。それはまず、いつ頃、どんなことが必要か、これが分からないと生涯教育の設計ができないわけです。私らが俗に分かっているのは、小学校四年生ぐらいにお料理のことを一所懸命やって料理の仕方を教えても、女の子はおもしろがってやるけれども、いやになれば忘れてしまう。婚約したという段階だったら、あしたから飯をどう炊くとかか、おいしいものをつくってくれといわれたときにどうかと、そのときに料理ということをやったほうが本気になって物凄くやりますよね。モチベーションがなければだめでしょう。それを、いつ、どこで、どんな場面でやればいいのか。だから、お料理の指導というのは小学校でやる必要はないんですね。それが必要なときにやれるようにしてやれば。そういう設計が必要だと。ところが、いつ頃何かというのが分かるのは、今のようにお嫁にいくときとか、これから結婚するときとか、そういうときは分かれますけれども、ここでもうな、いつ、どこで、何が必要かということをもっと人間の本質に即して考えるのは難しい。

その次に、そのための教育的な媒介作用を分析して、どの目的に対応して、どのような態様教育作用が必要かを考えた。一つは、環境を整備して、自然にその中に居たら自然にそうなるということがあるわけです。環境が人を変えらるという教育作用。二番目は、しつける。いうことを聞かなければ、頭を小突いて、「こっちを向け」としつけるようなこと。それから、目にも物を見せること、後姿を

見せることで感化を与えるというやり方。それから、学校で普通やっている、教え導くですね。それから、訓練する。いやでも応でも汗を流してやらせる。さらにグループのなかで体験させる。仲間の関係のなかで。それから最近はやりのカウンセリング。これだけの態様があるだろう。だから、事柄によってどの態様のものかいいか、どういう作用がいいかということは事柄によって違うので、感化を与えなければ分らないものと、訓練、しつけをやらなければだめなものがある。

放送大学のときに実験番組をつくって、これを私が文部省のなかで一所懸命部屋の中で見ていたのですが、そのときにしみじみ感じましたのは、NHKの人がつくってくれた放送番組で、俳句の指導をある有名な先生が黒板でやっていると、ところをビデオに撮って、それを見ていた。実験のときにそれを見ていた人がどれだけの影響を受けたか。その見ていた人が何を感じたかといったら、自分は俳句というのがよく分からなかったけど、あの先生があんなに熱心に、「いいですねえ、おもしろいなあ」といって、黒板に書いてある俳句の一つの言葉に先生が感に堪えんような姿をしている。その先生の姿を見て、俺も俳句をやってみようかなと思ったということです。つまり感化ですね。先生が懇々と俳句のよさを説明したのではないのです。その先生が目の前で、俳句に対して打ち込んで、涙を流さんばかりにそれを褒め称えているということが一つの教育なのですね。そのときに、やはり教育的な作用というのは、単に論理的な説明をしただけではすまないものだということ。

もう一つ、これも放送大学のときに学んだのですが、目に物を見せるといって、いろんな場面とか図形とかビデオを見せても、目から学べるものというのは限度がある。耳からでなければ教えられないものがある。つまり、ロジックというものによって、これはこうだから、これは間違いないんだという論理の流れとか理解というもの

は耳からしか得られない。視聴覚教育で何でも見せるでしょう。目にもものを見せると。それで一番はつきりしているのは、善悪の感覚というものは耳から学ぶものであって、目から学ぶものではないのです。倫理的な感覚。これを教育の世界でどう扱うのか、私はそのことをしみじみ感じました。前に申しあげたのですが、久里浜の特殊教育研究所で、そのベテランの先生から、「自分が扱っている盲・聾・養の子どものなかで、耳の聞こえない子どもには道徳的欠陥者がでやすい」と。非常に感銘を受けました。やはり、事を分けて話をしてやるということができない。そういう点で、教育的な媒介作用というのは、目で見えるようなものだけではだめなので、ビデオとかフィルムを見せただけではだめだと。

伊藤 そういうことは教育学ではやらないのですかね。

所澤 耳がということではなくて、感化という問題ですけれども、いま話を伺っていて僕が思ったのは、今の教員養成学部教育というのは、その感化する力を持つ教員を養成できないんです。そういうシステムにはまったくない。ただ知識を与えて、あとは経験させるというだけで、いわゆるパワーがある人間を育てる仕組みはない。昔はまだ、もともとパワーのある入学者がかなりいたので成り立ったのですけれども、今はもう、もともとパワーのある入学者は入ってこないのです。まあ、大学教育でそのパワーがそもそもつくものかどうかは分かりません。

伊藤 その教育的な態様にここでは七つ挙げているわけですけども、それぞれがどういう機能であるのか、どうやったら発揮できるのかとか、どういう場面で必要なのかとか、そういうふうな研究というのはい。

所澤 このなかで行なわれているというか、比較的領域として確立しているのが……、まあ、確立というか、大学の講座でありそうなのは、教え導くというところと訓練するということがまざっている

ような教育方法学という講座なんだろうと思います。あと、カウンセリングは最近ずいぶん出てきていますが、感化を与えるとか、しつけるとかというところになると、あまりない。

伊藤 これは教えられるものではないですよ。でも、本当に先生が、つまり今度教える側になる人に感化を与えなければ伝わっていかないわけですね。

西田 この俳句も、「この俳句は美しいなあ」といっている人を見せることが、「そうか、俺も見なきゃいけない」という感じを与える、そういうことでしょね。ここに挙げている分類というのは私どもがかなり苦労してつくったのですが、これの出てきた一番の元は、私の学生課長の一〇年間で学生問題がすったもんだして学生たちとやっていて、しかもアメリカ人から指導を受けたときに、初めて僕らはカウンセリング、グループダイナミックスで、集団心理、グループディスカッション、集団のなかでしか学べないこと、カウンセリングによって人間の自己啓発ができる、そういうことを初めて知った。それまでは教育というのは教え導くばかりだと思ったのですよね。だけれども、それをさらにやってみて、しつけどとか何だとかというようなものも考えていくと、感化を与えるというのは私の俳句のほうの放送大学の研究のときに出てきたのですが、そういうものが全部ここへ出ています。だから、普通の教育学のなかでは、まだそれをシステマティックに取り上げられていないかも知れません。だからこういうものを考えて、その次にありますように、家庭、学校、社会のなかで、一生のなかでそれぞれその生活時期がどうなっているか。人間関係がどうか。それから、そこにそういう教育機能を期待できるかどうか。そのときにちょうど本人に自然な学習意欲があるかどうか。つまり、お嫁にいくのだから料理を習いたい。そういう条件を考慮して、家庭、学校、社会の役割分担を決める。そうすると、人間の社会のなかで、いつ頃、この年齢層の人

がこういうような状況にあるときに、こういう学習をすることがもっとも効果的だ。そこにこういう機能を持った人が用意できる。そういうシステムを考えたらどうかという点で、生涯教育というのは非常に大きなシステム設計なのだということをここでいっているわけです。

最後に、このような教育体系の根本的な再編成には現在未研究なことがあまりにも多いので、この答申では将来の課題とした。これはきわめて謙虚にね。注文だけ出したけど。

伊藤 でも、現実の問題、そうですね。

西田 いつ、どこで、何が必要かということも分かっていないのだから、これは教育学の大きな宿題ですね。だから、ここで生涯学習なんていうだけでごまかさないで、生涯教育という全体的な人生の具体装置の設計図というものを考えたらどうかというのが一つの案です。ただ、これはいっただけで手が付きませんでした。したがって、その次の学校教育の役割のところに、当面の対策としてはそれができないから、学校教育とその他の教育活動の相互関係をこういうように規定しますと。学校教育の特質は、一定の計画による学習の制度的な保障、同年齢層の同質的な集団、一定資格の教職員がある、現実社会から離れた学園内の一種の原理的、一般的な学習、そういう抽象性と専門性があるということが学校教育の特色なのだ。そこで家庭教育に期待するものとしては、基本的な生活習慣、行動の節度、自制心の涵養、自然と生物に対する愛情、人に対する敬愛の念と敬虔な心、生活と勤労に対する真剣な態度。これは学校へ来る前に家庭教育でやるべきものだ。これは、この頃家庭の教育が問題になって文部省も言っていますが、大体こういうことで尽きるわけでしょう。社会教育に期待すべきものとしては、自然や文化遺産との接触、さまざまな年齢層と多様な目的を持つ集団活動への参加、思考の抽象化と社会からの疎外感の克服、職場における活動

意欲と職務遂行能力。これは現場実習ですね。

学校教育それ自体はそういうものとの関連であるけれども、今後、次のような点に改善を加える必要がある。特定能力の伸長だけで評価するのではなくて、人間性の多面的、総合的な発達を重視する。社会性の発達を助長する集団活動、個人指導のためのカウンセリングなどを充実する。情報化と教育環境の混乱に対応して、学習意欲の正常な発達、知識・経験の再整理による基礎的能力の定着をはかる。情報が氾濫している。国民一般が必要とする学習のために学校を開放する。まあ、こんなことを学校教育で当面やりなさいと。

最後のところに、全部を整理してみましたら、四六答申の審議経過は、四十二年七月三日に諮問して、四十六年六月十一日、ちょうど四年間でしょう。中間報告が三つ出ています。それで、これに対する基本構想を途中で出したときに公聴会をやっています。官公庁に四〇くらいやって、特に初中の基本構想は仙台と東京と広島でやりました。特別委員会が、ごらんのように二十一から二十八まで。

二十四が抜けているのはこの次に申しあげます。この答申のときには、全部の審議回数は二四〇回。四年間で二四〇だから、年に六〇回やっているわけです。一週間に一遍ぐらい。参加委員の総数、正委員一九名、臨時委員二〇、専門委員二人、研究協力者四、これは教育研究所あたりからです。次の二年間の第九期も……。

伊藤 これはだぶっている人もいるわけですね。

西田 ええ、だぶっている人もいます。これだけのメンバーでこれだけの委員会を動かして、二四〇回でこんなものをつくりましたというのが締めくくりでございます。

伊藤 中心になっている事務局のメンバーというのはどのくらいの数なのですか。

西田 これ〔答申〕に全部載っています。この本答申のほうには事務局も載せていただきました。

伊藤 まずは、この博士論文以上の厚さのあるこれをまとめる文章をつくるだけでも大変だろうと思うのですが。

所澤 ワープロのない時代ですからね、これは大変。

西田 ええ、私は全部その委員会に出すものは手書きですよ。ワープロがないから。まあ、リコピーというのがありましたね。それくらいです。

伊藤 リコピーねえ。

西田 懐かしいでしょう。

伊藤 (笑)、懐かしいですよ。

西田 これが事務局のメンバーです。官房審議官、西田。

伊藤 この括弧が付いているのは何ですか。交代ですか。

西田 参事官が、これは交代したのです。ここに参事官というのがある、企画室には企画官が。企画室長というのが直接のスタッフですね。ここに文化長官をやった犬丸〔直〕君、それから……。

伊藤 佐野文一郎さん。

西田 佐野文一郎さん。錚錚たるものです。調査課長がこちら、これは室長の補佐。

伊藤 はあ、はあ、これは室員ですね。企画室員。

西田 企画室にはこれだけあって、調査課の職員が上の二人しか書いていませんね。課長補佐と。

伊藤 あと調査課の人もまだいるじゃないですか。「他」と書いて。

西田 (笑)。

伊藤 やはり、データのあれは調査課がずいぶんやっているわけですね。

西田 ええ、調査課が一番活躍しました。統計でもここで。この浅木森君というのは、私らが訓練して、コンピュータのああいふ分析の専門家になりました、あと国立研究所へいったりしました。

伊藤 浅木森というのですか。へえ、珍しい氏名だな。

西田 なさけないことに、この浅木森君も、この若菜君も亡くなりました。私どもの一番優秀だったスタッフがね。今は昔話をする相手がなくなっちゃった。和君^{かず}も死んだ。阿部充夫は、これは次官になりましたね。今は沢田君が生きているくらいだな。まあ、これが私どもの直接のスタッフです。

伊藤 同時期でいうと、やはり何十人かのグループになるわけですか。

西田 そうですね。

伊藤 実際に議論するのは。

西田 各課の課長、課長補佐くらいの人が出てきて。

伊藤 そうするとやはり、一〇人程度の。

西田 まあ、そうですね。あんまり大勢だと議論しにくい。

伊藤 できないですね。

西田 私が司会をして、議論してまとめて、宿題を出すわけです。次までにこれをつくってこいと。

伊藤 文章化は、それをみんな分担してやるわけですか。

西田 この委員会へ出す文章化はほとんど私が一人で行いました。

伊藤 そうですか。じゃあ、博士号をもらってもいいくらいだな、これだけで（笑）。

所澤 ここで審査したりして（笑）。

伊藤 非常にユニークですね。

西田 そのかわり、こういうもの〔プラモデル〕をつくらなきゃならんですけれども（笑）。この次は二十四特別委員会と放送大学のこと。あと三回くらいで。

西田 亀久夫 オーラルヒストリー

第10回

日時：2003年4月15日

14:10～16:15

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊 藤 隆（政策研究大学院大学教授）

小 池 聖 一（広島大学助教授）

所 澤 潤（群馬大学 教授）

村 上 浩 昭（東京都立大学助手）

■大学紛争と第二十四特別委員会

伊藤 この前のお話ですと、二十四特別委員会と放送大学というところでございます。

西田 そういうことです。きょうは一応、「口述説明メモ（1）」として用意しました。あと二回ほどおしまいになると思います。

伊藤 よろしく願っています。この第二十四特別委員会というのは、他の特別委員会と並行してやったわけですか。

西田 並行してやったのですね。

伊藤 やはり西田先生が見ておられたわけですか。

西田 もちろん。これは例の学生運動が荒れたときですから、一〇年間学生課長をやった私としては、一番自分の経験に近いところです。その問題に対応する諮問であり、答申ですから、この委員会はほとんど中身のまとめのところは私自身の経験が圧倒的に入っている。そういうところですね。

伊藤 諮問の内容は大臣から下りてくるわけですか。

西田 もちろん。諮問、答申の形は一般の中教審の四六答申の諮問と別途に出したわけです。あの諮問による審議が始まっている途中に飛び入りで出てきたわけです。これが飛び入りで来たのは、きっかけとしては、前にご覧いただいたこれ「中教審の審議経過」がありましたね。これが走っていて、二年目のここ「十一月以降」で二十四特別委員会がぶっ続けてこれだけで走っているわけです。ちょうど半年、五ヶ月で結論を出してしまっただけです。そのきっかけは東大の紛争の問題で、自分で年代がよく分からなくなってしまうのですが、東大の安田講堂が焼かれたのと。

伊藤 あれは四十四年の一月です。

西田 そのために入学試験を東大が一遍やめたことがあるでしょう。

伊藤 四十五年度の入学試験です。

西田 四十四年度にやるべきものをストップしたわけですね。まさしくそれが背景になっているわけです。

伊藤 これは実際に法案をつくるということと直接かわるわけですね。

西田 答申が出てすぐ直後から、大学局のほうでこれに対応する大学運営の臨時措置法の法案の審議を始めて、内部ででき上がったものをすぐ党の了解を得て国会へ出すというふうにやったわけです。

ちょうど法案ができて、それが施行されたときはほとんどこの最終答申が出る頃でしたから、その法案が出てしまっただけで二ヶ月間ぐらいで日本じゅうの紛争が全部とまっちゃったわけです。しかも、その法案がいつているような最終処置というものは何も実行されなかったわけです。法律ができたということだけで。非常にラジカルな法律ですけれども、一度も実行されないまままで効果を発揮したという、ある意味では理想的な。

伊藤 抜かずの刀ですね。

西田 ええ。そのことは、あとで考えてもやはり……。

伊藤 こういう答申を出すときには、大体こういう答申を出してもらいたいというのはあるのですか。

西田 いや、これはありません。諮問されたときには、これだけ世の中がガチャガチャになっていてどうしようもないから、中教審で四六答申をやっているけれども、あんなので大学の将来像なんかをやっている間に合わないから、とにかく何かいま対策はないかと。伊藤 当面のですね。

西田 まさに苦しまぎれの諮問だったわけです。だから、諮問されるときにはこういう答申が出るという見通しは何もなかったのです。伊藤 そうですか。西田先生ご自身としてはどうですか。

西田 この諮問が出て、四十三年から四十四年にかかったわけです。

この途中まで審議していて、私ははっきり覚えていますが、四十四年の正月の三日に、お正月休みでうちでお酒を飲んで寝転んでいるときに私が思いついた発想がこれだったわけです。一口でいえば、大学が際限なく荒らされていったら大変だから、ちょうど労働組合の争議が極端になったときに工場を守るためにロックアウトしますね。その思想なんです。私は自分が労働組合をやった経験があったから、この暴れているものをそのままおいておいたら壊れてしまうから、ロックアウトする。六ヵ月間ロックアウトして、そのあいだ大学はすべての授業を休講にしても、大学の機能というのは教育のほかに研究があるのだから、先生方はちゃんと研究をやればいいじゃないか。それで、半年ロックアウトしているあいだに、授業の復活ができるようになり、研究も軌道に乗れるという状態になったら解除する。半年たってもダメだったらどうするかというのは、そんな大学をおいておく必要があるかというところまでいったらどうか。それは私自身の発想です。だから、そういうきわめて切羽詰まった考え方から出てきたので。四十四年のお正月にそう思って、後半にそれを持ち出したわけです。ですから、それは前に申しあげたと思います。この二十四特別委員会の委員長は高坂（正顕）先生で大学人ですから、「そんな大学に死刑を宣告するようなことは、俺はダメだ」というわけで非常に困りました。事務次官のところへ一緒にいってもらって話し合いをして、納得してもらったわけです。

伊藤 ロックアウトをするということになると、警察の問題になりますよね。

西田 警備そのものは大学と警察ですね。しかし、大学を締め切るということでは一切の授業をストップするわけですから、制度としてそういうものは一般の学校の教育法にはないわけです。だから、それも無期限の臨時休校という格好にしてしまうわけです。それを大

学の学長の決断でやれるようにしようということです。

伊藤 そうすると、これはやっぱり警察とのすり合わせも必要なのじゃないですか。

西田 その段階になれば、それに無理やり押し込んでくるのは營造物不法侵入になりますから、その警備ということは警察がやらなければならぬ。大学の守衛だけではやりません。

伊藤 とてもじゃないけど、守衛さんはみんなもう、この頃は年寄りで（笑）。

西田 これは、そういう発想にいくまでに文部省の局長会議や何かでも議論をいたしました。そのときに勇ましい議論は、文部大臣に全部その権限を吸い上げて、大臣の決断で警察を要請して、そして学生を排除する。そういう措置をしたかどうかということを人がおったのだけれども、私どもは、「学生課長としての経験上、日本じゅうの大学であちこちで騒動が起きて、警察に次から次から電話をして、一体文部省が何をいわれるのですか。そんなものはできない」と、それは抑え込んだのですが、その次に自民党に持っていったときに、「こんな生ぬるい案ではだめだ」と。そのときに自民党幹事長が田中角栄さんでした。最後に角栄さんのところへ行ってその筋道を話したら、「よっしゃ、これでいこう」と。やっぱりそういう点の勘の鋭い人ですね。田中さんの一言で自民党を通っちゃったわけです。それからすぐに国会のほうへ出すことにして、国会でもちろん採めたわけですが、しかし、法案が通ったら二ヵ月間でなくなっちゃった。坂田文部大臣が非常に喜ばれて、これでもうホッとしたというので、坂田さんはその紛争がおわってすぐに大臣をやめてかわっていかれるわけです。そうすると結局、本来の四六答申が宙に浮いてしまったわけです。そのことをきょうの資料（「口述説明メモ（一）」）で説明しようと思っております。

第二十四特委への諮問は四十三年の十一月に出たわけです。

そのときに、四六答申とは違って、火のついていいる「検討課題」というのを、役所のほうからこれをやってくださいという四項目をそこへ挙げているわけです。しかし、「1教育課程の充実とその効果的な実施について」「2大学における意思決定とその執行について」のほうは何も紛争の問題と関係なしに、今の二十五特別委員会で行っている大学改革、ああいうような前提になる問題があるわけです。そういったことも一応含めています。一番の中心は、「3学園における学生の地位について」「4収拾困難な学園紛争の終結に関する措置」と。

伊藤 これが目玉ですね。

西田 それが目玉です。学生の地位ということは、ちょうどこの時期に、今でも覚えていますが、アメリカでも学生紛争が起き出して、ヨーロッパでやりだしましたね。パリ大学の学生がパリの町の真ん中で敷石をはがしてぶん投げるといような、非常にラジカルな事件が起こりました。そのときに、フランスの文部大臣はOEC Dのときに日本に来た人だったと思いますが、その人がスチューデント・パーティシペーション、学生参加ということを新しい考え方として打ち出して、それが非常にもてはやされておりました。しかし、私にしてみれば、前に申し上げたと思いますが、学生課長で、昭和二十七年のメーデー事件などで大学の紛争を終結するために、全国の学生部長会議のときに文部省提案として学生参加という考え方を各大学でやってほしいとして出して、日本じゅうの大学から反対されたわけです。それは、文部省が提案したこと自身が全部抹殺されてしまったわけです。その当時に既に、学生に関するいろいろなルールをつくって学生を規制するためには、自分たちが規制されるのではなくて、どういう規制が必要かということを考える段階から学生の意見を聞くべきだ。そういう形で学生参加というのを出した。それが、現実の大学でそんな馬鹿なことをやれるもんかという猛烈な

反対を食ってだめになってしまったわけです。だから、学生参加というのは別にフランスの発明ではなくて、私どもとしてはこちらが先に一遍いったのだと。そのことも頭にありまして、一遍学生の地位ということをはっきりさせようと。

そのあとに書いてあります「答申」というのは、それからちょうど五ヵ月目の翌年四月にできてきました。今の一番ラジカルなところというのは、四十四年のお正月に私が自分でまさしく個人的に発想したことです。中身のこの答申のほうは、第1、第2と挙がっておりますが、多少いま見ていただいて意味のあるところは、「第1大学紛争の要因とこの答申の課題」つまり要因の分析ですね。二番目以下があるのですが、大部分はお説教みたいなものです。「第2大学問題の解決について関係者に期待するもの」とか「第3大学における意思決定とその執行」は、原文を見てもらえば当たり前のことが書いてあるわけですから、第2、第3は略としてあります。

第1のところだけをちょっと見ていただきますと、この紛争というものが非常に社会的な問題になったものですから、第二十四特委の始まりのときに、名前は忘れてしまったのですが、東京付近での当時いろんな論評を書いている評論家に、五、六人集まってもらって、自由な立場から今の大学紛争というのはどこからくるだろうかということの議論をしてもらいました。そのなかで与えていただいたヒントがほとんどこのなかに含まれています。しかし、ここに書き直してみますと、評論家のおっしゃったのはごく当たり前のことです。

まず、世界的に現代の先進国に特有な性格として、現体制への不信とか、豊かな社会の精神的空白とか、高度技術化社会の人間疎外と、まあ、こういうことが背景にある。特にそのなかで具体的にいえば、a世代間の価値観の相違と対立。これはどこからくるのかと

いうと、マスメディアの発達とか、大学の膨張とか、集団への帰属意識という、そういう要求から出てくる。その次に、b我が国の戦後社会の特質という点で、特に日本では伝統的権威の崩壊と。天皇制の崩壊につながりそうだったわけですね。権利意識の高揚、イデオロギーの対立、こういう諸々がある。c教育界の思想的混乱のほうでは、受験体制の歪み。これらはごく普通にいわれていることです。

こういうことをいって見たのですが、フランスでもアメリカでもやっている。私が勉強したときに教えてもらったアメリカの学生指導の専門家の一番の権威のあった人がちょうどメーデー事件のときに日本において、「なぜあれが起きるのか俺たちには不可解だ」といっていたのですが、その二、三年のうちに向こうで起こりだして、「我が国でもついに理由のない反逆というのが起こり出した」リーズ・ホスティリティー、なんとも理解のしようがないということ、その人がいっていました。フランスでもそれが起こる。世界的な現象としてあの戦後の時代に起きたことの意味が何か、これについて社会心理学者やいろいろな人が誰か論文を出さないかと私は思いましたが、ついにそれらしいものはありませんでしたね。

伊藤 この紛争の総括みたいなものはほとんど出てないですね。先生がおっしゃった要因ですけれども、この要因自体はその後変わってないわけですね。

西田 これは誰でも理屈から思いつきそうな話ばかりですね。

伊藤 「あの時期になぜ」ということがやはり分からないですね。

西田 これは、あの当事者であったあの当時の東大の加藤一郎さんとか、それぞれ錚錚たる人がいらっしやるわけですから、自分の回顧論としても何かお書きなるかと思ったら、ついに出来なかった。

伊藤 出さないですね。

西田 また逆に、あの当時リーダーシップをとって学生運動で暴れ

た全学連、全共闘の大将もいるんですけど、この人たちも、後悔しているとはいわないけれども、何だったか、自分はこうだったということはあまりいわない。私はよく学生課長のおしまいのほうに、「あの紛争が二ヵ月で収まった理由は何か」といわれて、「あの法案が効果があった」ということは確かだけれども、変な説明ですが、人間というのはいつまでも無限に腹を立てておれないものだ。ああいう激しい運動というのは必ず冷めるときがくる。それだけのことだ」と。もう一つ私が申しましたことは、自分で今でも思っていますが、これは、社会とか何とかもったもったことよりも、動物社会の一種の生理現象のようなものではないか、そんな感じがするのです。若いジェネレーションの人たちが、自分らの住んでいる世の中のなかで、「これだけは確かだ。これだけは自分たちが文句なしに認めるのだ」という価値のある権威、そういうものがどこにあったか分からなくなったときの不安感。それが結局、ある騒動を起して、「これが本物か、これが本物か」と叩いてまわって、「これだけは確かに手ごたえがある。これが本物らしい」というものをつかみたい。私は、そういう動物社会の一種の社会現象ではないかという感じがするのです。東大紛争なんかを見ていまして、歴史学者の文学部長の林健太郎さんみたいに、「おまえたちのいうことが聞けるか」と座り込んでしまうような人はむしろ学生から割合に信用されて、学生に、「おまえたちのいうことはよく分かる」なんて、滔滔とそれを敷衍したような理屈を述べている人というのは、学生からあんまり相手にされなくなってしまうのですね。

伊藤 いや、相手にされないどころか、ボコボコにやられちゃう(笑)。

西田 京都大学でも同じことがありました。だから、彼らは、自分の前に立ちふさがって、自分が参ったと思うようなものをつかみたい、そういう若い世代の一つの動物的本能のようなものがあつた

のではない。理屈にならん理屈ですけども、見ていた感じとしてそういうことです。

伊藤 やはり父権というものが喪失されて、つまり自分がぶつかる対象があんまり定かに見えないということだろうと私は思います。ただ、そんなことをいったって、今だってそうなんだから、「なんで紛争が起らないの」と（笑）。

所澤 当時、大学紛争だけではなくて、東京の場合は高校紛争が起りましたね。三大紛争校といわれた都立、日比谷、都立青山、学芸大付属と、非常に激しい状態にあったのですけれども。それと大学紛争の関係についての検討はされたのですか。

西田 全体的な紛争状況の調査のときに、当初の段階ですが、全学連がまだ組織的に動いていたときに、高等学校にいろいろ働きかけたりしていたということはあったようです。しかし、あとは私もそんなに詳しいことは分かりません。学生のほうが激しくなって、しかも、全学連というのはむしろだんだん形を失って、全共闘の三派とかいろいろなものに分かれました。これが結局、共産党の会議に出て共産党の人をぶん殴ったりしているのです。私は、インフラレッドだ、赤外線みたいになっちゃったと（笑）。

伊藤 赤外線ねえ（笑）、これはいい言葉だな。

■大学における学生の地位と役割

西田 そのときから、それまで思想問題の議論をしていた人も、「もう俺たちは分からなくなった」と皆いっていました。鉄棒を振り回して、自分の敵と思うものを殴り殺したりすることを平気でやりました。それがしまいには浅間山荘とかあいうところにいったってわけですね。このへんはもう犯罪心理学のほうかも知れない。

伊藤 そうですね、社会心理学から犯罪心理学の分野に。

西田 そういうことで、今日までこれは不明なままです。

「2大学の特異な構造に由来する混乱の原因」。これは大学のほうに対応を求めるために一応ここで取り上げたわけです。大学というものは、管理者、教員等の一つの多元的な要素からでき上がってあって、しかも、大学は非常に多面的な側面を持っている。公共的管理下の社会的機関というのは、国立大学だろうが、私立大学だろうが、大学というのは誰の所有物でもない。「大学の自治」といっていても、大学という一つの公共の施設は、教授会が所有権を持っているわけでもない、学生のもでもない、これはやはり公の施設として設置されたものだ。その設置した目的は、②自由な学問研究と教育をやるためのものであって、決して金もうけの会社のようなものとは違う。もう一つ普通の会社と違うところは、③そのなかで学生と先生がお互いに人間的な触れ合いをして、学生がとにかく三年、四年のあいだに人間的に成長・発達していく、そういう非常に教育的な場である。こういう側面があって、これが大学の構造を複雑にしているのだということです。この三つの違った立場というものを十分に考えないで、どこかの立場だけで、例えば大学管理者が大学の管理権ということだけを一方的に振り回して、学生や先生方と衝突をするということになるとどうしようもないということを、そこですべておきます。

「3新しい大学のあり方と大学制度の基本的課題」というのは、これは本〔四六〕答申で議論していることを念のためにここに書いたわけですから、これは省略させていただきます。

その次の、「4この答申の課題」としては、文部省から諮問されたものはああですけども、大学の巨大な管理組織をどうするかとか、学生の地位と役割をこの際はっきりしておきたい。ここまでは前置きですね。

第2は、関係者に今後こういう点を考えてくれと期待することを書いているのですが、これはまさしくごく当たり前のお説教です。大学の先生はどうだ、管理者はどうだ、政府はどうだと。それから、大学の意思決定ということで、この問題に対応するのが非常に採めているから、そのなかの改善すべきことも念のためにそこに挙げたわけですが、これもごく当たり前のことですから、省略します。

問題は、第4の学生の地位と役割です。ここで改めて学生の地位とはどういうものかということを考えてみる。aは、先ほどの大学は公共の営造物だという考え方から、入学を許可されて入ってきたので、在学期間のあいだ学生としての権利・義務というものがある。そういう関係にあるので、私どもはよくいうのですが、学生諸君はちょうど電車に乗っているお客様みたいなもので、料金を払っているから乗っているの、終点に着いたら降りなければならぬ。電車のなかで暴れたら車掌につまみ出される。そういうようなものが学生の地位の一つだ。bが、学生生活というのは学問を学ぶ者として、その教える先生方の指導に従わなければいかん。しかし、学生の自主的な学習を尊重して、その意見を取り入れるということも大学の学問の場では必要だろうと、そういう立場が学生にあるcに、学生の学園生活というものは、先生や学生お互いの間の相互啓発で一つの人間的な成長を遂げる、そういう場なんだ。そこでは、学生はきわめて自主的に自分の規律のある環境を自分でつくり出していくということがある。そういう三つの違った側面があるということをや、一応いいました。

そこで、紛争の問題になっております学生団体、自治会というものの考え方を改めていっております。大学は、まず一般の学生団体というものは任意加入制という格好で、学校の中の施設を使っているいろいろな活動するという条件を決めて認可している。一番問題になりましたのは、この当時に自治会というものは何だということがはっ

きりしてなかったわけです。全学生を自動加入制の学生自治会、つまり、ある大学へ入った瞬間に自動的にその大学の自治会と称するもののメンバーになってしまう。これは本人が承諾をしているとか何とかというものは何もやっていないわけです。そうすると、全員包括加入制の自治会というものが学校に存在しておいて、その会の運営が学生全体の意思に基づいて本当に公正に運営されればいいのですけれども、それが目的のために乱用されるとどうしようもなくなる。しかも、それが全学生の意思だという形をとっている限り、非常に問題になってくる。しまいには、「お前たち、きょうは授業に出てはいかん」と、学生の授業を受ける権利も拘束するということが起こっているわけです。

このところで私どもはよく学生と、「大学に入ってきた者がひとりでに学生自治会のメンバーになるというのは、何が根拠でそういうことがあるのだ」「それは自治会規約に書いてある」「そういう規約が有効だという、そういう入れ方というのは憲法という結社の自由に対する違反ではないか。結社をつくる自由とつくらぬ自由とがあるはずなんだ。俺は入りたくないというやつも自動的に会員にして、強引に会費をとってしまう。これはむしろ結社の自由の否定ではないか」という議論をしたことがあります。中学校、高等学校の頃から、自治会というものはこういうものだと思っていますから、学生たちはそんなことを初めから不思議だとは思わない。厳密な意味での結社の自由とか、個人の基本的な人権というのが何なのか。多数決というのはどういふときに合理性があるのか。もし自治会がおまえの首を締め殺してしまえと決議したら、それはどうするんだ」といったら、「それは基本的な人権に反するからいけないでしょう」という。「じゃあ、それはいけないけれども、俺たちは授業に出たいというやつを、きょうはストライキで授業に出ちゃいかんと、これは基本的人権の侵害ではないのか」というと、学生は

困るわけです。そういう議論をしておりました。このところはあまりその当時も大学のなかで明確に議論されていないので、ここでこういうことを強調したわけです。全員包括加入制の自治会というものはきわめて深刻なものだということを、学生にも大学にも考えてもらいたいということがこのポイントです。

その次に、「3学生」の政治活動と大学の秩序維持」ということで、ここで特に一番難しい点は、学生個人としては政治的な活動の自由があるし、しかも青年に近い年頃になっているわけです。しかし、ここで大学というものの学園の秩序を乱すようなことをやっちゃいかんというのがその最初のところです。それから、暴力的な活動で政治運動にそれが利用されては困るということ。それが(2)とあります。

それから、「4学生に対する処分制度」というものは、普通どこでも、停学、退学、いろいろやっているわけですが、実際の大学の場合には、ことに臨んで学校側の指導が前もって十分でなかったり、ことに臨んでやる基準がバラバラであったり、非常に学生たちから不信を招くようなことが多かったというのをそこで見えています。その次に、(2)政治的活動に伴う秩序違反についての配慮、というものは、特にここで注意すべきだというのは、処分の目的は大学の秩序と機能を守るために大学は自己防衛としてやるのであって、その政治活動している学生の目的や動機というものを処分しているのではないのだ。つまり政治的な信条に対する圧迫を加えているという学生は反発しますけれども、そうではない。その学生のストライキを禁止したということは学校の秩序としてそれを許さないのであって、それが安保闘争反対とか何とかというスローガンに対する処分とは違うのだということをはっきりさせろということ。前もって十分な指導をして、尚どうしてもいうことを聞かない人は学校を出ていってもらいより仕方がないだろうということをいって

ます。

最後に、「5いわゆる「学生参加」の意義と限界」というものをそこに挙げまして、学生の意見や希望を積極的に取り入れるということをもう一度ここで強調しております。しかし、参加をやっていく場合に、どういう問題について学生の意見を積極的に聞くか。適当なものとは不適当なものがある。最後に、結局その形としては、ある組織のなかに意見を取り入れて学生たちのメンバーを入れるということがあっても、これがなかなか日本でやりようがなかったと思うのですが、この点は、私が「昭和」三十二年にアメリカへ行って、学生指導の一番モデル的な大学といわれているミネソタ大学にいったときに、あそここの部長さんからいろいろ大学内の組織を見せてもらって感心しました。アメリカはそういうデモクラシーを誇りとしている国ですね。学生参加というのは実に徹底しております。大学の学生委員会の学生を処分する委員会のなかへ半分学生を入れていくのです。そして、学生の違反行為が起きた場合の処分を、その委員会が決める。私はそのときに、「学生の代表を入れていたら、処分について大学の先生方と意見が対立して、むしろ事柄を非常に和らげるような、優しくするような方向に偏りませんか」といったら、「その反対だ。学生の代表が一番厳しいことをいう」というのです。むしろ、「まあ、まあ」というのは大人のほうで、決してそんなことはないといっておりました。

私はたまたまあるケースを見せてもらったのですが、その大学の寮のなかで、最近、酒を飲んだり、いろいろだらしないことが起きているので、そのときにそういう学生をどうするか。寮に自治会があるわけですが、寮の自治会の代表をその委員会に呼び出して、「お前の寮でこういうことが起きている事実があるか」といったら、「あります」「寮の自治会としてはどういう処置をするのだ」「いまいろいろ検討している」と。その寮の自治会が責任をもって

やれと。そうでなかったら、その能力がないとして、寮の自治会そのものの自治権を学校が停止する。筋道として、徹底的にそのへんの自治会の立場というものを追究していくというやり方をしています。日本ではなかなかそこまではいいかないと思いますけれども。

■大学紛争の集結に関する大学と政府の責任

西田 最後に、2政府において取るべき措置というものが出てきたわけです。一つは、よく勧告をして。さらにすべて政府の一存で、文部大臣の一存で処置してしまうということは、大学の問題としては慎重を期さなければいけない。第三者機関を設けて、施設・業務をうまく管理して保全していくために必要ならば、六ヵ月間のロックアウト。これも独断でやらないでそういうふうによれというのが一つ。後段のほうでは、それでも不幸にして大学の存在理由が失われるに至ったならば、第三者機関の意見を聞いて、「学校の廃校」なんて言葉は使いませんから、「最終的な処置のために必要な、措置を講ずる」と、答申にはそれだけしか書いてありません。これが結局、大学運営措置法だと学校の廃校になるわけです。それまで大学の先生方も大部分の人がそういうことを考えたこともなかったというのですが、文部省ももちろん平生は考えたことはなかったわけです。ご承知のとおり、国立大学七十何校というのは、国家行政組織法の中の国立学校設置法という法律のなかにずっと一覧表が書いてあるわけですね。だから、「そのなかの東京大学の項を削除する」と国会決議した瞬間に大学というものはなくなるし、先生の地位も身分も何も保証がないんですよ。そういうものなのだということを、皆説明するまで考えたこともなかったので、ゾッとする。国会の文教委員会で、「何某大学の項を削除する」と、たった二、三行

の決議をしたらおしまいなんです。国立学校というのはそういうものだとすることが初めて。「ヒヤー」といって、皆びっくりしたわけです。高坂先生も震え上がったわけです。

伊藤 それは、法的にはこういう臨時措置法がなくても、例えば、いま東大なら東大で非常にひどい状態になっていると。議員立法か何かで……。

西田 大学の廃校の決議を出して、委員会を通して、本会議で通れば、それで廃校になるわけです。新しい学校をつくるときは皆簡単にやっているわけですからね。廃止というのも簡単に廃止できるわけです。

伊藤 設置法の改正ですね。

西田 設置法の改正だけで、ここという立法措置でやらなきゃできないというのは、上のロックアウトのほうです。あとのほうはとにかくはやっと匂わせるだけです。そこまでいくこともできますよということ匂わせて、むしろ説明としてそっちをいったものだから大学の人はびっくりしてしまったわけです。これは一種の霸道ですがね。乱暴なやり方ですけども。「ロックアウトになったらどうなりますか」と大学の先生から訊かれましたけれども、「ロックアウトになったら先生方は研究に専念されたらいいので、その間、毎月十五日になると先生の月給は出ますからお金は保証されているし、研究だけをやって学生の世話はないのですからいいですよ。しかし、肝心の授業ということをやらなかつたら先生の仕事は減りますから、月給が半分ぐらいに減るかもしれません」と(笑)。それをうちに帰って女房にいったら、「そりゃお父さん、大変だ」というわけです。だから、なりふりかまわず、とにかく紛争やめるように、ロックアウトをしないようにしようということにいったわけですね。だから、おそらくそのあとの二ヵ月、個別の例を調べたあの当時の資料は持っていないんですが、やはり学生との話し合いで、とにかく学校

が廃止になったら大変だからというので、今までの条件はどうだという話し合いをしてベタベタの妥協をしたところもあるでしょうし、また、断固警察を呼んで力づくでも追い払うということをやったところもあるでしょうけれども、結局なんとなしに。学生のほうもホッとしたでしょうね。二ヵ月でなくなりました。

伊藤 多くの大学ではロックアウトをやりましたよね。警察力を導入して。

西田 やったでしょう。これだけドラスティックなことをいわれたものだから、警察を呼ぶことも学校では決まりやすかったのでしょうね。

伊藤 けどやはり、大学人が、自分たちが拠って立っている基礎が法律にあるということにほとんど気づかずに（笑）。

西田 「大学自治」なんていって、神代からそういうものがあるような感じで、これは神聖にして侵すべからずと思っている。「教員の身分保障というのはどうなんだ」「そんなもの、あるんですか」と。

伊藤 廃校になれば、身分も何もその瞬間でなくなりますよね。

西田 「年金は」「そんなもの、あるんですか」と（笑）。

所澤 学生の問題のところですが、懲戒ですけれども、いま学長が学生に対して懲戒処分とかいろいろ処分がありますね。ああいう処分権の問題については当時議論されたのでしょうか。

西田 学生に対する処分ですか。あれは学校教育法のなかで学校が懲戒権を持っているというのをはつきり書いてあるでしょう。

所澤 その当時から既に書かれていたのでしょうか。今は書いてあります。

西田 今の学校教育法のなかの最初のところに、小学校から大学まで共通して、学校が教育上必要があるときは懲戒処分を行なうことができる。懲戒処分にはこれとこれとこれだ。しかし、義務教育の

学校では退学処分はないと書いてある。どういうものにどういう処分をするかということは、あくまで学校の教育的必要があるときだということ。だから、これには退学がいいとか、これには休学がいいとか、そういうことは書いていない。退学処分というのはそういう意味の懲戒処分で、学校自身が教育のために教育上本人を懲らしめるためにやる。ところが、除籍というのは別ですね。処分は処分だけれども、授業料を払わない。半年たってもまだ払わない。そうしたら、これは金を払わないのだから、電車に乗っているやつに降りてもらおう。これは除籍で、退学処分とは違うわけです。だから、根拠はあの学校教育法の何条かのあれだけです。

伊藤 それはもともとあるわけでしょう。

西田 もともとある。戦前からありますし、戦後も同じようにあります。

伊藤 これが実際法案になっていくプロセスには全然かわられなかったわけですか。

西田 僕が中教審で二十四特委のときの大学課長が村山（松雄）君でした。村山君のほうも並行してこれを法案化することをやりだしたわけです。私どもと村山君なんかと一緒に（自民）党に説明にいったりして、そして、いよいよ国会に提出ということになったわけです。しかし中教審の二十四特委以外の審議は進んでいるので、それとパラレルに行なったわけで、法案作成のほうは大学課の村山課長が中心になってやりました。

伊藤 自民党のほうは、さっきおっしゃったように、生ぬるいという反応でございましたか。

西田 「こんなものであの紛争が収まるか」といわれました。

伊藤 それは文教部会ですか。

西田 文教部会です。ずいぶん叱られました。

伊藤 今度は法案が議会にかかりますよね。そうするともう、審議

官はほとんど役割はないわけですか。

西田 国会の処置は大学局のほうが、原局がやります。あのときは確か強行採決したでしょう。自民党をまとめたのは角栄幹事長ですからね。「これでいこう、よっしゃ」というわけで。僕らはあのときあまりよく知りませんでした。そのへんの判断はやはり鋭い感覚を持っていた人ですね。

村上 ちょっとお話が戻りますけれども、緊急な問題であるこの課題を、中教審にかけて議論することについてはすんなり決まったのでしょうか。

西田 これは、四六答申の諮問が出て、最初は百年記念だからゆっくりやってくれといわれて二年間でやるつもりだったら、今の紛争で火がついてきたものですから、自民党のほうだって、「文部省はどうするんだ」ということで対応を迫られて、「いま中教審でやっております」というけれども、「あんな大学改革ののんびりした話ではどうしようもないじゃないか。それはそれで、当面問題の処置を何か対策を考えろ」と。そのときにはもちろん勇ましい議論があった、大学は信用ならんから、文部大臣が権限を吸い上げて命令を出せるといふ法案もつくれという話があったんです。

小池 その「吸い上げてやれ」という意見は、中教審の委員のなかから出てきたのですか。

西田 いやいや、それはむしろ文教部会が一番勇ましい先生方ですね。

小池 自民党の文教部会ですか。

西田 その当時が一番激しいことをいうのは、いま名前をいっちゃいけないおっさんですよ。こんな人にしょっちゅう叱られていました(笑)。だけど、それを受けてか、局長会議で議論したときにも、内輪では内藤誉三郎さん、この人がやはり勇ましいものですから。

伊藤 やはり生ぬるいというご意見でしたか。

西田 ええ、断固処置するという。あのときは、大臣は灘尾(弘吉)さんでしたかな。まだその前かな。私は、「強権発動するといったって、権力というのは実にむなしきもので、悪いことを止めることはできるけれども、大学というのは悪いことをしなくなったらいいいではなくて、いいことをしてもらわなければならない。教育と研究というのはいいいことを積極的にやることなので、それは権力ではできませんよ。やる当事者がやる気にならなければだめですよ。その点で、文部省の持っている権限なんていうのはむなしきものだと思えます」といったら、灘尾先生が、「確かに僕もそう思う」といわれました。ほかの官庁と違って、教育に関する権力作用というのは鉛と鞭である程度誘導するくらいのもので、いい教育・いい研究会というのは権力からは生まれてこないですね。当たり前のことです。

村上 中教審にかけるという形に持っていく上で重要な役割をしたのは灘尾文相でもあったと。

西田 その当時の大臣、次官のところで相談されたのでしょうか。私どもは直接そういう別途の諮問をすることについての相談は受けませんでした。それをやることにしてくれと。ですから、諮問の文章と、諮問の検討事項、こういうものは私どもがつくりましますけれども、やるかやらないかの決断はもっと上のほうです。

村上 この検討課題と諮問の内容に関しては、前々からお話いただいております、官房の三つの課ですか。

西田 ええ。ですけれども、それはもっぱら官房審議官が書くわけですよ。作文ですからね。諮問理由、文部大臣の挨拶、大臣の諮問の説明文章、それに伴う次官の補足説明、こういうのはみんな私が書くわけです。紛争のことになったら、一〇年間学生課長をやっていた私が一番詳しいから。

小池 この答申のときによくいわれるのは、大学に関しての三八答

申にですね。三八答申との関係はどうですか。

西田 あれは大学運営の改善のことをやって、私は大学局の庶務課におりました。ときどき様子を聞いておりましたが、答申が出るかでないかで新聞発表したりした頃から、国立大学協会が、「ああいう答申をすぐ実行されては困る。大学で問題が起こるから、しばらくすべて我々に検討を任せてくれ」といって、寄ってたかって押さえつけられて何も実行されませんでした。だから、そのことがこの四六答申の宿題になって流れこんできたわけです。

小池 その前に大学管理法案があって、三八答申があって。よくいわれているのは、「文部省がすぐにそういうような大学を管理するという陰謀を存分遅く持っていて、ついにここであらわにしたんだ」と、そういう論文みたいなものが結構多いわけですが。それはやはり文部省で系譜として流れていないわけではないということです。

西田 文部省がある魂胆をもって管理したがつているというのではなくて、一般の社会のジャーナリズムとか評論家の反応が、「文部省は大学管理というもので戦前の大学のような厳しい取り締まりをやりがっているのではあるまいか」というような思い込みから反発してくる。それで、大学運営の法案が出たときに、あのときだったかな、『世界』か何かの雑誌に、東京大学の有名な先生の文部省が管理したがつているようなことに対する反駁の文章が出ました。荒木〔万寿夫〕大臣が、「これに対する反駁の文を考えてくれ」といって、私が書かされました。それがまた何かの雑誌に、きょうは持ってきましたが、雑誌に載りましたよ。

伊藤 『世界』ですか。

西田 『世界』だったかな、何か。そのときには、「大学の先生というのは誰とけんかしているんだ。文部省は何もけんかを売っているわけではない。どこを反駁しているんだ」ということを、一応、こ

ちらはそれなりに論駁したつもりですが、そういう感じは非常に強かったです。あの当時は、世間全般で日教組の大きな流れがあって、教育界のなかでは文部省対教職員、あるいは大学と、こういう一つの対立があって、そのなかで古い体質がうごめいている。それに対して一般の世間の人もジャーナリズムも、文部省というのは油断ならんところだという雰囲気がありましたから、何をいつてみたって、それは誰もまともに聞いてくれない。

伊藤 しかし、大学の封建的な体質ということも当時盛んにいわれて……。

西田 産業界とかそういった方々はもっと冷たい目で見て、今の大学は少し時代遅れじゃないかという感じをいっておられましたけれども、そういうのは声にならないんです。

伊藤 実際にこの東大紛争のもとになった医学部の徒弟制度みたいな、ああいうシステムについての不平不満というのはたくさんあったと思いますけれども。

■四六答申が提起した未解決の重要課題

西田 ありましたね。中教審でも、大学の助手とか何とかの人が下働きで苦勞されているということをしきりにいっておりました。これは、二十四特別委員会がおわったところで、この法案が出た頃に中教審の本答申が出たわけです。

そこで、次の五ページを見ていただきたいのですが。今の二十四だけは法案になったわけですが、「2中教審四六答申が提起した未解決の重要課題」は何か。あれだけ答申を書いたけれども、これだけは、といった大事なことのなかで、やれなかったことは何かとずっと挙げたら、一〇出てきたわけです。

伊藤 ほとんどじゃないですか(笑)。

西田 ほとんど全部です(笑)。まあ、これを見たらがっかりしますね。四六答申でやられたものがほとんどないんです。

1に、新しい時代の社会慣行の挑戦に対して、例の「生涯教育」という点から……、学校教育というものの一つの限界が来ている。だから、家庭、社会から、全体から見直せという。「生涯教育」という言葉は使っていませんが、このことが今頃やっといわれましたね。三〇年前ですからね。

2に、学制改革をやるための学校体系の開発を目的とする先導的試行、このことがついに着手されなかった。文部省がさぼったのです。

3が、教育改革や教育の質的水準向上のためには——非常に強調しています——、教育に対する学問というのは、教育学以外の様々な学問の協力を得なければいけない。それから、研究者・教育者・行政官の三者のタイアップ、これによる研究開発をやらなければならない。これによって教育というものを実行に移すための方法論の研究をやらなければ何も進歩しませんよと。この研究開発の体制をやれということも、ついに実行されませんでした。

4の、教員が意欲と使命で大いに活動できるように職制・給与・待遇の改善。このなかで、給与の三割アップだけがやれたわけです。伊藤 職制も多少やれたのではないのでしょうか。

西田 ここでいっている職制は、専門教員とそうでない人と差別しろといった。あれはついに手がつけれなかったわけですよ。

伊藤 主任制度というのはやはり給与の問題ですか。

西田 給与もあるし、地位・待遇も変えよう。それで、給与を三割アップすること、再教育の大学院ですね、これだけできました。

このなかの一部分だけができて、一番大事な、教員組合が嫌うところの、上級教員とそうでない人との差別をやれと。人間というのは

怠け者で、そういう差がつかなければ勉強しないという性悪説に基づいているわけです(笑)。これもついに……。一番大事なところですが。

5に、高等教育の改革というものは、あの当時、私立をどうするんだ、公立大学の膨れあがったのをどうするんだと、そのための基本計画を考えて、計画的にそれを実施するための行政体制、文部省の側の体制をつくれと。だから、自然に成り行きに任せているのはだめだといったのですが、これもとうとう見送られました。そのための特別の審議会をつくって、大学が持ってきた案を審査して、いいやつにどんな金をつけて、新しいものをつくり出していけと。これはついにやれなかったし、今の段階になると手遅れです。

小池 臨教審を経てきた大学教育審議会のほうにこれがつながっていくのではないですか。

西田 文部省自体のなかにそういう推進体制をつくれとっているわけです。それを文部省は何もやっていない。

伊藤 行政体制ですからね。

西田 6が例の設置形態で、この前の独立行政法人ですか。最近、文部省のところからパンフレットを送ってきて、どの程度合理性があるのかまだ見ていませんけれども。

伊藤 いや、非常に非合理的な(笑)。

西田 この問題も今日的な課題になっているわけですね。

7の私学助成、これがまた大問題なわけです。日本の大学の八割近くを占めている私立。これに対して、一体国はどういう立場で助成するのか、しないのか。出たとこ勝負でやってきたものを根本的に何も……。これは一番難しいですが、これをやらなきゃどうしようもない。

伊藤 これは非常に政治的な問題になることですね。

西田 そうです。そのことの背景としては、次の8は入試制度です

ね。これもしきりに中教審は、入学選抜制度というのは学校制度の一種だ。だから、それを各大学の任意に任せてやってということはやめなさいといっているわけで、これもだめです。

今の私学はむしろ9につながっているわけですね。予測計量のモデルを示しましたが、長期教育計画をつくって、それによって、ここでいっているような答申のことをやろうと思えばやれるのだということをはっきりさせなさいと。これもとうとう文部省は一度もやりませんでした。この長期教育計画というのは、経済計画の立案とかなり技術的に似ていますから、文部省がやる気ならもっと調査統計、予測計量の経済学の基礎がある人がやらないとだめですね。

最後の10は答申に書いてないのですが、例の「国民教育会議」をつくれと。これがいっぺん議論になって答申になりかけたのですが、森戸先生のご意見で、一応、それは書かないということにしたわけです。これだけは委員の方々も非常に残念だといっていました。

伊藤 これはどうして反対だったのですか。

西田 森戸先生は、「我々は文部大臣から教育改革の制度の諮問を受けているのであって、それが出たあとの実行の仕方まで我々がいうのは越権だろう。それは私が内閣総理大臣に話をする」といって佐藤栄作さんのところに持っていかれました。栄作さんは沖繩返還問題でちょうど頭がいっぱいで、「いや、ご苦労でした」といって、それでおしまいになった。

小池 しかし、そのあと森戸先生は公聴会みたいなものをつくってみたり、広範に「第三の教育改革」という講演活動に出たりというような形で行動をしますよね。そういう行動をするにもかかわらず、この国民会議みたいなものには反対されたのですか。それはなぜなのでしょう。やはり内部的な対立みたいな。

西田 国民教育会議のやり方自身を反対されたのではなく、答申に書くことを反対されたわけです。答申自身の権限の範囲ではないと。

それは僕も筋だと思った。

伊藤 しかし、計画的な実施を推進する行政体制を整備することというのは、これは一種の担保ですから、あとを見ることですから、それは国民教育会議の問題と同じような気がしますけれども。

西田 これは、文部省自身にそういう制度を自分でやれるようにちゃんとしなさいといっている。ところがこれは国の行政組織のなかで直接内閣に意見をいえるような国民会議というようなものを編成しろといっているのですから、大上段に構えているわけです。

村上 国民教育会議の具体的な構想みたいなものとして、内閣に直属することのほかにどんなことがあったのでしょうか。

西田 これは、国家社会各層の人を網羅してといったくらいで、一般的な抽象的な文章だけです。

伊藤 これは臨教審みたいなものですよ。

西田 臨教審というのはその次に中曽根（康弘）さんがやったのですね。中曽根さんは、「中教審ができたけれども何も進まん。今度の本気でやるように」といって、内閣に事務局を置いてやったのです。

伊藤 これも結局、いってみれば内閣につくるわけでしょう。

西田 臨教審ができたときに、前の中教審との関連で私に話を聞きたいといわれて、臨教審の委員の人たちが五、六名集まって、私はあるところで話をしたことがあります。私はそのときに、「私の率直なこととして申しあげますと、我々が中教審でいろんな方に四年間かかって知恵を絞っていたいて、これから臨教審でこういうご審議をされるか知りませんが、おそらく今後やるべきことの必要なことはみんな中教審に書いてあるはずだ。新しいもの出てこない。

ただ私どもがやり残したことは……」と、この国民教育会議の話をしたんです。これができて、各界各層の人たちを集めて、そこで初めて国民的合意をつくり出して内閣に実行させる。そういうような

ものをやらないと動かない。臨教審というものは、中教審のまねをしてまた新しい名案を出すということはおやめになって、国民会議のような国民的合意をつくる場として活動することを私は希望するといったんです。あのときに、その委員のなかにおられたのが、デパートのダイエーのね。

伊藤 中内〔功〕さん。

西田 あの人やら、五、六人おりました。皆さん何か、分かったような、分かっているような顔をして。国民教育会議にかわるものをやってももらいたいといったんだけど、とうとうその方向へいきませんでしたね。

伊藤 結局また同じ繰り返しですね。

西田 結局繰り返し。また、やるべきことのメニューを書いただけで、実行することに対する推進力にならなかった。

伊藤 そうですね。

小池 まあ、森戸さんをかばうわけではないですけども、森戸さん自体が文部大臣のときに新国民運動というのをやるのですよね。自分が運動の中心になるんです。ところが、やはりつぶれていってしまうのですよね。予算がつかないとか、いろいろな面でつぶれてしまう。そういう経験があったのかもしれないですね。官制運動の限界みたいなものを彼は思っていたのかもしれないですね。

村上 中教審の他のメンバーの方は、国民教育会議に関しては皆さんご賛成だったのですか。

西田 最後にどこかで合宿したときには皆さん大変熱心でした。「それをやろう、やろう」ということで、すぐその案をつくられて、それがまとまりかけたんです。それで会長に話をしたら、「ちょっと待て」といわれて……。

村上 有光次郎さんはそのときにどういうふう……。

西田 有光さんは正委員のなかに。いつも文部省はずるいんですよ。

中教審のなかに文部省のOBの次官クラスを入れておいて、文部省としていいたいことをいわせる。しかし、有光さんはあの頃にはあまり喋らなかつたです。

村上 この国民教育会議に関しても。

西田 覚えていません。

伊藤 四六答申になる以前の政府なり文部省の諮問会議というのは、大体そこで決まったことが実行されると。

西田 実行されたんですね。

伊藤 かなり実行されていたのではないのでしょうか。例えば大正期の大きな審議会がごいますよね。臨時教育会議ですか。

西田 昔はもう少し役所のほうがあんまり世の中を気にせずに、やはり政府の権限が強かったでしょうね。

所澤 木田〔宏〕先生からのお話で、確かその話があったように思います。以前は審議会で決まったことをそのままやるという規則でしたけれども、戦後のある時期からは、決まったことのなかから文部省のなかで抽出してやっていいというふうに変わったというお話があったと思うのですが。

伊藤 それは制度的にべつに変わったわけではないでしょうね、きっと。

所澤 いや、何か制度が変わったというお話だったように思うんです。

西田 しかし、諮問というのは本来、意見を聞くというだけですかね。

伊藤 まあ、それはそうですけどね。

■四六答申後の人事異動

西田 役人、政府を拘束はしない。私は、こういうことをここで書いて私自身もがっかりしているわけです。そのことの一の問題は、その次の人事の問題です。

ここにこんなもの〔「四六答申後の文部省首脳的人事異動」をポンといきなり書いたのですが、四六答申が出たあと文部省の人事がどう動いたか。一番左の昭和四十六年は、大臣は坂田さんがやっていた。坂田さんは、答申が出て、そこでご苦労でしたといって、しかも紛争のほう収まったからホッとしちゃって、サッとやめてしまったわけです。四十六年のその直後から、高見〔三郎〕さん、稲葉〔修〕さんは元気のいい人ですね。

伊藤 短いですね。

西田 短い。それから奥野誠亮さん、永井道雄さん、海部〔俊樹〕さん。大臣というのはこれぐらいで、答申が出た直後の二年間のうちにバタバタと三人ぐらい変わってしまったわけです。そして次官が、すぐ今度は村山さんになる。天城さんがやめて村山さんにかわって、それからあと、岩間〔英太郎〕さん、木田〔宏〕さんでしょう。初中局長は、岩間さんがやっていて次官に上がって、安嶋〔彌〕、今村〔武俊〕。大学局長は木田さんから井内〔慶次郎〕さん。

これは本当にプライベートな私の感想ですが、文部省という役所のなかに行政の一つの系列として積み上げてくるんですけれども、非常に大きな流れとして違いますのは、初中局というのは結局、日本じゅうにある小・中・高等学校の教育委員会という中間的な管理機関を通じて、国の初等・中等教育を、ある国の決めた基準に従って、そこをみださないように、うまく軌道に乗ってレールの上を走るようにという、いわば監督行政だと思うのです。自分が教育し

ているわけではない。地域の教育委員会を通じてコントロールしている。そういう監督行政をやるのは初中局です。

ところが、大学局というのは全然違います。私は大学局ばかりですが、これはむしろ極端に言えば、国立学校・大学を中心とした設置者行政なんです。国立大学のオーナーというのは国ですからね。これは、小・中・高等学校と違って、国立学校は日本じゅうに文部省が設置しているわけです。その人事も、予算も、そのやり方も、設置者の立場から、「自治は尊重する」というているけれども、文部省とけんかをしたら金をくれなくなるわけですから、全部文部省自身が飯を食わせて動かしているわけです。だから、設置者という立場からの行政と、初中局の教育委員会を通じた間接的な監督行政と、全然行政のやり方が違うわけです。そして、いつは悪いけれども、天城さんも、木田さんも、局長になるまで大学行政は経験がないのです。ずっと初中局で来た人です。天城さんは財務課長〔会計課長〕やって、全国の小・中・高等学校の財政問題から、木田さんは地方課長をやり、教育委員会のコントロールをやってきたわけです。そのへんでは腕を振った人たちです。大学局に関係者したときにはいきなり局長です。課長、それ以下の行政官として大学行政に関与されたことはないのです。

このなかで唯一大学行政の生え抜きは村山君だけです。岩間君も、ある段階まで技術教育課長なんかをやっておりまして、大学局におりました。ところが、村山君、岩間君というのは、これは記録に残しているのか分かりませんが、私は文部省の仲間ですからね。この人たちは人柄として非常に明晰な人ですけれども、クールな人なんです。村山君なんかはいつもボーカールフェースで、私らのようにすぐ感激して、大いに感奮興起するほうではないです。何をいってもボーカールフェースでキョトンとしている。岩間君もそういうところがある。村山君は海軍の主計官、終戦のときにはスラバヤの現地の。

伊藤 司政官。

西田 それから、岩間君は海軍の爆撃機乗りです。面白いですよ、初中局の今村君は海軍の戦闘機乗りです。みんな戦争中の私らと同じような青年将校で、しかも敗戦のときに、スラバヤとか、特攻隊とか、そういうところで惨めな思いをした人たちです。私は彼らをざっくばらんに、「終戦のときにあまり酷い経験をした人というのは、感動というものを自分で抑えてしまっただけで、何かに感激してそれに燃えるということを忘れてしまった人間じゃないか。だから、そういう人たちは、中教審が何といおうと、それに乗っかってバーッと情熱を燃やすことができない人間だ」と、そういういつも冷やかしていたんです。それで、「西田君はひとりで張り切っている」といって、いつも彼らから冷やかされていました。僕らは戦争に係りはありましたが、鉄砲玉の飛んでくるところに行っていたわけではないし、生来そういうことに自分なりの生きがいを見出したいと思っておったのですが。やはり、この中教審のようなことで新しいものをつくり出していくときには、根本的にはある種の情熱がなければ。何かに燃えて、損得を離れてそれに燃え立つようなものがなかったら……、亡くなったから申し訳ないが、そのことを村山君にも岩間君にも期待するのは無理だったと思います。だから、この人たちが次官、局長になったら、あの答申のなかで、火のついたような、世間がワーワー騒いでいるようなことに手をつけてやろうかなんて形になりっこない。

伊藤 せっかく大学が静かになったのに（笑）。

西田 もうこれで収まったと。私は、坂田さんがかわり、天城さんがやめた直後に、答申を出して一週間か一〇日目に「ユネスコ事務総長を命ず」といってまた配置換えになり、そこからはもう関係なくなっちゃったわけです。こういう役所の人事というのは政策の実施段階におけるフォローアップとしては重要な意味を持つわけです。

ね。ここで坂田さんが残っていて、天城さんが残っていて、あの中教審の後始末を少なくとも何年かでやろうやという事になったら全然違ったでしょう。だから、ここで、政策推進、人事に関しての見地を一つ……。

伊藤 そうですね、これはやはり大きな問題ですね。

西田 やるのは人間ですから。中教審だろうが、臨教審だろうが、紙に書いた文章が仕事をするわけではないのです。それは要するに紙切れですよ。問題は、それを握って走り出す人間がいなければ。

伊藤 やはり、それはかなりつくったことに関与した人でなければ無理だと思うのです。

西田 つくった人とともに、それによって自分が燃えることのできる人でなければね。民間でも、ソニーの井深（大）さんとか、オートバイの本田（宗一郎）さんとか、ああいった火の玉がおるわけですね。そういった人が新しいものをクリエイティブしていくわけですから、いかなる政策の立案も最終的な推進というのは人間に帰するわけでしょう。というのが私の率直なところです。

伊藤 この審議官からユネスコ国内委員会の事務総長にボンとかわられるというのは、これは。

西田 それは、私は官房審議官のときにOECDとかそういう国際会議に天城さんのかわりに行ってくれといわれて、パリへ二〇回も行っているでしょう。

伊藤 自然の流れ。

西田 国際会議は西田君がベテランだから、あれにやらせようと、そういうことでしょう。坂田さんも、「それはいい配置だ」といっていたという。外国向けはあれがいいだろうというわけです。

伊藤 では、四六答申はあまり関係なく、こっちということですね。

西田 四六答申とは関係ないですね。

伊藤 でも、仕事の内容がガラッと変わるじゃないですか。

西田 大臣、次官、局長、皆かわったんです。それでも、四年間やって答申が出て一週間目でしたか、中教審の歴代の委員さんが全員で私を慰労しようということでパーティーをやってくださったんです。品川のプリンスホテルに私を呼んでくださって、そこで委員さんが寄せ書きをした色紙があるんです。森戸先生をはじめ、業界、産業界、お歴々が全部出てきてくださって。文部省の役人で委員さんから慰労してもらったというのはあんまりないかも知れない（笑）。

「西田君、ご苦労でした」ということで、これだけは「以って瞑すべし」です。あいつが一生懸命走り回ったということは先生方も認めてくださった。箱根やら、河口湖あたりで合宿をやりましたし、個人的にも親しくしていただいたから。

伊藤 すっかり面目を変えた新しい職場、この国内委員会の事務総長というのは、事務局はどこにあるわけですか。文部省のなかですか。

西田 もう次へいきましようか。

村上 官房審議官時代の話で最後に質問したいのですが、先ほど少しお話しがありましたけれども、局長会議にも審議官は。

西田 官房審議官は直接の大臣のスタッフとして局長会議には列席していました。

村上 また先ほどの話になりますけれども、局長会議の場で国民教育会議に関するお話は。

西田 ありませんでした。局長会議というのは、ご承知のように、大臣、次官が先頭に座られて、官房からは、総務、会計、人事の三課長。それで官房審議官。あとは各局の局長。

伊藤 それが省議というやつですか。

西田 省議です。集まっても、さっき申しあげたように、初中局の問題が出てきたときに大学局の人は全然系列が違ふ。大学のほうは、もちろん日本じゅうの大学を担当しているのですけれども、国

立学校に関する予算とか人事の問題が日常的に動いていますので、そういう米の飯を扱っているので非常に身近なものとしては国立大学です。私立学校というのは、国の助成はあの頃はまだ不十分だったし、しかも私立学校に対する財政的な援助というのは管理局がやっていたんです。大学局はやっていない。だから、ますます私立学校とは縁が遠いわけです。前に申しあげた、大学局のなかで国公私立の大学に對等と同じように扱って関与していたのは学生課だけなんです。学生が騒ぐことと、学生の学割の問題から、健康保険の問題から、学生の体の問題、運動の問題、そういうすべてが学生課では国立と私立の区別がないわけです。だから、学生課を一〇年やったということは、きわめて私は特別なケースですし、しかも、そのことが中教審をやるときには非常に助かったのですけれども、結局、大学行政の問題になってくると、学生課というのはごく一部分のことですから、まあ、私どもの力量を超えたところがあったと思います。

伊藤 学生課というのは、大学なんかもちょっとメインの流れとは違ったところに置かれていますね。

西田 事務局のなかでも一般の事務局の人事のなかに入っていないですね。教育に半分足を突っ込んでいるような感じがあるものですか。事務官のほうからは正当な事務官だと思われていないで、先生からはもちろん事務屋だと思われていて、「教育のことに関与するのは生意気だ」といわれる。学生課というのは非常に辛い仕事です。小池 国立大学の場合には、学生部長というのは大学の教授が兼任する場合が多かったですし。

伊藤 大体そうですね。

西田 それで、その人たちが二、三年で変わってしまう。これも経験が蓄積されない。

伊藤 経験が蓄積されないというのは、ありとあらゆるところで大

体そうですね。

小池 教官組織が経験を蓄積しないから、政策的な継承性がなくブチ切れてしまいますね。

■日本ユネスコ国内委員会事務総長として

西田 ひとつ、残りだけやってしまいましたよ。

伊藤 ええ、先へ進んでください。

西田 ユネスコのほうは、私は事務総長という恐ろしい名前がついているのですが、セクレタリー・ゼネラルというんですよ（笑）。

このときにやったことを簡条書きにまとめました。事務局がどこにあるかというのは、国連の組織としてユネスコというのがパリにありますね。それが、各国加盟国にユネスコ活動に協力するためにそれぞれの国のなかにユネスコ国内委員会というのを設けなさいと。

これは、国内の民間人の有力者を集めて一つのブレイントラストをつくって、そこがユネスコ活動の推進母体になる。そういう国内委員会ができる。それを文部省という役所がサポートするためにユネスコ国内委員会事務局というものを設けて、そのお世話をします。それは文部省の横に看板がかかっていて、「ユネスコ国内委員会」と書いてあります。あの建物のなかに事務局がおったわけです。その事務総長というのはそこだけのものですから、建物は同じなかにありますけれども、いわば文部省からいったん組織としてははみ出しているわけです。文部大臣の管轄下にはありますけれども、他の局なんかとは全然毛色が違うわけです。国内委員会のお世話を焼く。

伊藤 外局みたいな感じですか。

西田 そう、外局みたいなものですね。

伊藤 そうすると、身分は。

西田 身分は特別職で、給料はいい給料いただくんですよ。名前がいいだけに（笑）。

伊藤 大体各国ともそういう組織なのですか。

西田 ほかの国も、世界各国ユネスコに加盟している国はそうなっています。日本が終戦後、国連に入れないうちに、一番最初に国連機関で入れてもらったのがユネスコなんです。それで、日本政府としてはユネスコを大事にしようと文部省にこれを置いたんです。国内委員会ができたときに、ここがまたいやらしいですね。やはり国際関係だからと外務省が入ってきました。国内委員会事務総長の初代、二代くらいは、外務省の大使をやめたような人、外務省のOBがやっていました。僕の前のときに伊藤（良二）さんという人が初めて文部省の職員で事務総長になった。私のときは二代目です。そのときでも、事務総長は文部省に譲ったけれども、事務次長というのを外務省から送り込んでくる。外交官が。これは何も役に立たないわけです。パーティーをやるときぐらい。そういう雰囲気でした。国内委員会の事務局の中には、これは五、六〇名おったのでしょうか。教育、文化、学術ということを担当する課がありまして、きょうは一番最後のところに国内委員会の解散のことをやりますが、そういうことに結びつくのですが。

なった途端に、ユネスコ本部から各国の国内委員会の事務総長に違う国を見てもらおうというのでアフリカへユネスコのお金でやってくれたわけです。十数カ国の事務総長ばかりで、珍しいカメルーンとか、ザイルとか、ケニアとかというのを飛行機で周ったのです。面白かったです。

ケニアにいったときに、サファリという、ライオンやトラが野放しになっているところがあるでしょう。あのサファリパークという野生の天然の動物園というのは、四国と同じ面積があるんです。自動車に乗って入るときに、入り口で金を払ったら、「このなかで猛

獣に襲われても責任を負いません」と(笑)。走っていきますと、道路にゾウがたむろしている。「あれを怒らせてはいかんから、こちでしばらく待っている」と。もう一つ雑談ですが、途中にある山があって、その上のホテルに泊まった。山の下に湖があって、そこへ獣が集まってきて水を飲みに来る。あときに初めて教わったのですが、野生の動物というのは決してけんかしないのですね。夕方のある時期になるとヒョウみたいなのが集まってきて水を飲む。それが帰っていたらゾウみたいなのが出てくる。ちゃんと棲み分けしているですね。腹が減ったら食うのだけでも、やたらにかみ合いをするものではない。腹が減ったら、ホテルまで上がってくるかも知れない(笑)。

もう一つ、カメルーンというところにいったときに一番痛感しましたのは、昔、同じカメルーンの国のなかをイギリスとフランスが分割して統治していた。しかも、今のイラクではありませんが、ここにもともとたくさんさんの部族がおって、これがみんな言葉が違うわけです。そこで、とにかくユネスコだからって一所懸命義務教育をやるのだと小学校をやりましたわけですね。何語で教えるかというわけです。フランス領のところだったらフランス語でやって、こちら側(イギリス領)だったら英語でやって。共通語がないから。そのときに聞いたのですが、いろんな部族の子どもが集まって、マザー・タングが違うわけですね。学校でその日に習った言葉をうちへ持って帰って、お母さんと話ができない。哀れなものです。部族の言葉が違うことと、英語とフランス語と別々にあるって、共通語がない。そのときに、明治初年で教育をやるときに、いかに日本なんていうのはいい条件にあったかということを感じました。これからイラクもそうですね。これから部族の統一化が大変だと思います。

伊藤 僕らもブラックアフリカというのはほとんど想像もつかない世界ですけども、ごらんになってカルチャーショックがあったの

ではないでしょうか。

西田 ええ、そうです。ザイルというのは昔のコンゴですよ。本当に野生のところへいって見て、他のユネスコからついていった人が、「西田さん、ディベロップメントなんていうけれども、進歩というのは一体どういうものかと考えられますか」というんです。みんな靴なんか履いていないですよ。原野を走り回っているわけでしょう。こういう人たちが靴を履いて、洋服を着て、とにかく家のなかへ住むということが進歩なのかどうなのか。この人たちの将来の豊かな生活というのはどういうものなのか。野生のものはなんぼもあるし、食べ物には困らないし。そういうところで教育をする。義務教育とはここへ学校をつくってやるといっても、食べ物がなくならよそへ移っていくのだ。放牧の民族なんていうのは羊と一緒に移動してくるわけでしょう。そんなところへ学校を建ててみたって、誰も来ないです。そういうところで教育を普及するにはどうするか。これなんかは大変難しい問題ですからね。そういう広い世界をちょっと見せてもらいました。

ケニアへいったときに小学校見学にいったら、前に申し上げましたが、子供たちが、「なぜ日本はあんな小さな国で自動車つくったることができるんだ」と。ケニアの街を走っている自動車はトヨタの自動車ばかりですからね。ところが、そこへ技術援助をして、日本からも持っていくいろいろな世話をしたのだけれども、その技術援助にいった技術者がにっちもさっちも自動車の修繕なんかできない。なぜできないかといったら、あそこはもともとイギリスの支配下で、ヨーロッパのイギリス文化というのはインチ・ポンドなんです。日本からいった人は、アメリカでメートルなんです。ネジ一本、インチの規格とメートルの規格で合わないのです。だから、技術援助というのもそんなに簡単ではないんだと感じました。

その次の世界成人教育会議は、東京で世界中のユネスコの加盟国

の代表が皆集まってきてやったのですが、成人教育というと、大人の再教育、日本の社会教育のようなイメージですけれども、大部分が開発途上国でしょう。やって来た人たちの話は何が中心かといったら、文盲の人が山のようにおる。この人たちに今から義務教育をやり直しても間に合わんから、大人のままでなんとか教育できないかという、そっちが中心なんです。アダルトエデュケーションというのは全然イメージが違うのです。だから、日本なんかはあまり話に乗れない。そうすると、例えば、「それはラジオを使ったらいいだろう」とか、「テレビの放送でやったらどうか」と話が出るのですけれども、そのテレビの放送設備がないところでどうするか。ラジオを持っていったって、バッテリーが手に入らない。そういうところの成人教育というのは大変で、前に申しあげたように、一番テクノロジとして進んでおったのは、紙芝居だということになる。これは東京でやって、そのときの総理大臣は田中角栄さんでした。角栄さんが壇上に立って、日本本土、国内の再開発計画なんているのをぶっていました。皆さんキョトンとしていました。

小池 ハハハハハッ、列島改造論ですね(笑)。

西田 列島改造論です。その次に、きょうの中心テーマの一つ、国連大学ですね。これは私がある意味で非常に自分なりに情熱を傾けて準備したので。

伊藤 その前のユネスコ総会はどうですか。

西田 四十七年の十月にユネスコ総会というのは、一二〇カ国ありまして、一年に一遍パリで総会があるのです。

伊藤 各国から何人か出てくるわけでしょう。

西田 各国から代表が出てきて、一二〇カ国……。

伊藤 物凄いい数になるじゃないですか。

西田 物凄いい数です。その一二〇カ国が次から次から演説するわけです。そんなの聞いておられはせんし、パリの見物ばかりしていた

(笑)。ところが、これは、事務総長はいつて一ヵ月間お付き合ひしなければならんのです。

伊藤 そんなに長いあいだやるのですか。

西田 議題を次から次からやって、皆演説しますからね。あのときにしじみ感じたのは、英語ではないラテン系の民族はとにかくやたらに長くしゃべるのですね。「議長閣下、何とかかんとか……」と始まるわけです。大変なんだ。このときのユネスコの総会は、議長が国別で順番です。日本からは、パリの元フランス大使の萩原徹氏が議長になっていました。この人は、風格のある、いい人でしたなあ。ただしこの人は、長々とした演説をやっていると、議長席に座って壇上で寝ちゃうんです。そうすると、ある人が「日本には禅宗というものがあって、あれは瞑想しておられるのか。メディテーションなのか」というわけです(笑)。何か考えておられるんだと

伊藤 総会というのは、日本から代表としてどんな人がいくわけですか。

西田 日本代表というのは、事務総長と、外務省の関係のひと、パリに日本からいつているユネスコの常駐代表がおるわけです。そういった人たちが現場でのユネスコ本部との連絡をしてくれます。宿の世話もしてくれる。私どもは、日本が特別な提案事項を出さない限りは、演説を聞いて、何か新しい決議が出たら帰るといって帰る程度のことしかないわけです。

伊藤 国内委員会の人たちは出ていかないわけですか。

西田 国内委員会の委員さんは一人いきました。正委員の人も一緒に。

伊藤 何か大きな決議か何かがあったという記憶はございますか。

西田 いろんな小委員会ができてやるのですけれども、そのときにユネスコのラテン系がやたらに演説するということが、「ユネスコ

は世界平和のための基礎づくりだ」といつているけれども、なあに、各国が寄ってたかって自分の国益を分捕りあいする。そして、「平和のため」なんていうけれども、アメリカが、「俺のほうは衛星放送を打ち上げて文化の宣伝をやるんだ」なんて演説をすると、ソ連が手を挙げて、「そんなもので他の国まで放送をやられたら、俺のほうはミサイルでぶち落とす」と、そういう演説をするんですよ。ひどいものですよ。いや、これはもうどうしようもない。小さな小委員会に出ましたら、各国の席がアルファベットになるのですね。

ジャパンはJでしょう。私の前がIでイスラエルです。その次にヨルダンなんです。こっち「イスラエル」とこっち「ヨルダン」とは犬と猿なんだね。私がこちらとものをいっていると、こっちのやつはそっぽを向いちゃう。これがしゃべりだすと、これがプイと出ていっちゃう。だから、ユネスコといえども、世界平和どころではないと。大変なものだという。今度のイラク問題でも、国連決議とか何かを見ていて、日本では国連決議がなければ戦争していかんというようなものがあるけれども、国連決議とは何だということが。あるいは、国連とは誰かということ。事務総長ではないわけですね。寄ってたかって皆が自分の田んぼへ水を引いているだけでしょう。フランスの外相なんか、格好のいい演説ばかりしててね。今になったら、なんか……（笑）。だから、国連中心主義というのも一体実態が何だ。しかも、いまだに国連憲章の中には「日本とドイツは敗戦国だ」と書いてありますね。あの委員会に入れてもらえない。正規のあれにはなっていない。

小池 そうですね、敵国条項がありますからね。

■国連大学の創設準備

西田 だから、そんなきれいごとではない。国連大学というのはその裏返しなんです。国連大学というのは、その必要性についての最初のところは、ご承知のようにウ・タント事務総長が一九六九年に言い出したのです。国の枠を超えたアカデミックな機能を果たす国際大学というのをやろうと。先進国からのその当時の反応としては、「大学というのは本来超国家的なもので、学生も教員も国際化しているの、国際大学なんてとんでもない。そのものは要らん」と。ところが、このときに開発途上国の反応が非常に違って、「先進国は国際教育をやっているというけれども、実は自分のほうに都合のいいような教育をやって、文化的な侵略だ。植民地主義で、エリートを教育して、みんな頭脳流出してしまう。だから、今の先進国が持っている大学だけでは俺たちの国は助からんだ。ぜひこういうものをつくれ」と。そのときに、これを最初に議論するのがユネスコの場合であって、ユネスコで通ったら国連へ持っていくということになっていたんです。

ユネスコの執行委員会へ私はいきました。ユネスコの執行委員会の中では、「既存の国連機関と重複する。例えばユネスコが既に教育・文化をやっているのだから、こんな国際大学は要らない」といったわけです。そのときにこの執行委員会が最終的に皆がシュンとやられてしまったのは、開発途上国の人がこういう反論をしたのです。「我々はこの一週間集まってこの国際大学の話をしている。何日議論をしてもちっとも結論が出ないのは、そこへ来ておられる代表の方は皆、おたくの政府から訓令をもらってきているでしょう。訓令をもらってきたあなた方が幾ら集まって議論しても何も結論が出ない。反対しろと最初からいわれているんだから。そのことが、国

連大学が要するという証拠じゃないですか。訓令のない代表が集まってやる大学を作るべきだ」と、これは皆を抑えちゃった。

その執行委員会で私の隣にロシアのおじちゃんがおって、あのおじちゃん日本語が流暢でした。どうして知っているのか知りませんが。「西田さん、日本はなぜそんなに熱心なんだ」と冷やかされました。こっちは一所懸命熱心というわけです。日本はオリンピックと万博のあとでした。「オリンピックで儲け、万博で儲け、今度は国連大学で儲けるつもりですか」と(笑)。それに対する反論はあとに書いてありますが、先進国は非常に冷ややかなものでした。

次第に収斂した目的というのは、国連の目的達成に寄与する世界的な課題を学際的に探求する。そして、その学問的な英知を集めるための触媒的な作用を果たす。その結果の普及を大学院レベルで研修することになったわけです。ところが、問題は、これは一体誰が金を出すのだという財源問題が一番の問題だった。先進国が反対するのは、大義名分ではなくて、そんなもので国連の分担金を増やされてはかなわんと。だから、要らん、要らん、要らんという議論をするわけです。開発途上国は、先進国に技術開発や人材が偏在しているから、これをもっと我々のいいようなものにするためにこういう大学が必要だといっている。金の問題は、結末としては、財源は加盟国の自発的拠出金。決して国連の分担金ではない。義務的負担としないというのなら、まあ、反対はしないということになったわけです。このへんで追っ付けが出てきて。そのときに日本が真っ先に手を挙げたわけです。

日本の特異な立場というのは、これは私の主観的な解釈ですが、この創設をウ・タントさんが言い出してから五年間のあいだに世界の国で積極的に熱心になったのは、先進国のなかでは唯一日本だけなんです。そして日本は、収斂した目的というように、世界中の大学がこれに結集するシステムとしてひとつ協力しようという機構の

提案とか、異質文化の研究などをやるというように提案したし、金の問題では、自発的拠出金というのをウ・タントさんが言い出したら、日本は真っ先に「やります」といって基金構想に手を挙げたわけです。誰も手を挙げる国はなかったわけです。そして、その約束をして、国連ユネスコ会議に出て行って積極的に国連大学をつくるための本会議にかけると提案をしたわけです。議案を提出したわけです。私はユネスコの総会のときにこの議案の提出をやりまして、今の国際会議なんかを見ていて大変だと思うのは、あのときに初めて、ユネスコなんていうところでも、日本が提案を出すのに賛成してもらう人をロビーイングで、会議の前に、イギリスやいろんなところに、「反対せんといってくれ」といって口説いて歩くわけですね。あれは大変なものだなと思いました。それをやって、最終的にここで通す。ユネスコのほうは反対しないということを通っちゃった。

国連にいったときに、これはあとで聞いたのですが、国連のほうでは日本から国連大使がいつているわけです。その国連大使はどなたでしたか忘れましたが、帰ってこられたその方から話を伺いまして、「俺は外交官として国連にずいぶん今まで出ているけれども、日本政府から、『どこの国が何といおうと、真っ先に日本が断固としてこれを通してくれ』と、そういう一方的な推進をやれと指令を受けたのは初めてだ。外交官としてこんなにやりがいのあることはなかった。それまではいつも、各国の様子を見て、あんまりでしゃばらずに、イギリスやアメリカのご機嫌を損ねないようにと。外交官としてこんなにうれしいことはなかった」と聞いて、感激しました。本当にそうだろうと思いました。

伊藤 実際に国内で推進したのは誰ですか。

西田 そのあとに書いてありますが、その広範な国民的関心の高揚した理由は何か。これは私の解釈ですが、私はさっきのソ連のおじ

さんが冷やかしたときにそういう説明をしたわけです。日本は戦争に負けて平和主義の憲法をつくった。一種の理想主義を掲げて、戦争はしません、軍隊は持ちません。しかし、国連に来て、ユネスコへ来ても、現実にはパワーポリティクスじゃないか。国連の場でも、日本は拒否権もない、何をいってもなかなか通らない、極めて無力な感じ。そういう日本人が将来に対してどこに国際関係の夢を持っていいのかわからない。だから、このウ・タントさんがいうような、世界の英知を集めて、国から訓令をもらわない人が国連の最大の問題を研究すると。例えばあのときにいわれたのは、貧乏というものがなぜ開発途上国で起きているのか。この貧困というものの分析は大変なことなんです。悪循環なんです。教育を受けてないから職業がだめ。どこからその悪循環を断ち切った方がいいのか。どこに戦略的な投資をしたら何が起くるか。この研究を徹底的にやるということが大問題なんです。それなしに世界銀行が開発途上国に金をただ出したりしているけれども、みんな空回りしているだけでしょう。貧乏の問題とか、無知の問題とか、みんな絡んでいるわけです。それが回り回って憎しみになり、戦争になっているわけですから、そういうものの全体のシステムを科学的に研究するということをやるべきだ。これはまさしく学問の問題だ。日本はそういう国際的な状況にあるということ。それから、あの当時に熱心だったのは、文部省だけが熱心だったのではなくて、民間の財界とかいろんな方面から、「もし国連大学をつくるのなら俺の県においてくれ」という申し出が文部省に殺到したんですよ。

その次に、我が国の地理的条件から、戦後東西が対立している。ソ連とアメリカ。南北問題での格差。このなかで日本はその真ん中にいるわけですね。しかも、国際的な連帯ということで、開発途上国と本当にうまく付き合っていかなければ日本経済の発展も起こらない。こういうことから、国連大学でやる基本問題というのはまさ

しく日本の問題なんだ。こういう点で、とにかく非常に熱心になるべき条件があった。

そのあとは、ソ連のおっさんがいったように、オリンピック、万博を少なくともあのときやりましたからね。世界じゅうの人を招いてやるんだ。国連のこういう機関でも持てるのではないかということ、これが、日本としては唯一の先進国でやろうとしたということだ。

最後の政府としてやるべきことというのは、ウ・タントさんがいった一億ドルの拠出金をどうやって出すか。これは、担当部局として、ユネスコ国内委員会の私と、外務省の国連関係の局と、二人の局長が大蔵省と折衝にいったわけです。大蔵省の主計官も、文部担当と二人が座って、こちらは文部省と外務省と両方で説明するわけです。外務省のほうは、「一億ドルなんてとんでもない。いま外務省としては、アフリカのどこやらへ援助するために一千万ドルの要求をしている。そんなべらぼうな予算を要求したってだめだ」と、外務省は反対するわけです。こちらは、「国連が一億ドルというのだから値切ったらだめだ」と。私は、「一億ドルといたら大変な額だけれども、文部省は懐が大きいので、我々の目から見るとたいした金ではない。これが基金になって、その利子だけで運営できるのだったら、こんな安いことはない」と。あのときの段階で一億ドルといたら二四〇億円ですね。これは、その当時の東京大学の予算の三分の一なんです。文部省としたら、屁でもない（笑）。外務省は桁が違う、何百万円ということをやっているからね。「文部省としてはたいしたことはない」といったら、その大蔵省の主計官が文部省の主計官に、「文部省というのはそんなものか」と。「おお、そうだよ。たいしたことないよ」といって、それで通っちゃったんです。文部省の政務次官が河野洋平さんだったわけです。外務省があまり意地悪をいうものだから、河野洋平さんに、「外務省がしきりにも

う少し値切ろうとして、なかなか折衝がしにくい」といったら、河野洋平さんはドスの利く人ですからね。「よしッ」といって外務省の政務次官に電話をかけて、「文部省がやるんだったら、お前のほうが足を引っ張ったりしたら承知せんぞ。値段を負けるなんて、バナナの叩き売りではあるまいし、値切ったらみっともない。よせッ」といって外務省を抑えてもらったんです。それで外務省は文句をいわなくなった。そんな予算が通ったら、外務省の予算が通りにくくなると思うたのでしょうか。

伊藤 だけど、これは外務省もかなり熱心に推進したのですか。

西田 いや、熱心じゃなかったです。文部省が一人で張り切ってた。ユネスコなんかへいって推進をやっているのはこちらがやっているわけですからね。

伊藤 文部省のなかだって、西田先生だけがやっていたわけではないでしょう。

西田 文部省はその当時から大いにやれといわれていましたね。ユネスコ国内委員会というのがあるのですから。第一義的にはユネスコでまず議論するというのですから、こちらが熱心にならざるをえないわけです。

外務省の不熱心と、もう一つ困りましたのは、大臣がちょうど奥野（誠亮）さんになったときでした。奥野さんは自治省から来られた人です。あの人は自治省の財政局長をやった人で、「日本にこんなに大学がたくさんあるのに、こんな金を出してまたやる必要があるのか」と率直にいわれましたから、「それは大臣がおっしゃるのとは違います。私は大学局で一〇年間大学のことをやっていて、日本の大学は、文部省が、『ああしたほうがいい、こうしたらいい』と幾らいつてみたって、大学側の人は、『文部省が余計なことをいうな』と、なかなかいいこと聞いてくれません。私は、国連大学というものが一億ドルできて動き出したら、これが今のユネスコの

根本問題をやると思ったら非常に大きな大問題。これに世界中の一流学者を呼んできて研究すると思ったら、日本からもらっちゃいといわれるだろう。そのときに、日本の学者のなかにそこへ出ていって一緒に議論できる人が何人おるかということをやでも問われる。そうすると初めて日本の大学の学問が国際的なレベルと比較されることになる。そういう刺激を日本の大学に与えることが、日本の大学の人が世界的なところで活躍できるだけの素地ができるので、そのための刺激になればこんな安いものはありません」といったら、「よし分かった。やろう」といって、帝国ホテルへ国連の総長なんか来たときに、そこへ大臣が談判にいった、日本に引っ張ってくるといって話を付けられた。奥野さんは、話が分かる、いい人でした。

ただ、そういう趣旨でつくった国連大学がその後どうなったかというのは、天城さんやなんかのあれ（オーラル・ヒストリー）でも出ているように、最初は武者小路（公秀）さんとか人を集めてきて、加藤一郎さんも理事に出そうと思って、ちょうどあの人が網膜剥離で入院されたときでした。私は病院のベッドの横まで頼みにいったことがありました。加藤さんは感銘してくれたのですが、その頃は、事務所をどこに置くかとか、最初は筑波に置こうとしたんです。私は筑波の敷地まで見にいきました。だけれども、これも私が勝手に燃えていただけで、あと人がかわったらスーッと静かにおさまってしまいましたね。今、当初の目的のような形で、世界的な学者を集めて根本問題をやるというような動き方をしていないのでしょうか。

伊藤 存在感が全然ないという感じがですね。

西田 日本の大学に影響与えるということは何もないんでしょう。

伊藤 何もないですね。

西田 ねえ、情けないなあ。

伊藤 どういうことになっちゃっているのかなあと思いますけれども、一種の国際機関ですよ。

西田 ええ、唯一の日本にある国連機関ですからね。

最後のところの、私の退官とユネスコ国内委員事務局の解散というのは、このユネスコ国内委員会で国連大学が通って、ちょうど三年目に私はやめることになりました。そのときにやった一番大きな変革は、私はユネスコの事務総長で三年間やっておりまして、私がパリへ行ってユネスコの会議に出ると、パリに文部省から派遣されている職員がアタッシュエや何かで大使館におるのですが、そういう人がみんな集まってきて、奥さん連れで、ブローニウの森なんかで焼き肉会をやったり、とても歓迎してくれるんです。ずいぶんもてるなあと思ったら、だんだん話を聞いてみますと、国際関係のできる人間というのはユネスコ国内委員会からも外国のどこかへアタッシュエでいきますね。そのときに、その人たちが外国へ行って仕事をしているということ、これを文部省の人事課は俺のところの人事だと思っていんですよ。あれはユネスコの国際関係で、あれは特別職みたいなものだと思っているんですね。

小池 出向だと。

西田 うん。だから、そういった人たちが、私がいった機会に、「西田さん、私らはこういう仕事をしているんだ。何とか私らの将来のことも考えてくださいよ」という感じなんです。それがだんだん分かりまして、そのことが一つ。

もう一つは、ユネスコ国内委員事務局のやっている仕事を見ていましたら、それこそ皆語学ができる人だから、外国から来た文献とか、日本からの文献を外国に出す。縦のものを横に直しているだけなんだね。横のものを縦に直したり、要するに翻訳業なんです。その翻訳したものを文部省に渡して、文部省で答えが出てきたらまた横に直して、その取次業なんですね。ユネスコ国内委員事務局に何十人おるのに、教育・学術・文化の中身が何も分かっていない。中身が分からないで、ただ取り次ぎをやっている。逆に、今度はユ

ネスコへ外国人のお偉方が来る。それを、事柄が高等教育だということで文部省の大学局へ連れていったら、誰も相手をする人がいないわけです。「勘弁してくれ」といって。文部省自身が国際的なことに對して自分で対応しようとしていない。ユネスコ国内委員会は横文字を扱っているだけで、中身は分からない。これではだめだ。

それで私は、文部省自体を国際化しなければだめだ。そのためには、なまじこんな語学専門の事務局があることは間違いないから、これを解散して、文部省のなかへそれらの人材を全部入れちゃえと。ちょうどそのときに、大学学術局だったでしょう。それを学術を切り離そうとしていたわけです。局を増やすのはいけない、何かを減らせと大蔵省がいうから、じゃあ、ユネスコを減らしましょうと。そして、学術国際局という局をつくったわけです。そこへユネスコの事務局におった連中をみんな入れて、そして、ユネスコ国内委員事務局という独立のものはなくなって、文部省の学術国際局のなかに飲み込まれたわけです。そうすると、それは当然文部省の人事課が見るわけです。そうすると、外国にいてるやつもこっちへ帰ってこられる。本籍地がそこになる。今度は、外国のお客さんを全部文部省のなかへ直に受け止めるというようにしようとした。だから、私は退官とともに、文部省の別館のところで、国内委員会の事務局の全員を集めて解散の辞をやったわけです。それだけは、私は悪いことをしなかった。そのおかげで、あのときパリの大使館にアタッシュエでおった連中が翌年配置替えで帰ってきて、植木〔浩〕君というのは文部省の会計課長にまでなりました。どんどんその後いろんなところへ、各局の課長、課長補佐に、国際関係の人が入っていくわけです。そうすると、外国人が来ても怖がらないようになりました（笑）。最後の解散のことをやりましたけれども、あとは国内委員会で文化祭の芝居をやって褒美を三回もらったというだけ。ということ、私の本日の予定はおわりです。

伊藤 ちょうど時間ですが。この退官というのは、これは年齢ですか。

西田 ちょうどこのときは昭和四十九年で私が五七歳です。私は六〇歳までおいてくれると思ったら、五七歳で肩たたき。次官が村山さんでして、「西田君、すまんけれども、俺も今度やめるのだけれども、きみもいっしょにやめてくれ」と。私は前から聞いていたのですが、文部次官の最大の仕事というのは局長クラスの人事で、最後に次官というのは平知盛だということです。やめさせる人の首を抱え込んで壇ノ浦で海に飛び込む（笑）。考えてみれば悲壮なものですよね。「俺もやめるから、きみも死んでくれ」という。そうではないと、なかなか納得しないですよ。みんな欲があるから。そのときに村山さんからいわれて、「六〇まで無理ですか」といったら、「きみ、あとがつかえるんだ。やっぱり何とかしてくれ」「分かりました」「しかし、やめてもすぐはあれだから、日本育英会へいってくれ」といわれたんです。「それはお断りします。私は一〇年間監督していたので、私がそんなところにいたらあとの学生課長が仕事できませんから、よします」といったら、「それなら勝手にしてくれ」というわけです。半年間何もなくて、本当にきれいな退官です。

それから六ヵ月たって、暮れに、西田君が遊んでいるのではかいそうだからというので、岩間さんのときに、「いま放送大学のことがいろいろ採めているから、後始末と設立準備のことを手伝ってくれ」というので、「身分は」といったら、「文部省科学官に採用する」と。いや、本籍はやはりどこかほかのところでないかと科学官にはなれません。月給が出ないですから、東京工業大学教授ということです。工業大学の事務局長と話をしたのでしょう。そしたら、向こうの教授会に全然かからないで、「東京工業大学教授」という名前をもらって。文部省の科学官室へ行って、それから五年間放送大

学のことばかりやります。それは次回のお話になりますから。

伊藤 木更津高専はさらにその先ですか。

西田 ええ、それから五年間放送大学のことをやって。このときは一番辛いときでしたね。ちっとも大学のかたがでできないで、あのときはほとんどノイローゼみたいになりました。五年目に放送大学がやっとできるということが決まったときに、今度は木更津高専へいってくと。それからあとは、高専とか、フィリピンへいったのと、短大ですね。これでおしまいです。しかし、七〇過ぎるまで仕事させていただいたのはありがたいですよ。

伊藤 分かりました。では次回、放送大学のお話から始めて、できれば木更津高専までいくと。

西田 今回は放送大学。これも私は自分なりに情熱を傾けてやったのです。いま文部省もときどき放送大学の広告の紙が下がっていますね。これは将来性があると思うのですが、また当てが外れて国連大学と同じようにならないかと心配しています。放送大学は、私は将来のためになると思うのですが。今回は、放送大学のこと、それから木更津高専。最後に、短大のことが少しと、私が文部省、高専、短大とずっと一貫してやりました入試問題の自分なりの追跡研究のこと、それで締めくくりにしたいと思います。あと二回。

伊藤 ありがとうございます。

〔日程相談〕

西田 木田さんのあれ（オーラル・ヒストリー）全然見ていませんが、ほとんど初中関係だけでしょ。

所澤 いやいや、そんなことはないですよ。大学関係も、放送大学なんかも木田さんはずっと。

伊藤 ちょっと見てください、やっぱり。

西田 木田さんが放送大学をやった？

所澤 ええ。

西田 エー(笑)。

伊藤 いや、いろいろ話されましたよ。

所澤 法案が通らなくて、無念の次官退官だったと。

西田 ああ、放送大学の？ あのとときは佐野(文一郎)さんが主にやられたんです。放送大学ができないものだから、放送教育開発センターというのをつくってね。

伊藤 確かその話でしたね。

所澤 その話は詳しく出ました。

西田 ふうん、そうですか。木田さんが放送大学をやったかなあ。

所澤 放送大学の話は、昭和三十年代に、まず各大学に電波を割り当てて、それぞれ大学に放送局を開設するというプランから出てきますから、ずいぶん詳しいです。

西田 それは私がやったときよりも、ちょっと世代が違いますな。

伊藤 そうです、ちょっとその前の話から始まっているんです。ですから、ちょっとお目通しいただければと思います。いろんなことをやっておられますよね。

西田 私が放送大学をやるうとしたときには、一番心配したのはNHKです。放送大学ができればNHKの教養番組がつぶれるのではないかと。

所澤 木田先生の話だと、そのときにNHKの内容が変わって、非常にNHKの教育放送の水準が高くなったというお話だったと思います。

西田 私はNHKの最高の上層幹部数名に赤坂の料亭に呼ばれて、「放送大学の構想と、これと、どういうふうに両立するのか」といわれました。私は、「そんなものは心配ないですよ。あなたのほうの教養番組というのを私どももぼつぼつ拝見していますが、おたくの教養番組というのは私らからいえばアイスクャンデーみたいなものです。口当たりがよくて、あとは、「おいしかった」と

いって、それでおしまいです。うちはそうじゃないんだ。腹の足しにならないといけない。最後にそれがどこまで血となり肉となつたか、それを確かめるのが放送大学です。おたくの教養番組はそんなことはないでしょう」と、アイスクャンデーだといったんです。

伊藤 かなり大胆なことを。非常に重大な発言を今(笑)。

所澤 今のお話と木田先生のお話と比較してみると、その時代の表と裏が出てくるような感じがですね。

西田 それなら少し木田さんのも見えておかないといかんね。

伊藤 そうですね。ちょっとごらんいただけるとありがたいのですけれども。

西田 木田さんは格好いいことをいったかな。だけど、私はそんなことよりも、この前申しあげたように、そのことの基礎的な勉強のところから、いろいろ教育に関するいろんな問題。前に申しあげた、人間が目から何を学び、耳から何を学ぶということですね。テレビとラジオの違い。そのメディアの違いが教育にどういう効果を持つのかという、そういう根本問題を非常に考えて……。それから、感化を与えるというので、俳句の勉強で、人間の教育効果というのはどういふ内容のものがあって、どういう効果がある。ま、そんなことが大変自分なりによかったのですけれども。では、次回にまた話します。

口述説明メモ(1)

西田 亀久夫

1. 中教審第24特委関係

[諮問] 当面する大学教育の課題に対応するための方策について(昭和43年11月18日)

[検討課題] 1. 教育課程の充実とその効果的な実施について
2. 大学における意思決定とその執行について
★ 3. 学園における学生の地位について
★ 4. 収拾困難な学園紛争の終結に関する措置について

[答申] (昭和44年4月30日)

第1 大学紛争の要因とこの答申の課題

1. 大学紛争の根底にあるさまざまな要因 p-161

現代の先進国に特有な性格 ⇒ 現体制への不信、豊かな社会の精神的空白、高度技術化社会の人間疎外

- a) 世代間の価値観の相違と対立⇒マスメディアによる刺激と暗示、大学の膨張と都市生活の孤独、集団への帰属意識と充実感
- b) 我が国の戦後社会の特質⇒伝統的権威の崩壊、権利意識の高揚、イデオロギーの対立と過度の政治意識、青少年訓育への成人の自信喪失と過保護、青少年の自己主張と自己統御力の不足
- c) 教育界の思想的混乱、受験体制による歪み、高等教育の膨張と内容改善の遅れ

2. 大学の特異な構造に由来する混乱の原因 p-163

- a) 大学の多元性⇒管理者・教員・職員・学生
- b) 大学の多面性⇒ ①公共的管理下の社会的機関、②自由な学術研究の場、③師弟と学友の教育的な人間関係の場

この多元性と多面性を無視した一面的な大学運営の実施や、所属集団の無制限な権利・自由の主張が混乱を引き起こす。

3. 新しい大学のあり方と大学制度の基本的課題 p-164

- a) 高等教育機関の類別化、教育内容の多様化、組織・編成・規模の適正化

- b) 公費負担の教育費の拡充、公的な調整による計画的整備・充実
- c) 自治に伴う責任を負担し、教育・研究の効率化を自律的に行う新しい大学の形態の検討
- d) 大学の閉鎖性を打破する教員の選考方法・任用期間・身分保障と大学教員にふさわしい待遇の検討

4. この答申の課題 p-165

将来の根本的な改革の基礎作りとして、当面の事態に対応するため、次の問題点に対応する方策を検討した。

- a) 大学組織の複雑・巨大化に対する管理運営機能の改善
- b) 学生の大学における地位と役割の考え方を明確にすること
- c) 紛争が収拾困難な時の大学と政府のとるべき特別措置の方針

第2. 大学問題の解決について関係者に期待するもの [略]

- 1. 大学教員のあり方 p-166
- 2. 大学管理者の役割と責任 p-167
- 3. 政府の任務 p-168

第3 大学における意思決定とその執行 [略]

- 1. 大学の中核的な管理機関における指導性の確立 p-169
- 2. 大学管理機関の機能的な役割分担の徹底 p-170
- 3. 意思決定手続の合理化 p-171
- 4. 全学的な協調の確保 p-171
- 5. その他の必要な改善方策 p-172

第4. 大学における学生の地位と役割

- 1. 学生の地位についての考え方 p-174

学生の地位は、次の諸側面から総合的に考えられるべきである。

- a) 学生の地位は、入学を許可されて生ずるものであり、在学期間、教育を受け施設を利用する権利とともに、大学の規律に従う義務を負う
- b) 学生は、学問を学ぶ者として大学の教育計画と指導に従うべきものであるが、その自主的な学習態度を尊重して、学生の意見を取り入れる配慮が必要である
- c) 学園生活は、自律性の涵養と学生相互の啓発による豊かな体験の

場であり、自主的に規律ある活動を営むことが期待され、大学はそのための環境を整備し、必要な助言と指導を与える責任がある

2. 学内学生団体と学生自治会

p-175

大学は、教育指導上の責任から、次のような措置をとる必要がある

- a) 一般団体は、任意加入制を前提とし、施設利用の特権を認める公認には、目的・組織・経理等についての必要条件を定め、その運営についても必要な指導を与える
- b) 全学生の自動加入制の学生自治会を認める時は、会議の定足数、議事手続等を規定に明記させ、その活動が大学の存立目的に反したり、学生個人の基本的自由を拘束したりしないよう条件を付し、これに反した時は公認を取り消すものとする

3. 学生の政治的活動と大学の秩序維持

p-177

- (1) 学生は、個人としては政治活動の自由を持っているが、学園においては、その秩序を維持するため、次のような制約がある
 - a) 学問の教授・研究に必要な自由で寛容な知的雰囲気乱すような政治的宣伝の場として利用されてはならない
 - b) 大学の施設を政治的活動の拠点として乱用してはならない
 - c) 学園外でも大学公認団体の名において不法な活動は許されない
- (2) 学園が、暴力的な政治活動に利用される弊害を除くため、次のような措置を採る必要がある
 - a) 学生団体の公認の基準に違反したものの公認を取り消す
 - b) 学生の授業出席妨害や授業放棄の決議を行うことの不法追求
 - c) 大学だけで秩序回復ができない不法行為の排除は警察力に

4. 学生に対する処分制度

p-179

- (1) これまでの秩序違反の処分の問題点
 - a) 処分対象の範囲が不明確、警告指導が不十分で、処分の意図が分かりにくい
 - b) 処分の採り上げ方や処分の基準がまちまちであったり、審査が公平でなかったりして、学生の信頼を失う
 - c) 処分の教育的意義を誤解して寛大に過ぎたり、学生の反発を恐れて不問に付したるする
- (2) 政治的活動に伴う秩序違反についての配慮

- a) 処分の目的は、大学の秩序と機能を守ることであって、その行為の目的や動機ではないことを、客観化された形で、明確に公示すること
- b) 事前に警告指導し、限度を越えて違反を繰り返す者は、学生の資格を欠く者として、大学を去るのが当然という考えを学内に徹底すること

5. いわゆる「学生参加」の意義と限界

- a) 学生参加の意義---学生の希望や意見を大学の意味形成の過程に取り入れる恒常的な体制を作り、全学的な意思疎通の道を開くとともに、参加の体験を通じて学生の社会的成熟を助長する
- b) 学生参加の領域と限界---学生の課外活動・福利厚生事業・就学環境の整備・教育計画と授業の改善などは有効
しかし、教職員の人事・学業成績の評価・学校財政・学長学部長選考の信任投票などは不適當
- c) 学生参加の形態と条件---意見調査・公聴会・大学の意思決定機関からの諮問に答申する審議機関への学生の代表参加

第5. 当面する大学紛争の終結に関する大学と政府の責任

1. 大学においてとるべき措置

教育と研究を目的とする大学は、組織的・計画的な秩序破壊の運動に対抗する体制を備えていない。そのような事態に対処するには、大学の意思決定とその執行の権限を、臨時的に、適当な大学管理者に集中する必要がある。

2. 政府においてとるべき措置

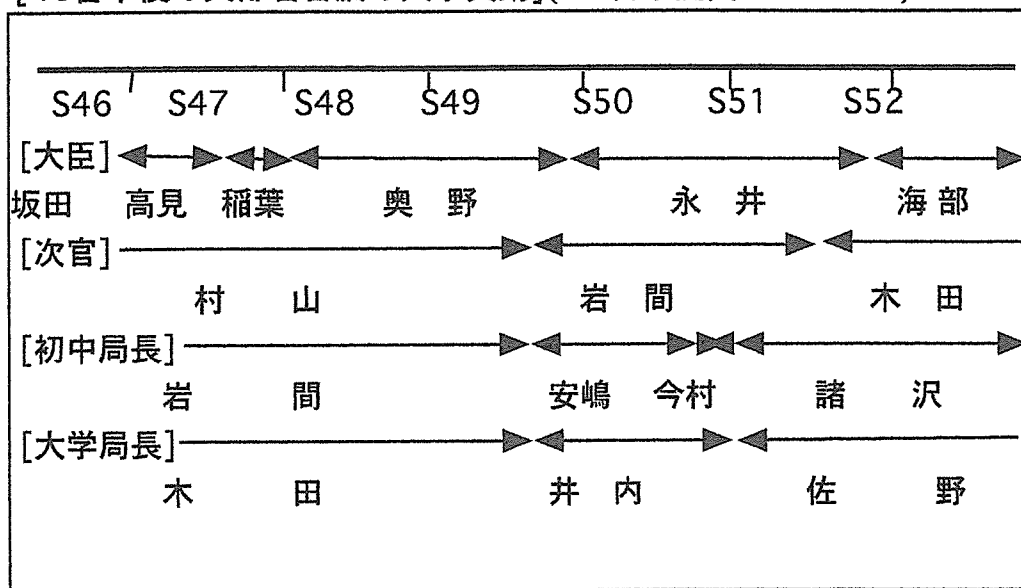
- a) 大学のとるべき措置について勧告すること
- b) 公正な世論を反映させる権威ある第三者機関を設け、大学管理者が施設を保全し、妨害を排除して教育・研究の再開に専念するため、大学の設置者が6ヶ月以内の期間休校または一時閉鎖でできるようにすること
- c) 政府は、大学の自治能力の回復にあらゆる指導と援助を与える責任がある。しかも、不幸にして大学の存在理由が失われるに至ると認められる時は、第三者機関の意見を聞いて、最終的な処理のために必要な適切な措置を講ずべきである。

2. 中教審46答申が提起した未解決の重要課題

1. 新しい時代の社会環境の挑戦に対応して、「生涯教育」の観点から、全教育体系を再検討すること
2. 将来の学制改革の基礎となる新しい学校体系の開発を目的とする先導的試行に着手すること
3. 教育改革の推進と教育の質的水準の向上のため、関連学問分野領域の連携のもと、教育者・研究者・行政担当者の協力による研究開発推進体制を確立すること
4. 教員が意欲と使命感をもって生き生きとした活動を展開するよう、教員の職制・給与・処遇を改善すること
5. 高等教育の改革と整備充実に関する国の基本計画を策定し、その計画的な実施を推進する行政体制を整備すること
6. 国・公立大学の現行の設置形態が大学の自律性と自己責任による運営を妨げていることに留意し、制度的な改革を行うこと
7. 私学助成政策を抜本的に再検討すること
8. 大学入学者選抜制度は、広義の教育制度と見るべきものであり、個々の学校の任意裁量に任すべきものではなく、その公共性を重視した妥当な制度的な改革を実現すること
9. 予測計量に基づく国の「長期教育計画」を策定し、この答申が提案する基本的施策の的確な推進を図ること
10. この答申の実現を図るため、内閣に対して直接助言することができるとする社会各層の代表者を網羅した「国民教育会議」を設置

すること(注記: 都合により、正式答申からは除外)

[46答申後の文部省首脳の人事異動](★ 答申提出 S46-6-11)



3. 日本ユネスコ国内委事務総長時代

[S46-6-22 ~ 49-6-15]

1. ユネスコ主催のアフリカ諸国見学旅行 (S47/2/16~24)
カメルーン・ザイール・ケニア
2. 世界成人教育会議(S47/7/18~28)
3. ユネスコ総会出席(S47/10/17~11/21)
4. 「国連大学」の創設準備(S47~48)
 - (1) その必要性について
 - a) ウタント事務総長の提唱(1969)---国のわくを越えたアカデミックな機能を果たす「国際大学」
 - b) 先進国からの批判---大学は本来超国家的で学生・教員も国際的
開発途上国の反論---先進国の国際教育は文化的植民地化
ユネスコ執行委員会---既存の国連機関と重複、ユネスコでやれる
これに対する反論---“政府からの訓令なき大学”の必要
 - c) 次第に収斂した目的---国連の目的達成に寄与する世界的な課題の

学際的探求のため、世界の学問的英知の結集に触媒的機能を果たすことと、その成果の普及のための大学院レベルの研修を行うこと

(2) 財源問題について

- a) 先進国の立場---国連自体の財政難と分担金増額への強い反対感
- b) 開発途上国の立場---先進国に偏在する開発技術と人材養成の再編
- c) 結末---財源は加盟国の自発的拠出金とし、義務的負担としない

(3) 日本の特異な立場について

- a) 創設決定までの5年間終始一貫して熱意を表明した唯一の先進国---システムとしての大学の機構、異質文化の研究などの提案、自発的拠出金による「基金構想」への真っ先の拠出約束、国連・ユネスコの会議における積極的な決議案の提出
- b) 広範な国民的関心の高揚した理由---① 日本国憲法に理想主義を掲げても、国際政治の現実のパワーポリティクスであり、国連の場でも常に敗戦後の無力感を味わってきたこと
② 我が国の地理的条件から、戦後、東西の対立、南北の格差の緊張の渦中にあり、しかも国際的連帯を離れて我が国の将来の繁栄はないことを実感してきたこと
③ オリンピック・万博の経験から、国際的に評価される仕事に自信を持てるようになったこと

(4) 日本政府部内での手続について

- a) 1 億ドル拠出金の確保
- b) 国連大学設立準備会

5. 退官とユネスコ国内委事務局の解散(S49/6/15)

西田 亀久夫 オーラルヒストリー

第 1 1 回

日時：2003年5月13日

14:05～16:10

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビューアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊 藤 隆（政策研究大学院大学教授）

小 池 聖 一（広島大学助教授）

所 澤 潤（群馬大学 教授）

村 上 浩 昭（東京都立大学助手）

■海外を視察する——ケニア・アメリカ・イギリス

西田 放送大学のことの前に、資料をいろいろ見ておりましたら、中教審のおしまいのときのことと関連のあるもので、私が忘れていたちょっと珍しい資料があったものですから、それをご紹介します。これ〔図版「経済・社会発展と教育需要」参照〕をどうぞ、「お一人一枚ずつで」五枚あります。

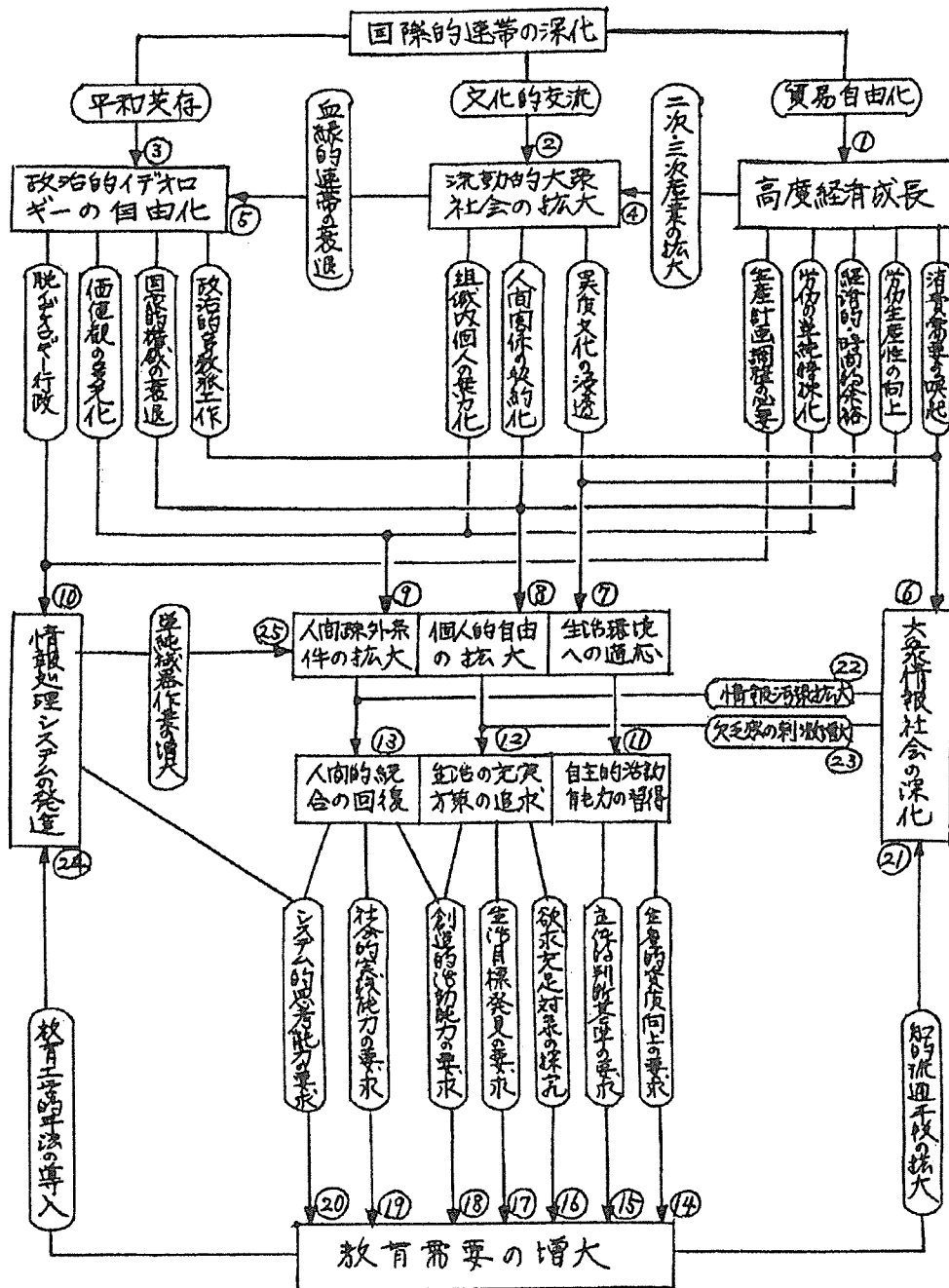
これは、右肩に日にちが書いてありますように、四六答申を出した年〔昭和四十六年〕の十二月ですね。ですから、私が官房審議官をやめてユネスコに移っていたときです。この資料を何のときにどのような目的でつくったかと手帳を見てみたら、ちょうどこの日に経団連の日本生産性本部で、中教審を背景にした教育問題の話をしてくれと言われて、そのときに話をしている。それがちょうど十二月十四日です。それから数日して、箱根で自民党の文教部会と政調会の集まりがあって、そこでやはり中教審のバックグラウンドの説明という形で報告にいったわけです。そのときのもので、このあいだの中教審の繰り返してみたいのですが、簡単に申しあげます。

世の中がいろいろ移り変わって教育に対する需要がどう変化するかという関連性を一番上に、①②③と書いてあります。世界的情勢と違って、国際的連帯が深まっていく。そうすると貿易の自由化がおこり、それによる経済成長。真ん中に、文化の交流が国際的に起こる。そうすると非常に流動的な大衆社会ができる。平和共存という目標のもとに、政治的イデオロギーの自由化が起こる。その下に、こういうものがどういう内容としてそこにあらわれてくるかというのが書いてあります。それらが今度は人間の生活にどういうインパクトを与えているかというのは、その下の、⑥⑦⑧⑨と書いてある

ところですね。つまり、大衆情報社会の深化、生活環境への適応、個人の自由の拡大、人間疎外条件が拡大してくる。それがひいては、下の⑪⑫⑬というのは、生き残っていくために自主的活動の能力を得たい。生活充実の方策を追求する、人間的統合の回復と。こういう形で必要が出てきて、それが下の矢印で、こういう形の教育の需要が起きてくる。そのことから、生産性を上げるための資質の向上が要る。主体的な判断基準というものを持たなければならぬ。欲求充足の対象を求めようとする。生活目標の発見、創造性の能力とか、社会的実践能力、この⑭から⑳ですね。こういう形でこれが教育需要の増大としてあらわれてくる。したがって、これからのちの教育には、好むと好まざるとにかかわらずこういうものが全部絡み合って教育のなかに要求されてくるのだと。その右側、左側にはさらに、情報化システムの発達とか、大衆情報社会の深化、これらがやはり縦横に非常に関連性をもって教育のなかに要求を突きつけてくるのだというようにことを説明したわけです。これを持ってきたのは、それから三〇年たって今の時代でこれを書いてみても、あんまり変わらない。ほとんど現代の教育が直面している問題にそのままあてはまる部分がたくさんあるだろうと。違うところは、東西の世界的な政治形態が、アメリカのパワーというものがひとつ伸びてきたとか、あるいは、ソ連とアメリカのそれが解消してしまっ

て、しかも、いま目先のところでは新しい経済不況というものが起こりつつあるというようなことが出ておりますけれども、大勢としてはこういうものがその当時と今とほとんど変わらなくあるのではないかという感じがしました。

私が中教審の答申のなかに出てきたことを拾って、自分の主観的な立場で相關関係を見たという格好ですけれども、こういうのは学問としては何だったのでしょうか。教育社会学でもなければ何なのですか。要するに、これは素人の思いつきみたいなものなのですから



ども、教育の問題を考えると、いま当面の学校教育の問題というのは、非常にミクロ的な問題と違って、世の中全体の動きから教育のあり方を考える場合に、やはりこういうような発想も必要じゃないかということだと思います。まあ、ご参考のためにひとつごらんに入れておきます。

きょうの主題の、第二回目の口述メモです。きょうは放送大学のことと、そのあとの木更津高専のことまで。木更津高専は最後の二枚くらいです。

最初に、放送大学の創設準備ということが私が文部省を一応退官して最初に直面した問題になるわけですが。四十九年十一月一日から五十四年六月までと書いてあります。四十九年六月にユネスコをやめて、それから、「育英会に行くか」というのをお断りしたものです。だから、勝手にしろと言われて、六ヵ月間いわゆるブランクになって、完全な浪人をやったわけです。今度は予備役召集みたいな格好で改めて文部省に呼び出されて、当面の任務は、放送大学の問題が長年問題になっているけれどもなかなか具体化しないから、その促進をやってくれと。身分としては文部省科学官で、東京工業大学教授という。これは月給をもらうための肩書きです。

この六ヵ月間に、私としては生まれて初めて自分の家を買いました。それまではずっと官舎ばかりです。このときにしみじみ感じましたのは、まったく私的なことですが、兵隊の時代から三十何年公務員を勤めて、そのときにもう退職金を全部はたいても、やっと家を買うための頭金だけ出てくる。それ以外は全部借金じゃなければ。それもどの辺で買えるかというのは、初めは下高井戸の辺とかとやっていたら、ここもだめだ、だめだと、結局八王子までいっちゃった。公務員の給料というのはそんなものですね。そのときに家を買って、官舎からそこへ宿替えをして、いった団地の町内会長を六ヵ月間やっておりました。

今度は岩間（英太郎）さんが次官になられて、「西田君、ひとつ放送大学をやってくれよ」ということで、私は放送大学自体は漠然としか知っておりませんでした。が、やりがいがありそうだったということでお引き受けしたわけです。

伊藤 この前のときに、放送大学がうまくいかないからやれと言われたというのですが、そもそも放送大学はどんな段階だったのですか。

西田 それはその下の(3)に書いてあります。「放送大学」に関する準備段階というところで。つまり木田（宏）さんのところから始まるわけですね。そのステップがあるのですが、私は前段のそこまでのことは知らなかったわけです。いきなり放送大学というのは面白そうだからというのでやりがいがあると思ったのですが、それはその(3)で申しあげます。

最初に科学官になったときにすぐやらされたことは、入ってすぐその年の二月からケニヤへ教育視察団でいってこれと。五人ほど連れて。これはJICA（国際協力事業団）のほうがアフリカのそういう国に技術援助するということで、教育についてどういうプログラムを組んだらいいかということを文部省で調べてくれということで、このときの大学局長は佐野さんでしたかな。「西田君、やってくれ」というのでいったわけで、これはあくまでそのときだけの短編読みきりのケニヤ視察。大変珍しいところを見せてもらったのですが、そのことで帰ってきてレポートを出した。それが後でどういう実を結んだかというのは知りません。

その次に本来の任務の放送大学に関連したことが、翌年の五十年五月から六月にかけて、アメリカとイギリスの放送大学関係のことを視察するというので派遣されたわけです。最初にロンドンにいて、イギリスの文部省で、向こうであの当時有名なオープン・ユニバーシティーというのがスタートしておりましたので、文部省の人

からいろいろ教育一般論のことを聞きました。このときに、私は、「世界の義務教育はほとんど満六歳から始まっているが、イギリスでは六歳で始められた理由は何だ。学問的にどういう根拠があるのか」といったら、「いや、子どもがお母さんから離れられる年頃になったというだけのことだ。何も教育学上の問題ではない」という話を聞きました。イギリスの視察は、日本にありますブリティッシュ・カウンシルが非常によく世話をして下さった。その紹介でオープン・ユニバーシティ、これはロンドンのずっと郊外のところにあるのですが、そこを訪ねていきました。そのあと、ケンブリッジ大学の教育学部を。ケンブリッジ、オックスフォードも有名ですから、ケンブリッジでもこういう通信教育の問題をどう考えているかということを。

伊藤 通信というのは放送ですか。

西田 放送大学はオープン・ユニバーシティですから、ああいう伝統的な大学がどういう見方をしているか、それとの連携がどうなっているのかを聞こうとしたわけです。

イギリスに一週間ぐらいおって、そこから飛行機でシカゴへ飛んで、シカゴのTVカレッジというのがあって、そこをさっと見て。

これは、私はあまりよく覚えておりません。一番印象に残っているのは、ネブラスカ州というのがアメリカの中部にある。そののリンカーンという首都に、ユニバーシティ・オブ・ミッドアメリカという、中央アメリカ大学なんていう名前の放送大学があった。

伊藤 これは放送大学ですか。

西田 ええ、初めて向こうへ行ってから知りました。

伊藤 その電波はどのくらいをカバーしているのですか。

西田 中部というところから、あの広いアメリカですから、あの近傍の州でしょうね。東部、西部まではとてもいいと思います。

伊藤 いいってない。

西田 はい。まあ、ネブラスカ州なんていうのはまさに僻地ですから、そういうところでその人が大変熱心にやっている状況でした。最後にサンフランシスコにあって、スタンフォード大学というところへ行って、有名な大学ですから、その教育学部長さんにお目にかかって。このときにはむしろ、私はその前に国内で放送大学の実験番組などを見ていつも感じていた、「一人人間が、テレビやラジオ、目と耳でいろいろなことを学ぶと、そういう人間の感覚器官というものがメディアとしてどういう働きをしているのか。そういうものが学問的に分かっているのか」と言ったら、この人は、「そんなのが分かったら、わたしのほうが教えてほしいくらいだ」といわれました。何も分かっているかないと。これだけのところを正味半月くらいで周ったわけです。

「主な知見」と書いてあります。いって一番分かりましたのは、放送というものは、放送を出すのにタイムスケジュールがあるわけです。何曜日の何時からはこの番組だ。そのスケジュールがあるものだから、勉強をしたくてもしたくなくても、いやでも学習者はテレビの前へ座らなければならぬ。その人に無理やりに勉強するというリズムをつけるのが放送の目的で、そこが通信教育と違うところだと。書物で勉強するというのはいつでもできるけれども、実はなかなかやらない。いやでも応でもそこへ座らせて時間通りにやらせるといふ点では学校教育と同じなのだ。一つの教育スケジュールの強制作用ですね。放送というものをそういう形で我々は考えている。一方において、通信と同じような教材を送り、テキストで勉強させていくけれども、その勉強をいやでもやらせるようにテンポを決めていくのが放送なんだ。だから、教材を与えるということだけだったら必ずしも放送が不可欠ではないし、オールマイティーではない。しかし、これがなかったら、勉強しているのかしていないのかというのは、結果を見るまでは分からない。そのリズムを与える

というのが放送の取り柄だということをしきりに。私はこれが非常に印象的でした。

伊藤 これは映像なのでしょう。

西田 テレビもラジオも両方あります。

伊藤 だけど、ビデオなんかを使えるようになると。

西田 これはあくまで補助的な手段として、電波が届かないところとか、あるいは、自分で自学自習する施設として別にビデオセンターをつくるということはありますけれども。

伊藤 いや、個人がビデオでとっちゃえば、いつやってもいいと。

西田 そうなったら、結局、本を読むのと同じになっちゃいます。怠けようと思ったら際限なくなる(笑)。だから、むしろその電波のスケジュールに併せて、ここまで勉強しているはずだからとどんな試験をして、だめなら落っこすと、そういう学校教育の強制的なリーダーシップというのがあるのだということですね。だから、広く万人に教育を開放するといったらきれいだけど、実は無理やりあるスケジュールに乗せて引っ張っていくという考え方があるわけです。ご承知のとおり、イギリスの教育制度というのはもともとエリート主義で、きわめて限られた人しか大学教育を受けられない。それをオープンにしたという点では、キャッチフリーズは教育の普及、機会均等ということなのですけれども、メディアとしての教育放送の意義というのは、そういうところにあるのだということ言われて、私はびっくりしたわけです。

伊藤 放送の時間帯というのはどうのですか。

西田 それは放送大学のほうで勝手に決めちゃうわけです。何曜日の何時からはこれだと。この勉強をしたい人はその時間にテレビ・ラジオの前へ座って聞きなさいという形で、これは何も妥協の余地はないわけです。学校のほうが決めちゃうわけです。その決め方自身は学習者の都合を考えてやるでしょうけれども。日本の放送大学

だって、新聞にちゃんとスケジュールが載っていますね。いやでも、それを見て、「俺の聞くのはこれだ」というのでやればいいということ。そのことが一つ。したがって、今度は教えようとする自身の教材の提示というものは、やはり印刷物ということ是不可欠だ。テレビの画面に映したり、耳で聞いたりして、さっとそのときで消えてしまうものだけでは学習教材の提示としては不十分だということが、まあ、あたりまえのことですけれども、よく分かりました。

二番目の、学習を深めていく。新しいことを聞いたというだけではなくて、それが血となり肉となるような学習とするためには、スクリーニングによる面接指導が不可欠だということを向こうのオープン・ユニバーシティの方が言っていました。これは当然のこと。

最後に、さっきスタンフォードで申しあげた、ラジオ・テレビの、視覚・聴覚による教材提示、これが教育効果にどういう差異があるのかということはどこにも研究成果はないということが分かりました。これはオープン・ユニバーシティでも専門職がおりましたけれども、こういう教材のつくり方について学問的に十分分かっていないことが多いから、その研究施設が必要だということを強調していました。これが、あとで放送大学がなかなかできないときに幕張に「放送教育開発センター」ができましたね。あれは佐野さんがずいぶん苦勞してやられたのですが。私どもはあのときに非常に喜んでおったのですが、まだ学問的に何も研究されていない。この研究センターで、今後、放送教育のメディアのつくり方を勉強していけば、それが日本の教育の教材作成の一番基本になるだろうと期待したのですが、放送大学ができて数年たったら、あれがなくなりましたね。今、教育のメディアを研究するという形で、坂元「昂」君がいろいろやっていますが、私どもが期待していたセンターとは変わってき

しました。ここまでが最初の五十年六月中頃までの状況です。

■放送大学の基本構想

所澤 いま坂元先生の名前が出てきたのですが、その頃から東工大の坂元先生とだいぶ接触があったのですか。

西田 坂元さんは、ユネスコにおりましたときに、アフリカやアジアの開発途上国の教育の普及ということでいろいろな教育工学的な方法を使うという形で、あの人らはそういうテクノロジの専門家ですから、いつも仲間として協力してもらっておりましたから、前から知っておりました。

村上 時間を定めて学習時間を強制することで学習にリズムを与えるという話は、以前に義務教育の話のときに出てきたと思うのですが、けれども、これと放送に関する調査にいらしたことの関係というのは。

西田 放送が学校と同じようにスケジュールを強制する機能を持っているのだということは向こうへいって話を聞いて初めて、「あ、そうだな」と思いました。だから、あとで出てまいります、私は放送大学の教育システムというのは第三の教育システムだと。一つは学校制度というもので、丸々時間割を決めて、ある施設にみんなを無理やりに集めて、スケジュールどおりに教えていくというシステム。反対は、自分で要る本を買ってきて、本で読んで勉強するという学習システムがあるわけですね。これはアドバイザーもいない、自分自身が本と対面しながらやっていく。教材というのは目の前に印刷物としてあって、学習という活動はあくまで自分が自発的にやっていく。うんとやればうんと偉くなるし、やらなければ際限なくなる。本を山のように積んであるけれどもちっとも学習しないという

経験を持っていますから、読書という学習システムにはいい点と悪い点がある。ただ、一冊の書物があるときに読んだということでは生観が変わることもある。そういう大きなショックを与える効果は読書にありうるわけですね。だから、放送大学でも、一番根源的な教育効果を期待することは、いい教材を採用すれば可能だろうと思う。だけど、読書のほうはそういう意味で自発的な努力というものが以外にそれをプッシュしていくものがない。それと、学校というリジッドな強制のシステムとの中間にあって、放送のある部分は学校教育のシステムに似ているけれども、あと自分で学習したり勉強したりという意味では読書のシステムと似ているところがあるわけです。放送教育システムというのは、第三の教育システムだという感じがしておりました。

伊藤 通信教育というのはどこに入りますか。

西田 通信教育は、放送大学のなかでテレビ・ラジオの電波がないというだけのことですね。だけど、放送大学をつくったあと、通信教育の学校も放送大学の電波を利用して、自分たちの単位習得の一つの補助的手段として使わせるように協力すると、文部省のほうは言ったようです。というのは、放送大学をつくるときに通信教育というのは当然危機感をもって反対したものですから「いや、協力しましょう。大いに見て下さい。電波はいつでも出ているのですから、見るのはただです」という格好で。

そこで、さっきも言われました(3)の、それまでの放送大学の準備段階はどうなんだということに戻ります。私の知っている限りでは、昭和二十九年という古い段階に、木田さんの社会教育局で放送大学の検討開始があった。だけど、この当時の発想は、視聴覚教育課というのが中心になって放送を通じての社会教育という、不特定多数の国民に対する啓蒙的な放送の活用という形で、後の放送大学のようなものほど具体的にはなっていなかったと思います。四

十六年頃になってから、四年間、これを大体大学レベルのものにしようという形で実験番組の試験的な制作をやって、その試験放送をして、どういう状況で番組づくりをしたら一番教育効果があるかという実験をやって、二、三〇の番組ができて。私が放送大学に関与したときに、それが科学官室にビデオテープでどっさり積まれてありました。四十九年、私が関与する直前に、放送大学の基本構想というのを審議会が発表しておられます。木田さんが自分は放送大学をやったと言っておられましたけれども、この基本構想というものの中身をいろいろ調べてみたら、その概要が書いてありました。放送大学というのは普通の大学と同じように正規の単位を与え、資格を与える学校であるべきだとか、放送と、学習のためのガイダンスであるとか、指導であるとか、実習であるとか、そういうものをうまく組み合わせるのだとか、そういう形で放送大学のごく基本概念が書いてあるだけです。放送大学はどういうカリキュラムで、どんな中身で、どれくらいの規模のものをつくるのだということはまだ何もなかったわけです。ですから、この基本構想が出ていただけで、いつまでたってもそれが具体化するステップが踏まれていないので、それを私にやってくれと言われたのだと思います。

伊藤 そういうことがないのに、実験番組は既につくっていたわけですか。

西田 ええ、実験番組というのは、放送で教育的なものを教えるということが、NHKの教養番組とは違ってどういう工夫をする必要があるかという形で、主としてNHKやほかの民放からプロデューサーの人を頼んできて、それと学校の先生とタイアップして、どういう演出で番組をやり、どういう形でカメラを使うか。その場合に、スタジオのなかに人を座らせておいてやったほうがいいのか、後から見せても効果があるのか。そんなようないろんな仮説を設けて番組をつくっておったわけです。そういうものをたくさん積み重ねて

いって、この手法でやれば大学教育の番組として十分効果のあるものができるという、それをつかもうとしたわけです。私は、科学官室に入って最初の半年間はやることがないのですから、暗室の中で、一人で何十巻とそれを眺めておったのです。それはなんとも孤独な、ちょっとノイローゼになりました。これの番組のなかから教育番組のつくり方の結論が出るのかということを考えて見ましたが、最終的に結論は出ていないと思います。今の放送大学だって依然として模索状態みたいですね。とても難しい問題が残っております。そういうものを試験的にやっておられた。

木田さんのオーラル・ヒストリーを少し拝見しました。中で、いい番組をつくるにはどういうことだと。大学の先生が、俺のやる講義を黙って写真に写せと言っているもだめだと。それはおっしゃるとおりなんです。私どももその後ずっといろいろな実験番組をつくりましたけれども、一番切実に感じましたのは、名前は忘れましたがお茶大の栄養学の大先生の栄養学の番組をつくらうとしたときです。プロデューサーはNHKの人でした。最初にやり方の打ち合わせをしたんです。プロデューサーが遠慮のない人ですね。「あなたの栄養学の講義と、NHKでやっているお料理番組とどこが違うのですか。それから説明して下さい」といったら、その先生は冷や汗を流して、答えられないのです。「私のは栄養学だ」というので、「それと料理番組とどう違うのか。それが分からないと私どもは演出のしようがない」というのです。つまり、長年閉鎖的な教室の中で自分が一番いいと思うやり方でやっている。これが最善だと思っている。誰からも批評がないのです。なんぼ分からない、変だとは思っていても、学生はちゃんと聞いて答えを出さないと、単位をもらえないから。これも一種の強制。そのことで先生は初めて愕然としたわけです。確かその番組は、途中までやって、やめちゃったのです。先生のほうがいやになって。プロデューサーも、どうプロデュ

スしていいのかわからない。お料理番組とは違うのだということはおっしゃるのだけど、何が違うのかということが分からない。

もう一つ、東北大学かどこかの医学部の先生が実験放送をやったわけです。その先生がやっておられる、人間の健康保持という一般的な医学知識の放送をやってもらって、一般市民の人に聞いてもらって、その反応を聞いた。圧倒的に、「あの先生は何のつもりであんなことをしゃべっているのだ。私どもの健康のことと、どう結びつくのかさっぱり分かん」とやられて、その先生に言うのも気の毒なくらいがっかりした結果が出ました。つまり、大学教授が自分でやっている授業というものが、放送大学というところの一般市民の学問的常識を高めるということと非常にギャップがある。これをうまく演出していい番組をつくるということをやらないと放送大学の意味がない。しかし、これは大問題だということを感じて、ますます難しいということばかり感じていました。

伊藤 NHKの教養番組とどういうふうに違うのかということの問題ですね。

西田 これは、前に申しあげたでしょう。NHKの幹部が心配して、自分の教育番組がつぶされるのかと。それは違っていると、私は大変露骨に、おたくのはアイスクャンディーだと。食べておいしければ「ああ、うまかった」と、それでしまいなのですけれども、放送大学のほうは、それがどれだけ血となり肉となって学問的な成果があったかということの評価して、そこで良し悪しを見る。だから、おたくの教養番組というのは、決してそれを邪魔するものでもないし、それはそれで今後ともあるのではないですかと。向こうの人は、安心したような、しないような顔をしていましたけれども。放送大学も、スタートした段階で番組制作にはずいぶんNHK、民放から人を探用してやったのですが。

所澤 NHKの方にアイスクャンディーだというお話をされたとい

うのは、大体いつぐらいの時点ですか。

西田 これは、私がやり始めて、外国視察にいった帰ってきて、次のステップで(4)「放送大学設立準備調査会」の調査活動と書いてありますね。それが実際に五十年四月頃から動き出すわけですが、そこでいろんな具体的な調査活動を始めた。その頃だと思います。赤坂の料亭で豪勢なご馳走をいただいたのです。

伊藤 どちらからですか。

西田 NHKから。向こうの人は非常に心配しておられるのですけれども、もちろんべつにつぶれもしませんでした。

今のような準備段階で、放送大学の輪郭は、理念とか目標は漠然と書かれているだけで、その規模、内容、そういったものが何も決まっていない段階で、それを一歩進めるということには、前から放送大学設立準備調査会というのがあったわけです。この調査会にご相談をして、最初にやろうとして手をつけたのが、四月頃から準備して六月に実施したのですが、そこにありますように、放送大学に關する一般国民の需要をはっきりつかもうと、「放送大学に対する教育需要の予測調査」というものをやりだしたわけです。

■放送大学設立準備調査会と調査活動

伊藤 この準備調査会というのは前からあるわけですね。

西田 あるわけです。

伊藤 西田先生は、その何かなのですか。

西田 中教審の審議官みたいなもので、今度は科学官で来て、調査会の世話をするからというので、私が調査会の事務局として、調査会の方のご意見を聞きながら実務的な作業を進める。それが私の仕事になったわけです。

伊藤 西田先生の部下はいるわけですか。

西田 部下は、その当時の大学局の昔の庶務課ですね。あの当時は企画課とっていました。その大学局の庶務課が事務的なスタッフです。私が昔官房審議官で自分の部下を持っていたように、そのなかで放送大学の設立の担当者と、その課長か課長補佐の人たちと一緒に世話をしたわけです。

伊藤 それが事務局ですね。

西田 ええ。

伊藤 それは文部省のなかにあったわけですか。

西田 もちろん、大学局のなかです。大学局の昔の庶務課。企画課と言っていましたかね。その調査を企画してそれを行ったというのが私としては多少自慢で、一番やりがいのあった仕事で、これが放送大学の具体化の一番根本だったのです。その調査のこの資料が、原本はここにありますが、「『放送大学』に対する教育需要の予測調査の調査票」という印刷物があります。その主なところをそのままスキャナーでコピーしてまいりました。一番最初の二、三枚は、どういうことを調査したかという形で書いてありますが、冒頭の一枚目に文部省の名前でご挨拶をつけて、実際はこれは専門の調査機関にやらせたわけです。面接調査です。日本じゅう全体のサンプルをとって、五〇〇〇人やりました。膨大な調査でした。

その調査の中身というものを次のページから見ていただきますと、「放送大学（仮称）に対する教育需要の予測調査」で、問題の一番目に、「ひとくちでいえば、今の世の中では、学歴や資格のある人と、実力のある人とどちらが重くみられていると思いますか」とか、「あなたは、もし、自宅でできることであれば、少しぐらい無理をしても、もっと勉強してみたいと思うことがありますか、それとも、そうは思いませんか」とか。その次に、「あなたが、勉強してみたいと思われるテーマは、つぎのうちのどれですか。いくつでも

あげて下さい」と。これは、その他のところを除けると三三項目あるわけです。お茶大のあの当時の教授の太田次郎さんらと協力して、委員会の事務局としていろいろ研究したのです。このテーマの選比方をどうするかというのが難しいです。結局どうしたかといったら、こちら「口述説明メモ（②）」に書いてありますが、『Encyclopedia Britannica（大英百科事典）』の目次をだんだん煮詰めていって、これが一番オールラウンドで、しかも要点を失わないような項目の選び方だったので三三項目決めたわけです。

所澤 いま太田次郎さんというお名前が出てきたのですけれども、あの方は確かNHKの教育テレビが始まったときからかわわって、お茶大の学長にもなられたのですよね。

西田 学長にもなりましたね。

所澤 先生との接点は、この会ができたときから始まったのですか。

西田 そうです。

所澤 太田先生は、この会にはずっと参加されていたのですか。

西田 調査会の専門委員みたいな格好で入っていたと思います。それから、芳賀綾さんという方がおられますね。あの人なんか入っておられました。ああいった方々と私は科学官として協力して、この調査の企画からまとめを全部やったわけです。ここに、あなたの知りたいものを全部チェックしてくれと言って、これを面接で一々読み上げて、本人に、「あ、それ」といわせてチェックする。次のページのSQ1という質問に今と同じようなものが出て、「いまあなたが選んだテーマのなかで、一番勉強したいものは、どれですか」と、一つ挙げてくれという面接をやっているのです。

伊藤 ウエートをつけようというやつですね。

西田 ええ。その次のSQ2のところ、今度は、一番やりたいことと関連して勉強したいのはどれですかと、一つだけいいのか、絡めてやるのか。次のページにまいりますと、Q4として、どの地

域に興味を持っているか。アプリカとか、ヨーロッパとか。Q5として、時代としては、有史前から現代まで、時代項目。

伊藤 未来もありますね(笑)。

西田 次のページに、Q7放送大学を利用して勉強するとしたら、自由に放送によってただ聞きたいというのか、希望する科目だけを選んで単位をもらうのか、大学卒の資格がとりたいのか、それを聞いたわけです。今度は、Q8単位をとるためには、一科目について、これは大学の基準と同じように、一日で四五分の放送というものがあって、それを週に二回、一学期、一五週続けなければいけません。それが通ったら一単位だと。そういう勉強をやれますか、やれませんか。さらにその下に、Q9単位を取るには、テキストを読んだり、レポートをついたり、毎週三時間程度自学自習をしなければなりません。聞きっぱなしではだめですよということです。それができるかどうか。Q10では、放送大学で単位を取るためには、面接授業や試験のために、一科目について一学期二回以上、「学習センター」へ出かけて勉強しなければなりませんよ。それがあなたの県のなかである都市にあったらいいですか、いきませんかという、通学の可否ですね。そういったことをおしまいのところまで聞いているわけです。

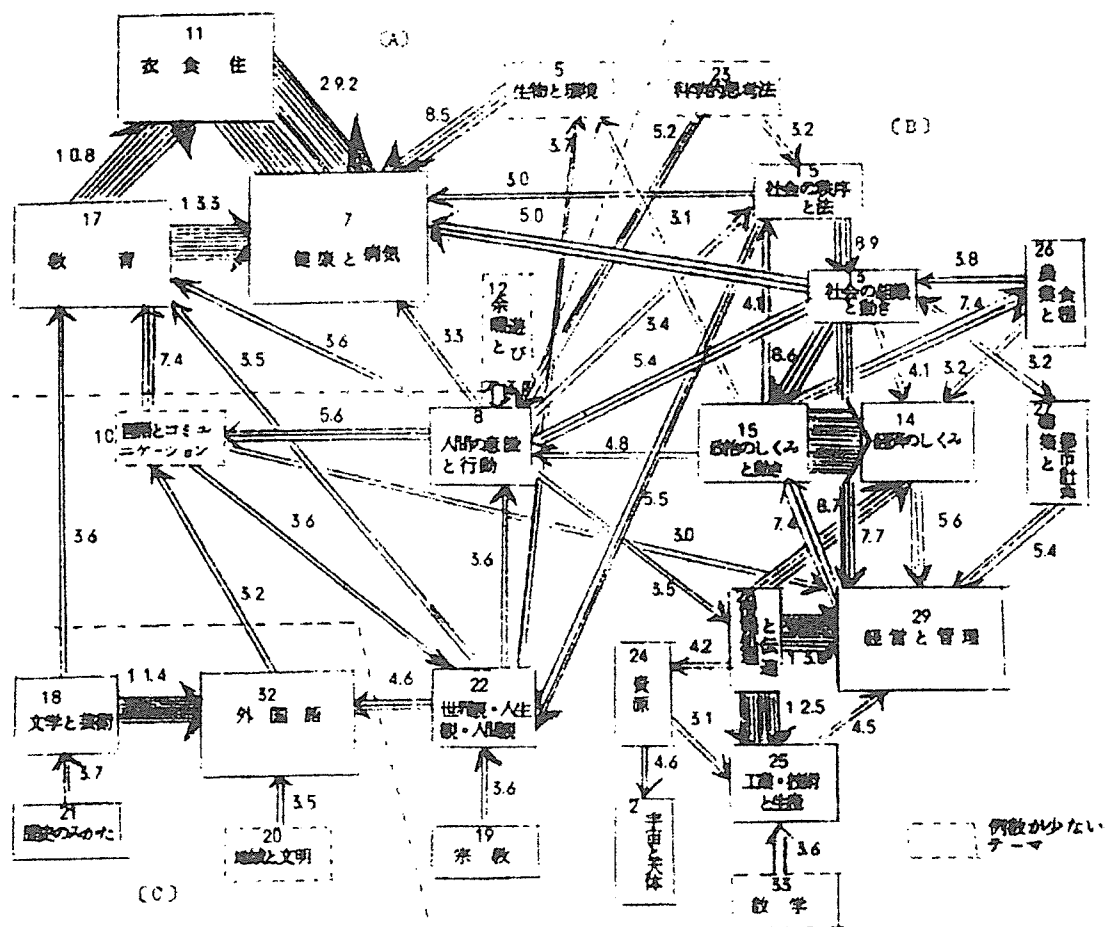
次のページにありますけれども、「『放送大学』に対する教育需要の予測調査結果の概要」というところで、全国で五〇〇〇人をサンプルして、回収率は八三%ですから、いいほうですね。四一五五人から。その傾向として、ここに結果が書いてあります。こちらの私のメモのほうを見ていただきますと、その主なところを文章で書いてありますから、それをごらん下さい。

私のメモの一ページの一番おしまいのところで、とにかく少なくとも勉強したいという人は聞いた人の六割。若い人ほど、学歴の高い人ほど、管理職や専門職の人ほど割合が高いのですね。次の二ペー

ジにまいりまして、この放送大学で勉強したい人は、聞きっぱなしではなくて、四五%ぐらいが少なくとも本気で聞きたいし、そのなかで三分の一は単位や資格をとりたいと思っている。一番やりたいテーマと関連したものをいろいろ聞きますと、テーマの選び方にかたまりができてくるのです。実生活を志向する形、産業社会志向型、語学文芸志向型、人文、自然科学。こういうことが出てきた。先ほどの調査結果の概要の二枚目のところを開けていただきますと、細かい分析が出ております。どういうテーマに人が集中したかということをやると、一番多いのがやはり健康と病気だとか、衣食住だとか、それから教育なんていうのもずいぶん多いのです。ところが教育のなかにも、教育によって自分をどう高めたいかという自己研修の要求と、そうではなくて、うちの子どもが上の学校へ入るのにどうやったろうまいいけるかという違う意味の関心もありまして、非常に難しいのですが。

一番面白いのは、概要の四ページを見ていただきますと、ここに非常にややこしい絵(「図3各テーマへの関心の相互関連」)が書いてあります。今の三三項目が一面に散らばっております。この図面で、衣食住というのが非常にたくさん希望者がある。それから、健康と病気、教育。お互いに、これを選んでいる人はこれも選んだし、これも一緒にやりたいという人が非常に多い。こういう関連分析をやったわけです。この線がごついやつは、お互いに一体的に勉強したい。右のほうへいきますと、経済の仕組みとか、政治の仕組みとか、経営と管理とか、こういう部分がかたまっています。点線で見えにくいのですが、左上のほうを「A」グループ、右のほうを「B」グループ、下のほうが「C」グループというように、関心のある分野がテーマ三〇ぐらいのなかで三つぐらいの大きな群に分かれる。これに名前を付けて分けたのが、先ほどこちらでいった、実生活志向型とか、

〔図3〕 各テーマへの関心の相互関連



- (注) 1 テーマ間の関連の強さは、線の太さと指数で示した。
 2 関連を示す線の矢印は、テーマAを選んだ人がテーマBに関心を示す割合よりも、テーマBを選んだ人がテーマAに関心を示す割合のほうが大きいとき、 $A \leftarrow B$ とした。

産業社会志向型とか、こういうタイプです。放送大学というのは単一学部 of 教養学部ですね。そのなかにどういったコースを設けて、どういう専攻分野をつくったらいいかというコースの分け方というのはこの調査から出てきたわけです。

これで、今の〔口述〕メモの二ページに戻りますと、一番勉強したいテーマというのをさらに分析して、この五つのグループ（実生活志向型・産業社会志向型・語学文芸志向型・人文基礎志向型・自然基礎志向型）に分かれてきたということでございます。科目の履修のために四五分の番組を週二回一五週と、これができるという人が四七％ある。これが全体の回答者のなかの八％ぐらいですから、それをあの当時の人口比率でやると、放送大学の視聴者というのは二百何十万人になるだろうと推定したわけです。その九割の人は学習センターにやって来られると言っている。こういう形で調査の結果が出まして、やるとすれば、どれくらいの規模で、どういう種類のコースを設けて、学習のために出てくる人たちを実際に指導していくためにどれだけのものをつくらなければいけないかという大体のスケールが分かってきたわけです。

そこで、「放送大学基本計画」の作成。前の本田さんのときにやられたのは「基本構想」ですけれども、今度は具体的な放送大学をつくるときの基本計画というものをなさなければならぬ。今の調査を、準備調査会で六月にやった結果を十月までに集計をやりまして、調査会の総会でこれを全体に了承していただきました。その後、今度は調査会のなかに部会をつくりまして、この調査結果を受けて具体的な中身をつめていくという形で、教材をつくる部会、通信部会、指導部会、組織部会、これをして、その年の十二月十七日に基本計画の最終案を決定して、これを文部省のほうにレポートしたわけです。ですから、私が関与しました年に、外国なんかを見てきて、実際の調査活動は、今の需要調査を四月から始めて、十月に

一応おわって、基本計画をそれから細かくやって、十二月、その年のおしまいには放送大学の基本計画ができちゃったわけです。

伊藤 この準備調査会というのはどういう構成になっているわけですか。

西田 これはべつに文部省の中教審とか何とかのような政令に根拠のある調査会ではありませんね。あくまで文部大臣の諮問機関という形で臨時的につくっているわけです。ですから、委員をお願いしますという、上智大学の学長さんとか、これにいろいろな人が入っていました。

伊藤 大体教育関係者が主でございますか。

西田 そばかりでもないですね。私が印象に残っておりますのは、最後の組織部会なんかのところでは、中心になったのは広島大学の学長をやっておられて名古屋に移った人。

小池 飯島宗一さんですか。

西田 飯島さん。あの人は、私が関与しているときに、「やっと放送大学が具体的にになったな」と喜んでおられた。それから、上智大学の学長の日本人の人。

小池 大泉（孝）さんですか。

西田 大泉さん、あの亡くなられた大泉さん。組織部会なんかの最後のまとめ役をやって私が何度も研究室へお伺いしたのは、東法学部の伊藤正巳さん。あの人も入っておられたのです。放送大学の本部の構成などは伊藤先生とずいぶんご相談しました。先生方は皆さん非常に熱心に行って下さいました。若干のお手当てを差し上げている程度で、本当に本業とは関係ないことを熱心に行っていました。これが、私が関与して一年間で結論を出したのですが、それから放送大学ができるまでに五年かかっているわけです。その五年間のブランクというのがなんとも辛い話だったのですけれども。

伊藤 これらはどういう部会なのですか。

西田 放送番組の教材をどうやってつくるか。何科目、どんな科目について、どういう内容のものをつくったらいいかという、学校でいえば授業科目ですね。それを大体固める。通信部会というのは、郵政省に関係ある、日本中に放送をばらまくには、どこにどれくらい通信所をつくって、電波をどこから出してやるかという、テクニカルに全国の放送網を考える。指導部会というのは、その人たちを定期的に地域の学習センターへ集めて、どれくらい講師団が出かけていって学習指導をやるかというようなこと。最後の組織部会というのは、そういうこと全体を考えた場合に、放送大学の本部というものにどういうスタッフを置いて、どれくらいの規模でやればいいのか。そういう放送大学の組織。これらは皆、後で出てまいります。伊藤 分かりました。

■放送大学の基本計画——入試・定員・カリキュラム

西田 基本計画というものができたのですが、大変残念なことに、ずいぶん一所懸命探したのですが、私は物持ちがいいほうだと思っているのですけれども、その基本計画の日本語の印刷物がなんととても見つからない。それを、その後一年かかって英訳したのですね。その英訳だけが残っていた（笑）。情けないですね。この英文のやつを見ながら、私の記憶によって基本計画の一番触りをここに書きました。

最初に、「放送大学の意義と役割」ということが書いてありました。さきに需要調査によって実証的に一般国民がこれだけやりたいと言っている。この要望に応えるということが一つの大きな使命だ。二番目に、放送大学は、次のような観点から、我が国の高等教育全般に新しい風を吹き込んで、望ましい発展に寄与することが期待さ

れる。その第一番目は、学際的な学問的成果を広く国民の共有物にする。その実生活の問題解決に役立てることができる。それから、変動する社会環境に対応して自らを再教育する、そういう機会を物理的・経済的な障害を越えて万人に保障する。これが一つの大きな意義だ。それから三番目に、必要なときに大学卒業生の資格をとる。学歴がないから非常に損しているという人は、いつでも差別待遇を免れることができる。もう一つ大きなことは、漠然と入試地獄に巻き込まれることはなくなる。つまり、これは私個人として、放送大学の大きな使命だと思うのですが、日本の受験地獄の解消という一つの決め手になるのではないか。結果として、必ずしもいまそこまですべておりませんけれども。というのは、放送大学というのは、自分のところへ専門の教授も置きますが、日本全体を見渡して、この科目の講義ならばあの先生が立派だという人に頼んで、そこで番組をつくればいい。だから、日本中の学問的なタレントを自由にピックアップして、もっともレベルの高い授業ができる。そこできちっと勉強すれば単位が取れる。

入学試験というものを放送大学でやるかやらないかというのが最初問題になったわけです。一番問題になったのは、学校教育法で、「大学教育を受けるのは高等学校卒業程度の学力水準」と資格が要求されているのです。だから、最初は文部省の大学局は、「放送大学の入学資格をやるべきだ」と言ったわけです。私は、そんなことをしたらこの機会均等の趣旨が壊れてしまう。高校卒業程度の学力とはいま何だ。その当時、八五%高等学校へいって、みんな落第せずに卒業しているわけです。要するに、特別な知的障害のある人でなければ、まず高校卒業程度だ。そんなことで云々するのはナセンスだ。しかし、資格を定めないということではいかにからというので、窮余の秘策と言われましたのは、資格を問わずに入れる。これだけの科目をこれだけの形で取って、それだけの単位の取得が

あったら入学資格があったと後から認定して、それからあとが全部単位になるという方式にしたわけです。非常に名案だと思うのですがね。結果的に入学試験があったということ。その必要科目を最低限度これだけとって、それからあとが初めて一二四単位になるわけですね。

伊藤 その前はなれないわけですか。

西田 なりますけれども、それが取れないと、あとのやつが単位として生きてこないということ。そういう意味において、入学試験を受ける必要はないわけです。これで日本一の授業が聞けるって、こないことはいいじゃないか。そうすると、目の色を変えて〇〇大学の入学試験に通ろうというような受験地獄に振り回されるようなことは皆がばかばかしくなってやめるのではないか、という夢を見たわけです。

伊藤 それは確かに夢でしたね。

西田 これしかないと思うのですね。それから、放送大学と各大学間で授業科目を交換したり、単位の互換をやったり。特にこれは通信教育なんかと。だから、皆さんの大学で協力してもらいたい。いい先生も出してくれ。あなたのほうで単位の互換をやりたいかったら、どうぞ放送大学と相談してやって下さいと。そういうことで非常に教育というものが普遍的になっていくだろう。そのときに言ったのですが、日本のように、七〇以上の国立大学が七〇何通りの憲法の講義をやらなければいけないのかと。一般教養で。一人でなくても、二人か三人か、これだと思う人がやって、学生は聞きたいほうを聞いて、その人の単位をもらおう。〇〇大学卒業ではなくて、「私は〇〇先生の『憲法』をもらったんだ」というのが自慢になる。それが本当の学問じゃないか。そういう夢を描いたわけです。

小池 それはそうですよ。今は憲法の先生とか山のようにいるんですもの。

伊藤 憲法だけじゃないです。そんなことを言ったら、大学の先生が要らなくなる(笑)。

小池 憲法の履修者は物凄く多いですね。教職採用に必要なから。西田 そのときに、ほかの一般教養の先生は皆失業かというけれども、そうではない。そうやって放送大学の憲法の講義を聴いて出てきた学生たちと「憲法とは」という議論をして、ゼミで仕上げるのが先生の役目なんです。一日のあいだ、授業時間に上からしゃべって、「分かったか」といってさっと帰っちゃうのが先生じゃないんだ。そうやって初めて生きた人間の先生が授業を担当する意味があるのです。そういう意味において、立派な講義を聞いたあとのゼミをやるというのは、その先生も勉強しなければならない。日本じゅうの大学にショックを与えるのは、失業どころではない、幾らでもやることはありますよといっています。これは私の描いた夢ですが、いまだこまでいっているか。

それから、放送大学の実験の結果によれば、いい番組をつくるということをするためには、各分野の専門家の協力を得なければならぬですね。特にメディアとしてやるならば、ディレクター、プロデューサーですね。そういった聞くほうの側の目で意見を述べる人。こういう協力を得て初めていい番組がつくれるとすれば、それは非常に高等教育の中身を高めていくことに役立つのではないか。だから、放送大学はそういう意味において日本の高等教育に非常に大きなインパクトを与えるだろうというのがそのときの考えです。

そこに、この基本計画にはさらに、「放送大学が成功するための前提条件」と、三つのことが書いてあります。放送大学の開始二年前から番組の制作をやれと。ここに先行投資をやって、それだけの授業科目のお膳立てができてから店開きをしろと。事実、その数年前からやったわけです。それから、放送大学の本部の先行投資をやる。本部を建設して、今の蓄積をするわけですが、さらに放送網と

その他の情報メディア、ビデオセンターみたいなものを先行的にやれと。このときに、膨大なビデオセンターをつくるということで一番技術的な問題として、今はもう解決しちゃったのですけれども、ソニーの小型の……。

小池 ああ、ベータですね。

西田 それからVHS、どちらにするかというのが天下の大問題だったのですね。

伊藤 それはそうですね。

西田 ええ。私は、品川のソニーの本社へ行って、井深さんにお会いしました。井深さんが工場を案内して下さいました。あの当時としては、ソニーのベータマックスのほうがいいんじゃないかと思ったのですけれども、その後、業界の力関係でソニーのほうが負けちゃいましたね。

伊藤 まあ、そうですね。

西田 こういう格好で放送大学の準備をしろということで、基本計画のなかに書いてあることは、ずいぶん細かいことをやっていますよ。計画立案の基礎として何人の学生を頭に置くかといったら、さっきの調査から、総学生数六二〇万人、毎年度の入学者二三万三〇〇〇人、正規の学習登録者は四五万三〇〇〇人、これくらいのことを頭に置いて考えろ。カリキュラム構成は、さっきのような実生活指向型とありましたね。私は、今の放送大学のホームページを開けてみまして、今の放送大学のコースがどうなっているかと思ったら、このときのままなのです。実生活指向型が二つに分かれて、生活と福祉、発達と教育という二つのコースがあります。それから、産業社会コースのほうは、社会と経済、産業と技術という二つのコース。人文・社会・自然のコースでは、人間の探求と自然の理解という、合計六つのコースがあります。私どもの調査でつくったときの大体コース別というものが今も生きているという形になります。

授業科目の種別としては、聴講——聞いて勉強するというやつと、演習——ゼミをやるやつと、それから実習——エクササイズをやるやつと、三種類ある。学生の種類には、全科履修生——一二四単位を取って学士号をもらうという人と、専科履修生——この分野の専門の一つの束だけをやるという人、それから、完全に科目だけを履修する。放送大学の面白いところでは、科目履修生でも、五年とか一〇年かけて科目を積み上げて、あるコースの枠内のものを修めれば、そこでやはり学士号をもらえる。そういう長期計画で勉強ができる、きわめてフリーな大学です。問題は、そういう質のいい先生を放送大学がうまく掘り出してきて自分の授業科目のなかに取り入れていけるか。しかも、それを教室でやる以上に質の高い番組としてつくりあげられるか、そこに帰するわけです。

その次の「教授組織と教材制作」についてもこの基本計画のなかで、最初の四年間に毎年四〇科目ずつ開設をして、次の四年間に二〇科目の追加をして、できた科目も毎年四分の一ずつは新規更新する。それで、授業担当とか制作の負担を考えましたら、専任教員が必要だというのが三一、助教授が四〇、助手が五〇、非常勤講師がそのほかにある。放送関係は、番組制作で、主任のディレクターが三人、プログラムディレクターが五〇人ぐらい要るだろう。これだけ具体的なものをやりました。

所澤 実際にこういう教授組織を構想するときに、具体的にどういう先生を中心にするとか、そういうレベルのことまで想定しながらこういう構想を立てていくわけですか。それとも、全然そういうことを考えない。

西田 この教授というのは、その人が授業を担当することもありますが、一番大きなのはカリキュラムの編成です。どういう授業科目を置くか。俺がやるか、人を頼んでくるか、そういうことを全部教授陣が考えていくわけです。この人がいつも番組に出るわ

けではありません。さらに、学習センターができれば、そこへ出かけていって、そのガイダンスをやったり、試験の結果を処理したり。

伊藤 スクーリングも。

西田 授業計画全体の運営をやるわけで、自分だけがテレビの前に出てしゃべるということだけの考え方ではありません。そういう人ももちろん、兼ねてやったってかまわないですけども、あるコースの番組全体を責任持っているのが何人と、こういう格好になるわけです。

小池 一種のマネージング・プロフェッサーですね。

西田 そうですね。

所澤 例えば最初の頃は東大教養学部の文科系の先生がずいぶん多かったように思うのですけれども、具体的にそういうようなところを構想しながらこういうプランを立てていったというわけではないですね。

■教育放送網の財源と学習システム

西田 先ほどの教材部会とか組織部会などもやって、この基本計画のこんなような図形まで書いて、ディレクター、学長がおって、コース別のカリキュラムがあって、ここにプロフェッサーがおって、ここにディレクターがおる。こういうことをやって、その仕事量も計算しています。これぐらいおったらどれぐらいの番組が制作できるだろうと。それが一つの部会における検討で、必要なときには、通信部会なら郵政省の人のお知恵を借りる。教材部会は各学校の先生ですから、授業負担を考えて、こんな人数を一応出したという格好です。

その次に「教育放送網の構築計画」。これは郵政関係のことが主ですが、この当時は、日本全国の八割まで電波が届くようにしよう。それをやるとすれば、送信所を二〇〇つくらなければならぬ。

その建設費が四二〇億円だ。その経常経費が三八億、その他ビデオセンターなどを設けるためのものが要る。この放送網というのは、いよいよ実際に五年後に設立するときに大蔵などが物凄く抵抗しまして、結局、日本中どころではない、関東一円だけに絞ったわけです。私はその当時離れていましたが残念で、日本中で一番大学の集中しているところに放送大学なんて、そんなばかな話があるかと思うのです。むしろ僻地のほうに出すべきではないか。

放送網をつくる費用というのがハードウェアとして一番高くつくんです。何百億と書いてあって、びっくりするようなことを言われたのですけれども、そのときについて計算してみたんです。この全部にかかる費用は、本州と四国の架橋がありますね。あの本四架橋の一本分の三分の一なんです。それだけで日本中の放送網ができるのです。あの当時、衛星放送がだんだん軌道に乗りかけて、日本でもそれを打ち上げて有効に使いたい。そのときに郵政がしきりに、「放送大学で衛星放送を利用しませんか。送信所をつくらずに、日本中たどこにいきますよ」と言う。それはいい話だと思ったけど、だんだん聞いてみると、今はどうか知りませんが、あの当分で、衛星放送を打ち上げても、寿命がきて電池がだめになって打ち上げ直さなければならぬのが三年に一遍ぐらいだという。それを打ち上げる費用は全部文部省で負担して下さいというから、とんでもない（笑）。そんなものに乗ったらえらいことだ。それで、衛星放送利用はあの当時の技術としては断ったわけです。全部電波網でやっても、四国に橋をかける三分の一にも過ぎない。

伊藤 それは地上波ということですね。

西田 ええ。私は個人的には、放送大学だけど、電波でそれをやる

必要はないんじゃないか。地方の学習センターにビデオライブラリーをつくって、ビデオセンターのなかで定期的にビデオを見る。一ついい番組がきたら、そのコピーをつくれればいいのだからね。日本じゅうにバーッとばら撒いて。そのセンターで個人がいつでも見られるようにするのもいいけれども、このセンターでは、本部の時間割と同じように、何曜日の何時からこの学習室で映写しますと、そういう格好でやれば電波をやる必要はないじゃないかといったのですけれども、「やはり放送大学といったからには」といって電波にこだわったんですね。

伊藤 センターにいくのにちょっと大変ですよ。

西田 まあ、それはそうですね。結局実行されたのは、東京タワーから電波が届く範囲で、関東一円ということでスタートした。やっと全国になったのですかね。最近、なるとかならんとかいう話ですが。

この当時、私どもは、全科履修生なんて一二四単位を取って学士号をもらうような人、そんな人が何人出るか。希望はあると言ったけど、出てくるかどうかと思ったら、意外にあるんですね。全体の統計はいま持っています。私は、何年か前に放送大学の卒業式に呼ばれていったことがあります。相当な年配の方があれだけの単位を。おそらく大学のなかでぼやっと単位をもらっているよりはうんと辛かったらうと思うのですがね。意外なところに篤志家がいるんですね。

所澤 私を知り合った方も、最初に一回単位を取って卒業証書をもって、非常に気に入って、二つ目、三つ目ともらっている人がいます。

西田 だから、金の面では最後に大蔵省に渋られて、関東一円というところで店開きをしたというのが……。

その次の四ページのところに、「学習センターとその運営費」と

して、これもずいぶん細かいことですが、聴講科目は毎学期三回通信指導をやれ。学生の回答が来たら、それは地域のコンピュータセンターで処理する。二週間ごと、毎学期三回、各県のセンターで演習をやる。実習科目は毎週一回学習センターで実習。各学生は、毎学期最低一回そのセンターで本部のほうからの巡回指導員とか、地元大学といったところから講師団を出してもらって、その人らの指導を受ける。そういう面接指導をやるようにしようということです。

「放送大学の組織と運営」というのは、大学本部は、教授団のほかに、総務、放送の部を持って、全国九地域にこういうセンターを置く云々と書いてあります。大学専任職員数は二〇〇〇人。非常勤職員五六〇〇人。いま実際どれくらいになっているのかも分かりませんけれども。

「創設第一期の実施目標」としては、開校二年前に建設をおわり、開校四年以内に一六〇科目、三コースをスタートしろ。東京、大阪、名古屋というところに送信所をつくるとか、こういうことを言っています。

「必要な財源の見積」は、これ全部で、最終的な段階で最大年間予算の規模は二九〇億円だと。そのときまでの延べ資本投資額が八四〇億円。これもやる気になればたいした金ではないということを言ったわけです。まあ、こういう形で、基本計画というところで、やるのならこれぐらいの規模をこれぐらいのステップでやりなさいということを出して、これが五十年十二月までに一応出たわけですから、一応スタートラインについたはずなのですが、それが出た途端に全体的に体制が変わっちゃって、足踏みをしたということが、メモに書いてあります。

次に、「放送大学の教授・学習システムの特質と問題点」。私がこの全体の計画を世話してやっておるあいだに、科学官としては、で

き上がった実験番組を見ながら、誰も相談する人がいないわけですよ。一人でひねりまわして、さっき申しあげた第三の学習システムという形で見ておりました。その特徴というのは、放送という通信メディアによって、タイムスケジュールによって学生の学習を管理できる。この点が読書による学習と違うところ。専門の施設とスタッフによる事前の立派な放送教材ができる。高度に洗練された教材を用意することが可能である。これは通常の学校とはまた違うところです。個々の先生が第三者の批評を受けることなく密室のなかで自分の単位を欲しいという学生に無理やりやっている授業はあまり進歩がないと同じように、それとは違うのだと。そういう点で、第三の教育システムは学校とは非常に違った特色が、うまくいけば発揮できる。それから、放送大学は、巨大な電波の到達範囲というのが一つの教室なんですね。電波の届くところという巨大な教室を持っている。ところが、ラジオ・テレビというメディアを使っている。二つのメディアを使っていますから、教室が二個しかない。ラジオ教室、テレビ教室しかない。だから、授業時間割を組むときに、大学には教室が二つしかない。一つの教室には何万人と入る。こういう非常に変わった学校です。授業時間割は二つしか組めない。したがって、これは最初から教養学部としたわけです。

教師と学生との対面関係がないために、これは一つの大きなハンディキャップですから、教材内容の決定。一番困りましたのは、先生方が実験番組をつくるときに、どのくらいのレベルの人が来るのか、このくらいの話をして分かるのかどうかという見当がつかない。プロデューサーも。教室だと、学生の顔色を見てみると、分かっている顔をしているのか、居眠りをしているのか、大体反応で分かるわけです。学生の理解度の判定がつかない。最後に、どこまでを合格としていいかという、その合格水準を決めようがないですね。へたにみんな落第しちゃったら困る。甘くしても困る。これが一番

難しいところですね。結果的に、これはもう経験の積み重ねしかないわけです。

所澤 今の話のところで、教養学部になると決まったという話だったのですが、教養学部を決めるまでに多少紆余曲折があったのですか。それとも、それはわりとすんなり決まったことですか。

西田 ええ、もう教室が二つしかないのです、授業時間割が月曜から土曜まで、何科目かだけだ。だから、これをどこかの専門学部、法学部や工学部というふうにしても、とても教室が足りない。教室が二つしかないということが最大の原因です。しかも、一般の人たちが一科目だけでも短編読みきりで身になるようなものとなれば、狭い意味の専門科目ではなくて、かなり学際的な、教養講義的なものになるだろうという形で、伝統的な何々学部という枠に入らない教養学部にしたわけです。

伊藤 電波を二本取ったということは。

西田 これは木田さんのときに郵政省とやりあいして、二つだけは確保した。

伊藤 二つ取れば二学部できるという意味ではないのですか。

西田 ラジオとテレビだけを取って。

伊藤 ああ、ラジオとテレビというふうに取ったわけですね。

西田 ええ、そうです。

伊藤 そういう意味ですか。

西田 そのときに電波が三つも四つも取れば、今の民放と同じようにいろんな教室があるから、教室の数が増えたのですね。だけど、郵政との相談で二つだけは確保した。最初は木田さんは啓蒙的な一般放送を考え、途中からは大学に電波を使わせて大学の授業をその周りに出すということを考えられたこともあるようです。そうすると、大学のほうは、それが欲しいというところが案外手を挙げなかった、少なかったということですね。

伊藤　そうですよ。自分の講義が天下にさらされて（笑）、「なんだ、これは」ということになるは大変だと。

西田　恥をかくわけですね。大学の先生が密室の中で独りよがりになっていたということがあらわになるわけですから、それが放送大学の最大の功績ではないですか。

所澤　そのときに大学院をつくらうというような話は出ているのですか。

西田　いやあ、とてもまだ。店開きをするのが精一杯ですからね。大学院のことはまだ。それだったら、また電波を別に取らなければだめですね。今後、衛星放送が積極的に利用できるようになってくれば、もっと電波の数も増える可能性があるのではないですか。

伊藤　そうですね。

■適切な教材を制作するための試案

西田　その次に、「適切な教材を制作するための未解決の根本問題」。これは私の個人的な問題提起です。放送大学は適切な教材をつくるのが最大の狙いなのですが、その授業科目の目標を構造的に分析するためのカテゴリーの開発。これは、私が暗室の中で実験番組を見ておりまして、いい番組とは何かということを考えた場合に、前に例に申しあげた芭蕉の俳諧のことを教えている番組と、統計技術のことをやっている番組と、全然質が違わうですね。俳句のことを全然知らない人に俳諧という詩的な世界というものに目を開いて、これに感銘を持たせるようにする授業の仕方は、統計学という論理の積み上げみたいなのを教えようとしているものとは中身がまず違う。到達すべき到達点も違う。それらを十把一絡げに、「分かったか、分からんか」とテストして、合格・不合格と言っているけれど、

ども、テストするときに何をテストすればいいのか。数学だったら、二次方程式が解けるかという問題を出してみても一〇のうち三つしか解けなかったらだめだとやれるのですけれども、俳句の話などは、どういう感銘を受けたかという本人の感受性の問題が出てくるわけでしょう。私は、やろうとしている科目の知的な内容、あるいは、教えようとしていることの目標というものを、何か全然違ったカテゴリーに分類する方法がないのかと考えたわけです。

そこに私は「個人的試案」と書いてありますが、一番単純なのは、①デジタル的論理解説によって合理性の理解。数学的なものとして、これはこうだ、だから、こういうものを集めて、こういう計算をして、こうやったらこういう答えが出る。「そういうやり方をすることが分かったか。やってみろ」といってやらせて、解けた。こういう論理的な理解というものをやるのならば、達成度がはっきり分かる。ガイダンスのときもそこを何遍もやれば、テストもそれでやればいい。ところが、②それと違って同じ数学でも原理とか法則とかいうことになってくると、これは一つ一つの論理の積み上げではなくて、アナログ的な全体的なイメージですね。そういうものを頭のなかに浮かべて、なるほど、万有引力の世界というものがこの宇宙のなかにあるんだ。これは、デジタル的な理屈の説明ではなくて、構造的直感ですね。ニュートンが万有引力というものの原理を理解したときに、彼が宇宙のなかにそういう目に見えない神様のつくったような一つの法則の世界があると。それを理解させなければ物理学の根底が出てこないわけです。これは、単にある計算をして答えを出すのとは違った理解の仕方なのです。私はそれを、変な言葉ですが、そういう全体的なイメージを出すというのを、アナログ的な表象というものを示して、それによってある一つの原理原則というものを直感的にとらえるという到達点があるだろう。③は簡単なことですね。反復試行を積み重ねて、ある操作技法というものを

習得する。これは数学の問題のときなんかはこんなようなものです。公式があつて、それをうまく勉強すれば答えが出てくるのですから。④は、今の俳諧で思ったのですが、ある模範というものを提示して、感受性を通じて本人にある共感を呼び起こす。「どうだ、芭蕉の俳句はこんなに見事だろう」といって先生が感心してみせることによって、「そうかなあ。確かにそういわれればそうだ」という、感受性が人から移ってくるということがあるんじゃないか。⑤は少し大げさですが、人間のモチベーション、エモーションですね。情動というものが人間から人間へ教育的な場面のなかで移るのではない。転移する。だから、その先生の熱意とかから全体的にある行動意欲というものが醸し出されて、俺もやってみようかと。そういうところまで結びつくような教育目標もありうるのではないかな。単なる理解ではなくて。

こういうことを分けていかないと、「分かる」ということ、「できた」ということが何を意味するのか分からない。これが分からなかったら、ガイダンスへいって、「きみはこうだ」と指導するときの指導目標も立たないし、最後に成績を評価するときの目標にもならない。こういうような人間の学習科目の目標を構造的に分析するカテゴリーがありはしないか。これを放送教育開発センターの一〇周年記念に私は書いたのですが……、そういうことに興味を持った人が今後誰かやってくれませんかということをお願いただけ、誰もやってくれません。難しいことですよ。

伊藤 今の①みたいなものは成績評価に簡単につながりますけれども、②以下のものは、一体どういう評価をしたらいいのかというのは、ちょっと想像もつかない。

西田 つかないですね。昔のお弟子さんが見習い学習で、大工さんなんかもやり方を教えない。芸を盗むのだというのがありますね。茶道とか。和歌や俳句の修練をやるというのは、決してデジタ

ル的な説明ではないですね。私は、役所を全部やめてから六年間NHKの学園で俳句の勉強をしました。いい俳句ができるというのはどういふことかというので、二〇人の仲間がつくる毎回の俳句を全部分析していこうと。俳句というのはある感動を詠むのです。その感動というのに何種類あるかというカテゴリーをつくった(笑)。つまり、無常観というような感動がありますね。腹を立てるような怒り、喜びがあるでしょう。そういうことでやって、八種類の感動を分けた。私は、一人ひとりの俳句を感動で分類していきまして、一学期間で二、三〇〇首出た俳句を一覧表にして仲間配ったんです。男性と女性と感動のカテゴリーが非常に違う。寂しいとか哀れとかという、そういう方面のカテゴリーの感動は男性のほうに多いですね。女の人というのはずいずいですね、自分の心の中はそんなにあらわに出しません。本当に悲しいことというのはあるのかもしれないけれども、なかなか表面に出さないと。だから、女性のほうが一般的に楽天的でうれしい句が多いのです。男のほうが寂しかったり孤独になったりする。しかも、それは個人によってかなり違う。そういうもので感動の種類に分けて、しかも、その感動を表現するのにどういふシチュエーションを書いているか。それとの関連も分析して、名句をつくるという条件は何かと(笑)。とうとうそれはお手上げして、今でもそれは残念ですが。

例えば、芭蕉の「夏草や兵どもが夢の跡」という、そこに一種の無常観があるでしょう。そのときのシチュエーションとしては、平泉の辺の川のところで荒涼たる景色がある。そういうものから無常観というのが出て、その後ろには、義経・弁慶の歴史があるわけですね。やはり歴史的な感得がなければ出てこないわけでしょう。だから、何が条件で名句といえるかということは、「荒海や佐渡に横たふ天の河」だって難しいですよ。あれはやっぱり、宇宙とかそういう超人間的なもののすごさが迫ってくる怖さ。喜びでも悲しみ

でもないですね。私は感動というものをまず分析しなければいかんと思うんですね。あ、えらい脱線しちゃった。

伊藤 本場にちょっと、考えても頭が痛いですね。

西田 ええ、大問題ですよ。そのあとに、さっきの視覚と聴覚の区分がどうなのか。そうじゃないければ、ラジオを使うか、テレビを使うのか、方針が立たないじゃないか。NHKでもそうですよ。テレビのほうがいいに決まっている。音声のほかに映像があるからという。じゃあ、やってみましょうというってやったら、哲学の講義なんかをテレビでやりますと、だめなんですよ。カントの純粹理性批判なんてやりますと、カントの学説を先生が懇々と話しているときに、テレビの画面に何か出さなきゃいけません。で、カントの顔が出てくるわけです。「あ、あんなところにほくらがある」なんて（笑）。そんなのを見ていたら学問にならない。それより黙って目をつぶって先生のレクチャーを聞いているほうがいいんですよ。だから、映像はカントの哲学を深める役に立たない。むしろ期待はずれの顔をしていった、なんてね。ヘーゲルなんていうのは、ちょっともう、おぼけみたいな顔をしているから。映像がすべての理解を深めてくれるわけではないのです。その証左に、目の見えない人の立派な学者というのはいくらもいるのです。しかし、耳の聞こえない学者というのはほとんどいないでしょう。

デジタルな論理の流れというのを覚えるのは耳しかない。目は論理の流れがないわけです。アナログですからね。全体をパッと見る、直覚するのにはアナログが必要なんですけれども。こういう時計みたいなものですよ。時計の針がいまこの辺に来ている。おなかがいっぱい」という。これも大問題ですが、これは前に申しあげた、特殊教育の先生が、「耳の悪い子どもにはしばしば道徳的欠陥者がいます」といったように、悪いことを教えるのが非常に難しい。耳からしか教えられない。それは恥ずかしいことだ、

それはやるべきことではないんだということは、懇々とことに臨んでやっていくのが聴覚ですからね。そうでなかったら、触覚によってやっていく。そういう点はやはり子どもの教育の根本問題ですからね。これ二つとも教育の根本問題で、本当は学校教育だってこれに分からなければ、そんな簡単に成績が優秀だとか何だとかいえないんです。そんな大問題に突き当たって困ったけれども、自分なりの発見だったということは非常にありがたいと思います。

伊藤 僕らなんかも成績の評価をどういうふうにやるかというのはやはり問題なんですけれども、特にレポートを書かせて、歴然とこれはいい悪いというのは分かるわけだから。直感的に。

西田 デジタル的な論理的なものの以外は、むしろそういうレポートのような形で総合的に本人に表現させる。その出たものを、先生がまたそれを見る目があれば分かるということでしょうね。

伊藤 そういふのは何十何点というわけにはいかないのですけれども、まあ、これはよろしい。これはだめと。

所澤 その評価の問題については、日本のなかで研究しているところがほとんどないというのが非常に大きな問題ですね。大学のなかで評価学の講座というのはおそらく今でもないのではないのでしょうか。教育評価の講座はたぶんほとんどない。あるにしても、ごく少数だと思えます。

■放送大学設立までの遠い道のり

西田 私は、『教育測定学』というこんなに分厚い本をもらったのです。あれは人間の能力の特性を測定するということから始まる。それから評価のことまでいくわけでしょう。教育測定学という学問をもっと日本のなかでやらなきゃいかんし、それから、医学には臨

床医学があるわけですから、臨床教育学という学問を発達させなければならぬと。

そこまで来たのですが、最後に4.のところで、「放送大学設立までの遠い道のり」と。基本計画策定後、三年間まったく空白でした。五十一年から五十三年、私は暗いところで実験番組を眺めたりして一所懸命自学自習しておったというだけです。ただ、このときのちょうど三年間ありまして、私個人としては、積年の持病であった胆嚢摘出をやりまして、一ヵ月入院しました。次男と長女がこのときに結婚したんです。これで結構退屈はしませんでした。忙しかった（笑）。

所澤 実験番組ですが、これはどこがつくっていたのでしょうか。

西田 どこかというと、どういう予算があったのでしょうかね。庶務課の番組制作をやっているところがプロデューサーや先生を頼んできて、実際にどこかのスタジオを使ってつくっていたのですね。そのビデオがたくさんたまっていました。

伊藤 それは準備調査会なのですか。

西田 準備調査会がやっていることになっていたのですね。でも、調査会の先生がそんなところに出てこないですものね。これは木田さんの頃からやっていたわけですからね。

伊藤 あ、そうですか。西田先生がそこへいかれてからはつくっていないのですか。

西田 その後、この二年間の間に、少しずつまた今までやっていない新しいものをやろうかということでした。さっきのお茶大の栄養学の先生の実験放送をやったりしましたけれども、結局、だんだん自信がなくなっちゃって、もっと本格的な研究をやらなければだめだという形で、その下に「放送教育開発センターの設立」というのがありますね。これは、三年間ブランクになっちゃって、歴代の大学局長が苦勞してもなかなか大蔵省が取り次いでくれ

ないで、結局、五十三年十月、三年たったときに大学局長の佐野さんが私のところにやってこられて、「西田さん、すまん。今年はだめだったけど……」と。あのときの大蔵省主計官がよかったんです。「文部省もかわいそうだから、放送大学は認めないけれども、その基礎研究をやるための開発センターの予算をつけよう。これは武士の情けだ」と大蔵省がいったというんだね。それを佐野さんから聞きました。「そうですか。じゃあ、ここでしばらく本格的な実験番組制作を勉強すればいいんですな」といって、それが五十三年十月です。

伊藤 このセンターはどこにいたわけですか。

西田 ついたときにはまだ文部省の科学官室にいましたけれども、じゃあ、この開発センターという新しい施設を国立大学の共同利用機関として、幕張にそういう建物をつくろうと。そのための準備室をやるために、「西田さん、準備室長を兼ねて」と。その準備室というのは科学官室ではどうしようもないから、大塚の教育大学が筑波に引っ越って空っぽだった。その部屋が空いているから、そこへいってくれというわけです。私はそこへ行って、私が最初は室長で、私がたった一人、研究開発部長でした。一人です。確か研究開発部の教授の予算が二、三人あったのですが、どこの大学の先生に言ってみたって、そんなのいつ放送大学ができるか分からんから、その教員になってくる人はいやしません。だから、私一人で座っていた。事務の職員が四、五人おって、事務長もおりました。大塚へ行ってみたら、教育大学が全部空き家になっていて、どこかの建物のなかで。四月頃いってみて、沈丁花が咲いていて、ああいう広いところで人の子一匹いないというのは怖いですね。本当にそうですよ。

今でも一番辛かったのは、今までは文部省へいっていたのが大塚にいかねばならない。新宿で乗り換えて、池袋から地下鉄で大

塚へいくわけです。それを毎日繰り返して、一体放送大学はいつできるか分からんし、自分でできそうにない。実験番組といっても、こんな幾らつくったってきりが無い。本当に一種のうつ病みたいになりました。よくいうのですが、うつ病の怖さというのを初めて感じました。朝、高尾から来て電車に乗って、新宿で山手線乗り換えるプラットホームに立っています。電車が入ってきますと、「ここに落ち込んだら、さぞ楽だろうな」というのは本当に実感しました。何とも言えないやな感じで、ああいうときに人間というのは飛び込み自殺をするのだろうという気になって。もっともそれは、その前に胆嚢の手術をしているという薬を飲みましたから、その薬の副作用の影響があったと思います。その二年間が一番辛いときでした。

伊藤 その放送教育開発センターのなかに研究開発部というものをつくったわけですか。

西田 研究開発部と事務部と二つしかないわけです。総勢四、五人です、屋根が雨漏りしそうなところで、四、五人の人が朝から晩までおったわけですから、何ともいやなものでした。

所澤 そのときは先生は一応開発部長ですが、教官で、教授ということなのですか。

西田 教授だったのですかねえ。しかし、教授というものはどこかの大学のあれでなければ……。開発センターというものは国立大学の共同利用機関ですから、そう言っていたかも知れませんがね。

所澤 翌年に教官制になったのですね。

村上 前にいただいた経歴には教授と書いてありましたが。

伊藤 それは工業大学じゃないの？

村上 いえ、放送教育開発センター教授。

西田 ああ、そうかもしれません。共同利用機関ですからね。

伊藤 前におっしゃった放送大学設立調査会はそのままあるわけ

すか。

西田 幕張に建物の建設がかかって、実際に放送開発センターの開所というのがあったときに準備室はなくなったわけです。だけど、私はそこまでい wasn't でしたから。

伊藤 そうですね。準備室ではなくて、準備調査会。

西田 開発センターの設立というのは五十三年十月ですかね。予算が通ったというだけですね。そして、その翌年の五十四年の六月十五日に、このときに放送大学の予算が通ったんです。一年たって。

伊藤 あ、そうですね。

西田 五十三年にセンター設立ですね。五十四年六月十五日に放送大学の予算が通ったので、「西田さん、あなたはセンターで長年苦勞したけれども、今度は木更津へいってくれ」といって、木更津高専に配置換えになったわけです。

伊藤 その前に学園法や何かをつくるというようなことは進めておられたわけですか。

西田 いや、放送大学の学園法は、それはその下に書いてありますね。

伊藤 あ、だいぶ後になるのか。

西田 学園法の成立が五十六年ですから、それからまた六年が空いているのです。

伊藤 六年は空いていないでしょう。

西田 五十四年六月十五日に私はさようならになったわけですよ。放送大学自体の予算としては、最終予算の通過は、その下にありますように、放送大学関係予算初成立が五十四年六月。これが、私が木更津へいかされたときですね。それから予算が通って、学園法をつくらうとして、それから二年たって五十六年に学園法ができた。

学園法はできたけれども、それから大学の設立準備をして、放送大学設置認可というのは五十八年。

伊藤 それは人をはり付けてという意味ですね。

西田 そうです。学校教育法のなかに、特殊法人としての大学設置認可というものをやらせたわけですね。それが、中身をつくって学生を受け入れたのが六十年です。だから、五十四年から六十年まで六年間あるということです。

伊藤 ああ、そういう意味ですね。

西田 気の長い話ですよ。

伊藤 とにかくそこまでいかせようと思ってがんばっておられたわけですね。

西田 ええ。しかし、私は最初の放送大学の予算が通ったというときに、五十四年六月にもう「じゃあ、あなたは……」。

伊藤 ご苦労さま。

西田 はい、ご苦労さん。でも、面白いですね。中教審ができたと思ったら、「君はユネスコへ」といって、放送大学の予算が通ったといったら、「もう、きみは関係ない」という、なんかそういう運命なんですね。

伊藤 まあ、意図してやっているのかどうか分かりませんが、それでも。

西田 ま、ご苦労でしたということ。

■放送大学と既存の国立大学との違い

村上 話は少し戻りますけれども、既存の大学との関係はどういうふうに基本計画のなかでお考えだったのですか。

西田 基本計画のなかでは、むしろ放送大学のなかの見事な授業を担当してくれる先生方を出してもらうのは、既存の大学の協力を得て、誰でもそこへレクチャーとして引っ張ってこられるようにというのが大前提になっていますから。最初の基本計画のところでは成

功する条件が書いてあって、既存の大学の協力がなければいかんということを強調しています。だから、喧嘩するのではなくて、スタッフを出してもらうこともあるだろうし、授業科目の共通性も、単位の交換もありうるということを考えています。だけど、まだその当時は放送大学自体がどのくらいの質の授業をやるかというのが分かっていないわけですから、可能性として言っているだけです。一般大学のほうも文句を言うことはなかったですね。

村上 学生の方面から見ても、毎年度の入学者数が二三十万人余りと推定されているのですが、これは既存の一般大学に毎年入る人とは別個に。

西田 この大学の学生として入学してくる。しかも、単位か資格を取る。ただ放送を聞くというのは何も金是要らんわけですからね。

テレビのスイッチを入れれば。無料ですから。単位を取り、資格を取ろうという人は、放送大学に入学を申し込んで、教材をもらって金を払うんですね。そして、それに対する授業料も払うという形でいかなければならん。そういった人は入学手続きとしてやるわけです。黙ってうちで聞いているぶんには、学生かどうか放送大学のほうには分からないわけです。

伊藤 これはやはり国立大学にするつもりだったのですか。

西田 国立大学にしますと、国立の学校が放送を出すというとは放送法に引かかるのです。国が自分の放送機能を持つということでは国家権力との関係で疑義があるということで、郵政が非常に厳しく言った。だからどうしても、日本育英会なんかと同じ形で特殊法人にして、それが電波を。NHKがそうでしょう。NHKは国立みただけでも、国立ではないのです。特殊法人。そういう意味において、独立の法人として何か区別をしたものが放送を出している。そうではないとおさまらないわけです。

所澤 既存の大学との関係なのですが、卒業資格を大学卒業と同等

にするというのは問題になりませんでしたか。

西田 むしろ最初の木田さんのときの基本構想のときから一般の大学と同じようなものにしようということになっています。それを目標に。今度はあれでしょう。一二四単位取ったら、結果的に大学設置基準でいっている学士号の資格と中身は同じですから、文句はいいようがない。問題は、どれだけいい中身の放送をするかというのは、やってみなければ分かん。今のところ放送大学の内容の質が悪いということはいわれていないでしょう。むしろ一般のレベルよりはいいんじゃないかな。

所澤 放送が始まった当時、授業が教養課程から始まりましたが、教養教育の中身が地方国立大学にかなり衝撃的な影響を与えたといわれているのですけれども。というのは、地方国立大学の教養教育というのは、その当時はほとんど高校の授業の焼き直しで、独自の内容がないといわれていて、それしかできないというふうに思われていたのです。ところが放送大学に、実際に東大の教養学部で行なわれている教養の文系の授業の内容がかなり取り入れられて全国に流れたものですから、かなり多くの大学で、教養教育でこれだけの授業ができるのかという衝撃が走ったといわれています。

西田 その当時の何かの、ある学校で学生が教養部の先生に向かって、「あなたの講義よりも放送大学の授業のほうがよっぽど面白い」と言ったという。それは、そうなるのが目的だったわけですから、おっしゃるとおりだとすれば、大変うれしいことです。だけど、大学入試というものがだんだん衰えて、放送大学の単位をもらったほうが偉いんだと。あそこの単位を持っている人のほうが大学卒業生としてはいいんだと評価されるようになればいいですよ。〇〇大学入学というのにしのぎを削る必要はないんです。学問をするというのはそういうことではないんだけどね。

所澤 今の関係でもう一つお聞きしたいことがあるのですけれども。

基本計画なのですけれども、この基本計画はそのあと放送大学ができて以降にどのくらい拘束力を持っていたとお考えですか。

西田 いや、拘束というよりも、そういうイメージを描いて、これだけの金をかけてやりましょうと言っているだけで、実際にこの予算が通ってやっていく段階には、全国放送なんてとんでもない。東京タワーから出る範囲でまず実験的にやってみようという形で、科目数もずっと絞られたでしょうし、おそらく職員室もこんな何千人という形ではなくて動き出した。しかし、まあ、あちこちに学習センターをつくって、そこへ地方の大学を引っ張り出してガイダンスをやるとか、そういう形で、形だけ出したのですけれども、規模そのものは当初の基本計画のような形には動かなかったでしょう。私は、東京だけでスタートしてもいいじゃないのと。そうになったらおそらく地方の出身の代議士さんが、「なぜ俺の地域に出さないんだ」とワーワー言って、大蔵省をやっつけてでもすぐなるだろうと思っただのですが、案外そのへんは気楽なものです。その文句を言ってきた人はいません。全国放送に持っていきたいというのも比較的最近じゃないですか。今度は衛星放送が自由になってきたから、それこそ。

村上 基本計画は綿密なマーケット・リサーチを背景にしていたわけですから、こういう手法がそれから後の高等教育整備計画に影響を与えるということはあったのでしょうか。

西田 これは放送大学に対する需要という形ですから、一般高等教育計画のほうに直接影響したとは私は聞いていませんが。この調査がこんな形であったということを知っている人は非常に少ないですよ。それで、この調査を専門の教育機関でやってもらって、私はこんなにくさんの集計票をうちへ持って帰って。先ほどの科目の関連性をやるというのは大変な作業でした。私たった一人でした。

伊藤 もう少し聞きたいのですけれども。予算がついた。結局、そ

の場合には予算折衝や何かをやらなければならない。科学官ではなくて、そのときは何ですか。

西田 放送大学開発センターのほうではずっと私は科学官ですからね。

伊藤 ああ、やっぱり科学官ですか。

西田 科学官なんていうのは行政官として予算折衝する立場にありません。

伊藤 それは誰がやることになるわけですか。

西田 当面は大学局ですから、大学の庶務課のなかの放送大学担当者、庶務課長がやったのだと思います。しかし実際には、一番矢面に立ってやられたのは大学局長の佐野さんでしょう。佐野さんが、「西田さん、やっと取った」なんて言ってるね、「今度はあなたは木更津へいってもらうから」という（笑）。

伊藤 その予算折衝のなかでは西田先生の出演は全然ないわけですか。

西田 出演はありません。

伊藤 説明にもいかない。

西田 説明にもいかないね。科学官というのはあくまで文部省のコンサルタントみたいなものだからね。大学局長に対して、大学行政について必要な専門的助言をするというだけのことです。本来非常勤の職ですから。本職は工業大学教授。

伊藤 行政のラインにはいないということですよ。

西田 来ている人はみんな、大阪大学、何某大学の専任の先生が、あとで東大の総長になられた大脳生理学の森（亘）さんも科学官で、私の隣に座っておられた。面白い話をよく聞きました。

伊藤 それは完全な非常勤になるわけですね。しかし、先生は非常勤というわけではないでしょう。

西田 いや、科学官としては非常勤だけれども。

伊藤 工業大学にいくわけではないでしょう。

西田 専任教授ですけれども、一度も出勤したことはありません。

伊藤 ですから、科学官としてというか、文部省に毎日勤めていたと。

西田 そうそう、科学官室に毎日来ていたのは僕くらいでしょうなあ。ですから、一人でビデオを見ていたわけです。

所澤 そういうような教官ポストが配置されている大学は、東京工業大学以外はないのですか。

西田 どうですかね。それは文部省が月給を出すための便法としてやっているのですね。

伊藤 いろいろあちこちにあるんじゃないですか。

所澤 どういう仕組みでできたのかなと思って。

西田 予算を貼り付ければいいわけですから、もっとも難しいことではないですよ。その大学の教授会から文句をいわなければね。

小池 給与は東京工業大学から出たわけですよ。

伊藤 それはそうでしょう。

西田 一度も月給をもらいにいったことはないですね。

伊藤 どうせ振り込みだからね。

小池 国立大学会計から出てくるのですからね。

所澤 東工大は、そういう文部省関係の教官ポストがあるというのは、わりと一部の人のあいだには知られていることのようなのですけれども。

西田 そういう融通できる定員を文部省のほうで抱えているのではないですか。一番あり得るのは工業大学と医科歯科大学です。医科歯科大学も文部省の言いなり。いうことを聞いていたほうがのちのち便利（笑）。

小池 この放送大学は特殊法人なのですけれども、計画の段階で、教授会とか、そういうシステムはどうなっていますか。

西田 私は知りません。予算が通ったら、よそへいってくれと言われて。

伊藤 計画の段階ではまだ考えていなかったのですか。先生のおいでで段階で。

西田 教授が何名と決まっているだけで、それが教授会をやったかやらんかというのは……。大学の機構図まで書いてあります。これを見るとやはり、レクターと書いていますから、一番トップに学長がおられて。こういうのはやはりガバニングボードができますね。

レクターというのが学長のことですね。ファカルティとして、ファカルティ・カウンシル・エデュケーションコミッティと書いてあるから、このファカルティ・カウンシルというのがいけば教授会のことでしょうね。エデュケーションコミッティは教育委員。バイスレクター、これが副学長だな。教授会を頭に置いてはありますね。

伊藤 メインストリートに書いてないですね。

西田 これはあくまで学長に対するアドバイザーですね。

伊藤 やはり今の国立大学と。

所澤 おそらくかなり警戒していたのではないかと思います。だって、放送を一手に握って、思想的に一つの方に偏ったりしたら大変なことになる。

小池 いま所澤さんが言われたように、思想的に一つの方に流れてしまうというのは恐ろしいことじゃないですか。そういうほうの安全装置というのは組織をつくるときに考えられたのですか。いろんな人を学外から入れて評価委員みたいなものをつくるとか。

西田 しかし、学長の上にガバニングボードというのがあって、理事会みたいな形で、結局、これに外部の人をもし入れていけばそういう中立性が。NHKにもそういうガバニングボードありますね。ガバニングボードのところにオーディターというのがありますから、やはり目を光らせているのがおるのでしょうか。それから、アドバイザー

ザリー・カウンシルについても、それをやはりアドバイザーするところがありますね。日本語のがないのが情けないのですが。

伊藤 まあ、NHKだってボードが機能しているわけじゃないから。やはり会長が権力を持っているのでしょうか。

西田 まあ、予算を国会が握って、強いわけですね。

伊藤 実際に大学をどういう運営していくかとか、そういったことについてはそれほど細かくまだ決めていないという段階でしょうね。

西田 その後の放送大学のでき上がったものがどういう形かというのは、私はまったく知りません。

伊藤 今まで西田先生がおやりになってきたようなことを継承していったのはどなたなのでしょう。

西田 予算がついて、放送大学を実際に設立するのは文部省の大学局がやったわけですからね。

伊藤 準備室をつくるわけでしょう。

西田 ええ、大学局は準備室をつくったのかどうか。新しい国立大学の設立と同じわけですからね。

伊藤 そうしたら準備室をつくりますよね。

西田 その教授陣も、学長になる人を選任したり、それは全部文部省の大学局がやったのでしょうか。いろいろな大学から引き抜いたり、定年でやめた人を集めてきたり。それは文部省でできていくでしょう。

この次に、木更津高専をやめまして、二年間だけフィリピンへいきまして、フィリピンの技術援助のことを。

伊藤 それはJICAですか。

西田 JICAで、フィリピン工科大学というところの技術援助のチーフアドバイザーとしていったわけですね。そのときのこと。あと短大はたいしたことはありません。短大の改革をやった。最後に、前から申しあげております入試の問題でやってきたことの総まとめ

をひとつ申しあげたいと思います。

伊藤 分かりました。

西田 では、高専はこの次にしますか。

所澤 すみません、私はフィリピンのときの経験について関心があるというか。私は数年前に調査にいったことがあるんです。そのときに、日本の外務省からいつてるJICAの関係の方に話を聞いたのですが、フィリピンがほかの国と非常に違うところがあるという話で、それを先生がどういうご経験したかというのを次回お聞きしたいと思うのですけれども。それは何かというと、外国からお金をもらわないと何もしない国で、自分たちから何もしようとしないという話で、こういう国は今まで来たことがないとおっしゃったんです。要するに援助漬けの国みたいになっているところがあるみたいなのですが。先生が仕事でいらしたときにはどういうふうに感じておられたのかちょっとお聞きしたいなと思いましたので。

伊藤 それは来月。

西田 日本から四、五人の人が毎年アドバイザーでいくのですけれども、アカデミックな世話をしている。それには日本から何億円という寄付の金が入っている。その全体のマネージメントのアドバイザーグループのチーフというのは、活動の総まとめ。五年間やっていて、そののしめくりをやってくれと。いってみて、過去に援助したものがどう生きているか。大学の学長や何かと相談して、学校の教育の本身がどう変わったか、そういったことをまとめてレポートしたわけです。一番びっくりしたのは、福田さんがいって、向こうの政府に何億円か寄付するという約束をして毎年出したのですね。私がいつてみて初めて、五年間にこちらから寄付した機材のリストをパソコンのデータベースを使ってつくり直した。やった金の二、三割はどこへいったか分からない。それこそ、金をもらわなきゃやらないんじゃないかって、もらった金がどこかへ蒸発していくというシ

ステムがあったらしい。

伊藤 そういう話は次回に。

西田 何となしに噂がひどいからというので、外務省から人を派遣してその監査に加わったのは、国連の難民高等弁務官をやられた緒方（貞子）さん。私はざっくりばらんに、「調べたら二割くらい行方不明です」と話した。私がいった年が、ちょうどクーデターが起きて、マルコスが亡命した直後です。

小池 大変な時期にいかれたのですね。

口述説明メモ(2)

西田 亀久夫

第1. 放送大学の創設準備

(S49-11-1~54-6-15)

1. 文部省科学官(東京工業大学教授)としての仕事

49/6月退職後6ヶ月目の予備役招集、初めての自宅取得と官舎からの転居
当面の任務は、放送大学問題の具体化の促進

- (1) ケニヤ教育視察団(50-2-23~3-5) JICA による教育協力の具体案模索
- (2) 米英の放送大学視察(50-5-30~6-15)
ロンドン英文部省、Open university訪問、ケンブリッジ大学教育学部、シカゴのTV College、ネブラスカ州リンカーンのUniversity of Mid-America、サンフランシスコ Stanford大学教育学部
[主な知見]
 - a) 放送は、そのタイムスケジュールに合わせて学習者の学習行為にリズムを与えることが主目的であり、学習内容の提示には印刷教材が不可欠
 - b) 学習の深化には、スクーリングによる面接指導が不可欠
 - c) ラジオ・TVの聴覚と視覚による教材提示の教育的効果の差異については、まとまった研究成果はない。そのため、教材作成の研究施設が必要
- (3) これまでの「放送大学」に関する準備段階
 - a) S29年: 文部省社会教育局で「放送大学」の検討開始
 - b) S46年から4年間: 大学レベル「実験番組」を制作・試験放送
 - c) S49年: 「放送大学の基本構想」を発表。このための放送電波2本確保
- (4) 「放送大学設立準備調査会」の調査活動
この調査会は、さきの「基本構想」を具体化するため、S50年4月から準備して、放送大学に対する一般国民の要望と実施の可能性を実証的に把握するため「放送大学に対する教育需要の予測調査」(専門機関による全国で5,000人の無作為抽出の面接調査、回収率83%)を行った。これは、放送大学の教育組織・カリキュラム・教育方法の骨格を設計するために不可欠なものであり、その結果の概要は次の通りである。
 - a) 自宅で出来るならば、もっと勉強したい人は、約6割で、若い人、高学歴の人、管理職や専門職の人ほどその割合が高い。

- b) 放送大学で勉強したい人は、45.5%で、その約1/3は単位や資格を取ることを希望している。
- c) その単位や資格を希望する人が、一番勉強したいテーマとその他に関心のあるテーマを選んだ結果を分析すると、33のテーマは次の5つの関心領域に分けることが出来る。(この33のテーマは Encyclopedia Britanica の目次を要約して作成した)
実生活志向型、産業社会志向型、語学文芸志向型、
人文基礎志向型、自然基礎志向型
- d) 科目の履修のため、放送番組の連続視聴(45分×週2回×15週)と自宅学習(週3時間)が共に出来るという人は47.1%であるが、このうち単位や資格を希望する人は回答者の8%であり、これを全人口数に拡大すると、放送大学の受講者は約620万人となる。また、その9割は学習センターに出席できるという。

(5) 「放送大学基本計画」の作成作業

「放送大学設立準備調査会」は、S50年10月1日に調査会の総会において上記の「教育需要予測調査」の結果を諒承し、その後次のような部会によって各部門の細目を検討し、12月17日に「放送大学基本計画」の最終案を確定した。

教材部会、通信部会、指導部会、組織部会

2. 「放送大学基本計画」の概要

(1) 放送大学の意義と役割

- a) さきに「放送大学に対する教育需要の予測調査」によって実証的に示された一般国民のこの種の教育に対する強い要望に応えるという重大な使命がある。
- b) 放送大学は、次のような観点から、我が国の高等教育全般に新風を吹き込み、その望ましい発展に貢献することが期待される。
- ① 学際的な学問的成果を、広く国民の共有とし、その実生活の問題解決に役立たせることができる。
 - ② 変動する社会環境に対応して、自らを再教育する機会を、地理的・経済的な障害を越えて、万人に保障することが出来る。
 - ③ 必要な時に大学卒業資格を取得して、学歴不足による差別待遇を

排除できるし、漠然と入試地獄に巻き込まれる必要もなくなる。

- ④ 放送大学と各大学間で、授業科目を交換したり、単位を互換したりして、教育活動の充実に協力関係を深めることが出来る。
- ⑤ 放送大学の実験の経験によれば、多分野の専門家の協力を得ることにより、高等教育の内容・方法の改善・向上が期待される。

c) 放送大学が成功するための前提条件

- ① 放送大学の開設の2年前から、教育内容の編成のための先行投資を開始すること。
- ② 放送大学の本部の先行投資と共に、教育放送網とその他の情報メディアへの資本的投資を先行的に行うこと。
- ③ 全国に分散した学生の指導計画を運営するため、地方自治体や地方大学の積極的な協力が得られること。

(2) 基本計画の主要項目

a) 計画立案の基礎としての学生集団の規模の推定

学生総数=620万人、毎年度入学者=233,000人、正規学習登録学生=453,000人

b) カリキュラム編成の一般原則

[単一の教養学部]のコース別 (現在のコース)
「科学と実生活コース」→[生活と福祉]・[発達と教育]
「産業社会コース」→[社会と経済]・[産業と技術]
「人文・自然コース」→[人間の探求]・[自然の理解]
[授業科目の種別] 聴講科目・演習科目・実習科目
[学生の種別] 全科履修生・選科履修生・科目履修生

c) 教授組織と教材制作

最初の4年間に、毎年40科目開設、次の4年間には毎年20科目追加、開設科目の1/4を更新する
専任教授=31人、助教授=40人、助手=50人、非常勤講師
放送関係: 主任 Director 3人、プログラム Director 50人

d) 教育放送網の構築計画

電波到達地域を全国の80%として、200の送信所を設置、その建設費=420億円、経常費=38億円、その他 Video Center

e) 学習センターとその運営費

聴講科目＝毎学期に3回通信指導、学生の解答は地域センターで処理
演習科目＝毎学期に3回、各県の学習センターで演習
実習科目＝毎週1回、各県の学習センターで実習
各学生は、毎学期に最低1回それらのセンターで、巡回指導員と面接
地方自治体や大学は、センターの開設と指導員の派遣に協力を

f) 放送大学の組織と運営

大学本部は、教授団のほか、総務・学務・放送の各部を持ち、学務部のもとに全国9地域に地方事務センターを置き、各県に設置した指導センターのもとに演習・実習・ビデオのセンターを置く。

大学の専任職員数は2,000人、非常勤職員数は5,600人に。

g) 創設第1期の実施目標

大学開講2年前に建設を終わり、開講4年以内に160科目を持つ3コースを完成し、学生の動向を見て漸次残りの科目を整備すること。当初の4年間の教育放送網の建設目標は、東京・名古屋・大阪の広域送信所と東北・四国地域の第1優先の送信所であり、電波網外の僻地に相当数のビデオセンターを設けることである。

h) 必要な財源の見積

放送大学の最終的な段階の最大年間予算の規模は、約290億円であり、その時までの資本的投資額は、約840億円となる。第1期の終わりまででは、後者が340億円、前者が140億円である。

3. 放送大学の教授・学習システムの特質と問題点

(1) 「第三の学習システム」としての特質

- a) 放送という通信メディアによって、一定のタイムスケジュールによって学生の学習をリード出来る。(読書による自習との差異)
- b) 専門の施設とスタッフによる事前の放送教材の制作により、高度に洗練された教材を用意することが可能である。(通常の学校との差異)
- c) 電波の到達範囲という巨大な教室を持つとともに、ラジオ・TV という二つのメディアによる二つの教室の二つの授業時間割しか組めない。
- d) 教師と学生との対面関係がないため、教材内容の決定・学生の理解度の推定・合格水準の設定を適切に行うのが困難

(2) 適切な教材を制作するための未解決の根本問題

a) 授業科目の目標を構造的に分析するためのカテゴリーの開発

これが解明されることによって、初めて放送番組の展開手法や学習指導の目標・成績評価の基準を定めることが出来る。

[個人的試案] ① デジタル的論理解説による合理性の理解

② アナログ的表象の提示による原理・原則の直感

③ 反復試行の蓄積による操作技法の習得

④ 模範提示による感受性の共感喚起、

⑤ 情動の転移による行動意欲の醸成

b) 視覚と聴覚の学習上の機能と特性

視覚によるアナログ情報と聴覚によるデジタル情報によって伝達できるものと、出来ないもの、更に、両者の複合による特殊効果などが解明されることにより、一般学校教育・特殊教育・放送教育の飛躍的な質的改善が期待される。

4. 放送大学設立までの遠い道のり

(1) 「基本計画」策定後の3年間の空白(S51～53)

a) 実験番組の視聴による番組制作の自学自習

(私的事情: 入院胆嚢摘出手術、次男・長女の結婚)

b) 「放送教育開発センター」の設立(S53/10)

ただ一人の「研究開発部長」(S53/10～54/6)

c) 木更津工業高専校長へ配置換え(S54/6/15)

(2) 放送大学開講までの6年間

放送大学関係予算初成立(S54/6)、放送大学学圖法成立(S56/6)、

放送大学設置認可(S58/1)、放送大学開講・学生受け入れ(S60/4)

第2. 木更津工業高専校長時代

1. 校長勤務

S54/6/15～60/3/31。 S54/6/18に第3代校長として着任

S54/7/1に木更津市内の校長官舎に移転、東京八王子の自宅から、毎週月曜日に出勤(片道 2.5時間)、週日官舎に滞在、土曜日午後に帰省

2. 在任中の主な仕事

- (1) 学内諸規定の整備---「組織と運営に関する規定」(立法と行政機能の分離、運営全般の総括評価権)、教授会の運営の改善(校長の司会廃止、“学生の教育に関する事項の審議決定”に限定)。
- (2) 新入生の合宿オリエンテーション---基礎学系の全教員と新入生全員が、青年の家で2泊3日の合宿研修。
- (3) 学科の増設---他の高専に比して3学科の小規模を改めるため、約1年間の学内論議を経て「電子制御工学科」という新規の学科を創設。
- (4) 外国人学生の受け入れ---高専への留学生受け入れ開始の第1年度から、中国・マレーシア・インドネシア・韓国などの留学生を第3学年に受け入れ、学寮に日本人学生と同居させる。イスラム学生のための施設の改造、日本人学生チューターの指名、外国語による専門学術用語集の編纂。
- (5) 「学友会館」の新設と学生自治会による完全自治運営---[1階]談話ホール・音楽演奏室・ビリヤードやパソコン付娯楽室・[2階]学生自治会室・大会議室、小会議室・学生部長室・カウンセリング室・“憩室”
泉水池付前庭(ロダン“考える人”の像)
- (6) 「学寮」の全面改修---250人程度の旧陸軍兵舎方式を改め、30人の『群』単位に生活空間を作るため、自習室・寝室のほかに談話室・調理室・洗濯室をそれぞれ独立に用意し、1群の中に1～5年生が同居するシステムとする。
- (7) 高専のPRのため、毎年県内の中学校へ学校説明会を行う時、担当の派遣教員の説明内容の向上を図るため、「高専とは」という説明用のビデオを制作し、これで説明会を行うと共に、各地域の幹事中学に預けて、常時利用して貰うこととする。
- (8) 校内環境の美化---3万坪の校地の周辺を樹木で囲むと共に、講堂の周辺は入学時のサクラを植え、学寮の周辺は卒業時の名残にコブシを植え、校門からの誘導路にはメタセコイヤを植えた。これらの移植樹木の維持と手入れに、学内に「緑会」というボランティア団体を結成し、毎週定期的に学生・教職員が草抜きや剪定作業を行った。
- (9) 学生活動の振興---千葉県に生まれながら、泳げない学生の多いことに驚

き、毎年夏休み前に、各学年の学生を近くの海水浴場に引率し、1泊2日の合宿研修を行った。学内で潰れそうな吹奏楽団に指導の顧問を雇って世話をして貰ったら、2年後には毎年市内のホールで定期演奏会を開くようになった。

- (10) 高専生がオートバイや自動車で起こす事故対策---多くの高校がこれらを禁止しているが、高専は機械技術を専門とするもので、これらを正しく駆使できないのは恥であるとして、県警にも協力を頼んで、学内で練習訓練をし、その合格者に許可証を与えることにした。

2. 高専制度の可能性に対する期待

- (1) 高校3年と短大2年に相当する現在の高専5年の制度は、創設以来、前期に高校普通教育のカリキュラムを想定し、後期に専門教育を配置する教育課程を遵守してきた。しかしながら、早期専門教育の特色を生かすためには、この固定観念を捨てて、より弾力的なカリキュラムにより、専門教育の効率をたかめることが考えられる。5年生の卒業研究の発表会を傍聴する低学年生の生き生きとした眼差しを忘れることが出来ない。
- (2) 創造的な技術教育が期待される今日の日本では、高校・大学への入試準備に煩わされないに高専こそ、若い青年の中に新しい技術開発の芽を育てる可能性が豊かにあるように思われる。そのためには、伝統的な原理学習から応用研究・技術開発の道筋ではなく、解決課題を出発点として、可能性を手と頭で模索しながら、試行錯誤の中から能動的な原理を発見し、独創的な技術を創造する学習方法も実験に値しよう。(近年、高専で盛んなロボコンテストを見て)
- (3) かつて理工系急増の要請に応じて、技術畑の「下士官」養成の目論見から生まれた高専が、その後の私学理工系の急膨張の結果、今日ではむしろ希少価値の有望候補となった。特に、殆どの高専が、各府県に配置された国立学校であり、その修学費が低廉なため、各地域の中産階層以下の有能な青年に理工系の学習の機会を提供し、卒業後、それらを広範囲の地域に人材分布する機能を果たし、将来の理工系技術者の育成に貴重な貢献を果たすものと考えられる。

西田 亀久夫 オーラルヒストリー

第12回

日時：2003年6月10日

14:10～16:40

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊 藤 隆（政策研究大学院大学教授）

小 池 聖 一（広島大学助教授）

所 澤 潤（群馬大学 教授）

村 上 浩 昭（東京都立大学助手）

■木更津工業高専校長在任中の主な仕事

西田 今回は、フィリピンへいく話ですね。

伊藤 女学館短大も関係あるのですか。

西田 最後は女学館短大です。

伊藤 あの洪沢さんのところですか。

西田 ええ。七年間、その学長をやったんです。

伊藤 そうなんですか。

西田 履歴書に書いてあったでしょう。

伊藤 東京女学館というのは、今度、洪沢さんの話を聞こうかと思って、いま計画しているのです。

西田 それでは、高専から始めましょうか。高専に入る前に、この前、放送大学のことです。いろいろやって、五年間も宙ぶらりんになった。このときは一番欲求不満で、ノイローゼになったような時代でした。ところが、それからあとで高専と短大の現場を回らせてもらった。一番ありがたかったと思いますのは、役所でいろいろ理屈を言って、ああすれがいい、こうすれがいいと考え方をいろいろ出して、例えば中教審もそういう教育改革のお膳立てをした。終わったところですか。そうですね。その次の放送大学。放送大学も、できたときには違うのです。国連大学も、お膳立てして、実行の段階では……（笑）。そのへん全部、お膳立てをして、後始末を何もしないままやめていく格好になったのが、高専以降、今度は泣いても笑っても教育の現場に出て、自分が昔いっていたことがどこまで実行できるのか、実際の場面であつて、相当なものが実際にやれたということを確認する機会を与えてもらった。非常にありがたいことです。女学館短大も、昔、中教審でいった大学改革という

考え方、高専も、新しい学校の運営という問題について自分なりにやってみて、それが一つの成果があったという点では大変にありがたかったと思います。それは自分で選んだ道ではありませんが、結果的にそういうことになりました。

木更津工業高専の第三代の校長だったのですが、正味六年間やりました。役所を辞めたときにいろいろ無理をして八王子の山の中に家を建てたのですが、そこから東京都を横断して木更津まで、その往復をずっと六年間続けたわけです。

伊藤 実際にそこからお通いになったのですか。

西田 いや、とても通うことはできません。片道二時間半かかりますから……。

小池 それは車で、ですか。

西田 いえいえ、土曜日に八王子の家に帰って、日曜日を過ごして、月曜日の朝に電車で木更津へ出勤と……。木更津には校長官舎がありまして、校長官舎に女房も一緒に移りました。ときどき八王子の家を開けて風を通さないと、腐ってしまいますから。誰もほかに家族はおられませんから、土曜日に帰って、月曜日出る。自分のうちへ通勤したわけです（笑）。

小池 考え方によっては、家を二つ持っていたということですね。

西田 在任中の主な仕事をメモしました。（1）学内諸規定の整備。私が大学局に正味一三年おりまして、庶務課長もやって、学校の整備・運営というようなことをいって、その考え方をここである程度実行に移して、実現できた。最初に、木更津高専の「組織と運営に関する規定」というのを作りました。これで、細かい点は別として、自分として一つよかったと思うのは、立法的な機能と行政的な機能というものを分離することができた。教授会というのは、一つの学問的権威を持って、学校のポリシーについての立法的な議論をするけれども、実行するのは校長の責任なんだ。校長と事務局

による行政機能というものは、これは一応違う機能なんだ。というのは、大事な問題についての大きな政策的なものを教授会で考えるのは結構だけれども、それを実行に移す場合の責任は全部学長が負うのである。教授会というのは責任を負えないのだから。教授会の決定が、間違っていたら誰が責任をとるのかといったら、誰も責任をとらないわけです。教授会が総辞職したなんて聞いたことがない。

それは校長が責任を負うので、校長はそれを、社会なり、文部省なり、国に対して責任を負っているわけで、それは全然違うのだ。そういう意味で、政策決定に関して教授会が権威を持ってやるのは結構だけれども、そのところを私のほうが駄目だといったらやりませんから、ということをおったわけです。しかし、その結果については責任を負う。同時に、そこに「運営全般の総括的評価」もある。だからといって、校長がやりっぱなしにした問題が全部宙に浮いてしまったのでは困るので、ちょうど国会に国政の総合調査権というがありますね。そういうように、教授会は毎年一遍、校長がやった施行のことについて総括的な評価をする。そして、これについて必要があれば校長に勧告するという総括評価権を持つということにいたしました。そして、実際にそれを運営の面でやるために、校長が教授会を司会することはやめたのです。内閣総理大臣が国会の議長やっておかしいですからね。

小池 議長は誰がされたのですか。
西田 それは、教授会で選挙してもらえばいいのですけれども、まあ、決まったほうがいいからというので、教務主事、学生主事、寮務主事とありますが、教務主事がやりました。

伊藤 教務主事はどちら側のですか。
西田 教授会の中から校長が任命するわけです。

伊藤 教授なのですね。

西田 もちろん教授ですよ。教授であって、教頭みたいところも

あるわけです。校長が司会をしない。私どもは政府委員席みたいなところへ座っていて、教授会で議論をして、議長が運営する。議論がおかしいと思ったら、こちらも手を挙げて質問するわけです。「今のあなたの意見は何だ」と。自分が司会をしていると、それができないですね。そういう運営をやりました。

教授会のなかで、教授会が学校の重要事項について決定すると普通は書いているのですが、そこに明確に、「学生の教育に関する事項について審議決定する」と限定しました。学生の教育に関することではなくて、例えば事務職員の任免とか、教育・研究ではない学校のそのほかの事務に関する問題まで、学校によっては教授会が決定したりするですね。そういうことやらないということを、規程の上ではっきりいったわけです。

伊藤 教授の人事や何かはどちらに入るわけですか。

西田 教授の人事ですか。教授会で、教授を任免するとか何かというのは、教授会にそういう選考委員会をつくって、適当な候補者を出してもらってやる。

伊藤 それは、「学生の教育に関する事項」のなかに入るわけですね。

西田 広い意味で入るわけです。

その次にやったのは、これは学生課長のときの経験で、入ってきた学生を学校になじませるための合宿のオリエンテーションというのをやった。入ってきたときには、基礎学系の教員と新入生を全部連れて、二泊三日の合宿研修。これは六年間ずっとやりました。そこで初めて先生と学生が解け合う、そういうことですね。

(3)学科の増設。木更津高専は不思議なことに三学科でとまっておったのです。高専をつくりだして、年が経っていくうちに私立の理科系の学校がどんどん増えたものですから、高専はもういいやというので、とまってしまったのです。学校の規模として小規模すぎ

るし、その点で、学科を増設すると。私が文部省へいって予算をとるからといって、一年間議論しましてできなかったのが、「電子制御工学科」です。これはなかなか先生方の学問的な議論というのは大変でした。この名前は私が決めたのです。日本に初めてそんな名前のものができた。エレクトロニクスによっていろいろなコントロールをする、今の近代的なコンピュータがそうですが、そういう学科で、電気工学科とは別につくったわけです。これが通って初めてできたら、ほかの高専がまねして、ゾロゾロと同じようなのができました。

その次の(4)外国人学生の受け入れ、というのは、ちょうどこのころ文部省がやろうということで、一番に手を挙げました。中国、マレーシア、インドネシアの留学生が三年生に入ってくるわけです。要するに、日本語の教育に慣れるということと、学問的なことの指導と、両方同時にやらなければならぬ。三年生に入ってきたときに、日本の生活に慣らすために全部寮に入れまして、日本人の学生と同じ居して、寮の日本人の四、五年のときのいい学生をチューターみたいにいて、その部屋のなかで日本語のことからすべて世話をしてやるということをやりました。そうすると非常に早く日本の生活に受け込んでくるし、日常の言葉ができるし。それから、前に申しあげたと思いますが、そのチューターをしている日本人の学生の日本語がよくなったと先生が驚いていました。向こうの人が真似するものですから、千葉県の方言を使っているのはだめだと。それから、外国人学生が日本語で勉強するのに一番困るのは、日常会話ができるけれども、日本語のテクニカル・チームですね。それを、機械・電気・土木の専門ごとに主要な日本語と外国語を対比した用語集をつくりました。これもまた、うちがやったら、ほかの高専が譲ってくれといって、あちこちへやりました。漢字で書いたテクニカル・チームが一番まいてしまうのですね。

(5)学友会館の新設。これは学生課長のときの私の念願で、学友会館、つまり、学生自治会が完全な自治でやる学生会館というのをつくろうと。これを学生課のときにつくったら、早稲田とかお茶の水とかで大騒動が起きまして、学生会館の管理権というのを取り合った。そんなばかみたいな話が起きたわけです。

伊藤 大問題でしたよ。

西田 ええ。今度は、ここでは私どもは初めから企画して、建物としてこれは相当な坪数があって、さまざまなもの(一階)談話ホール・音楽演奏室・ビリヤードやパソコン付娯楽室・(二階)学生自治会室・大会議室・小会議室・学生部長室・カウンセリング室・憩室を全部入れました。ここに学生部長室も、自治会室もみんな入っています。しかも、学生自治会に完全に自治をしてもらうのだというので、校長と学生自治会の委員長とがちゃんと契約書をつくりまして、両方が判子を押したのです。

伊藤 この学生自治会は、やはり全員加入制ですか。

西田 そうです、全員加入制です。これは学校がちゃんと認めた正規のものです。そのときにもしろいのは、学生自治でやるということのなかには、彼らが朝学校へ出てきたら、当番のクラスを決めておいて、その当番が学生会館へいって鍵を開けて、部屋の中の掃除をして、トイレの紙を換えて、そういうことを全部やらなければいけない。物がなくなったら、「それは自治会の責任だ。自分らで賠償しろ」と。これは、少なくとも私がおった六年間のおわりまでそれをやっていました。

この中にはいろんな部屋があって、音楽を徹底的にガチャガチャやっていい演奏室がある。これは完全な防音装置にしてある。娯楽室には、日本中の学校で初めてビリヤードを高い金で据え付けた。「校長、やってください」といったら、「俺はやったことがないんだ」といって(笑)。これはイギリスのジェントルマンの娯楽なので、

これくらいのことはやれと……。しかも、そこにはパソコンが数台置いてあって、娯楽としてパソコンをしょっちゅう触れるようにしてある。二階に会議室や自治会の部屋をつくった。ここで特異なのは、「憩室」です。アメリカにいったときに、私がアメリカの学生会館を見て感心したのは、学生が大勢の集団の中で自由に交流し、仲間関係をつくる、絶えず人の中におることが大事なのだが、同時に、時折独りになって、自分で自分に沈み込む時間が必要だということです。この憩室というのは、二階に一二畳くらいの部屋がありまして、飛行機のファーストクラスの旅客室と同じように立派なソファをずっと向こう向きに備えて、そこはカーテンをつけて薄暗くして、その部屋へ入ったらものをいうな、居眠りをしていいんだ、次の授業をサボってもかまわんから、徹底的に自分独りの時間を持ってみたいました。なかなかそのようにはうまくいきませんで、ときどきラーメンを買ってきて食べたりしている人もいましたが、趣旨はそういうことです。部屋のなかにきれいな額を飾りまして、一番後ろには、アイザック・ニュートンの肖像画。ニュートンの英語でいった、「私は万有引力の発見者だけれども、人がどう思うか知らないけれども、自分は海岸で遊んでいた一人の少年にすぎない。自分が海岸で美しい貝殻を拾っているときに、真理の大海は目の前に何も分らないで波打っているのだ」と、ニュートンのそういう感想ですね。そんなものを自分の趣味でやりました。会館の前には池があって、そこにロダンの「考える人」の模造品を置いた。それだけは永久に残るだろうと思います。

六番目に学寮の全面改修というのは、一年生から五年生までが入って、経験です。高専の寮というのは、二年生から五年生までが入って、二五〇、六〇人おるわけです。この連中が、やはり冒頭から事故を起こしました。上級生が下級生をこき使ったり、しごいたり、いじめたりということがしょっちゅうありました。私は、入ってから半

年目に、全校生徒を集めて、「寮生が下級生を仕込むのだといういろいろなことをやっているけれども、あれは要するに昔の江戸時代に牢屋の中で牢名主が新入りをいじめていたのと同じなので、これは集団的な病理現象で、そんなことは学生のやることではない」と説教したことがあります。しかし、私がアメリカにいったときに、ハーバードの学生寮を何十年とやっていたベテランのおじさんが、「人間が集団を組んだときに、三〇人程度までの人数ならば、そこにひとつの家族的な雰囲気が出てきて、おのずからモラルが生まれるのだ。それを超すと、外から他律的なコントロールをしなかったら秩序を守るのは非常に難しい」ということをいっていました。そして、三〇名のコミュニティをつくってやるのが大事だということも……。

寄宿舎というのは、ご承知のように、森有礼が文部大臣のときに、旧陸軍の兵式体操をとり入れ、軍事教練もやった。寮は真ん中に廊下があって、両側は寝室と勉強部屋ですね。兵舎の内務班で、「集まれ！」といったら、パッと出てくるような、あれと同じなのです。これを全面的に改修する。これは文部省がなかなか文句をいいたけれども、思い切ってやらせてくれと……。

昔の寝室のスペースを少なくして、二段ベッドで寝るようにした。勉強部屋はある、寝室もある。それ以外に、三〇人単位のグループが、勉強もしない、寝もしないで、仲間ととことん徹夜でしゃべる、そういうリビングルームがないのですね。そのリビングルームをつくりました。そのリビングルームの隣には自分たちで炊事をする部屋もあるし、テレビも据えてあるし、マジシャンも、何をやってもかまわない。遊ぶ部屋をつくって、そこで仲間関係を持つ。だから、勉強をしている人間のところへ行って、邪魔をしてはいかん。寝ている人間を邪魔してはいかん。そういう生活のけじめがつくようにという形で、三〇人の群制度というものをつくった。群長というの

は五年生がやるわけです。だから、寮のなかで上下関係とかで問題が起きたら、群長の責任なのだとする形で、彼らが自分でコントロールする。寮務主事と校長は、一年に一遍、各群をまわって、どこが一番見事な共同生活をしているかというのを視察する。そういう形で寮の全面的な群制度というものの改正をやったわけです。これは、最後の二年くらいだったのですが、私が二年くらいで出ていくまでは動いておりました。その後、いろいろな問題が起こらなかったかということとを二年ほどしていったときに聞きまして、やはりいろいろあったようですけれども、今でもこれが続けておると私は思っています。

その次には、高専というものが一般に知られていないので、県下の中学校へこれをPRする。そのときに先生を派遣してもダメなのですね。先生が、「高専とは」というのをまともに説明できない。それで、図書館の二階の視聴覚教室を使って、高専の説明という立派な解説のビデオをつくったのです。これは放送大学のときのひとつの経験ですがね。それを持って行って、学校でみせて、その補足説明をすればいい。千葉県の学校をまわる。しかも、千葉県の各地域の中学校は、そこに一つの幹事校みたいなものがあるのです。そこへビデオを預けておいたら、いつでも学校が生徒指導のときに使えるというようなことをやりました。これもおそらく木更津でやったのが唯一でしょう。これは放送大学の経験が生きたわけです。

その次に、学校環境の美化という形で、三万坪のゆったりした校庭のまわりにいろいろな木を植えたりして、私は自分の趣味で、寮の近くにはコブシを植えて、卒業が間近になるとコブシの花が咲く。四月になると、入学式の講堂のまわりに桜が咲く。入った正面玄関からはメタセコイヤを植える。これを千葉県の田舎から植林業者に頼んで持ってきてもらったら、あの校舎というのは平地を耕してつくった校地ですから、地面が古くない。そこへそういう植木を持っ

てくると、山から雑草とかいろいろな類が一緒に来るのですね。これが、木が育つのを邪魔する。植えた限りは、それをしょっちゅう草抜きして……。人を雇ってはできないから「緑会」というのをつくりまして、校長と学生と全部ボランティアが入って、毎週何曜日と何曜日に、夕方五時にすむから、一時間くらい草取りをやる。この「緑会」というのも私が出るまで続いていましたし、学生も喜んで出て来ていました。みんながみんなではありませんけれども……。学生生活の振興としては……。木更津にいてみて、千葉県に生まれて、九十九里を抱えているくせに泳げない子どもがずいぶんいました。話にならんじゃないかというので、夏休みに入ったときに、木更津のあの辺には立派な海水浴場がありますから、そこへ全校生徒を全部連れて行って、一泊二日の水泳訓練。最初にやるときには、やはり心配しましたねえ。

伊藤 事故があったら大変ですからね。

西田 私どもは、学生主事なんかとボートに乗りまして、ここからここまで泳げというまわりにいって、もし沈んだら、すぐに引っ張り上げるように（笑）。まあ、これは四年間、五年間、事故はありませんでした。ただ、去年高専からの年報みたいなものを見たら、とうとうやめたと書いてあった。校長が、もう怖いからやめたのですね。これも合宿でいって、よかったです。

もう一つ、吹奏楽団のことです。入った最初の卒業式のときに、卒業証書授与のあとで、多少、歌を歌ったりしますよね。高専の吹奏楽団というのが五、六人出てきまして、楽器は持っているのだけれども、しばらくやると、人数が足りないものだから、そのタクトを振っている学生が名前を呼ばれると、「はい」といって……

（笑）、免状をもらったら、また下りてきてタクトを振る。なんかかわいそうだなあと思いついて、「おまえたち、楽器は幾らでも学校で買ってやるから」と、指導の先生をほかの高等学校へ頼みました。

あれは、いい指導者をつけると、めきめきと上手になりますね。その二年後には木更津のシティホールで定期演奏会をやるようになりました。これは今でもやっていると思います。学生は、元気づけてやれば、やるのですよね。

次は、これも珍しいのですが、高専生がオートバイや自動車起こす事故対策についてです。高等学校やその辺で一番困るのは、生徒がオートバイや自動車事故を起こすということです。木更津でも、オートバイを乗り回してでんぐり返って、頭を打って下半身不自由になった子が出ました。こうなると、千葉県は全部の高等学校が学生にオートバイ使用を禁止。自動車はもちろん、まだ免許を取っちゃだめだというのをやっているわけです。うちはどうするかというので、私はこういったのです。「工業高専というのは、機械を駆使できる人間を作るところだ。人間が百年も前に発明したオートバイや自動車を運転できないでどうするんだ。積極的にやるべきだ。校庭の中に、それを練習させるところをつくる」と。県下の高等学校は全部禁止しているのに、木更津高専だけはやると。下のほうの年齢は高等学校と同じですからね。これをやるのに千葉県の県警と相談したら、県警が警察庁に話した。警察庁の交通局長とというのが、私の高等学校の同級生だったのですね。県の警察に、「それは木更津高専を徹底的に応援しろ。これはいいことだ。事故防止というのは、とめることではなくて、練習させることだ」と。うまくいきましてね(笑)。そのかわり、やはり心配しました。木更津高専だけは、オートバイを乗り回し、自動車の免許を取れるようにしたのです。これは、僕は間違っていたかと思っています。しかし、これはほかの高等学校はあまり真似しませんでした。警察の交通課もずいぶん練習なんかを手伝ってくれました。所澤 やはり効果は大きいのですか。警察が協力して練習すると、効果は非常に大きいのですか。

西田 その練習所である程度の資格を取らないと、学校が許可書を与えない。学校の許可書をもらわないやつは乗ってきてはいかんということにしてあるわけです。

伊藤 一八歳になれば自動車も運転できるわけでしょう。

西田 そうです。

所澤 ということは、免許を取った上で、さらにこれをやるという形ですか。

西田 免許を取ってもね。オートバイだって最低限度の技術はあるのですけれども、それだけでは許さん。学校の練習場でちゃんとやって、指導者がオーケーをした者だけに学校としての許可書をやる。そうではないやつは闇だから許さん。それはきちんとルールを守れということ。エンジンアになるのだからね、そうでしょう。自動車なんかを怖がったってしょうがない。といって、私は運転できないのですけれどもね(笑)。

一同 ワッハッハッハッハッ(笑)。

西田 ビリヤードと同じです。

■高専制度の可能性に対する期待

西田 高専制度を六年間やってみてしみじみ感じたことですが、第一番目に、高等学校三年と短大の二年に相当する五年間なのです。この五年間というものは、創設以来、これは文部省が最初につくったときのカリキュラムの指導が悪いのです。下の三年間は、高等学校のカリキュラムとほぼ同じものをしていました。そうすると、三年間高等学校をやった、あとの二年間で専門教育をやるような、そういう型ができてしまっているのです。私は、それでは高専が何のために五年間一緒にしたのか分からない。早期専門教育という特

色を生かすために、この固定観念を捨てて、より弾力的なカリキュラムによってやれるようにしよう……。それで、おわりのほうにやっと始めたのですけれども、五年生が卒業間際になると卒業研究の発表会がある。これに一年生を出そうじゃないか。一年生の連中が五年生の研究発表を聞いていて、俺も三年たったらあれをやらなければいかんのか。しかし、面白そうだという形で、学生に一年生のときからショックを与えて、ある種の専門教育というのを一年からやらせるようにしようじゃないかということをいったのですが、これは現職の先生方が非常に抵抗しました。自分たちの持分の教育をやりたいようにやっていくというやり方ですね。

私はあのときに感じたのですが、特に基礎教育のほうの先生の採用を、高等学校をやめた先生を県立の高校からもってきてたりしたら、あまりいい先生は来ないですね。意識的に募集して採ったのは予備校の先生です。予備校の先生というのは、教え方について非常に工夫し、努力しています。あれは、ヘタをやる生徒が来なくなってしまうからね。採った限りでは、その先生方が皆よかったです。積極性がありますし。しかしなかなか、カリキュラムの全体改編まではとてもいきませんでした。

伊藤 これはやはり、規則的に決まっているわけですか。

西田 それは、小・中学校のように学習指導要領があるわけではありませんが、文部省がつくったときにそうしたというだけのことです。学校自身がどんなカリキュラムの組み方をしてもかまわないのです。制度上は、高専にはそんな制約はありません。ただ、先生方が保守的な形になってしまっている。

高専をつくったというのは、創造的な技術教育を日本でやって、日本が新しい技術を開発できるようにしろと、そういう意図があるはずなのですが、中学から高校、大学へ入る入学試験というもので、そういう技術的なものと関係ない受験勉強に振り回される。これが

ないはずですから、本当に高専で青年期から技術開発の芽を育てよう。そのために、伝統的な原理学習から応用研究・技術開発という、そういうステップではなくて、課題解決というのをまず問題に出して、その課題を解くのにどうするかというのでいろいろな可能性を人間の手と頭で同時に考えていく、私はそういうことをしきりにいったのですが。作家が独創的な作品をつくるときに、頭で考えたことを全部書くのではなく、書きながら考えていく。手が先に書いてしまう。「あ、そうか」といって、頭がそれを追いかけていく。作業するということと、考えるということが、いずれが先か後か分からんくらいの、そういうダイナミックな形でいったときに創造的なものが出てくるのではないか。だから、高専で基礎的な原理を習うことが大事だけれども、そこから順番に演繹的にやっていくのではなくて、自分の経験の積み重ねから、試行錯誤のなかから能動的な原理を発見する。発見した原理というものは、自分が発見したんだと思うくらいにならなくてはいけないので、そういう教育の仕方があるのではないかと、これもいろいろ議論しましたけれども、なかなか動き出しませんでした。そういうことがやれなければ高専の存在理由はないのではないか。

高専の「ロボコンテスト」が、NHKが主催になって流行ったでしょう。今は大学まで参加しているロボットコンテストね。あのロボコンに嬉々として取り組んでいる生徒たちの顔というのはいいですよ。あれは半分遊びもありますが。ああいうところで先生方も思いつかないようなアイデアがどんどん出てくる。こういうものが高専教育の特色であるべきではないか。これを、こういう新しい教育方法の開発、独創性の教育というのは、まだ方法論は何もないわけですよ。手と頭とで同時に考えていくというような教育訓練の仕方があるのではないかと、これを非常に考えました。

伊藤 前期三年間は普通の高専学校と同じような教育をやっていた

ら、生徒のなかに欲求不満が生じませんか。せっかく高専に来たのに、高等学校と同じでは、というような……。

西田 生徒は学校のお仕着せをただやっているだけのところがあって、不満というほどではないのですけれども。むしろ、積極的に卒業研究を見せるとか、いろいろな形で溶け込ませていけばいいのですけれども、非常にリジッドな授業時間割が決まっているものだから、そのままおとなしくやっているという格好です。

伊藤 でも、課外活動や何かで多少緩和できるのではないですか。

西田 しかし、授業時間がわりあいギッシリ決まっていますからね。これは、学校自身が教育方法の改善をやるという形で取り組まなければだめです。そのときに一番びっくりしましたのは、上級生で四、五年になってきたら、外国の新しい技術開発の状況を見るために外国文献を読んで、そのゼミをやる。それは外国語の勉強にもなるし、外国の技術に触れるための訓練としてそういうゼミをやらせようじゃないかとやったら、これも先生が反対しました。聞いてみると、先生がまず外国文献を一度も読んでいないのですね。そんなことをやらせることになったら、前もって先生は読まなければいけません。先生が新しい荷物を背負うのはいやだから、それもだめでした。教育改革の問題は、ここではなかなか軌道に乗りませんでした。

所澤 高校課程のところと短大の部分と、教員は同じ先生がやっているのですか。それとも、かわるのですか。

西田 下のほうは普通の基礎教育ですから、基礎学系という。いわゆる国語、社会、数学、歴史という、高等学校と同じ普通科目の先生がぞろりとおるわけです。ただ理科系ですから、もちろん数学とか、理科とか、化学とか、そういう関係の先生は多いですけれども、それは基礎学系というグループにしている。専門学系のほうは、機械、電気、土木という学科ごとの教授になっています。これはまあ、

「自分は電気工学のこういう部分だ」「俺はエレクトロニクスだけだ」という専門になっています。そういう先生がともに教えるのは、四、五年だけになっています。

伊藤 わずか二年というのは凄く短いすよね。

所澤 交流させるといふか、教員を動かすことは制度上できないのですか。

西田 いや、制度上できないことはない。カリキュラムを組んでやれば。そのかわり、先生方が本当に交流しあってやらなければならぬわけです。私がいったときには創立何年でしたか。それだけの数年間、第三代目の校長までですから、まだ十年程度でしょう。

伊藤 もう決まっちゃっているわけですか。

西田 そのとおりにやってきたことをそのまま続けていけば楽だというだけのことですね。

伊藤 あるいは、前期三年がおわったところで仮にやめたら、高等学校卒業という資格になるのですか。

西田 それはどうですかねえ。

伊藤 仮にそういうことがあるとすると、またそういう枠ができてしまうと思いますけれども。

西田 卒業資格をもらえたかどうか、ちょっと忘れしました。高専を卒業した連中は、どうしても学問を続けたいやつは技術科学大学というのが豊橋にできて、この大学の三年生に入っていくわけです。そして、大学院までいける。そういうコースはできたわけです。

所澤 東大の工学部も三年生から全国で一〇人くらい入れていますね。

西田 そういう意味で、試行錯誤をいろいろやりましたが、なかなか軌道に乗りませんでした。最後のところは、ちょうど私は高専制度ができるときに大学局におったのですが、理工系急増ということが財界からいわれている。そのときに、大学の工学部を急に増やせ

んから、いわゆる軍隊でいえば下士官ですね。そういうものが戦前の高等専門学校にあった。もともと目論見は、あれに相当するものをつくってくれというのでつくったのです。

ところが、高専ができてだんだん増えている間に、私立がバーンと増えたのです。私立の理工系の工学部がわんさと出てきて、高専より数の上でも圧倒的に大きくなってしまった。高専はむしろ希少価値になったのです。だから、現在ではそういう下士官養成ではなくて、むしろエリート養成みたいになってしまった。私が木更津に来たときにいろいろ調べて分かりましたが、ほとんどの高専が、文部省は各府県一つずつつくりました。その府県に配置された国立学校ですから、授業料が安い。寮もあるわけです。その県下で、非常に安い授業料で理工系の教育を受けられる特別な学校なのです。木更津で見えて感じましたのは、親の職業とかいろいろなものを見ますと、千葉県の九十九里浜とか銚子の辺から、中産下層階級、親の職業としては、自動車の運転手とか、漁師さんとか、そういう人の子どもがずいぶん多いのです。理科系の勉強が安い授業料でできるというのが高専なのです。私立の理工系はべらぼうに高い。県下の中産階級以下の知的エリートを集めて教育をして、卒業になると、財界のほうも、大学卒業生に負けないくらいだという形で、千葉県以外にバースと全部散っていくわけです。私はよくいうのですが、千葉県で水を吸い上げて、全国にばら撒いている。高専というのはそういう役割をしています。しかも、彼らの中学時代の知能レベルからいいますと、少なくとも一般の私立学校へ入っていく人よりは少し高いレベルの人がたくさん来ています。そういう意味で、非常に社会的な大きな意味もあるのではないかと思っております。

あと、ここで非常に良い教育をやっているけば、日本の教育界で非常に面白いことになっていくだろう。だから中教審でも、高専は工業だけでなく、例えば音楽の教育とか、早期教育の効果をあ

げるような分野でどんどんやって、極端な場合には、旧制高等学校みたいにしたらどうかとありました。本当のリベラルな学校にしたかどうかというのもありました。一五歳から二〇歳という、この五年間を一緒にとらえてみますと、学校のキャンパスの中でのお互いの交流で、大人も子どもも双方影響するところが非常に大きいということ、この点は確かに面白いものだと思います。

伊藤 今、高専というと、みんなロボコン。

西田 ええ、ロボコンだけが有名になりましたね。

■ JICA 技術援助事業によるフィリピン派遣

西田 次は、JICA の関係でフィリピンにきました。これは、高専をやめて、何をするとなしにありましたら、JICA の国際協力の仕事で工業関係のものを世話しているのが慶伊〔富長〕君という沼津高専の校長をやった男で、東京工業大学からいった男です。彼が、「西田がやめているから、フィリピンに次にこちらから派遣する人には西田を引っ張り出したらどうか」という形で、私に声がかかったわけです。

主な派遣の任務は、福田〔起夫〕総理がいつて、工業教育刷新のプロジェクトをやりましたと約束をした。フィリピン工科大学というのがあるのですが、この工科大学というのは TUP (Technical University of Philippines) ですが、いつてみたら、昔の職業学校がバンバンと二段階で大学になったようなお粗末なところなんです。いかにも内容がお粗末だから、そのなかに総合研究訓練センター IRTC (Integrated Research and Training Center) というのですが、何も研究なんかしておりはしないのですが、こういうものをつくって、五カ年間、そこで向こうの先生の卵をエリート

教育しよう。それへ日本も援助しようということになったのです。

建物に一〇億円、研究機材で六億、派遣が五〇名くらい、向こうから日本へ呼んで訓練する。これをずっと五カ年間続けてきた最後の年に、締めくくりで向こうへ行って、いろいろなアドバイザーの先生方の総括と、今までの五年間の総括評価をやるということとで、チーフアドバイザーとして行ってくれということになったわけです。JICAから任命されていた形です。

これで唯一個人的にありがたかったことは、外務省の派遣職員というのは、向こうへ出かけていつている間に日本内地で昔もらっていたような俸給をくれるのですね。現地は現地でくれるのです。二重に月給をもらうのです。

小池 在外加俸というものです。

西田 日本内地は、娘に頼んで、もらった月給をためておいてもらって、それだけ残ったわけです。初めてお金に少し余裕ができました。というのは、自分の退職金をはたいて家を買って、その家のローンの借金を木更津高専で六年間働いた金でやっと戻しました。まだ住宅公団の安いのがなくて、住友銀行から借りました。だから、家のために高専の月給を全部はたいた。初めてここで金が少し残った。伊藤 これは、前の木更津高専から一年くらい空いているわけですね。

西田 六十一年三月十六日でしょう。高専をやめた翌年の三月です。

伊藤 高専をやめてから、ここにいくまでに一年くらいありますよね。

西田 そうですね、このときには……。

伊藤 ぶらぶらされていたのですか。

西田 八王子の私の家の近くに大学セミナーハウスというのがありまして、あそこの理事をやってくれというので手伝いにいったことがありました。しかし、あまりうまくいかなくて、半年くらいでや

めました。それからぶらぶらしていました。

「この国の一般的な社会事情」と、フィリピンのことで私が感じた感想を申しあげますと、人口が日本の半分で、国土は八割、GNPは二〇分の一。平均気温は二七度、五月から十月が雨季だ。いてみて、教育制度は、六・四。それから、上のほうの四年から五年という大学があるのですが、私がここで気がついて大変だと思ったのは、小学校六年生のときには、同年齢層人口の六七％が一応入っています。義務教育が一〇〇％にいていないわけです。それが中学四年になると四割になる。わりあい大学のほうまでたくさんいくのですね。三六％。私は途中で文部大臣に呼ばれている話をしたときに、フィリピンの最大の問題は、大学ではなくて、義務教育が六七％で、国民のなかに学校へいかなない人が道端で物を売っている。初等教育の充実ということをやらなかつたらフィリピンの教育は軌道に乗りませんといったのですが、この点が実に情けないところです。これはやはり全体の貧困ですね。

伊藤 三三％。

西田 中学までは義務だといっているのですけれども、ほとんどいなくなってしまう。今のTUPは大学だといっているけれども、職業学校が大学に昇格しただけだ。政治情勢がひどいところでして、私がまいりました昭和六十一年の三月、こちらを出発すると外務省からいわれて用意していたら、マルコスのクーデターが起きたわけです。危ないからといって、それから一〇日間延ばしました。それから一年七ヵ月おりましたあいだに、クーデターが五回もありました。フィリピンの人というのは楽天的ですね。クーデターが起きて、町の中で反乱軍と政府軍が鉄砲の打ち合いをして、血を流して倒れている人がいると、みんな見物に来るのです。なんとも陽気なものです。治安が非常に問題で、そういう情勢ですから、いった当初に、日曜日に女房と一緒にマニラの町の盛り場を見物に歩こうと出

ていったら、大使館から叱られました。日本人が休みの日に外へいったら、道端からワット来て囲まれたら、中で全部むしりとられてしまうから、よせというわけです。休みの日に出てはいかん。全部、自家用の自動車を買って、運転手も自家用の運転手を丸抱えて、どこへいくにも自動車で行って、デパートから出てくるまで運転手をそこに待たせておく。そういう、実に贅沢な生活ですね。

伊藤 情けない生活……(笑)。

西田 情けない、もう軟禁状態みたいなものです。そういうところで一年七ヶ月おりました。そこで、現地で新聞を見ていて覚えた単語を書いてみました。

伊藤 これは英単語と書いてありますが。

西田 英語の単語を覚えたんです。

伊藤 これは英語ですか。

西田 ええ。Sampaguitaというのは、貧乏な子どもが、道端で自動車をとったらワットと集まってきて、Sampaguitaという首にかける花輪を売りに行くわけです。これがみんな小学校の四、五年くらいの子どもが、交通信号をとったら動けないくらいに取り囲んでます。あと覚えた英語というのが、garbage、ごもく。

伊藤 ごもくというのは何ですか。

西田 道端に物が山のように捨ててあるわけですね、ごもくが。

伊藤 ごもくというのは日本語で何ですか。

西田 ごもくといわないですか。ごもくというのは字があるのですかね。

小池 五目御飯とか、そういうのですか。

西田 ごもく(芥)というのは関西語ですか。自分の子どものときから、ごもく箱といいましたからね。関西の言葉ですか。

伊藤 そうかもしれませんね。広島は使わない？

小池 使いませんね。僕も関西生まれなのですけれどもね。

西田 今でいう、生ごみですね。ごもく箱というの。字引を見たら、漢字があるはずですよ。

小池 ごもくというのはごみのことですか。

西田 ごみです。あとは、graftというのが汚職、hostageは人質。三井物産の若王子(信行)さんも人質になりましたね。それから、身代金がransom、abductionが誘拐、insurgencyが反乱、上官抵抗、待ち伏せ、粛清、こういう誠に恐れ入ったような言葉を新聞から覚えたわけです。町の真ん中でそういうことが平気でやられている。ちょうど、マルコスが逃げたので、アキノ夫人が大統領になりましたね。アキノさんは空港で暗殺されたのですからね。そういうところでした。

そういうところで私にできた仕事というのは、一番最初にいつてみて、五年もやっているのですが、日本から、次から次からいろんな大学とか高専から人が来るのですが、日本の専門家がフィリピンの工業技術というのはどういう状況で仕事をしているのかという現場を知らないわけです。私は、マニラのそういうところを組織的に見学して歩くことをいたしました。

伊藤 そういうところというのは、どういうところですか。

西田 町工場です。まずめばしいところがないところですから……。

伊藤 大きな工場はあまりないわけですね。

西田 高専の、このTUPの卒業生がいつているようなところを教えてもらって、いきました。

伊藤 町工場みたいなものですか。

西田 ええ。機械・電気・土木の三分野に、過去五年間、日本から四億何千万の物を送ったわけです。その九〇〇点のリストが、一体どこに保管されて、どういう目的で使われているのか、それをはつきりさせようと思って、全部その一覧表をつくらうとして、私一人でやりだしたわけです。パソコンを据えて、やってみたら、二割く

らいどこへいったのか分からない。

伊藤 物がですか。

西田 そうです。物が無いから、結局、それはお金のうちに流れちゃったのではないかと。よくいわれますね、政治家の懐へ入ってしまうというのは。それを一覧表にして、現物にレッテルを貼って、確かにこれは機械のほう、電気のほうと、専門分野に使われるものと、そうでないものと仕分けをしました。それでないと、まだ予算が続いていまして、次を買うものに無駄がないように、そういうためのリスト作成をやった。最終的に二割ほど行方不明になったということで、さすがに心配して日本から会計検査院が調べに来たりしました。それから、TUPの学長や学部長と定期的に会って、我々が専門家で見ている範囲でのいろいろな問題点、工業教育のことで、向こうのカリキュラムの改善などにいろいろな意見をいうというのですけれども、これはなかなかいいことを聞きません。教授会に諮ってどうのこうのといっ……。

その次に、今の訓練センターのプロジェクトが、これを大学のなかにつくったというのですけれども、大学の学部と関係なしに特別な訓練センターですが、ここでやっていることが大学教育にどう結びつくのかというのを何も制度上決めていなかったのです。その辺の根本的な改革をしなかったら、大学の改革にならないかといっ……、これをやろうとしましたが、なかなかできませんでした。せいぜいそれらの若い人が日本に留学して帰ってきて、まあ、エリートにはなっていましたけれども、だから工学部の教育がどう変わったというところまではいかないわけです。

伊藤 これは大学にくっついているんですか。

西田 訓練センターは大学の付属機関みたいなものなのですからけれども、大学のカリキュラムとは何も関係ないわけです。

伊藤 入ってくるのも、大学生ではなくて、全然別に。

西田 その大学のなかの若手の教員ですね。今後の教員の候補者になるような人を、その訓練センターの研修生として、日本から来た先生がはりついて研修センターで指導しているわけです。この連中は、一般的に見て、素質は非常によかったわけですけれども、ただ、この人たちが一所懸命勉強しても、大学の授業をやるのかといったら、そうではないのですね。大学の学生は研修センターへ授業に来ないわけです。だから、その実験機材というの、棚の中に入れて鍵がかかっているだけで、一向に使われていないわけです。これはあとで申しあげますが、実験機材を送ったら、それで喜んで実験をやるだろうと思うのが大間違いで、全然そういうことがないのです。

次は私のやったことのなかで一番大きな形で実施できたことです。工業教育を改善するために、日本の大学で行なわれているエンジニアの教育では、その最後にテーマ別の卒業研究がありますね。これをやらせようとして、大学の学部長と喧嘩するみたいになりましたが、これだけは、本当の水際で、最後に学長が教授会にかけて工学部の必修科目に取り入れようというところまでいきました。そのときに、一体卒業研究というのはどういうものか説明するのが大変なのです。プロジェクト・スタディという、プロジェクトというのはどんなものかというのを説明するときに私はいたのですが……。私はここへ来て一年半、このTUPの大学へ朝家から出かけてくる。フィリピンはスクールがあって、その立派な大学だといわれている。まわりが水浸しになって、自動車が入れないのです。それが一年に何回となしにある。僕だったら、卒業研究のテーマに、この大学のまわりの洪水はなぜ起きるのかというのを一つのテーマにする。それを研究しようと思ったら、一番にフィリピンの気象状況で雨量というものがどうなっているか調べる。それから、今度は、土地からいって、地勢がどう斜めになっている。フィリピンの町の下水道が

どれだけ整備されて、どれだけうまく管理されているか、そういうことを全部調べて初めて、なぜ洪水が起きるのか、これを防げないのかということが出来るはずだ。そういうことを一年間かかってやる。そういうものがプロジェクトなんだと思ったら初めて、「面白そうだな」という顔をするわけです。

その次に、自分らでテーマを決めさせたときに学生がいつてきたのは面白かったですね。フィリピンで、暑い最中に稲を買って、あれは二毛作か何毛作かやっているのですよね。それを乾燥して精米しようという前の干しているうちに、雨が降ってしまつて、みんな腐ってしまう。それを、天日で自然乾燥ではなくて、乾燥させる乾燥機をつくりたいというようなことを。それはいいじゃないかと。これは教授会のほうに納得させるのに往生しましたが、その後続いているだろうと私は思うのですけれども、分かりません。

自分がやってきたプロジェクトの総括的な評価というのは、私の感想みたいなものです。我が国とまったく気候風土の異なる国に対して、工業教育の刷新を援助するというプロジェクトを立てたわけですが、この国の産業についての実態を何も知らない。技術需要についての幅広い基礎検討が必要だが、これが実際には、ほとんど予備知識のない専門家によって、あちこちからバラバラにやってきてやっている。日本での自分の経験の範囲内でやっているという形で、この国の技術開発に対して定着するところまでいかなかった。その次に、工業教育には実験実習が基本であるというのはわが国では常識であっても、フィリピンはスペインの支配を四〇〇年間受けたんですね。あとの四、五十年はアメリカがやったのでしょう。だから、スペインの文化というものが根付いてしまった。スペイン人がやってきて、現地の人をあごで使った。技術を卑しんで、ホワイトカラーだと。というのは、フィリピンの新聞を見ていましたら、「弁護士とかエンジニアというホワイトカラー」と書いてあったか

らびつくりしたのです。なぜあれがホワイトカラーなんだ。昔からフィリピンでは、そういう偉い人はみんなワイシャツを着て、あごで人を使って仕事をする。エンジニアというのはホワイトカラーだと思われているのです。その証拠に、土木学科の先生がコンクリートをつくる実習をやらせて、先生が砂と砂利を自分がシャベルで混ぜようとしたら、「先生、そんなものは作業員にやらせてください。先生はそんなことをするものではない」というのですね。自分で肉体的なことは。この先生が怒っちゃって、「ばかいうな。これをまぜて、ここへ水を入れて、これをなめてみる。この味でコンクリートの良し悪しが分かるのだ。エンジニアというのはそういうものだ」と、そういうことを身をもって教えるという形で土木の先生なんかは苦労したといっていました。したがって、実験機材を贈与しても、それを積極的に活用しない。これは結局、ホワイトカラーで、しかも向こうでエンジニアとしてそれだけの地位を持つためには国家試験なんです。国家試験を受けたらなれるのだから、やったら当然結果が決まっているような実験なんかをやってもしょうがないということです。そんなものは暇つぶしだと。そんなことをする暇があったら受験勉強をしたほうがいいと。それで、みんな実験をやらないで、受験勉強だけでエンジニアになろうとするわけです。

伊藤 ペーパーで、ですか。

西田 ええ。国家試験そのものがペーパーテストだけですから。そういう点ではとてもだめだと感じました。

実験実習に関心が乏しいために、二〇%が行方不明になってしまった。そのリストを整理してみると、それぞれの専門家が、「こういうものが欲しい、ああいうものが欲しい」と、みんなが思いつきでやるものですから、一番基礎的なものが系統的に整備されていなかったことがわかります。お金の無駄遣いですね。

卒業研究が一つの成果だったと思いますけれども、研修センター

をTUPの制度上にうまく取り入れて、大学の教授会の中へうまく入り込んでいくことができれば、本当の成果としてはならなかったのではないかと……。

最後に個人的な雑感として、これは私がそのときに感じたのですが、テクノロジというのとはほとんど北半球の寒冷地でできたのですね。だから、炎熱の熱帯というところとはまったく気候風土が違ふ。こういうところでは、太陽熱だとか、集中豪雨だとか、こういう天然資源を活用するようなエンジニアリングをやらないと独自のものは出てこないのではないか。現に、あそこにいつてるときに、日本の工業技術はこんなこと「太陽熱・集中豪雨など特有の自然環境を生かした技術開発」をやっていたのですが、ドイツも手を入れていまして、これは太陽熱の利用のことをやっていました。だから、そのへんの新しいオリジナリティーをつくりだしてやらなければだめだ。北半球のまねをしてもだめだと。

もうひとつ、感想ですが……。この国の貧富の格差はひどいもので、私はマニラの高層マンションにおりまして、部屋が七つか八つあるんです。私のマンションの一日の部屋代が、私が雇っているメイドさんの一カ月の給料。そのメイドさんを三人も雇う。人助けだということです。田舎の人は貧乏なものですから、都会の私どもがメイドで雇うと、口減らしになるわけですね。しかも、向こうにしてみたら大変ないい給料をもらうわけです。私どもの一日の部屋代を一カ月でもらっても御の字なんです。だから、私のところは女中さんが三人もいました。掃除する人と、ご飯を炊く人と、もう一人は何だったかな。それが、姉妹やおばさんを連れてきましたね。そのマンションは二十何階建てですが、その部屋一戸ずつ持ち主が違ふのです。コンドミニアムという。建てたときには一緒につくったのでしょうか、持ち主が違ふ。持ち主はでっぴりしたフィリピンのおばちゃんです、これは物凄い金持ちです。私のおるころ

のフィリピンは、普通の銀行にお金を預けておきますと、普通預金で一カ月の利子が一四%。いま定期預金でもないですよ。今は○%。何%。

伊藤 定期預金だって○・○ですからねえ。

西田 それが一四%ですからね。そこで金利がどんどん浮いてくる。それを、敷金を取り、家賃を取って、その家主のおばさんというのはブクブクと膨れているわけですね。そういう一方の金持ちがおつて、田舎のメイドさんは貧乏だと。土地改革をやって、農業のあれから変えなければならぬというのですけれども、アキノさんなんかがもともと地主の出身ですから、絶対に変わらないのです。だから、フィリピンで、南のミランダオで共産主義、それからイスラムの革命軍が消えないというのは、この貧困がある限りだめですね。町の銀行、デパート、店舗に、ライフルを持った警備員が全部立っているのですね。そうでないと危ない。これをまず解決しなければだめですな。

所澤 フィリピンのことでちょっと伺いたいのですけれども。専門家といわれる人たちがだいたい来ているわけですね。先生も会われたと思うのですが、日本から派遣されている専門家といわれている人たちは、フィリピンの場合はどういふ方が入っているのですか。

西田 JICAが今のこちらにおる高専の先生なんかと相談して選ぶのでしょうか。五、六人来ていましたが、大学は、日本大学の船橋のほうにあります工学からの先生が土木関係と機械関係で来ていました。高専は、宮城高専、名古屋のほうにある豊田高専、幾つかの高専から引き抜かれた若手の人が来ていました。そういう若手が来ているのはいいのですけれども、沼津高専なんかは、定年間際の一歩ヨボヨボのおじいさんがマニラ見物(笑)。これは、私らが選んだものではありません。JICAがそういう人と相談して選んで、「いってくるか」「やりましょう」といって、来たわけでしょう。

フィリピンにいれば少しお金が貯まるし……。その人たちが怠けておったとは思いませんが、人材派遣ということについては決してうまくいっていませんでした。

伊藤 やはり、相手方の状況というものに合うプロジェクトをつくらないことには無駄ですね。

西田 前もって現地調査をして、五カ年間のあいだ計画的にプロジェクトを全体のことをコントロールする専門家も入ってなければ、JICAの本部がただ金だけを持ってやっていただけではダメですね。南半球のあたらしいエンジニアをおこすというのは大変野心的な分野ですね。

伊藤 タイの工科大学とか、かなりやっているとところもあるわけですよ。

西田 やはり、タイに比べれば、フィリピンの政治情勢とか、そういうものの安定度がないですね。タイでもいろいろゴタゴタはありましたが、あそこはやはり王様で治まっているのですね。王様が、「うん」といえば、みんな黙っている。人柄も非常に違いますね。

あとフィリピンのときには、ありがたいことに、南のほうのレイテ島とか、戦跡を女房と一緒に見てまわりました。

伊藤 あれは安全なのですか。

西田 それは、お金さえ払って、自動車を雇って走り回ればだいじょうぶです。案内人もおりますしね。

伊藤 案内人が危なかったりしたら大変ですね。

西田 レイテ島にいて、マッカーサーがあそこに上陸したでしょう。レイテ島の北のほうで日本軍が非常に防戦して、レイテ島の正面のところを守っていたのは京都の十六師団。これは全滅したのですね。北のほうの山でアメリカも苦戦した、あそここの陣地防衛をやったのは満州からの近衛の何師団でした。いや、この戦跡はなんとも哀れなものでした。

伊藤 まだ、いってみて、戦跡だと分かるわけですね。

西田 案内人が詳しくいろいろ説明してくれますし、あちこちに慰霊碑がありました。日本からいった人がつくったのでしよう。

■ ユネスコ・アジア地域教育計画専門会議に出席

西田 ユネスコ・アジア地域教育計画専門会議に派遣（昭和六十二年九月十二日～二十日）されました。これはフィリピンへいっているときに飛び入りでやりました。ユネスコ本部から、日本の西田というのがおるだろう。あれが教育計画をやったはずだから、アジアの専門家会議に日本から派遣してくれと指名で来たのです。金も向こうから来ました。フィリピンから飛行機でバンコクへ飛びまして、ニューデリーへいって、天山山脈を越えて、タシケントへ入って、それからカザフ共和国までいったのです。

伊藤 これは乗り換えたわけではないでしょう。

西田 乗り換えます。

伊藤 一つ一つ乗り換えですか。

西田 マニラで飛行機に乗りますときに、ニューデリーまでいいのですけれども、それからソ連に入っていく飛行機は、アエロフロートというロシアの飛行機ですね。この会社になんば交渉しても、乗れるかどうか、現地までいってみなさいという（笑）。予約も何もなしです。ニューデリーでホテルに泊まったら、前の晩に電話がかかってきて、「あしたの何時に出ますから」と。なんとも心細い旅でした。このときに初めて三蔵法師が超えたところを飛行機で飛びました。

伊藤 あの上を飛ぶわけですね。

西田 ええ。生まれて初めてこういうところへいかせてもらいまし

■東京女学館短期大学学長に就任

西田 その次に、今度は短大のことです。

伊藤 八八年ということは、昭和六十三年。

西田 このときかな、さっきのセミナーハウスの世話をしたのは、このときかもしれません。まともなことはやっていません。短大にいつてくれというのは、あのときの理事長が有光〔次郎〕さんだったのです。昔の先輩から、「東京女学館が学校の改革をしなければならぬので、有光さんが理事長で新しい専任学長を探しているから、君、行かないか」といわれて、そして行くことになった。そのときに、「あれはお嬢さん学校でのんびりやっていればいいので、何もすることはないよ」といって、うっかり行ってみたら……。

伊藤 全然違うでしょう、これ。お嬢様学校ではないんじゃないですか。

西田 お嬢さん学校ですよ、もともとの発祥は……。

伊藤 もともとはでしょう（笑）。

西田 東京女学館は、私がいった年が女学館創設百年目。一八八八年創設です。その歴史を見ますと、恐ろしいことに、伊藤博文、山県有朋、何とかという、錚錚たる人と皇族さんが一緒になって……。

伊藤 渋沢栄一とかね。

西田 ええ。そして、鹿鳴館をつくって条約改正のために外国人と奥さんと一緒にダンスパーティーをやったりしてみたら、日本の女性が外国人の女性に比べて物の考え方が狭くて、とてもお話にならない。このご婦人を再教育しなければ、日本は文明開化に入れない。これは本当に、伊藤さんなんかはしみじみ感じたのでしょいうね。

伊藤 まあ、そうでしょうね。

西田 この人の奥さんは芸者ですからね。芸は達者だし。

た。アジアの会議だというのに、ソ連はあつかましいですね、自分もアジアだというのですね。そろそろ出てきて（参加国：ソ連・中国・モンゴル・インド・パキスタン・スリランカ・タイ・ベトナム・フィリピン・日本）、教育専門家会議なんて、たいしたことないので、みんなそれぞれ自分の手前味噌の話をするので。中国は、「九カ年の義務教育を徹底するのに民間のいろいろな活動を活用している」なんていいましたが、ソ連がすぐ、「民間を介入させると国の政策が乱れて効率が悪くなる」なんていうのですから、そこで私が、「俺のほうはそうではない。いま日本では昔からの国鉄を全部分解して民間にかえて、初めていま活性化した。ソ連のいうのは正しくない」といったのです。フィリピンは、「私立大学がふえて、就職難で困っている。大学生が余って、工業界の需要にうまくマッチしていない」という。それは工業界がだめなのですね。私はそのときに、「日本の大学のいいところは、労働省の職業安定法で、大学が正式に就職斡旋機関。大学がそれを行っているものだから、卒業生が売れないと、先生がなんぼカリキュラムを威張っていても、おまえのところの学生は出来が悪いと言われると、大学が変える。カリキュラムの改善も、専門分野別のバランスも、大学が自然に調整している。これが日本の制度の非常にいいところだ」と。もう一つは、就職難のおかげで、昭和二十七年の一番就職難のときに平生大学生がいかな分野に大学生がいて、そこで新しい産業が開発された。就職難というのは決して心配することはない」といいました。インドのおっさんには、「日本で義務教育を徹底したことの最大の功績は、明治から百年間で士農工商の階級がなくなった」と。インドのカーストはにっちもさっちもいかない。まあ、そういう宣伝をしていました。

伊藤 それぞれ、みんな手前味噌（笑）。

伊藤 いや、芸者は教養もあったのですから（笑）。

西田 芸者としての教養はあります。しかし、天下国家を論ずる話になると全然だめですから、それで結局、洪沢栄一さんに頼んだ。「おまえが中心になってやってくれ」とやらされて、洪沢さんが苦勞してやった。そのお孫さん〔洪沢雅英氏〕がいま理事長をやっています。

伊藤 そうですね。

西田 そういう形で女子教育機関として日本人が創設した最初の女学校になった。歴史を読みますと恐ろしいですね。最初にできたのは、今の虎ノ門の文部省のあるところですよ。あそこにできたのですね。そして、本当の良家の子女が学校へ人力車に乗って通ってきた。お嬢さんの授業がすむまで、あの虎ノ門の角で人力車がみんな待っていたという。

伊藤 ちょうど今の文部省の裏にある会計検査院のあの辺にあったみたいですね。

西田 そうですね。そういう恐ろしいところだということを、いつてみて初めて知りました。渋谷に本拠地があって、小・中・高があるのですけれども、狭いものだから短大が町田へ何年か前にかわった。校地は三万二〇〇〇平米、校舎は四〇〇〇平米、二五〇人の定員で、専任教員がたった一四人しかいない。もう一つ驚いたのは、そんなはずではなかったのですが、それから一〇年ほど前に、文部省が学校運営の視察をして、「おまえのところの学校は改善しなければいかん。短大の文科という学科は、少なくともそのなかのコースを分けて、学科の名称も、カリキュラムももう一度再検討しなければ、何をやっているか得体が分からん」と改善を命令されていて、そのまま一四年間、何もしていなかった。

一同 ハッハッハッハッハッ（笑）。

西田 文部省の井内〔慶次郎〕局長からの命令が来ているのです。

僕は、ボールを投げた文部省からボールを拾いにいったのですね（笑）。その改革を、やっていないというのです。したがって、その改組の出発点は、いった年のすぐ四月。有光さんから、そういうことが文部省から来ているけれども、一挙に四年制にするのは無理だから、短大としての内容充実をやってくれといわれたわけです。四月十三日に第一回教授会をやって、先生方からみんな意見を出させる。そうしたら、女学館の存在理由というのは、歴史を重んじなければいかん……、先生方というのは気楽なもので、四年制になったら自分は偉くなると思って、四年制創設という。私はいったんです。「四年制になったら、あなた方で審査に通る人が何人いらっしゃるんですか」と。みんな愕然というような顔をしました。もう一遍、全部審査されるのです。だから、そういうことは考えないで、どうやったらいいかを考えてくれ。私が学長になったかぎり、この改革のためにやめる人を一人もつくらないから、それだけは安心してくれといつてね。それで、短大のコースを新しい学科に変えるとか、図書館の充実とか、事務機構の効率化などがあったわけです。

四月二十六日に私が一番にやったことは、そういう学校の将来性を考えるのに、宙で議論してもだめだから、二年生の卒業する前の学生に、将来の希望として君たちはどうだといったら、九〇%の学生が就職希望です。ところが、女学館同窓会のお偉方のおばちゃんが出てきますと、「うちの卒業生が職業婦人なんかになるのはとんでもない」と。みんな良家の子女のお嬢さんだ。家庭人になるのが大切で、それで文科でよかったわけです。三分の二の学生が、秘書やタイプや実技を身に着けたいといった、それはそうでしょう。シェークスピアをやって、銀行へいっても何も役に立たない。だから二年生は正直ですよ。分かったと。

その次に今度は、五月二十五日から七月まで、一週間に二回ずつぶっ続けて教授会をやりました。女学館の教育理念というのを今に

引き直したらどうなるか。つまり、自国と他国の文化の正しい理解、国際交流の第一線で活躍できる語学力の体得、それから、情報化社会における女性の天性を生かした専門職の育成。これで女学館の伝統を守る。四年制創設の狙いと特徴というのは、学生の質の向上を期待して、高学歴志向の要請に応ずる。特色ある短大の具体的構想としては、コース別に専門コースにしてみる。しかし、特色ある短大というものをやってみても、一般の人は四年制じゃないとだめだろうと先生方はしきりにいうわけです。

その次にやりましたのが、六月に、秋までかかって、過去の卒業生に対してアンケート調査をしたわけです。現場にあって、過去の卒業生がどういう職場に就いたか、短大の教育をどう思っているか。五八%の回収で、五八〇人から回答が来ました。実務経験は、受付・文書整理・経理などの一般事務ばかりで、専門職をやっているのは一割くらい。それはそうでしょう、文科で。職業に満足感を持てたというのは、特別な研修や訓練を受けた二割程度の人だけだ。三分の二の者が、実務能力の向上をはかってくれ、カリキュラムの専門化などをやってくれと、短大の改革を要望している。しかし、教養重視の短大がいいというのが五%、四年制創設は四%。二年制の意見とこれと両方を母体にして、私は理事会で、積極的な改革をしますと。それをいわんと、私がいっただけではだめですから……。

短大改革についての私見を書きました。新学制に切り替えのときに、私は大学局におりましたが、正規の大学の基準に達しない旧制の専門学校がたくさんあったわけです。その学校を暫定的に救済するために、学校教育法の附則に、「当分の間、短大と称することを得」というようなことを書いた。二年制短大は、そういうことでつくった学校なのです。いずれ整理するのだ、すぐ壊すところもあるのだ。これは学校制度で致命的な欠陥があるというのは、明治以来、二年間という修業年限の学校はないのです。私はよくいうので

すが、これは一泊旅行で旅行にいくのと同じです。向こうの宿屋へついたときに、すぐあくる日の出発の用意をしなければならぬ。全然落ち着かない。二年という修業年限が学問修練に不十分だとも、翌年から卒業のことで走り回る。学園社会のなかで仲間関係をつくることもだめだ。これではだめだということで私も反対したので。ところが、あの当時の政治家が私学関係の人と一緒に

なって、短期大学恒久化ということをやりました。そのときに、文部省は対案として、短大を恒久化するかわりに高等専門学校をつくってくれと、これを専科大学にしようとしたわけです。専科大学がつぶれて高専になって、短大を恒久化したわけです。文部省として、私も大学局は切歯扼腕して悔しがった。そういう恨みがある。そこへ来て、短大を……。

一同 アハハハハ（笑）。

西田 近年、女性の社会進出が増大して、敏感な女性は進学希望について非常に強い志向を持っている。短大に来る人はほとんど減って、四年制にいつている。しかも、四年制で家政とか文科ではなくて、社会科学・自然科学系にどんどん入っているのです。二年制の枠を固定したまま実技訓練を重視したら、ご承知の専修学校があるわけでしょう。これと何も変わらないのです。専修学校に負けてしまふ。だからどうしても、現時点で抜本的改革を見送り、一〇年後の大学進学者が一番少なくなったときに、四年制大学が縮小しないかぎり短大の入学者は半減するだろう。私は、改革には数年を要するから、いま直ちに三年短大か四年制にかわるべきだといったわけです。大体その三年制短大というのは、短大はもともと二年または三年という制度になっているのです。厚生省が看護婦の養成が三年必要だということで、文部省が三年を認めた。だから、二年でも三年でも短大をつくれるわけです。それをどこもやっていないから、女学館を三年制短大にしよう。私はその当時文部省において、四年制

自体が空洞化している。三年制短大で、中身で四年制に負けないものをつくるから三大をやるうというのだけど、これは誰も賛成してくれない。「三年制にするくらいなら四年制にしましょう」と。果たして四年制の進学者がぐっと減ってくる時期があった。それで短大が減ってきた。それが今から二、三年前に起こったわけです。その後の短大が、改革したけれども、お客さんが減ってしまっていて、いまゾロゾロやられているでしょう。いまそれが実現しているわけです。

それは私の考えですが、いった年から先ほどのような改革ののろしを上げたのですが、七月十八日に、審議結果を理事会に、三年制短大の試案を出し、「教員が四年制をいっていますけどどうでしょううか」といったら、「まあ、文部省と折衝してしっかりやってくれ」と。九月には、新しい学科の構想を女学館の高校・中学に説明にいったのです。先生方はキョトンとしていましたね。

伊藤 学科をつくる。

西田 ええ、学科の中身を。十一月に理事会に第一回の裁定伺。「これでひとつ判断ください」と、二年制、三年制の短大併設案、四年制の実現可能性、三年制短大への高校の態度などを説明いたしました。そこへ出しましたが、理事会というのは卒業生の先輩とかいろんな人がおられますが、そういう学科のあり方などの学問的な話をしてもらえないし、理事会裁定を幾らやっても結論が出ないわけです。十二月ころになってまだ、教養課程を軽視してはいかん、実務能力育成は反対だとか、理事長は相変わらず、「現在の短大の活性化をやってくれ。三年制、四年制を考えるのは不適当だ」と。翌年になりました、一月、五月と理事会をやったのですが、このときに、理事長が痴呆症になられまして、前の理事会でやったことをほとんど覚えていなくて、「俺が四年制にはいかんといったのをおまえはいうことを聞かないのか」と、怒鳴りつけられま

した。ほかの人も皆、哑然としました。文部省で剃刀だといわれた鋭い人なのですよね。それで、学士院か何かの会長をしていたのです。そこへ天皇陛下がおいでになるときに、何か変なことをしたらいいですね。それで慌てて文部省もやめてもらったのですからね。気の毒でした。人間の痴呆というのは自分に分からないから。しかし、この有光さんの病気で、理事会をなんぼやっても結論が出ない。とうとう私は痺れを切らして、次の短大内部の実質改革をどんどんやろうと。翌年の九月から、決定を待たずに、短大内部に近い将来に四年制移行の基礎づくりとして短大カリキュラムの改革をやるうということになりました。

それと平行して、東京女学館の財政状況。これは私は得意なのですが、私は、前に申しあげたように、出版屋で経理をやった。女学館へいっても、先生なんか分からないし、経理部長以外に経理がよく分かるやつがないでしょう。私は、それまでの女学館短大に來ていた決算報告を何年間分ひっくり返して、一体女学館全体で経理がどうなっているか。短大そのものはどれくらい儲けているのか、損しているのか。どのくらいの余裕金があるのか。全部調べ上げました。女学館は毎年の事業収入に対して、教員の給料を払ってもこれだけ余力が出ている。それが、過去何年間、これだけ貯まっているはずだと。計算したら、短大が使っている金が十何億出てくる。それがあから、その次の大学の改革をやりたいという提案に、ぐうの音も出ないわけですよ。

伊藤 本当にあったのですか。

西田 あったんです。

伊藤 制度上、短大の定員からいって置くべき先生を置かないで、たった一四人。その給料をみんな浮かしておったわけです。それを無駄遣いしていなかった点はいいです（笑）。私はそれを改革のときに全部使ったのです。八四年から九一年までの財政状況を分析し

て、短大の財政規模は全体の二割強である。これは、長年にわたって教員数を抑制したために、その収入超過の累計が可処分資産、女学館全体で一〇〇億円くらい金が余っていた。女学館は校舎の改造をしなければいけないものですから、貯めておったのですね。そのうちの一八％は短大のものだという計算を出した。財源は、一八億は使える。これによって、九一年度の予算のときから、短大の改革に教員を六名ふやす。語学教員の強化をやる、設備を置く、こういうことの予算をつけてもらった。改革の結論は出ていないのですけれども、さらに九二年から九三年までかけて、総工費一〇億円かけて、三〇〇〇平米の総合学習センターを。女学館は町田へ移って新校舎をつくったけれども、図書館をつくっていないのですね。図書室というところにぼそぼそと本を置いてあるだけで、文部省から指摘されていたのですが、そこへ一八万冊の全部コンピュータ処理のできる図書館を入れて、オーディオ・ビジュアル・ライブライリーと、学生ホールと、新しい情報処理の学科をつくるものですから、そのコンピュータをずっと並べた部屋とか、考古学の収蔵室。

伊藤 なぜ考古学の収蔵庫なのですか。

西田 不思議なことに、うちに考古学だけは物凄く熱心な先生がいて、箱根の山からあの辺まで、ずいぶん物凄い収集品を持っているのです。私は考古学の特色を出させようと、そのおじさんの立派な収蔵室をつくりました。

伊藤 これをつくったのは、町田のほうにつくったのですか。

西田 町田です。町田は三万平米あった。(パンフレットを出して)そのときにつくったのが、今の総合学習センターというのはこれです。これが昔の古い校舎。ここへ図書館から学生ホールから全部入っています。

伊藤 ホームページを開いたら、それが出てきたと思います。

西田 そうでしょう。これは私がこのときにつくった総合学習セン

ターです。そして、新しい短大のカリキュラム。これは細かい点は省略します。お金の計算をして、カリキュラムを。凄いですよ、これ。新しい国際文化学科と情報社会学科というのを。これは私がつくった群です。

伊藤 これは、今までの先生のことを全然念頭に置かないで……。

西田 いや、全員全部役があるわけです。

伊藤 よくそんなうまくいきましたね。

西田 それはもう、芸当ですよ(笑)。

一同 アッハッハッハッハッハッ(笑)。

西田 大学局時代に、「ああしたら? こうしたら?」というようなカリキュラムのことなんかをやっていました。それを自分で実行してみるということを初めてやったわけです。これ(パンフレット)が、「新しい短大の紹介」という形で、入ったらこれだけのコースがあります。まず女性として、これだけのことを身に着けなければいけません。この学科でやるべきことはこういうことだと、こういうパンフレットをつくりました。このパンフレットの印刷文もすべて僕がパソコンでつくったのです。

伊藤 (笑)、学長さんの仕事ですか。

西田 そして、平成三年から五カ年間で全部完成するという進行一覧表をつくりましてね。

伊藤 四年制にするということも含めてですか。

西田 いえ、四年制になりうるような基礎作りを。そして、これで短大として動き出して、実績が上がったら、それぞれの学科の中身をそのまま増やしていけば四年制になれるという見込みをつくったわけです。

九三年六月に、新しい短大への改組転換のための認可申請を文部省にいった、翌年末に審査合格。九五年四月から新学科を開設。学長に就任したかぎりには、新しい学科ができれば、その完成までは

おらなければいかん。したがって、その年の九月までおったわけですね。

新しいカリキュラムの基本理念としては、これに対応して、学則第一条に今の女学館の歴史を書いたわけです。「近代日本の草創期に、開明的な女性の育成を目指して創設された女学館の建学の理想を継承し、国際的なつながりの緊密化する時代の要請に応えて、女子に対し、日本及び他国の文化を深く理解するとともに、社会的活動に積極的に参加し、貢献するために必要な専門的能力の育成を図ることを目的とする」と、これは筋を全部網羅しているでしょう。実務教育もやりたいということをこういう形でいったわけです。

哲学から、女性学から、皆入っています。全地球的な課題では、南北問題、地球環境論。必修科目は英語と第二外国語。専門学科は、国際文化学科というのがありますね。これは、必修科目を文化人類学から挙げて、諸々のものがあります。他の学科からも専攻を選ぶ。情報社会学科というのは私が考えた独特のやつです。情報化時代というのは流行りがありますが、私が見ていて、総合的な判断から物事をどうまとめたらいいかという全体のシステム設計をし、それを実現していく能力というのは男性よりも女性のほうがあるのではないかと……、私の思い入れですが。赤ん坊が泣いておったら、その顔色と泣き声を見て、「この子はおなかがいっているんだ」という判断が女性のほうができるんですね。いろいろな新しいものを探したりするときでも、男よりも女の人のほうが勘がいいですよ。コンピュータのプログラムを組むという論理的なものではなくて、こういうことを解決するために、どういう情報を集めてきて、どういう処理をすれば答えが出るかと、その全体のイメージを描くことについては女性の天性というのはいいかではないか。しかも、それには腕力は要りませんからね。だから、女性は単に語学の専門家ではなくて、そういう形での情報システムの専門家になるべきではないか

というのが私の夢なのです。それをなんとか説得して情報社会学科というのをつくったのです。その情報社会学科というのは、まず企業・社会の問題を理解するための勉強をしなければいかん。これはずいぶん幅広いですよ。人間行動学とか、情報社会論とか。それから、情報処理の科学的方法としては、いわゆる統計学とか、調査学、会計学。最後に電算機の使い方。これだけを勉強して、二年間でやるだけやってみて、将来これを学科としてもっと大きくしようというつもりがあったのです。

伊藤 短大というのは二年間ですけれども、普通の大学だと、前期二年で教養課程ということになりますが、短大というのはそういうのではないのですか。

西田 短大の基準があって、やはり一般教育的なものが入っています。だから、あんまり専門のことに力を入れている暇がないわけです。しかし、それを専門のほうだけに特化してしまったのが専修学校ですね。だから、ばやばやしていると負けちゃうわけです。だから、少なくとも三年制にしろといっているわけです。

新しい短大における各種規程の整備をしました。ここに諸々書いてあるでしょう。特異なのは、先生のために、学生海外研修指導旅行実施要項です。先生が学生を連れて海外の研修旅行にいけるようにしよう。国際関係でイスラムの先生がいきましたから、アフリカへいきましたよ。英文学の先生なんていうのはロンドンへいったり、パリへいったりしました。

伊藤 それは学生を連れてですか。

西田 学生を連れて。もちろんお金はどこからも出ませんから、希望者だけです。学生が自分の旅費・滞在費を全部。旅行会社とうまく契約して、安いバック旅行で。その次に、教員研修留学制度。先生の留学を、内地留学と海外留学ができるようにした。これも先生方は非常に喜びました。さっきの十何億円の金があるものですから。

やはり、金を握ったというのは強いですよ（笑）。そうでなかったら、「そんなお金がどこにあるか」といわれたら、それきりですからね。やはり出版社で経理をやったというのはありがたい話です。それから、教員研究経費の運用。研究費というものを先生方にどううまくまわしていくかということ。そのかわり、教員服務特例規程で、先生が一週間のうちに三日休むという慣習ができていまして、それをちゃんと規則で認めるようにした。それから、定年退職規程もつくりました。学生会館の運営規程とか、学生賞罰規程なんかもね。

伊藤 交友会館というのは、学校の「校」ですか、それとも「交」ですか。

西田 「交」だと思いました。先ほどの研修センターのなかへつくったのですが、学生ホールです。学生身分取扱規程、賞罰規程ね、ものしいでしょう。

伊藤 法匪ですね（笑）。

西田 文部省（笑）。だけど、ことに臨んでどうするかというのは、教授会で果てしない議論をするからね。学生がタバコをのんだらどうするか。これは国法で禁じているのだけれども、それで学校の懲戒処分をするというのはおかしいので、学校としては、隠れてのんで火事を起こしたりしたら困る。だから、学校が指定した場所以外で隠れてのんだら承知しないぞ。私は、学校の中にちゃんと喫煙室をつくらうとしたんです。未成年でもいい、そこでのめと。そこでのんでいるぶんには文句をいわんようにしようといったら、「先生、それではやっぱりちょっとね」といって。先生というのはわりあい偽善的ですね（笑）。私は、喫煙室をつくって、「隠れてのむな、そんなみっともないことはするな」と。酒も、これは高専のときだったかな。酒を飲んだら処罰するということはしない。だけど、一番危ないのは一気飲みね。他人に酒を強要したといったら処

分する。それはしたのです。自分で飲んでへべれけになったのは、これは学校で処分しない。

伊藤 ハッハッハッ、自分で処分して（笑）。

西田 これも学生課の時代からのいろいろな経験から、みんなここでやりました。最後に新短大の発足を見届けて、九五年九月三十日、学校が発足した半年目に七年半の任期を終了してやめました。

所澤 このくらい仕事をされると、学長の仕事というのはどのくらい忙しいものですか。

西田 学長は、就任をするときの条件として、月給はいただきたいのだけれども、私立学校というのはずるいですね。私どもはやめても、公務員でなかったら年金をいただけるでしょう。年金収入があるのだから、私の木更津高専の校長のときの収入がありますね。それから年金を引いて、残りだけのもので女学館は私を雇うという格好になっていました。だから、女学館というのは助かるわけですね。

伊藤 なかなかうまくやり方ですね。

西田 私は高専当時と同じ収入が保障されるわけです。そのかわり、私は気楽に、八王子から町田まで通うわけですから、月曜と水曜と金曜かな、一週間に三日だけいく。先生方も三日休むのだから、私も三日休む。週に平均三日の出勤です。

伊藤 校長の宿舎に泊まっていて三日しかいないのでは、あと二日はどうするのですか。

西田 いや、校長宿舎ではないです。短大のときは八王子から通ったのです。

伊藤 通っているのですか。

西田 通ったんです。

小池 八王子から町田は近いですから。

伊藤 ああ、そうかそうか。

西田 南武線で、長津田で乗り換えて。それでも片道一時間半かかります。

伊藤 そうですか。

西田 だから、週に三日出かけて、あとは休ませてもらいますから、非常に健康的でいい暮らしをさせてもらいました。そのかわり月給はあまり増えなかったし、やめたときの退職金は一〇〇万円くらいくれたかな。

伊藤 たったそれだけです。

西田 それっぽいです。女学館はずいぶん儲けましたよ。

伊藤 やっぱり、そういうことをするからお金が貯まるんですね（笑）。

西田 歴代の女学館短大、ずいぶん長くあるのですけれども、専任学長は私一人です。いまだかつて専任はいなかった。理事長が兼務したり、めったに来ない。今でもないでしょう、おそらく。学長はどうなっているんですか、いま四年制になりましたね。結局、短大ではお客さんが来ないものだから。

伊藤 四大になりましたよね。

西田 私がつくった情報社会学科はつぶれちゃった。つぶれる直前まで、一番志願者が多かったのですが、洪沢さんはそれをつぶしちゃった。

伊藤 そうなんですか？

小池 それで何にしたのですか。

西田 やはりこの国際文化みたいなことをやっています。それは非常に残念です。この建物だけは残っていますけれどもね。しかし、三年制短大ができなかったのは。これで四年制と競争してやろうと思ったんです。中身で勝負しよう。

伊藤 今のお話では三日ですけれども、一応常任の職ですから、それはここでおわりになるということですか。これが一九九五年です

から、今から八年……。

西田 一九九五年にやめましたから、ちょうど八年です。それから何もしていません。

伊藤 何もしていいことはないのではありませんか……。

西田 政策研究会に出ています（笑）。

■入試制度に関する個人的な研究

伊藤 最後にそれ（入学者選抜方法の妥当性に関する個人的研究の概要）をお願いします。

西田 時間が来ましたけれども、これを締めくくりしておきましょう。

伊藤 僕も非常に関心があります。

西田 ちょっと資料だけ。（書類の束を出して）フィリピンへいつているあいだのフィリピンのチーフアドバイザーというのは、二カ月に一遍、これだけの報告書をJICAへ書くわけです。こういう点を学校に勧告しました。向こうの学長さんにこういう勧告を出しましたと、英文と両方で書きます。これだけ記念にとってあるわけです。

伊藤 ちゃんと読んでくれたのでしょうか。

西田 これのなかに先ほどの卒業研究のことも書いてあるわけですからね。

伊藤 それを読んで、JICAも少しは何か。

西田 JICAは分らないですよ。

伊藤 ハハハハハ。

西田 今度は入試の問題ですね。

伊藤 そのころのJICAの理事長は誰だろうな。

西田 外務省の次官をやったような人でしよう。

伊藤 きっと柳谷〔謙介〕さんだな。今度、柳谷さんからJICAの話聞くことになっているんです。

西田 入試の関係の説明ですが、これ〔何のための入学者選抜か〕は別のコピー資料です。これはリクルートの雑誌に発表した私の文章です。今、この説明のなかに出てまいります。

「入学者選抜方法の妥当性に関する個人的研究の概要」を見ていただきますと、木更津高専時代から始まっているわけです。ここで最初に、大学局のころから気になっておりまして、どういう方法で選ぶのがいいのかということを考えて、木更津高専の過去の卒業生からいろいろ調べて、入ったときのいろいろなデータと、卒業のときの成績がどう関係があるか調べてみたわけです。

伊藤 五教科と五科目というのはどういうことですか。

西田 高専に入るときの入学試験がありまして、中学校から送ってくる五教科というのは、国・社・数・理・英です。五科目というのは、全国高専統一のテストを文部省でつくらせて、同じ問題で試験をやっているわけです。それはやはり国・社・数・理・英の五科目のテストです。

伊藤 科目は同じですか。

西田 ええ、科目は同じ。それだけのものを土台にして選抜しているわけです。そういうものと、実際に入ってから卒業するまでの成績とはどういう関連があるかを調べてみて、私が木更津高専で見つけた結果を国立高専協会、全国に四十なんぼあります国立高専の校長会で私が報告しました。「木更津でこういう結果が出たのですが」といったら、「それは非常に面白いから、各高専合同でやろう」といって、全国二七高専から、一万七〇〇〇人の過去の卒業生について統一的な方法で分析してもらったのです。各高専の数学の先生を木更津に集めまして、私のやった方法を説明して、同じようにやっ

てくださいとやったのです。

その結論が次のとおりでした。五教科・五科目の合計点で卒業成績との相関関係をとると、〇・二から〇・三くらいの相関関係。その次に、中学から内申書で九科目来るわけです。国・社・数・理・英のほかに、音楽・美術・体育・技術。その九科目のすべての点数のなかで、入学後の学業成績ともっとも少ない誤差で予測するうえに重視すべきもの、一番相関関係の高い科目はどれかと、それを回帰分析で調べたわけです。その全国の二七の高専のなかでもっとも多くの学校に共通しているのは、不思議なことですが、一番有力なのが技術家庭（九五％）なのです。当然、数学や理科だと思ったら、そうではないのです。技術家庭が第一番に関係ある。その次に、内申書の社会科の点数（五五％）。その次に美術（四五％）ですよ。それから内申書の理科（四一％）というのがやと出てくる。学力の英語（四一％）なんていうのはこんなところに出てくる。内申の数学（三六％）、学力の理科（三六％）。つまり、国・社・数・理・英のものものしいテストをしているけれども、それが出てくるのは、学力の理科と英語だけです。ほかほとんど全部内申書でしょう。つまり、一体五科目で試験しているのは何をやっているのだということ。すべての教科・科目の点数を用いて作成した重回帰式というので予測をやりますと、相関関係は〇・三から〇・四くらいまで増えていく。これを学科別にやったら、さらに科目の中身がはっきりしているから、もっと〇・四から〇・五まで相関関係が上がる。「全国の高専のをやったらこういう結果が出てきました」と報告しまして、「ほお」といっただけで、じゃあ、すべての高専が技術家庭科を重視するようになったかという、ちっともっていない。

一同 ハハハハハ（笑）。

西田 私はこのときに非常にこのことが印象に残りまして、回帰分析によってひとつやってみたくて思いました。重回帰式の説明とい

うのを簡単に書いておきました。つまり、入学後の学業成績（Y）、それをどれくらいだろうと予測するものをZとして、各教科の点数を用いて次のようにあらわしたときに、Zの値と実際の値とがまったく誤差が少なくなるようにa、b、cという係数を決める。つまりZは、aかける国語、bかける社会、cかける数学……これはずっと内申書の点数です。それからあと、「国テ」というのは、これはみんなテストの点数。その点数にa b cと係数をかけて、どういうa b c dを使ったらZは一番Yに近くなるかという計算をするのが重回帰式です。これは重回帰分析という方法でやった。相関係数というものが、さっきから○・四とかありますが、YとZの間に相関係数が○・五あるといったらかなり高いのですが、これは統計学上、相関係数が○・五というのは、その二乗、○・二五です。二五%程度、ZによってYが説明できるという意味です。相関係数が○・五まで上がったら、その成績の予測が二五%まではそれで説明ができる。ほかの七五%はそれ以外の要素なのです。相関係数が○・七くらいになると四九%でしょう。半分くらい説明できる。相関係数は数学的にそういう意味なのです。

伊藤 まるでそれで説明できるというのは……。

西田 一です。相関係数は○から一まである。

伊藤 一ということのはめったにないことですか。

西田 それは一対一の対応ですからね、完全に説明できる場合。相関係数が○・五だったら、かなりいいのです。入ったときにどんなデータを集めても、中学のデータでしょう。それから五年後、五年間の成績ですもの。未来の本人の努力も、どう気が変わるか分からない。その成績との相関を見る。だから、そんな一〇〇%いくわけがないし、五〇%いくのもありえないだろうし、二五%なら大変なことなのです。私がいろいろ計算してみても、一番いいときがこの相関係数が○・六くらいまでしかいきません。そうすると三六で、

三分の一くらいなのです。残りの三分の二はそれ以外の要素、説明できない要素がある。それでも、この国・社・数・理・英という入学テストだけで何もせずに行っていたら○・三ですからね。○・三というのは、二乗したら九でしょう。九%しかない。一割ないのです。

その次にありますように、木更津高専の入試データの分析というのは、これはごちゃごちゃしていますから省略します。七カ年に入学して卒業した六三四人について、例外的な成績を示すもの。これは、個人が急に奮発したり、特別な成績をあげたりする者がおるのです。怠けたり。

伊藤 逆もあるのでしょうか。

西田 ええ。だから、特別なものは例外だと除外する方法を統計的に決めましてやりますと、重相関係数が○・五になりますから、二五%くらいいく。成績といっても、学科によって意味が違うわけですから、それに分けてやりますと、もっとよくなるということをやりました。

こういうことを教授会に出しまして、理科系の先生や数学の先生がおるところで説明して、文科系の先生は分からないですけれども、これだけの相関があつてよくなるのだと。だから、うちはこういう選抜をしましょうということも、ついに誰も賛成してくれなかった。校長から提案したが、退官までついに実現しなかった。木更津高専ではこれは空振りです。次の女学館のときに、今度は学長の権威で。文科系の先生で、文句をいう力がないですから（笑）。

一同 ワッハッハッハッ（笑）。

西田 もう一つお配りした「何のための入学者選抜か」。これは、ごらんのように、リクルートの『カレッジマネジメント』という大学向けの雑誌があります。私がやっているといったら、そのなかを書いてくれというので。入試改善の目標は何か、テストはどうだ

ということを書きまして、その簡単な解説を書いてありますが、これも省略いたします。

女学館短大の八五年から八九年の入学選抜者の、先ほどのT〔学力テストの成績〕とZ〔予測値〕の分布をやってみましたら、学業成績の高い者は、テストの成績よりもZの高いほうへ集中している。そのあとの、学力テストとZ値による選抜入学者の比較をしますと、面白いのは、こちらだけだった場合と、Z値でとった場合とは、入ってくる人間が三割くらい入れ替わるのです。これを九〇年と九一年の選抜からその方法をやりまして、その連中の成績が出てきたのを比べてみて、私のいうZ値でとったほうが、うんと出来の悪いやつが少なくなるし、平均的には卒業成績のいい者が入ったということの証拠を出しました。これで一応先生方は納得したような顔をしていました。私がやめたとたんに、そんなことをする人は誰もいなくなってしまったから、元の木阿弥に戻ったようです。

次は、各教員の面接評価水準です。推薦入学というのをやっています。推薦入学というのは面接でやるわけですね。そのときに、この推薦入学の水準も難しいもので、推薦をするときにどういうことに着目するかで、私どもは、「社会的成熟の度合い」「学習意欲」「自己表現能力」——自分の意見をいえる、「行動意欲」「時代感覚」、これを評価項目に決めまして、二人の先生に三人ずつチームをつくって面接させたわけです。同じ人を三人が見るわけです。それぞれ独立に評価して、その三人の点を合計するわけです。そうしてやってみましたら、結局、これは先生の評価になっちゃったんですね。面白いことです。各評価項目について五段階評価を与えるのですが、その三人の平均点をとるのですが、三人のうちの一人、たくさんの学生を見ても、どのほかの先生ともいつも違う評価ばかりする人がおるんですね。それから、非常に高い点ばかりつける人、非常にまずい点ばかりつける人。これはやはり、面接の仕方に個人差が

非常に極端にあって。いつもほかの人と反対の評価をする人がいる。これはやはり人物的におかしいというので、チームをつくるときに、教務主事にいって、特別にほかの人と埋め合わせがつくようにしないと、面接された生徒がかわいそうですからね。面接選考というのも、人によって個人差が非常に強いし、非常に個性的な歪みがある。だから、推薦入学というのも難しいなと思いました。

伊藤 これは、当たり外れがあるということですよ。

西田 最後に総括させていただきましたが、今の重回帰分析ということで、いろいろなものを組み合わせ、一番いい組み合わせを出すのが重回帰だということですけれども、この『多変量解析』という重解析の本が出たのはいつかというのは、中教審の四六答申のころです。それ以前に、私どもが学校で数学を習ったときにはこういう数学はなかった。この本が出たのは、私が高専へ入った年なんです。関心があったものですから、自分で一所懸命読みまして、校長室にパソコンを入れてもらってやったのです。私としては非常にやりがいがあったのです。それによる入学者選抜の方法というのは、理論的には最善のものと私は考えて、これまで高専から一五年間やってきたわけですが、次のような限界をいかに克服するか解決されない限り、新しい展開は期待できない。いつの日か、新進の有志の人が何かやってくれんかなというのを一番に……。卒業成績と相關関係を深めるということを最大の目標としてきたが、そもそもその成績の内容をなす授業科目担当教員の出題・成績評価というものにどれだけ客観的合理性があるか。先生がつけている成績というものにどれだけの合理性があるかということがはっきりつかめないのです。私は女学館で若干の入学試験問題を自分で分析したことがある。同じ英語の問題をある先生が出した答えを比べてみると、問題は幾つかあるけれども、ある一番の問題に対する正答と、二番の問題の正答とが内容的に矛盾するような問題が出ていたり、誰もが正解に

なりそんな問題、誰も正解が出てこないような問題と、出した問題が何をはかっているのか分からないような問題が幾つかの先生について出てきました。出題そのものが教育測定学の評価に耐えるよう改善されるまでは、完全な妥当性を保証する方法は完成しないだろう。だから、先生の評価の仕方そのものにある程度の客観的妥当性をつくっていかないと、これと関連を深めるような方法を調べてみても、頼りにしているものが宙に浮いているのですから、ここにひとつの限界があります。

二番目に、今日、重回帰分析のデータは、私はこんな本を読んで、自分でパソコンでプログラムを組んでやったのですが、それで悪戦苦闘したところに比べれば格段に進歩して、今は重回帰分析のそういうものを売っています。やる気になったら誰でもできる。昔は大型のコンピュータで何時間もかかってやったのですが、すぐできる。しかし、依然として多変量解析という手法の思想は一般にはなじみにくい。特に文科系が多数を占める大学の教授団に出したら、それだけでいやがられます。心理的に違和感をもって迎えられ、容易に政策的に受け入れられないという宿命がある。

学業成績の評価についてのひとつの不確定性があることと、こういう手法の数学的な匂いというものが一般の人にとっても飛びつかれない。私が自分でやってきたことは、自分なりに満足しています。これが今後普及するとは思えないということです。かろうじて自分のひとつの成果にしているものですから、女学館をやめる前の年にまとめて論文（「卒業成績の追跡調査による入学者選抜方法の妥当性の検証について」一九九三年五月三十日）に書いたものが残っていますから、一五年間こんなことをやった男がおったという記念に、先生方に。

伊藤 ありがとうございます。これは九三年ですね。

西田 女学館をやめる二年前です。こんなことは先生方にも興味は

ないかもしれませんが、一応、これについてやった最後のペーパーですから、記念にどこかに入れておいてください。

所澤 ちゃんとベシックでプログラムをつくって。

西田 後ろのほうにプログラムが書いてあるでしょう。ベシックでやったのです。だから、誰かそんなことで興味を持たれる人がおいたら参考にと。ということ、入試問題もおわります。最終的な見解というので、自分でそれを考えて、ここでピリオドを打ちました。小池 このベシックは先生がつくられたのですか。

西田 ええ、私が自分で。

伊藤 プログラムを組めるというのは凄い。

西田 私が大学を卒業するまで、多変量解析なんていう数学はなかったし、統計学もなかった。みんな自分で本を買って。理科系の勉強をしていれば、そういうものを読めば分かるのです。ありがたいですね。コンピュータは高専にいった年に初めて、今のパソコンというパーソナル・コンピュータがちょうど出始めたころです。昭和五十四年、校長室に一台買ってもらいまして、そこで、「学校長のおもちゃだ」といわれていた（笑）。それでデータ分析をやっています。いまだに現在までパソコンのお世話になっています。

伊藤 東京女学館のときにこれだけのことをおやりになって、僕がお話を聞いていて、それでは事務局長はやることがないじゃないかと思ったのですけれども。

西田 事務局長は文部省を定年でやめた人に来てもらっています。これは実務で非常にいい経理部長をやってくれました。むしろ、校長室で自分の好きなことばかりやっているから、事務局長は忙しかつたのではないですか。

伊藤 先生をあまり雇わずにやっていたということは、どうやってカリキュラムをこなしていたわけですか。

西田 非常勤の雇いでやっていたのではないですか。

伊藤 ああ、そうですか。それにしても、入学定数がそんなに多くありませんからね。

西田 一〇〇億円貯めておって……。

伊藤 それは全部、中学……。

西田 小・中・高が渋谷にあるでしょう。それが、だんだん校舎が古くなって、その大改造に。私がやめた翌年くらいから工事に着手しました。それに一〇〇億のお金を使ったのでしょね。そのうち十何億はこちらが先に使いましたけれども。

伊藤 よくそれだけお金が残っていたものですね。

西田 経理部長は手堅いおじさんでした。あのころはまだ、銀行利子がかかったんですね。残しておけばどんどん利子がついて。

伊藤 そうですね。今はどこの私立なんかも非常にお金が苦しいですよ。基金があっても利子がない。

西田 生命保険会社の生命が危なくなっているのですから。他人の保険どころではない、自分がどこかの保険には入っていないきや。

伊藤 生命保険会社がどこかの保険に入りますか(笑)。あれは再保険しているのでしょうかね。

■退職後の生活と来し方を振り返る

所澤 先生はこれだけ仕事をされて、改組がおわって半年くらいでおやめになっていますが、これはどういった……。

伊藤 ご自分の意思ですか。

西田 依願退職で、「もうやめます」といって。半年はおらんと、文部省にね。本当は学科が完成するまで二年間いなければいけないのだけど、そんなにおるのはしんどいから。もう七九歳だったから。伊藤 何か自分で趣味があるわけですか。これをやめたら、あれ

をやるという。

西田 そういうあれはないですね。

伊藤 そうすると、日々どういふふうにお暮らしになっているの दौरानと思うのですけれども。

西田 やめてから八年くらいになりますが、一番気をつけているのは、これで外の刺激を失ったら惚けるだろうと。できるだけ惚けないで、女房に迷惑をかけないで……。長生きしようとは思いません。結局、やめた年からすぐNHK学園の大学開放講座というのがあるので、あれにいきまして、六年間、俳句の勉強と、水彩画をやりました。月に二回ずつですから、四回だけですね。それでも、仲間と一緒に俳句の吟行に出かけたり、写生にいったり、そういうことはあるのです。教室でやるだけではない。

伊藤 そうすると、今度は教育を受けるほうにまわったわけですね。

西田 ええ、そこで仲間ができますから、その人たちと仲良くして。昔、学生時代にいじったことのある俳句なんていうのを六〇年ぶりに。面白かったです。前に申しあげた、つくった俳句をみんな集めて、俳句の感動というのにはどれだけ種類があるかと。

伊藤 また分析ですね(笑)。

西田 死ななきや治らないですね。

所澤 今まで私たちはお話を伺ってきたわけですが、いろいろ最初のころから思い出してみると、朝鮮で育ったとか、三高の時代の寮委員、軍隊の体験とか、そのへんのところがかなりいろいろなところで影響しているという感じを受けるのですが。今の時点で、出版社が倒産されるくらいまでの時期に経験されたことで、非常に自分の文部官僚としてやってきた仕事に影響を与えていることというのは、ございますか。

伊藤 相関度の高いものですね(笑)。

小池 一に近い(笑)。

西田 一番関係あるのは出版社で苦勞しているときでしょうね。出版社が破産して、経理関係で後始末をした。それが、役所に入ってから、普通の役所の役人とは違って、経理ということが分かり、財政ということが分かって、そういう立場から、物事の効率とか何だとかというのは役所におると分かりませんわね。

伊藤 そもそも効率という発想がないでしょう。

西田 ないです。そのかわり、私は役所に入ってきた新入生の最初の研修会のときによくやらされましたが、「役所というのは面白いところで、いまずぐ儲からなくても、先で見込みのあるいい仕事ならば幾ら金がかかってもやらせてくれる。これは役所のいいところだ。これは会社ではできない。何もしないで怠けておたって、いつまでたっても月給は出るし、食うに困らん。際限なく怠けられる。極端に怠けるか、極端にいいことをするかという分かれ目は自分が決めるのだ。これが役所の面白いところだ」と。本当に実感としてそう思いました。

伊藤 なんとなく文部省のいかにもお役人らしいお役人との間に違和感を感じませんでしたか。

西田 私は感じませんでした、向こうは感じた……（笑）。
一同 アッハッハッハッハッ（笑）。

西田 やはり、「変なやつが来た」と思われたでしょうね。しかし、役人といってもいろいろありますが、私のように文部省の大学局だけをやったという人はそんなにいないでしょう。村山（松雄）君以外に。天城（勲）さんも、木田（宏）さんも、大学局は局長としてしか知らない。その人たちもみんな、今度は学校の現場を知らないということ。木田さんも、天城さんも、村山さんも。私は高専と短大と、変なところですけども、そこでどこまで料理できるかを実行できたのが非常にありがたかったです。自分の人生としては非常によかったと思います。

伊藤 まあ、木田さん、天城さんは、もともと文部官僚だった人ではありませんし、やはり途中の経歴でいろいろございましたので、純粹培養の文部官僚というわけではない。僕らは、「本当に文部省の役人というのはこういうのだなあ」という人に、まだオーラルしたことがない（笑）。

西田 そんなのがおるのですか。

伊藤 いや、いるんじゃないですか。

西田 文部省の権化みたいな人がおるのですかなあ。私は一番毛色の違うほうでしょうね。しかし、理科系の人間というのは、自分の天性として、ある種の物事を見る見方とか、それに対応する方法というのは一つの一定の型がありますね。

伊藤 でも、理科系の出身の人というのは本当にいいものですか。

西田 文部省のなかにはいいですよ。

伊藤 そうですか。

西田 みんな文学士か法学士です。もう少し役所もそういうところを変えていけばいいのですけれどもね。

伊藤 今度、科学技術庁はどうなるんだろうな。

小池 一緒になりましたからね。文部科学省になりましたから。

西田 科学技術庁とはなかなか溶け合わないでしょうな。

伊藤 あそこは理科系の発想をする人がいるでしょう。

所澤 もう一つ先生のお話を伺っていて非常に印象的だったのは、一つは学生に対する接し方、大学紛争のときの学生との話ですね。

あと、大阪で師範学校が大阪学芸大にかわるときとか、あとのほうで木更津高専での学生に対するあり方ですね。非常に人間観がはっきりと出ていらっしゃるように感じるのですけれども、その天性はどこから出てきたのだろうなという。

西田 それは旧制高等学校時代の学生としての体験です。学生の総代会で一高との紛争のとき、今という自治会のようなときのこと

あり、高等学校のときに記念祭の委員長をやらされたり、最後にはまわりまわって応援団長をやらされたり、学生の自治活動の矢面に立って、そのメンバーになってやった、その自分の経験から来ているのでしょね。だから、そのときの先生というものに対する自分の期待というようなもの。そのときに、日高〔第四郎〕先生とか、大城〔富士男〕先生とか、いい先生に会いましたからね。そういった人のモデルがあるでしょう。木更津高専の前の校長から引継ぎのときに、「この男は物理の先生だけど、これは共産党員だから気をつけなさい」といわれた、その男を学生主事にしたわけです。本人が一番びっくりしました。「辞退する」というから、「校長がやれというのだから、辞退させない」といいました。そうしたら、やってみて、それが一番学生から人気がありました。あれは陸軍の幼年学校の出身でした。純粹の兵隊、バリバリにやった。確かに左の傾向がありましたけれども、やることはきちっとしていますね。そんな人を学生主事になると、学生は信用しますね。その男が何かのときに、「どうして先生は文部省から来たのにリベラルな考え方をされるのか」というから、それはやはり、自分では、旧制高等学校の第三高等学校というのが独特の雰囲気なので、学校のなかに学生を取り締まる規則というのほとんど感じなかった。本当にのんびりした学校で。京都大学の門の前であって、授業中、学校で授業をやっているのに、おかみさんが子どもを連れて学校に入ってきて、教室の前の廊下を子どもを連れて歩き回っている。それを取り締まることを学校もしない。一高は正門からしか出入りさせない。ほかの者を入れないように厳重だったそうですが、三高は気楽なものでした。だから、三高には極端な硬派がいれば、軟派もある。織田作之助だとか、どうにもならんやつがたくさんおったのです。

伊藤 先生は軟派でも硬派でもないわけですか。

西田 どうですかね。応援団なんかをやったから、硬派だと思われる

たかも知れない。剣道部で三年間、剣道部ではマネージャーをやらされましたからね。

伊藤 体育系であることは確かですね。

西田 剣道部に入ったときに、先輩が一年生を京都の祇園に連れていったりして、舞妓さんなんかを見て、生まれて初めて、「世の中にこんなきれいなものがあったのか」と。年配の先輩がお酒を飲んで、舞妓さんの手を握ったり、戯れるから、「汚いことをするな!」といって怒りましてね。かわいらしい時代ですね〔笑〕。

伊藤 これはまた野暮な話〔笑〕。

所澤 最後にお聞きしたいと思うのは、先生は朝鮮で生まれて育ったということ、軍隊体験をされて、そして敗戦を迎えたと。その二つのことがその後どういう形で影響したと考えていらっしゃいますか。

西田 朝鮮で、いわば植民地のころというのは、町全体がリベラルな感じで、いろいろな地方の出身が集まっているわけですね。ですから、地方色というよりも、みんながわりあいリベラルな雰囲気です、そのくせハイカラなことを好んで、あんな田舎ですけれども僕は幼稚園にいて、町の雰囲気は明るかったです。あの当時から、朝鮮人というのは住むところはすべて別でしてね。その意味で、いまだに僕らはやはり、朝鮮の人のいいところも悪いところも知っていますから、ちっとも遠慮もしませんし、あまり尊敬する気にならない。だから、前に申しあげた朝鮮奨学会なんて、私どもはわりあいざっくばらんに突き合い、むしろ彼らから感謝されるくらいになった。だけど、今でも北朝鮮が自分の故郷だとは思いますが、このあいだまで韓国の大統領が来ていましたけれども、やはりあの人のいうことはあまり歯切れがよくないですね。あんなことをいっていてもだめだなあ。

戦争には自然にいったわけですから。海軍にいったという

ことは非常にありがたかったですね。自分なりのいろんな技術系の仕事をやりましたしね。

伊藤 これは選択ではないわけですよ、陸海軍は。実際に軍隊経験のある人とな人で、我々がオーラルをやっていると、非常に違うということは感じます。

西田 そうですか。私らの世代は、親父が日露戦争ですからね。子どものときから、日清、日露戦争の話を親父から懇々と。乃木大将から二百三高地の話とか。戦争というのは我々のなかにしみこんでいるわけです。

伊藤 まあ、生活の一部ですよ。私自身もそうですけれども。

西田 伊藤先生なんかも戦争のご記憶があるわけですか。

伊藤 もちろんあります。私は敗戦のときに中学一年ですから、もう少しで幼年学校の試験を受けようとかいっていたくらいですから。西田 まあ、天城さんや木田さんなんかとはまた違った文部官僚でしょう。

伊藤 そうですね。木田さん、天城さん自体も、僕らが想像していた文部官僚とはちよつと違うような気がするのです。西田先生は、もう一段ちよつと違うなあと（笑）。ただ、天城先生がご推薦なさったわけですから。

小池 似通っているところも（笑）。

西田 個人的には、天城さんは頭のいい人だし、アイデアのある人だけど、率直にいったあまり実行力のない人ですね。自分で責任を持って新しいことをやるという人ではない。その点は、木田さんのほうが狐を馬に乗せたようなところがありますね。突っ走るところがある。

伊藤 だけど、天城さんは面白かったですね。

小池 僕のイメージで文部官僚というと、井内（慶次郎）さんとか、大崎（仁）さんというタイプが本当の文部官僚かなと。だから、先

生を見ていると、本当に違うというイメージでお話を聞いていたのですけれども。

伊藤 僕も大崎さんは本当にやっぱりそうだろうと思うのですけれども。でも、もともとこのオーラルの始まりは大崎さんなんです。大崎さんは、「じゃあ、どなたからお聞きしたらよろしいでしょうか。大崎さん、あなたもぜひやってください」といったら、「とにかく先輩からいきましょ」と、天城さん。このあいだいって、「もうそろそろ先生の番ですよ」といったら、「いや、僕は……。天城さんとか、そちらから推薦してもらいなさい」と（笑）。

西田 大崎君、天城さんというのは文部省の匂いがしますね。まあ、あまりお役にたてなくて……。

伊藤 いやいや、非常に面白いお話です。ありがとうございました。

口述説明メモ(3)

西田 亀久夫

第1. JICA技術援助事業によるフィリピン派遣

(S61-3-16~62-11-8)

1. 主な派遣任務

福田首相の公約により、1982年11月に、この国の工業教育を刷新する目的のプロジェクトが発足し「フィリピン工科大学(TUP)」に設けられた「総合研究訓練センター(IRTC)」に対して5カ年の援助事業が行われてきた。これによって、日本から建物10億円、教育器材6.4億円、専門家派遣50名が提供され、日本内地へ16名の研修員が派遣された。私はこのプロジェクトのチーフアドバイザーとして最終年度の締めくくりを行い、この事業の総括評価を行う任務を与えられた。

2. この国の一般的な社会的事情

- (1) [国土] 人口1/2、国土 80%、GNP 1/20、平均気温 27℃、雨期 5~10月
- (2) [教育制度] 6・4・4-5、就学率: 小6=67%、中4=40%、大1=36%
- (3) [TUP] 設立 1901 の職業学校、1978に大学昇格
- (4) [政治情勢] 1986(S61)の3月、クーデターによりマルコス大統領亡命のため、私の日本出発10日延期。その後1年7ヶ月の滞在中クーデター五回。
- (5) [現地で覚えた英単語] sampaguita, garbage(ごもく), graft(汚職), hostage(人質), ransom(身代金), abduction(誘拐), insurgency(反乱), mutiny(上官抵抗), ambush(待ち伏せ), liquidation(粛清), torture(拷問),

3. 私に出来た仕事

- (1) 日本人専門家が、この国の工業技術の現場を知らないため、マニラ市内のTUP 卒業生の働く現場を見学訪問。
- (2) 機械・電気・土木三分野に過去五年間に日本から送られてきた器材約900点のリストをデータベースに仕上げ、その所在と専門別の均衡を調査。
- (3) TUP の学長・学部長と定期的に協議、問題点の改善を勧告、3月毎にJICAへ報告。
- (4) IRTC でのプロジェクトが TUP の教育刷新に役立っていない点を改めるため、大学当局と根本的な改革について折衝するも、遂に未解決。
- (5) TUP の工業教育を根本的に改善するため、日本の大学で行われている「卒業研究」を必修科目とすることを諒承させ、その実施のスタートを切ることが出来た。

4. このプロジェクトについての総括評価

- (1) 我が国とは全く気候風土の異なる国に対し、工業教育の刷新を援助するというプロジェクトを発足するためには、その国の産業の実体、技術需要についての幅広い基礎検討が必要である。ところが実際には、それらに殆ど予備知識のない我が国の専門家を、任意に選抜して派遣したため、その人々は自分の経験の範囲の技術指導に終始し、将来のこの国のために定着できる技術開発の教育にはほど遠かった。
- (2) 工業教育には実験実習が基本であるというのは、我が国では常識であっても、400年のスペインの統治による文化的風土では、技術を卑しめ、ホワイトカラーを目指す気風があり、実験器材を贈与しても、それを積極的に活用しようとはしない。この気風を打破して、自らの手で技術開発に取り組もうとする態度を養うには、指導者の根気強い実践的指導の積み重ねしかない。
- (3) 実験実習に関心が乏しいため、5年間に贈与された器材が殆ど整理されず死蔵され、約20%は行方不明となった。また、後日そのリストを整理してみると、次々に交代する専門家がその都度希望をするものを追加してきたため、全体として均衡が採れて折らず、基礎的なものが欠けている場合もある。専門毎の器材の整備は、一貫した計画によるべきである。
- (4) 最終的に大学の必修科目に採用されることになった「卒業研究」は一つの成果であったが、このプロジェクトでスタートした IRTC と TUP との制度上の関係が当初から曖昧であったため、TUP の大学教授陣の側に抵抗感が強く、これが大学の正規のカリキュラムとして存続できるかは不明である。

5. 個人的な雑感

- (1) 工業技術は、北半球の寒冷地に発達したものであり、炎熱の熱帯地区で全く異質の生活を営む社会のためには、太陽熱・集中豪雨など特有の自然環境を生かした技術開発を振興する教育を研究する必要がある。
- (2) この国の貧富の格差(我がマンションの1日の部屋代が、メイドの1ヶ月の給料に相当)は目に余る物があり、そのことが治安の悪化を招き、すべてのホテル・銀行・デパート・店舗に銃器を持った警備員が配置されている光景は異常である。武装した革命的な勢力が、イスラム信仰と結びついて反乱を起こすことを解決するのが、政治の根本命題である。

6. 「ユネスコ・アジア地域教育計画専門家会議」への出張

(S 62-9-12~20)

ユネスコ本部よりの個人的指命により、上記の会議に日本代表として参加。
フィリピンより飛行機で、バンコク・ニューデリー、天山山脈を越えてタシケントからカザフ共和国の首都アルマータへ。

[参加国] ソ連・中国・蒙古・インド・パキスタン・スリランカ・タイ・ベトナム・フィリピン・日本

[発言] 中国「9カ年の義務教育に民間活動の活用」、ソ連「民間の介入は効率を阻害」、日本「我が国では国鉄を民間に分割して効率化」、フィリピン「私立大学の膨張が就職難を」、日本「大学自体の就職斡旋機能が人材需給の自動調節に。就職難が社会の人材配分の調整を。義務教育の徹底が社会階層の変革に。」

第2. 東京女学館短期大学の改組

(1988-4-6~1995-9-30)

1. 学長就任時に与えられた課題

- (1) 東京女学館は、百年前の1888年に、伊藤博文らの明治の元勳が、鹿鳴館時代の経験を通じて、今後我が国に開明的な女性の育成を図らなければ、日本の近代化を成し遂げて国際社会に伍することは難しいと考え、渋沢栄一を中心として創設した日本最初的女子教育機関であるという歴史がある。
- (2) 東京女学館は東京の渋谷を本拠として、小・中・高校・短大を持っていたが、敷地が狭小のため短大だけが数年前に町田市に移転し、校地32,600㎡、校舎4,000㎡、入学定員250人、専任教員14人の規模である。
- (3) 1974年10月、文部省から学校運営の改善について指摘があり、その中に「短大の文科という学科は、その中を2以上の専攻課程に分離するのが原則であり、学科の名称と教育課程との関連を再検討すること」というのがあったが、その後14年間、手を付けられていなかった。

2. 短大改組の出発点

- (1) 88年4月、理事長(有光次郎)より「一挙に四年制にするのは無理、短大の内容充実を」との指示あり。
- (2) 4/13日、第1回の教授会で、全教員に改革についての意見提出を求める。

その結果の要約は、

- a) 東京女学館の存在意義、短大の将来性、四年制創設の必要性を検討。
- b) 現在の短大のコース制を専攻又は新しい学科に改める。
- c) 当面の学内問題としては、図書館の充実、事務機構の効率化、諸規定の整備、教員の研究環境の整備を促進。

- (3) 4/26日、二年生の学生200人に対して「将来の希望進路」につきアンケート、その結果は、

- a) 90%の学生が、就職を希望。(女学館の先輩の常識は、家庭人)
- b) 2/3の学生が、秘書・タイプ・ワープロ・英語検定・英会話・簿記などの技術習得や、専門の掘り下げた勉強を希望。

- (4) 5/25日から7/13日まで、7回の教授会を開き、次のA～Cについて検討し、一応の結論を得た。

- [A. 女学館の教育理念]---創設時の理念を今日に引き直せば、自国と他国の文化の正しい理解、国際交流の第一線で活躍できる語学力の体得、情報化時代に女性の天性を生かした専門職の育成となる。
- [B. 四年制創設のねらいと特色]---学生の質の向上を期待、高学歴志向の時代的要請に合致。
- [C. 特色ある短大の具体的構想]---コース別を専攻課程にしてみても、短大の魅力が増すわけでもなく、認可申請や予算措置の手間が掛かる。

- (5) 6月、S53年～57年の本学卒業生に対し、職業体験と短大教育への改善要望を調査した。(回収率 58%、回収数 584) その結果は、

- a) 実務経験は、受付・文書整理・経理等の一般事務、専門職は1割。
- b) 職業に満足感を持てたのは、特別な研修や訓練を受けた2割程度。
- c) 2/3の者が、実務処理能力の向上、カリキュラムの専門化などの短大教育の改善を要望。
- d) 教養重視の短大希望は5%、四年制大学創設希望は4%。

3. 短大改革についての学長の私見

- (1) 二年制短大は、新学制に切替の時、正規の大学の基準に達しない旧制の学校を暫定的に救済するため、法令の付則に「当分の間」として存続を認めたもので、私は、かねてからそれが学校制度として致命的な欠陥があると考えてきた。それは、2年という修業期間が、学問的修練には極め不十分であり、入学の翌年から卒業のことに奔命し、学園社会の成熟を不可能にするからである。それが、時代の趨勢もあって、私学団体の強力な政治運動により、正規の制

度に切り替えられた時、当時の大学局関係者は切齒して悔やんだものである。

- (2) 近年、女性の社会的進出が増大し、敏感な若い女性は、進学希望についても、高学歴志向と共に、女子教育の伝統的なものから、社会科学・自然科学系の実務的なものに急速に移行しつつある。
- (3) 現在の二年制の枠を固定したまま、実技訓練を重視すれば、専修学校と同様になり、大学に必要な最低限度の学問的基盤も脆弱となり、短大としての特色が失われる。
- (4) 現時点で抜本的改革を見送り、10年後の大学進学者の極小期を迎えると、急増期に膨張した四年制大学が収縮しない限り、短大への入学者は半減する。その危険を回避する施策が実効を現すには、数年を要するので、今直ちに内容的に特色のある3年制短大か4年制大学へ脱皮すべきである。

4. その後の審議経過

- (1) 7/18日、それまでの審議結果を理事会に報告、これには3年制短大学長試案・短大教員希望の4年制大学案が示され、これについて理事会から激励あり、認可上の問題について文部省と折衝することを諒解あり。
- (2) 9/7日、新構想の学科につき、女学館高校・中学の全教員に説明。
- (3) 11/28日、理事会に「第1回裁定伺」、2年制と3年制の併設案、4年制の実現の可能性、3年制短大への高校の態度、財源措置などを討議。
- (4) 12/19日、理事会に「第2回裁定伺」、教養教育軽視の実務能力育成反対の意見、4年制より3年制をとるの意見、理事長より「現在の短大の活性化を。3年制・4年制を考えるのは不適當」との発言。
- (5) その後、89/1/23日、2/20日、5/1日に理事会が開かれたが、ときに理事長が激昂されたり、前回までの経過を忘失したりして、痴呆の兆候が見られ、結論が得られず。

5. 短大内部の実質改革への着手

- (1) 89/5月から、理事会の基本方針決定を待たず、短大内部で「近い将来の4年制大学への移行の基礎作りとして、短大カリキュラム改革の基本構想作りの作業」が進められた。

- (2) それと併行して、私は、1984年から91年までの東京女学館全体の財政状況を、その財務資料から分析し、短大の財政規模は全体の2割強であるが、これまで長年にわたって短大の教員数を抑制してきたため、その収入超過額の累計は、女学館全体の可処分資産100億円以上の18%を占め、短大改革に要する財源は十分であることが分かった。
- (3) これによって、1991年度の予算から、短大カリキュラム改革のための教員定数6名の増員、語学教育の強化のためのLL設備と要員の採用、情報処理実習設備の導入、教務・学生事務処理の電算化などに着手した。
- (4) さらに、1992年～93年にわたって、総工費約10億円、3,000㎡の「総合学習センター」(蔵書数18万冊の電算化された図書館、AVライブラリー、学生ホール、情報処理教育実習室、新規教員用研究室、考古学収蔵庫などの総合建造物)、新規増設教室、校内美的環境整備などの建設工事を進めた。
- (5) 1993年6月に、新しい短大への改組転換のための認可申請を文部省へ行い、1994年末に審査合格、1995年4月から新学科を開設した。

6. 新しい短大の教育課程編成の基本理念

- (1) 学則第1条に「近代日本の草創期に開明的な女性の育成をめざして創設された東京女学館の建学の理想を継承し、国際的なつながりの緊密化する時代の要請にこたえて、女子に対し、日本及び他国の文化を幅広く理解させるとともに、社会的活動に積極的に参加し、貢献するために必要な専門的能力の育成を図ることを目的とする。」を掲げる。
- (2) 全学生に共通する基礎教養教育
 - a) 次の2群からそれぞれ2科目以上:
 - [A群](人文・社会の基礎) 哲学・女性学・福祉社会・精神の科学、
 - [B群](全地球的な課題) 国際問題・南北問題・地球環境論・民族問題
 - b) [必修科目]体育実技・総合英語 [選択科目](第2外国語)中国・独・仏・西、(スタディスキルズ)文章表現・口頭表現・英文タイプ・ワープロ・パソコン・英会話入門
- (3) 国際文化学科
 - a) [必修科目]日本文化論・欧米文化論・人文地理学 [2科目選択必修]文化人類学・比較文学論・考古学・現代思想・国際政治学・国際経済学・民俗学・現代メディア論

- b) 次の4系列の1つを主専攻に選び、少人数の基礎演習で自主的な学習方法を学び、他系列でも副専攻の専門科目を履修する。

日本文化・アジア文化・欧米文化・英語特修

(4) 情報社会学科(※は必修)

- a) [企業・社会の問題の理解] ※情報基礎論・※情報社会論・※産業社会論・人間行動論・生活文化論・情報メディア論・地域計画論
b) [情報処理の科学的方法] ※情報と統計・社会調査法・会計学・データ解析法・生活調査法・経営科学技法
c) [情報処理への電算機の活用] ※情報科学概論・※情報処理法・人間工学・システム設計・ネットワーク・データベース・プログラミング

7. 新しい短大における各種規定の整備

学内組織運営規定、学業成績審査規定、入学者選抜規定、図書館運営規定、教務事務処理要領、予算編成執行手続要項、授業科目履修基準、学生準則、学生賞罰基準、学生身分取扱基準、教員採用選考規程、学校運営評価実施要項、卒業進級認定基準、交友会館管理規程、教員服務特例規程、定年退職規程

学生海外研修指導旅行実施要項、教員研修留学制度実施要項、教員研究経費運用基準、

8. 学長依願退職

新短大の発足を見届けて、1995年9月30日、7年半の任務を終了した。

第3. 入学者選抜方法の妥当性に関する個人的研究の概要

1. 木更津高専時代(1979～1985)

(1) 国立高専協会の合同研究調査(「別冊資料」参照)

1983年、27高専の延べ13,565人の卒業生について、統一的な方法で、高専入学後の学業成績と、各種選抜資料(内申書各教科の評点や学力検査各科目の得点)との相関関係を追跡調査した結果は次の通りであった。

- a) 5教科と5科目の合計点との相関係数は、0.2～0.3程度である。
b) 9教科(5教科+音・美・体・技)と5科目の全ての点数の中で、入学後の学業成績を最も少ない誤差で予測するうえに重視すべきものはどれかを、回帰分析の方法で調べたら、最も多くの学校に共通していたもの

は、次の通りであった。

技術家庭 95%、内申社会 55%、美術 45%、内申理科 41%、
学力英語 41%、内申数学 36%、学力理科 36%

- c) 全ての教科・科目の点数を用いて作成した重回帰式による予測値と入学後の学業成績との相関係数は、0.3～0.4 程度に向上するが、これを学科別に行えば更に 0.4～0.5 まで向上することがある。

[重回帰式の説明]

入学後の学業成績(Y)の予測値(Z)を、各教科・科目の点数を用いて、次のように表したとき、このZの値と実際の値(Y)との誤差が最も少なくなるように各点数の係数(a,b,c,d,...)を定めたものが、**重回帰式**であり、その場合のZのYへの相関関係を**重相関係数**と呼ぶ。

$$Z = a(\text{国}) + b(\text{社}) + c(\text{数}) + d(\text{理}) + e(\text{英}) + f(\text{音}) + \dots + j(\text{国テ}) + k(\text{社テ}) + l(\text{数テ}) + m(\text{理テ}) + n(\text{英テ})$$

[相関係数の意味]

Y と Z との間に「相関係数 0.5 の関係がある」ということは、「Y の変動量の $(0.5)^2 = 0.25$ 、つまり25% はZの変動と関連がある」ことを意味する。(この25%をZの「説明寄与率」と呼ぶ。)

(2) 木更津高専での入試データ分析(「別冊資料」参照)

木更津高専の1972年から78年までの7カ年に入学して卒業した634人について、学業成績が例外的な者88名を除いて、学科別に重回帰式を求めたところ、重相関係数が0.517～0.579程度のもの得た。

重回帰式の係数は、学科によって著しく異なり、いずれの場合も学力テストより中学の調査書の方が、入学後の学業成績と深い関係のあることを示している。(「別冊資料」のカラー図表参照)

- (3) このような分析資料に基づき、入学者の選抜に重回帰式を用いることを、1983年ころ校長から提案したが、1985年の退官まで遂に実現しなかった。

2. 東京女学館時代(1988～1995)

(1) 論文「何のための入学者選抜か」について(「別冊資料」参照)

(1993年11月、リクルート社発行「カレッジマネジメント」63号に発表)

- 「1. 入試制度の改善の目標は何か」
- 「2. 学力テストは入学者の選抜にどれほど有効か」

[表 1]---東京女学館短大の実績では、① 一般高校からの入学者については、卒業成績の優劣をR(内申)やT(学テ)で説明できる寄与率は10% 過ぎない。② しかし、女学館高校からの入学者の場合は、寄与率が高くなり、Rの水準が均一で一般高校とは学校差があることがわかる。③ しかし、Tの寄与率はどちらも10%前後である。

[表 2]---この場合、一般高校については、学校差が大きく、また学生個人の特異な奮発や落ち込みで例外的な成績を示す者を統計的な手法で除外すると、Rの寄与率は4倍近く向上するが、Tの寄与率にはそれが見られない。

「3. 内申書と学力テストを総合的に活用すれば、入試選抜はどれほど改善されるか」

[表 3]--- 東京女学館短大で R の8教科とT の3科目の得点を用いて重回帰式を求めた。① 一般選抜では、国語のほか芸術・家庭などの教科の比重が重く、テストの科目の比重は軽い。② このような重回帰式を用いて Z 値を計算すれば、一般選抜とその他の推薦入学とを同じ Z 値 で比較しながら、公平に選抜できる。

[表 4]---東京女学館短大では、90,91年度からZ値による選抜を開始したので、それと卒業成績との相関から寄与率を求めたら、学力テストの4倍ほど高い判別力で学業成績の伸びる可能性のある者を選抜できたことが分かる。

(2) 女学館短大85～89年度選抜入学者のT・Z分布とその卒業成績

「別冊資料」の図から、卒業成績の高い者は、T よりも Z の高い方へ集中していることが分かる。

(3) 「学力テストと Z 値による選抜入学者の比較」について(「別冊資料」)

90年度と91年度について、Z値による選抜が、学力テストによる選抜よりも、卒業成績の良い者を選ぶ効果を発揮したかを検証した。

- ① T値でもZ値でも合格の[A群]の者は、変わらない。
- ② Z値による選抜では、T値で合格・Z値不合格の[C群]の一部が、T値で不合格・Z値で合格の[B群]で置き換えられ、入学者の30～40%が交替する。
- ③ この[B群]からの交替入学者は、[C群]の交替者よりも卒業成績の平均値が高く、卒業成績不振者の割合が顕著に少ない。

(4) 各教員の面接評価水準(「別冊資料」参照)

推薦入学者の選考のため、[社会的成熟]、[学習意欲]、[自己表現]、[行動意欲]、[時代感覚]の5つの評価項目を定め、21人の全教員が3人ずつ7班を作って、面接を行った。各教員は、各評価項目について5段階の評点を与え、班内の3人の評点の平均点を、面接点とした。

- a) 21人の教員個人の面接点は、平均値も標準偏差もかなり大きな差異があり、班別の組合せの際、班毎の平均値に極端な差異が生じないよう、配慮が必要である。
- b) 各教員の評価の傾向にも、個性的な偏りがあり、班内の他の2人と全く相反する評価を繰り返す者もあり、役割指名上注意が必要である。

3. 重回帰式による入学者選抜方法改善方策の限界について

この方式は、理論的には最善のものと考えて、これまで約15年間継続研究を続けてきたが、次のような限界をいかに克服するかが解決されない限り、新しい展開は期待できないであろう。何時の日か、新進の有志が、新天地を開拓されることを念願するものである。

- a) 卒業成績との相関を高めることを、最大の目標としてきたが、そもそも、その成績の内容をなす授業科目担当教員の出題・成績評価に、どれだけの客観的合理性があるかが不明である。私が女学館短大において、若干の教員の入試問題の分析を試みた時でさえ、設定された数個の設問への正答の内容が互いに矛盾するものであったり、全く正答率が0であったりすることがあった。出題そのものが教育測定学の評価に耐えるよう改善されるまでは、完全な妥当性を保障する方法は、完成しないであろう。
- b) 今日、重回帰分析のデータ処理は、私が悪戦苦闘した時代に比べれば、格段に進歩し、実施容易になったが、依然として多変量解析という手法の思想は一般には馴染みにくく、人文系が多数を占める大学教授団の中においては、心理的に違和感をもって迎えられ、容易には政策的に受け入れられない宿命を担っている。

西田亀久夫 著作目録

書籍

『教育政策の課題』玉川大学出版部、1996年

『未来の大学』永井道雄、大来佐武郎と共編（誠文堂新光社、1970年）

「学生運動」『現代道德講座・第5巻・現代道德の実体』（古川哲史等編、河出書房、1954年）所収

「学生自治会の話」アルプス・シリーズ第130輯（商工財務研究会編、商工財務研究会、1960年）所収

「学生の自治活動」『大学制度の再検討』（蠟山政道編、福村書店、1962年）所収

洪田正隆と共訳「学生団体のための大学の指導方針要覧」IDE教育資料第5集（ミネソタ大学学生部
学生活動課編、民主教育協会、1958年）

雑誌

「大学・学生・社会」『明窓』4(1・2)、1953年5月

「大学における職業指導の現情と問題点」『職業指導』26(9)、1953年9月

「座談会・今年の就職戦線を探る」『エコノミスト』34(37)、1956年7月

「統計的に見た大学卒業者の就職状況」『文部時報』（通号950）、1956年10月

「学生の生活と問題」『文部時報』（通号957）、1957年4月

「奨学金に特別貸与制度」『時の法令』（通号279）、1958年4月

「座談会・行政面からみた厚生補導10年の歩み」『学生生活時報』（通号15）、1960年4月

「育英奨学の現状と拡充」『文部時報』（通号1011）、1961年10月

「教育の機会均等——育英奨学」『文部時報』（通号1022）、1962年10月

「大学における多人数教育と教授法の改善」『文部時報』（通号1038）、1964年2月

「高等教育の拡充に関する諸問題」『文部時報』（通号1039）、1964年3月

「大学教育の拡充」『文部時報』（通号1051）、1965年3月

「テヘラン世界文部大臣会議に出席して」『文部時報』（通号1060）、1966年1月

「アジアの教育問題——バンコック会議所見」『教育委員会月報』17(11)、1966年2月

「バンコック会議と日本の立場」『文部時報』（通号1062）、1966年2月

「教育・学術の国際交流の問題点」『文部時報』（通号1065）、1966年5月

「座談会・後期中等教育のあり方について」『文部時報』（通号1067）、1966年7月

「調査統計と教育計画——文部省の機構改革に関連して」『文部時報』（通号1068）、1966年8月

「国際公教育会議に出席して」『文部時報』（通号1070）、1966年10月

「座談会・人間形成の目標としての「期待される人間像」について」『文部時報』（通号1072）、1966年
11月

「中央教育審議会答申「後期中等教育の拡充整備について」『教育委員会月報』18(9)、1967年1月

「中教審・後期中等教育の拡充」『社会教育』22(1)、1967年1月

「座談会・高等専門学校の今後の課題」『文部時報』（通号1075）、1967年3月

「教育行政における調査研究の課題（＜特集＞教育調査と研究）」『教育調査』（通号64）、1967年3月

「教育計画と調査統計——昭和42年度文教行政の展望」『文部時報』（通号1078）、1967年5月

「（座談会）教育・学術・文化の国際交流の現状と問題点」『文部時報』（通号1079）、1967年6月

「中央教育審議会における「検討の観点」について」『教育委員会月報』19(5)、1967年8月

「『教職員の勤務状況と宿日直等』に関する実態調査の実施について」『教育委員会月報』19(6)、1967
年9月

「教育計画第1期作業の展開（昭和43年度文教行政の展望）」『文部時報』（通号1086）、1968年3月

「大臣官房の企画調査事務（＜特集＞昭和44年度文教行政の展望）」『文部時報』（通号1100）、1969年
3月

「中央教育審議会答申の中心課題とその考え方——『当面する大学教育の課題に対応するための方策』（＜特集＞中教審答申）」『厚生補導』（通号37）、1969年6月

「中央教育審議会答申の中心課題とその考え方（＜特集＞大学運営臨時措置法）」『大学資料』（通号32・33）、1969年11月

「システムの思考とは何か——情報化社会に適応する能力の育成（＜特集＞情報化時代に生きる）」『エコノミスト』（通号別冊）、1969年12月

「教育システムの研究と教育工学」『文部時報』（通号1110）、1970年1月

「大臣官房の企画調査事務（＜特集＞昭和45年度文教行政の展望）」『文部時報』（通号1113）、1970年4月

「システム化による教育の本質の究明（＜特集＞教育のシステム化は教育革新への道か）」『現代教育科学』13(7)、1970年7月

「70年代の教育政策の課題——OECD・教育成長のための政策会議に出席して」『教育委員会月報』22(4)、1970年7月

「『臨時増刊号』の刊行にあたって（教育とコンピューター——教育におけるコンピューター利用に関する国際セミナー報告）」『文部時報』（通号1121）、1970年11月

「大臣官房の企画調査事務（＜特集＞昭和46年度文教行政の展望）」『文部時報』（通号1125）、1971年3月

「中教審答申について」『教育委員会月報』23(3)、1971年6月

「教育計画と予測計量（＜特集＞中央教育審議会答申）」『文部時報』（通号1129）、1971年7月

「座談会・初等・中等教員の資質向上と処遇の改善（＜特集＞中央教育審議会答申）」『文部時報』（通号1129）、1971年7月

「日本のユネスコ活動の課題」『文部時報』（通号1135）、1972年1月

「座談会・第3回世界成人教育会議に参加して」『文部時報』（通号1144）、1972年10月

「『国連大学』考」『厚生補導』（通号92）、1974年1月

「模索の10年——昭和27年から37年まで（戦後30年の歩み・第百号記念特集）——（学生課の歩み）」『厚生補導』（通号99・100）、1974年10月

「放送大学への要請——教育需要予測調査による分析」『教育と情報』（通号218）、1976年5月

「国連大学の構想が固まるまで（＜特集＞国連大学の現状と将来）」『学術月報』29(7)、1976年10月

「『放送大学』に期待できるもの——その特質と限界について」『学術月報』29(7)、1976年10月

「大学放送教育の展望」『教育委員会月報』30(9)、1978年12月

「大学教育における放送利用について——放送教育開発センターの発足」『厚生補導』（通号151）、1979年1月

「高等専門学校留学制度の出発——直面する課題の予備的整理（留学生交流）」『大学と学生』（通号196）、1982年9月

「高等専門学校教育の理念と実践（高等専門学校二〇年の歩み）」『文部時報』（通号1265）、1982年10月

「今から三〇年前のこと（全国厚生補導研究集会二〇回記念）——（全国厚生補導研究集会二〇回に思う）」『大学と学生』（通号204）、1983年5月

「『教育改革』私見（＜特集＞教育改革への意見）」『季刊教育法』（通号52）、1984年7月

本冊子は西田亀久夫氏のオーラルヒストリー記録である。我々は既に文部官僚の天城勲、木田宏両氏のオーラルヒストリーを行い（両氏のものは既に冊子化されている）、戦後文部行政についての多くの情報を持つことが出来た。木田・天城氏が次にお伺いすべき人物として推薦して下さったのが西田氏であった。木田氏から西田氏の住所をお聞きして、ご依頼のお手紙を差し上げたのが、平成十四年五月であった。西田氏は承諾の返事を下さり、一度ご説明のためにお目にかかることにした。ご親切な西田氏はその前に写真と履歴書をお送り下さった。六月十九日に八王子の京王プラザホテルでお目にかかり、ロビーで色々お打ち合わせをした。その際に『海原治オーラルヒストリー』をお持ちして、大体のイメージを掴んで頂いた。その時にご著書の『教育政策の課題』と中教審の四六答申の複製を下さったが、これらはお話を伺うために大変に役に立った。

聞き手は、天城・木田両氏の時と同じく、小池聖一氏、所澤潤氏、村上浩昭氏、そして私の四人、場所は政策研究大学院大学の虎ノ門にあるプロジェクトセンターの会議室とした。速記はペンハウスの矢沢麻里さんが担当された。

第一回は質問項目なしで、同年七月十五日に行った。この時は朝鮮で中学までを過ごされて、三高に入り、剣道部のマネージャー、そして生徒代表として一高とのトラブルの解決に働き、応援団長として活躍し（その時に、後の文部次官日高第四郎に知られることになった）、東京帝国大学に進んで理学部物理学科で学び、昭和十六年海軍技術研究所に就職したが、二ヶ月後に短期現役技術科士官に採用され、砲術学校で訓練を受けて佐世保海軍工廠、更に呉海軍工廠に配属されて仕事をされた時期までのお話を伺った。氏のお話によると、既に自分史を書き始めておられ、敗戦の所までを書いたとのこと、それをもとにお話し下さった。

第二回からは、当初所澤氏、後に村上氏が質問項目を作成し、事前にお送りした。第二回は八月十二日、呉の砲弾実験部でのお仕事、原爆の体験、終戦後も残留させられて、アメリカ海軍技術調査団の相手をし、終わったのち日本化薬研究所を経て、京都の高桐書院という書店に就職、組合の長から会社の役員になり、その会社が倒産してその清算事務を行い、日高第四郎の斡旋で大阪第一師範平野分校の教諭を経て、昭和二十五年大阪学芸大学助教授として教育に関わっていたとき、昭和二十七年に日高第四郎の要請で文部省大学事務局学生生活課長（後学生課長）に就任されて（その前年に文部省科学官としてアメリカの学生指導の専門家の講習会で勉強した）、文部省に入られるまでのご経験を伺った。ご本人も述べて居られるようにこの時期のご経験が文部省に入ってからのお仕事に大きな影響を与えたことになった。

第三回は九月十七日、第四回は十月十五日、学生運動華やかな時機の学生課長としての一〇年間のお仕事を伺った。血のメーデー事件後の「教育の問題としての学生運動」という文書のこと、学生代表とのディスカッションのこと、学生部長会議への提案のこと、昭和三十一年から翌年にかけてのアメリカへの実地視察のこと、学士会館のこと、育英会（琉球育英会のこと）のこと、就職問題のこと、朝鮮奨学会のこと、学生生活実態調査のことが主たる主題であった。十一月十九日の第五回には、昭和三十七年からの大学事務局庶務課長時代のお話を伺った。教養学部設置基準の作成、講座学科目省令の制定、大学設置認可の仕事、国立大学事務局長・庶務部長の研修での大学論、大学管理法案の見送り、理科教育の振興などが主題であった。

十二月十六日の第六回は昭和四十年からの調査局審議官・官房審議官時代のうち、中教審以外の問題（全国学力調査のこと、

能力開発研究所の後始末のこと、A・A諸国への教育協力のこと、世界文部大臣会議のこと、アジア文部大臣会議のこと、I・B・E・O・E・C・D・ユネスコ・日米文化交流会議の会議のこと、文部省のコンピュータの導入のことなど）について、そして翌平成十五年の一月二十一日の第七回、二月二十七日の第八回、三月十九日の第九回に亘って中教審のいわゆる四六答申について極めて詳細に伺った。説明のためにデータを大量に作成してお話し下さった。このお話が氏のお話の一つのハイライトであった。この答申の内容の多くは今日まで残った課題となっているものが多い。お話しは、極めて総合的な包括的な諮問の経過、委員のメンバーの選定、事務局（企画室）の構成と役割、専門委員会の構成とその進行、事務局におけるデータの作成（詳細な数字的データの作成は西田氏の得意とするところであった）、公聴会、各特別委員会での審議の状況、答申の作成とその内容、答申の内容が実現されなかった要因までと詳細なものであった。

そして四月十五日の第十回では、四六答申の審議最中に大学紛争解決についての第二四特別委員会のお話（西田氏の発想が強く反映した。大学紛争の背景、大学制度の基本的課題との関係、政府の取るべき措置の内容、政治家の反応と田中角栄自民党幹事長の決断、昭和四十四年の「大学の運営に関する臨時措置法」の公布とその結果）と、四六答申が提起した未解決の重要課題（以上についてはご自身でメモを配布された）、そして答申の直後昭和四十六年に任命された文部省日本ユネスコ国内委員会事務総長として国連大学創設を中心に各国の視察、国際会議、昭和四十九年の国内委員会の解散についてお話しを伺った。

五月十三日の第十一回では（この時も最終回もメモを配布して下さった）、文部省科学官（東京工業大学教授）として放送大学設立準備に苦心された時のお話（英米への視察、これ以前の「放送大学の基本構想」、実験番組の検討、「放送大学に対する教育需要の予測調査」、「放送大学の基本計画」、「放送教育開発センター」の設立までのお話し）を、最終の六月十日の第十二回は、昭和五十四年からの木更津専任校長としての様々な試み、昭和六十一年からのJICA技術援助事業によるフィリピン派遣の経験、昭和六十三年からの東京女子短期大学長時代の八年間のお話と、最後に氏が強い関心を持ち続けて居られた入試制度についての御研究のお話を伺って終了した。

西田氏のお話は、木田・天城両氏のお話と相互に関連しながら、微妙に食い違い、更に多くの方々のお話を伺う必要を痛感するが、この三人の方のお話を通じて戦後教育政策について大雑把な見通しと問題点をやや立体的に把握することが出来たようにも感じるのである。

本冊子の整理・編集は小林淑憲・埴ひろ子両氏が担当した。編集の過程で昨年に西田氏は体調を崩され、今年に入ってから次第に快方に向かわれ、そういう中で最終チェックをして下さった。最後に、お話しを通じて多くの情報を与えて下さった西田氏、インタビュアーとして協力してくださった小池・所澤・村上の諸氏、そして速記の担当者、編集担当者、コーディネーターとして連絡に当たって下さった三條薫さんを始めとする皆さんに心からお礼を申し上げます。

平成十六年三月十五日

政策研究院大学院大学教授 伊藤 隆

平成 16 年度 文部科学省研究費補助金〔特別推進研究（COE）〕
研究成果報告書〔課題番号 12CE2002〕
発行：2004年10月20日《無断転載禁》

政策研究大学院大学（政策研究院）
C.O.E. オーラル・政策研究プロジェクト

〒162-8677 東京都新宿区若松町 2-2
Tel：03(3341)0458 Fax：(3341)0446